

ガンダムビルドダイバーズ:トライ

守次 奏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

習っている武術の師匠からどういわけかガンプラバトルを勧められた俺、カミキ・ユウヤは、ガンダムSEEDという作品に出会う。そこで見たストライクガンダムの勇姿は、その格好よさはガンダムを知らなかった俺にもわかるぐらい伝わってきた。だから、こいつを相棒にして俺は、ガンプラバトル・ネクサス・オンライン——通称GBNと呼ばれる電子の世界に飛び込んでいくと、そう決めた。ガンプラを愛するダイバーたちの楽園、強くなりたいと願う者たちの理想郷。そうしていつしか俺は、そんな場所に愛機と、ストライクガンダムと共にのめり込むようになっていた。

いつものようにガンプラバトルへ明け暮れていたある日、俺はブレイクデカルと呼ばれる脅威がGBNを侵食していることを、一人の女の子との出会いで知ることになる。その出会いは、いつしかGBNそのものを巻き込んだ一大事件までもつれていくいくのだった。

目次

E p.	01	「俺だけのストライク」	1
E p.	02	「ようこそGBN」	10
E p.	03	「落ちてきた少女」	20
E p.	04	「ご注文は友達ですか？」	31
E p.	05	「黄道のG」	41
E p.	06	「僕らは闇鍋の中で」	51
E p.	07	「ハイリスク・ハイリターン」	61
E p.	08	「お怒りおてんばお姫様」	71
E p.	09	「スカーレット・バレット」	80
E p.	10	「フォース・トライダイバース！」	90
幕間		「拝啓、闇鍋の底から」	99
E p.	11	「始動、トライダイバース」	109
E p.	12	「銀翼を撃ち落とせ」	118
E p.	13	「今は少しの休息を」	128
E p.	14	「フェス！」	137
E p.	15	「クマの祭りに潜む罠」	146
E p.	16	「皆で掴んだこの勝利」	156
E p.	17	「更なる高みに至るため」	165
E p.	18	「聖地・ペリシア」	174
E p.	19	「霊山の虎狼」	185
E p.	20	「メガ粒子杯への誘い」	194
幕間その2		「忍び寄る黒影」	204
E p.	21	「度胸の炎は燃え上がる」	213

E p.	2 2	「厄災の地へ」	223
E p.	2 3	「その拳、天高く」	233
E p.	2 4	「百鬼夜行」	242
E p.	2 5	「呼応する悪意」	252
E p.	2 6	「夜の影から出ずるモノ」	262
E p.	2 7	「怪異・シャドウロール」	272
E p.	2 8	「メガ粒子杯、開幕」	282
E p.	2 9	「集う豪傑たち」	291
E p.	3 0	「幕を開ける饗宴」	301
幕間その3		「メガ粒子杯を語るスレより」	310
E p.	3 1	「氷焰の拳」	319
E p.	3 2	「月虹」	329
E p.	3 3	「乙女たちの小戦争」	338
E p.	3 4	「変幻のカール」	348
E p.	3 5	「駆け抜ける嵐」	358
E p.	3 6	「託された願いを胸に」	369
E p.	3 7	「セルリアン」	379
E p.	3 8	「風を呼ぶ少女」	391
E p.	3 9	「デュエル―決闘―」	400
E p.	4 0	「新しい扉の先に」	411
幕間その4		「終末へのカウントダウン」	421
E p.	4 1	「羽ばたくために」	432
E p.	4 2	「俺の『挑戦』」	442
E p.	4 3	「鉄仮面ズ」	454
E p.	4 4	「疾風チャレンジャー」	464

Ep.	45	「戦い、更なる戦い」	476
Ep.	46	「愚か者のサーカス」	487
Ep.	47	「侵食」	496
Ep.	48	「シャドウロール、再び」	506
Ep.	49	「禁忌の力」	517
Ep.	50	「フォニイ」	528
幕間その5		「審判の日は来たる」	537
Ep.	51	「有志連合」	547
Ep.	52	「集え英傑、御旗の元に」	557
Ep.	53	「決戦前夜」	568
Ep.	54	「開戦」	578
Ep.	55	「今は前に進め」	588
Ep.	56	「哀しみの黒影」	598
Ep.	57	「黒き闇を祓って」	608
Ep.	58	「マフユの涙」	618
Ep.	59	「光る翼」	628
Ep.	60	「Re:Build」(終)	640
トライダイバーズ・エクストラミッション！			
Ex.	01	「ELダイバー」	652
Ex.	02	「決意の時」	663
Ex.	03	「第二次有志連合戦」	674
Ex.	04	「ギャンブル・ランブル」	685
Ex.	05	「譲れない願い」	695
Ex.	06	「好きを諦めない」	708
Final		「Mission:「世界中の空が見たくて」	720

Ep. 01 「俺だけのストライク」

「ガン普拉バトル？」

父さん——俺ことカミキ・ユウヤが習っている武術の師匠でもある——が開口一番言い放ったのはそんな七文字だった。

「ああ、ガン普拉バトルだ、ユウヤ」

真っ直ぐに俺を見据えて、父さんもとい師匠は一点の曇りもなくはつきりとその言葉を口に出す。

言われた俺の方かというと突然の出来事に首を傾げるばかりなのだが、今時流石にガン普拉バトルぐらいは知っている。

ガン普拉バトル。それはガンダムアニメに出てくるモビルスーツ……まあ平たくいえばロボットのプラモデルを確か専用の機械でスキャンして、オンラインゲームの中で戦わせるものだったはずだ。

一昔前はガン普拉そのものをなんとか粒子だったかなんとかコーディングだったかで直接動かして戦わせてたとは師匠からも母さんからも聞いているし、その武勇伝を子守唄代わりに育ったところもあるから知っている。

というかまあ、俺もそういう家庭に生まれついたものだからガン普拉の一つや二つぐらいは組み立てた経験はあるし、棚にも飾ってあるけど、今更何をどうしてガン普拉バトルなのか。

俺の疑問たつぷりな視線を師匠は毅然と受け止めて、ぽん、と俺の両肩にごつごつとした、武芸者特有の両手を乗せてみせる。

「ユウヤ、次元霸王流の極意は知ってるな？」

「想像力……だろ？」

次元霸王流拳法。俺が習っている大分マイナーな武術、その極意については小さい頃から一通り聞かされてきた。

曰く、相手の心を知ること、自分の心を知ること、そして礼には礼を、拳には拳で応えることをひつくるめて、想像力の一言に押し込めたのが極意だったはずだ。

「お前はもう一人前だ。だから、その先の世界を知るのもいいんじゃないかって思ってたな」

「その先の……世界？」

「ああ。俺も次元霸王流だけを修めていたらきつと見えなかった……想像力と想像力がぶつかり合う、全く新しい戦いだ」

つまるところそれがガン普拉バトルなのだと言いたいのだろうか。

一人前だと認められたのは素直に嬉しい。

さっきまでのスパリングでも何本か取ることはできたし、基本の型を何度も何度も、眠っていたって咄嗟に出せるくらい練習してきた甲斐があつたというもんだ。

ただ、それとガン普拉バトルがどう繋がるのかについては正直なところまるでイメージがつかない。

だが、そんな俺の思考もわかり切っていたのか、師匠は相変わらず俺の瞳を覗き込んで、その奥底にある不安や恐れのようなものを掬い取るように言葉を紡ぐ。

「今は想像できないだろう？　つまりだな、それだけ奥深いものが眠ってるんだ、ガン普拉バトルってのは」

お前が次元霸王流以外の格闘技も一通り修めてきたことだつて知っている、だけどそれ以上にな——と、啖呵を切った師匠の目は真剣そのものだった。

たかがゲーム、と思うところがないとはいわない。というか大分半信半疑だ。

それでも、ガン普拉バトルという存在の中に、「俺が想像できないものがある」ということは事実にはならない。

「迷ってるだろ、ユウヤ。でもやればわかる。俺だつてそうだったんだ」

「それは聞いている。母さんと一緒に、学生大会で全国優勝したんだろ？」

「ああ。あの時は俺も母さんも若かった……と、まあそんな話はさておき、俺たちからの誕生日プレゼントだとも思ってくれ」

胴着の懐から何かの装置みたいな角ばった物体を取り出すと、師匠はそれを手渡してくる。

物体の中心に嵌っているクリアパーツの中には「GBN」という刻印があつて、要するにこれでガン普拉バトルをしろと、そういうことなのだろう。

「正直、よくわかんないところはあある」

「そうだろうな」

「でも、俺が知らない戦いが広がってるって話なら……師匠が、父さんがそう言うなら、信じてみようって思う」

ガン普拉バトルと次元霸王流の極意に何の関係があるのかはまだわからない。

それでも師匠は、父さんは俺に嘘を教えたことは一度もなかった。だから、信じてみようかと、そう思ったんだ。

その角ばった物体を受け取って、今日の稽古の締め括りとして一礼をする。

さて。受け取ったはいいいけど、俺のガンプラってそもそもバトルに使えるんだろうか。

私服に着替え、洗濯機の中に脱いだ胴着をぶち込みながら、首を傾げる。

なんとというか、師匠や母さんみたいに凝ったものを、素人目に見ても明らかに「よくできているもの」と違って、俺が組んだガンプラは箱を開けて説明書通りにパーツを切り出して組み立てたものでしかない。

師匠と母さんが学生だった頃はガンプラをカスタマイズして戦うのが半ば常識みたいなものだったって話は耳にタコができるほど聞いてきたから、これでいいのかって、なんとなくそう思っていた時だった。

「あらユウヤ、それってダイバーギア？」

「ああうん、父さん……師匠から貰った」

「そっかそっかあ、ユウヤもガン普拉バトルを始めるお年頃かあ……ねえ、まずはガンダム見てみない？ ちよつとBluray持つてくるから、好きなを選んでいいわよー！」

「ちよ、待ってくれ母さん！」

年齢不詳な見た目をしている——下手したらリビングに飾ってある学生時代の写真とそう変わらない姿をしている母さんは興奮気味にそう捲し立てると、自分の部屋まで駆け出していく。

そんなこと言われてもこっちはガンプラバトルがどうのこうのつて時点で情報の洪水を浴びせかけられたような状態なのに、いきなりガンダムアニメまで見ろつてのは流石に無理があるだろ！

父さんは、師匠はそれほどでもないけど母さんは重度のガンオタ……ガンダムオタクだったことを今更思い出して頭を抱える。

好きなことについて語ると早口になっちゃうタイプのあれだ。

しかしまあ、それまで武術一辺倒だったらしい父さんを、師匠をガンプラバトルの道に引き込んだって時点で相当なんだから、俺も覚悟ぐらいはしとくべきだったのかもしれない。

「お待たせ、ユウヤ！ 色々あるから好きなの選んでね！ 私のオススメは……んー、そうだなあ、サンダーボルト！」

「サンダーボルト……？」

母さんが部屋から持ってきたBlue-rayの箱にはどれもこれも勇ましいガンダムの姿が描かれている。

格好いいと思わないわけじゃない。

ただ、おんなじような顔が並んでると混乱してくるんだよ。

サンダーボルトがどうのこうのと言われてもどれなんだかさっぱり判別がつかないし。

サブアームがどうのこうのと熱く語っている母さんを尻目に、俺はとりあえず差し出されたBlue-rayの中からなんとなく良さげなものを見繕う。

断ることだつてできたかもしれない。

好きなことを広めたい気持ちは誰にでもある。だけど、それを押し付けたらいけないと、母さんも父さんもわかっているはずだ。

それでも俺は、父さんが言っていた、師匠が言っていた、「その先の景色」が見てみたい。

そんな思いが、指先を動かしていた。

そして、気付けば吸い寄せられるように、俺の手は一枚のBlue-

rayを掴んでいた。

「これは……?」

「ガンダムSEEDね、戦火に巻き込まれた少年たちのお話」

よくわからないまま、直感が導くままに手に取っていたガンダムは、どうやらSEEDというらしい。

ビシッとビームライフルを構えて大きく見栄を切ったポーズのガンダムも、見た感じ悪くない。むしろ格好よかった。

「じゃあ俺、これ見てみるよ」

「わかったわ、残りの巻は部屋の前に置いとくわね!」

ユウヤがどんなガンダムを作るか楽しみだわ。

母さんはそれを自分のことのように喜んで、鼻歌まじりにスキップをする。

子供っぽい仕草だったけど、まあそれが似合う程度には若い見た目してるしあんま気にならないか。

「SEED、ねえ……」

前組んだガンダムと顔が同じなのは偶然なのかそうでないのか。

ただ、「その先」が、次元霸王流の極意の更なる奥深くがガンダムに眠っているなら、全力で見ないと失礼だよな。

「とりあえずは全話見ないと始まんねえか! よし、見るぞ!」

不安がないとは言わない。正直訳がわからない。それでも、その先に未知の領域が眠っていると聞かされたら、たとえ罨だろうが突っ込んでいかなきゃ男が廢る。

だから、俺はとりあえずそのガンダムSEEDとらやらを拝見することにしたのだった。



結論から言おう。めっちゃハマった。

細かいストーリーについてはまあ説明するまでもないとして、何が良かったかって、俺にとっては自軍の戦力がストライクガンダム——主人公のキラって奴が乗ってたガンダムしかないに等しかった頃の

試行錯誤感とか必死さとか、そういう緊張感が手に汗握って楽しかった。

殺したくないのに相手を手にかけてしまったキラの悲哀だとかそういうのもだけど、何よりもまず見栄を切って戦うストライクガンダムが、乗り手が変わってもアークエンジェルを守り切って勇敢に散っていったあの機体が、俺の中で印象深く刻まれていたのだ。

「ストライクガンダム……お前、そんな奴だったんだな……！」

棚に飾ってあったストライクを手に取って、込み上げてくる熱さに涙が滲む。

苦しかった頃のキラたちを支えて、乗り手が変わっても帰るべき場所を守り切ったガンダム。

それがこの、GAT-X105、ストライクだ。

だから、俺は一つ心に決めた。

「俺は……ストライクで戦う！」

GBN。確かガン普拉バトル・ネクサス・オンラインとかそんな名前の戦場に飛び込むのなら、このストライクを相棒にしたい。

というかする。そう決めたのだ。

ただ、今棚に飾られているストライクは説明書通りに組んだ、いつてしまえば「キラのストライク」なのだ。

調べた限りではGBNはそのまま組んだだけのガンプラでも楽しめるらしいけど、この姿のストライクはキラにとってのもので、俺にとってのそれじゃない。

大分厄介な思考回路だとは自分でも思うけど、そう思ってしまうんだから仕方ない。

だったら、今俺がやるべきことは一つだ。

「こいつを俺だけのストライクにする！」

そうと決めたら一直線、部屋から飛び出した俺は母さんの元を訪ねて、使っていないジャンクパーツがみっちり詰まった箱を手土産にまた部屋へと反復横跳び。

母さんがモデラー……今はガン普拉ビルダーっていうらしいけど、まあそんな感じで助かった訳だ。

そこから先は悪戦苦闘の連続だった。

「このパーツ使いたいけど嵌まらねえ！」

接続部の凹凸が違ったりだとか。

「なんか付けてみたけどめっちゃバランス悪い！」

とりあえずカスタマイズしてみようとして付けたパーツを見たらめっちゃバランス悪くなったりとか。

「色がヤバいぐらいちぐはぐになってやがる……」

そんなこんなを乗り越えて、ようやく形になった俺だけのストライクを見てみれば、配色がうるさいというか、色にとにかくまとまりがない有り様だった。

元の機体よりもゴツゴツとしたフォルムは悪くない。それに、余ったビームライフルを切り詰めて取り回しのいいビームピストルとして作り直したのと、DESTINYガンダムから腕を持ってきたのもいい感じだとは我ながら思う。

ただ現状、どうしようもなく色がとっ散らかっているという問題は否定し難いわけで。

と、なると、選択肢は一つしかない。

「塗装か……俺でもやれるのか？」

それはひとえに散らかっている色を整えてやればいい、というシンブルな結論に尽きるのだが、果たしてパーツに色を塗るという行為が初心者俺にもできるのかどうか、それがよくわからない。

まあでも、母さんに聞いてみれば解決する話か。

と、いうわけで餅は餅屋。母さんの部屋にノックしてお邪魔してみれば、待つてましたとばかりにそこにはものごっつい機材が置いてあった。用意周到なのかそれとも普段からこんなごっつい機材使ってるのか。

「いらつしやいユウヤ、そろそろ来る頃だと思ってたわ」

「お、おう……それで、物は相談なんだけどさ」

「ふふん……塗装したいんでしょ？」

「すげえ、なんでわかったんだ？」

「だって、『自分だけのガンプラ』作るなら、武装もだけど色にもこだ

わりたいでしょ？ もちろんただ箱を開けて組むだけでもそれだけで立派な『自分だけのガンプラ』だけど、ミキシングしたガンプラって色味がバラけちゃってることが多いのよ。だからユウヤならそうするかなって」

ビルダーとしての勘違ってやつなのか、そうじゃなければ親としてつてところなのかはわからないけど、俺の魂胆はすっかりお見通しだったわけだ。

片手に握りしめていた「俺だけのストライク」に視線を落として、母さんに案内されるまま腰掛けたものごっつい機材——塗装ブースというらしい——の前で、俺はただ目を白黒させることしかできなかった。

「ストライクガンダム。いいチョイスね」

「そうか？ ただ気に入っただけなんだけど」

「その機体は背中のストライカーシステムを使って戦局に合わせて戦えるんだけど……ふむふむ、ユウヤの目指してる方向性なら、エールストライカーが無難かもしれないわね」

そーいや背中には何もくっつけてないことを忘れてた。

母さんはジャンクパーツが収まっているボックスからエールストライカーを取り出すと、「俺だけのストライク」の背中にそれを装着する。

色合いはまだバラけててなんともいえないが、エールストライカーを装備したことでシルエットは大きく引き締まった……と、思う。

「すげえ、格好よくなった！」

「でしょ？ それじゃユウヤ、塗装始めましょ」

机の引き出しからこれまたものごっついガスマスクみたいなものを取り出すと、母さんは塗装ブースのスイッチを入れる。

部屋に響き渡るのは換気扇が回り出す唸り声のような音。まるで、俺を、ストライクをどこかに連れて行く風のように吹き渡っているように思えた。



下地を整えるサーフェイサーとかいうやつを噴いてしつかり乾燥させて、その上から丁寧な、ムラなく色を塗り重ねていく。

その工程がかなりの手間だったのは体験してみてもわかったことだ。でも、その分の収穫は十分にあったといっている。

「これが……俺だけのストライク!」

頭の中にイメージしてた、散らかった青色や水色や赤系で統一して艶消しトップコートを噴いて、アクセントにメタリックオレンジを加えたそれが、ちゃんと立体物として目の前に立っている。

それだけでもう感動ものだった。だけど、これだけで終わりじゃない。

「ふふ、塗装デビューおめでとう。次はガンプラバトルね」

「ああ! ありがとう、母さん!」

「ううん、いいのよ。あ、でもね、GBNにかまけて成績落としちゃダメだからね?」

「わかってる!」

そうだ。これは終わりじゃなくて始まりだ。

俺の、俺だけのストライクと一緒にガンプラバトルの世界で、想像を超えた戦いに挑む。

師匠に、父さんに言われた時はいまいち持てなかった実感が、期待感が、今は胸がはちきれそうな程に膨らんでいる。

「よし……行くこうぜ、ストライク焰!」

俺だけのストライクガンダム改め、ストライクガンダム焰。燃え盛るような期待を込めて、燃え上がるような熱を込めて作ったガンプラを手に、俺は父さんに、師匠に貰ったダイバーギアでGBNの世界に飛び込むため、自室へ舞い戻るのだった。

EP. 02 「ようこそGBN」

ガンプラをダイバーギアに乗せて、ゴーグル型の機器と操縦桿型のコントローラーを握れば、カウントダウンと共にダイブが始まる。

ステイックとボタンを使うゲームがレトロに分類されるこの現代、フルダイブVRゲームは今や戦国時代らしいが、その中でもGBNは頭一つどころか、二つ三つ飛び抜けた出来らしいとは幼なじみが言っていたことだ。

まあその時はGBNには欠片も興味がなかったからそんなもんかと聞き流していたけど、こうして自分のアバターを作成する画面に移行すると、まずはスクロールバーの長さに圧倒される。

「へえ……色々パーツあるんだな、猫耳とか……ツノ!? そんなキャラメイクもできんのかよ!」

ガンダムのゲームなんだからガンダムっぽいキャラメイクに限定されてると思ったけど、案外そうでもないらしい。

アバターの一覧を眺めてたら、一頭身のゆるキャラっぽいのも混ぜっついて、このゲームがどこを目指してるのかよくわからなくなっただけど、メイクの幅は多い方がいいんだろう。多分。

「つと、見てるだけで半日ぐらいかかりそうだな……」

多分これ、凝り性なやつなら六時間は余裕で潰せるんじゃないだろうか。

俺は変なこだわりとかもないから、初めに提示された、現実の姿をベースにしたアバターにちよいちよいとパーツを足していくことに決めた。

俺だけのストライクことストライク焔を作った時はめちやくちや悩んだもんだけど、自分のアバターに関しちや自分以上のものに見せようとも思わないし、自分以外の何かになりたいとも思わない。

だからまあ、こうして胴着……を着るのはなんかセンスがないっていうかありきたりだな。

それにあくまでベースとはいえ現実世界の姿をそのまま使うのもなんだかんだ抵抗があるというか、面白味がないような気がしてく

る。

もしかしくなくてもこれ、沼にハマってるパターンだったりするんだろうか。

未完成的なアバターと睨めっこをすること実に小一時間近く、微調整を重ねることでようやくやくなんとなくそれっぽい、現実の自分とはちよつとだけ違う感じのアバターが出来上がった。

「妥協は良くない、つてのは師匠の教えとはいえ、凝りすぎてもなんか違うんだよな……」

謎の敗北感を味わいつつもとりあえずは意識をアバターと一体化させ、次のフェイズであるダイバーネームの入力に移行する。

ダイバーネーム。早い話がハンドルネームで、これもまあ現実をベースにしたりしなかつたりで色々らしい。

「チナツは確かそのまま名前使ってたな……」

前に一度だけ一軒隣の家に住んでいる幼なじみに、コウサカ・チナツにGBNをやらないかと誘われた時に見せられたデータは見事に現実ベースだったことは何故だか覚えていた。なんでだかは自分でもわからないけどな。

だったらまあ、今時本名を使っても珍しくはないだろう。

アバターの時と同じで、こういうのに凝り始めるとキリがない。

母さんの血がそうさせているのか俺が生まれ持った性格なのかはともかくとして、何も考えず俺は「ユウヤ」と、自分の名前をそのままアバターに付与してやる。

『GP EX SYSTEM START UP——』

『Welcome to GBN』

『Will you survive?』

英語のメッセージと共に、俺の意識は無限に続くエレベーターを降っていくかのようにシステムの方へと引つ張られていく。

君は生き残ることができるか、か。

なんだか知らんが物騒なキャッチコピーだけど、これもガンダム由来なんだろうか。



そんなことを考えている内に俺の意識は電腦空間に再構築されて、ダイバーたちが集まるセントラル・ロビーに降り立っていた。

胴着じゃなくて悩んだ末に着てるのが着崩した地球連合軍の制服つても大分センスがないように感じられるが、そんなことが些末なものに思えてくるぐらい、セントラル・ロビーは様々な姿のダイバーたちで溢れている。

「時は来た……」

「時は来た？」

「時は来た……」

すれ違つたムキムキマッチョなボディに可愛らしい……かどうかはわからんけど、猫の頭を乗せたようなダイバーがそんなことを呟いて通り過ぎていく。

時は来たって何が来たんだろうな。

一瞬首を傾げたが、考えたところで意味もなさそうだ。さつさとガン普拉バトルをするために、俺はまず、受付っぽいカウンターに向かって歩き出した、その時だった。

「へへっ、兄ちゃん新参かい？」

「そういうあんたは古参なのか？」

「そう喧嘩腰になるなよ……俺はヤス、お得なパーツデータから手頃なクリエイトミッションまでなんでも紹介してる情報屋つてやつさ、へへ……」

ヤス、と名乗つた男は手揉みをしながらにじり寄ってくるけど、まだズブの素人な俺にもわかる。

こいつは明らかにまともじゃない。

パーツデータとかクリエイトミッションがなんだかは知らない。ただ、この手のゲームで初心者に近づいてくるやつ目的は。

「なんだか知らねえけど、あんた……カタギじゃないな？」

初心者を純粹に助けようとしているか、その逆か。どっちかになると相場が決まっている。

地獄への道は善意で舗装されているとはよく言ったもんで、何かしらの「近道」であったり、「誰も知らない」と銘打った情報売り出そうとしている奴は、大概後者だ。

「失礼なガキだな、俺はただ……」

「そうよ、ヤス。アンタ、ここで初心者に胡散臭い商売するのやめろって前も言ったわよね？」

「げえっ!？」

ヤスとかいう男の背中をひよいっとつまみ上げたのは、俺よりも大柄な、いわゆるオネエ口調のダイバーだった。

なんていうか、濃い。色々濃い。

「し、失礼しやしたあっー!」

呆然としている間にヤスは一目散にそのダイバーから逃げ出して、雑踏の中に消えていく。それほどこの大柄なお姐さんが怖いんだろう。

「ありがとうございます、お姐さん!」

一応自力でなんとかできなくもなかったけど、助けてもらったことは事実だ。紫色の髪をした大柄な漢女に俺は腰を折って、頭を下げる。

「あらやだ、上手なんだから……こほん。アタシはマギー。ここで初心者にちよつとばかりお節介を焼いてる、ナビゲーターみたいなものよ」

「ナビゲーター?」

「ま、非公式なだけけどね」

マギーと名乗ったお姐さんは、手元のウィンドウを操作すると、自分のプロフィールが記されているデータを俺に手渡してきた。

何々、フォース、アダム的林檎……個人ランキング23位?

「なるほど……お姐さん、ガチ勢つてやつですか!」

「あら、そうでもないわよ? ふふっ」

詳しいことはわからん。でも、このゲームがどれだけの人数を抱えているかは知らないけど、その中で上から数えて二十三番目って時点でかなりの実力者だっということぐらいは俺でもわかる。

まさかアクティブユーザーが百人とかそんなことはないだろうし、百人でも十分凄いだろうけど。

戦ってみた。この時湧いてきた気持ちを言葉にするなら、そうなるのかもしれない。

無論始めたての俺とマギーさんが今戦ったところで勝敗は見えている。

だから、いつか。いつか、想像を超えた高みに至ったその時に、拳を交えてみたい。

素直に思ったことを言葉にするなら、そういうことになる。

「ふふっ……いい目をしているわ、アナタ」

「そうですか？」

「上上がるう、ってギラギラした目ね。それにアナタ……ガンプラを愛しているでしょう？」

愛。愛か。そう言われると正直自信がないというか、よくわからなくなるけど、ストライク焔と一緒に戦いたって気持ちだけは嘘じゃない。

「愛かどうかはわからないっす、でも、俺……自分だけのガンプラで、想像を超えた戦いをしてみたいんです！」

「うふふ、正直ね。でもまずは千里の道も一歩から。そのカウンターでチュートリアルミッションを受注するといいいんじゃないかしら？」

マギーさんは受付嬢のNPC——このゲームではNPDというらしい——が笑顔を振りまいているカウンターを指差して、小さく笑う。

確かに姐さんのいう通りだ。何事もまずは基本から始めなきゃ形にならない。

「ありがとうございます、マギー姐さん！俺、チュートリアル受けてきますー！」

「ふふ、頑張つてね。ああそうそう、これ」

「これ？」

「アタシからのフレンド申請よ。嫌じゃなければ受け取ってちょうだ

いな」

受け取らない理由がない。

さっきのヤスと違って、この人は信用できる。根拠は特にないけど、俺の直感がそう告げている。

「ありがとうございます！ 俺、ユウヤです！ 俺からもフレンド申請お願いします！」

「ええ、受け取ったわ。アタシはギャラリーモードで観戦させてもらうから、思う存分楽しんできなさい、ユウヤ君！」

思いがけずにいい縁ができた。そういう意味じゃ、ヤスってやつにも感謝した方がいいんだろうか。

そんなことを頭の片隅に浮かべながら、カウンターのNPDからチュートリアルミッションを受注したのはいいとして。

「えつと……これどうやってガンプラに乗るんです？」
「あらら……」

肝心の出撃方法がわからなかった。

マギーさんに教えてもらわなければ、ガンダムが大地に立つ前に終わるところだった。



手元のウィンドウを操作して格納庫に移動すると、見えてきた景色は圧巻の一言だった。

「すげえ……！」

「ふふっ、でしよう？」

「俺のストライク焰が18メートルになってる……！」

実物大のサイズにまで拡大されたガンプラを見ると、ガンダムSEEDを見ていた時のようなあの興奮が、腹の底から湧き上がってくる。

現実世界では掌に収まるぐらいのガンプラが、この世界では巨大な人型兵器として再構築される。知っていたはずなのに、実物を目にするとその光景が与えてくれる感動は、確かに俺の想像を超えたもの

だった。

「ストライク焔っていうのね、その機体。ンンッ、いいカスタマイズ！
見たところ、接近戦向けに調整してあるのね？」

「はい！ これでも俺、拳法やってますから！」

ストライク焔を作る時に考えていたのは、いかに自分の技をガンダムに落とし込めるかということだった。

キラ・ヤマトのように射撃と格闘を巧みに使い分けるのも格好いいかもしれないけど、俺にそれができるかどうかはわからない。

それなら、できることから始めようっていう発想だ。

小さい頃から習ってきた次元霸王流だけじゃなく、マーシャルアーツやコマンドサンボ、空手にガンカタ。とにかく俺が知ってる限りの格闘術を柔軟に使えるガンプラ、というのがストライク焔のコンセプトだった。

「やりたいことが明確なのはいいことね。そうねえ……タイガちゃん
と仲良くできるんじゃないかしら？」

「タイガちゃん？」

「アナタもいざれ出会うことになる強者よ。それじゃあ、お待ちかね
のアレに行っちゃいましょうか」

そのタイガちゃんとやらが気にならないといえは嘘になるけど、ま
ずは目の前のミッションを片付けるのが先決だ。

俺は格納庫から、カタパルトに固定されたストライクのコックピツ
トに移動して、出撃シーケンスに入る。

「おお、これもできるんだ！」

『そうよ、さあ、お腹の底から叫ぶといいわ！』

「了解！ カミキ・ユウヤ、ストライク焔、行きます！」

勢い余って本名を名乗ってしまった程度にはテンションが上がっ
ていたらしい。

でもまあ無理もない。こうしてガンダムに乗ってカタパルトから
出撃するシチュエーション、燃えるなって方が無理筋だ。

数日前までガンダムにそこまで興味を持ってなかったのが悔やま
れるぐらいだ。

でもまあ、後悔したところでしょうがないし、拳法一筋でやってきた俺も含めて俺なんだ、ガンダムについてはこれから学んでいけばいい。

カタパルトから滑り出し、空中に放り出されたところで見えた景色は、圧巻の一言だった。

まるで実写のようにテクスチャの青空や鬱蒼とした森林は広がっていて、この世界に奥行きがあることを、書き割りで止まっていた昔のゲームとは違うということをはっきりと物語っている。

「すっげえ……！」

父さんが、師匠が「想像を超えた」なんていう訳だ。

でもまだ、これだって片鱗に過ぎない。

半球状に展開されているドームのような空間——ミッシヨンの開始地点にストライク焰を突入させて、俺は来たるべきその瞬間に備える。

レーダーがアラートを吐き出して、コックピットに警告を示すウインドウがポップした。

敵機襲来。三機の確かりーオーNPD……だったか、そんな感じのモビルスーツが、大砲を構えた一機を後ろに下がらせた陣形を組んで直進してくる。

『来たわよユウヤ君、さあ、どう戦う?』

「へっ……決まってますよ、まずは！」

俺はマギーさんの質問に答えるなり、両手に持たせたビームピストルで牽制を加えて、前に出ていた二機を分断する選択肢をとった。

いかにチュートリアルとはいえ、二対一で挟まれるという状況自体がそもそもまずいものだというのは師匠の教えで理解済みだ。

そして、ドラムガンを構えて発射してきた一機に狙いを定めて、エールストライカーのスラスターを噴かす。

「こいつは……こいつも使えるんだぜ！」

銃口の下にピンバイスで穴を空けることで、ビームサーベルの刃を差し込めるようにした、さしずめソードピストルといったところか。

これが俺の作った武器の正体だ。

銃としても、剣としても使える武器。正直背中のビームサーベルを
持て余してる感はあるけど、まあ用途や使える距離が違うから良しと
しておこう。

ビームピストルの下部から発振されたビームの刃がリーオーNP
Dのコックピットを両断する。

そして、もう一機が放ってきたバズーカの弾を宙返りで回避。
すかさずピストルの連射で相手を固める。

「まずは試運転だからな！」

即座にビームピストルを放り投げて、俺は背中のエアルストライ
カーからビームサーベルを引き抜くと、そのままの勢いでバズーカ装
備のリーオーNPDを縦に四分分した。

使ってみてわかる。さつきはなんとなくでいってたけど、ソードピ
ストルとビームサーベルじゃ使い心地がまるで違う。

『エクセレント！ やるじゃない、ユウヤ君！』

「へへっ、ありがとうございます！ それじゃあ最後は……！」

残された、大砲を肩に装備しているリーオーNPDはビームを慌て
て連射してくるが、チュートリアルだけあって狙いは散漫だ。

これなら、ストライク焔の機動力で避け切れる。そして。

「さあ見せてくれよストライク焔、お前の……俺の想像を超えた力を
！」

一瞬、閉じた目蓋の裏に水滴が落ちるような錯覚と共に、俺はビー
ムサーベルを納刀すると、拳を固めてそのままリーオーNPDへと突
撃していく。

ビームピストルとビームサーベルはいつてみれば、布石のようなも
のだ。

何故なら、俺がこいつと一緒に戦うやり方は、その切り札は。

「次元霸王流！ 聖拳、突きたいッ！」

もしかすれば、エアルストライカーのおかげで空中でも安定した重
心を保って、次元霸王流の技を繰り出すことができたのかもしれない。
い。

だとしたらログアウトした時、改めて母さんに礼を言っとくべきだ

ろう。

それはともかく、俺の切り札は、この拳に尽きる。

コックピットに風穴を空けられたリーオーNPDはそのまま墜落し、地面に叩き落とされて爆散。残りの二機も討ち漏らした気配はない。

【Mission Success!】

となれば、これでミッションは終わりだということだ。

『コングラッチュレーション！ ユウヤ君、素晴らしい戦いぶりだったわ！』

「ありがとうございます！ そうか……これが、ガンプラバトル……！」

まだまだチユートリアルを突破しただけかもしれない。

それでも俺は、確かに機体と、ガンプラと一体化して戦う高揚感のようなものを、それまで想像していたのとは違うリアルな感覚として実感していた。

ぞくぞくと腕が震えて鳥肌が立つ。

師匠の言葉は嘘じゃなかった。ここには確かに、想像を超えた戦いが、俺を待っていたのだから。

Ep. 03 「落ちてきた少女」

「くあ……あ……」

案の定というかなんというか、母さんに釘を刺されていたのにもかかわらず、俺はその後も見事にGBNにのめり込んでいた。

あの世界は広い。ガンプラバトルの奥深さもそうだけど、ディメンションと呼ばれている各エリアを探索するだけでも軽く半日以上は時間を潰せるし、腹は膨れないけどゲーム内での飲食だつてできる。

なんだつたか、もう一つのタイトルは忘れたけどそれと並んで神ゲーと世間で呼ばれるだけのことはある。

あいつや師匠が夢中になる訳だ。

寝ぼけ眼を擦りながら歩いていると、同じ中学校の制服に身を包んだ女子が、俺の家と比べても遜色ないぐらいデカイ西洋住宅の門を潜って飛び出してきた。

赤みがかかった茶髪をやたらとデカイツインテールにまとめたその女子こそ、俺の幼なじみにして親戚のコウサカ・チナツだ。

チナツの母親——父さんのお姉さんに当たる人に柔らかい笑顔をを見せていたかと思いきや、俺の姿を見るなりこいつは途端に不機嫌な表情を浮かべてにじり寄ってくる。

「聞いたわよ、ユウヤ」

「くあ……あ……んだよ、チナツ」

「アンタ、アタシが散々誘ってもやらなかった癖にGBN始めたんだつて？」

「誰から聞いたんだよそんなこと」

「フミナさんよ」

「……母さん……まあいや、隠すことでもないからいいけど」

「良くない！　なんでアタシが散々誘ってやったのにやらないくせして、今思い立ったみたいに始めてんのよ！」

そんなこと言われてもなあ。

チナツは怒髪天を衝く勢いで捲し立ててくるけど、俺にだつてタイミングとかきつかけとかそういうのはあるんだし、これについては完

全に仕方ないことだと思う。

確かにチナツに誘われた時点でやっつけばよかったと思うところがないでもないけどさ。

「まあなんつーか……天の時、ってやつだ」

「人の和の方を重視してほしかったわね」

「悪かったって」

なんでかは知らんけど、こいつはとにかく喜怒哀楽がわかりやすい。父さんのお姉さんことミライさんは落ち着いていて、おっとりとした人なのに、なんでこんな激情家が生まれてきたのか。

チナツの父親に当たるユウマさんも落ち着いた人だし、本当に謎だ。世界七不思議に加えてもいいんじゃないだろうか。

「アンタまた失礼なこと考えてるでしょ」

「そんなことねーって」

「ふん……ま、GBNに関してはアタシが先輩なんだから、これからは手取り足取り教えてあげないでもないけど」

デカイツインテールを掻き上げて、チナツは得意げにそんなことを言つてのけたわけだが、正直その辺はもうマギーさんに教わってるんだよな。

かといって正直に言ったところでこいつは臍を曲げるだろうという確信がある。

「おう、そんな時が来たらよろしく頼むわ」

「ふん、アタシの教えについて来れるかどうか楽しみにしてるわ。その……今日にでも教えてやっても、いいのよ？」

「うーん……まだチュートリアルとかFランクのミッションとか埋めてねーし、そっち優先かな……」

「あつそう……その辺は教えるものも何もないわね、簡単すぎて」

歯に絹を着せないっていうのは多分こういうことをいうんだろう。良くも悪くもチナツは感情がわかりやすい。

といつても、初心者向けミッションについて教えることがあるかと訊かれればない、と答えるのが妥当なのは世の常だ。

基本は基本でしかない。だからこそ最も重要なんだけど、素振り

とか型と違って、ゲームの基礎の部分に関しては触れている内に自然と覚えるケースの方が多い……と、俺は思う。

特にGBNは人によってプレイスタイルが違うんだから、いうなればチュートリアル期間は「自分の型」を見つけてる時間のようなものだ。まさかチナツが俺と同じ徒手空拳でやってるわけでもないだろうしな。

そんな具合に欠伸を噛み殺しながら、俺はチナツのよくわからんGBN武勇伝を聞き流しながら、いつもより歩くのが憂鬱に感じられる通学路を辿るのだった。



放課後は一目散に帰宅して、師匠との稽古を終えて風呂に入って、夜飯を食べれば、待望のGBNの時間が待っている。

睡眠時間を削るのは良くないことだとわかっていても、次元霸王流の稽古とGBNを両立させようとする、どうしてもプレイできる時間が夜になってしまう。

「こういうのを廃人っていうんだっか……」

そのうち本当に朝まで寝ずにGBNをやってそうなのが怖いところだが、そこまでいったら流石に母さんにダイバーギアを没収されるのが関の山だ。

だからまあ、その辺も含めて色々気を付けて行かねーとな、とは思いう訳だ。

事前に諸々の準備を済ませ、ガンプラをダイバーギアに立たせてスキャン。ゴーグルを被れば俺は再び現実の「カミキ・ユウヤ」から電子の「ユウヤ」へと解けていく。

「さて、と……」

降り立ったセントラル・ロビーはもう夜なのにも関わらず多くのダイバーで賑わっていて、相変わらずこのゲームがとんでもない人数のアクティブを抱え込んでいるのだと認識させられる。

なんだろうな、昔買ったバグだらけの格ゲー……特大のクソゲー

で、アクティブが百人前後だったそれとは色んな意味で大違いだ。

まずは基本から、つてことでチュートリアルミッションやらFランクのミッションを手当たり次第に埋めている訳だけど、なんというかこれについては初心者向けのミッションということもあって、NPDの行動パターンもわかかってきたところがある。

つまりるところマンネリというやつだ。

もちろん、ガン普拉バトルそのものは楽しい。

ただ、初心者向けのNPDを延々と倒しているだけでは飽きが来てしまうのもまた、確かなことだった。

「でもな、これ言ってみれば素振りみたいなもんだしなあ」

基礎というのとはかく地味で、地味だからこそ飽きやすい。小さい頃にひたすら正拳突きの実習をしていたときに、そんな不満をぶちまけていた記憶が蘇る。

その時師匠は、父さんはなんて言ってたんだっただか。

そうだ。「その退屈が未来のお前を強くする」とか、そんな感じだったはずだ。

だったら今やってるのも同じことだ。

俺はぴしゃりと自分の両頬を叩いて気合を入れ直すと、ミッションカウンターに向かって、残りのクリアしていないミッション一覧を表示してもらおう。

「現在あなたがクリアしていないミッションはこちらになります」
「採集系か……」

好きなものは先に食べるか後に食べるかは意見が分かれるところだが、俺はどっちかというところ前者だった。

何が言いたいかというと、楽しそうなミッションは粗方終わらせてしまっていて、残ったのは採集系、いわゆるお使いクエストというやつがほとんどだった。

こういう時、昔のゲームだったら採集系と見せかけてその時点の装備ではとても敵いそうにない強敵と出会わせてくるとか、そういう演出を仕込んでいるんだろうけど、現代のオンラインゲームでそんなことをやったら阿鼻叫喚の嵐になるだろう。

要するに戦いは期待できない、ということだ。

その事実には若干テンションが下がったものの、一応機体の操作練習だと思えばそんなに悪いものじゃないはずだ。

「じゃあこの……ヤナギランの花を採取するミッションで」

「承知いたしました。ミッションの受注を正式に受領いたしました」

たまにはのんびり景色でも楽しむのも悪くはない……。のかどうかはわからないものの、とりあえずはヤナギラン一本の納品というミッションを受注して、俺は格納庫へと足を運んだ。



GBNには思考補助システムと呼ばれるものが積まれているらしい。

らしい、というのはチナツから聞いた話だから実際どうなのか裏が取れてないってだけのことなんだけど、多分それについては初心者俺でも、今のところ思う通りにストライク焔を動かしている辺り、事実なんだと思う。

何となく「こうしたい」というイメージを汲み取ってシステムが思考を誘導してくれるそれがなければどうなるかというと、恐らくは一人でボーカルとギターとベースとドラムをこなすような操作性になっってしまうのかもしれない。

いや、詳しくは知らんが。ただ学校の中での噂でそういう操作性のゲームもあると聞いただけだ。

初心者でも機体を軽快に動かせるのはいいゲームだ。

とりあえずは爽快感がわかりやすい。

十八メートルになった自分のガンプラを眺めるだけじゃなく、自分の手と思う通りに操作できるのはそりやもう気持ちいいことだ。

もしもGBNが、リアルを追求しすぎてガンダムSEEDに出てきたサイ・アーガイルがやったみたいに関心者が機体を満足に動かせる操作性だったら、あれだけ多くのダイバーを抱え込んでいないだろう。

目的のヤナギランを採取して、ストライク焔にアクロバット飛行をさせながら薄らばんやりとそんなことを考えていた、その時だった。

「救難信号……?」

コンソールに、近くの地点から送信されてきたのであろう救難信号が点滅する。

救難信号ってことは困っている誰かがいるってことに間違いはない。だったら見捨ててロビーに帰るのも後味が悪いし、第一そんなのは。

「趣味じゃねえんだよな……!」

見知らぬ誰かを助けて得があるわけじゃない。お礼を貰えるとも限らない。

だとしても、そんなことが、見て見ぬフリをしていい理由になるはずがないだろう。

機体を加速させて、俺は救難信号が出ている地点へと急行する。

見返りへの期待なんてそこら辺に捨てておけ。俺はただ、やりたいからやるんだ。



空から女の子が落ちてくるのを見たことがあるだろうか。

俺はある。というか、今がまさにその状況だった。

『機体を撃破される前に捨てるってか! 中々賢いじゃねえか、でもなあ!』

女の子が落ちてくる前に一瞬見えた白と青に彩られたガンダムは手酷い傷を負っていて、その子は自分のガンプラが破壊される前にバトルアウトを選択したのだろう。

でも、どういうわけか半球状に展開されているフリーバトルのフィールドから彼女の姿が消えることはなく、代わりに何か、紫色の禍々しいオーラを放っている……確か、アルケーガンダムとかそんな感じの名前だった気がする機体は、女の子に銃口を躊躇いなく向けていた。

「危ねえっ！」

『なんだア!?』

俺は咄嗟にビームピストルをアルケーガンダムに向けて放つと、女の子をゲストモードで保護する形で、ストライク焰のコックピットに乗せる。

マギーさんからあれこれ教えてもらっていた成果だ。まさかこんなに早く使うことになるとは思っていなかったけどな。

『てめエ……救難信号に釣られてやってきたってか？ めんどくせえなア、おお?』

「なんだか知らねーけど、女の子に銃を向けるような外道に言われたくねえな！」

『ンだど?』

「礼には礼を、無礼には無礼で返す！ 師匠の教えだ！」

紫色のオーラを立ち上らせているアルケーガンダムはいかにもめんどくさそうにバスターソードを担ぎ直すと、凄まじい速さで何かを腰の部分から展開してきた。

『勇者様気取りか？ ガキはとつとと養分になって寝てろってんだよ、フアング!』

「だから危ねえって……言ってるだろうが！」

背後から迫ってきたその何かしらを回避して、俺は紫色のオーラを纏っているアルケーガンダムにビームピストルでの牽制を加える。

だが、アルケーは一步も動くことなく、ビームピストルでの攻撃を弾き返してみせた。

『アレを避けやがった……? まあどつちにしろ同じだ、てめエの攻撃なんざ、カスダメしか入らねえんだよ!』

「……そ、そうなの……! あの人はマスダイバー、ブレイクデカールを使ってるの……!」

ようやく落ち着いたのか状況を飲み込めたのか、さっきまで目を閉じていた女の子が口を開いて、よくわからない警告をしてくる。

マスダイバー。ブレイクデカール。知らない言葉だ。

ただ、女の子の口調からしてそれがまともなものじゃないことは、

何かしらの不正をしてるってことは伝わってきた。

「大丈夫だ」

「でも、マスダイバーには、攻撃が……!」

「さっき言ったろ? カスダメだって。要するにな……一ダメージでも入ってんなら、相手の体力がどんだけあろうが百万回も殴れば倒せるってことだ!」

『あア!? 何言って——』

「俺は今から! お前を! 百万回ぶん殴る!」

ビームピストルを放り捨ててアルケーの懐に飛び込むと、俺は見様見真似で習得したデンプシーロールで息もつかさずその装甲をひたすらに殴りつけていく。

「ワン、ツー!」

『なんだこのガキ、正気なのか……!?!』

「悪いのが正気も正気、マジもマジだ! このまま全力でぶん殴る!

次元霸王流! 疾風突き!」

ジャブをそのまま強化したような、速度による威力を追求した次元霸王流の拳がアルケーガンダムの装甲を穿つが、その手応えは浅い。

なるほど、マスダイバーってやつが何なのかはわからないけど、今の手応えからして致命傷になりそうな一撃でもノーガードで防いでみせたってことは要するにチーターってことだな。

だったら尚更放っておけねえ。

綺麗事かもしれないが、ルールってのは皆が守っているからこそ楽しく遊べるようになってるんだ。

それを平然と破ってヘラヘラしてるような奴を野放しにしていたら、ろくなことになりやしない。

『クソッ、離れやがれ!』

「なるほどな……この距離だとさっきのフアングってのは使えねえのか! パルマ……ファイオキーナ!」

「……っ、すごい……」

デステイニーガンダムから両腕を移植していたことで装備された、掌からのビームが、疾風突きで穿たれた傷跡をさらに抉る。

相手は腰から飛ばしてきたファンングとかいう武器でこつちを仕留めようとしているみたいだったが、威力をチートで強化しているのだろう。

この距離だと巻き添えになるからそれが使えない。

相手は自棄になったかのように爪先からビームサーベルを展開すると、雑な蹴りを放ってくるけど、その程度の攻撃なら見てから対処するのは簡単だった。

「はあっ！」

『嘘だろ、このガキ、あのタイミングでガードして……！』

「殴り合いなら慣れてるんでね……宣言通りに百万回ぶん殴ってやる！ 次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

カスダメしか蓄積していなかったとしても、さっきの疾風突きとパルマ・フィオキーナのコンビネーションで相手には「傷口」ができたはずだ。

そこからは紫色のオーラも放出されていない。あれは多分、表面装甲を強化するためのチートなのだろう。

内部フレームまで考えてモデリングしてくれているこのゲームの開発班のおかげなのかガンプラの製造元のおかげなのかは知らないが、その些細な偶然に感謝しつつ、俺はパルマ・フィオキーナの光を纏ったストライク焰の拳を高速回転させて、その「傷口」へと全力で叩き込んだ。

『バカな……ありえねエ、こんなことがア……っ！』

「百万回ぶん殴るまでもなかったな！」

きつとチートを使っていたのは運営にもバレていることだろう。だったらあのチーターもお縄につくはずだ。

ダイバーが髭面を歪めて爆散したアルケーガンダムに背を向けて、俺は機体から降りると、保護した女の子をそつと地面に下ろした。

「いやー、災難だったな！」

「う、うん……でも、貴方……強いんですね……マスダイバーを倒しちゃうなんて……」

「マスダイバー……ああ、さっきのチーターか。まあ、一ダメでも入る

ならさつき言ったみたいになら百万回ぶん殴って倒すつもりだったからな」

「そ、そうなんだ……なんていうか、すごい……」
「そうか？」

単純でわかりやすい話だと思っただけだな。

おどおどと俺を見つめているその子は、指先を震わせながら恐る恐るといった様子でウィンドウを開く。

「その……助けてくれて、ありがとうございます……その……」

「俺はユウヤ。ええと……」

「あ、私……マフユ、です。マフユっていいいます……その、良ければ……フレンドに、なっってくださいか……？」

「ああ！ これも何かの縁だ、よろしくな、マフユ！」

思いがけずフレンドが増えてしまった。

もじもじと頬を赤らめてマフユと名乗った女の子が送ってきたフレンド申請を受諾して、俺はセントラル・ロビーに帰還しようとした。試みた。

だが、それを止めるようにマフユの手が伸びる。

「えっと……その、ユウヤ、君……」

「ああ、なんだ、マフユ？」

「……よければ、一緒に帰りませんか……その、私……怖くて……」

「ああ、そういうことか……ごめん、気付かなくて。それと俺のことはタメで呼んでくれて構わないぜ！」

——見たところ、あんたはいい奴だからな。

多分、この見立ては間違っていない。

何が根拠かと言われると反応に困るけど、まあ何となくそういうのはわかる。そういうものだ。

「……ありがとう、ユウヤ君」

「どういたしましたして、それじゃあ改めてこれからよろしくな、マフユ！」

「……うんっ……！」

目尻に涙を浮かべて、はにかむマフユと共に、俺はセントラル・ロ

ビーに帰還して、彼女が「またね」と零してログアウトするのを静かに見送る。

気付けばさっきのチーター、マスタイバーを倒したことで俺のダイバーランクがFからEに上がっていたけど、しばらくそれには気がつかなかった。

Ep. 04 「ご注文は友達ですか？」

少子高齢化がどうのこうのとかそんな理由で中学生のバイトが解禁されて久しい現代、俺もまた、例に漏れずバイトをやっていた。

別に生活費に困ってるとか今すぐ欲しいものがあるとかそういうわけじゃないんだけど、体力作りとかも兼ねてデリバリーサービスの配達員をやってるのだ。

背負った箱の中身が崩れないように、慎重に、だけど迅速に自転車を漕ぐ。

体幹を鍛える修行だと思えばいい。

それに多少の賃金が発生するんだから学生としてはそれだけでもありがたい。

もちろん、中身をぐちゃぐちゃにしてしまったらクレームが入る以上、バイトでもプロとしての責任を持たなきゃいけないわけだけど、それでもお客さんに感謝してもらえた時は何となくやりがいみたいなものを感じたりもするのだ。

「ありがとうございますー！」

「ありがとうございます、また頼むよー！」

「はい、是非ー！」

今日も速攻で依頼をこなして、残りはラスト一件だったか。

ハンバーガー系は寿司とかラーメンに比べれば崩れる心配が少なからず楽だとはいえ、油断していたらぐちゃぐちゃになりかねない。

終わり良ければ全てよしって訳じゃないけど、最後の仕事にケチがつくのはこっちとしても避けたいから、慎重に運ばなきゃな。

自転車を漕ぎながら人波を掻き分けて、注文があったファストフード店に駆けつける。

そうしてお客さんが注文したものを背中の中のザックに収納して、自転車で指定の住所まで届けに行く。

これが概ね一連の流れだ。

なんか母さんから勧められたガンダムにもこんな感じのリユック

サツクみたいなの背負ってたのがいたな、なんてことを思いながら、俺はひたすらにペダルを漕いでいた。

「次の住所は……こっちか」

信号待ちの間に住所を確認して、どちらかというところと高級住宅が並んでいる地区に向かう。

偏見なのは重々承知だ。

でも、こういういかにも高そうな土地の高そうな家に住んでる人もハンバーガー食ったりするんだな、と思うと妙に親近感みたいなものを感じたりもする。なんだろうな、この感覚。

そんな益体もないことを考えているうちに、いかにも金持ちが建てましたって感じの広々とした庭園が広がっている高級住宅に到着するなり俺は、インターフォンで家主にコンタクトを取る。

「すみませーん、ヴェスバーイーツですけど、ご注文の品をお届けに参りました！」

『あ、はい……ありがとうございます。その、門を開けますから玄関までお願いします……』

インターフォン越しに聞こえてきたのは、今にも消え入りそうな覇気がないというか、消沈した感じの声だった。

声のトーンからして多分女の子だろうか。

まあお客さんが男だろうと女だろうと関係ない話か。

なんてことを考えているうちに、遠隔操作で開門していく鉄格子に目を丸くしつつ、俺は自転車を押して手入れが行き届いている庭園の中心を歩く。

なんだろうな、この単発バイトやって一年ぐらい経つけど、こういうレベルの金持ちの家に食い物を届けたことはないから一種のカルチャーショックを受けているのかもしれない。

いかにもお上りさんって感じで目を白黒させながら庭園と豪邸の間で視線を往復させてしばらく歩くと、両開きになっているデカイ玄関扉が視界に飛び込んでくる。

豪邸ってこういう家のことをいうんだろうな、多分。

うちも道場がある分それなりにデカイ方だとは思ってたけど、世の

中なんでも上には上がいるものだ。

ぎい、と音を立てて玄関扉が開くと、姿を見せたのはゴス……ゴスペル？ ああ違う、ゴスロリだ。そんな感じの服に身を包んだ、俺とそんなに年の頃は変わらなそうな女の子だった。

「すみません、ありがとうございます……」

「いえいえ！　これが仕事ですから！」

一分一秒でも早くお客様のところに誠心誠意を込めてお届けしています、なんてのはちよつと言い過ぎかもしれないけど、仕事としての意識は持っているつもりだ。

ザックからハンバーガーとポテトとドリンクがセットになっている袋を取り出して、その子に渡す。

しかし、信じられないぐらい細くて白い指だな。握っただけで折れそうなくらいだ。

それが目についたのは、そんな具合にゴスロリ姿の女の子がハンバーガーを受け取ったのを確認して、そのまま帰ろうとした時だった。

玄関先の収納に、プラスチックケースに入れて飾られているものがふと視界に飛び込んでくる。

その中身は確か……なんだったか、ウイングガンダムだった気がする。前に母さんから一通り見せてもらったジャケットの中にあんな顔のモビルスーツが描かれてたから、多分間違いない。

それにしたってあのウイングガンダム、丁寧に作られている。

俺はまだまだガンプラに関してはズブの素人かもしれないけど、完全に表面の艶が消えているマットで小綺麗な仕上がりを見せているそれが、どれほどの手間暇をかけて作られたかは想像できた。

だからなのだろう。思わず、言葉が先に走っていた。

「お客さん、ガンプラ好きなんですね！」

「……えっ？　あ……はい。ガンプラは好きです……」

「実は俺も最近GBN始めたんですよ！　お客さんののに比べたらちよつと拙いかもしれないんですけど、今もガンプラ持ち歩いているっす！」

基本的にダイバーギアとストライク焔は学校に行こうがバイトしようがランニングしてようが、肌身離さず持ち歩いている。

それがポリシーって訳でもないけど、ガンプラへの理解を深めるというか、一緒にいることでより愛着が湧いてくるというか、そういう感じがするからだ。

聞けば、父さん……師匠も似たようなことをやってたらしいから、多分遺伝だな。

小さく苦笑しつつ、俺は腰のポーチからストライク焔を取り出して、女の子に見せてみた。

すると、その子は突然目を丸くして、口元を手で覆う。

できるビルダーからするとそんなにヤバい出来だったんだろうか。若干心配になってきた。

「ちよ、ちよっとだけ待っててください……！」

「……っ、はい、わかりました！」

待ってて、とは何だろうか。

まあ考えても仕方ない。ストライク焔の出来だつてプロ並みの腕前がありそうなあの子から見れば微妙なものなのは事実なんだろう。

それでも俺は、どんなに出来が悪くたってこいつが好きだからそれでいいんだ。

綺麗にマスキングできたと思っているエールストライカーと、炎を思わせるオレンジが少し入った赤に塗り替えた部分を見て、俺は小さな相棒に心配するなよ、と心中で語りかける。

五分ぐらいだろうか。そのぐらい玄関前で待ちぼうけしていると、女の子が何かを手に、ぱたぱたと走りながら戻ってきた。

「あ、あの……い……このガンプラ、私のなんですけど……！」

「おお、すげえ格好いいですね！ ベースはなんだろう、俺最近ガンダム見たばっかだからわかんないですよね……！」

「えっとこの子のベースはエアマスターで……じゃなくて、そのっ……」

その白と青のツートンカラーに、オレンジ寄りの黄色と赤がアクセントとして添えられているガンプラのベースはどうやらエアマス

ターというらしい。

ただそれが、ほとんどオリジナルと呼べるほど別物に作り変えられていることは見ればわかる。

そして、その出来も言わずもがなだ。

穴が空くほどそのエアマスターを凝視している俺に対して、ゴスロリ姿の女の子は眦を涙で潤ませながら、絞り出すように語りかけてくる。

「あのっ……そのっ……私、『マフユ』です……っ！」

「マフユっていうんですか、いい名前ですね！」

「あ、あの……そうじゃなくて……その……」

「どうかしたんですか？　もしかして自分の名前、嫌いだったりとか……」

「ち、違うんです！　私、その……貴方に助けられたんです……っ！」

『ユウヤ』君、ですよね……!?!』

確かに俺の名前はユウヤだけど、誰かを助けた覚えなんて……ん？　いや待てよ、確か三日くらい前にそんなことがあったようななかったような。

ああ、そうか。ようやく合点がいった。

「えっと……お客さん、もしかしてGBNの『マフユ』だったりしますか？」

「……はい、貴方のフレンドの『マフユ』です……」

なんてこった。

凄い偶然もあつたもんだと、脳内は大混乱だ。あれからずっとログイン時間が合わないのか、GBNでマフユと会うことはなかったけど、まさかリアルで出会うなんて思ってもいなかったわけだけ。

だけどもあ、それはそれとして。

目の前のお客さんがGBNの「マフユ」と同一人物なのだとしたら、敬語を使われるのはなんだかむずむずする。

「えっと……マフユ、でいいんだよね？」

「はい、ユウヤ君……」

「じゃリアルでもタメで大丈夫だぜ！　いやー、しかし凄い偶然も

あつたもんだな！」

乱数の女神様とやらが気まぐれにサイコロを振った結果がこれなのだとしたら、実によくできているというか、多分今頃女神様は爆笑でもしているのだろう。

合縁奇縁。そんな言葉が似つかわしい出会いを、マフユの方がどう思ってるかは知らないけど、俺の方は大分嬉しさのようなものを感じている。

「うん……そうだね。その……ユウヤ君、これから、時間ある……？」
「今日のバイトはこれで終わりだから……ある！」

休日の稽古はなし、というのが師匠の方針だ。休める時に体を休めておくのもまた武術家として必要だとかなんとか、そんな理由だ。

だからバイトを入れている、といってもいい。

とはいえ、そう多くの件数を引き受けてるわけじゃないし、中学生はまだまだバイトに関する制約が色々多いから、基本的に俺の休日はバイトが終わればすぐ、師匠に見つからない程度に自主練をするのが日課だった。

「良かった……その、助けてくれたお礼もしたかったけど……ユウヤ君、ガンダムについてあんまり詳しくないから……その……」

「SEEDとDESTINYは一通り見たんだけどなー、まあそれ以外はちよつと」

「だから、一緒に、その……ガンダム、見てくれる……？」

「おうー！ 俺で良ければー！」

母さんが持つてるBlue-rayはまだ全部見れてないから、渡りに船ってやつだ。

師匠……父さんと母さんに最低限の連絡を済ませて、俺はマフユの招待に与ることになった。

よかった、とマフユは眦に涙を滲ませる。そこまで嬉しいものなんだろうか。



そんなこんなでマフユの家に上がり込んで、見ることになったのは「新機動戦記ガンダムW Endless Waltz」なる作品だった。

大筋は省くとして、要するに戦争が終わって平和になったと思っただけで、また新しく蜂起した連中とガンダムが戦う話、ってことらしい。

やけに広々とした廊下を歩いて、所々にガラスケースやプラスチックケースで嚴重に保護されているガンプラに視線を奪われながら俺は、やたらと広いリビングルームに通されていた。

「え、えつと……自分の家だと思ってくつろいでくれると、嬉しい、な……」

「流石にそれは……ってか、マフユ。この家で一人なのか？」

豪邸という言葉がよく似合っているこの家に、人の気配は恐ろしいほど感じられなかった。

何か訳ありなのか、それとも単純に今ご両親が出かけているのかどうかは判別に困るし、そこを突っ込んで聞いていいものかも悩みましたけど、最終的には言葉が先走ってしまった形だ。

俺からの問いにマフユは少しだけ表情に暗い影を落とすと、今にも消え入りそうな声でぼそぼそと口火を切る。

「……うん。私一人。私のお父さんは今イタリアにいて、お母さんは女優だから……ハリウッドとか、色んなところを転々としている」

「……そっか、なんか訊いてごめん。悪かった」

「ううん、大丈夫。一人には慣れてるから……あんまり暗い話してもユウヤ君、困っちゃうよね……だから、その……ガンダム、見よう……？」

「ああ！ よくわかんないとか、色々教えてくれるとめっちゃ助かる！」

俺はマフユの言葉に親指を立ててそう返す。

ガンダムに関してはSEEDとDESTINY以外はズブの素人だし、そのSEEDとDESTINYだって外伝まではまだ追い切れていない。

その点マフユはそういうのに詳しくそうだったから、色々と助かる。

「……ありがとう、ユウヤ君」

「俺、何かしたか？」

「ううん……お友達とこうして一緒にガンダム見るの、夢だったから……」

どことなく悲壮な雰囲気を漂わせる声音で、マフユはぼそぼそとそう呟いた。

夢。夢か。俺にはまだ考えもつかないけど、もしも俺の存在が少しでもマフユの役に立っているのなら、夢に一枚噛んでいるのなら、それはやっぱり嬉しいことなんだろう。

会ったばっかの俺がどうしてここまで信頼されてるのかはわからないけど、それでもマフユにとつて俺が「友達」になるのなら、俺だつてマフユのことを「友達」と思うのが筋つてもんだ。

会ったばっかでも、例えそれがゲームの中での縁であつても、躓く石もなんとやらつてな。

そんなことを考えている間にもマフユはてきぱきとBlue-rayディスクをテレビに内蔵されてるプレイヤーに入れて、再生のボタンを押す。

「待たせてごめんね、ユウヤ君……」

「全然！　それで、ええと……」

「エンドレスワルツ……面白いと思う、よ……？」

「そこは自信持っていんじゃないか？」

「う、うん……面白い、よ……」

マフユと俺の感性が違うのは当たり前のことだけど、好きなものはきつちり好きだと言った方がいい。

謙遜もしすぎてしまえばそれは毒になる。

謙虚であることは美德だけど、自分や好きなものを卑下するのは良くないことだつて、師匠もよく言っていた。

マフユが再生のボタンを押すと同時に、俺は食い入るように画面を凝視する。

エンドレスワルツ。よくわからないけど、わからないからこそ見てみようじゃないか。



結論から言うと、めっちゃ面白かった。

戦いが終わった後に兵士はどこに行くのかだとか、そういうテーマもだけど、ボロボロになりながらもシエルターを撃ち抜くウイングゼロだとか、勝ち目のない戦いだとかわかっていても戦い続けるガンダムたちだとか、そういう要素はテレビ版……前作にあたるものを見てない俺でもよくわかった。

「どうだった、かな……?」

「すげー面白かった!」

「……えへ。ありがとう……」

何より凄いのがこれ全部手描きってことなんだよな。ヒロロがゼロに乗るシーンとか、全部。

その熱量も凄まじい。

「……私、ウイングが好きだから……ユウヤ君にも気に入ってもらえて、よかった……」

「そりゃ何よりだな!」

「……うん、そ、その……」

「どうしたんだ、マフユ?」

「えっとね、今度はGBNでも一緒に遊んでみたいな、って……」

順番が逆かもしれないけど、とマフユはぎこちない笑顔を浮かべながらそう提案してくる。

言われてみればフレンドなのに一回も一緒にやったことなかったな、GBN。

「ああ、俺で良ければ! 基本夜やってるから、マフユの都合が合えば一緒にやろうぜ!」

「……夜、だね……? うん、わかった……その……」

「よろしくな、マフユ!」

「……っ、うん……よろしく、ユウヤ君……!」

泣くほどのことじゃないのに、涙を滲ませているマフユに何があつ

たのか、何がそうさせているのかはわからないしきつと訊かない方がいいことだ。

だから俺はそれ以上は何も言わずに、マフユの家を去ることにした。

今度はテレビ版のガンダムWを見てみるのも悪くないか。そんなことを、頭の片隅に浮かべながら。

Ep. 05 「黄道のG」

マフユとの再会は、その日の夜に果たされた。

エンドレスワルツを見た興奮も覚めやらない夜の九時。

最低限の勉強やら身支度を終わらせた俺は、地球連合の軍服を着崩したダイバー「ユウヤ」として、GBNのセントラル・ロビーに降り立っていた。

「あつ……ユウヤ君、だよね……？」

俺の姿を視認するなり、一足先にログインしていたのだろう。リアルで着ていたのと似たようなゴスロリ衣装に身を包んだダイバーこと、マフユが問いかけてくる。

「おう、俺は俺だぜ！」

なんだか胡散臭い受け答えになってしまったような気がするけど、マフユはほつと息をついて胸を撫で下ろしていたから、多分伝わってるのだろう。

だからこの状況を良しとする、ってのはチナツの親父さんの口癖だったか。

「……よかった……その、人違いだったら、どうしようかなって……」

「まあ確かにそれは心配だよな」

フレンド申請を送り合って三日が経ってはいたけど、こうしてお互いにGBNで顔を合わせるのはあのマ스ダイバーをぶちのめした時以来だ。

それに俺の方が先にログインしてたら多分似たようなこととしてただろうしな。

別に人違いをしたからなんだってわけでもないけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。見た感じ照れ屋なマフユからするとそりやもう大変なんだろう、きつと。

「えつと……じゃあ、ユウヤ君。その、何しよつか……？」

「何って……ああ、ミッションとか！」

そういやこの前マ스ダイバーをぶちのめしたおかげでダイバーランクとやらがFからEに上がっていたんだっけか。

確か、このダイバーランクってやつは上がれば上がるほどいい、というかある程度の実力の指標になっていて、チナツのやつはAランクだとか自慢してた記憶がある。

A、B、C、D……指折り数えてみれば随分遠いな。

でも、それだけ伸び代が、上にのし上がるための余白が残されてると考えると、逆にわくわくしてくる。

「んー、ミッションかあ」

「……どうしたの、ユウヤ君……？」

「ああいや、このダイバーランクってのを上げるのって、やっぱりバトルした方が上がりやすいのかと思って」

基本は大事、初志貫徹で行こうとは思ってこそいるけど、それでも俺が何のためにGBNを始めたのかを考えれば、それは「想像を超えた戦い」をしたかったからで。

つまりやりたいことを優先すると必然的に、対人戦が浮上してくるのだ。

マスマイバーのあれはノーカンだ。だってフェアじゃないからな、あんなの。

「うん……基本的に、上を目指してる人は皆、バトルでダイバーポイントを稼いでるの……」

「へえー、つてことはミッションって」

「うん……救済措置の意味もあるんだけど、ミッションもミッションで楽しい、よ？」

「それもそっか、焦ったところでどうにもならないしな」

対人戦を始めるならどれぐらいのランクまで上がってからのがいいのかとか、あとでチナツに聞いておくか。

ともかくじゃあEランクミッションを進めていこう、ということであとマフユの間には一つの合意が形成されたんだけど、ちょうどその時だった。

「あの、すみません……」

「はい、何ですか？」

どこことなく気まずそうな笑みを浮かべた、うだつの上がない

……つていつたら失礼に当たるんだろうけど、そんな印象のダイバーが、長身を屈めて俺とマフユに視線を向ける。

見たところ、あのヤスだとかマスダイバーみたいな悪意というか、そういうものは感じない。

むしろ、見ての通り本気で困っているようだった。

「ああうん、僕はトッドっていうんだけど……君たちがバトルの話してたから、ちよっとお願いがあって話しかけさせてもらったんだ」

「……お願い、ですか？」

「ああうん、その、情けない話なんだけど最近フリーバトルの掲示板で募集かけたらマスダイバーに当たっちゃってさ、それ以来、掲示板でちゃんとしたバトルを申し込むのがどうにも怖くなって……」

トッドと名乗った長身瘦躯のダイバーは、眼鏡の蔓を指で押し上げながら、困ったようにそう零した。

マスダイバー。また聞いたその名前は、決して気持ちいいものじゃない。

マフユみたいな子を狙ったり、純粹にバトルがしたいだけのトッドさんを狙ったり、とにかく他人の善意だとか気持ち踏みにじるやつは許しちゃおけねえよな。

「なるほど、それで俺たちとバトルしたいってことですか？」

「うん、まあ……ランク的にも君たちに近いと思うし、僕たちも二人組だから……どうかな？」

「俺は一向に構いませんけど……」

個人的には大賛成だけど、二人で遊ぶって約束をしている都合、マフユがどう思ってるかについてを無視して受けるのは筋が通らない。

そのマフユに視線を向ければ、大きなリボンでお……お嬢様結び？に結わえた髪の毛の先を指先でくるくると巻き取りながら、もじもじとしながら、俺とトッドさんの様子を頻りに伺っていた。

三日前にあんなことがあった以上、フリーバトルを警戒するのは無理もない。

じつ、と見つめられる中で何度か浅い呼吸を繰り返すと、マフユは意を決したように小さく頷いて、話を切り出す。

「えっと……その、私は……ユウヤ君が、いいなら……」

「本当か？ 無理してないか？」

「うん……」一緒に遊ぶって、決めてたから……」

マフユの瞳は頼りなく揺れていたけど、それでも芯にある確かな意志のようなものは俺にも感じ取ることができた。

その覚悟は本物だ。

目を見ればわかる。

「よし、それじゃあお願いします、トツドさん！」

「うん、ありがとう。いい試合にしよう」

「こちらこそ、胸を借りるつもりでよろしくお願いします！」

フリーバトルの申請を送り合って、俺たちは戦場となる場所に向かうため、格納庫へと移動していく。

この意識が解けて再構築される感覚にはまだ慣れそうもないけど、その内何とかなることだろう。



バトルの舞台に選ばれたのは、鬱蒼と茂っている木々が立ち並ぶ森の周辺だった。

夜なのもあって、視界は悪いどころの話じゃない。

俺のストライク焰と、マフユのガンダムはいつでもどこから敵が来てもいいように背中合わせになりながら周囲を警戒し、バトルフィールドの中を進んでいた。

「そのガンダム……えっと、エアマスターだっけ？ すごい軽い感じで動くんだな」

「……えっと、うん……GNドライブを移植してるから、それと……」

「それと？」

「……この子の名前、Gーエクリプティカっていうの。ベースはエアマスターだけど……」

Gーエクリプティカ。それがマフユだけのガンダムに付けられたこの世でたった一つの名前なのだろう。

「G―エクリプティカか、覚えた！ いい名前だな！」

エクリプティカつてのがどんな意味なのかはわからないけど、ガンダムをあえて「G」に縮めるそのセンスはSEEDの劇中に登場した「G兵器」という呼び名を彷彿とさせて悪くない。

「……ありがとう。それと……来るよ……！」

「来るって……そうか！」

マフユのG―エクリプティカは俺のストライク焰より先に接近する敵をレーダーで捉えていたのだろう。

夜の闇に溶け込むようにして背後から襲いかかってきたその機体は、全体的に視認しづらい色で塗装されていた。

「なんだこいつ!？」

「ハンブラビ……！ 電撃武装を持つてるから、気をつけて……！」

『こちらの動きを気取られたか！ トッド!』

『ああ、わかってる！ 行こう、ジョー!』

エイみみたいな見た目をしてる見づらい方はハンブラビというらしい。

そのハンブラビに乗ってたダイバーが、トッドさんの名前を呼ぶなり、コックピットにはアラートが鳴り響き、俺とマフユを分断する。

「あつちはガブスレイ……どっちも変形できる機体だから、気をつけて、ユウヤ君……！」

「おうー！」

威勢良く答えたとはいえ何をつければいいのやら。

ただ、ハンブラビの方は俺じゃなくてどうやらマフユの方を狙っているらしく、背中のビームを撃ちながら、クロスレンジに飛び込もうとしていた。

「マフユが狙いか!? させるかよ！」

『悪いけど、それはこっちの台詞だよ……!』

「なんだ……っ!？」

マフユの救援に入ろうとすれば、森を隠れ蓑にしてどこかに潜んでいるトッドさんのガブスレイが、高出力のビームで俺を牽制する。

レーダーは確かに相手の位置を捉えているけど、森に紛れ込まれた

んじや分が悪い。

それに、こうしてまごついている間にも相手はマフユを追い詰めて、二対一の盤面を作ろうとしているのだろう。

俺のストライク焰も射撃武器は持つてるけど、それはあくまでクロスレンジに飛び込むための牽制用みたいなものだ。

まともに射撃戦をしようとしたところで、力負けするのは目に見えるている。

だったらこの状況をなんとかする手段は、ガブスレイが撃ってくるビームを避けながらハンブラビに詰め寄って、相手をクロスレンジで逆に叩くぐらいだ。でも。

「速ええ……！」

『そうだろう！ このハンブラビは空戦に特化するためにギリギリまで軽量化を施しているんだ！』

ジョー、というらしいダイバーは、スラスターを全開にした俺のストライク焰を容易く振り切って、そんなことを言っただけ。

エールストライカーは確かに速い。だが、餅は餅屋という言葉があるように空中戦じゃよっぽど突き抜けた機動力を持ってない限り、可変機の方が基本的に有利だ。

悔しいけどそれは認めざるをえない。

のらりくらりとビームピストルによる牽制も避けられて、ハンブラビはマフユのG―エクリプティカに肉薄する。

万事休すかと、トツドさんのガブスレイが撃ってきたビームを拳のビームシールドで跳ね返ししながら、奥歯を軋ませていた時だった。

「諦めないで、ユウヤ君……！」

「マフユ！」

「……私も頑張る、勇気を出す……だから、応えて、エクリプティカー！」

マフユがそう叫んだ瞬間、G―エクリプティカの肩を覆っていた翼のようなパーツが展開し、肩のGNドライブから放出される粒子が爆発的に増大する。

すげえ。

何をやったのかはわからないけど、俺はただその光景に、そして

さつきまでクロスレンジにまで肉薄していたハンブラビを逆に振り切つて、あつという間に距離を離れたその機動力に舌を巻いていた。「これが私の、G―エク립ティカの巡航形態……!」

『Eガンダムを参考にしたのか……!』

機動力で振り切られたジョーさんは歯噛みしながら機体をモビルスーツ形態に変えさせるが、構えたその武器は空を自在に飛び回るマフユに当たることはない。

「……これでえ……っ……!」

『うおおおおっ!』

『ジョーっ!』

巡航形態に変形したマフユのG―エク립ティカが構えたビームライフルから放たれた閃光がハンブラビに直撃し、その半身を持つていく。

凄い作り込みだ。ビームライフルは戦艦の主砲並の威力らしいけど、実際匹敵するんじゃないかってぐらい強い。

それに、マフユがここまで頑張ってくれたんだ。だったら俺も、黙って見てるわけにはいかないよなあ!

「くらええええッ!」

『うおおおおっ!?! 南無三!』

『ジョーっ! ああ、これじゃあ……!?!』

エールストライカーからビームサーベルを二本引き抜くと、スラスタを全開にして俺は、すぐさま半身を失ったハンブラビをすれ違わざまに切り裂いて、爆散させる。

これで戦況はひっくり返った。

それに焦ったのかどうかはわからないが、木々を隠れ蓑にして狙撃に徹していたトッドさんのガブスレイが、慌てて戦闘機形態に変形して、飛び出してくる。

『こつちだつて空戦性能は高めてあるんだ! ただでは負けてやるものか!』

「いいね、その闘志……! 諦めかけてた俺が情けないぜ!」

マフユに言われるまで気付かなかつたけど、俺はあの時確かに諦め

かけていた。どんな時でも冷静に、相手の心と向き合って戦うのが次元霸王流の極意だったのに、戦いの中で戦いを忘れていた。

それでも。

「当たってえ……っ……っ……！」

「次元！ 霸王流！」

マフユが思い出させてくれた。

マフユが教えてくれた。諦めは最悪の手段だと、自ら掴み取れたはずの勝利を捨てるのに等しいことだと、そう叫んでくれたんだ。

だったら、情けない俺を乗り越えて、先に進むのが筋ってやつだ。

G―エクリプティカが放ったビームライフルが、ガブスレイの持っていた長いビームライフル……フェダーインライフルとかいうらしい――を破壊し、がら空きになった胴体目掛けて俺は、ストライク焔を全力で急降下させる。

「聖槍、蹴りいいっ！」

『うわあああつ！ ごめん、ジョーっ！』

自由落下の勢いとスラスターの出力を乗せて放たれた蹴りはそれ自体が巨大な質量弾みたいなものだ。

【Battle Ended!】

がら空きのコックピットをぶち抜いて、システムが俺たちの勝利を告げる。

「やったぜマフユ、大勝利だ！」

「……うん、そうだね……ユウヤ君のおかげ……」

「何言ってるんだよ、マフユ！ 諦めないで、ってあの時言ってくれたのはお前だろ！」

その言葉があったから過ちの道に進まずに済んだ。その言葉があったから、最後まで勝利を諦めずに戦うことができた。

むしろ感謝したいのは俺の方だ。

「ありがとうな、マフユ！ 俺……諦めかけてた、ダサイことやろうとしてた」

「……ユウヤ君……」

「でも、マフユが諦めるなって言ってくれたおかげで、マフユが頑張っ

てくれたおかげで、勝てたんだ！ だから、改めてありがとうな！」
「……っ、うん……っ……！」

目尻に涙を滲ませながら、マフユは小さく頷いた。

その涙にどんな意味があるのかはまだわからないし、訊いちやいけない気がした。それでも。

それでも、マフユの涙は、悲しさじゃなくて、嬉しさから零れ落ちたものであることぐらいは、俺にもわかっていた。



「いやあ、負けちゃったな……でも、久しぶりに気持ちいい試合ができた気がするよ」

「こつちこそ、俺なんか想像もできない戦いをさせてくれて、ありがとうございます！」

「想像もできない、かあ……そう言われるとなんだか照れるな、うん。Dランクに上がったばかりだけど、俺たちも君たちみたいに頑張ってみるよ」

ジョーさんとトッドさんの試合は、確かに俺の想像を超えたものだった。

人型同士が殴り合うんじゃない、戦闘機形態に変形した相手との空中戦。それは拳法には絶対あり得ないシチュエーションで、だからこそ俺は、諦めかけてしまったのかもしれない。

「グッドゲーム、ユウヤ君。グッドゲーム、マフユちゃん。機会があれば再戦よろしく頼むよ」

「こつちこそ、ええと……グッドゲームです、ジョーさん、トッドさん！」

「……はい……グッドゲーム、です……」

どこことなく憑物が落ちたかのように晴々とした表情で、ジョーさんとトッドさんはセントラル・ロビーの雑踏に紛れて消えていく。

グッドゲーム。惜しみなくいい試合だったと言い切れるだけのことはできた俺の胸の内側も、なんだか透き通ったような気分でした。

いだった。

「ガン普拉バトル……師匠が言つてた通り、奥が深いぜ」

「……うん……すごく……すごく、深い」

「だから俺はもっと強くなりたい！ もっとわくわくする戦いをしてみたいんだ！」

想像力と想像力がぶつかり合う、その先の世界。俺が今日垣間見たのはあくまでもその一端に過ぎないのだから。

拳を固める俺に、マフユは小さく苦笑したかと思えば少しだけ肩を落として、「……そうだね」と、短く答えを返す。

GBNは深く、広い。父さんの、師匠の言葉が間違いじゃなかったことを噛み締めながら、俺は次なる戦いの予感に、気付けばぐつと拳を固めていた。

Ep. 06 「僕らは闇鍋の中で」

「それでね、ガロードとティファはニュータイプって言葉に縛られないで、自分自身の人生を生きていくの……」

「マジかー、見る時ははらしたけど、やっぱりハッピーエンドが一番だよな！」

トッドさんとジョーさんのバトルからしばらく、俺はマフユの家に昼飯を届けるついでに彼女からガンダムについて教えてもらおう、というのがすっかり日課になっていた。

GBNでもミツシオンと一緒にこなしたりしているし、やっぱりこうして語り合える相手がいるってのはいいことだな、やっぱり。

チナツもガンダムには詳しいけど、あいつは……悪気はないんだろうけど話すと長くなるから、まあなんだ、説明って意味ではどっちかというと穏やかなマフユの方がわかりやすいかな。

そんなことを考えてると次会った時に睨まれそうなものだ。あいつの地獄耳っぷりは小さい頃から伊達じゃなかった。

大画面に映し出されているモニターがエンドロールを流し終わると、映し出されたのはボロボロになったガンダムダブルエックスの姿。

やっぱりこう、ボロボロになった主役機からしか、役目を終えて主人公を送り出したガンダムからしか撮取できないものってあるよな。しみじみそう感じる。

「……えつとね、これ……ガンダムDXのガンプラ……」

「へー、よくできてるんだな……触っても大丈夫か？」

「う、うん……！ ユウヤ君なら、いいよ……」

「サンキュー、マフユ！ うわすげえ、ちゃんとツインサテライトキャノンも展開できるんだ！」

ガンダムについてはまだまだわからないことだっただけ多けど、マフユに教えてもらったおかげである程度はわかるようになってきた。

マイクロウェーブを月から受信してぶっ放すガンダムXとDXが持っている最終兵器、それがこのサテライトキャノンだ。

劇中だと過ちの象徴みたいに描かれてて、ガロードもそれを踏まえ
てちゃんと使いどころを考えて撃ってただけど、ガンプラとなれ
ば、GBNとなればサテライトキャノンを使ってみたい！ って思う
ダイバーは多いはずだ。

かくいう俺も画面の中で見たガンダムDXやガンダムXの活躍を
見て、ストライク焔にサテライトキャノンを背負わせたらどうなるか
な、とかちよつと考えてみたりしている。

「ありがとな、マフユ。GBNでもやっぱりサテライトキャノンとか、
ツインバスターライフルって強力な武器だったりするの？」

俺は触らせてもらっていたガンダムDXをマフユに手渡しながら、
そんなことをふと問いかけていた。

俺は最初から牽制になる武器と徒手空拳で戦うことを決めてたし、
それに後悔はない。

けど、あれだけ派手にぶつ放した必殺技ともいえる武器はやっぱり
ゲームの中でも必殺級なのかと、ちよつと気になるところはある。

「ええ、と……作り込みに、よる、かな……」

「作り込み」

「うん……ちゃんと合わせ目を消したり色分けをしたり、そこから少
し進んで色んな塗装の技を使ってみたり、ディテールアップしたり
……そんな感じでガンプラをカスタマイズしてあげると、原作並みに
なるんじゃないかな……」

「うーん、わからん……」

辛うじて合わせ目消しと塗装はわかったけど、そこから先はちんぷ
かんぷんだ。

ディテールアップって具体的にどうするんだとか何するんだとか、
色々訊きたいことはあるけど、マフユにあんまり負担をかけても良く
ない。

それに、千里の道も一歩からってやつだ。

今はまだ色々素人な俺だからこそ、一足飛びに階段を上ろうとせ
ずに、地道に積み重ねていくことが重要なんだ……って、父さんは、師
匠はきつとそう言うんだろうな。

「…………どうしたの、ユウヤ君？ 私…………何か、変なこと言っちゃった…………？」

「ああ、違うんだ。なんかさ、上を見たら果てしなくて…………わくわくするけど、笑っちゃうぐらい高いんだなって」

「…………うん…………上は、凄く高い、よ…………」

俺はマフユの言葉に、チナツから聞いたGBNの頂点に立つ存在。全国ランキング1位の座を第一回GBNチャンピオンシップから一度も譲ったことがないらしい、生きる伝説の話の思い出す。

クジヨウ・キョウヤ。会ったことはないけど、あのマギーさんよりもずっと強いその人と、いずれは戦ってみたい。

「でもま、少しずつだよな！」

「…………うん…………そう、だね…………」

でもそれには早すぎる。

正直な話、マスドライバーを撃破したことで俺は少し調子に乗ったのかも知れない。

機体を今思う通りに動かせても、トッドさんとジョーさんの連携に俺は振り回されっぱなしで、マフユがいなければ確実に負けていた。

だからこそ、油断せずに、慢心せずに戦い一つ一つと向き合って自分の心を鍛えていく——次元霸王流の極意、その一つを、改めて深く胸へと刻みつける。

「もうこんな時間か、ガンダム見てるとあつという間だな！」

「う、うん…………そう、だね…………その…………えっと、ユウヤ、君…………」

「じゃあなマフユ！ また来週と、今日のGBNでもよろしくな！」

何事かをもにもによと呟いていたマフユにひらひらと手を振りながら、俺は空になったザツクを背負って家路に着く。

週末は友達の家遊びに行っている、とは両親にちゃんと報告してるけど、あんまり遅くなるとどやされかねないからだ。

稽古もする。バイトもする。そしてダイバーとして全力で遊ぶ。

我ながらハードスケジュールだとは思うけど、今のところそれができてるんだから問題はないはずだ。

自転車を飛ばして、一目散に家路へ。

玄関先までわざわざ出てきてくれて見送ってくれたマフユに手を振り返し、沈む太陽に向けて俺はペダルを漕いだ。



今日も諸々を済ませてセントラル・ロビーにダイブすれば、がやがやと雑談に興じているダイバーたちの姿が目映る。

曰く、GBNに怪物が現れたとか、誰も見たことのないミッションがあるだとか、そんな眉唾物の井戸端会議を聞いているのも悪くはない。

けど、約束は守らなきゃいけないものだ。

いつも同じところにいるから、そこを待ち合わせ場所にしてしまおう、という提案通りにロビーの隅っこで、マフユは壁にもたれかかっていた。

「ごめんマフユ、待ったか？」

「ううん、大丈夫……今日は、その……どんなミッションを受けるの……？」

討伐ミッション。連戦ミッション。対大型ミッション。無双ミッション。

一人でもクリアできなくはないEランクのミッション一覧をウィンドウに浮かべて、マフユは小首を傾げながら俺に問いかけてくる。

「んー……無双ミッションはこのランクだとほとんど棒立ちの敵を倒すだけだし、連戦ミッションも時間かかるし……そうなると対大型ミッションが無難なのか？」

「そう、だね……その……」

「どうした、マフユ？」

「あ、うん……その、ユウヤ君がどこを目指してるのか、それが気になって……」

何も律儀に全部のミッションを埋める必要はない。達成率はアチーブメントに影響してこそいるものの、それを埋めるのは自己満足の領域だ。

GBNは仮想世界でありながら、ガンプラバトルをする場でもある。

そう考えると、俺がしたいことは。

「んー……そうなることやっぱバトルがしたいな、俺は」

「……ユウヤ君なら、そう言うって思ってた」

「そっか？ まあでも、基本積み重ねないでバトルするってのも師匠の教えを守らないみたいでなんか引つかかるんだよなあ……」

自分でもある程度はこのゲームについて調べてみたが、ダイバークCまでは自分の型を探すための時間みたいなものだとか聞く。

そして、本当のGBNはダイバークCから始まるのだと。

ちやうど、今のマフユがCランクダイバーだから、最低限マフユにちやんとついていって連携するだけの力を手にしたい、つてのが正直なところだった。

「……ユウヤ君は、師匠さんのこと……大事にしてるんだね……」

「ああ、俺の父さんでもあるからな」

「……そっか……」

「なんか変なこと言っちゃったか？」

「……ううん、なんでもない。その……対人戦なら、掲示板とかでフリーバトルの募集をかけるのもありだけど……こういうのも、ある、よ……？」

マフユは少し表情に暗い影を落とすと、引きつった笑みを浮かべながら、何かを誤魔化すように表示したウィンドウを俺に投げ渡す。

そこに書いてあった文字列は、「シャフランダム・ロワイヤル」なるものだった。

「シャフランダム……？」

「えっと……フォースを組めないダイバーのために、ランダムで抽選されたダイバー同士が五対五になって、どっちかが全滅するまで戦うの……一応、最初に私とユウヤ君がパーティーとして参加を申請すれば、チームがばらけなくて済む、よ……？」

なるほど。よくわからん。

マフユと一緒にエントリーすれば、ランダムに振り分けられるチー

ムの中でもバラけず一緒になれるってことなんだろう、多分。
でもどうしてランダム性が売りなはずなのに、そんな仕様になつて
るんだか。

「……えっと、前はね、完全にランダムだったんだけど……不評で
……」

「なるほどなー」

ユーザーの声ってやつか。

その結果シヤフランダム・ロワイヤルとやらがどう改善されて、ど
んな風に受け止められているかは知らないけど、マフユとチームがバ
ラけないってんなら好都合だ。

「俺、これやってみたい！ マフユさえ良ければだけもさ、一緒に受け
ないか？」

「……うん……ユウヤ君が言うなら、いいよ……」

「本当か!？」

「……だって、その……ユウヤ君は、私の……たった一人の、フレンド
だから……」

ってことは今までソロでやってたのか、マフユは。

それでCランクまで上がってるんだから大したもんだと、心の底か
らそう思う。

自分では謙遜してるけど、相当凄いことをやってるし、相当凄いガ
ンプラを作ってるんだよな、マフユは。

嘘偽りなく、思った通りのことをそうやって口に出してみれば、マ
フユの頬は茹で蛸みたいに真っ赤になって、耳まで紅に染まってい
た。

「……あ、ありがとう……ユウヤ君……でも、ちよつと……恥ずかしい
……」

「ごめん、でも本気ですげーと思ったからさ」

チナツのやつも一人でやってたって話だけど、チナツはチナツでマ
フユはマフユだ。それを比べることに意味なんかない。

そして、比べるなら過去の俺だ。

驕るつもりは全くないけど、ガンプラバトルの腕ならFランクだっ

た頃よりも確実に上達しているだろう。

だから隙がないとは言わない。俺はまだまだ未熟千万なのだから。でも、未熟だからこそ油断なく戦える。

そういうものだと思っていて俺はマフユとパーティー申請を組むと、シヤフランダム・ロワイヤルなる闇鍋の中に飛び込んでいくのだった。



『フハハハハ！ 俺のスーパーシユペールハイペリオンは無敵だア！』

「ヌヴオオオオ!!!」

「ザクラアアアン!!!」

味方に引いたガナーザクウオーリアが、敵の着地を狙って放ったオルトロスの一撃が吸収、再構築されてそのままガナーザクのコックピットに突き刺さった。

現在の状況、四対五。あの金ピカのハイペリオンが持っているのはおそらく「ヤタノカガミ」と呼ばれるビームを吸収してから反射する特殊装甲なのだろう。

ザクランと呼ばれたダイバーが爆散すると、仇を取ってやるとばかりにロービジカラーに塗装されたセイバーガンダムが、敵陣の真正面に陣取っている金ピカハイペリオンにビームサーベルを振りかぶって突撃する。

「ダメだ！ えっと……！」

「ナスランだ！ すまないが、ザクランをやられて黙っているわけにはいかない！ このハイペリオンは俺が倒す！」

ヤタノカガミじゃ、ビームサーベルまでは反射できまいとばかりに切り掛かったナスランさんの作戦はある意味正解だったのかもしれない。

ただしそれは、相手のベースになった機体がハイペリオンじゃなければの話だが。

機体を包み込むように展開されたバリアが、セイバーガンダムのビームサーベルを弾き返して怯ませる。

そして、突出したナスランさんが姿勢を崩したのを確認して、森の中に潜んでいたジム・スナイパー2やアイザックといった機体たちがロービジのセイバーガンダムに火線を集中させていく。

「そんなバカな……ヌヴオオオオ!!」

『フハハハハ！ 間抜けめ！ このスーパーシユペールハイペリオンはアルミューレ・リュミエールとヤタノカガミの二重防御！ 破れるものなら破ってみろ！』

この状況はまずい。

ナスランさんとザクランさんが墜とされたことで、こっちの氣勢は十分に削げたと判断したのか、金ピカハイペリオンの背後で控えていたドライセンとドワツジが、バズーカを構えて俺とマフユにロツクを向けてくる。

「クソツ、数の上じやこっちが不利か……でもな！」

「……うん……！ 私らが敵を攪乱するから、ユウヤ君はその隙を！」

「了解！」

巡航形態に機体を変形させたマフユは、ジャイアント・バズによる一撃をバルカンで叩き落としつつ、腰のユニットからビームサーベルを抜いてドライセンに突撃していく。

もう一人、ペイルライダーだったか、そんな感じの機体に乗っているダイバーは怯えるばかりだったが、この状況じゃ生き残ってくれてるだけでありがたい。

『突出したな？ バカめ！ このスーパーシユペールスーパーハイペリオンの真髄は防御力だけじゃない！ フォルファントリーに焼かれてくたばれええッ!!』

マフユは敵陣のど真ん中に割って入ったことで、ドライセンとドワツジだけではなく、アイザックとジム・スナイパーII、そして金ピカハイペリオンからも標的にされていた。

だが、それも織り込み済みのだろう。

俺はマフユを信じてエールストライカーのスラスタに点火、バリ

アを解いた金ピカハイペリオンに、ビームピストルによる牽制を放ちながら肉薄する。

『フハハハハ！ だからそんなビームなど効かんと云っている！』

「ああ、そうかい……じゃあこいつはどうだ！ 次元霸王流……流星螺旋拳！」

相手がその自慢の防御力にご満悦だったことが、あるいは命運を分けたのかもしれない。

慌ててアイザックがレドームを稼働させ、俺たち陣営の通信を妨害してくるがもう遅い。

士氣の中心になっていいる頭を叩くことで、続く連中の氣勢を削ぐ。

師匠からの教えを胸に、俺は回転させたストライク焰の拳を、躊躇うことなく金ピカハイペリオンの胴体に全力で打ち込んだ。

『何いいいいッ!? バカな、素手のどこにこんな威力が……ッ!』

「次元霸王流……舐めてもらっちゃ困るぜ！」

『おのれ！ 俺のスーパーシユペールスーペルオリハイペリオンが……ぬわあああッ!!!』

やけにうるさい断末魔を残して、コックピットを潰された金ピカのハイペリオンが無事に爆散する。

その間敵の矢面に立っていたマフユのGーエクリプティカも大分消耗してはいたものの、四対一という過酷な状況を背負ってくれたにしてはかなりもった方だろう。

『そんな！ ホッシーがやられたぞ！』

『あいついつもメタられて死んでんな……』

『冷静に観察してる場合じゃない、俺たちも……うわあああつ!』

呆然としていたドワツジに膝蹴りを叩き込んで、踵落としてメインカメラを粉碎。そしてビームサーベルをコックピットに突き立てることでその手向けとする。

司令塔というよりはモチベーションを引き上げるタイプのリーダーを失った相手のチームは即席ということもあってその後は見事に精彩を欠き、気付けば俺とマフユの連携、そしてペイルライダーに乗っている初心者への援護射撃によって壊滅状態に追い込まれていた。

『バカな……あれだけ有利だったはずの俺たちが……』

「こいつを墜とさない限り勝負の行方はまだ決まらねえ……行くぜ！」

『くっ……ならばせめて仲間たちに報いるためにも、一太刀ぐらいは！』

唯一残されたドライセンはヒートサーベルを引き抜いて、馬鹿正直に俺を狙って直進してくる。

ここでマフユやあの初心者が射撃の一発でも撃っていれば、それでゲームエンドになるのだろう。

それでも、敵は俺を最後の相手に所望したわけだ。だったら、それに付き合ってやらないわけにはいかねえよなあ！

「居合は見様見真似だけど……！」

『チエエエエストオオオ!!』

「やってやるぜッ！ 行くぞ、ストライク焰！」

ヒートサーベルの切っ先がメインモニターを掠める刹那、俺はその一瞬に全てをかけるようにバックパックから引き抜いたビームサーベルで、向かってくるドライセンをX字に切り裂いていた。

『見事だ……！』

「こつちこそ、いい戦いだっぜ！ ええと……グッドゲーム！」

『グッドゲーム』

【Battle Ended!】

それだけを別れの挨拶として、機械音声が告げる勝利のアナウンスの余韻に浸る。

最初に二機墜とされた時はどうしたものかと焦ったけど、案外どうにでもなるものだ。

それはもちろん相手の金ピカハイペリオンが油断していたから、と
いうのも大きい。でも。

「やったぜマフユ……俺たちの勝ちだ！」

「……うん、ユウヤ君……」

勝ちは勝ちだ。祝杯を上げるように、ボロボロになったG―エクリプティカを助け起こすと俺は、GNの星空を見上げるのだった。

Ep. 07 「ハイリスク・ハイリターン」

やっぱりというかなんというか、シャフランダム・ロワイヤルで得られたダイバーポイントとミッションで得られたダイバーポイントの数字には大きな開きがあった。

あの時は戦いで気付かなかったけど、相手に格上がいたのも大きいかもしれない。

ただ、得られるものが多いということは失うものもまた多いということだ。

「ハイリスクハイリターンか……」

「何ぶつぶつ呟いてんのよ」

その翌日。食い終わった弁当が眠気を加速させる昼休み、声がどこから降ってきたかと思つて俯いていた顔を上げれば、そこにいたのは今日も飽きずに髪の毛をデカイツインテールに結わえているチナツだった。

何と言われても、大したことじゃない。

「ダイバーポイントの話だよ、ミッションよりもやっぱり対人戦の方が多く貰えるんだなって」

「そりや当たり前じゃない」

——つていうか、ミッションだけでランク上げするとかただの苦行よ？

チナツは呆れたように溜息をつく。

ちらりと唇の端から覗く、鋭く尖った八重歯は今日も健在で、なんだか大型犬を見ているような気分になる。

「何見てんのよ」

「いや、別に……なあ、チナツ。ミッションだけでCランクに上がるつてどれくらいかかるんだ？」

「ミッションだけでC？ アンタ本格的に苦行でも始めたいわけ？」

「だよなあ……」

GBNはCランクからが一人前らしいが、一人前になるのに楽な道なんてものは、どこであれなんであれ用意されていないのが世の常

だ。

常に小さいことを積み重ねていくか、リスクとリターンを天秤にかけた上でチャンスを掴み取りに行くか。

それなら、ある程度操作の基礎は覚えてきたし、対人戦で腕を磨くのも悪くはないのかもしれない。

「ところでアンタどこまで行ったの？」

「Eだけど」

「ふーん……ま、アタシならCまで連れてくなんてお茶の子さいさいってやつだけど……ア、アンタがどうしてもっていうならその……キャリアーしてやつてもいいわよ？」

キャリアー。聞き慣れない単語だけど、話の流れから察するに俺を手っ取り早くCランクに上げるためにチナツが手伝ってくれるとか、そういう話なのだろう。

確かにその申し出はありがたいかもしれない。でも。

「悪りいけど、パスで」

「はあ!?.. なんでよ!？」

「なんつーか、こう……チナツって確かAランクだろ? そこまで行ったやつに連れてつてもらったんじゃ、一人前にはなれない気がしてさ」

マフユと一緒に遊んでいるのはどうなのかという話だけど、なんといかまあ、あれだ。

マフユにキャリアーしてもらってるというよりは、一緒に遊んでるだけって感じだから、要は気持ちの問題なのかもしれない。

師匠曰く、強い者からヒントを得ることや助けをもらうことは決して恥ずかしいことではないらしいけど、一応のメンツというかなんとか、俺にだってそういうこだわりの一つや二つ、存在しているのだ。

「この修行バカ、もう知らないわよ」

「いや、気持ちはマジでありがたいんだけどさ」

「……ふんっ。そんなお世辞言われたって嬉しくないんだから」

どうなら本格的に拗ねちまったみたいだ。

キャリアーじゃなくて一緒に遊ぼう、ぐらゐの提案だったらこつちとしても吝かじやないんだけど、こうもあからさまにキャリアーしてやるからありがたく思え、みたいにやられると身構えてしまうのも仕方ない。

臍を曲げて教室を出て行ったチナツの背中を見送りながら、俺は再び机に突っ伏す。

でも、気を悪くしちゃったんだし、チナツにはあとで謝っておくか。などと考えている間にも上空を元気に旋回している睡魔に負けた俺は、五時限目の予鈴を聞き届けることなく眠りの淵に落ちてしまった。



「マフユ、右行ったぞ！」

「……うん、ユウヤ君……！」

苦行と呼ばれるほどの試行回数を重ねるか、それともリスクとリターンを天秤にかけてチャンスを掴み取るか。

その二択に対して俺が下した結論は後者の方だった。

そろそろストライク焰を動かすのにも慣れてきたし、対人戦で経験値を積むのも兼ねて、格上と当たる可能性がデカイシャフランダム・ロワイヤルに潜り続ける。

マフユには負担をかけてしまっただけで心配だったけど、それでも健気についてきてくれるんだから、ガンダムのことを教えてくれたのも含めて本当に頭が上がらない。

今度菓子折りの一つでも持って行った方がいいんだろうか。

薄らぼんやりとそんなことを考えてしまった、刹那。

『フハハハハ！ 甘い、甘いぞ少年！』

「抜かったか！」

戦いの中で戦いを忘れてしまったことに反省しつつも思考回路を二秒で切り替えて、俺は懐に飛び込んでくる、トリコロールカラーのガンダムシユピーゲルの一撃を、ビームシールドを展開することので

なす。

シュバルツ・ブルーチーズというらしい、原作のファイターをリスペクトした格好のダイバーは、その選択肢は悪手だとばかりに宙返りをすると、手にしていたビームマシンガンを放り捨て、どこからか取り出したビームネットをストライク焔に被せてきた。

『フハハハハ！ これでは動けまい！ 今こそ我が必殺の……！』
「そっちこそ、詰めが甘いつてんだよー！」

食らっちゃまった落ち度は俺のものだ。

だが、ビームネットを被せられたってだけなら、それだけならストライク焔の力でどうとでもなる。

パルマ・フィオキーナを展開してビームネットを強引に引きちぎると、俺はスラスターを全開にして跳躍、大技の構えを取ったガンダム 슈퍼ピーゲルの懐に、そのままパルマを叩き込む。

『なんとおっ!? やるな、少年……！』

「あんたこそな……！」

でも、大技の構えを咄嗟に解いてコックピットへの直撃を避けた辺り、このブルーチーズとかいうダイバーは相当できる方らしい。

ボクシングの構えをとって、ジャブでワンツー。しかし、それにも対応してガードと攻撃を巧みに切り替える 슈퍼ピーゲルは、格闘方面でも手練れのようだ。

——だけど。

「あんまりストライクに構いすぎたなー！」

『なんとッ！ このシュバルツ・ブルーチーズ、一生の不覚ッ……！』

この戦いはタイマンじゃなくて五対五だ。

確かにシュバルツ・ブルーチーズさんの技量は俺も舌を巻くものがあつたかもしれない。

それでも、目の前の獲物に気を取られて、レーダーを見ていなかったのは、多人数が入り混じる戦いじゃ致命的だ。

後衛として陣取っていたE×Sガンダムのビームスマートガンから放たれた閃光が、ガンダムスーパーピーゲルの半身を溶かす。

そして、その隙を見計らって俺は今度こそパルマ・フィオキーナを

起動した貫手で、シユピーゲルのコックピットをぶち抜いていた。

『フツ……確か君は、ユウヤといったか』

「ああ、ブルーチーズさん」

『今度相見えた時は再び拳で語り合おうぞーさらばだ！』

マシンガン持ってた割にはやたらと潔い辞世の句を遺して、トリコロールのガンダムシユピーゲルが爆散する。

これで戦況は四対三。こっちが四であっちが三だから、盤面としては有利に持ち込めた——そのつもりだった。

「なんだ、うわあああつ！」

「リョールさん！」

俺を援護してくれたE x—Sガンダムのダイバー、リョールさんが断末魔を上げる。

恐る恐る背後を振り返ってみれば、そこにあっただのは、ビームサーベルで串刺しにされ、コックピットをぶち抜かれていたE x—Sガンダムの姿だった。

『ふふん……背後にも警戒しないからこうなるのよ！』

「ミラージユコロイドか……！」

「ユウヤ君！」

E x—Sガンダムを仕留めた犯人であるところのネブラブリッツガンダムは再びミラージユコロイドで姿を消して、じりじりとストライク焔との距離を詰めてくる。

マフユの方は空中でカオスガンダムに釘付けにされているし、もう一人のジェスタ・キャノンも敵の後衛として陣取っているザメルを引き付けてくれている都合、あのネブラブリッツの相手をするのは否が応でも俺ということになる。

ミラージユコロイドは厄介な武装だ。

全身を透明化させることができるなんて聞いた時はそんなのありかよ、と思ったもんだけど、それでも対策がないというわけじゃない。

俺は地面に落ちていたビームピストルを拾い上げると、おおよその「あたり」をつけてトリガーを引き絞った。

『しまった、牽制に！』

「へっ、バツチリ見えたぜ……今の機動！」

だが、無敵の兵器なんてものは基本的にガンダム世界には存在しないし、存在していたとしてもGBNがゲームである以上、バランスの都合でその最強ぶりが完全に再現されることはほぼないといってもいい。

ミラージユコロイドの弱点。

それはひとえに、スラストターの軌道まではごまかせないことや、地面を踏み締めて歩いていけば巻き上がる土煙までもが透明になるわけじゃないということに尽きる。

それでも、割り出せるのはあくまでおおよその位置だ。

そこから相手がどう動いてくるのか、距離を詰めてくるのか、遮蔽物に隠れることで静止して一旦状況のリセットを図るのかはわからない。

ただ、あのネブラブリッツがE-X-Sガンダムを撃破したやり口から見れば、得意としているのは背後からの奇襲と見て間違いないはずだ。

だったら、やれる可能性はある。

ビームピストルを両手に構えたまま微かに屈み込んで、俺はマフユがカオスガンダムを、ジェスタ・キャノンがザメルを抑え込んでくれていることを信じて、「待ち」の構えを取った。

「来るなら来やがれ……！ 来い……っ！」

最初から仕掛けてくることは期待していない。この程度の挑発に乗るような相手なら、もつとわかりやすい攻撃を仕掛けてくるはずだからだ。

そして、その予感当たっていた。

虚空から突如として現れたランサーダートが、ストライク焰のコックピットを目掛けて飛来する。

だが、これは撒き餌だろう。

肩や太腿にランサーダートが突き刺さることを覚悟で俺は、そのまま姿勢を維持してコックピットへの直撃弾だけを頭部バルカンで叩き落とす。

——ビンゴだ。

ランサーダートに少し遅れて、闇から溶け出すかのように姿を現したネブラブリッツは、トリケロスからビームサーベルを展開し、全力で突っ込んでくる。

『まさか、読まれて……っ!?』

「右手は動く……だったらあッ！」

ビームピストルの下部からビームの刃を最大出力で発振し、俺は胴薙ぎにネブラブリッツのコックピットを切り裂いていた。

だが、相手が突き出してきたビームサーベルも頭部にその先端が突き刺さって、イエローコーションがコックピットの中に鳴り響く。

「使えねーのは左腕とメインカメラの半分……まだやれるな、ストライク焰！」

ネブラブリッツの沈黙を確認すると、俺はビームピストルを携えたまま跳躍し、マフユのGーエクリプティカが引き付けてくれていたカオスガンダムの背後から奇襲をかける。

「でやあああつー！」

『サヴァリーがやられたか！ だが！』

それでも反応が間に合っている辺りは流石としかいいようがない。ビームピストルの下部から発振された刃を爪先のビームサーベルで受け止めて、カオスガンダムは余力を失っていたストライク焰を強引に振り解く。

『悪いがこれでチェックメイトだ！』

「……っ！ ユウヤ君は……！」

『何っ……!!?』

「マフユ!」

「……ユウヤ君は、やらせないんだからあ……っ！」

機動兵装ポッドが放ったビームを両肩のGNドライブに受けながらも、マフユはノーガードでカオスガンダムに両腕を失ったGーエクリプティカの機体を突っ込ませる。

その結果、相手はライフルも取り落として大きくバランスを欠いた状態で錐揉み回転、地面に墜落しそうになっていた。

これはチャンスだ。

『ノーガードで突っ込んできたところでえっ!』

マニュアルで動かしているのであろう機動兵装ポッドが、G―エク
リプティカのコックピットに照準を定める。

「きやあつ……!」

マフユも離脱を試みたのだろうが、中心を撃ち抜かれたGNドライ
ヴは黒煙を上げるだけで、そこから緑色の粒子を吐き出すことはな
い。

だが、それでも。

「マフユが身体張ってチャンスを作ってくれたんだ!　ここでやらな
きや男が廃る!」

俺が体勢を立て直すだけの時間は十分に稼げていた。

錐揉み回転していたカオスガンダムに狙いを定め、パルマ・フィオ
キーナを起動。そして、今できる全力を叩き込むために、エールスト
ライカーのスラスターを全開にする。

「次元霸王流!　疾風突き!」

今は速く。何よりも疾く。ただ、風のように!

音を置き去りにして、ビームを纏った拳がカオスガンダムのコック
ピットを一撃で貫く。

パルマ・フィオキーナのビームを纏っていないければ、恐らくVPS
装甲で防がれていたかもしれない。

だが、それは今、たればの話だ。

『不覚を取ったか……ザミー、あとは頼んだぜ……』

「はあつ……はあつ……!」

どうにかカオスガンダムを撃破して戦力比は三対一まで持ちこめ
ていたが、マフユは実質戦闘不能で、俺のストライク焰もほとんど中
破状態。

ジェスタ・キャノンは頑張ってくれていたようだが、流石に重装甲
のザメルを相手にタイマンを張るのは分が悪かったらしい。

長い砲身をハンマーのように叩きつけられ、ジェスタ・キャノンが
縦にひしゃげて潰れていく。

「……………いつはピンチだな……………」

「……………っ、はい……………」

レーダーからジェスタ・キャノンの反応は消失。ザメルは中破状態だがその装甲はほとんど健在という始末だ。

幸いなのは砲身を犠牲にしてくれたことぐらいだろうか。無機質なモノアイがぎよろりとこちらを向く。

「やれるか、マフユ？」

「……………その、一つだけ……………お願い、があります……………」

「なんだ？」

「……………その。支えてください……………私の腰を、G―エクリプティカを……………！」

「おうよ！」

ザメルに備え付けられたミサイルランチャーがその射程に俺とマフユを捉えて、発射された。

着弾すれば大破は免れないだろう。

そうなったらあとは俺たちの負けだ。

——だとしても。

「こっちは最初っから負けるつもりでやっちゃいねえんだよ！ マフユ！」

「……………は、はい……………っ！ お願い、ヴェスバーっ！」

G―エクリプティカのサイドアーマーとして装着されていたV2アサルトガンダムのヴェスバーが、ミサイルの発射とほぼ同時に火を噴いた。

極限まで出力を絞り込んで、貫通力に特化したビームは、ザメルの巨体——そのコックピットを確実に照星へと収めて、撃ち放たれる。

ここまで来たら、あとはお祈りだ。

人事は尽くした。できることは全部やった。だったらあとは、天命を待つしかない。

祈るように、通信ウィンドウに映ったマフユが目蓋を閉じて、眦に涙を滲ませる。

俺はただ、ミサイルと、光条の行方を見届けようと刮目する。

果たして、勝利の女神はどっちの頬つぺたにキスをしてくれるのか

【Battle Ended!】

爆音と硝煙が吹き荒れる中、戦闘の終了を告げる機械音声が無機質に鳴り響く。

コックピットの中ではレッドアラートがやかましく瞬いていたが、それでも。

【Winner:Your team!】

最後に笑ったのは、俺たちだったようだ。

通信ウィンドウ越しにマフユが感涙に口元を覆い、俺もまた、小さく拳を固めてガッツポーズ。

「やったな、マフユ……!」

「はい……はいっ……! ユウヤ君が、いてくれたから……!」

「マフユがいてくれたから……!」

——勝てた。

同じ言葉を呟いて、俺たちは一頻り笑っていた。

ダイバーランクがEからDに上がったことも忘れて、ただこの戦いを生き抜いた喜びを分かち合いながら、囁み締めていたのだ。

Ep. 08 「お怒りおてんばお姫様」

GBNでダイバーランクがDまで上がるとどうなる？

答えは簡単、フォースが組める……らしい。

らしいというのは昨日、シャフランダムでの激戦で疲れ切つてランクが上がったことすら忘れてて、今朝方慌てて調べたからあやふやになっているところだ。

「フォースかあ、フォースなあ……」

母さん謹製の朝食を胃袋に収めたせい朝の眠気がぶり返してきて、俺は欠伸を噛み殺すので精一杯だった。

それはともかく、フォースっていうのはいわゆる他のVRMMOにあるようなギルドとかクランとか、そういうやつのことらしい。

フォースを組まないメリットはそんなにない。なんなら一人でもフォース自体は作れるからぼっちフォースでもいいから作っておけ、とか攻略サイトには要約するとそんなことも書いてあった。

要するに一人前の一步手前、初心者卒業した半人前がDランクつてことになるのかもしれないな。

「つつつても、戦つてたのがほとんど格上だったからマジで実感ねえんだよな……」

シャフランダム・ロワイヤルは闇鍋の底と恐れられていることもあって、基本的にはマッチングにダイバーランクは勘案されているものの、初心者層からは敬遠されている。

だから必然的にあの魔境に潜るのは上級者がほとんど、ということになってしまふのだ。

Eランクに上がりたての俺を相手にBランクとかCランクが寄つてたかつて押し寄せてくるもんだから、いい修行にはなつたけど、あんまり心臓には良くないつてのが最終的な結論だった。

幸いマフユとパーティー組んでたし、引いた味方もちゃんと頑張ってくれたからよかつたけど、味方ガチャとか呼ばれてるだけあって、そういう事故もあるそうだ。

まあそんなことに出くわさなかっただけ運が良かったと思つてお

こう。

しかし、それにしたってフォースか。

組んだ方が得だとはわかってるけど、現状組む理由があんまりないんだよな。

マフユと遊ぶだけならパーティー申請だけで現状事足りてるし、なら別に急いで作る必要もないんじゃないかな、なんてことを考えていた時だった。

ちようど薄らぼんやりしながら隣にあるチナツの家を通り過ぎた辺りで、制服の襟首を掴まれる感覚がぼやぼやとした眠気を吹き飛ばして喉仏が痛みを訴える。

「つてえ、何しやが……」

これで見ず知らずの誰かがやってきたんなら喧嘩の一つでも売られたんだと思うことにしたのだが、振り返ってその下手人の顔を拝んでみれば、それはもう眩しいくらいに笑顔を浮かべたコウサカ・チナツその人だった。

「アンタ……GBNは一人でやるんじゃないよなかつたの……?」

「痛えな……藪から棒になんだよ、急に?」

「とぼけるんじゃないわよ!」

とぼけるも何も一人でGBNをやってるとは一言も言っていないし、あれか? キャリートを断った件でキレてるのか?

でもそれについては謝ったはずだし、と真面目にチナツがここまでブチ切れてる理由を考えてみたが、まるで出てこない。

「勘弁してくれよチナツ、キャリーの件ならマジで気持ちにはありがたかつたんだ」

「それとこれとは関係ないわよ! アンタ、何知らない子と一緒にGBNやってんのよ!」

「知らない子って……マフユのことか?」

「マフユだかマナツだか知らないけど、アタシが散々誘ってもやんなかった癖にその子とやるのはいいってこと!」

あー、うん、なんだ。

率直にいつてよくわからん。でも、チナツがこれだけキレ散らかし

てるってことは、マフユと一緒に遊んでたのはこいつの中では一線を超える行為だったらしい。

いや、そんなこと言われても正直困るんだけど。

「大体どこで知ったんだよ、そんなこと」

「そんなことじゃないわよ！ 昨日の夜にログインしてみたら、ライブモニターにデカデカとアンタとそのマフユって子が映ってたんだから！」

「そーいやセントラル・ロビーにはリプレイや今やってる試合を映すためのモニターがあるんだったか。」

それで昨日、俺とマフユがシャフランダムに潜っていたことがチナツにバレた……いや、隠してた訳じゃないんだからバレたってことはないんだろが、筒抜けになっていたということらしい。

瞋に涙を浮かべてぷるぷると怒りに震えているチナツは怒髪天を衝くといった勢いだ。

それでもこれに関して俺はともかくとしても、マフユは悪くないだろう。

フレンドと一緒にゲームをやるなんて、そんなに珍しいことでもない。なんなら別に、キャリアとか抜きと一緒に遊びたいってだけならチナツとGBNをプレイするのだって吝かじゃない。

でもきつと、そういう話じゃないだろうな。

感情が良くも悪くも表に出やすいのがチナツという人間のいいところであり悪いところでもある。

少し怒りっぽいのもそう。チナツと喧嘩するのは久々だけど、こういう時はいつも、言葉で語り合うよりもわかりやすいことで折り合いをつけていたはずだ。

「わかったよ、チナツ」

「何が」

「……GBNで決着つけようぜ。マフユのこととか、俺のこととか……説明しても今のお前じゃ納得しないだろ」

言葉が通じなければ、拳で語り合う。

流星に思春期に入ってからそんなこともしなくなっただけ、まだ

まだ小さかった頃は互いに次元霸王流を習っていたこともあって、よく道場で喧嘩に決着をつけていたことを覚えている。

「……それ、本気なの？」

「おう、その方がお互いすつきりするだろ？」

「……ふん……わかったわ。じゃあ今日の夜八時。セントラル・ロビーの中央で待ってるから。アタシが勝ったらそのマフユって子のこととか、洗いざらい全部吐いてもらうわよ」

「わかった。じゃあ俺が勝ったら……どうすつかな。とにかく、出来る限りの説明だけはさせてもらう」

言葉より先に感情を処理してしまわないと、伝わらないこともある。

感情を処理できない人間はどうかのこののとマフユの家で見た「機動戦士ガンダムF91」ではそんなことを語ってた眼帯のキャラがいたけど、感情をちゃんと処理できる人間の方が世の中珍しいんだ。

だったらストレスもフラストレーションも、ガン普拉バトルにぶつけちまえばいい。

生身で戦ったら、流石にもう体格差とか、力の差で怪我をさせてしまうかもしれないけど、少なくともGBNならその辺は平等だ。

無論、俺とチナツの実力に大きな隔たりがあるのはわかっている。わかってはいるけど、誤解されたままじゃ終われない。だから、拳を交えて語り合うのだ。

ふん、と小さく鼻を鳴らして、チナツはつかつかと早足で通学路を歩き去っていく。

果たして勝てるかどうか。

チナツがどんなガンプラを使ってるのかもわからない今、俺にできそうなことはなんだろうか。

そんなことを考えながら、不機嫌な幼なじみの背中を追いかけるように俺も、通学路を歩くのだった。



「……とまあ、そんな感じで今日の八時にフリバすることになったんだよな」

「……え、Aランクの人と……?」

「ああ」

今日はちよつと集中したいことがあるから、と師匠こと父さんと、母さんにちゃんと伝えた上で夜飯等々を早めに済ませて、俺は約束の二時間前、夜六時にGBNへとログインしていた。

なんの偶然かはわからないけど、いつものところにマフユも立っていて、ちよつどいいからと事情を説明していたのだが、チナツがAランクであることを伝えると、マフユはたちまち顔を蒼白にしてみあった。

「……ごめんなさい、ごめんなさい、私のせいで……Aランクなんて……そんな……」

「そんなに悲観することねーと思うけどなあ」

「Aランクは……魔境を一步抜けた先なの、ユウヤ君……」

「魔境?」

「うん……大体のダイバーがここで燻るか脱落するかって言われてるのがBランク。そこを抜け出せた人は、今の私なんかより、ずっとずっと強いんだよ……?」

どうやら俺が知らないだけで、GBNにもそういう、いわゆる中級者と上級者を分かつ壁のようなものは存在していたらしい。

Bランクといえば、昨日戦ったカオスガンダムのダイバーとか、シユバルツ・ブルーチーズさんのデータを見る限り、あの人たちがそうだったはずだ。

そこから頭一つ抜けた強さ。

ずっとリアルで顔を合わせているから正直なところ実感は湧かないけど、チナツはそれだけの強者ってことになる。

そして、五対五じゃなくてタイマンで決着をつけようって話になつてる辺り、ブルーチーズさんを仕留めた時みたいに「周りの状況を利用する」のは難しそうだ。

「言われてみりゃ、無茶な約束したかもしれないな……」

「…………わ、私…………謝るから…………その…………チナツって人に、ちやんと…………」

「でもさ、チナツもなんていうか、不器用なんだよ」

「…………不器用…………？」

「ああ、チナツは昔っから感情が表に出やすくてさ、小さい頃はよく喧嘩してた。だからさ」

だから、GBNで喧嘩をすることであいつの感情をすつきりさせて、話し合いはそれからしようってだけのことだ。

俺が負けたら洗いざらい吐いてもらうとは言われているけど、勝つたとしても結果は同じなんだから、多分変わらない。

そしてできれば、俺はチナツとマフユにも仲良くなつてほしいと思っている。

今はなんの接点もないかもしれないけど、袖擦り合うも縁の端くれってやつだ。もしかしたらいい友達になれるのかもしれない。

なんてことを語っている俺は、マフユからすれば相当呑気に見えたのかもしれないな。

「ごくり、と固唾を飲んで、マフユは怯えるような仕草を見せる。

「…………でも、ユウヤ君…………私…………」

「マフユは悪くねーって。これはあくまで俺とチナツの問題なんだ、こう言っちゃなんだけど、本当、子供の喧嘩みたいなもんなんだよ」

チナツだって今頃多少冷静になってるかもしれない。

それはそれとしてわだかまりを残しておくよりは、全部ぶちまけてすつきりさせた方がいいってだけの話なのだ。

怯えるマフユを宥めている内に、時刻はもう七時を回っていた。

シャフランダムで慣らし運転をするのも悪くないかと思つてたけど、この時間だと中破でも修復が間に合わない。

だったらあととはぶつつけ本番だ。

とはいえ、あと一時間暇を持て余してるってのもなんかこう、もによもによするといつかなんといつか。

「なあマフユ、この辺で適当に時間潰せる場所とかないか？」

「時間潰し……う？」

「ああ、流石に一時間も突っ立ってるのは暇だなーって思ってたさ」

「なら、その……ロビーの二階とか、夜景が見れるから……あ、でも、カフェとかもあるし、どうしよう……」

「マフユが行きたいとこでいいよ」

GBNについて俺はまだまだ素人もいいところだ。バトル潰けになつてたせいで、観光とかそっちのけだったからな。

その点、マフユはそういうことも詳しくそうだから、聞いてみたってわけだ。

「……じゃあ、そ、その……あ、でも……」

「でも？」

「……私といったら、そのチナツさん、また怒っちゃうんじゃ……」

「んー……まあそうか」

なんで自分じゃなくてマフユなんだ、みたいなことは言ってたし、チナツの怒りの矛先がマフユにも向いてないとは限らない。

そういうところで察しが悪いからあいつを怒らせてしまったんだろうかと俺は後悔したけど、それが先に立ってくれないから後悔は後悔なのだ。

だったらその過ちを認めて、今回の喧嘩ですつきりさせればいい。

「まあでも、突っ立ってるだけじゃ流石に暇だし、夜景ぐらいは見ていいんじゃないか？」

「……そう、かな……」

「あいつが怒ったら全部俺のせいにしてくれて構わねー、だからとりあえず行ってみようぜ！」

「……わ、待って、ユウヤ君……！」

マフユの手を引いて、俺はセントラル・ロビーの二階に繋がるエスカレーターへと駆け出していく。

GBNの景色は現実と比べても遜色がないぐらいに精巧に作られていて、そこにあるのは架空の空であるはずなのに、現実と同じように確かな手触りを持って感じられるのだ。

実際、二階に上がってみて見えた夜景は、都心の高層ビルから見渡

した景色と遜色ないぐらい綺麗なものだった。

「すげえ……GBNって、こういう楽しみ方もあるのか……！」

「うん……夜景を見たり、お散歩したり……楽しい、よ……？」

「今度はそういう観光スポット巡りとかするのも悪くないかもな」

バトル以外にはまるで興味がなかった俺でも、心がどこかざわめき立つのを感じている程度には、やっぱりGBNのグラフィックはよくできている。

想像を超えた世界。師匠がどこまで考えてたかはわからないけど、多分戦いだけじゃなく、こういう景色を見るのもそこには含まれていたのである。



「お二人で夜景見てたら五分遅刻したですって？ いいご身分ね」

「それについては本当に俺が悪かった」

景色に見惚れること小一時間、見事に集合時間を五分オーバーしたことで、全方位に不機嫌オーラを撒き散らしていたチナツは、俺を親の仇みたくに睨みつけながらそう言った。

残念なことにはぐうの音も出ない正論だ。

平謝りする他にない。

俺はチナツに頭を下げて、全力で詫げる。やらかしたのが俺である以上、とにかく頭だ、頭を下げるのだ。

「……まあいいわ、その辺も引つくるめて訊きたいところだったから」
不機嫌さを隠そうともしないチナツのアバターは現実をベースにこそしているものの、その頭上には銀のティアアラが飾られていて、礼服のような衣装と合わせて、どことなく物語の中から抜け出てきたお姫様を思わせる。

いや、おしとやかな姫様がここまで露骨に顔を顰めて歯を食いしばってる図は中々想像できないけど、笑ってたらよく似合ってると思う。多分。

「それじゃあ、遅れちゃったけど」

「ええ、始めましよ、フリーバトルを」

互いにウインドウを操作した上で申請を送って、俺たちは格納庫へと別々に転送されていく。

『その……ユウヤ君、気をつけて、ね……？』

「おう、油断大敵だからな！」

今回マフコを待たせるだけでも暇だろうから、ギャラリーモードで観戦してもらうことについては事前に合意を取り決めている。

ナビのような役割を果たしてしまわないか、という俺の心配に対しても、チナツは「それぐらいハンデとして認めてあげるわ」なんてことを言っただくらいだから、多分問題はないんだと思いたい。

チナツと戦うに当たってのルールは一つだけだ。

バリリトウッド、なんでもあり。

要するに飛び道具を使おうが何しようが、GBNの規約に違反しない限りは自由ってことだ。

……要するに、いつも通りってことだな！

コックピットに乗り込んで、カタパルトから飛び出したストライク焔が、エールストライカーの翼を広げて夜の空を滑っていく。

Aランカーの実力がどんなものかはまだ未知数だ。それを測るって意味でも、チナツとの戦いで得るものは多そうだ。

ただ。

「勝っても負けても、ちゃんと説明しねーとな……」

一応こればかりは責任が俺にあるんだから、そこだけは果たさないとな。

そんなことを考えながら、俺は夜の荒野で半球状に展開されているバトルフィールドへと突入していくのだった。

Ep. 09 「スカーレット・バレット」

バトルフィールドに飛び込んでからしばらく発生する無敵時間が切れてすぐさま、歓迎の挨拶が光条となって飛んでくる。

『ユウヤ君……！』

「あつぶねえ……なあ！」

まだストライク焰のセンサーが有効な範囲では相手を、チナツを捉え切れていない。

つまりこの弾は、アウトレンジから飛んできたもの、平たくいえば狙撃ってことになる。

チナツがどんなガンプラを使っているかはわからないけど、とりあえず狙撃を使えるってんならやることは単純明快だ。

「端まで追い詰めてぶん殴る……！」

『今のを避けるなんて、相変わらずバカみたいな反射神経ね』

「誰がバカだ！」

『アンタよこのバカユウヤ！』

ポップした通信ウインドウの向こう側でチナツが吼える。

遅刻した件は本気で悪かったと思ってるけど、ここまでご機嫌斜めなのも珍しい。

なんて、言ってる場合じゃないか。

コーシヨンの点滅より早く回避を先行入力、飛んでくる高速のビームを紙一重で回避しつつ、俺は峡谷を遮蔽物の代わりにして、一旦着地を挟む。

昔のゲームでいうところの画面端まで追い詰めて集中砲火を喰らわせるのが対スナイパーにおける常道だ。

とはいえ、相手がこっちのレンジの外から手出しできる武装を持っている以上、空中で堂々と位置を晒してるのもまた自殺行為に他ならない。

とりあえずは身を隠して、考えをまとめるんだ。

狙撃はどこから飛んできた？ どれぐらいの速度でポジションを変えられる？ 相手はこっちの正確な位置を把握しているのか？

頭の中で一つずつ問題を整理して、俺は気合を入れるようにぴしゃりと両頬を叩く。

「よし、大体わかってきた……!」

『……ど、どうするの、ユウヤ君……?』

「決まってるだろ、とにかく接近してぶん殴る!」

俺のストライク焔にできることはそれに尽きる。

相手の射撃戦に付き合わず、こっちが得意な格闘戦に引き摺り込む。単純なようでこれが案外難しかったりするのだが、そうすることでしか今のところ勝ち筋はない。

ビームピストルも作っちゃいるけど、これはあくまでも中距離から近距離に詰めるための布石だ。

だったら、あの正確無比な狙撃を掻い潜る方法は――

『ユウヤ君!』

「っ、危ねえ!?!」

もうポイントを変えたのかよ。

紙一重で着弾した狙撃を回避できたのはマフユの警告があったおかげだ。

一人だったら今頃俺は作戦を練っている内にお陀仏というなんとも締まらない結末に終わっていただろう。

『ふーん……今のも避けるのね』

「紙一重で危なかったけどな!」

こうなると足を止める行為が危険だ。

遮蔽物に身を隠すメリットはいくつかあるけど、同時にデメリットも存在しているのが世の中だ。

まず、視界が遮蔽されている以上、弾がどこから飛んでくるのかわからない。

スナイパーの位置を割り出す方法はいくつかあるけど、センサー系がクロスレンジに最適化されているストライク焔ができるのはたった一つだけだ。

そして、峡谷という地形の必然として、谷間は、モビルスーツサイズに拡大されたガンプラが通過するにはとてつもなく狭い。

だったら、もうやることは決まっている。

ひたすら足を止めずに、弾道から狙撃ポジションを割り出して反撃を試みる。それだけだ。

『無理だよ、こんな……ユウヤ君……』

「諦めんなよ、マフユ！ 例えどんなに無理ゲーでも……やってみなくちや勝負はわかんねえんだからな！」

『はっ！ その余裕、いつまで続くか見ものね！』

「もちろん、お前をぶっ倒すまでだ！」

潔く啖呵を切つて飛び出したはいいものの、狙撃ビームを見てから回避するのは至難の技だ。

何故って、コーションが点滅するわずか前に回避コマンドを先行入力するという、尋常じゃない集中力が要求されることを常にやらなきゃいけないからだ。

とにかく狙撃を喰らわずに飛んできた方向からおおよその位置にあたりをつけて、俺は機体を加速させた。

『狙撃の精度が……落ちて、る……っ？』

「思った通りだな！」

狙撃つてのは避ける方も集中力を要求されるけど、やる方だって神経を使うものだ。

俺はやったことがないから聞き齧った話でしかないのがあれだけど、要するに安定した姿勢できちんと狙いをつけて撃たなければいけないらしいから、ポイントを移動しながらとなると難しいらしい。

もちろん、そういう戦い方に対応したマークスマンとかいうスタイルもあるらしいけど、明らかにアウトレンジから撃ってきた以上、チナツは違うはずだろう。

狙撃が崩されたと見るや否や、弾幕を張るのをやめたのは流石のAランクといたところか。

身を隠していたはずのチナツが、今度はこっちに高速で接近してくるのを、ようやくストライク焔のレーダーが捉えていた。

「なんだよ、狙撃はもうおしまいか？」

『ふん、効かないってわかってることをいつまでもやってやるほどア

「タシは優しくないのよ!」

「いいねえ、それじゃあタイムマン始めるか!」

『残念だけど、それもお断りよ!』

モニターが拡大して投影したチナツのガンプラは、ガンダムアストレイをベースにしたものだった。

鮮やかなオレンジ色をフレームにあしらって、背中にはデステイニーガンダムから持ってきた翼がある。

ウエポンラックには対艦刀と、さっきまでこっちを狙っていたのであろうロングビームライフルが長距離長射程ビーム砲の代わりに懸架されていて、ようやくそこで俺はチナツの戦闘スタイルに合点が行った。

「狙撃もできるオールラウンダーってことか!」

『そういうことよ! アンタは格闘戦でアタシをぶちのめせると思ってるみたいだけど……その思い上がりを叩き潰してやるわ!』

アストレイの肘に、本来はシールドを装備するためのハードポイントが設けられている部分に取り付けられたビームブーメランを引く掴むと、チナツは機体を側転させながら、それをこっちに投擲してくる。

SEEDを見ていなかったら、危なかった。

俺は投げられたブーメランの「戻り」を回避しつつ、接近してきたチナツのアストレイにビームピストルを撃つ。

『ユウヤ君、今のって……』

「ああ、知ってると思うけど、ビームブーメランは戻りにも攻撃判定があるんだよ」

実際、ガンダムSEEDの劇中じゃ「行き」は回避したけど、「戻り」で撃破されていたパターンが結構あったはずだ。

『そつか……でも、チナツさんもすごい……あんなに、多い武装の特性を、ちゃんと……』

「ああ……どうやら俺には勝たせてくれなそうだな……!」

ひらりひらりと舞い踊る蝶のようにビームピストルを回避すると、チナツはどうとう堪忍袋の尾を切らしたのか、背中から対艦刀……ア

ロンダイトを引き抜いて、デステイニーのウイングユニットから「光の翼」を発生させた。

『楽に勝つ？　そもそも……アンタに勝ちつて選択肢は最初っからないのよ！』

「次元霸王流！　疾風突き！」

『甘いのよ！』

クロスレンジに飛び込んできたアストレイを迎撃するために放った左の拳は、ミラージュコロイドが作り出す残像に吸い込まれて空を切る。

そして、その隙を見逃さないとばかりに逆手で切り返してきた対艦刀が、ストライク焰の左腕を切り飛ばす。

「クソツ、残像か！」

『バカ正直な左ストレートじゃ、アタシのシツクザールは撃ち抜けないのよ！』

そして、切り下されるアロンダイトの一撃をビームシールドで防いだのまではよかった。

ただ、その細身の機体からは考えられないほどのアストレイのパワーは、ストライク焰を吹き飛ばし、岩の柱に叩きつけていた。

なんつー馬鹿力だ。

姿勢を立て直しながらも、イエローコーションが鳴り響くコツクピットの中で、俺は引きつった笑みを浮かべる。

『……ユウヤ君、大丈夫……っ……!?!』

「ああ……今のはさすがに効いたぜ」

『サレンダーする？　するってんなら聞き入れてやらなくもないけど』

冗談じゃねえ。

切り返した啖呵をふん、と鼻で笑い飛ばすと、チナツのアストレイがじわじわと、対艦刀をその手に携えながらこっちに向かってくる。

ただ実際、それが強がりだったとしても、勝負を諦めてサレンダーするなんてチョイスは最初から俺にはないのだ。

それはいいとして、どう戦う？

重要なのは、さっきの一撃を貰ったのは体勢を崩していたからってだけで、ストライク焰がパワー負けしたわけじゃないってことだ。

もしも逆転のチャンスがあるとしたら、そこにしか光明はない。

ただ、左の前腕が斬り飛ばされてしまった以上、こっちもフルパワーで戦えるわけじゃないのなら、選択肢は限られてくる。

だったらどうする、だったらどうなる。

考えている時間はねえ。チナツは腰にマウントしていたビームライフルを手にすると、その引き金を躊躇いなく引いてこっちにじり寄ってくる。

とりあえずはビームを避けながら空中に距離を取ったかと思えば、それを待っていたとばかりに左のウェポンラックにマウントされていたロングビームライフルが撃ち放たれた。

とりあえずはビームシールドを展開、なんとかその一撃を防ぐことはできたけど、ストライク焰は空中で大きく姿勢を崩してしまう。

——まずい、やられたか!?

一瞬、本気でそう思った。

ただ、警戒していた次弾は飛んでこない。

何があったのか、エネルギーでも切らしてたのか連射が利かないものだったのかはわからないけど、命拾いした。

とにかくこの隙をなんとか活用して、もう一度距離を詰める他にない。

「次元霸王流！ 聖槍蹴り！」

『ちつ、連射が効かないところを……！』

スラスターを全力で噴射して、当てるためじゃなく、距離を詰めるための飛び蹴りを放つ。

チナツのアストレイが回避行動をとってくれたおかげで、何とか距離を詰められた。

ここから反撃といきたいところだけど、あのアロンドイトは厄介だ。

エールストライカーのスラスターを全開にして、俺はチナツが身動きしている間に機体を懐に飛び込ませて、右腕の接続部を狙った貫手

をぶちかます。

「パルマ……フィオキーナだ！」

『くっ、装甲が薄いところを……さつきから！』

ガンダムアストレイにはちよつとした弱点がある。それは、軽量化による機動力を追求しすぎたあまり、フレームのほとんどが露出していることだ。

要所は装甲で覆われているものの、それも発泡金属という耐久力に劣るものが使われているせいで、アストレイは機動力の代償として防御面に大きな難を抱えている。

つまりは一発でも攻撃を貰えば致命傷になりかねない紙装甲って話だった。

チナツのシツクザールとかいうらしい機体も、デステイニーのバックパックとロングライフルを背負っている以外は、ベースのアストレイからはそう大きな改造が施されていない。

人体に近い可動域を目指して作られたアストレイにデステイニーのパワーを足し合わせることで、機動力と火力を両立させる発想は確かにいいところに目をつけている。

それが今は命取りになっているけどな！

パルマ・フィオキーナで右腕を脱落させたチナツのアストレイは、近寄るなどばかりにハイキックを放つ。

『こんの……離れなさいよ！』

「いいや、離れない！ このまま畳み掛ける！」

『ふざけたこと言つてえッ！』

見たところ、デステイニーガンダムからパーツを持ってきている都合、あのアストレイのハンドパーツはデステイニーのそれに置き換えられている。

相手もパルマ・フィオキーナは使えるってわけだ。

それを示すかのように、左の掌からビームを展開したチナツは、掌底の要領で左手を振り上げた。

パルマ・フィオキーナの光がストライク焰のメインモニターに突き刺さり、半壊にまで追い込んでいく。

それでもまだだ、まだストライク焔は倒れちゃいない。

「次元霸王流！ 疾風突き！」

『ぎっけんじゃないわよ！』

繰り出した右の拳がアストレイの頬を打ち砕く。カウンタークロスとして放たれたチナツの拳が肩アーマーを砕く。

ノーガードでの殴り合いに、武器は無粋だとばかりに、通信ウィンドウに映っているチナツの唇は不敵な弧を描いていた。

控えめにいっても戦況はいいとはいえない。

はつきり言つてピンチつてやつだ。

そんなことはわかつている。わかっているからこそ、俺は。

『ユウヤ、君……？』

「ははっ……楽しくなってきたじゃねーか！」

『強がり！』

「そうだ、強がりだ！ こんな時だからこそ……ピンチだからこそ、笑うんだ！」

チナツのアストレイが繰り出してきた蹴りを膝で受け止めて、コマンドサンボの要領で俺もまた蹴り返す。

しかし、残っていた左の拳から展開されたビームシールドが直撃を阻む。

さつきから狙撃ビームを撃ちまくってたあいつのエネルギー容量にどれだけの余裕があるかはわからないけど、一発でも当たったんなら、その分だけエネルギーを削れたってことだ。

このまま殴り合いの持久戦を続けるのも悪くはない。

ただ、繰り返す拳と脚の応酬で、いつしかコックピットに明滅するイエローコーションは、レッドアラートに姿を変えていた。

見る影もなくストライク焔はボロボロになっているのだろう。でも、それはチナツのアストレイも同じはずだ。

『次元霸王流の免許皆伝取っただけはあるわね……！』

「そっちこそ、武器をなくしてでも戦うなんて、ガッツあるじゃねーか、チナツ！」

『はっ、アタシは負けるのが大嫌いなよ！』

「ああ、知ってる！」

ハンドスプリングで距離を離れたチナツのアストレイが、残っていた全てのエネルギーを放出するように、光の翼を展開する。

あとは、抜き打ちで勝負をしようってことだろう。

俺もまた、エールストライカーのスラスターを全開にして、神経を極限まで尖らせていく。

単純な直線距離での加速力ならチナツに分があるのは確かだろう。なら、俺が取るべきものは先手じゃなくて後の先だ。

——来る。

脳髓が痺れるような緊張が、予感と共に迸る。

その予感を形にしたかのように、先に動き出したのは案の定、チナツのアストレイだった。

『はああああッ！』

「勝負、だああああッ！」

残像を背後に展開して、アストレイが飛ぶ。

掌からパルマ・ファイオキーナを放たずに抜き打ちにこだわっている辺りは素直だといふかなんというか、チナツらしくて潔いと思う。

だとしてもそれはそれ、これはこれだ。俺だって、負けるつもりは全くない。

「次元霸王流！ 流星……螺旋拳！」

アストレイが繰り出した左の拳をあえて身体で受け止めながら、俺はガラ空きになったその胴体に、今できる全力を叩き込んだ。

『っ、きやああああッ！』

「うおおおおっ！」

パルマ・ファイオキーナの光を纏って回転した拳はドリルのようにアストレイの装甲を貫いて、コックピットまで到達する。

だが、ストライク焰も無事ではない。

半身を砕かれて、頭部も失って、それでようやくクロスカウンターが決まってくれた——というより、チナツがプライドを優先していなかったら、負けてたのは間違いなく俺の方だったはずだ。

【Battle Ended!】

【Winner：ユウヤ】

それでも勝利は勝利と受け入れるか、まだまだ至らないところだからだと反省するか。

マフユのナビゲートがなければやられてたことも含めて考えれば、後者なのだろう。

爆炎の中に佇むストライク焔のコックピットで、俺はまず勝利を収められたことに胸を撫で下ろしつつも、まだまだ「強さ」の高みには至らないというほろ苦い実感を噛み締めていた。

Ep. 10 「フォース・トライダイバーズ！」

戦いを終えてセントラル・ロビーに帰還した俺たちを待っていたのは、どこことなくおどおどした様子のマフユだけじゃなかった。

その隣にはどういうわけか、俺がログイン初日にお世話になったお姐さんこと、マギーさんが笑顔で控えていた。

「コングラッチュレーション！ 素晴らしい戦いだったわ、アナタたち」

「ありがとうございます！ って、いつまでヘソ曲げてんだよ、チナツ」

「ふん……でも、ありがとうございます、マギーさん。至らないとこだらけでしたけど」

「そんなことないわあ、あくまでも自分らしい勝ちにこだわるチナツちゃんのアグレッシブさは、立派な武器よ」

「マギーさん……」

よく頑張ったわね、とチナツをマギーさんが抱擁する。

よっぽど負けたことが悔しかったのか、チナツの眦には涙が滲んでいて、それが溶け落ちるようにぽろぽろと零れていく。

「全開を出して戦って、泣いて、笑って……青春ね。これが若さかしら」

「マギーさんも十分若く見えますけど……」

「あらそう？ 嬉しいこと言ってくれるじゃない、ユウヤ君」

少なくとも俺やチナツ、マフユと同じぐらいの年頃だとは思わないけど、マギーさんの声から感じる印象はそこまで老け込んでいるとは思えないくらい生き生きとしたものだ。

もしかしたらマギーさんのアバターの向こう側がご老人な可能性もあり得るけれど、そうだとしても心が若くなければこんな声は出せない、俺は思っている。

「ぐすつ………ってかユウヤ。アンタ、マギーさんとも知り合いなの？」

「ああ！ ログイン初日にヤス、って変なのに絡まれてたことを助けてもらったんだ」

「ああ、アイツ……アタシと同じね」

チナツの言葉から察するに、ヤスはマギーさんにお灸を据えられても懲りることなく初心者をかモにしようとしていたらしい。呆れたやつだ。

それにしても、マギーさんが積極的に初心者との交流を持つてるとしても、偶然つてのもあるもんだ。

もしかして、マフユもヤスに騙されかけたクチだったんだろうか。

俺が向けた視線に、何故かマフユは顔を赤らめながら、ぶんぶんと両手を豊かな胸の前で振って、そうじゃない、とジエスチャーで主張する。

「あ、あの……ユウヤ君、私とマギーさんは、さつき知り合ったばかりだから……」

「そ、フリーバトルのライブ映像を熱心に見てる子がいたから、さつき話しかけてみたの。そしたらマフユちゃんはユウヤ君のフレンドだったってワケ」

偶然つて怖いものねえ、とマギーさんは冗談めかして小さく笑った。

誰かと誰かが知り合いだったってのはわりとある話かもしれないけど、確かにこれだけ連鎖して繋がったってのも珍しい。

「それで、どうしてアナタたちは戦ってたの？　すごく感情が乗ってたけど」

「それは……」

「その……」

マギーさんから投げかけられた純粋な問いかけに、俺とチナツは一樣に口を噤んで黙り込む。

言えない訳じゃないけど、なんだかマギーさん相手に身内同士の喧嘩をやってしまった、と言うのも、恥を晒しているようで大分気まずい。

それはチナツも同じなのだろう。

「もちろん、言いたくなければ言わなくていいわ。アタシが突っ込みすぎただけだから」

「……いえ、正直に言いますー！」

「あら、本当？」

悪いわね、とマギーさんは言葉を続けたけど、どの道戦いが終わったらチナツにあれこれ説明するつもりだったんだ、それが、ここで聞く相手が一人増えただけのことだ。

自分にそう言い聞かせて呼吸を整えると、俺はマギーさんとチナツへ交互に視線をやって、戦いの理由を白状する。

「実は、こいつと喧嘩してたんです」

「あら……喧嘩？ 穏やかじゃないわね」

「リアルだと罅が開かないからGBNで決着つけようって話をしてたんですよ」

「そうです、ユウヤの言う通りで……単純にアタシたち、喧嘩してただけなんです」

さしものチナツもマギーさんの前ではいつもの牙を剥き出しにした様子は鳴りを潜めて、優等生のような口調で追従してきた。

普段からこうだったら苦労しないんだけどな、とか言ったらまたキレ出しかねないから、その言葉は喉元に留めておく。

「バトルするのはいいけど喧嘩はよくないわね、仲直りできそう？」

「はい。っつーか……恥ずかしいですけど、そもそも俺の不手際なんで……」

「そうよ！ ちゃんと説明しなさいよね！」

未だにおどおどしているマフユとマギーさんを交互に見遣って、チナツは俺の胸元に人差し指を突きつけてきた。

元から言うつもりだったからそれは構わないけど、果たして何から説明したものか。

しばらく首を傾げて考えた末、俺はまずマフユとフレンドになったいきさつから、チナツに説明することに決めた。

「あそこにいるマフユと俺はフレンドなんだよ」

「それなら聞いたわ」

「じゃあ話が早いな、マスダイバーに襲われてたところを助けてからフレンドになって、一緒に遊ぼうって言うてくれたから、一緒に遊んだんだよ」

別にオンラインゲームならフレンドと一緒にプレイするなんて珍しいことでもなんでもないはずだ。

これについて、チナツに最初から説明しなかった非は俺にあるかもしれないけど、マフユは全く悪くない。

俺の説明をジト目かつ、半信半疑といった風情に顔を顰めて聞いていたチナツは、マフユにその不機嫌そうな視線を向ける。

「……………」

「あんまり怖がらせんなよ」

「怖がらせようとなんかしてないわよ！　　ったく…………フレンドと遊んでるだけってのは理解したわ。でもなんでアタシが散々誘ってやった時はやらなかったのに、今になって始めてんのよ…………アタシだって、その…………」

前半は口角泡を飛ばす勢いで捲し立てていたチナツの口調は、後半に行くにつれて次第に萎んでいった。

竜頭蛇尾というんだろうか。最後の方はもによもによとして聞き取れなかったけど、何かしらチナツにも言いたいことはあったのだろう。

「そんな時は乗り気じゃなかったっていうか…………師匠がガンプラバトルは俺の想像を超えた戦いだっていうから、初めてみたんだ」

強くなりたい。ただそれだけのシンプルな動機だった。

今だって強くなりたいという思いは変わらないけど、始めたばかりの時とは少しだけ違っていているような気がする。

「ほんつと、ユウヤって修行バカよね…………」

「ありがとう、最高の褒め言葉だぜ、チナツ」

「別に褒めちゃいないわよ…………あーあ、色々気にしてたアタシがバカみたいじゃない」

何を気にしていたのかは知らないけど、肩の荷が下りたような様子でチナツは大きく溜息をつくど、眉をきりりと逆立てて、再び俺の胸に人差し指を突き立ててくる。

「とにかく！　GBNやるってんならアタシも誘いなさいよ！　一人ぼっちで置いてけぼり食らって…………ああもう、とにかくアタシも混ぜ

なさいってこと！」

「なんだ、お前……ただ一緒に遊びたかっただけなのか。なら最初からそう言ってくれりゃよかったのに」

「うるさいわね、もう！ とにかくマフユって子も一緒にいいから、アタシもアンタと一緒にGBNやるの！ そのためにずっとソロ専……こほん！ なんでもないけど！」

明らかに何でもなくはなさそうだったけど、その辺をついても藪蛇なのは目に見えている。

耳たぶまで真っ赤に染め上げながら、チナツは俺を真っ向から見据えてそう言い放った。

キャリアがどうこうとか前に言ってたけど、一緒に遊ぼうってだけの話ならここまで拗れることもなかっただろうに……と、それについては説明しなかった俺も悪いからやめておこう。

とにかく、チナツの中にある怒りがちゃんと発散できたようで何よりだ。

一緒に遊ぼうってだけなら、さつきも言っただけど大歓迎だしな。

「……あ、あの……チナツさん……」

「こほんっ……！ 何ですか、マフユさん？」

「……えっと……私にもユウヤ君と話してる時とおんなじでいいです、よ……っ？」

「そう？ ならこれでいい？」

「はい……ありがとうございます、その、私も……というか、私がいてよければですけど、その……私とも一緒に、遊んでくれます、か……？」

マフユは肺の中身を全て吐き出すようにかすれた声で、それでも精一杯に胸の内をチナツに打ち明けたようだ。

チナツはじつ、とマフユの黒く大きな瞳を覗き込むと、小さく頷き、そっと手を差し伸べる。

「アタシも感情に振り回されて迷惑かけちゃってごめん。こんなアタシでよければ、その……よろしくね、マフユ」

「……えっと、はいっ……チナツ、さん……！」

そして、チナツは手元のウインドウを操作すると、フレンド申請をマフユと俺に送りつけてきた。

「そういや申請自体はしてないんだった。」

「依頼を承認して、これで改めて一件落着いてるところだろうか。」

「マフユと仲良くしてやってくれよ」

「言われるまでもないわよ。それと……なんかすみません、マギーさん。痴話喧嘩に巻き込まんじやったみたいで……」

「さつきから静かに目を閉じて頷き続けていたマギーさんにチナツはぺこりと腰を折って頭を下げる。」

「確かにマギーさんをこの喧嘩に巻き込んでしまったのは反省するべきところだ。だから、俺もチナツに続いて頭を下げる。」

「ううん、いいのよお。今アタシ、最高に青春を噛み締めてたから……！」

「青春?」

「そ、青春。ユウヤ君もチナツちゃんもマフユちゃんも、この出会いや、やり取りをいつか懐かしく思う時がくるわ。なんて、ちよつと年上からのアドバイス」

「青春か。言われてみれば真っ盛りってとこだけど、マギーさんの中では喧嘩するのも青春だったりするんだろうか。」

「拳と拳がぶつかり合うことで友情が深くなるって師匠は、父さんはそう言ってたけど、まだまだそれは実感できそうにない。」

「ところでアナタたち、フォースは結成しないの?」

「フォース?」

「だってユウヤ君、もうDランクなんでしょう? それなら、フォースを組んでた方が色々と便利よ。どこかに所属するつもりだったなら申し訳ないけど」

「そういや、そんな機能もありましたね……」

「正直、今の今まで完全に忘れていた。」

「マギーさんに言われて初めて思い出したけど、Dランク以上のダイバーはフォースという名前のギルドとかクランとか、そういうのを結成できるんだったか。」

特にメリットもなさそうだったから忘却の彼方に押し流されそうだったけど、確かに三人で遊ぶなら一々パーティー申請を送るよりは、フォースを組んでしまった方が手っ取り早いかもしれない。

「フォースか……俺は構わないけど、マフユとチナツはどうなんだ？」
「アタシも別に異存ないわよ、ソロ専だったし」

「……私も、どこかに所属してたわけじゃないから……」
「じゃあ組むか、フォース！」

バンド始めました、ぐらいのノリでいいのかどうかはともかくとして、俺たちはフォースの結成申請を送る。

リーダーは誰になるんだろうか。やっぱりランク的にはチナツが妥当か？

それに名前も決まってない……というか、つけなきゃいけないんだな、名前。

威勢よく申請した割にはそこで指が止まって、俺たちは何とも言えない気まずさの中で沈黙していた。

「……なあこれ、名前とかリーダーとか、どうすんだ？」

「リーダーに関してはアンタでいいと思うけど」

「チナツじゃなくてか？」

「元々渦中にいたのはアンタでしょ、だから責任持ってリーダーやちなさい」

「……まあ、そうか。じゃあリーダーは俺で……なあマフユ、名前、なんかいい案あったりしないか？」

三人寄ればなんとかかんとかってことわざもあることだし、マフユなら何か名案を持ってたりするんじゃないかと期待して話題を振ってみたものの、小首を傾げた姿勢で固まっていたのがその全てを物語っていた。

「ごめんなさい……ちよつと、思い浮かばなくて……」

「だよなあ……いい名前かあ」

この前も見返してた「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」から持ってきて「ミネルバ隊」……安直すぎる。

それとも少し捻って、「エターナル・デイバイン」……なんか語呂も

悪いし微妙に恥ずかしい。

むむむ、と唸り声を上げてても名案は浮かんでこないものだ。

視線を横に逸らしてみれば、それを決めるのがリーダーの役目だとばかりにチナツは考えることを放棄して、マフユとあれこれ言葉を交わしていた。

「すつごくよく作り込まれてるじゃない、えつと……」

「……あ、その……マフユ、でいいです、よ……?」

「じゃあマフユ！ そのG―エクリプティカ、もしかしてエクリプスガンダムとEガンダムを参考にしていたり?」

「……っ、うん……わかってくれますか……?」

「エアマスターの羽って後ろを跳ねあげようとするのと干渉するのよね、それを削ってクリアランス整えてるし……いい発想だと思うわよ！」

「……ありがとうございます……っ！」

仲良くなれそうなのはいいことだけど、丸投げは感心しないな、丸投げは。

なんて言うのも、きつと野暮なんだろうな。

諦めて女子二人が親睦を深めているのを眺めながら、俺は思考回路をフル回転させてフォース名を考える。

「……トライダイバーズ」

ふと、天啓のような閃きが雫のように脳裏の湖面に落ちて、波紋を広げた。

「ん？ 決まったの?」

「……ごめんなさい、話し込んでやって……」

「ああ、大丈夫。ところでフォース名だけ……『トライダイバーズ』ってのはどうだ?」

昔、師匠ごと父さんと母さん、そしてチナツの親父さんが組んでいたチーム名を参考に、というかほとんどまんま持ってきたものだけで、三人だしちょうどいいんじゃないだろうか。

俺からの提案に、マフユとチナツは視線を合わせると、小さく苦笑しながら言葉を紡ぐ。

「何それ、パパたちが戦ってたチーム名？」

「……トライ、ファイターズ……聞いたことは、あるかも……」

「まんまだけど、丁度いいかと思つてさ」

「それもそうね。じゃあ今日からアタシたちはトライダイバーズってことで！」

「決まりだな！」

「……お、おーっ……！」

無事にフォース名も決まったところで、申請を決定する。

数秒も経たないうちに走つた処理はNPDへと届いて、正式にフォースが結成された旨がウィンドウにポップしてきた。

「本当、青春ね……」

一歩引いたところで俺たちを見つめていたマギーさんはしみじみと呟く。

この人がいなかったら、フォースを結成するなんて話には多分ならなかっただろう。

『ありがとうございます！』

「ええ、こつちこそいい絆を見せてもらったわ。その縁を大事に、ね？」

だから、俺たちはひらひらと手を振るマギーさんに腰を折つて頭を下げてから、ログアウトボタンに手をかけた。

縁を大事に、か。

マギーさんからのメッセージを、そして師匠からも言われたことを改めて心に刻みつけながら、俺は現実に戻るのだった。

幕間「拝啓、闇鍋の底から」

【GBNの】シャフランダム・ロワイヤルスレ part. XX【井戸の底で】

1. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはチーム対抗闇鍋ミツシヨン、「シャフランダム・ロワイヤル」について語り合うスレッドです。チームを組んだダイバーや相手への攻撃や中傷は絶対にやめましょう。

Q. シャフランダム・ロワイヤルって何？

A. 即興で集まったダイバーたちが五人のチームに分かれて戦う常設型のミツシヨンだよ

Q. チームのマッチング基準とかどうなってるの？

A. 基本的にはダイバーランクを参照してマッチングを組んでるみたいだよ、ただし事前にパーティー申請を送って参加すると、例外的にランクがどれだけ離れてても任意のプレイヤーと同じチームになることができるよ

Q. 一緒に遊びたいフレンドと一緒にチームになれますか？

A. 上でもちよつと触れたけど事前にパーティー申請を送った上で参加すると一緒のチームになれるよ

Q. まともな味方を引きたいんだけど

A. 乱数の女神様に祈るか自分で全て倒しましょう



124. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ぬわ疲

125. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
シャフランダム、手軽にバトルできるって意味じゃハードル低くていいんだけどソロで参加すると胃痛の種でしかねーわ

126. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
パーティー申請してない限り味方に何引くかわからんからな、即席

で連携取れってかなり難しいんだよな

127. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

わかっているやつと当たった時は安心して戦えるけどエクシアとかシャイニングみたいな格闘機が味方に来るとちよつと身構えちゃうぞ俺

128. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あーそれめっちゃわーかーるー

129. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ウツキー！ 今年は申年！ アイー！

130. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

チンパンはヴアルガに帰ってもらって……

131. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ワイレッドフレーム使い、格闘機の評判がゴリゴリ落ちて泣く

132. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いうて格闘機なんてリスク犯してでも強引に立ち回りたいところあるし、事故もあるから一概にチンパンとは断定できないんだよなあ

133. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

格闘機が五人集まって対面も格闘機五人だと最高に楽しくなれるぞ、別ゲーだけど

134. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

大乱闘GBNブラザーズやめろ

135. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いうて格闘機同士だと差し込むタイミング伺ってお見合いになることも案外珍しくないからまともな試合になる時もあるっちゃあるぞ、レアケースだけど

136. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

むしろスナイパーが五人固まった時の方が色々悲惨だと思うの

137. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そういうマッチングになった時に限って対面が格闘機五人とかだったりするんだよなあ、頭にきますよ（マジギレ）

138. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

すまん、パーティー申請なしでシャフランダムに飛び込むの俺は無
理だわ

139. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
実際のとこ固定のメンツ組んで参加してない奴らってどれぐらい
いるのさ

140. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
俺はたまにアヴァランチエクシア使ってソロで潜ってるぞ、フォー
ス戦は色々頭使うから連携もクソもない立ち回りするの楽しい

141. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ホツシーとか有名じゃね？

142. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
金ペリオン兄貴か

143. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
チームの構成によっちゃガチでめんどくせえんだよなあいつのハ
イペリオン……

144. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ビーム兵器と基本的には実弾も絶対殺すマンだからな、対ビーム
コーティング武装持ってないとメタられて爆発四散よ

145. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
そのホツシーが初心者に爆散させられてた件について
146. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

法螺吹くのも大概にしろよ、この閻鍋に初心者が潜り込んでくるわ
けないだろ！

147. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
シャフランダムだけはやめとけって先達は口を酸っぱくして言っ
てるからな……昔よりはマシになったといえはそうだけどさあ

148. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
マ？ とってG-Tubeのアーカイブ漁ってたけど確かに
ホツシーが爆散してる回あったわ

149. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
話はえーな、おい

150. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
サンキュー検証班

151. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ああ、確かにこれ初心者だな、試合テータ見てたけどホッシーを爆散させてたあの赤いストライク、ダイバーランクEだつてさ

152. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

転生組とかじゃなくてガチ初心者なのか、こいつ？

153. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それにしちや随分いい動きしてんな

154. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

次元霸王流……？

155. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

↑次元霸王流↑

156. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ちよつとあいたたな案件なのかこれ

157. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いや、次元霸王流ってちゃんと実在してる拳法だぞ

158. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジで？

159. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

知らなかったそんなの……

160. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

次元霸王流？ なんだそれは！

161. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ククク……次元霸王流とは若干マイナーだが実在する新興武術の

流派だぞ……！ 昔それを使ってGPDの学生大会で全国優勝した

ファイターがいたから、あの金ペリオンを爆散させたダイバーはその

再来かもしれないな……！

162. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

はえー、解説兄貴博識っすね……

163. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

GPDの学生大会が開催されてたのって結構前の話だろ？

164. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

かなり前の話だな、でも確かに次元霸王流がどうか言ってたファ
イターはいた気がする

165. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

案外そんな時に優勝した奴本人だったりして

166. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まさかそんなことある訳ないやろ……

167. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

どつちにせよこんな闇鍋に飛び込んでくる期待の新人ってとこだ
な、今度マツチングしたら俺のザメルで徹底的に歓迎してやろう

168. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

性格悪りーなおい



478. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いやー、凄い激闘を見た

479. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あのカオスガンダム兄貴も次元霸王流も結構頑張ってたな

480. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あのエアマスターベースの改造機もいい仕事してたな、腰にヴェス
バーつけてたから最後は勝ったようなもんだし

481. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ジェスタ・キャノンくん一人で随分と頑張っていましたね……

482. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ミラコロ展開したネブラブリッツ破壊してるあたりあの次元霸王
流、相当できるダイバーと見た

483. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

Ex-Sは完全に奇襲されてたからなあ

484. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いうてミラコロも万能装備じゃないからな、スラストの噴射光とかはごまかせないし、歩けば土煙が上がるし

485. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それでも姿が見えなくなるってのはやっぱり怖ええよ、今回に至ってはランサーダートと突撃の二段構えだったんだろ？

486. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

直撃弾だけはバルカンで叩き落として他はコラテラルダメージと割り切る覚悟……潔いのね、嫌いじゃないわ！

487. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

どっちが勝っても負けてもおかしくない試合ってのは見てて楽しいもんだな、乱数の女神様もたまにはいい仕事するらしい

488. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

シユバルツ・ブルーチーズ兄貴は潔いんだかそうでないんだかこれもうわかんねえな……

489. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「小手先の技など不要！」（ビーマシをぶちまけながら）
「拳で語り合おうぞ！」（ビーマシをぶちまけながら）

490. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

とりあえずその小手先そのものなビームマシンガンを捨ててから言ってくれないか

491. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

モビルファイターが射撃武器持ちじゃないって決まりはないけどブルーチーズ兄貴を見ると温度差で風邪引きそうになる

492. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

でもあの次元霸王流と普通に殴り合っても強かったよねブルーチーズ兄貴、狙撃警戒してないのはちよつとガバってたけど

493. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんだかんだMF乗ってるやつは射撃使おうが何しようが肉弾戦が本領みたいなどこあるからな

494. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

種運命リアタイ世代としてはあのカオスガンダムがちゃんとした

活躍を見せてくれただけで涙が出てくるぜ

495. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

相当作り込んだからなあ、機動兵装ポッドもあれマニュアル操作
だろ？

496. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

次元霸王流もつま先サーベルで食い止めてたからな

497. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

正直次元霸王流が吹っ飛ばされた時、カオスガンダム兄貴が勝った
と思ったよ

498. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あそこでエアマスターが自分のGNドライブ犠牲にしても体当
たりしてくるとか思わなかったなー

499. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それだけならいいけど最後ザメルにきっちりトドメ刺すための武
装残ってたのも凄かったな、あれ偶然か？

500. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

多分偶然だとは思うけど運も実力の内ってやつだぜ

501. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヴェスバーがちゃんと出力というかビームの速度を調整して使わ
れてるの初めて見たかもしれない

502. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

出力を絞り込んだ分弾速が速いビームと出力そのものは高いけど
弾速は遅いビーム撃ち分けられるんだっけか、ヴェスバー

503. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

設定ではそんな感じだな、まあ俺F91使う時はなんも考えず最大
出力でぶっぱしてるけど

504. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

装備が泣くぞ…:…:…といたいけど俺も全部を全部的確に使い分け
られてる訳じゃないからなんともいえねーわ

505. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

その点格闘機はわかりやすいよな、近寄ってぶん殴るなり叩き切る

なりすればいいんだから

506. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

相手が棒立ちのカカシならともかく戦場で動き回るやつ相手にそれやんなきゃいけないから格闘機はキツいって言われてんだよなあ……

507. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

引き撃ち有利な環境はなんだかで変わってないしなー、接近戦で相手をスマートに始末できるようなダイバーならBランクの壁とか余裕で突破してそう

508. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

魔境を超えた魔境の上位ランカーともなると気配だけでミラコロを察知してコックピットにカウンター天誅することもできるらしい

509. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それは流石に盛りすぎやろ……と思ったけどチャンプ見てたら普通にできそうだから困るわ

510. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

しかし次元霸王流か……俺も習ったらBランクの壁突破できたりすんのかな

511. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの赤いストライクの動き見るにただ次元霸王流習ってるだけでも違うっぽいけどな

512. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

と、いうと？

513. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺も空手小さい頃から習ってるからわかるんだけど、動きにちゃんとした「型」ができてるし、その上で柔軟に立ち回ってるから相当修行積んでる手合いだと思うぞ、あの赤いストライク

514. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

やはり筋肉……筋肉は全てを解決する……

515. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>513

話聞く限りは十年間ぐらい山籠り生活とかしないといけなそうだな

516. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
達人になってから戦場に出るのか戦場で達人になるために努力するのかって話だわな

517. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
結局は日々の努力の積み重ねよ、それだけじゃどうしようもないこともあるけどさ

518. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
結局それに尽きるんだよなあ……俺もちょっとシヤフランダム潜ってくるわ

519. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
味方にスカーレット隊を引く呪いをかけてやったぜ

520. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
遠回しな呪殺宣言はやめろ

521. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
>>519

とんでもない畜生で草

522. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
しかし次元霸王流ストライクカー、あいつもどこまで行けるだろう

ね
523. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

期待の新人と呼ばれて腐ってきたやつなんて山ほどいるし、まあ生温かく見守ればええやろ

524. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
環境的には圧倒的に厳しい格闘機で行こうって心意気は応援した

くなるな

……
……
……

⋮

Ep. 11 「始動、トライダイバーズ」

「それで、フォース組んだのはいいけど何すりゃいいんだ？」

チナツとの喧嘩、その翌日。

俺は欠伸を噛み殺しながら通学路を歩いていた。

その隣にはどことなく機嫌が良さそうなチナツが、デカイツインテールを揺らして歩いている。

「別になんかする必要は特にないわよ」

「そうなのか？ 攻略サイトにはとりあえず組んどけとか入っとけとか書かれてたけどさ」

「まあ確かにそれは事実よ」

「じゃあ何かやった方がいいんじゃないのか？」

「っていうか、GBNって基本規約に反することしなきゃ何やっても自由だからそれ決めんのがアンタの、リーダーの役目ってこと」

びしつと俺の胸板に人差し指を突き立てて、チナツはふん、と小さく鼻を鳴らす。

でも、リーダーっていったってその場の勢いで引き受けたようなもんだし、ランクこそ上がってるけどこっちはバトル漬けの日々だったもんだから、GBNで何ができるのかってのは残念ながら全くといほどわかってない。

そんな感じの言葉を返すと、チナツは呆れたような表情を浮かべて、小さな溜息と共に、フォースについて滔々と語り出した。

「フォースが他のゲームでいうところのクランってのはわかってるわよね？」

「その辺はな」

「だから、バトルしたいんだったらフォース戦のイベントにエントリーしたり別なフォースに戦いを持ちかけたりとかできるわけ。他にもフォースに入っていないと参加できないイベントとかもあるから、とりあえず入っとけって言われてんのよ」

俺としてはガンプラバトルができるんだったらなんでも構わないつもりだったけど、フォースに入っていないか組んでない状態だと、で

きることに制限がかかるってのはよく理解できた。

不便なもんだな、別にイベントの参加ぐらいフォース組んでなくてもできるようにしてやってもいいと思うんだけど。

その辺は今んとこどうでもいいとして、チナツが言っていたフォース戦って言葉はすごく気になる。

「フォース戦、って具体的にはどんなもんなんだ、チナツ？」

「読んで字の如くよ、フォース同士で戦うの。ただ、個人ランキングとも別にフォースポイントが設定されてて、フォース戦で勝つとフォースの順位が上がるのよ」

「フォースにも順位があるのか！」

「そりゃあるでしょ、クランみたいなものだから」

なるほど、要するに個人で強くなる分にはフォースに入ってる必要はないけど、気の合う仲間だったり実力が近いやつら同士で組んだフォースで、皆で強くなる分にはフォースに入らなきゃいけないってことなのか。

マフユとはシャフランダム・ロワイヤルと一緒に戦ってたけど、あれはフォース組んでた訳じゃないから個人同士って判定で、フォース全体でエントリーするとフォースメンバーってことでランキングが上下する。

なるほど、わかってきたようなわかってきてないような感じだけど、チナツが言わんとしてることは把握したつもりだ。

「一応訊いとくけどさ」

「なに？」

「フォースで一番強いとこってどこなんだ？」

GBNの頂点に立っている、個人ランキング1位の存在がクジョウ・キョウヤって人なのは前に教えてもらったけど、そういうフォースについては訊いたことがなかった。

まあ、その時は存在を知らなかったんだから仕方ないとはいえ、一度存在を知ってしまったらその頂点を気にするなって方が無理筋だ。

期待に胸を躍らせている俺を呆れた様子で見つめていたチナツは、こほん、と咳払いをすると、勿体ぶったように口を開く。

「知りたい?」

「そりやもう」

「……別に知ってどうにかなるもんじゃないけど、フォースランキン
グ1位は『AVALON』。クジヨウ・キョウヤが率いるフォースよ」
「クジヨウ・キョウヤって……」
「そう、チャンピオン。個人でもフォースでも二冠を達成してる、言っ
てみれば生きる伝説みたいなものね」

第一回GBNチャンピオンシップ以降、その座を譲ったことがない
らしいゲームチャンプ、クジヨウ・キョウヤ。

そんな男が束ねているフォースもまた、このゲームの、GBNの頂
点だというんだから凄まじい。

要するに全国大会とかオリンピックで、個人の部でも金メダル、団
体の部でも金メダルを取る選手みたいなもんなんだろう。多分。

「そのクジヨウ・キョウヤって人、本当にすげーんだな」

「そうね、あの人が負けてるとこなんて誰も想像できないと思うわ」
——フォースランキング第2位、智将の二つ名を持つ「ロンメル」が
率いる「第七機甲師団」もこの前のフォースバトルトーナメントで善
戦してたけど、最終的に勝ったのは「AVALON」だったし。

チナツはそんな長台詞を一息で捲し立てると、チャンプという途方
もない壁を想像してなのか、少し疲れたような表情を見せる。

しかし、フォースランキング第2位でも「AVALON」は、クジヨ
ウ・キョウヤは倒せないのか。

まあ、一回もチャンプの座を譲ったことがないってことはそういう
ことなんだろう。

その人の強さ、いつかはちゃんとこの目で見てみたいもんだ。

ぼやぼやした眠気を振り払って、闘志の炉にめらめらと火が燈る。

GBNは遊びかもしれないけど、遊びだつてやるんだつたら全力で
やりたいし、全力で勝ちにいきたい。

だから俺も、いつかはクジヨウ・キョウヤに挑めるだけの強さをこ
の手にしたいもんだな。

静かに拳を固めた俺を見て、チナツは呆れ気味に肩を竦める。

「アンタ本当、そういうところよね」

「何がだ？」

「なんでもないわ、ちょっとアンタが羨ましく思っただけ」

何が羨ましいのかはわからんけど、チナツだって勝ちに行くためにGBNやってるんじゃないのか。

と、喉元まで質問が出かかったところで、俺は空気と共にその言葉を呑み下した。

理由なんて人それぞれだ。危うく決めつけるところだったけど、チナツには「強くなりたい」以外にも何かしらの理由があつて、それでGBNをやってるんだろう。

そんなことを考えながら歩いている間にも、学校の正門が視界に飛び込んでくる。

さつさと勉強終わらせて、修行もやって、それから何するか考えよう。

ようやく思い出したけど、フォースとして何するかについては結局決まんなかったからな。



「そんなわけで、俺はフォース戦がしたいと思う」

「そんなこつたらろうと思つたわよ」

「……あはは」

授業を受けている間ずっと考えてたけど、俺がGBNで今やりたいこと、を突き詰めていくとそれはガンプラバトルに行き着くわけで、せっかくフォースを組んだんだから他のこともやってみればいいんじゃないかっていわれても、バトルが楽しいんだから仕方ない。

俺とマフユだけだったらいつも通りシャフランダム・ロワイヤルに乗り込んでたんだろうけど、それでもせっかくフォースを組んだんだから、ということ導き出した答えが、フォース戦だった。

うーん、自分のことながらシンプルすぎる。

「ちようど今フォースバトルイベントやってるわね、それにエント

リーしてみる？」

「……確かに、やってる……ね……」

フォースネストと呼ばれる、宇宙戦艦の一室みたいなデフォルトで支給された部屋の中。

チナツはどこことなくメカニカルなテーブルと椅子に腰を下ろして、何事かを表示したウィンドウを俺に投げ渡してくる。

フォースバトルイベント。確かにそこにはそう書かれていて、報酬という欄には、幾ばくかの賞金と、アクセサリーが手に入ることも記載されていた。

「アタシはアクセサリーに興味ないけど、渡りに船ってやつじゃない？　一々掲示板でバトルの募集かけたり、野良でマッチング待ちするよりはそつちの方楽だし」

「へー、普通は募集しなきゃいけないもんなのか……まあフリーバトルみたいなもんか。俺はチナツの案でいいと思うけど、マフユはどう思う？」

アクセサリーは俺も正直いらぬ。

だからマフユが貰ってくれば助かるし、嫌だっというんだったら無理にエントリーする気もない。

あくまで全員の意見が一致した上でやらないと、後々に禍根を残すからな。

「あ……その、私も、チナツさんの案でいいかなって……」

「じゃあ決まりだな、アクセサリーは嫌じゃなければマフユが受け取ってくれるか？」

なんせ俺にもチナツにも必要ないものだし。

マフユも受け取りたくなければ、あとで売却してしまえばいい。

そんな風情で、俺はマフユに問いかけた。

「……え、えっと……私でいいの、ユウヤ君……？」

「俺にもチナツにも必要ない……って言い方すると余り物押し付けてるみたいで悪いんだけどさ、もしマフユが欲しいっていうならそれでいいんだ」

アクセサリーも無慈悲に売却されるよりは誰かの手に収まったた

方が嬉しいだろうからな。

俺の言葉にしばらくマフユは目を白黒させると、ごくり、と固唾を飲んで、小さく首を縦に振った。

「……あ、ありがとう、ユウヤ君……」

「気にすんなって！ それじゃフォース戦で決まりだな！」

やることが見つかったようで、とりあえずは一安心だ。

リーダー権限でイベントへの参加を申請すると、秒速でそれは受理されて、マッチング相手のフォースが表示される。

「GHC、第百八十八特務分隊……？」

その名前を読み上げるなり、ぼんやりと頬杖をついていたチナツと、もしもじとしていたマフユの顔が蒼白になっていく。

もしかして、なんかヤバい相手でも引いちまったんだろうか。

俺の方もぎこちなく二人に視線を向ければ、チナツとマフユは視線を交わして、小さく頷いてみせた。

『GHC』ってアンタ……」

「……そ、その……『GHC』って、GBNの中でも一番アライアンスの数が多いフォースなの……」

アライアンス。またよくわからん単語が飛び出てきたけど、多分俺が感じていた嫌な予感というか、ヤバい相手と当たったかもしれない、という予想はどうやら当たっていたらしい。

それに、フォース戦イベントの概要もよく読んでみれば五対五の殲滅戦という趣旨が書かれている。

フォース戦がシャフランダム・ロワイヤルみたいに欠員を補充してくれない以上、俺たちはその「GHC」とかいうヤバそうなやつらと三対五で戦わなきゃいけないってことになる。

——でも。

俺は唇の端を持ち上げて、不敵に笑う。

誰が言ってたかは知らないけど、ピンチの時こそノーガードで笑うべきなんだ。

「まあ、ヤバい相手と当たったってんなら、勝っても負けてもいい経験になるはずだろ！」

「ユウヤ、アンタ本当バカじゃないの？」

「……ち、チナツさん……」

「……まあでも、相手がいかに『GHC』であったとしても、ただで負けてやるのも癪ね」

「だろ？　へへっ……燃えてきたぜ！」

戦術とか戦略とかもちゃんとなっておおきなきや勝てるような相手じゃないんだろうけどそれはそれ、これはこれ。

始まる前から諦めて縮こまってたんじゃ、勝てるものも勝てないからな。最初から負けてるようなもんだ。

実のところ、GHCという名前自体は俺も聞いたことがある。

グローリー・ホークス・カンパニー……リアルで色んな事業を展開してる総合商社のはずだった。

まあ、相手はそれを振ってるだけなんだろうけど、偶然もあつたものだな、本当に。



「諸君、歓迎するよ。僕がアトミラーだ」

翌日、フォース戦イベントの舞台となった森林地帯に小高くそびえる丘の上。身長が高い筋肉質な男の人が、俺たちに握手を求めてくる。

「えっと……俺はユウヤです！　こっちの黒髪が長い子がマフユで、こっちのデカイツインテールがチナツっす！」

「……よ、よろしくお願ひしま、す……」

「よろしくお願ひしますっ！」

「ははは……その若さはいいね。君たちの初々しさを見ていると、始めたての頃を思い出すよ」

いかにも船乗り、といった感じの服装に身を包んでいるアトミラーさんは、フランクに笑ってそう言った。

そこにはなんとというか、歴戦の貫禄とでもいうべきものが滲み出ている。

「ところでアトミラールさん、一つ訊きたいんですけど」

「何だね？ 企業秘密以外なら何でも答えてあげよう」

「フォース名の『GHC』って、リアルの『GHC』となんか関係あるんっすか？」

俺の質問に、チナツが何訊いてんだバカ、とでも言わんばかりのキツイ視線を投げかけてくるけど、言ってしまったものはもうしようがない。

「というかその辺訊かないとすつきりしなかったから、どの道訊いてただらうけどな。」

「ふ……はははー！」

「アトミラールさん？」

「いやいや、その質問をされるのも久しぶりでね……結論からいえば『ある』よ。僕らは……『グローリー・ホークス・カンパニー』は、自社の宣伝も兼ねてGBNをやっているからね」

「自社……？」

「君の思う通りだよ、ユウヤ君。僕らはリアルの『GHC』で、僕は僭越ながらその社長をやっている……といったところさ」

うわあ。

何だか色んな意味でヤバいこと当たったみたいだ。

リアルの「GHC」といや俺みたいな世相に疎い人間だつて知っている名前だ。スプーンからファッションから家電製品まで、手掛けている製品は数知れずの大企業。

要するにそのぐらいデカイ会社の社長が目の前にいるってことだ。

アトミラールさんは気さくに笑っているけど、俺もマフユもチナツも、それを聞いたことで一様に表情は引きつっていた。

「アトミラールさんが三桁ランカーなのとアライアンスが二万人いるのは知ってましたけど、まさかリアル社長だったなんて……アタシ、えっと……御社の化粧水、愛用してますー！」

「それは嬉しい話だ。ありがとう。GBNでの活動も追ってくれているように何よりだよ。ただそんなにかしこまらなくなつていいさ、ここでは僕も一人のダイバーだからね……」

「……え、えつと……今回のバトル、アトミラールさんも参加される、
んですか……？」

「いいや、僕はただの応援だよ。新しく『GHC』に加盟してくれたメ
ンバーの訓練も兼ねてつてところだね」

マフユの問いを受けてアトミラールさんは、背後に直立不動で立つ
ていた男たち五人組を指し示す。

指定の制服っぽいものでダイバールックが統一されているその五
人組は、まるで訓練された兵隊のように、アトミラールさんが喋って
いる間は一言も口を開かなかつたし、その視線は真つ直ぐ向いたまま
ブレていなかった。

マジで軍隊じみてやがる。

「それでは諸君、五対三という形にはなってしまったが、互いに全力で
このバトルを楽しんでくれたまえよ」

『サー！ イエッサー！』

五人組に激励のメッセージを送ると、応援のために設営されたと思
しきテントにアトミラールさんは引き返していく。

そこには巫女服を改造したような衣装に身を包んだ女性と、小柄な
女の子が控えていた。

『GHC』……一筋縄じゃいかないわよ。わかってるわね？ ユウ
ヤ、マフユ？」

「おう、作戦通りにやれば……！」

「……す、数的不利は覆せる……！」

「そういうことよ、それじゃリーダー、激励は任せたわ」

「ああ！ それじゃあフォース、トライダイバース……！」

——ファイト、応！

タイミングを揃えて、「GHC第百八十八特務分隊」に、まずは気持
ちで負けないように俺たちは声を張り上げる。

初めてのフォース戦が強敵との戦いってのも因果な話だが、それ
もタダで負けてやるつもりはないからな。

Ep. 12 「銀翼を撃ち落とせ」

事前に俺たちが打ち合わせていた作戦はこうだ。

まずはマフユのG―エクリプティカと、チナツのアストレイ……
「ガンダムアストレイシクザール」との間でデータリンクを行う。

そして、G―エクリプティカが先行したところで敵の情報をチナツに伝達。チナツは狙撃ポジションについて、俺はマフユの後ろから追いかける形で遊撃につく。

でも、「GHC」がどちらかという個々の実力ではなく戦術的な面での勝利を常道としているフォースだということを考えると、どこまでそれが通用するかはわからない。

ただそれでも、既に三対五というデイスアドバンテージを背負っている以上、どうあれ最低でも開幕に一機は落としておきたいところだった。

作戦通り、巡航形態に変形したマフユのG―エクリプティカがあえて突出して、位置を晒す。

この森林地帯の中には十中八九トラップが仕込まれていると考えがいい、と事前にチナツが言っていた通りに、俺もまた警戒を厳にする形で、森林地帯の巨大な木々に身を隠しつつ、マフユの後を追いかけていた。

『真正面から単機で来るか！ チャーリーとデルタはそのまま警戒態勢を維持、俺とブラボーで飛んできたやつを叩く！』

『了解！』

「……っ、来る……！」

森林地帯に身を隠していた、灰色と青のツートンカラーに塗り替えられ、105ダガーのビームライフルとシールドを持ったウインダムが二機飛び出して、マフユのG―エクリプティカを追いかける。

だが、そもそもの出力が違いすぎるのか、ジェットストライカーのエンジンを全開にしても、曲芸飛行じみたマフユのマニユーバにはついていけなかったようだ。

「……妙だな」

マフユにあのウインダムの特務分隊を任せでも大丈夫そうではある。

ただ、どうにも引つかかるといふか、最初から数的優位に立っているはずの「GHC第百八十八特務分隊」が、突出してきたマフユに對して振り分けた戦力の数がたった二機、というのは違和感を拭えない。

二対一なら、極論をいってしまえば何とかなる場面はあるかもしれない。

だが、それが三対一になると可能性は極端に狭められる。

だったら、マフユを確実に墜としたいなら、振り分けるべき戦力は二機じゃなくて三機じゃないとおかしいんじゃないのか？

どうにも辻褄が合わない戦力比に違和感を感じたものを抱えながら、歩行で慎重に、森林地帯を進んでいた時だった。

何かが足に引っ掛かったような感覚と、微妙な抵抗のようなものを感じて一瞬、ストライク焔の足が止まる。

「畜生、トラップか！」

ガラガラと音を立てて鳴子が響くと同時に、ストライク焔の足元に仕掛けてあった地雷が爆発。

ぼんやりとしてたからこうなるんだ、と自分に強く言い聞かせながら、俺は不意を打たれないように周囲を警戒しながらビームピストルを構える。

コーションが点灯、アラートの先に向けてビームピストルを放つが、しかし。

「これもトラップなのか!？」

相手が射ってきたのかと思っただけ、起きたのは小規模な爆発でしかなかった。

そんな俺を嘲笑うかのように、森林地帯に身を潜めていたのであろう、アナザートライアルソードストライカーを装備したウインダムが、死角から対艦刀を構えて斬りかかってくる。

『アルファ、ブラボー、ビンゴだ！ こっちのストライクは俺とデルタで片付ける！』

『アルファ了解！ チャーリー、健闘を祈る！』

ビームピストルの下部から発振したビーム刃で、対艦刀「シユベルトゲベル」の一撃を俺はなんとか食い止めていたが、その後から再びアラートが点灯、相手の足元に小内刈りの要領で足を引っ掛けて転倒させると、無理やりスラスターを噴かしてその警告が示す射線から離脱した。

本当にギリギリだったとしか言いようがない。

俺が射線から離れた一瞬の内、赤いスパークを纏った白いビーム、SEED系に特有のそれが、木々を焼き払いながら通り過ぎていく。

「危ねえ……こいつら、もしかして」

『今頃気付いたところで遅い!』

——俺たちの位置を最初から把握していたのか。

喉元まで出かかった言葉を遮るように、さつき転ばせていたアナザートライアルソードストライカー装備のウインダムが、再び対艦刀を構えて斬りかかってくる。

さつき俺の背後から撃ってきたやつは十中八九ランチャーストライカー装備だろう。

マフユに三人戦力を差し向けなかったのは、多分この奇襲で俺を始末してからソード装備のウインダムか、もしくはランチャー装備のウインダムのどっちかが始末に行く算段だったのかもしれない。

だとしたら、この状況をなんだかんだ無傷でクリアできたのは予想以上にアドバンテージが大きい。

ここで作戦変更、俺はチナツのアストレイシクザールにデータリンクを送る。

「チナツ、今の見えたか!？」

「ランチャー装備の射線ね!　しっかり見えてたわ!」

「サンキュー!」

マフユをあえて突出させたのは、相手にスナイパーの類がいるかどうかの偵察も兼ねてのことだ。

G―エクリプティカの機動性なら、並の狙撃を振り切ることは難しくはない……かはわからないけど、マフユならやれると信じての采配だった。

ただ、要はスナイパーや砲撃型がいるかどうかを知りたかったのだから、それがいると判明した今、無理に最初の作戦にこだわる必要はない。

俺はビームピストルを放り捨ててビームサーベルを引き抜いた。まずはこのソード装備から片付けて、数的不利を少しでも覆す！

『拳を使わず剣で勝負か……舐められたものだな！』

「そこまでバレてんのか……でも、舐めてるつもりは全くねえぜ！」
どういうわけかは知らないけど、俺が次元霸王流拳法を得意としていることは相手にも筒抜けだったらしい。

ただ、ビームサーベルでの斬り合いを選んだのはランチャー装備のウインダムがいつ撃ってくるかもわからない都合と、あとは間合いを図る布石のためだ。

舐めプのつもりは全くないとだけは言っておこう。

対艦刀は一撃がデカイ分取り回しづらいことを相手もよく知っていたのか、シユベルトゲベルを背部のウエポンラックにマウントすると、腰のビームサーベルを引き抜いて、じりじりとこつちの間合いを図るかのように距離を取る。

どうする。先に仕掛けるか、後の先を取るか。

ランチャー装備もいる以上、時間はそうかけていられない。

一秒がどこまでも薄く引き延ばされていくような錯覚の中で、俺が選んだ選択は。

「はあああっ！」

『真正面から来るか！ デルター！』

「今だ、チナツ！」

「言われなくても！」

俺自身を囚にすることで、ランチャー装備の視線を釘付けにする。これが俺の選択だった。

砲撃型は足が遅めだと相場が決まっている以上、そう大胆な砲撃ポイントの変更はできない。

今頃チナツは拡大したマップの中から、ランチャー装備のウインダムがどこから撃ってくるかを予測している頃合いだろう。

俺は墜とされるかもしれない。

ビームサーベル同士をぶつけて鏝迫り合いを繰り広げながら、冷や汗がこめかみを伝うのを感じる。

ただ、そうなたらそうなたでチナツがマフユの援護に行ってくれるだろう。そう腹を括って、俺はエールストライカーのスラスタを全開にした。

——刹那、閃光が走る。

俺を狙った超高インパルス砲「アグニ」による一撃が瞬いたかと思えば、それを貫くように、一条の閃光が走り、ランチャー装備のウインダムが潜伏していたと思しきポイントで大爆発が起こった。

こつちもエールストライカーを失う結果になったけど、戦局全体で見ればイーブンドころか収支はプラスだ。

『デルタ!? 応答しろ、デルタ!』

「隙だらけだぜ!」

ソード装備のウインダムの土手っ腹に正面から蹴りを叩き込むと、俺はビームサーベルを両手に構えて跳躍、体勢を崩して後ろにすっ転んだウインダムのコックピットにサーベルを突き立てた。

『こちらチャリー、してやられた……! あとは頼んだぞ!』

これで条件は三対三。互角のラインまで持つてこれたってことだ。ただし、エールストライカーを失った以上、俺は飛ぶことができない。

リーダーを見る限り、マフユはまだ何とか二機のウインダムを相手に持ち堪えているようだったが、そろそろ限界が来てもおかしくはないだろう。

「マフユ、大丈夫か!」

「ごめんなさい……ちよつと、ううん、とつても、きつい……!」

「わかった! チナツ、マフユの応援に向かつてくれ!」

「了解したわ! アンタは!」

「俺は残りの一機を叩く!」

どこに潜んでいるかはわからねーけど、こつちの動きが筒抜けだった以上、アイザックのような偵察型が相手の中にいることは確実だろ

う。

仕掛けたやつらを倒したとはいえ、トラップだらけの森を抜けてそいつを探すのはなかなか骨が折れそうだったけど、その時。

「……データリンクを、ユウヤ君……!」

「マフユ!」

「……あと一機が潜んでいるところ、見つけたから、その……!」

「ああ、任されたぜ!」

マフユのG―エク립ティカから送られてきたデータには、敵の偵察型が潜んでいるであろうポイントがきっちり記されていた。

トラップの配置についても大まかなあたりをつけてくれていて、ウインダム二機を相手にしながらもこれだけのデカい情報を持ってきてくれたことに、俺は感謝する。

だったらあとは隠れ潜んでいる偵察型を徹底的にぶつ叩くだけの話だ。

トラップが配置されているルートを避けつつ、全力で機体を指定のポイントまで疾走。

そのまま俺は、一気に森の中を駆け抜けていく。

「待ってやがれよ、偵察型あ!」

出くわした時は、全力で拳を叩き込んでやる。



戦いの趨勢は戦力の二割を失った時点で決まるとか決まらないとかそんな話だったけど、メインアタッカーであるランチャー装備のウインダムとソード装備のウインダムがやられたことで、「GHC第百八十八特務分隊」の戦力は大きく削がれていたといってもいい。

トラップを迂回し、踏み越えられそうなのは無理やり踏み越える形で、偵察型が潜伏していたポイントまでたどり着いた俺は、そいつが持っていたビームカービンを回避しつつ、順当にクロスレンジまで距離を詰めていた。

『チャーリーとデルタはロスト、ブラボーもロスト、アルファは囲まれ

た……くっ!』

「さてどうするよ、特務分隊!」

『我々として末端とはいえ「GHC」の誇りがある! このままパーフェクト負けをするわけにはいかんだ!』

背中に負っていた巨大なレドームを切り離すと、ビームカービン装備のウインダムは左手でビームサーベルを引き抜いて、カービンを連射しながら俺に接近してくる。

レーダーを見る限り、チナツとマフユはうまいこと連携をとってくれているようだ。

なら、俺は存分に、こいつの相手に集中できるということだ。

振り抜かれたビームサーベルを回避、クロスレンジで前につんのめって体勢を大きく崩したウインダムに、膝蹴りを叩き込む。

『ぐあ……っ!』

「悪いがこのまま決めさせてもらうぜ……!」

『そうは……行くか!』

膝蹴りを受けたウインダムは、最後の足掻きだとはかりにバルカン砲を連射するが、その程度の攻撃であればフェイズシフト装甲で受け止められる。

「次元霸王流! 蒼天紅蓮拳ツ!」

『うわあああつ! 提督、申し訳ございません!』

強烈なアッパーカットをコックピットに叩き込めば、そのままの勢いでカービン装備のウインダムは爆散した。

だけど、まだバトルが終わったという通知は届いていない。

上空を見上げれば、最後の一人になっても尚粘っているジェットストライカー装備のウインダムがマフユの射撃に翻弄されながらも、何とかチナツのアストレイシックスザールを倒せないものかと足掻いている様子がモニターに映る。

いいね。最後まで諦めないってのは好感が持てる。

だけど、それはそれとしてもう状況はチェックメイトだ。

「はあああつ!」

デステイニーのウイングから光の翼を展開し、対艦刀を構えたマフ

ユのアストレイシックザールが、ウインダムの胴体を横薙ぎに斬り裂く。

「これで……っ！」

万が一がないよう、ダブルタップの要領でマフユのG―エクリプティカが、切り飛ばされた上半身、ウインダムのコックピットがある部分に正確な射撃を叩き込む。

【Battle Ended!】

【Winner：トライダイバーズ】

そして、勝利を告げる機械音声のアナウンスが俺たちのコックピットに飛び込んできたことで、初めてのフォース戦は、見事、勝利で飾られたのだ。



「いやはや……見事な戦いぶりだったよ、『トライダイバーズ』」

「いえ、こつちこそ事前に情報調べられてるなんて思いもみませんでしたよ」

「気を悪くしたのならすまない。ただ、情報戦というのは戦術の基本だね。敵を知り、己を知れば百戦危うからず……ということだ。今回は生憎、負けてしまったがね」

バトルが終わったあと、アトミラールさんが観戦していた丘に機体を着地させた俺たちは、少しでも残念そうに、それでもどこか晴々とした様子のアトミラールさんと握手を交わしていた。

「これではロンメルに笑われてしまうな」

「ロンメル?」

「ああ、僕の友人のような……まあ、腐れ縁がある相手だ。もつとも、君たちには『第七機甲師団』の隊長と言った方がわかりやすいかな?」
「ロンメルって、あのロンメル……アトミラールさん、顔が広いんですね!」

「はは、そうでもないさ、チナツ君。君の狙撃も見事なものだったよ」
「パパから教わりましたから!」

そういえばチナツの親父さんは現役時代スナイパーとしての役割も担ってたとか、前に聞いた気がするな。

食い気味にアトミラルさんに言葉を投げかけているチナツに対して、マフユはようやく一息つけたとばかりに、ほっと胸を撫で下ろしていた。

「マフユ、大丈夫か？」

「うん……ありがとう、ユウヤ君……私、ちゃんと役に立ててたかな……？」

「ああ、ばつちりだったぜ！ マフユがいなきや、トラップだらけのところで偵察型を探さなきやいけなかったからな！」

「……そっか……うん、役に立てたなら、よかった……」

眦に浮かんだ涙を拭いながら、マフユは控えめにはにかんだ。

役に立つとか立たないとか、気にするようなことでもないとは思うんだけど、マフユにも何か踏み込まれたくないような、思うところはあるのだろう。

「さて……君たち『トライダイバーズ』は見事な戦いぶりを見せてくれたわけだが、よければ我々『GHC』とアライアンスを組まないかい？」

少しだけ気まずそうに小さく咳払いをすると、アトミラルさんはそんな提案を持ちかけてくる。

超巨大フォースの一員になる。それも悪くないような気がしたのは、やっぱりアトミラルさんのような人に認められた嬉しさからなのだろう。でも。

「すみません、気持ちはありがたいんですけど、それはお断りします」「ほう、どうしてだね？」

「俺は……俺たちは、自分の足で行けるとこまで行ってみたいんです」マフユもチナツも、口には出さなかったとはいえ、同じことを思っていたのか、静かに頷いてくれた。

別にどこかに所属するのが悪いわけじゃないのはわかっている。それでも、俺たちは俺たちとして、前に進んで……強くなりたいたってだけで。

「そうか……振られてしまったな。だが、君たちの成長は楽しみにしているよ、心の底からね」

——では、機会があればまたどこかで会おう。

アトミラールさんはそう言い残すと、マントを翻し、踵を返して去っていった。

「随分壮大な啖呵切ったじゃない、ユウヤ」

「お前も反対しなかったろ？」

「まあね。マフユはこれでよかったの？」

「はい……私、ユウヤ君と一緒に、遊びたいだけだから……えつと、チナツさんとも……」

「そっか、何はともあれ……」

『お疲れ様！』

初めてのフォーース戦を勝利で飾ることができたお祝いの代わりに、俺たちは手を重ね、声を揃えてそう言った。

誰か一人欠けていたら成し遂げられなかった勝利。皆で掴み取った勝利。それもまた、師匠が言っていた「想像を超えた」、GBNの、ガン普拉バトルの楽しさなのかもしれないな。

Ep. 13 「今は少しの休息を」

「くあ……あ……」

眠い。マジで眠い。

いつもの通り早起きしてランニングしてからシャワー浴びて朝飯食って、みたいな生活を続けてるだけで心当たりは何もないんだけど、とにかく眠い。

このままじゃマフユのところにハンバーガーを届けた時点で睡魔に負けてダウンしかねない、と必死に眠気と欠伸を噛み殺しながら自転車を高級住宅地に向けて飛ばしていくけど、それでも目蓋がどことなく重い。

「おかしいな、何も変わったことはしてねーはずなんだけどな……」

強いていうなら、いつもの生活にGBNが組み込まれて結構な時間が経ったってぐらいか。

何はともあれ、今日が休日なのは不幸中の幸いだった。

これで稽古の時とかにぼんやりしてたら父さんに、師匠に身が入ってないってどやされてただろうからな。

いつ来ても相変わらずデカイ、「ミホシ」という表札が貼られているオートロックの門。そこにくつついてるインターフォンを押して、家の主であるマフユに呼びかける。

「すいません、ヴェスバーイーツですけどー！」

ダチの家とはいえ、仕事中は仕事だ。

必ずマフユの家を最後に訪問するように予定は組んであるけど、飯を無事届けるまではあくまで配達人と客の関係だ。

公私混同はよくないからな。

『は、はい……今、門を開けますね……』

インターフォン越しにマフユの声が聞こえてくると同時に、鉄の門がゆっくりと左右にスライドして開いていく。

自転車を降りて、相変わらず立派な庭園の真ん中を歩いている時にも、睡魔の野郎は絶賛活動中だった。

寝てないってはずはないんだけど、マジで何なんだろうなこの眠さ

は。

大体、睡眠時間を無理に削ってたら母さんからダイバーギア没収の刑を受けかねないんだから、最低でも六時間は寝るようにしている。まさか、それでも足りないってことはないんだろうか。

なんてことを薄らぼんやりと考えている間に、玄関前までたどり着いていたようだ。

かちやり、と鍵が開く音が聞こえた少しあと、ゆっくりとマフユは玄関口からその顔を覗かせた。

「いつもありがとう、ユウヤ君……」

「ああうん、指名されたら張り切って届けるのが仕事だからな」

このヴェスバーイーツ、一応というかなんというか、一度届けてくれた配達人を指名する形でもう一度同じ人に届けてもらうことができるようになったている。

理由は色々あるんだろうけど俺の知ったところじゃないからいいとして、休日、マフユの家に来れているのはこの制度のおかげといってもいい。

背中のザックからいつものハンバーガーとポテト、そして飲み物がセツトになったものが詰め込まれている袋を取り出してマフユに手渡すと、俺はザックを置いて、零れてきた欠伸を漏らす。

「……………くあ……………」

「……………えっと、ユウヤ君。もしかして、眠いの？」

「あー……………正直な話情けねえんだけど、うん。マジで眠い」

大したことはしてないはずなんだけどな、と、家に入り込みながら、つい口をついて出てしまった言葉に、マフユは小首を傾げて考え込むような仕草を見せた。

「うーん……………えっと、ユウヤ君って、修行もして、学校にも行って、アルバイトもしてGBNもやってるんだよ、ね……………？」

「そんな感じだけど……………それがどうかしたのか？」

「……………えっと、これ、私の勝手な想像なんだけど……………ユウヤ君、ちよつとGBNで疲れてるのかな、って……………」

「GBN疲れ？」

「うん……特に最近は、バトルばかりしてたから……」

それが悪いってわけじゃないんだけど、とマフユは言葉が続ける。

GBN疲れ。自分では全く意識してなかったけど、そう言われればそんな気もしてきたような。

「確かに最近バトル漬けだったからな……」

そのためにGBNを始めたんだから、それに疲れるってのもなんだから変な話ではあるんだけど、武道だってスポーツだって、いくら好きでやっていても疲れるのは普通のことだ。

そんな当たり前を俺は見落としていたのかもしれない。

「……えっと、どうするの、ユウヤ君……？ 今日はお家に帰って、寝る……？」

「うーん……それだとマフユに悪いだろう？」

「……私は、大丈夫だ、よ……？」

遠慮がちにそう言ってるけど、表情からなんとなく寂しいのは伝わってくる。

マフユの方こそ無理しなくていいのにな、と思ったけど、厚意を向けてくれていいることには感謝しなくちゃいけない。

「ありがとな、マフユ。でも大丈夫だからさ」

「……そっか、なら……よかった……」

「だから今日もガンダムとガンプラのこと、教えてくれよな！」

「……うん、私、頑張る、ね……！」

張り切ってぱたぱたと階段を上って、Blue-rayやら何やらが置いてあるのであろう自室にマフユは向かっていく。

その間床に置かれていたハンバーガーの袋を片手に、俺は一足先にリビングで待つ。

すっかり週末の日常になった風景に、そこはかたなく安心感を覚えながら俺は、柔らかいソファに背中を預けて。

——睡魔の野郎にトドメを刺されたのだった。



「……ってなわけで、しばらくバトルは自重しようかなって思うんだけどさ」

「バトルバカのアンタにしちゃ珍しいわね」

フォースネストの一角でそんな恥ずかしいいきさつをチナツにも共有した上で、本格的にヤバいと判断した俺は、その方針を打ち立てることに決めていた。

思えば確かに気持ちりが張り詰めるような戦いばかりだったのが、この前の「GHC第百八十八特務分隊」との戦いで限界に達してしまっただろう。

「改めてごめんな、マフユ」

「ううん。疲れてるんだから、しょうがないよ……」

「……ガンダムのことなら、アタシだって教えてあげられるのに」

マフユに頭を下げるのとタイミングを同じくして、チナツが何事かを呟いたものの、疲れてるのもあってそれを聞き取ることはできなかった。

ただ、経験則としてチナツが小声で何かを呟いている時に訊き返すと、高確率でどやされるからここは知らぬが仏ってやつだろう。なんか違う気もするけど。

「でも実際問題どうすんのよ？ この前『GHC第百八十八特務分隊』に勝つてからこつち、フォース戦の依頼が殺到してんのよ？」

「そんなにか？ 通知とか開いてないからわかんなかったぜ」

「アンタ仮にもリーダーでしょうが……通知ぐらい開きなさいよね」

「悪い」

こういうゲームの通知とかって、大体後回しにしちゃうんだよなあ。

昔やってた人外魔境のバグだらけなVR格闘ゲームでも、フレンド依頼とか一週間ぐらい放置してたこともあるし。

そんな具合に思い出に浸りながら、手元のウィンドウからフォースに関する通知を開くと、確かにチナツの言う通り、そこにはフォース戦申し込みの依頼が殺到していた。

「うわ、とんでもねーことになってやがる……」

「……わ、私にも見せてもらって、いい……?」

「おうよ、こんな感じ」

ウィンドウを覗き込んできたマフユに手元の画面を向けてやると、その表情は瞬く間に、驚きの色に染め上がる。

依頼の件名には「三対五で『GHC』の分隊にパーフェクトゲームをした新進気鋭のフォースへ」とかそんなけつたいなことが書かれてるけど、それって凄いいことなのか?

夢中でやってたから正直よくわかんねえ。

「分隊で入りたてとはいえ、『GHC』つてこのGBNじゃかなりの大御所フォースで、フォースランキング2位の『第七機甲師団』とも張り合ってたから、そりやそうもなるでしょ」

二人して宇宙を背景にして驚く猫のような表情になっていたところに、チナツがどこ呆れたように溜息を零しながら補足する。

超大規模フォースアライアンスで、総戦力が二万人もいるとはこの前知ったけど、あの戦いで俺たちがそこまで注目されるとは思っていなかった。

「想像力が足りてなかったってやつか」

「かもね。それはそれとして、フォースの方針決めるのはリーダーのアンタなんだから、アタシはそれに従うだけよ」

「こんだけ俺たちと戦いたいってやつらがいるのはありがたいんだろうけどなあ……」

流石にリアルに支障が出てきたとなると、母さんにどやされかねないことだし、父さんが、師匠が言ってたように、時にはあえて戦いから離れることで戦いを見つめ直すのもありなのかもしれない。

「私も、ユウヤ君が決めたことに従う、よ……?」

「そっか、そんじゃとりあえずしばらくはちよつとだけ休憩、小休止つてとこだな」

俺の都合に二人を付き合わせてしまうのも悪いんだけど、戦いに疲れてリアルに影響が出るのは健全な状態とは言い難い。

だから、疲れが取れるまでバトルはお預けだ。

その間何すんのかは全くわかんねーけど。

「で、戦わないでGBN楽しむってどうすりやいいんだ？」

「それも色々よ。フェスとか参加してみるのもいいんじゃない？」

「……フェス、ですか？」

「あくまでも一例だけだね。ウィンドウショッピングしたり、G—Tuberの配信見たりすることもできるし、バトル以外でも色々よ？」

おお、知らない単語がどんどん出てきた。

フェスってのがまずなんなのかわからんし、G—Tuberが何かってのも全くわからん。

でも、チナツが言いたいこと自体はなんとなくわかる。要は楽しみ方も千差万別ってことなんだろう。

「へえ……G—Tuberって、GBNの中で動画作ったり配信したりしてるのか」

わからないことはまず調べろの精神で、手元のウィンドウからGBN攻略wikiを表示させて、「G—Tuber」で検索してみると、そんな感じのことが書かれている概要が飛び出てきた。

このゲーム、やろうと思えば割となんでもできるんだな。だから、いつもあんなにセントラル・ロビーには人がいるんだろうけど。

「そうよ、あの『AVALON』が高難度ミッションの攻略配信してたり、ガンプラの製作配信してたりもするわ」

「グジョウ・キョウヤってそんなことしてるのか……」
「うん……あの人、割とフットワーク軽い、から……」

GBNで前代未聞の二冠を達成しているのにもかかわらず、後身の育成にもなるようなことしてるってのは珍しい。

こういうゲームって大体上位層は自分たちにはわからない情報みたいなのは秘匿しておくのが常だと思ってたけど、GBNは大分違うつぽいな。

「ちなみにアタシのオススメは『エターナル・ダークネス』ってフォースがやってる製作配信ね。フォースリーダーも四桁ランカーなだけあって相当作り込みはガチよ」

なんかこの前頭に浮かべてたフォース名候補と似たような名前の

フォースだな。

でも四桁ってことは確か二千万人のアクティブの中で四桁ってことなんだろうから、その「エターナル・ダークネス」ってフォースも相当なやり手なんだろうな。

「へー、ガンプラ製作配信か……どんなことやってんだろうな」

まさかGBNの中で実際にガンプラを作る、ってことはできないはずだろう。

仮にできたとしても、ゲームの中で作ったものを現実に持ち込むことなんて絶対不可能なはずだから、ちよつとだけ気になるといえば気になる。

「えっとね……基本的に製作配信は、リアルで作ってる時の手元を映して、その後からGBNでのダイバールックで解説をつける、ってやり方が一般的だよ……」

「なるほどな、現実で撮った映像をゲームの中で後付け編集するってことか」

マフユの話を俺なりの理解に落とし込むと、一昔前に流行った、合成音声を使ったゲーム実況やら解説と似たようなものらしい。

ただそれがゲームの中でできるってのは随分革新的というかなんというか。

「二応GBNの中でもガンプラは組めるし、現実にデータを持ち帰ることもできるけど、製作配信はリアルの手元、ってのが主流ね」

「そんなことできんのかよ!?!」

「アンタ本当説明書読まないタイプよね……GBNの中にはデータキットっていう、こういうフォースネストに飾っておくためのガンプラデータだったり、ガンダムベースに持ってけば実際に射出成型してくれるパーツデータってのがあるのよ」

ぐうの音も出ねえ。

それはさておきとしても、そんな便利機能というか、ガンダムベースってとこと連携してゲームの中で手に入れたパーツを現実のガンプラとして形にできるのは、相当凄い話だ。ありきたりだけど、未来、って感じだ。

「……その、パーツデータはミッションの報酬だったり、イベントの賞品として配られることがある、よ……?」

「なるほど! じゃあ早速ミッション受けて——」

「小休止挟むって言ったのはどこの誰よ。別に常設ミッションなら焦ることもないし、イベントも今はゆるいのしかやってないわよ」

なるほどな。ミッションの存在って、てつきりダイバーポイント稼ぎの救済措置みたいなもんだと思ってたけど、そういう目的もあるのか。

逸る心を宥めつつ、俺はとりあえず手元の端末からGTubeを開くと、チナツが言っていた「エターナル・ダークネス」で検索する。

ものの数秒もかけずにヒットしたそのフォースは、今生配信をやっている最中だという情報が、画面の上側に表示される。

「おっ、今配信やってるっぽいぜ、チナツ、マフユ!」

「本当に?」

「やってるみたい、です、ね……」

赤い枠に縁取られているその生放送をタップして再生してみると、手元だけが映し出された画面が表示される。

その机と思しき場所にはデザインナイフと大量のプラ板が積まれている、何をしているのかと思えば、縁日で型抜きをするように、ガイドが写されているプラ板をデザインナイフでなぞって切り出していく情景がそこにはあった。

「……何してんだ、これ?」

「スクラッチよ。まだキット化されてなかったり、パーツデータが実装されていないものを作る時に、プラ板を切り出してそれを組み合わせるの」

「なんつーか、よく飽きねーな……」

俺なら多分プラ板を一枚切り出したぐらいで寝落ちしてるんだろうけど、その「エターナル・ダークネス」とやらの配信者は正確無比にガイドから外れることなくデザインナイフを走らせて、似たような形状のパーツを瞬く間に削り出していた。

凄い根気と集中力だ。俺はとても真似できそうにない。

「でしょ？ だからクオンさんは凄いのよ」

「……これ、作ってるの……多分、デイビニダドの翼……？」

「デイビニダド？ なんだそれ、マフユ？」

なんか凄いものを作ってるんだろ？ ことはわかったけど、デイビニダドとかいうのがなんなのかはわからない。俺が見落としてただけで、なんかのアニメに出てきたんだろうか？

「……えっと、詳しくはネタバレになっちゃうから言えないんだけど、『機動戦士クロスボーンガンダム』って漫画に出てきたモビルアーマーなの」

「漫画かー、ガンダムって色々やってんだな……」

「うん……だから、奥が深い、よ……？」

こういうのを沼っていうんだっけか。

一度足を取られれば深淵まで引き摺り込まれていくようなコンテンツ。SEEDとDESTINYだけ追ってた頃でさえそうだったのに、漫画まであるとなれば底無しじゃ済まなそうだ。

感心する俺を余所に、クオンというらしい配信者は切り出したパーツに今度はピンバイスで穴を空けて、真鍮線を通していく。

「これは？」

「塗装する時に後からバラせるように真鍮線で接続軸を作ってるよ」

「へー……すごいな、マジで……」

てきぱきと手際よく一連の作業を繰り返している「クオン」さんの作業を、俺たちはデイビニダドの翼が完成するまでの間、黙りながら見続けていた。

確かにたまには、こういう時間を過ごすのも悪くないかもしれないな。

Ep. 14 「フェス！」

GBN疲れは案の定というから一日かそこらで取れてくれるものじゃなかったようだ。

今日も眠気を抱えながら登校していたところを、チナツのやつに呆れられたっけ。

おかげで数学の授業じゃ居眠りしちゃって、チヨークの弾が飛んできたり、昼休みも寝て過ごしたせいで、五限目も危うく寝落ちするとこだった。

「マジで眠い……」

「大分深刻ね、修行のスケジュールとか見直したら？」

素人目に見ても相当無茶してるわよ、アンタ。と、チナツは呆れたように人差し指を俺の胸板に突き付けながら言った。

確かに授業も受けて師匠との稽古もやって、そこから予習復習を済ませてからGBN。考えてみりや結構なハードスケジュールだ。

「つつても、次元霸王流で妥協したくないからな」

こればかりは譲れないというか、元々強くなりたくて、更なる極意の先に行きたくてGBNを始めたんだから、その初心を見失うつもりはない。

いつかは父さんを、師匠を超えた武道家になる。それが今のところ、俺の将来の夢みたいなものだった。

一応母さんからは「父さんの後を継ぐのもいいけど、他の選択肢も増やしたほうがいい」って言われて、勉強はちゃんとやってるけどな。

「本当、アンタらしいわね」

「そっか？」

「そうよ。アタシはあんまり次元霸王流の才能なくて、諦めちゃったから」

謙遜してチナツは苦笑したけど、これでもこいつは総合格闘技大会小学生女子の部で準優勝した程度には心得がある。

だから、あんまり謙遜するのも良くないとは思うんだけど、その辺は本人の問題だしな。

続けることは確かに大事だ。諦めるのは悪いことだって言うやつも多いかもしれない。

でも、道を選ぶのは本人なんだから、俺の信条はともかくとして、納得した上でその道を選んだのなら外野がどうこういふべきじゃあない。

それに、間違った道を選んでしまっても、明日があれば、生きていればきつとやり直せる。

俺が見た「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」の主人公、シン・アスカだってそうだった。

なんてことを頭に浮かべながら歩いていると、多少眠気は和らいできた。

多分だけど、頭を使うのは大事なのかもしれない。いや、頭使ったから眠くなってるのか？ まあ、どっちでもいいか。

「そーいやユウヤ、アンタ今日もGBNやるつもり？」

「ああ、一応な」

戦いからはちよつと離れてみようとは決めてるけど、ログインボーナスとかもあるし、何よりマフユが待ってるかもしれないんだ。

ダチと一緒に遊ぶ。シンプルな口約束かもしれないけど、それを破るのは、どんな理由があれあまり褒められたことじゃない。

「ふーん……じゃあアタシもログインするわね、何するかはその時話しましょ」

「おう、じゃあまたな、チナツー」

「またね、ユウヤ」

互いに手を振って、一軒隣の家で別れる。

またねも何もこいつとは一緒の学校に通ってるんだし、明日も登校時間には顔を突き合わせることになるんだろうけど、それはそれとして挨拶は礼儀みたいなものだ。

「ただいまー」

夕飯の匂いが漂ってくる我が家に戻って、学生鞆を下ろす。今日はカレーだな。

それから、部屋に戻って道着に着替え、ちよつとだけ次元霸王流の

修行をしたら、あとは飯食って風呂入ってGBN。

いつも通りの日常に一つだけ追加されたGBNに、さっさと身体を慣らしておきたいところだ。



ログインしたてのセントラル・ロビーは、今日も今日とて人でごった返している。

がやがやと会話に興じながら歩いていくダイバーもいれば、無言でただたそがれて夜景を見ているだけのダイバーもいるし、他のダイバーと積極的に交流を図ろうとしてるやつもいる。

過ごし方は人それぞれだけど、皆好きながあつてここにいるんだろうというのが伝わってくる。中にはヤスみみたいな悪質なものもあるだろうけどな。

と、俺もまた腕を組んで辺りを一望していた時だった。

「あつ……ユウヤ君、こんばん、は……」

「おう、マフユ。こんばんは！」

今ログインしたのか、そうでないのか、二人でプレイしてた時はいつも待ち合わせに指定してた場所に、ぱたぱたとマフユが駆け寄ってくる。

セントラル・ロビーはやたら広いもんだから、待ち合わせ場所決めとかないと会うのが大変って意味では、フォースネストに集まれる分、フォース組んでおいてよかったのかな、と思つた瞬間だった。

「こんばんは、マフユ。それとユウヤ」

「チナツ、お前どっから来たんだ!？」

「フレンドワープよ、アンタまさかこれも知らないの?」

テクスチャが再構成されていくようなエフェクトを纏つて突然現れたチナツは、呆れたように肩を竦めてそう零す。

フレンドワープ。言葉から察するにフレンドがいるところにワープできる機能なんだろうけど、そんな機能あつたっけか。

GBN攻略wikiを手元のウィンドウから開いて調べてみれば、

確かにそんな機能も存在していると、しっかりと記述されていた。

「……わ、私も……初めて知りました……」

「えっ？ ユウヤならともかくマフユも知らなかったの？」

「……えっと、ずっと……ユウヤ君とフレンドになるまで、一人ぼっち、だった、から……」

「ああ……そういうこともあるわよね。でもGBNってその辺融通利くようにできてるから、今度から色々調べてみるといいわよ」

「はい……」

俺の時とは態度が百八十度大違いだな。

なんて言ったら多分チナツがキレるか呆れるかするだけだろうからその言葉は呑み込んでおくとして、俺が思っていた以上にGBNは便利な機能が揃ってるらしい。

「で、集まったはいいけど何するんだ？ 昨日みたいにフォースネストで動画でも見るか？」

あの後調べてみたけど、G-Tubeではガンダム作品もアーカイブ化されていて、無料で視聴することができるらしい。

GBNの運営が何で稼いでるのかわからなくなるぐらいのサービスっぷりだけど、それでも経営が苦しいだとかそんな話は一切聞いたことがない辺り、そんなサービスをしてお釣りが来る以上には儲かってるんだろう。

「何をするかお悩み？ それなら……フェスに参加してみるのはどうかしら？」

「マギーさんー！」

反応的にチナツもマフユもあんまり乗り気じゃなかったようで、じゃあどうするかと困っていたら、まるでタイミングを見計らっていたかのようにその人は、マギーさんは現れた。

「聞いたわよ。アナタたち、あの『GHC』の分隊を倒したんですって？ まずはそのお祝いね。コングラッチュレーションー！」

「ありがとうございます！ それで……フェスって何ですか？」

「フェス……正確にはフォースフェスね。簡単に言うと、フォース同士が集まって交流を深めたり、アトラクションを楽しんだりするイベ

ントのことよお」

あとは見てもるのが早いとばかりにマギーさんは手元のウインドウを操作すると、投影したものを拡大してこっちに渡してくる。

「ベアツガイフェス？」

「そ、他にもガンプラでレースをしたり、スポーツをしたり、カラオケ大会もあつたりするんだけど……今開催されてるのは特にダイバーたちの間で人気が高いベアツガイフェスなの」

「そうだったんっすか……で、ベアツガイって何です？」

アツガイなら辛うじて知ってるけど、こんなデフォルメしたクマミたいに可愛らしい見た目のガンプラなんて、どこで出てきたのか。

首を傾げて頭上にクエスチョンマークを浮かべる俺に、やれやれとばかりにチナツが溜息をついて肩を竦める。

「ベアツガイ。正確にはベアツガイⅢね。アタシも又聞きだけど、パパのお姉ちゃんが学生だった頃、その結婚相手になった人が作ってあげたのが公式に取り入れられてキット化したのよ」

「そうそう。イオリ・セイ君だったかしら？ 元々は伝説になってい第七回全世界ガンプラバトルーナメントの優勝者が作ったのよ」
「へえ……」

「そういや父さんが、師匠が学生大会で使ってたガンプラ……確か「ビルドバーニングガンダム」も、その人が作ったとかいってたな。」

イオリ・セイ……今じゃ有名ダイバーや有名ファイターが使ってるガンプラのレプリカキットが販売されるのは珍しくないけど、いち早く公式にも取り入れられる辺り、相当凄いビルダーだったのかもしれない。

「凄いなんてもんじゃないわよ、セイさんは。まあ今は何してるかアタシもよくわからないけど、小さい頃、親戚の集まりで会った時から有名だったみたいだし」

「なるほどな……」

「……」

「マフユ？」

イオリ・セイさんの名前が出た辺りから黙りこくっていたマフユ

は、この前のフォース戦の報酬として手に入れた首飾りを胸元でそつと握り締めて、何を思ったのか俯いていた。

「……あつ、ううん。なんでもないので……ただ、有名な人なんだな、つて……」

「なんでもないならいいんだけど……で、ベアツガイⅢつてのが凄いのにはよくわかった。でもベアツガイフェスつて結局何なんっすか？」
わざわざそんな名前がついてるんだから、ベアツガイⅢに関するイベントなんだろうけど、何をするかについては全くと聞いていいほど想像がつかない。

相変わらず頭に疑問符を浮かべている俺に、マギーさんは優しく微笑むと、ウイंकを飛ばして言った。

「気になるでしょ？ なら、エントリーして実際に見てみるのも一つの手だと思わないかしら？」

「確かに」

百聞は一見にしかず、つていうしな。

他にやることの候補もないんだから、実際にそのベアツガイフェスとやらを拜んでみるのも悪くない。

「チナツとマフユはそれでいいか？」

「アタシはオツケーよ、マフユは？」

「私も……大丈夫」

「よし、じゃあ決まりだな！」

二人の同意を得て、俺はエントリーのボタンをタップする。

「ふふつ、楽しんでくるのよ。『トライダイバーズ』の皆！」

『はい！』

そして、マギーさんに見送られながら俺たちは、フォースフェスが開催されているエリアに向かうため、格納庫へと転送されていった。



「すげえ……なんだ、これ……？」

ゲートを抜けた先は、ベアツガイだった。

それぐらい、一望する景色はベアツガイに埋め尽くされていて、中にはベアツガイの子供みたいな小さい個体も群れをなしているのが確認できる。

一言で表すなら、テーマパークだろうか。

各種ガンダム作品をモチーフにしたアトラクションを彩るように、ベアツガイたちが、あるいはベアツガイの格好をした運営のダイバーやNPDが、俺たちを出迎える。

「これがベアツガイフェスよ。今日は昼夜が逆転してるみたいね」

チナツの言葉通り、セントラル・ロビーは現実の時間に合わせてちゃんと夜だったけど、ベアツガイフェスが開催されているこのエリアは、青々とした空が一面に広がっていた。

多分夜しかログインできない俺たちとか、社会人向けにも色々調整されているのだろう。

「……なんだか、遊園地みたい……」

「マフユの認識で間違っていないわよ。このフェスはただで遊べる遊園地みたいなものなんだから」

「現実で遊ぶより安上がりだな……」

GBNの景色は、観光業界が心配になってくるレベルでよくできている。

色々と金がかかる現実で遊ぶよりも、ガンプラと回線とダイバーギアを持って仮想空間で遊び尽くすつても案外需要として埋まっているのかもしれない。

「とにかく！ 郷に入っては郷に従えよ！ あそこで着替えて、アタシたちもフェスを楽しみましょう！」

「着替えて……あれ被んのか？」

通路を歩いているダイバーが頭に被っている、ベアツガイIIIをモチーフにしているのであらう着ぐるみと帽子の中間みたいなものを指して、俺はチナツに問いかける。

あれ被らないとアトラクションに乗れないとか、そういう制限でもあるのだろうか。

「そうよー」

「あれ被ってないとなんかまずいことでもあんのか？」

「特にないわ、でもこういうのって気分が大事でしょ？ マフユもそう思うわよね？」

「えっ……？ あ、はい……」

話しかけられることを想定していなかったのか、もきゅもきゅと気の抜けるような音を立ててその辺を歩いてたベアツガイの幼体みたいなNPDを抱きしめていたマフユが、素っ頓狂な表情でチナツの言葉に同意を示す。

多数決的には二対一か。正直あんまり気乗りしないんだけど、やるからには全力でやるって決めた以上、被り物の一つや二つ、なんてことは無い。

指定されたエリアで赤いベアツガイの被り物を頭に装着。特に重さとかは感じない。

「あっははは！ 案外似合ってるじゃない！」

「そうか……？」

「……私も、似合ってると思う、よ……？」

それぞれオレンジ色の被り物をしたチナツと、青い被り物をしたマフユが俺の被り物を指差し、口を揃えて言う。

「なんならスクショとか撮っとく？」

「遠慮しとく」

「ノリ悪いわね、もう」

「そっちが浮かれてるだけじゃねーのか？」

俺も若干こう、わくわくしてないかと訊かれて首を横に振るならそれは嘘になるんだろうけど、それにしたってチナツの舞い上がり方は明らかにぶっ飛んでる。

「そうかもしれないわね、だって初めてのフォースフェスだし」

「ああ、そういや長くソロ専だったなお前」

「誰のせいだと思ってるんよ、全く……！ でもその分今日は目一杯楽しむって決めてるんだから、覚悟しなさいよー！」

何の覚悟なんだ。

チナツの浮かれ具合にツツコミを放棄した俺とマフユの視線が交

錯して、その表情が苦笑に染まった。

考えていることはどうやら同じらしい。

「……私も、初めてのフェスだから……えつと……」

「おう、乗り掛かった舟なんだし、ここまで来たたら俺も全力で楽しむか！」

踊る阿呆に見る阿呆ってやつだ。せっかくマギーさんが紹介してくれたんだし、どうせなら踊らなきゃ損だろう。

現実には夜、この世界は昼。見事に時間はちぐはぐで、ここがあくまでもゲームでしかないということ物語っているけど、それでもここは俺たちの放課後みたいなもんだ。

だから、今は疲れも何もかも忘れて楽しもう。

先を走っていくチナツを追いかけながら、俺はマフユの手を引いて、ベアツガイフェスの舞台へと乗り込んでいく。

「ねえユウヤ、あれ乗りましょ、あれ！」

「ジェットコースターか、いいな！ マフユは絶叫系、大丈夫か？」

「う、うん……！ 大丈夫だ、よ……！」

あつちもベアツガイ、こつちもベアツガイ。現実世界に存在する夢の国を思わせるファンシーな景色を目に焼き付けながら、まずはチナツが目をつけたジェットコースターを目指して、俺たちは一路ひた走るのだった。

Ep. 15 「クマの祭りに潜む罠」

現実さながらに作り込まれているジェットコースターは、こんなにか非常によくできていた。

俺はギアナ高地とかで修行したことがあるから高いところだったり、多少高いところから落下したりとか、そういうのは慣れてるつもりだった。

けど、ジャンケンの結果俺の隣に座ることになったチナツはそりやもう凄まじい勢いで絶叫してたもんだから耳が物理的に痛い。

「あー、楽しかったわ！ ねえユウヤ、次は何乗る？」

「あんだけぎやーぎやー言ってたのに随分元気だな……」

「声の一つも出さないアンタが異常なだけよ、マフユだって絶叫してたじゃない」

チナツとは違って、どこかまだ夢心地な表情をしているマフユがこくこくと小さく頷く。

正直お前の声がデカすぎるせいで聞こえなかった……なんて言ったら逆鱗に触れるんだろうから黙っておくとしても、まあ楽しくないかって言われたら嘘になる。

俺の方もなんだかんだで本物のジェットコースターさながらのスリルを結構楽しんでたからな。

「次も絶叫系で攻めんのか？ えっと……」

「ラフレシアバグライドとあとはバンジージャンプとかもあるわね、アタシはそれでも構わないけど、マフユは？」

「……え、えっと……あんまり怖いのに、連続して乗るのは……」

もじもじと恥ずかしそうに頬を赤らめて、マフユはチナツの問いにそう答える。

まあ、よくわからんけど絶叫系って大体一回乗ったら満足するようなものだしな。

手元のウインドウに表示した会場の地図を見る限り、アトラクションの類はまだまだあって、ハロを模したカプセルに乗ってのウォーターライドとか、あとは特殊なフォトフレームで写真が撮れたりする

らしいけど、どうしたもんか。

そんなことを薄らばんやりと考えながら、とりあえずは人波にそって道を歩いていた時だった。

「きやつ……！」

「あ、ご、ごめん、君！」

「トッドさん？」

余所見をしながら先頭を歩いていたチナツが、長身痩躯のダイバーに激突する。

危ねえな、と言おうと思っただけど、よく見たらチナツがぶつかつた人は、この前フリーバトルで戦った二人組の内の一人、トッドさんだった。

「ユウヤ君とマフユ君……！ 聞いたよ、君たち、フォースを組んであの『GHC』の特務分隊に勝ったんだってね」

「へへ、それほどでも……てか、トッドさんとジョーさんもここに来てるってことは？」

「ああ、俺たちもあのあとフォースを組んだのさ。新メンバーも加わって、まずまずってところかな。ところでこっちの子が？」

トッドさんの隣に立っていたジョーさんが、チナツを指して問いかけてくる。

トッドさんたちもフォースを組んだつてのは喜ばしいことだな。マスダイバーにやられて落ち込んだみたいだし、そこから立ち直れたんなら何よりだ。

「ああ！ こいつはチナツ、俺の友達です」

「そうか……友達同士でフォースを組むのは鉄板だからね、今度機会があれば、俺たち『オーラモビルズ』とも戦ってみないか？」

ちようど三人になったことだし、とジョーさんは気さくに笑いながら、近くに立っていたベアツガイ頭の着ぐるみをつけた女の人を指してそう言った。

この前のフリーバトルは二対二で、「GHC」特務分隊との戦いは三対五だったから、互角の条件ってことで、トッドさんたちと再戦するのも悪くないかもしれない。

「ところで君たちは、午後のフェスミッションには参加するのかい？」
「フェスミッション？」

なんてことを考えていたら、トッドさんが藪から棒に、知らない単語を出してくる。

フェスミッション。多分その響きから察するに、ベアツガイフェスで受けられるミッションのことなんだろうけど、そんなもんあったっけか？

手元のコンソールを操作して、俺はベアツガイフェスの概要が記された告知を表示、拡大して隅々まで眺めていく。

ああうん、確かに書いてあった。

なんか午後にイベントミッションが開催されるから、奮ってご参加ください的なアレだ。

報酬を確認してみると、フォー스ネストに飾ることができるアクセサリーアイテム……武者の鎧兜と薙刀を装備した小さなベアツガイ、「武者ツガイ」なるオブジェだけで、他には何も無いらしい。

これだけなら正直、参加する旨みはあんまりないんだけどな、と俺が首を捻っていると、食い気味に目を輝かせたチナツが、トッドさんの質問に答える。

「はい、もちろん！」

「おいチナツ、まだ決まったわけじゃ……」

「え、えっと……私も参加したい、かな……ユウヤ君……」

袖の余っているマフユのゴスロリが、逸るチナツを諫めようと伸ばした指先を掴む。

上目遣いで瞳を潤ませるその仕草はなんというかこう、ずるくないかマフユ。

そう思っても口には出さず、咳払いをして煩惱を振り払う。とりあえず、多数決なら賛成二、反対一で俺の負けだ。ここは潔く従っておこう。

「そんなわけで参加することが今決まりました」

「あはは……女性は強し、だね。僕らも参加する予定だから、その時は負けないよ」

「はい！ こつちもやるからには全力でやるつもりですから、楽しみましょう！ トツドさん、ジョーさん！ えつと……」

「私はベル。『オーラモビルズ』の新入りだけどよろしくね、『トライダイバーズ』の皆」

ベル、と名乗った茶髪の女性ダイバーは、ジョーさんと腕を組むと、ひらひらと手を振りながら雑踏に紛れていく。

「それじゃあ僕も行かせてもらおうよ。フェスミッション、楽しみにしているからね」

トツドさんも、それに続く形で手を振って、ジョーさんとベルさんの背中を早足で追いかける。なんていうかまあ、ここまで来たら乗るかかった舟だ。

「じゃあ俺たちも行くか、フェスミッションまでまだ時間あるんだろ？」

「一応まだあるわね、何のアトラクションに乗ろうかしら」

「あ、あんまり激しいのは……ちよつと」

チナツとマフユの合意で参加が決まったフェスミッションとやりに思いを馳せつつ、俺たちはああでもないこうでもないと言葉を交わしながら、とりあえずはベアツガイフェスをぐるりと一周してみることに決めるのだった。



観覧車から見下ろす、フェスの舞台はそりやもう壮観なものだった。

とりあえずはアトラクションを一周する形で、最後に残った観覧車に揺られている俺は、窓の外に広がる景色を一望して、軽く感動のよなものを覚える。

流石は天下のGBNだ。

実写のように、どころか、実写をそのままテクスチャに貼り付けたかのように、景色が作り込まれてやがる。

マフユは高いところが苦手なのか、ぶるぶると震えて席に腰掛けて

いたけど、時折怖いもの見たさのようにそわそわして、窓の外に広がる景色を窺っていた。

「大丈夫か、マフユ?」

「えっと……うん。大丈夫だ、よ……?」

「あんまり無理すんなよ」

VRゲームが現実に影響をもたらすなんて眉唾物の話だけど、ゲームの中でまで好き好んでストレスを溜める必要はどこにもない。

高いところが怖いらしいマフユが恐る恐る伸ばしてきた手を、余った袖口の上から握り返す。

「あ、ありがとう……ユウヤ君……」

「気にすんなって」

「てか、無理しまくって眠くなってるアンタが言えたことじゃないでしょ」

さっきまで俺とは反対側にある窓から見える景色を見つめていたチナツは、どこか不機嫌そうに唇を尖らせていた。

じとつと濁った視線が俺を打ち据えるけど、そんな目で見られる心当たりはどこにもないんだから心外だ。

でも、言われていることはぐうの音も出ない正論なんだよな。情けないけど言い返せねえ。

「ぐうの音も出ねえ」

「でしょ? ふんっ」

「……あ、チナツさん……その、喧嘩しない、で……」

「大丈夫よマフユ、この程度喧嘩の内にも入らないから」

小さい頃からの腐れ縁ってやつよ、とチナツはマフユに負けず劣らず豊かな胸を逸らして、ドヤ顔で宣言する。

まあ腐れ縁ってのも言い得て妙だな。

家は一軒隣だし、チナツの母さんは父さんの、師匠のお姉さんで、その結婚相手は学生時代に師匠と一緒にチームを組んでた人らしいし。

「お、時間的にそろそろフェスミツションか」

「本ただわ、あーもう、早く降りないかしらこの観覧車!」

「……それだと、絶叫系になっちゃうん、じゃ……」

ゆつくりと巡行する観覧車にもどかしさを感じつつ、俺はさっきまで乗り気じやなかったはずのフェスミッションがすっかり楽しみななっていることに気づいていた。

理由はまあ、遊びだとしても、遊びだから全力でやりたいってのはあるけど、知り合いのトッドさんたちが参加するから、つてのも大きいかもしれない。

「フォースフェス、か……」

マギーさんが言っていた通り、フォース同士の親交を深めるのも、バトルとはまた違った良さがあるのかもしれないな。



『ハロー、エブリワン！ ベアツガイフェスの特別ミッションによるこそー！ このミッションでは、各地に隠されている宝箱を開けることで、ベアツガイ像へ辿り着くヒントが隠されています！ お宝目指して、フォース一丸となって頑張りましょう！』

司会進行の前口上に、参加しているフォースたちのボルテージが引き上げられる。

辺り一面が熱狂に包まれていることを見るに、皆案外ガチである武者ツガイを狙いに來てるのかもしれないな。

「いい、ユウヤ？ いつもの作戦通りで行くわよ！」

「ああ、マフユがまずは先行してデータリンク、俺とチナツは後からフォローする！」

「……は、はいっ……！」

いいね、こういうの。いざ勝負となれば、乗り気じやなかったのが恥ずかしくなってくるぐらい燃えてくる。

『それでは、位置について——よい、スタート！』

司会進行がミッションの開始を宣言すると同時に、我先にとダイバーたちが飛び立って、あるいは地面を駆け抜けていく。

「……行こう、エクリプティカ……！」

巡航形態に変形したマフユのG―エクリプティカも、スタートに遅

れることなく、可変機たちを置き去りにするような速度でかつ飛ぶ。
「俺たちも負けてらんねーな、チナツ！」
「ええ、武者ツガイはアタシたちが手に入れるんだから！」
そして、マフユに続いてチナツはアストレイシツクザールを、俺はストライク焰を上空に飛ばして、晴天の中を駆け抜けていった。



「うわあああつ！」

「トツド！」

「きやあああつ！」

「ベル！ クソツ、イベントミッションで攻撃してくるなど……！」

ベアツガイフェスのイベントミッションが開始されてからしばらく、いくつかのヒントを探り当てて、俺たちは他のフォースに少し遅れる形でベアツガイ像の前に到着していた。

だが、そこにあつた光景は、皆が懸命に競い合っているフェスの雰囲気とは程遠い、殺伐としたものだった。

一足先に到着していたトツドさんたちのフォース、「オーラモバイルズ」の機体が、何者かが放つた紫色のビームに翼を焼かれて墜落していく。

よく見れば、さつきまで晴れ渡っていたはずの空には鉛色の雲が立ち込めていて、嫌な予感が胸の中をよぎる。

「チナツ、マフユ、これって……！」

「ええ、ブレイクデカル……でも、どこから撃ってきたかはわかるけど、姿が見えない……！」

「……G―エクリプティカのセンサーで探してみます！」

いくらお宝が欲しいからといって、ブレイクデカルを使って他人を攻撃するなんて、とんでもない輩だ。

G―エクリプティカのセンサーが捉えた敵機のデータが、一分も経たない内に俺たちの機体にも転送されてくる。

位置はわかった。だったら。

「先に発砲したのは、お前だからな！」

『……』

そのマ스ダイバーが潜んでいるのであろう地点に俺はビームピストルを撃ち込んで、牽制とする。

位置がバレたことで隠れ続けるのを諦めたのか、ゆらりと景色の中から溶け出てくるように、その漆黒のガンプラは姿を表した。

「あれって……E z—SR!? パパたちが戦ったっていう……!」

「……あのレドームや頭は、ブラックライダー……! さっきのは、光学迷彩……?」

『クク……見事だぜ、お嬢ちゃんたち。ご褒美をくれてやろう』

そのE z—SRとかいうらしい機体とブラックライダーとかいうらしい機体のミキシングモデルは、手にしていたショットビームライフルを連射して、チナツのスナイパーライフルと、マフユのビームライフル、そしてスラスターを撃ち抜いて、地面に叩き落とす。

「きやあつ……!」

「……あ……っ……!」

「チナツ! マフユ!」

尋常じゃない威力だ。

チナツのガンプラも、マフユのガンプラも、相当高いレベルで作り込まれているのに、その装甲を易々と貫通するだけじゃなく、ビームライフルのバレルが短いにもかかわらず、敵の射程と威力は異常なまでに長く、高い。

「に、逃げるんだ、ユウヤ君……! 悔しいけど、僕たちじゃマ스ダイバーには勝てないんだ……!」

地面に倒れ伏していたトッドさんが、機体を必死に起き上がらせようとしながら警告する。

マ스ダイバーは俺たちに対する興味を失ったのか、腰裏にショットビームライフルをマウントすると、両腰のヒートナイフを引き抜き、トッドさんのガブスレイを踏みつけた。

そして、ヒートナイフの刃がゆっくりとガブスレイの両肩を引き裂いていく。

「ぐああつ……!」

『クク……いつ聞いてもいいなあ、悲鳴つてのはよ……!』

「お前! お宝が欲しいからって、なんでこんなことを!」

オーブンチャンネルで俺は、マスタイバーに向けて叫ぶ。

イベントミッション中の相手に対する攻撃はルール違反じゃないらしい。それでも、ジョーさんが言ってたようにマナー違反なら、今すぐにやめるべきだ。

『お宝あ? あんなショボいぬいぐるみになんぞ興味ねえよ……俺が欲しいのは、こんなヌルイイベントにホイホイ集まってきたバカ共の悲鳴なんだからなあ……!』

「お前……ッ!」

お宝が何としても欲しいってんなら、わかってたまるかとは思うけど、百歩譲って理解してやろう。

でも、こいつは最低だ。最初から他のダイバーをいたぶるためだけに、わざわざフォースフェスに参加してるんだから。

「許せねえ……! そんな理由でトツドさんたちを!」

『許さないならどうする? そもそもこっちはお前に許されなくたって別にどうでもいいんだけどなあ……?』

「そうだ、僕たちの運が悪かっただけだ! 逃げるんだよ、ユウヤ君……!」

「いいや、ダメだ!」

「ユウヤ君……!?!」

トツドさんは悔しさに歯を食い縛りながら俺たちに警告してくれました。でも、申し訳ないけどその忠告は聞けそうにない。

「トツドさんたちだって悔しいだろ!? せっかく皆で楽しんでいたフェスを、マスタイバーなんか滅茶苦茶にされて! だから俺はこいつを許さねえ!」

フォースフェスは、フォース同士の交流を深めたり、フォースメンバーと一緒に楽しむ場所だ。

それを下らない理由で、しょうもない理由で滅茶苦茶にされてるんだ。しかも、俺のダチが。

そんなの絶対、許せるわけがない！

『格好つけんなよ、ガキが……まあいい、どうせお前らも獲物にするつもりだったんだ、来いよ。存分にいたぶってやるからよ……！』

「上等だ！俺は今からお前を、百万発ぶん殴る！」

ブレイクデカールとかいうチートで強化されていても、ダメージが通るんなら倒すことはできる。

俺はビームピストルを放棄すると、拳を固めてエールストライカーのスラスターに点火、ショットビームライフルの攻撃を避けながらマスタイバーの機体に肉薄していく。

皆のフェスを滅茶苦茶にしてくれた無礼には、こっちも無礼で叩き返してやる。

Ep. 16 「皆で掴んだこの勝利」

「次元霸王流！ 聖拳、突きいっ！」

『次元霸王流だ？ 意味わかんねえんだよお！』

マスマイバーが使っている「E z—SR」の改造機は、ブレイクデカールの力で全てのステータスが跳ね上がっているらしい。

そのチートがガンプラの性能をブーストアップさせるのは知ってたけど、前に戦ったアルケーの時とは訳が違った。

スラスターの推力も使って、全力で放ったストライク焔の聖拳突きが、交差させたヒートナイフに易々と受け止められる。

『おいおい、イキつといてこの程度か？ あんまり格好つけるもんじゃねえんだぜ、ガキがよ』

「何と言われようが結構だ！ 俺は！ お前を！ 百万発ぶん殴るんだからな！」

とはいえ、こうして鏢迫り合いが発生している以上、ダメージが全く入っていないって訳でもないだろう。

だったら前にマスマイバーと戦った時と同じだ。とにかく相手に隙を与えずにぶん殴って、一ダメージでもいいから蓄積させていく。

それに、勝てないと最初から弱気になつてたんじゃ本当に勝てるもんも勝てない。気の持ちようだなんていうつもりはないけど、こんな卑劣な奴に気持ちの面でも負けるわけにはいかないからな。

『ちっ……出来の割には馬鹿力だなア……！』

「ユウヤー！」

「おうー！」

腰に装備していたサイドアームであるデステイニーガンダムのビームライフルを、チナツが援護射撃として放つ。

それに続く形で、倒れていたマフユも、G—エクリプティカの腰に装備しているヴェスバーを最大出力でマスマイバーへ撃ち込んだ。

——だが。

『ははははー！ おいおい、今なんかしたのかア？ 俺の「E z—BR」には傷一つついちやいねエゼ……！』

「マフユのヴェスパーまで表面装甲で弾いたつていうの!？」

「……そんな……」

『そのガブスレイが言ってた通りだろ？ お前らに勝ち目なんてものはなア、万に一つもねエんだよ！ THE MIS!』

E Z—BRというらしいその機体のダクトが赤熱化する。紫色のオーラと溶け込むように、機体から立ち昇る赤いオーラは、何だか知らないけど、明らかにヤバいことを物語っていた。

だからといって、ここで引き下がってやる理由はどこにもない。

相手が更に強化されたつてんなら、それを前提に間合いを測って立ち回ればいい。

どこにそんな出力が隠されていたのかと疑いたくなるほどの速さで、スラストアーを全開にしたマスダイバーが、E Z—BRがストライク焔へ、お返しだとばかりに肉薄してヒートナイフを振るう。

「つぶねえー!」

『今のを避けやがっただど!？』

正面装甲に掠っただけで結構な部分が持つてかれたけど、それでもまだストライク焔は立っている。

バカみみたいな威力だとは思うけど、ナイフのリーチそのものが拡張された訳じゃないなら刃物を持った相手と戦う時の要領でなんとかなるはずだ。

「だったらこいつも喰らいやがれ! 次元霸王流……流星螺旋拳!」

パルマ・フィオキーナの光を纏った拳が高速で回転し、マスダイバーが機体の前で交差させたナイフを削り取っていく。

だがそれは、こっちの拳もまた摩擦で削れているのと同じことだ。だったらこっから先は我慢比べになる。

俺の拳が砕けるのが早いのか、敵のナイフが折れるのが早いのか。

『この野郎……生意気なんだよ、ガキのくせに!』

「そのガキより情けねえことやってる大人が言うことかよ!」

紫と赤のオーラを纏っているE Z—BRが、徐々に流星螺旋拳の勢いに押されてじりじりと後退していく。

だけど、ストライク焔の方もマスダイバーを相手に無理をして接近

戦を挑んでいる代償として、右腕のフレームが軋み、耐久値もガリガリと削れている。

まだだ、もう少しだけでもつてくれ、ストライク焰。

俺は声には出さず、相棒を激励する。

聖拳突きを通じなかったけど、流星螺旋拳が通じているのは恐らく、ゲーム中での処理として、いわゆる多段ヒットの判定がなされているからなのかもしれない。

単発攻撃の聖拳突きは一ダメージに変換されるだけでも、多段ヒットする流星螺旋拳は一ダメージが何発も積み重なっている。つまりはそういう原理ってことだ。

だけど、相手はチート使いだ。

この分だと、百万発分の流星螺旋拳をぶち当てるより先に、こっちの右腕がもげる方が先になることはわかっている。

それでも、だとしても。

「右がやられたってなあー！」

『この野郎、俺のナイフを……!?!』

軋みを上げていた右腕が相手の出力に耐えきれず爆ぜると同時に、マスダイバーが構えていたヒートナイフの刃も砕け散る。

これでイーブン、とはいかないかもしれないが、とりあえずは相手の武装は破壊したわけだ。

だったらあとは殴り合いだ。

『ぎっけんな……っぎけてんじゃねえぞ teme、よくもこの俺をー！』

「ふざけてんのはそっちの方だろ！ 皆で楽しむフェスを邪魔しやがってー！」

『何が楽しみだ！ こんな子供騙しでバカみてエにキヤーキヤー騒ぐだけのイベントで能天気を楽しめる、おめでてエ脳味噌のガキ共が、一丁前にこの俺を、泣く子も黙るD・ジエイドを説教しようつてのはな、不愉快なんだよ！』

D・ジエイドとかいうらしいマスダイバーは口角泡を飛ばす勢いで咆哮する。

その内容は稚拙で支離滅裂だ。たとえば俺たちがガキなのは事実だ

としても、こいつみたいなのが情けねー大人にだけは言われたくねえ。

「だったらためえは、ガキの遊びに首突っ込んでぎゃーぎゃー喚いてるデカいだけのクソガキってことだな！」

『ツ、テメエエエエ！』

「次元霸王流！ 閃光魔術蹴り！」

挑発に乗って殴りかかってきたマスダイバーに、俺はプロレス技を取り入れた複合攻撃でのカウンターを叩き込む。

これも一ダメージに変換されてるのかもしれないけど、とにかく手数だ。手数を稼ぐことが重要なんだ。

それにしたって、バカにしてたガキの挑発に乗って顔真っ赤にしてんだから、あのD・ジエイドってのも情けなさが極まっている。

だったら尚更負けられなくなった。

例え相手がチートを使ってようが、こいつみたいなのに負けたら末代までの恥だろうからな。

閃光魔術蹴りから派生して、ソバットの要領でハイキックをEz—BRの顎に叩き込む。

だけど、相手も厄介な存在をやっちゃいならしい。

クロスカウンターとして、体勢を無理やり立て直したEz—BRの左腕に装着されていたパイルバンカーのようなパーツが伸縮して、ストライク焔の装甲に突き刺さる。

「ぐああああっ！」

「ユウヤー！」

「ユウヤ君っ……！」

「なんだこれ、電撃か……っ?!」

バチバチと雷が爆ぜるような音を立てて、ストライク焔の全身が痙攣するように軋む。

フェイスソフト装甲にも突き刺さってることから考えるに、相当作り込まれた装備なのだろう。

なんでそこまでガンプラを作り込めるのに、こんなコスイことを、セコいことをやってるんだ、こいつ！

『クク……スタン・アンカーの味はどうだクソガキ？ 楽には殺して

やらねえからなア……!!」

「クソつ、動け、動けよ、ストライク焰!」

電撃はじわじわとストライク焰を侵食し、ダメージを蓄積させていく。一撃で仕留めないで、じわじわと削っていくやり方が好みな辺り、こいつの性格が窺い知れるってもんだ。

なんて、思ってるような暇じゃない。

ここで俺が動けなかったら、ここで俺が動かなかったらトツドさんたちはどうなる。チナツは、マフユはどうなる。

何よりこんな卑劣なやつを前に、膝をつきたくなんかない。

苦悶と共に、機体に深々と食い込んだスタン・アンカーを引き抜こうと力を込めたけど、そう簡単に抜けない位置に刺さってしまったらしい。

電撃でストライク焰の装甲値が削り切られるのが先か、それともスタン・アンカーを引き抜いて反撃に出るのが先か。

そう思っていた矢先のことだった。

「ユウヤ君に続くぞ、ジョー、ベル!」

「ああ! まだ武装は生きている! 行けるな、ベル!」

「問題ないわ!」

トツドさんたちの姿が通信ウィンドウに映し出され、ボロボロになっていたガブスレイとハンブラビ、そしてギャプランが立ち上がった、まだ生きていた武装をE-Z-BRに叩き込む。

当然のように相手はブレイクデカルで強化した正面装甲でその攻撃を跳ね返していたけど、注意をそつちに向けて、右腕のグレネードランチャーから、どう考えてもあり得ない量の弾を撃ち出す。

「ぐああっ!」

「トツド!」

「僕に構うな、ジョー、ベル! こんなところで……こんなところで諦めたら、またマスタイバーに怯える昔の僕たちに逆戻りだ! ユウヤ君が教えてくれた……諦めちゃダメなんだって!」

「そうよ! ユウヤのバカには先を越されたけど!」

「……私たちも……!」

デステイニーのウイングから光の翼を展開し、チナツのアストレイシックザールが対艦刀を構えて疾る。

そして腰アーマーからビームサーベルを取り出したマフユのG―エクリプティカは、チナツが敵の注意を引き付けている内に、マスダイバーが射出したスタン・アンカーの線を断ち切る。

「ユウヤあつー！」

「ユウヤ君……っー！」

「おう、ありがとうな、チナツ、マフユ！」

『この……クソガキ共があツ！』

「今からてめえはそのクソガキにぶちのめされるんだよ！ 次元霸王流ー！」

チナツがさつきE z―B Rのコックピットを狙って投擲していた対艦刀の、アロンダイトの柄に狙いを定めて、俺は左の拳を構える。

マスダイバーもそれを阻止しようとグレネードランチャーを向けるも、マフユのG―エクリプティカがビームサーベルを振るって、弾頭を全て叩き斬っていた。

「次元霸王流 あらため改……湖底！ 流星螺旋拳！」

そして、左手で放った流星螺旋拳が、E z―B Rのコックピットに軽く刺さっていただけのアロンダイトを押し出していく。

『俺が……この俺が、こんな奴らにいいいッー！』

「へっ……油断大敵ってやつだー！」

もしも相手が慢心せず、こつちを一撃で仕留めようとしてきたら、結末は違っていたはずだ。

だけど、それはもうたればの話で、コックピットにアロンダイトを突き立てられたことで、マスダイバーが操るE z―B Rは爆散、テクスチャの塵へと還っていた。

なんとか勝てたが、紙一重も紙一重だ。

レッドアラートが点滅しているコックピットの中で、俺は深く溜息を吐く。

マスダイバー。それがどれだけの脅威になっているのかは正直まだわからない。

でも、こんなフェスにまで姿を現してることとは、ブレイクデカールってのは予想以上に蔓延しているのかもしれないなかった。

『救難信号を受信して駆けつけたが、これは……』

その時ふと、声が聞こえる。

その方向を、上空を見上げてみると、そこには二機のクランシエカスタムを従えたガンダムAGE-2のカスタムモデルが佇んでいた。

「嘘、あれって……!」

「……ガンダムAGEⅡマグナム……クジヨウ・キョウヤさんの……チャンピオンのガンプラ……!」

チナツとマフユが驚愕に目を見開いて、そのAGEⅡマグナムというらしい紫紺があしらわれた機体を見上げる。

チャンピオン。チナツから聞いていた、個人ランキング1位にして、フォーランキング1位のフォー「AVALON」を率いる男が、どういうわけかここにいるのだ。

『すまない。マスマイバーがいるという救難信号を受信して駆けつけたのだが……もしかして、君たちが倒してしまったのか?』

クジヨウ・キョウヤさんは少し驚いたような表情で、そう問いかけてくる。

確かに俺たちがあいつを倒したといえば倒したのには違いないんだらうけど、かなりギリギリの勝利だったし、相手も慢心してたから、胸を張って言えるようなことじゃない気がする。

まあでも勝ちも勝ちだ。素直に答えよう。

「はい、一応ですけど、俺たちが倒しました」

『そうか……礼を言うよ。ありがとう』

——トライダイバーズ。

クジヨウ・キョウヤさんはチャンピオンにしては随分と柔らかい物腰で、小さく頭を下げる。

「えっ、アタシたち、もしかしてチャンプに認知されてるの……?」

「……あっ……えっ、と……その……」

『謙遜することはないよ。僕とアトミラールはちよつとした友人のよくなものでね。彼から話を聞いていたのさ』

地上にAGEⅡマグナムを下ろしたクジヨウ・キョウヤさんは、にこやかに笑いながらあつけらかんとそう言つてのけた。

アトミラールさん、そんなに顔が広い人だったのか。まあ二万人も戦力抱えてるようなフォースらしいから、それも当然か。

俺も機体から地上に降りて、チャンピオンと、クジヨウ・キョウヤさんと改めて向き合う。

「ありがとうございます、チャンピオン。でも、勝つたのは俺たちだけの力じゃありません。トツドさんとジョーさん……ベルさんも、ここにいる皆で頑張つたから勝てたんです」

「そうだね。改めてここにいる勇敢なダイバーたちに感謝するよ。マスタイバーを退けてくれて、本当にありがとう」

トツドさんたちの機体に視線を向けて、クジヨウ・キョウヤさんは再び軽く会釈をする。

意外とフランクな人つていうか、本当に丁寧な人なんだな。

「しかし、マスタイバーが……ブレイクデカールがこんな末端にまで広がっているとは」

さつきまでのにこやかな表情が一転、眉根にしわを寄せるチャンピオン。ブレイクデカールがチートツールだつてことは知つてたけど、チャンプがそこまで警戒するほどヤバイ代物なんだろうか。

「えつと……クジヨウ・キョウヤさん。ブレイクデカールつて、そんなにヤバイものなんですか？」

「キョウヤで構わないよ、ユウヤ君。そうだね……ブレイクデカールはただのチートツールではない。GBNの内部システムに干渉して、様々なバグを引き起こしているんだ」

このままマスタイバーの数が増えていけば、最悪GBNそのものが崩壊しかねない。

キョウヤさんは険しい表情のまま、ブレイクデカールに対する憎悪のようなものをその声音に滲ませてそう語つた。

「じゃあ、さつきまで空が曇つてたのって……」

「それもブレイクデカールの効果だね。しかし、ブレイクデカールがここまでの現象を引き起こしているのは、それそのものが強化されて

いるのか、それとも単純にマスダイバーの数が増えているのか、あるいはその両方なのか……ともかく、マスダイバーを撃退してくれたことは感謝する。ささやかなものだが……受け取ってはくれないか？」キョウヤさんはもう一度にこやかな表情を作ると、手元のコンソールを操作して、俺たちに向けたフレンド申請を送ってくる。

まさか、チャンプからフレンド申請が来るなんて。

いつのまにか機体を降りていたチナツとマフユも驚愕に目を白黒させながら、震える指先でその申請を受理し、チャンピオンへとフレンド申請を返す。

「あ、ありがとうございます、チャンピオン！」

「……ありがとうございますっ……！」

「何、大したことじゃないさ。それよりもフェスはまだ続いている。君たちは楽しまなくていいのかい？」

「えっ？」

思わず素っ頓狂な声が出た。

マスダイバーを倒すことに夢中で気付かなかったけど、いつの間にかトツドさんたちはいなくなっている。

フォース「オーラモビルズ」が武者ツガイを獲得した通知が届いたのは、それから程なくしてのことだった。

「完全に忘れてた……」

「はは……こういうこともあるさ、ミッションは終わったけど、まだまだフェスは続いているよ。君たちも疲れただろうから羽を伸ばすといい」

——それじゃあ、僕はこれで失礼するよ。

最後まで物腰柔らかにチャンプは、ひらひらと手を振って、着陸させていたAGEⅡマグナムに乗り込んで夕暮れの空に飛び立っていく。

あれが、チャンピオン。GBNで今、一番高いところにいる男。

その情け深さと同時に感じていた凄みのようなものに、気付けば俺の手は震えていた。

Ep. 17 「更なる高みに至るため」

縁もたけなわといった風情で、夜が訪れたベアツガイフェスの空には、色とりどりの花火が咲いては散つてを繰り返していた。

だけど、俺はそこにどうしても集中できないというか、あのチャンプと会ってからずっと、そわそわしたものが胸の内側で楽しむ邪魔をしているような気がした。

確かに花火のクオリティは現実さながらだし、チナツがきらきらと目を輝かせているのも、マフユが控えめにだけど同じような表情をしているのは納得できる。

でも、どういうわけか乗り気になれない。

トッドさんたちに武者ツガイを持つていかれたのがそんなに悔しかったんだらうか。

いや、違う。

「何よ、そんな仏頂面して」

「ああ……ちよつと考えごととしてたんだ」

「アンタが考えごと、ねえ……明日は槍でも降るんじゃないかしら」

「んだとこの野郎」

「ユウヤ君、チナツさん、その……喧嘩は、ダメです……っ……!」

チナツがいつもの冗談を吹っかけてきたところを本気にしたマフユが慌てて丈の余った袖を振りながら止めに入る。

すっかりこの光景も日常的になってきたな。

それにしたってチナツはもう少し言葉をオブライト……? ああ違う、オブライトに包むことを覚えた方がいいと思うけど。

「大丈夫だぜマフユ、犬にじゃれつかれてるようなもんだから」

「誰が犬よ、アタシが犬ならアンタは猿かなんかでしょ」

「誰が猿だこの野郎……っつと、まあちよつと真面目な話、チャンプに会ってからずっと、なんかそわそわしてんだよな」

これぞ犬猿の仲つて下らない冗談は置いといて、俺は素直に、チナツとマフユへ今の偽りない本心を打ち明けることにした。

フェスは楽しかった。

途中でマスダイバーがしようもない理由で茶々を入れてきたのは
いただけなかつたけど、それだつて皆の力があつたから乗り越えるこ
とができたんだ。思い出の一つに違いはない。

でも、あのチャンプと、キョウヤさんと出会つた時、俺は確かに――
―そうだな、認めるのは恥ずかしいけど、「勝てない」つて思つちまつ
てたんだ。

素人が一目で見てもわかるほど圧倒的なガンプラの出来。そこに
佇んでいるだけで並のダイバーを圧倒するほどの貫禄。

全部、俺にはないものだらけで、今まで漠然と目指してた頂点つて
のはあんなにデカいものなのかつて、ビビってるんだ、今も。

きつとキョウヤさんなら、俺たちが力を合わせてようやく倒すこと
ができたマスダイバーだつて、難なく一人で倒せただろう。

そんなキョウヤさんに、いつか俺は勝てるのか。俺のストライク
は、俺だけの「好き」つて気持ちは通じるのかつて、不安になつてた
ところもあるのかもしれない。

洗いざらい胸の内を吐き出したところで、チナツとマフユは顔を見
合わせて、一様に沈んだ表情を浮かべる。

「それは……確かにそうだけど……」

「……チャンピオンには、私なんて……」

諦めるのは何よりも格好悪いことだ。

でも、相手との力量差を弁えないでがむしやらに突つ込んでいくだ
けの行いは、勇気じゃなくて無謀でしかない。

俺には、俺たちには、頂点なんて無縁な光景なのか――そんな暗い
考えが、頭の片隅をよぎつた、その時だつた。

「いいや、それは違うね。ユウヤ君、チナツ君、マフユ君」

そんな不安の霧を払うように、雲間から差し込む太陽の光みたい
に、優しい笑顔を浮かべたチャンプが、キョウヤさんが、副官と思し
き二人を連れて、俺たちに近づいてくる。

「キョウヤさん……!」

「僕と君たちの間では、まだ力の差があるのは確かなことかもしれな
い。だけどそこだけを見て、君たちだけに眠っている可能性を閉ざし

てしまうのは、もったいないことだ」

——かつてそうやってGBNから姿を消していった強者たちを、僕は何人も見てきた。

キョウヤさんは厳かな声音に、どこか悔しそうな、寂しそうな色を滲ませてそう呟く。

それはきつとずっとチャンピオンの座を譲ったことがないからこそ、絶対強者として君臨し続けてきたからこそその悩みなのかもしれない。

可能性。俺たちだけに眠っている、可能性。

キョウヤさんの言葉を胸の中で反芻してみれば、俺の中にあつたもやもやを薪にして、最初にあつたそわそわした感じが燃え上がってくるのを感じる。

だからなのかもしれない。頭で考えるより先に、心が、言葉が走っていた。

「キョウヤさん。俺……強くなりたいんです」

強くなりたい。拳法を学んだその先にある、「想像を超えた戦い」がしたい。

その気持ちは、偽りなくまだ俺の胸の中に残っている。

だけど、理由がそれだけじゃなくなっていることもまた、事実だった。

「ふむ……君はどうして強くなりたいと欲するんだい、ユウヤ君？」

「上手く言えねーですけど……俺、このGBNが好きになってきた気がするんです」

最初はただ、ガン普拉バトルをする場としてしかGBNを見ていなかった。

それどころか、マフユに教えられるまではガンダムの知識だって、俺が見てきたものに偏っていて、下手すれば、マフユと出会わなかったらきつと「SEED」と「DESTINY」しか見てなかったかもしれない。

でも、マフユと一緒にGBNをやって、そこにチナツも加わって。トッドさんやジョーさん、アトミラールさんにキョウヤさん。色んな

人との縁ができた。

「だから俺……この世界をもつともつと楽しむために、もつと、もつと強くなりたいたんです」

そんな「楽しい」世界を壊していくマスダイバーなんかには負けられないために、これからもずつと、マフユやチナツと「トライダイバーズ」として進んでいくために、まずは俺自身がそれに相応しく、強くなりた
い。

言葉にしてしまえば、胸の内側にあつたそわそわした思いは本当に単純なもので、でも、そんな願いは叶わないんじゃないかって不安に囚われて、もやもやしていたんだ、きつと。

「俺は、あなたみたい……キョウヤさんみたいになりたい！　だから……！」

だから、もつと。

続く言葉を遮って、血気に逸る俺を宥めるように、キョウヤさんが優しく言葉を紡ぐ。

「ああ。なれるさ。君がその『好き』という気持ちを……このGBNや、ガンプラに対する愛を見失わなければ、絶対になれる」

「本当ですか!？」

「本当だとも。クジヨウ・キョウヤには誰でもなれる。僕だって、恥ずかしながら最初の頃は負けてばかりだったからね」

それでも、自分の中にある「ガンプラが、GBNが大好きだ」という気持ちを見失わなかったから、ここまで来れた。

キョウヤさんは、昔を懐かしむように目を細めると、俺の肩にそつと手を置いてそう言った。

俺が、キョウヤさんみたいになれる。

それはきつと、次元霸王流の極意に辿り着いた時のように、途方もない時間がかかることなんだとはわかってる。

それでも、キョウヤさんのその言葉は、確かな重さを持って、真実として俺の心に響いてきた。

「アタシも……」

「私も……」

「なれるとも。チナツ君、マフユ君。君たちだつて同じだ。皆……ダイバーとしてこのGBNに足を踏み入れたその時から、好きだという気持ちを忘れなければ、辿り着けるさ」

何千回、何万回負けたとしても、「もう一回」に賭け続けて、見つけた理由をバネに立ち上がる。

キョウヤさんは、自分が歩んできた道を振り返るように、俺たちを通して見つめていた、かつての自分に語りかけるように言葉を紡ぐ。

「そうだな……ユウヤ君。君はペリシア・エリアに行つたことはあるかな？」

「ペリシア？」

「ガンプラビルダーの聖地とも呼ばれる中立地帯で、そこには様々なビルダーたちが形にした『好き』が詰まっている。一度、自分のそれを確かめるために、訪れるのも悪くないと思うよ」

ペリシア。聞いたこともない名前だけど、キョウヤさんが言うんだからそれに間違いはないんだろう。

「バトル以外で見聞を広げるのもまた、強くなるための道さ。君たちがここまで来るのを、僕はいつまでだって待っているよ、『トライダイバーズ』」

そう言い残すと、キョウヤさんたちは踵を返して、群衆の中に溶け込んでいく。

バトル以外での見聞を広げる。

キョウヤさんの言葉を胸に、俺はそのガンプラビルダーの聖地に、ペリシア・エリアに想いを馳せる。

「ペリシア・エリアか……どんなところなんだろうな」

「概ねチャンピオンが言つてた通りよ。でも、アンタのダイバーランクだと、ガンプラに乗れないはずだったから、乗り物借りていかなきゃいけないけどね」

「えっ!? 俺、ガンプラに乗れないのか!?!」

「……えつとね、ペリシア・エリアは中立地帯、だから……一定のダイバーランクにならないと、ペリシアでガンプラを出すのはダメ、つて決まつてる、の……」

そうだったのか。

なんだか早速出鼻を挫かれた気分だけど、要はチナツが言つてたように、ガンプラに乗れないならガンプラに乗れないなりの救済措置がちゃんと用意されてるってことだろう。

その辺対策してないゲームなんてただのクソゲーだからな。

GBN、神ゲーは伊達じゃないってか。

空に打ち上がる花火を見つめながら、俺たちは次なる目標に向けて決意を新たにしながら、祭りの終わりを、今度は曇りなく堪能していた。



「砂漠でラクダに逃げられたら死ぬってこういうことだよな」

セントラル・ロビーの受付NPDから、シャフランダム・ロワイヤルや今まで受けてきたミツシヨンで稼いだビルドコインを叩いてバギーを借りた俺たちは、一面のサンドブラウンが広がる景色をただ駆け抜けていた。

無味乾燥、って言葉が似つかわしい一面の砂色には何の変化もなく、無駄に現実と同じような縮尺で作り返まれた砂漠には、ベアツガイフェスの時と違って何の感動も湧いてこない。

「そういうことね、とにかく無駄に広いのよ、ペリシア・エリアって」
「それに……ガンプラを出せるようになって、ちゃんと防砂対策をしてないと、関節に砂が詰まって、動けなくなっちゃう、よ……？」
「へー……ガンプラ乗れなくてある意味良かったのかも……」

防砂対策、といわれても正直なところ全くといっていいほどピンと来ない。

ストライクガンダムは原作じゃ接地圧を合わせることで砂地に対策してたけど、ガンプラを出せるランクになったら、俺のストライク焰もそういうことをしなきゃいけないんだろうか。

「アタシのアストレイシクザールも防砂対策はしてないわね……ってか、ほぼ全身フレーム剥き出しみたいなものだから、砂漠戦って苦

手なのよ」

「確かにな」

確かストライクのフレームをコピーして作られたのがガンダムアストレイで、軽量化と人体に近い動きをするために装甲も発泡金属を利用して最低限のものしかつけられてないんだったか。

チナツの言う通り、装甲の隙間とかも多そうなアストレイじゃ砂漠戦は厳しいのかもしれないな。原作に出てきた叢雲劾とロウ・ギユールならその辺何とかしそうなもんだけど。

「……私のエクリプティカも、砂漠で戦うことはあんまり考えてなかったから」

「そっか、そーいや空飛んでも砂は飛んでくるんだよな……」

地上がダメなら空中で戦えばいいんじゃないかねーとか一瞬考えたけど、スラスターの噴射や風に巻き上げられた砂が入り込んでくるからダメなものはダメなんだろう。

でもまあ、ここがガンプラの乗り入れに制限がかかる中立地帯である以上、まさか戦いなんて起こらないとも思うけどな。

「どうかしらね」

「どう……って何がだよ、チナツ？」

「アンタも知ってるでしょうけど、ブレイクデカールはチートツールよ。チャンピオンが警戒してたように、末端にまでそれが広がってるなら、ここでひと騒ぎ起こすバカが出てこないとは限らないわ」

恐らくはブレイクデカールにかかれば、エリアにかけられているリンク制限だとかも無理やりこじ開けて、ガンプラを呼び出すことも可能なかもしれない、というチナツの危惧はそんなに間違っちゃいないんだと思う。

この前のベアツガイフェスだって、戦闘とは無縁なイベントだったのにマスダイバーはバカな理由で暴れてたんだ。

ここで騒動が起きない保証はどこにもないのかもしれない。

「なんだか物騒になってきたな……」

「……私……怖いです、ユウヤ君……」

「心配すんなって、マフユ！ そりゃ確かに可能性はあるかもしれないな

いけど、あくまで可能性の話だろ？」

「マスダイバーがいる以上、ダイバーが皆いやつだとは限らなくても、ガンブラを飾るために作られたエリアで暴れたところで、得することなんて何も無い。」

「非武装のダイバーたちを襲うなんて外道極まる考え方をするようなやつなら別だろうけど、そんなのと遭遇するのは、隕石が頭に落ちてくる確率……よりは高いだろうけど、相当低いと考えてもいいはずだ。」

「うん……そうだ、ね……ありがとう、ユウヤ君」

「気にするようなことじゃないって」

「……ユウヤ、アンタよそ見運転してるんじゃないわよ」

「後ろを向いて楽観的に笑った俺の頬に、丈の余った袖に包まれたマフユの右手が触れる。」

「そして、どこか不機嫌そうなチナツがそう釘を刺してきたけど、ぐうの音も出ないほどの正論だ。反論しようもない。」

「お……？」

「正面に向き直った俺は、バギーのフロントガラス越しに見えた小さな影みたいなものに一瞬気を取られてしまう。」

「どうしたのよ、バカユウヤ」

「誰がバカだ誰が！　じゃなくて、さっき砂漠を徒歩で移動してるやつらが見えたような気がしてさ」

「豆粒みたいな大きさだったけど、野生のラクダがいるわけでもない虚無が広がっているこの砂漠で何か動くものを見つけるとすれば、それは人間以外に他ならない。」

「だからきつと、俺が見たものはこのだだっ広い砂漠をわざわざ乗り物にも乗らず、歩きで移動してる物好きな集団ってことになるんだろうけど。」

「流石にないでしょ、ここからペリシアまで何キロあると思ってんの？」

「チナツは手元のコンソールを操作して、縮尺を拡大した、現在地からペリシアまでの位置が記されている地図を投影する。」

流石に現実フルコピーとは行かなくても、この距離じゃ相当遠い。歩きで行ったら日が暮れるどこの話じゃあない。

「私も……流石に、そんなことする人は、いないかな、って……」
「だよなあ……じゃあ俺の見間違いか」

もしかしたら風に巻き上げられた塵か何かを誤認したのかもしれない。

あれが本当に歩きでペリシアを目指してる集団だとしたらまあ気の毒だし、助けたいところだけど、そんなレアケースなんて滅多にないだろう。

「それにこのバギーじゃ四人までしか乗れないわ、仮に歩いてペリシアに向かっているなつらがいたとしても、集団なんですよ？ 一人しか拾えないわよ」

「……まあ、それもそうか」

釈然としないものは釈然としないけど仕方ない。

もしも彼らが哀れにも乗り物を忘れたか砂漠でラクダに逃げられた集団なら、お気の毒としかいいようがないけど、助けようもないんだからどのみち詰みだ。すまん。

「それよりさっさとペリシア行きましょ、日が暮れちゃうわよ」

「それもそうだな、飛ばすぜマフユ、しっかり掴まってるよ！」

「うん……っ！」

アクセルを全開にして、俺たちは一路ガンプリビルダーの聖地と呼ばれるそこを目指す。

そこでどんな出会いが待っているのか、どれだけの「好き」に巡り会えるのか、そんなことに期待を馳せながら。

EP. 18 「聖地・ペリシア」

ペリシアはガンプラビルダーの聖地。

キョウヤさんがそう言っていた通り、中東の街を思わせる雰囲気の都市には、早速展示されたガンプラが佇んでいた。

エンドレスワルツに出てきたウイングガンダムゼロをライトグレーに染め上げて、追加装備を施したようなそのガンプラの名前を俺は知らない。

それでも、色んなところに施されている工夫で、ガンプラの情報量……確かディテールっていうんだったか。それは素組みと比べて格段に引き上げられている。

「凄え……マフユ、あれの名前知ってるか？」

「うん……スノーホワイト。エンドレスワルツの続編として書かれた小説に出てきたガンダム……試作型、かな……？」

「スノーホワイトプレリユードね。多分それで合ってるわよ、マフユ」
自信なさそうに小首を傾げたマフユにフォローを飛ばしたチナツは、そのスノーホワイトプレリユードというらしいガンダムを見上げて、感嘆したようにほう、っと息を吐く。

俺よりガンプラ作りが上手いチナツからしても、あのガンダムはよくできてるように見えるのか。

「……ってことは、あそこに飾られてるのは相当作り込まれてる……それこそキョウヤさんのAGEⅡマグナムに匹敵するぐらいの代物だ……ってことだ。」

「凄えな！ スノーホワイト……プレリユードだっけ？ あれ、戦ったらどれぐらい強いんだろうな！」

定番のツインバスターライフルだけじゃなく、腰に追加されている、フィン・ファンネルのような装備も使うとなれば、その火力は圧倒的なものになるだろう。

流星はガンプラビルダーの聖地、ペリシアだ。入り口で見ただけでもこんなにわくわくして、闘争心を掻き立てられるなんて。

おかげで、気付けば食い気味にチナツとマフユにそう問いかけてい

た俺の肩に、何かが触れたことを理解するのには、数秒のラグが生じていた。

「ふふふ……はろーやーやー、少年。あれは戦うために作ったものではないよ」

声のした方に振り返れば、そこには癖がある金髪をポニーテールに括って、赤縁の眼鏡に白衣という、いかにも研究者、といった感じのダイバールックに身を包んだ女の人が視界に映る。

ちちち、と人差し指を振るその仕草が嫌味に見えないのは、その人もまた、キョウヤさんと同じような風格……歴戦の証である闘志を秘めていたからか、それともさっきの発言からするに、あのスノーホワイトプレリユードを作ったビルダー力がそうさせているのか。

どっちでも構わないけど、俺が引つかかっていたのは、あの人があれだけ凄い出来のガンプラをバトルに出さない、と言ったことの方だった。

「戦うために作ったんじゃないって……バトルするんじゃないんですか？」

せっかくチャンピオンに匹敵するようにも見えるガンプラを作っているのに、GBNの中でもバトルさせずにただここに飾っておくだけ、っていうのは何というか釈然としない。

「そうだねえ、あのスノーホワイトプレリユードはHGスケールで作ったものだから、バトルに出してもそれなりの戦果は得られるかもしれない」

「じゃあ……！」

「ふふふ……その様子だとペリシアは初めてだね、少年？ GBNにおけるガンプラの役目は、ただ戦うためだけじゃない。そうだね、それを知ってもらうためにもこのトワさんがナビゲーター役を買って出ようじゃないか」

——トライダイバーズ。

トワ、というらしい女の人は、なぜか俺たちのフォース名をピンポイントで言い当てると、眼鏡のブリッジを人差し指で押し上げる。

チャンピオンはアトミラーさんの知り合いだったらしいけど、こ

の人はなんで俺たちのことを知ってるんだ？

まさか、トワさんもアトミラールさんと面識があつたりするんだらうか。

「アタシたちのこと、知ってるんですか？」

「もちろんだとも。トワさん、これでも趣味はガン普拉作りと人間観察でね。新進気鋭のフォースのことは頭に入れるようにしているのだよ」

これでも、というか見た目通りといった趣味を並べ上げて、トワさんは悪戯っぽく目を細める。

それにしたって、まだ駆け出しに過ぎない俺たちのこともチエツクしてるなんて、まるでマギーさんみたいだ。

俺とマフユは顔を見合わせ、互いの瞳にぽかんと口を開けた、気の抜ける表情が映し出されていたことに気付いて小さく笑う。

「ふふ……っ」

「はは、すみません。それで……トワさん、俺たちを案内してくれるんですか？」

「うむ、そうだねえ。君たちさえよければだけど」

「ありがとうございます！ チナツとマフユは大丈夫か？」

「アタシも異存ないわ。ペリシア来るの初めてだし」

「私も……ユウヤ君とトワさんがいいならいいかな、って……」

「ふふふ、なら決まりだね。めくるめくガン普拉の奥深い世界を、このトワさんが君たちに案内して差し上げよう……！」

その場でぐるりと回って白衣の裾を翻すと、トワさんは少し大仰な仕草で、まるでお嬢様に仕える執事のように、頭を下げてみせる。

なんていうか、失礼だけど変わった人だな。

でも、悪い人じゃない。それだけは、あの目を見れば、キョウヤさんと同じくガン普拉を、GBNを愛していることがわかる目を見れば、簡単にわかることだ。

「改めてありがとうございます、トワさん！」

「何、気にすることはないよ、少年。そうだね……見るべきものはやたらとあるが、まず見てもらいたいのはこれだね」

トワさんは宮殿のような建物の近くに佇んでいるガンプラを指すと、ペリシアのメインストリートを早足で駆け抜けていく。

見た目によらないそのアグレッシブさは、人を見た目で判断しちやいけないという好例だろう。父さんが、師匠が言ってた通りだ。

「これは……？」

人波をかき分けて辿り着いたその場所に直立していたのは、何の変哲もない初代ガンダムだった。

何の変哲もない、とはいうけど、なんというか今、俺が組んでるよなHGクラスのガンプラと比較したらややデカいのと……言っちゃ悪いんだけど、腹のコア・ファイターが剥き出しになってたりとか、色々とプロポーションが悪い。

これのどこが真つ先に見てもらいたかつたんだろう、と俺は首を傾げるばかりだったけど、チナツとマフユはきらきらと目を輝かせて、その初代ガンダムに見入っていた。

「わあ、旧キット！ それをここまで丁寧に作り上げてるなんて！」

「1/100なのに、はみ出しが全くない……凄い精度で、塗り分けられてる……！」

「なあチナツ、マフユ、これの何が凄いなだ？」

俺は頭上に無数のクエスチョンマークを浮かべながら、二人に問いかける。

穴が空くぐらい凝視しても、なんというかやつぱりプロポーションが悪いガンダムにしか見えない。可動域だって狭そうだ。

でも、チナツとマフユはこれを絶賛しているし、その様子を後ろから見ているトワさんは、ラーメン屋の店長みたいに腕を組んで静かに頷いている。

「わかってないわね、ユウヤ。このガンダムはね、旧キット……昔に発売されたガンプラの味を損なうことなく丁寧に、正確に作られてるのよ」

「……表面は綺麗なつや消しになってるから、わかりづらいかも、けど……パーツにも傷が全くなくて、すごく丁寧に表面処理してあるんだ、よ……？」

「旧キット……う？」

チナツとマフユが言うんだから、何となく凄いものだってことはわかるような気がした。

特にマフユが言ってくれたように、よく見れば装甲の表面はペリシアの強い日光を浴びてもつや消しを保っていて、細かな傷一つ浮かび上がっていない。

それが凄いことはわかるんだけど、ガンプラって、基本的に組んだらある程度綺麗にできるもんじゃないのか？

「そうだね、少年……君にもわかりやすいように言うとだね、この1/100ガンダムの成型色は赤と白の二色だけ。しかもパーツのほぼ全部がモナカ割り、組み立てには接着剤が必要なんだ。そう言えば、伝わるかな？」

「二色……っ!？」

嘘だろ、おい。

ガンプラって、俺が組んだHGCEエールストライクガンダムもそうだったけど、多少シールがあっても成型色の段階で色分けされてるものじゃなかったのか？

それに、接着剤が組み立てに必要なって。

改めてその事実を踏まえてあのトリコロールも鮮やかな、1/100ガンダムを仰ぎ見れば、どことなく神々しいオーラを纏っているようにも思えた。

「ふふふ、わかってきたようだね、少年」

「ヤバい……何っーか、見た目で判断してた俺がすげー恥ずかしい……」

「何、誰しも過ちは犯すものさ。ならば認めて、次の糧にすればいいだけの話だよ少年。フル・フロントルの言葉さ」

「あの、俺……すみませんでした!」

トワさんの言葉を心に留めて、その初代ガンダムの足元に座っていた、ビルダーと思しきお爺さんに俺は全力で頭を下げる。

「そちらのお嬢さんが言った通り、気にすることはない。旧キットは今の時代に比べれば、野暮ったいかもしれないが……旧キットにしか

ない味がある。それは儂の思い出の味でもあるんじゃないよ」

「思い出の、味……」

「そうだと。儂がお主らと同じ少年だった頃、大きくて値段が張る、1/100のガンダムは、憧れじゃった……」

——じゃからこうして大人になって、その時できなかったことをしているのじゃよ。

お爺さんは、少年のように目を輝かせながらその1/100ガンダムを仰ぎ見る。

「ビームサーベルが、クリアパーツに置き換えられて、る……もしかして、クリアのランナーを……?」

「正解じゃよ、お嬢さん。やはりビームサーベルはクリアパーツでなければのう」

ほっほっほ、と、マフユが改良ポイントを言い当ててみせたことに気を良くしたのか、お爺さんは気さくに笑う。

「ちなみに元のキットだとビームサーベルの柄と刃が白い成型色で一体化しているよ、少年」

「ええっ!? そんなとこまで改良してるなんて……」

「しかも、接着剤を使うと濁りやすいクリアパーツを接着面積が小さいところになっちゃうとくっつけてる……凄いつてもんじゃないわよ、ユウヤ」

チナツもマフユが言ったところに感心したのか、口元を覆って大きく目を見開いていた。

クリアパーツが濁りやすいとか、そういうのはよくわからないけど、それだけでもかなり難しい作業を根気よくやり遂げて、しかも複雑な色分けをはみ出すことなくマスキングだけでやり遂げてるっただけで、もう途方もないほど凄いことに思えてくる。

「それに……立ち姿が決まるように、ちよつとだけ関節に加工してます、か……?」

「はっはっはー！ まさかそこまで見てくれるお嬢さんがいるとは………正解じゃよ。これが儂の……理想のガンダムじゃ」

「理想の、ガンダム……」

旧キットの、お爺さんにとっての思い出の味を損なうことなくブラッシュアップしたそれは、可動域も狭いし、確かにバトルじゃそこまで通用しないのかもしれない。

でも、キョウヤさんが言ってたように、あれには「愛」が溢れている。

お爺さんが少年だった頃の憧れが、思い出が、綺麗に色分けされたカメラアイを通して伝わってくるようで。

「凄え、凄えよ……これが、ペリシア……！ 色んな愛が溢れてる……！」

「ふふふ……だから言っただろう、少年？ 何を差し置いても初めに見るべきはこのキットだとね」

「はい、トワさんー！」

GBNはバトルだけじゃない。

俺はその言葉を、フェスに参加しただけでわかった気になっていただけなのかもしれない。でも今は、そこから一步抜け出せたような気がする。

それはきつとトワさんの、そしてお爺さんの、思い出のガンダムのおかげだ。

そして、俺の中に一つの問いが、雫が凧いだ湖面に零れ落ち、波紋を広げるように生じてくる。

——俺の理想は、愛はなんだ？

まだ、それはわからない。だとしても、キョウヤさんが言ってた通り、それは少しずつ見聞を広めていけば、わかることなのかもしれない。

「さあ少年少女諸君、立ち止まっている暇はないよ。ペリシアは広大だからね。まだまだ見るべきものは沢山ある」

「はい、トワさん！ 大切なものを教えてくれてありがとうございます、お爺さんー！」

「ほっほっほ……儂こそ、このガンダムの良さを理解してくれたことに感謝するよ……」

今の俺には、もったいない言葉だ。

改めてお爺さんに頭を下げ、俺たちはトワさんに導かれるまま、ペリシアを巡っていく。

まだ見ぬ「好き」が、色んな愛が溢れているこの街を。



「さあ皆様、これからシャフリヤール様の新作お披露目が始まります！ 見学を希望される方はガンプラのデータを持参してお集まりください！」

その声が聞こえてきたのは、ぐるりとペリシアを一周してから、カフェで休憩を取っていた時だった。

「シャフリヤール？」

「生きる伝説と呼ばれる世界一のビルダーだね。ペリシアに作品をよく飾っているけれど、そのダイバールックはほとんど誰も知らないらしいよ、少年」

「へえ……そんなに凄いなら、俺たちも見に行つた方がいいのかな」

「シャフリヤールさんが本当に来るっていうならそうね。アタシたちも行きますよ」

「はいっ……！ シャフリヤールさん、楽しみ……」

生きる伝説とまで呼ばれるビルダーの新作が拝めると聞いては、ビルダーの血が騒がずにはいられないらしい。

チナツとマフユは会計を早々に済ませて、そのシャフリヤールが来るらしい中央広場へと駆け出していく。

「あ、おい！ チナツ！ マフユ！ 待ってっ！」

「ふふふ……若いね。ではトワさんたちも行くのでしょうか、少年」

「はいー」

慌てふためくように会計を終わらせて中央広場に向かえば、そこにはもう結構な人だかりができていた。

「さあ、これが本邦初公開！ シャフリヤール様の新作、武装の多様性と——」

武装のなんだって？ がやがやしててよく聞こえねえ。

群衆の中心にいる小男が、シャフリヤール……と名乗ってるおっさんを指すと、ブロックノイズがテクスチャを再構成していく。

そうして現れたザムドラッグは、武装がどうのこうのと言ってた通り、背中にミサイルポッドやら何やらをくっつけていた。

「……これが、シャフリヤールってやつなのか？」

「おかしいわね……スランプなのかしら」

「……え、ええと……」

「ほうほう、これはこれは……」

——端的に言つて、見る価値もないね。

俺たちが首を傾げている中で、トワさんはぼそりとそう吐き捨てた。

目の前にいるおっさんが世界一のビルダー、シャフリヤールなのかどうかはさておくとしてもあのザムドラッグ、俺がこの街を見て回ってきた中で感じた、「好き」って気持ちがあくく伝わってこない。

こんなので言ったら失礼だけど、手抜きにしか思えない、コンセプトすら固まってないようなものを作るのが世界一のガンプラビルダーなのか？

それともチナツが言ったように、スランプにでも陥ってるのか？

俺がそのことを問いかけようとした、その時だった。

「なんかピンと来ないな……」

群衆の真ん中にいた、ジャージに胸当てをつけたようなダイバーリュックの男子が、今まさに俺が投げかけようとした言葉を口に出していた。

「リックくん？」

「何言い出すのよー」

ジャージの男子の友達と思しきデカイ帽子を被った男子と猫耳に猫尻尾の女の子が諫めにかかるが、ジャージ男子の言葉は止まらない。

「え、ああ……でも俺、芸術ってのはよくわからないけど、さっき会った人が言ってただろ？ ガンプラにはそれを作ったビルダーがこうしよう、こう作ろうと思った理想があるって……出来がいいとか、悪

いとかじゃなくて俺あのガン普拉から何も感じない。ザムドラッグへの思いもリスペクトも……あの人の言葉を借りるなら、愛が足りないんだ」

シャフリヤールを名乗るおっさんの前で、帽子の男子にリツくんと呼ばれていたジャージ男子は臆することなくそう言い切った。

当然、取り巻きの小男は何事かを反論してたけど、そんなことはどうでもいい。

「あいつ……勇氣あるんだな」

それに、相応の愛を持ってなきや、あんな言葉は出てこないだろう。年の頃は俺と同じぐらいに見えるのに、もう立派な愛を持っているジャージ男子に、俺はリスペクトのようなものを感じていた。

そいつは今、小男に無理やり連れてかれようとしている。

だったら助けねえと――

「あのガンプラはシャフリヤールが作ったものじゃないわ」

身体が動きかけた刹那、どこに潜んでいたのか知らないけど、忍装束のダイバルツクに身を包んだ女の子が、群衆の真ん中に降り立ってそう宣言した。

「な、何をいきなり！ あの作品は正真正銘シャフリヤール様の――」
「だったらガンプラを動かして。ここにいる手練れのビルダーたちなら、動きでそれが本物かどうか一目でわかるはず……この積載過多のガンプラがどういうマニューバをするのか、さあ見せてみなさい！
できないの？ できないなら貴方は偽者。この街から出て行きなさい！」

女の子の力強い言葉に、何事かを言い淀んだ自称シャフリヤールとその取り巻きの小男は、尻尾を巻くようにペリシアから逃げ出していく。

「なんだ、結局偽者だったのね。あんなのに時間を使って損したわ」
「シャフリヤールさんを、騙るなんて……」

チナツとマフユは、肩を落として呆れたように溜息をついた。気持ちはわかる。世界一のビルダーの作品が見られると思ったらこれだもんな。

「ふふふ……やはり愛がある者にはわかるんだねえ。少年。君も気付いてただろう？」

「はい、俺も……あのザムドラークからは何も感じませんでした」

「それはビルダーとして一歩進んだ証さ。是非とも大事にしたまえよ」

さて、無駄な時間を使ったことだし、口直しに作品を見て回ろうじゃないか。

トワさんはそう言って、白衣の裾を翻す。

愛か。まだ俺にはそれがなんなのかはつきりとはわかんねーけど。

好きっていう気持ちだけは見失っちゃいけないんだ。

心の底から、そう思える騒動だった。

Ep. 19 「霊山の虎狼」

「ピヤツハハハ！ やはりX2はいつ見ても良いものだな、キンケドゥー！」

「そうだね、しかしクロスボーンガンダムの名シーン、キンケドゥが大気圏に落ちていくシーンをここまで再現しているとはね」

やたらとテンションの高い声を上げて目の前を通過していった、両眼が眼帯に覆われているザビーネ・シャル……だと思っただけど、とにかくそれっぽい格好をしたダイバーと、キンケドゥと呼ばれていた、顔の半分を包帯で覆った女性ダイバーが、意気投合した様子で去っていく。

やたらとキャラが濃い二人組が絶賛していたように、そこに展示されていたジオラマの中では、確か前にマフユから聞いた、クロスボーンガンダムの名シーンが再現されている。

正直読んだことないから詳しくはわかんねーけど、大気圏突入の摩擦熱で赤熱する装甲とか、クロスボーンガンダムの白い方のコックピットにビームサーベルが突き立てられた感じとか、そういう細かいところまで妥協なく作り込んでるのは俺にもわかった。

「凄え……さっきの偽シャフリヤールとは大違いだ」

「ふふふ、そうだろうそうだろう？ ビルダーに大切なのはね、少年。何よりも『愛』なのだよ」

「愛……」

それは、言葉にしてしまえば簡単なことなのかもしれない。

だけど、誰しもがはいそうですかと行って自分の持っているものを見せられるほど簡単なものじゃない。

さっきの偽シャフリヤールはぼろぼろに扱き下ろされてたけど、俺のストライク焔は正直なところどうなんだ？ ちよつとだけ不安になってきた。

「ユウヤ君……」

「どうした、マフユ？」

「その……上手く言えなかったらごめんなさい、でも、ユウヤ君のガン

プラは……確かに『愛』が……ユウヤ君が『こうなりたい』って思ったことが、込められてると思う、よ……?」

「どうやら軽く落ち込んだことを気付かれてしまったらしい。」

マフユは相変わらず丈の余った袖に包み込まれた手で俺が着ている軍服の裾を引っ張ると、控えめにはにかみながらそう言うてくれた。

「愛か。具体的にどんな風にも、どんな感じに、まだ言葉にできないけど、なんだか少し安心した気がする。」

「ありがとうな、マフユ」

「まだまだ粗削りだけだね。でもアタシも悪くないと思うわよ、アンタのストライクのコンセプト」

「はは……チナツは手厳しいな」

俺だって、ストライク焔に今できる全力を注いだつもりだけど、ここで見て回ってきた数々のガンプラと比べても、一番の出来だなんてとても恐れ多くていえるはずもない。

でも、それは裏を返せばまだまだ俺には伸びしろがある、未来があるってことでもある。

父さんが、師匠が昔言っていたことを思い出す。

「何事にも近道はない。ただ少しずつ積み上げて、積み上げてきたものを大事にして進んでいくしかないんだよな。」

「ふふふ、少年。安心したまえよ。このトワさん、君たちがあの偽シヤフリヤールと同じレベルだったら最初から話しかけてすらいない。君たち『トライダイバーズ』にはちゃんとした愛があると思ってるから話しかけたのさ」

「ありがとうございます！ 俺……まだまだ未熟かもしれないですけど、いつかチャンプみたいにな、キョウヤさんみたいにバトルも……ガンプラ作りも強くなってみせます！」

「その意気さ、少年。トワさんは君のように夢を追いかけるダイバーのことを心から応援しているよ……っと。それにしても、強くなる、ねえ」

トワさんは細い顎に指をやると、俺の身体を隅々まで観察するよう

に眺めていく。

意味のあることなんだろうけど、こうしてじっと見られてると、なんか背筋がむずむずしてくるな。

「あの、俺……なんかまずいことでも言いましたか？」

「いいや？　むしろ真つ当なことだと思うよ。ただトワさん、ちよつと疑問に思ったのは……君は今でも十分強いんじゃないかな？」

そのダイバールック、恐らく現実ベースの肉体と見た。

トワさんは俺を観察した結果なのか、見事に俺が施したキャラメイクを言い当てる。

沼にハマリそうだったからとか、理由は色々あるけど、俺が現実ベースのダイバールックを採用したのには一つの理由があった。

それは、身体を違和感なく動かすためだ。

VR空間と現実にはちよつとした「ズレ」がある。

例えば、身長の高い人間が身長の高いダイバールックを使うと動きに少し、ほんの僅かしか感じられないようにはなってるけど、違和感が生じたりとか、そういう現象だ。

GBNは技術力が高いからその辺がほぼないに等しいとは聞いていたけど、それでも念のためというか、「俺は俺自身」という当たり前の原則を保つというか、要はこの世界でもちゃんと次元霸王流の動きを再現できることを重要視したところがある。

「ふむふむ……そうなれば次なる高みを目指すんだったら、彼に頼んでみるのも一つの手かもしれないね」

「彼？」

「トワさん……というよりはマギーさんのちよつとした知り合いさ。マギーさん経由でトワさんも面識がなくはないけどね」

——タイガーウルフって知ってるかい、少年。

トワさんはちちち、と人差し指を振りながら、そんなことを問いかけてきた。

タイガーウルフ。虎と……狼？　わからん。その言葉が強さとなんか関係してるのか？

「アタシは知ってるわ。フォースランキング第5位……このGBNで

最も格闘術を極めたといわれるフォース『虎武龍』の頭領ね」

「確か、格闘術を極めたい弟子を取ってるって、いう……」

チナツとマフユの言葉から察するに、そのタイガーウルフってのは個人を指す言葉で、相当な強者……それも格闘術を使うトップランカーってことらしい。

「格闘術!？」

「ふふふ、君なら乗ってくると思っていたよ、少年。リアルをベースにしたその引き締まった体つきに、君が戦いで使っていた次元霸王流拳法……トワさんは君を格闘家と見た」

人間観察が趣味ってだけあって、凄いい観察眼だ。隠してたわけじゃないけど、すっかりお見通しみたいだ。

それはともかく、格闘術でこのGBNの頂点近くに上り詰めたフォースと聞けば、格闘家としての血が騒がずにはいられない。

そのタイガーウルフって人と俺の間にある力量の差は相当なものがあるのかもしれない。でも、強い人と拳を交えることでしか得られないものもある。

「トワさんからの提案としては、次に君たちが向かうべきは『エスタニア・エリア』のフォース『虎武龍』だと思うんだけど、どうだい少年?」

「行きます! あ、でもマフユとチナツは……」

「アタシも別に問題ないわよ、生でタイガーウルフさんを拜める機会なんてそうそうないわけだし、その、アンタが一緒だし……」

「ユウヤ君が行くなら……どこまでも行く、よ……?」

次元霸王流を習ったことがあるチナツならともかくとして、マフユも興味を示してくれたのは意外だった。

でも、俺としてはありがたい限りだ。是が非でもそのタイガーウルフさんに会ってみたかったからな。

「ふむふむ、青春だねえ……それはともかく少年、タイガーウルフのところまでは案内するが、一つだけ条件がある」

「はい! ……どんなものでも!」

「トワさんとフレンドになってくれないかい? その方が色々融通も

効くし、何より……トワさん、いわゆるぼっち勢だからね！」

それがここまで意気投合したのも何かの縁だろう、と、トワさんはぐいぐい俺たちに迫ってくる。

なんだ、この人も素直じゃないというか、素直に友達が欲しいって言えばいいのにな。

なんてことを考えている間にも、トワさんから俺たち三人に、フレンド申請が送られてくる。

無論、引き受ける他に選択肢はない。トワさんからは、大事なことを教えてもらった恩があるからな。

チナツとマフユと視線を交わすと、俺たちは三人で同時にそのフレンド依頼を承諾して、トワさんにも送り返した。

「よろしくお願ひします、トワさん！」

「よろしくお願ひしますね！」

「よ、よろしくお願ひしま、す……！」

「ふむふむ……こちらこそよろしく頼むよ『トライダイバーズ』。全く、嬉しくて涙が出てきそうだね」

愛が重要だって言っても、わかってくれないダイバーも多かったからねえ、と、トワさんはどこか昔を懐かしむように宙を仰ぐと、眼鏡の蔓を人差し指で押し上げて、俺たちにパーティ申請を送ってくる。

「ここからエスタニア・エリアに行くなら一回セントラル・ロビーに戻った方がいい。とりあえずはそうしてくれるとトワさんも助かるんだが」

「わかりました！ それじゃ行こうぜ、チナツ、マフユ！」

俺は今にも躍り出しそうに高鳴る胸を押さえながら、トワさんのフレンドワープに相乗りする形で、セントラル・ロビーに解けていく。

エスタニア・エリアに、タイガーウルフと「虎武龍」。一体そこにはどんな、想像を超えたものが眠ってるんだろうな。



「まあこの手の奴か……俺んところは駆け込み寺じゃねえんだぞ」

エスタニア・エリアを北進してしばらく、いかにも霊山といった貫緑のある山の頂に居を構えていた「虎武龍」のフォースネストに座していた、虎みたいな狼……名前そのまんまな獣人のダイバルツクをした男は、面倒くさそうにそう呟く。

「まあまあ、タイガ君。このトワさんに免じて、彼らの面倒を見てやってくれないかい？」

俺たちが少しだけむっとして、懽然としているのを宥めるようにトワさんは一歩前に出ると、眼鏡をずらした上目遣いでタイガールフさんと視線を交わした。

その時、チナツやマフユほどじゃないにしても、それなりに豊かな胸元がちらりと見えるように、白衣のボタンを一つ外していた辺り、この人も結構な食わせ者だ。

「む……わかった、わかったからそういうのはやめろ！ 女が男の前でみだりに肌を出すもんじゃねえ！」

「なんだ、満更でもないと思っただが……こほん。それはともかくそのユウヤ君、タイガ君は気に入ると思うがね？」

このタイガールフって人、女の人に弱いのかもしれないな。

そんな若干失礼なことを考えている間にも、タイガールフさんは少し考え込むような仕草を見せて、俺の全身を観察する。

「ほう……ユウヤとかいったな。破あッ！」

そうしてたかと思えば、タイガールフさんは全身に闘気を滾らせて、突然、俺の顔面を狙ったハイキックを叩き込んできた。

「ユウヤ！」

「ユウヤ君！」

「大丈夫だぜ、チナツ、マフユ」

でも、その一撃はクリーンヒットすることなくびたりと俺の目の前で静止している。

なんでいきなりそんなことをしてきたのかはわからない。でも、とにかくあの攻撃は勢いこそ凄かったけど、敵意がなかった。

だから、避けるまでもなかったってことだ。一応次に備えてクロスカウンターの構えを取りつつも、俺はマフユたちに笑って返した。

「ほう、ユウヤ……なんで今のを避けなかった？」

「敵意がなかったからです、これから組み手やるってんなら、こつちも全力でやりますけど」

「クロスカウントターの構え……なるほどな。トワのやつが言ってたのも頷ける。お前は武道家としちや相当できた部類だ」

「ありがとうございます！」

タイガーウルフさんは足を下ろすと、どつしりと腕を組んで静かに頷く。

さっきのハイキックを見るに、この人の戦い方は流派というよりも、戦いで磨き上げてきた喧嘩殺法に近いところがある。

それでも、喧嘩殺法ががむしやらに繰り出されるものではなく、「型」としてちゃんとできている辺りは、流石トップフォースのトップランカーってところか。

「だがユウヤ、お前は一つだけ間違いをしてる」

「間違い……ですか？」

「格闘家としちや花丸満点、百二十点だ。だが……ダイバーとしちやちよつと欠けてる。そいつが気になるなら、ちよいと俺の修行を受けていくつもりはないか？」

強くなりてえならな、と、タイガーウルフさんはさつきまで面倒くさがっていたのが嘘のように情熱の炎を瞳に滾らせると、俺の両肩にぽん、とその手を置いてくる。

「ありがとうございます……俺、受けます！」

「いい返事だ。そつちの嬢ちゃんたちもやってくか？」

「アタシは是非お願いします！ タイガーウルフさんの強さの秘訣、知りたいですから！」

「私は、ユウヤ君がいるなら……」

「じゃあ決まりだな。あー……」

「俺たち、『トライダイバーズ』です！」

「おう、それじゃあ行くぜ『トライダイバーズ』！俺の修行はちよいと厳しいけどな！」

タイガーウルフさんは剛毅に笑うと、ついてこいとばかりに背中を

向けて歩き出す。

その背中には歴戦の貫禄のようなものが滲み出ていたけど、そわそわと慌ただしく揺れる尻尾がなんというか、色々台無しにしていた。



果たしてタイガーウルフさんの修行は現実でやったらどれも過酷なものには違いなかったけど、ダイバー姿でやればどれも簡単なものだった。

鉄棒に膝でぶら下がりながら、杯で組んだ水を同じくぶら下げられている桶に汲んでいく修行とか、頭に重りを乗せた状態でヒンズースクワットで階段を上っていくとか、そんな感じのばかりだ。

チナツならともかく、見た感じ体力なさそうなマフユもちゃんといてきてる辺り、ダイバーとして活動してる間は疲労とは無縁なのかもしれない。

なら、この修行の意味ってなんだ？

ふと走り込み中に立ち止まって、俺は考える。

俺のタイガーウルフさんへの対応は、格闘家としては問題なかったのかもしれない。でも、ダイバーとしては間違っていた。

そこから導き出される結論は、つまり。

「そうか……この修行、ダイバーとしての身体の動かし方を鍛えるためなのか！」

「はあ？ ダイバーとして、って……」

「チナツ、お前はある程度運動得意だろ？ マフユは……申し訳ないけどそうは見えない。でもマフユも、脱落せず修行についてきてる」「うん……私、運動は苦手、だよ……？」

「なんつーか、上手く言えないけど……この修行、ダイバーと現実にある『ズレ』を矯正して、この世界に最適化するためなんじゃないかって」

現実に近い動きをするためにダイバールックをリアルに寄せてたところはあるけど、ここはあくまでも仮想空間でしかない。

だけど、仮想空間だからこそ、ダイバー姿と現実の間に少しだけ生じるラグのようなものを埋めるため、ダイバーとして動くためにこの修行は組まれているのだろう。

「ほう、もう正解に辿り着いたか」

フォース「虎武龍」のフォースネストを一周し、道場に戻ってきた俺たちを見て、タイガーウルフさんは感心したように小さく頷く。

「ユウヤ、お前が言う通りダイバーとしての俺たちと現実の俺たちの間には微細だがラグがある。ダイバーとしての自分に自分をリンクさせる……まあ、まどろっこしい話はこのままで。あとは拳で語った方がお前には伝わりやすいだろうよ」

「ありがとうございます、タイガーウルフさん！ 望むところで……」
「おう！ お前も拳法家として相当鍛えたみたいだが、一筋縄じゃあ行かないとこを見せてやる！」

タイガーウルフさんがそう宣言すると同時に、門下生の一人が銅鑼を鳴らし、プラクティスモードでのフリーバトル申請が、俺へと叩きつけられる。

このGBNで頂点の格闘家。そんな人と拳を交える機会があるなんて、願ってもない幸運だ。
だったら。

「全力を尽くすしか、ねえよなあ！」

タイガーウルフさんが愛機を呼び出したのに合わせて、俺もストライク焔をバトルフィールドに召喚する。

戦いの始まりを告げるように、銅鑼が三度鳴り響く。そして俺は、目の前のガンプラを、タイガーウルフさんを真っ直ぐに見据えて拳を構えるのだった。

Ep. 20 「メガ粒子杯への誘い」

「次元霸王流！ 疾風突き！」

まずは何より先手を取ることだ。

次元霸王流は空手を基礎にこそしているけど、そこから開祖がブラッシュアップした技の数々は大技が多く、ほぼ密着状態での、超クロスレンジでの戦いを想定している流派だといえる。

だからこそ、間合いを詰めるための手段が重要になってくる。それを理解していたからこそ、疾風突きや聖槍蹴りといった技が開発されたのだろう。

超高速のジャブに威力も上乘せした拳が、タイガーウルフさんの緑を基調にしたガンプラへと叩きつけられる。

でも、タイガーウルフさんは避ける素振りも見せなければ、むしろ背中を向けるという、現実で考えればほとんど舐めプか自殺行為に等しいことをやってのけた。

「どういうつもりだ……まさか！」

『そうだけ、ユウヤ！ ガンプラバトルには……全ての動きに意味がある！』

気づくのが遅れたけど、タイガーウルフさんの機体は、その背面にシールドを搭載していた。

盾の形状から察するに、あのガンプラはアルトロンガンダムをベースにしているのだろう。

それは一旦置いておくとしても、全力で放った疾風突きを、背を向ける形でガードしたということは。

『後隙、貰ったぜ！』

「させねえっ！」

そのまま機体を回転させると、タイガーウルフさんは疾風突きの体勢を取っていたストライク焰の軸足に向けて足払いをかける。

俺はそれを読んでスラストスターを全力で逆噴射、機体を後退させた。

危ないところだった。これが現実だったら俺は、足払いからの連携で胴体にダメージを食らってただろうからな。

『ふ……ははは！ わかってきたじゃねえか、ユウヤ！』

「わかってきた？」

『おう、今のお前のストライク……エールストライカーのスラスタをこっちに向けてバックブーストかけただろ？ それは現実じゃできねえことだ』

つまり、お前がダイバーとして理解を深めたのと、ガンプラバトルをわかってきたことの証だ。

タイガーウルフさんはもったいないくらいに称賛の言葉をくれると同時に、苛烈な攻撃を繰り出してくる。

パンチとキックが絶え間なく繰り出される荒々しい戦い方は、確かに野生を、厳しい世界を生き抜いた虎や狼を思わせた。

言ってしまったら、俺はまだまだダイバーとしても、ビルダーとしてもタイガーウルフさんには負けている。

だけど、一つだけ譲れないものがある。それは、次元霸王流という流派を背負っていることだ。

勝てないとわかって諦めてたら、次元霸王流の看板にも泥を塗ることになるのなら、たとえ力及ばずとも全力で戦うのが筋つてもんだらう。

「次元霸王流！ 閃光魔術蹴り！」

『プロレスを参考にした複合技か!?!』

一旦間合いをとった俺は、仕切り直しの意味も兼ねて閃光魔術蹴りを放つ。

タイガーウルフさんはその特性も見切っていたのか、ガードではなく回避という選択肢をとって、徹底的に俺の後隙を潰すように攻撃を仕掛けてくる。

まづいな、こいつは。

次元霸王流は、その威力だけなら八極拳に勝るとも劣らない。ただ、その代償として大技が多い分、隙ができることも確かだった。

タイガーウルフさんはそれを一目で見切った上で対処している、つまり俺の戦い方には隙があるということ、拳で語ってくれているってことだ。

ただ、俺だって伊達に次元霸王流の看板を背負ってるわけじゃない。

「行くぜ、隙があるってんならこいつだ！」

『マーシャルアーツか！なるほどな……お前は確かに気に入ったぜ、ユウヤ！』

「ありがとうございます！ うおおおっ！」

手を替え品を替えてやつだ。

小手先の技術かもしれないけど、俺が次元霸王流だけじゃなく、色々な格闘技を修めているのは、こういう状況にも対応するためであつた。

空手、ボクシング、マーシャルアーツ、ソバット、コマンドサンボ。次元霸王流ほどではないにしても、こつちの手札はまだまだ残ってる！

「ワン、ツー！」

『正直な拳だ！』

マーシャルアーツから構えをボクシングに切り替えて、ジャブを放つ。

タイガーウルフさんほどの格闘家であつたとしても、極限まで隙を小さく、スピードを追求した拳を避け切るのは難しい。

だからこつちは真つ向から挑む。

次元霸王流を見切られたとしても、ペースを取り戻して攻めに転じることができた。

今度は俺がタイガーウルフさんに隙を作つて叩き込む番だ。ボクシングから空手に、空手からコマンドサンボに、そして足技は柔道を参考に。

俺は、徹底的に手を緩めることなくタイガーウルフさんを攻撃し続ける。

それでも、タイガーウルフさんのガンプラは、タイガーウルフさんは、攻撃の受けに回ることこそあつても、体幹を崩すような致命的な隙は見せてくれない。

流石はトツプランカーだ。俺はその、完成された護身にただただ舌

を巻く。

『悪くねえ……いい拳だぜ、ユウヤ！ その全力に、俺も……』『ジーエンアルトロン』も全力で応えてやる！』

『来るのか……っ!?』

『はあああっ!』

タイガーウルフさんのジーエンアルトロンというらしいガンプラが震脚の要領で道場の床を踏み砕くと、その衝撃波がびりびりとストライク焰へと伝わってくる。

俺は体幹を崩してしまわないようにそれをガードすることが精一杯だった。

だけど、それこそ相手の真の狙いだったのかもしれない。

『今のを見て、守りに回るセンスは悪くねえ……断言してやる。お前は強くなれるぜ、ユウヤ！ だから俺は……お前に「高み」を見せる！ 喰らえ！ 必殺……』『龍虎狼道』!』

『なんの……っ！ 負けられるか、諦めるか！ 動け、ストライク焰！ 次元霸王流、聖拳突きいいッ!!』

揺らぐ機体を立て直して俺は、ジーエンアルトロンの両肩からパージされて拳に収まった、虎と狼を模したそのナツクルガードから放たれるエネルギーの奔流に向けて、今できる最大の特技を繰り出す。

正拳突きを極限までブラッシュアップして威力を必殺の領域まで高め上げた、次元霸王流「聖拳突き」。

それは一切の雑念を、煩惱を振り払った明鏡止水の境地から叩き出される技をこそ指す。

「ユウヤ!」

「ユウヤ君……っ!」

だけど、タイガーウルフさんにはまだまだ及ばなかったようだ。

龍虎狼道のエネルギーは繰り出した拳に止められることなくストライク焰を呑み込んで、さながら原作でローエン格林を受け止めた時のように、その装甲を溶かしていく。

「これが、『高み』……!」

『応ともよ、ユウヤ。待ってるぜ、ここだよ!』

「へへっ……ありがとうございます！」

——ああ、遠いな。でも、俺だっけいつかはそこに。

【Battle Ended!】

【Winner:タイガーウルフ】

そうしてストライク焰がテクスチャの塵へと還されたところで、バトル終了を告げるアナウンスが響き渡る。

いい経験ができた。強がりとかじゃない。

本当の「高み」にいる男の実力を見たことは、そしてその拳と語り合ったことは、俺の中で大きな財産になるはずだ。

でも、やっぱり負けるってのは悔しいもんだな。

ストライク焰の全力を、俺の全力を尽くしても、届かなかった。それはダイバーランクを見れば一目瞭然の、当たり前のことなのかもしれない。

だとしても、一人の武道家として、次元霸王流の看板を背負った男として、負けちまったってのは、悔しいんだ。

「悔しいか、ユウヤ？」

機体を降りたタイガーウルフさんは、どつしりと腕を組んで、真っ直ぐに俺を見据えて、そう問いかけてくる。

「はい、正直めっちゃ悔しいです」

「ははは、お前は拳通りの人間だな！ でもな、その悔しさがお前を強くする。その悔しさが、ガンプラを磨く力になる！」

「はいー」

「だから弛まず磨けよ、お前の腕を……お前の相棒を、あのストライク焰をよ」

タイガーウルフさんは、そう言って俺に手を差し伸べてきた。

その手を握り返して、俺はもう一度力強く「はい」と返す。

なんだろうな、泣きたくなるぐらい悔しいのに、タイガーウルフさんの言葉を聞いてると、涙なんでもんはどこかに吹っ飛んで、次こそはって気持ちが湧いてくる。

そうだ、何万回負けても、それで届かなくても、GBNには「次」がある。もう一回にいつだって賭け続けることができるのだ。



「お疲れ様、結構いい試合してたんじゃない？」

「慰めはよせよ、チナツ。完敗だったぜ」

「で、でも……ユウヤ君、タイガーウルフさんに見込まれてた、よ……？」

「ああ……負けたのは悔しいけど、あの人に認めてもらえたのは、強くなれるって言ってもらえたのは、マジで嬉しい」

その後、タイガーウルフさんと握手を交わして、セントラル・ロビーに帰還した俺たちは、そのまま反省会のようなものを開いていた。

別れ際、先にペリシアに行つたことを伝えると「いけ好きな狐野郎に会わなかったか？」みたいなことを訊かれたけど、それが誰なのかわからないし、会った記憶もないから素直に答えたら、安心したように胸を撫で下ろしていたことが妙に記憶に残っている。

何だろう、あれだけ強いタイガーウルフさんにも天敵みたいなものはいるんだろうか。ちょっと想像がつかない。

「ふふふ……得られたものはあつたようだね、少年？」

俺たちの修行をお茶を啜りながら何も言わずに見ていたトワさんが、そう問いかけてくる。

得られたもの。それを数えるなら、もう両手から溢れてしまうほどだ。

「はい！ 俺……悔しいけど、いつか絶対タイガーウルフさんのように、チャンプのように強くなりたいって、ストライク焔は俺の大事な相棒だって、拳を通してわかりました！」

「いいねいいね青春だねえ……少女たちもお疲れ様、いい刺激になったろう？」

「アタシはなりましたけど……」

「だ、大丈夫です、チナツさん……私も、ユウヤ君の頑張る姿が見られました、から……」

「そう言われるとなんか恥ずかしいな……」

マフユは丈の余っている袖口で口元を覆うと、頬を赤らめながらそんなことを言っただけだ。

頑張ったことは事実だけど、そこまで正直に言われると、なんと
うか照れるな。

ちよつとだけ気まずい沈黙が、俺とマフユの両肩にのしかかってくる。

「そうよ、ユウヤ。勝てなかったのは悔しいかもしれないけど、その……あんた、全力だったんだから、それはいいことよー」

「へへっ、サンキューな、チナツ。マフユ。俺、もつともつと強くなる。強くなって……」

強くなって、どうするのか。

そこまで言ったところで、俺の中に一つの疑問が零れて落ちた。

強さを求めることに果てはない。だけど、それだけを求め続ければいつかは無明に落ちてしまうかもしれない、と、父さんは、師匠は俺にそう言ってくれたことを思い出す。

「ふむ……少年。『高み』が何かを知ったのなら、次は、君自身が戦いの中で見つけていく番じゃないかい？」

「俺自身が……」

「トワさんから言えることはそれまでだよ。ガンプラバトルに……GNに、たった一つの正解は存在しない。果てなき戦いに身を投じるのも、そこそこで妥協してやっていくのも、そもそもバトル以外のことで楽しくやってくのも、それぞれの自由だからね」

少し突き放すような言い方だったかもしれないけど、トワさんが言ってくれたことは確かな響きを持って、俺の心に伝わってきた。

強さを求める。その意味を知ることが、次の俺に必要なものなのだとしたら。

ぴこん、と気の抜ける電子音が聞こえたのは、拳を固めて決意を固めた時だった。

「メッセージ来てるわよ、ユウヤ」

「ああ、ありがとな、チナツ」

件名と送信者を確認してみれば、送られてきたメッセージの主は、タイガーウルフさんだった。

件名の欄にはぶつきらぼうに、「伝えたいことがある」とだけしか書かれていないのも、なんだかタイガーウルフさんらしい。

【From:タイガーウルフ】

【To:ユウヤ】

【Message:よう、ユウヤ！ さつきは言い忘れたけど、お前が更なる強さを求めるなら、今度開催される「メガ粒子杯」に出場してみるのが一つの手だと思っぜ】

送られてきたメッセージには、そんなことが書かれていた。

メガ粒子杯。なんだそれ？

字面からすればなんかの大会なんだろうけど、それにしちゃなんとなんか物騒なネーミングだ。電子レンジの中に入れられたダイナマイトみたいになったりしないだろうか？

「メガ粒子杯……強者への登竜門って言われてる大会だ、よ……？」

「参加条件は確かダイバーランク……どれくらいだったかしら。とにかくSランク以上は出てこなかったはずだわ」

存在を知っているらしいマフユとチナツはそう言った。

強者への登竜門。今の俺が求めていることが「強さ」の意味なのだとしたら、その大会に参加しないというチョイスはない。

「メガ粒子杯……いいね、やってやろうじゃねーか……！」

「ふふふ、その意気だよ少年。ただし、メガ粒子杯は一筋縄じゃいかないだらうね」

「と、いうと？」

「君は確かにランク不対応の強さも持っている。何度もマスタイバーを退けてもいる。だが、あの大会に出てくるようなダイバーの中には君みたいにランクが低くてもSランクや下手をしたらSSランクに匹敵する存在が紛れ込んでいるのは珍しくないんだ」

Sランク。チナツがAランクだったはずだから、それ以上に強いやつと、SSランクともなればそれを更に上回るやつ。

そんなのが紛れ込んでいる大会——想像するだけでわくわくして

きたな！

「いいねえ……強いやつと拳を交えて語り合えるまたとない機会だ」

「アンタならそう言うと思ったわ、この修行バカ」

「ユウヤ君は、強いんだ、ね……」

私は怖くて、出られそうにないや。

マフユは控えめにはにかむと、どこか恥じらうように俯いてしまう。

怖いか怖くないかで訊かれたら、そりゃあ怖いに決まってる。負けることだって、俺より強いやつに挑むことだって、本当なら恐れて当然のことなんだから。

「俺だって怖いさ」

「ユウヤ君が……？」

「タイガーウルフさんとやった時みたいに、全力出して敵わない相手がいると思ったら、負けると思ったらブルっちまうところがあるのは……恥ずかしいけど否定できねえ。でもな……やる前から諦めることだけはしたくねえ、それだけなんだ」

だったら、ピンチの時こそノーガードで笑って、窮地の中にこそ飛び込んでいくことで、無理やり恐れを踏み倒す。

それが、俺なりの信条というか信念というか、とにかくそういうものだ。

だけど、マフユにもそれを強制するつもりはない。トワさんが言うてたように、やり方は人それぞれだからな。

「いい心構えだ、少年……もしもメガ粒子杯に参加するのなら、修練を積んでおくといい。トワさんも呼んでくれればいつでも協力するよ」

「ありがとうございます！ 俺……メガ粒子杯に挑戦します！ そして……絶対に優勝してみせます！」

「ふふふ、その意気だよ。じゃあ、トワさんはここらで失礼することにするよ」

グッドラック、少年。

そう言い残すと、トワさんはログアウトボタンに手をかけて、現実へと解けていく。

「なんだか濃い一日だったわね……」

「はい……ペリシアを見て、タイガーウルフさんのところに行つて……」

「それで、メガ粒子杯への参加も決めて、か」

考えてみれば相当なハードスケジュールだ。

でも、この前の時みたいなのは疲れは全く感じない。むしろ、胸の内側で滾っている何かは今にも沸騰しそうで、寝れなくなることの方が心配なぐらいだった。

「当然アタシも参加するわ。でも、練習なら、その……付き合つてやつてもいいわよ！」

「私は参加しないけど……これ、練習は……しっかりと、ユウヤ君を支える、ね……！」

「へへっ……ありがとうな、チナツ、マフユ！」

メガ粒子杯、強者への登竜門。

まだ見ぬ戦いの舞台を想像しながら俺は、ぐっと拳を固めて、決意を新たにす。

今度こそは絶対に、絶対に、負けてなんかやるもんか。

幕間その2 「忍び寄る黒影」

GBN総合スレ part. XXX

1. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガンプラバトルネクス・オンライン、通称GBNについて語るスレッドです。各種ミッションの攻略、ビルド構築の相談、フォース勧誘などは専門スレでお願いします。

【関連リンク】

GBN攻略wiki

[https](https://)

ビルド相談スレ

[https](https://)

フォース勧誘・傭兵募集スレ

[https](https://)

【前スレ】

GBN総合スレ part. XXX

[https](https://)



382. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

新人の分隊とはいえ数的不利を覆して「GHC」に勝った奴らがいるってマジ？

383. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジもマジよ、アーカイブ残ってるから見てくるといいます

384. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

トライダイバーズ？ 聞いたことねえな

385. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

てかよく見たらこのストライク、この前シャフランダムスレで話題になつてた次元霸王流くんのじゃん？

386. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ダイバーは地球連合の制服着てるのにやってるのがGガンなんよ

387. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
まあX100系フレームはアストレイの基礎にもなったぐらい可動域に長けたものだから多少はね？

388. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
男一人に女の子二人……羨ましいな畜生

389. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
あのティアラのダイバー、チナツか

390. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
チナツ？ 誰だそれは！

391. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ククク……「チナツ」とは長らくソロで戦っていたAランクダイバーよ……デカイツインテと銀のティアラに八重歯が特徴的な、「トライダイバーズ」に所属する前はヴァルガとかでよく「二代目デッドエンド」と鎬を削っていたぞ……！

392. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
解説兄貴たすかる

393. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
＜＜391

有能、だけど解説兄貴は毎度どこからそんな情報仕入れてくるんですかね……

394. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
二代目デッドエンドで思い出したわ、あの子かー

395. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ソロ専だった女の子が野郎のフォースに入る……つまりそういうことだな？

396. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
マフユちゃんとかいうゴスロリ萌え袖の女の子可愛い

397. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
お、何だ？ ニュータイプの修羅場トライアングルか？

398. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

トライダイバース、活動履歴追っかけてみたけど今んところは仲良くやってるみたいだからそうならないといいな、ギスってフォースが解散することほど地獄はないからな……

399. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんだっけ、二年ぐらい前にフォースランキング30位ぐらいまで上がった連中が一気に転落してってそのまま解散した事件あった気がするな

400. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

シャノワールか……最後の方は落ち目になってたし有名どころの解散だからびっくりしたな

401. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

内部はそりやもうギスってたらしいからな……

402. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

話変わるけど、ベアツガイフェスにもマスダイバーが出現したってマジ？

403. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジもマジよ、ヴァルガでも嫌われてるD・ジエイドが出没してたっぽい

404. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの粘着野郎か……頼むからこれ以上ペイルライダー系列の評判落とすのやめてくれよなー、頼むよ……

405. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ブレイクデカルってチートなんだろ？ こんだけ堂々と使ってるんなら運営はなんでマスダイバーをBANしないんだ？

406. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

詳しくはよくわからんけど使用した痕跡が鯖に残ってないって聞くな

407. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

極論運営の目の前でブレイクデカル使っても使用したログが残らんからその場で現行犯逮捕しても結局証拠不十分で釈放みたいな

感じよ

408. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
悪質だなあ……元締めはそんなもん作ってばら撒いて何がしたいんだ？

409. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
皆樂して勝ちたいんだろ、Bランクの壁超えられないやつらとかその辺にまで広がってるらしいし

410. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
そのD・ジエイド、トライダイバーズに倒されたみたいだけどな
411. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

WTF？

412. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
なんか知らんけどボコられてたらしい、俺はその場にいなかったからわからんけどチャンプがそう言った

413. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
チャンプが言うんなら間違いないんだろうな……

414. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
とんだハリキリ☆フォースが現れたもんだぜ

415. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
それにしても最近バグ多くないか？ 運営仕事して？

416. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ベアツガイフェスでも固定されてるはずの天候が急に変わったからなあ、なにあれ？

417. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
それがどうもブレイクデカールの影響って噂があるらしいぞ

418. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
またブレイクデカールか

419. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ただでさえチートでイキってる奴が鬱陶しいってのにバグまで撒き散らすとか勘弁してくれよ……

420. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

仮説に過ぎないとはいえなあ、実際のところいくらぐらいで流通してんだアレ？ それなりにマスダイバーがいるってことは結構安い値段でばら撒かれてるってことだろ？

421. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
うーん、まずブレイクテカール買おうとか思ったことすらねーからな

422. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
「ザ・シルバリー」が締め上げたマスダイバーは大体5000円で買えたとかほざいてたらしいが

423. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
「ルミエル・ナイツ」が締め上げた奴は交換条件と引き換えにタダで貰ったって言ってたらしいぞ、この前シャーロットから聞いた

424. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
俺「ツアーリツァ・ルイツアリ」だけど、締め上げた奴は30ドルで買ったってほざいてたぞ

425. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
条件がバラバラすぎる……つまりどういうことだってばよ？

426. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
複数のルートがあるんじゃないの？

427. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
売人の面が割れてねーんじや何言っても憶測だわな、どっちにしろ害悪だからさっさとBANされてほしいけど

428. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ペリシアでもシャフリヤールの偽者が出てきたり、なんかここ最近のGBNは物騒だな……

429. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
これも全部マスダイバーってやつのせいなんだ

430. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
おのれマスダイバー！ ダーク♂アヴァロンを潰す……！

431. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
もう勝手に潰れてるんだよなあ……

432. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

AVALONをぶっ壊す！ とか、チャンプ以外に大したダイバーはいない！ とかイキってた割にはチャンプにすら辿り着けずお陀仏だったからな

433. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

偽シャフリヤールといい、有名人を騙ったり貶めたりすることで満足を得てる性格悪いのもいるんやなあ……

434. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

一応ブレイクデカルなしで正面から喧嘩売ったとこだけは評価してるよ、ダーク♂アヴァロン

435. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ザムドラッグといや毎回チャンプのところに凸ってはボコられてを繰り返してるゲドリートルって子も使ってたな、偽シャフリヤールのとは比べ物にならないぐらいゲドリーちゃんのはいい出来だけど

436. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

毎回律儀に出撃してるチャンプ、なんだかんだで優しいよな

437. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

どうせ格上凸するんだったらブレイクデカルなんてチートに頼らず「度胸ブラザーズ」よろしく裸一貫で突撃せんかい！

438. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

噂のトライダイバーズの次元霸王流くんはその辺頑張ってるな……

439. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

バトルのログ見る限りほとんど格上と戦ってるっぽいからなあ

440. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

この前タイガーウルフと組み手してたらしいぞ、まあ当然負けてたけど

441. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

タイガーウルフもなんか随分丸くなったな、この前も新人ダイバー構ってやってたんだろ？

442. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

噂によるとマギーさんが認めた新人らしいぜ、そのダイバー

443. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あー、あのジャージに胸当てつけたような格好してるやつとデカイ帽子のやつか、ペリシアで偽シヤフリヤール論破してたところ見たな

444. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マギーさんが認めてくれたダイバーは伸びる、あると思います

445. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

人を見る目に関しては超一流の頼れるお姐さんだからな、マギーさんは

446. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

噂によれば次元霸王流くんもログイン初日に

ヤスに絡まれてたところをマギーさんに助けてもらって認められたとか

447. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

またヤスカ

448. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつも何回もマギーさんにお灸据えられてんのに大概懲りねえよな……

449. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

獄炎のオーガといい、突如として才能あふれる新鋭が現れて（嫉妬で）狂いそう……!

450. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>449

あーそれめっちゃわるー……でもブレイクデカールには手を出すなよ、絶対だぞ、フリじゃないからな!



「トライダイバーズ、か……」

薄暗く、ディスプレイの照明が照らしているだけの部屋の中。その男はスレッドとG-Tubeの映像を交互に眺めながら、忌々しそう

に呟いた。

トライダイバーズ。その名前に興味はない。彼らが何をしていようと、私には関係ない。だけど。

「この次元霸王流という技……かつてGPDの全盛期に学生大会で優勝したチームのアタッカーが使っていたものだな。そうなるこの『ユウヤ』という男……伝説の再来というわけか、クク、面白い」
「……」

「見たところあのチナツという女も素質はある。マフユだったか……奴はいつでもいいが、数合わせぐらいにはなるだろう。いずれにせよ、こちらの手駒として引き寄せられれば来たるべき日に向けた大きな戦力になる」

男はくつくつと肩を揺らしながら呟くと、G-Tubeに記録されていた、ストライクガンダム改造機が、アルケーガンダムを使っていたマスダイバーを打ち倒すシーンを再生する。

それを見ても、感じ入ることは特にない。ただ、ブレイクデカールという絶対の力を手にしていながら無様に負ける、使えない奴もいるものだということだけだ。

「D・ジェイドも愚かな男だ。この私からブレイクデカールを買っておきながらこんなズブの素人に負けるとは……全く、ミスタ・Sにどう報告したものか……それはともかく、わかっているな、『シャドウロール』?」

「……はい」

シャドウロール。その名前にも意味はない。

この男にとっての私の存在は、手駒以上の意味なんてないのだろう。そして、駒の識別には名前が必要だから、わざわざガンプラをプロのビルダーに作らせて、私に手渡すことで「シャドウロール」という駒にする。

それがどれだけ歪なことなのかはわかっていた。でも、この男にそんなことを言ったところで、どうせ無駄だ。

「今度開催されるメガ粒子杯……そこには手駒の候補が集まってくれらるだろう。当然あの『トライダイバーズ』も現れるはずだ。だから

『シャドウロール』、お前はそこで一人でも多く手駒を連れてこい。わかつているだろう?」

心をへし折れば、力に屈すれば、人は簡単に言うことを聞くようになる。

にやりと口角を吊り上げて醜悪な笑みを浮かべる男の言葉は露悪的だが、それは真実だ。

強さこそがこの世で全てを決める真理で、どれだけ心を強く持とうとも、圧倒的な力の前にはただただ平伏す他にない。

だから、弱い奴には生き残る資格なんてない。生きるためには、強くなければいけない。

ぎり、と、ガンプラを握りしめる手に力が籠る。それは当たり前のことであるはずなのに、力で事を成すのが全てなはずなのに、この男から命令を下された時、なぜ私は怒りを感じているのだろう。

なぜ、トライダイバーズの次元霸王流を使う男を見ると、ここまで苛々してくるのだろう。

わからない。だけど感情などというものは余計なノイズでしかない。

憂さを晴らすというなら、結果のために使う手段で達成できる。

トライダイバーズ。そして次元霸王流を使う男、ユウヤ。

「……潰す……」

言われた通りに、命令通りに。

そして、私自身の信条通りに。

「クク……そうだ、それでこそ我が『シャドウロール』だ……!」

意味のない名前で呼ぶな。

苛々する。だけど、言ったところで意味なんてない。無駄なだけだ。

だから私は——この力で、事を成し遂げてみせる。力を証明するところこそ、この世で絶対唯一の、正義なのだから。

Ep. 21 「度胸の炎は燃え上がる」

メガ粒子杯に向けてやること、といってもそう簡単には思いつかないけど、とりあえず戦いの経験値を積んでおけば損はないだろう。

それが俺たちの間で交わされた合意のようなものだった。だからこうして、溜まりに溜まっていたフォース戦依頼のリストを眺めていたんだけど。

「あいや待たれい、少年！」

フォースネストじゃなくてロビーでやってたのが悪かったのか、なんかよくわからん赤いゆるキャラに話しかけられていた。

いや、なんでロビーでやってたのかって、フォースネストってデフォで支給されるやつは物凄く狭苦しいというかなんというか。

あとはマフユとの約束だな。

そんな事情はさておき、腕を組んだ三頭身の赤いゆるキャラと、その隣にいる青いゆるキャラは、俺たち三人を毅然と見据えて言い放つ。

「その方、『トライダイバーズ』とお見受けする！ 我らは『度胸ブラザーズ』、オノコ兄貴の『魂太』をリスペクトしているフォースよ！
なあ、青いの！」

「うむ、赤いの！ 用件だが、少しばかり貴殿らの活動履歴を見させていただいた！ そこで我々『度胸ブラザーズ』は、『トライダイバーズ』にフォース戦の依頼をしたい！」

ゆるキャラなのにやたらと暑苦しいテンションで、赤いの、と呼ばれていたダイバーと、青いの、と呼ばれていたダイバーはフォース戦のフリーバトル申請を突きつけてくる。

呆気にと取られていたチナツと、ゆるキャラたちの外見が可愛い……可愛い？ かは正直わかんないけど、見とれてたマフユは顔を合わせると、俺へと視線を向けてきた。

「どうすんの、ユウヤ？ アタシは別に構わないけど」

「私も……ユウヤ君が、したいなら……いい、よ……？」

「うーん……」

一応とはいえ「トライダイバーズ」のリーダーは俺ということになつてるから、現状丸投げというか、俺の一声で活動方針が決まつてしまつてる気がして、なんだか気が引けるけど。

「俺は……せつかく『度胸ブラザーズ』の人たちが直接会いに来てくれたんだから、それを無下にするのはよくないと思う。それに、この人たちの目を見ればわかる。正々堂々勝負がしたいって顔だ」

ゆるキャラ特有のつぶらな瞳の奥に宿っている苛烈な闘争心は、今も背筋を逆立てるようにびしびしと伝わってくる。

そんな人たちが俺たちを指名してくれたつてのは、きつと光栄なことなのだろう。

だつたら断るなんて選択肢はない。それが筋つてもんだからな。

「さつきも言ったけど、アタシはリーダーのアンタが受けるつてんならやるわ、マフユは？」

「私も……ユウヤ君がいい、なら……」

「へへっ、ありがとな、チナツ。マフユ。それじゃあ、えつと……『度胸ブラザーズ』の赤いのおさん、青いのおさん！ 貴方たちの挑戦、受けて立ちます！」

腕を組んで仁王立ちしていたゆるキャラ二人の宣戦布告を承諾し、俺たちもまたそれを叩き返す。

「うむ！ それでこそ我々が『度胸』があると見込んだフォーஸ்！」

「君たちの『度胸』！ この『度胸ブラザーズ』、正々堂々と受け止めよう！」

相変わらずゆるい見た目との寒暖差で風邪引きそうになるぐらい熱いテンションで、「度胸ブラザーズ」の二人は力強く頷く。

その名前だけに、赤いのおさんと青いのおさんにとっては「度胸」こそが強さであり、愛なのだろう。

俺たちのどの辺にそれを見出してくれたのかはわかんないけど、それでも、そう言われたとあつたら見せなきゃいけないよな。

「是非とも胸をお借りします、赤いのおさん、青いのおさん！」

俺たちの、俺たちなりの度胸つてやつを。

フリーバトルの合意が成立したことで、俺たち三人はそれぞれ格納

庫エリアに解けていく。

血が滾る戦いの予感に、胸を躍らせながら。



『我らとの戦い、ルールは極めてシンプルだ！ 三対三の武装無制限、本来我らは四人組なのだが、そちらに合わせて一人は控えに回ってもらった。さあ、君たちの度胸を我らに見せてみよ！』

フリーバトルのステージとして選ばれたのは、遮蔽物が全くといっていいほど存在しない、「機動武闘伝Gガンダム」の作中に出てくる「ランタオ島」だった。

機体の出現と同時に、ビームロープがステージ端を封鎖する。要するに、力と力でぶつかり合う小細工なしの真っ向勝負ってことだ。

いいね、頭を使うのも悪くはないけど、そういうのは嫌いじゃない。赤いさんと青いさん、そしてもう一人似たようなダイバールックで現れた、多分黄色いさんが腕を組み、どこからでもかかってこいとばかりに試合開始のゴングを待つ。

「マフユ、チナツ、行けるか!?!」

「アタシは大丈夫！ だけど今回は作戦も何も無いわね、近距離での真っ向勝負になるわよ、マフユ！」

「……はいっ……！ わ、私も……！」

俺のストライク焔とチナツのアストレイシックザールはある程度近接戦も得意にしているけど、マフユのG-エクリプティカが得意としているのは機動力を活かした攪乱と空中でのドッグファイトだ。

見た感じ近接戦に偏重してる「度胸ブラザーズ」と相性としては悪いのかもしれない。

だから、今回はマフユに普段俺が担っていた遊撃手としてのポジションを担ってもらうことにした。

俺とチナツで相手を引きつけつつ、マフユにはその時に隙ができたところを狙い撃ってもらって形だ。

【Gunpla Battle SET READY……】

〔Battle Start!〕

システムのダイアログが試合開始を告げると同時に動いたのは、「度胸ブラザーズ」の方だった。

それぞれガンダムAGE-1をベースに、赤と青で塗り分けながら半身はタイタス、半身はスパローといった感じのカスタマイズが施されたガンプラが、脇目も振らずに俺たちへと突っ込んでくる。

『ゆくぞ青いの!』

『応とも、赤いの!』

明らかにバランスが悪いカスタマイズなものにも関わらず、赤いの人と青いさんの姿勢制御は完璧だった。

「チナツ!」

「固まってくるなら……分断するだけよ!」

俺が「度胸ブラザーズ」に遅れて飛び出すと同時に、チナツは先に赤いさんと青いさんが並走していることを確認した上で、二人の間に狙撃を割り込ませる。

分断からの擬似タイマン。相手が半分とはいえ格闘機だつてんなら、こっちの仕事は単純明快だ。

分断された赤いさんを狙って、俺は更にその距離を離すべくビームピストルを連射する。

ただ、当然だけど相手もやられるがままってわけにはいかないらしい。

『黄色いの!』

『応!』

赤いさんと青いさんの後ろに控えていた、黄色いのかと呼ばれたダイバーが駆る、シェンロンガンダムとアルトロンガンダムを半身ずつミキシングしたような機体がスラストを噴かして跳躍、俺とチナツを飛び越えるように、マフユへと襲いかかる。

「マフユ、そっち行つたぞ!」

「う、うん……!」

『一対一だ! 我がハーフナタクの猛撃、受け切れるものなら受けてみよ!』

黄色いのが駆る、ハーフナタクというらしいガンプラは、マフユが機体を巡航形態へと移行させる僅かな隙を狙って、アルトロン側のドラゴンハングの先端から炎を放った。

「きやあつ……！」

『確かに一度そのフライトユニットを展開すれば君の速度には目を見張るものがある！　だが、その一瞬を我々は見逃さない！』

「マフユ！　クソツ、これじゃ……！」

『よそ見をしている余裕があるのか!?!』

「ぐっ……！」

俺がマフユに気を取られていた隙を狙って、赤いさんは右半身のタイタスの技、ビームリアットを放ってくる。

ビームシールドは間一髪で間に合ったけど、赤いさんが言った通り、下手をしてたらこっちがやられていた。

「ユウヤ、マフユを信じなさい……！」

「……っ、ああ！　サンキューなチナツ！」

マフユは確かに初撃を貰ったかもしれないけど、まだ撃墜されたわけじゃない。

　だったら俺が果たすべきは一つだ。

ビームシールドでビームリアットを防いでいる間にも体勢を立て直した赤いさんは、左半身のスパローの部分、膝にあたるどころからニードルガンを発射して、こっちを逆に牽制してくる。

「上等だ！　真っ向から打ち砕く！」

フェイズシフト装甲を信じて俺は全力でスラスターを噴かし、右の拳に全力を込めて、再びビームリアットを放ってきた赤いさんを迎え撃つ。

『我がレンジに飛び込んでくるとは良い度胸だ！　ここからは度胸と度胸のぶつかり合い、勝負！』

「次元霸王流！　流星螺旋拳！」

　パルマ・フィオキーナの光を纏った拳が高速で回転し、交錯した赤いさんのリアットとぶつかり合う。

　ビームと、ビームを纏った拳がぶつかり合うことで火花を散らし、

眩しい閃光がモニターを白一色に塗り潰していく。

まだだ、押されるな、ストライク焰。

ガンプラバトルには全ての動きに意味がある。タイガーウルフさんが言ってた通り、俺もまた考えなしに流星螺旋拳を放ったわけじゃない。

ビームリアットを止めるだけの威力と、ヒットストップを発生させることで生じる僅かな「時間」。それこそが俺の狙いだった。

「考えるな、目だけに頼るな……感じるんだ、相手を！ 次元霸王流、聖拳突き！」

『なんとツ!?!』

『赤いの!』

右の流星螺旋拳で相手を食い止めている間に、左の拳で本命の聖拳突きで仕留める。

タイガーウルフさんが教えてくれたように、師匠が「想像を超えた」と言っていたように、ガンプラバトルじゃ、現実でできないようなことができる。

だからこそ、多少無茶な体勢からでも、思考補助システムやスラストの補助とかで、聖拳突きを繰り出せたのだ。

リアットを繰り出したことでガラ空きになった赤いさんのガンプラ、そのコックピットに光を纏った左の拳は正確に突き刺さっていた。

「そこね！ 一気に畳み掛けるわ！」

そして、青いさんがそれに一瞬気を取られた隙を見計らって、チナツのアストレイシックザールが光の翼を展開し、対艦刀を構えて、青いさんのガンプラに突っ込んでいく。

『抜かったか、我がハーフスパローが……済まぬ、赤いの!』

『我がハーフタイタスも退けられたか……こちらこそ済まぬ、青いの! 』しかし少年、見事な度胸を見せてもらった!』

「ああ……こっちこそ、いい戦いだったぜ！ 赤いさん!」

心の底から赤いさんに礼を言う。それでもまだ、戦いは終わったわけじゃない。

ハーフトイタスとハーフスパローを撃退したのとほぼ同時に、ボロボロになったG―エク립ティカが、翼を失った状態で地面に叩きつけられる。

空中を見上げれば、そこには残った黄色いさんが操るハーフナタクが、ほぼ無傷で腕を組んでいる姿があった。

「ごめんなさい……ユウヤ君……」

「いや、大丈夫だ！」

「そうよマフユ、あの黄色いの手先に時間を稼いでくれたのはありがたいわ！」

四肢を失ったG―エク립ティカのコックピットで、消沈した様子のマフユは、眦に涙を滲ませながらぼそりと呟く。

「だけど、チナツが言った通りだ。」

当初の作戦からは外れてしまったかもしれないけど、俺とチナツが赤いさんと青いさんを引きつけている間に、挟み討ちにならないように黄色いさんを食い止めてくれていたのはありがたい。

特に俺は一度赤いさんにやられかかってたんだ。あそこでもしも黄色いさんがフリーだったら、間違いなく撃墜されていた。

『残るのはこの我一人か！　だが諦めぬ！　この状況から巻き返してこそ、我ら「度胸ブラザーズ」の真価というものよ！』

「いいねえ……諦めねえその闘志、どんな戦いにも立ち向かうその度胸！　尊敬するからこそ、俺たちも全力で立ち向かう！　行くぜチナツ！」

「そうね、たまにはアタシもアンタのノリに合わせるのも悪くないわ！」

対艦刀をウェポンラックに仕舞い込むと、チナツは光の翼を展開し、ハーフナタクが放ったアルトロン側のドラゴンハングを避けて突っ込んでいく。

俺もまた、スラスターを全開にしてシェンロン側のドラゴンハングを回避。

そして、後隙を晒した黄色いさんに俺たちは、久しぶりに呼吸を合わせる形で技を放つ。

『次元霸王流！ 蒼天紅蓮拳！』

『ぐわああああつ！ 見事だ、「トライダイバース」！ その度胸、しかと見届けさせてもらったぞ！』

ビームの光を纏った拳が二つ、ハーフナタクのコックピットに炸裂する。

フォースの名前通りに潔い辞世の句を残して、黄色いの方はブロックノイズ状に解けて、セントラル・ロビーへと強制送還されていった。

【Battle Ended!】

【Winner: トライダイバース】

システム音声が戦いの終わりと俺たちの勝利を告げると同時に、ラントオ島の水平線に赤い夕陽が沈んでいく。

メガ粒子杯に向けて、まずは一勝つてところか。



「ごめんね、ユウヤ君……私、役に立てなくて……」

「さつきも言ったろ？ 気にすんなって！ 今回みたいな地形じゃマフユの機動力も活かしづらかっただろうしな！」

セントラル・ロビーに帰還するなり、腰を折って何度も頭を下げてきたマフユを宥めつつ、俺は一足先に帰還していた「度胸ブラザーズ」に向き直る。

「今日はありがとうございます、赤いの人さん」

「なんのなんの、こちらも良い度胸を見せてもらった！ その度胸魂がある限り、君は煩惱を燃やしてどこまでも強くなっていけるだろう！」

度胸魂。よくわからないけど、たとえ強いやつを相手にしたって諦めずに立ち上がることがそうだっていうなら、俺にそんなものが備わっていることは嬉しく思う。

三等身の赤いの人に合わせる形でしゃがみ込んで握手を交わすと、今度は青いの方が前に出て、チナツに話しかける。

「君のあの一瞬を見切った冷静な度胸もまた見事なものだった！ 煩惱を凍らせ、心は熱く、頭脳は冷たく立ち回るのもまた度胸！」

「うむ・マフユ君もまた、必死にこの黄色いのを食い止めていたのは度胸魂そのものだ！ 落ち込むことはない！」

青いの方に追従する形で、黄色いの方もまた、マフユの健闘を心の底から讃えていた。

竹を割ったような、っていうのはこういう人たちのことを指すんだろうな。

見てるとこつちまで清々しくなってくるぐらい、「度胸ブラザーズ」の人たちは潔い。

「そういえば、風の噂で君たちはメガ粒子杯に出場すると聞いたが、本当か？」

「はい！ 俺とチナツは出るつもりです！」

「ははは！ 良い……良い度胸魂だ！ 君たちが優勝できるように、我々『度胸ブラザーズ』からもエールを贈らせていただこう！ グツドラック、『トライダイバーズ』！」

「ありがとうございます！」

俺たちに激励の言葉を残すと、赤いさんたちは、体を捻りながら歩くような独特のステップで、群衆に溶け込んでいく。

なんていうか色々潔くて、濃い人たちだったな。

「メガ粒子杯……負けられねえな」

「ええ、そうね……」

応援してくれる人がいるのは嬉しいけど、同時に少しだけプレッシャーに思うところもある。

それでも、誰かが応援してくれているという事実は、どんなに重くても背負っていくしかないのだ。

「……大丈夫……チナツさんと、ユウヤ君ならきつと、大丈夫だ、よ……っ？」

「ありがとな、マフユ」

「……私も、落ち込んだところを励ましてくれて、その……ありが、とう……」

こうして改まって本音をぶつけ合うのは少しだけ恥ずかしいところもあるけど、事実は事実なんだから感謝の気持ちは口に出した方がいい。

師匠と、母さんの教えだ。

マフユはしばらく顔を赤らめて耳まで真っ赤になっていた。

そして、チナツがそんなマフユを見つめている俺を一瞥しただけで呆れた様子で肩を竦めて溜息をつく。

いつも通りの光景が、「トライダイバーズ」の日常が、そこにはあった。

Ep. 22 「厄災の地へ」

「へー、メガ粒子杯バトルカイって参加資格にダイバーランクC以上って決められてるのね」

フォース「度胸ブラザーズ」と戦った翌日、手狭なフォースネストの椅子に背中を預けていたチナツが、開いていたウィンドウに視線を向けながら何気なく言う。

メガ粒子杯バトルカイ？ それって俺が参加しようとしてるメガ粒子杯と何か関係でもあるのか？

そんな疑問が頭の中に浮かんでくるけど、冷静に考えて同じ名前の大会が二つや三つも存在してたまるかって話だよな。つまり。

「マジかよ!? 今の俺のダイバーランク、まだDだけ!?」

「マジもマジ、大マジよ。てか予選まで時間ないのにあんた、まさか調べてなかったわけ?」

てっきり知ってるもんだと思ったけど、とチナツは宣ってくれたけど、トワさんの口ぶりからして、俺の方はてっきり無条件で参加できるもんだとばかり思ってたんだけど。

どうしてくれんだこの状況、予選まで残り僅か、ダイバーポイントはフォース戦とかである程度貯まってるけど、まだCに届くまでは時間がかかりそうな状況。

はつきり言って大ピンチだ。

「今すぐダイバーポイント稼げるミッションをマラソンするしかねえ……!」

「前も言ったけど、ミッションだけでCランク目指すのってただの苦行よ?」

「じゃあ、フォース戦だ!」

「二戦あたりの効率考えてる? それに、アタシたちの名前が売れてきてるってことは研究されてるってことでもあるのよ、『度胸ブラザーズ』は真正面から挑んできてくれたけど、連戦連勝って訳にはいかないわ」

「な、ならシャフランダム・ロワイヤルで……」

「味方ガチャしたいってんなら別に止めやしないわよ」

スカーレット隊なんか引いた日には目も当てられないけどね、と、チナツは心底呆れたような声で溜息混じりの言葉を紡ぐ。

確かに言われていることは正論そのものだ。でも俺としちゃ何としても予選受付締め切り前までに最速でダイバーポイントを稼ぐ必要があるわけで、そのための手段として考えたことごとくが否定されたらどうしようもない。

とにかく最速で、何でもいいからダイバーポイントを稼げるような手段はないのか。

いや、何事にも近道なんて存在しないから、ないのだろう。

こりゃ残念だけど、メガ粒子杯への参加は断念するしか――

「え、えっと……ユウヤ君……」

「ん、どうしたマフユ？　もしかして、最速でダイバーポイント稼げる手段、何かあるのか？」

「……え、あ、あ……」

丈の余った袖に包まれたマフユの手を取って、俺は藁にもすがるような思いでその目を見据えて助けを求める。

ここで諦めるなんて真つ平ごめんだ。

俺は俺の中にある「強さ」の意味を知るためにも、何としたりつてメガ粒子杯に出なきゃいけないんだ。

マフユはしばらくぷすぷすと頭から黒煙を吹き出しかねない状態で顔を真つ赤にして硬直していた。

二分ぐらい経ってから思い出したかのように我に返って、顔を真つ赤にしたままマフユはこくこくと首を縦に振り続ける。

「う、うん……あるにはある、よ……？　でも、リスクが凄く高いから……」

「ブレイクデカールみたいなチートやバグ技じゃなきゃこの際何でもいい！　聞かせてくれ、マフユー！」

「うん……わかった、それじゃ、話すね。ユウヤ君は、『ハードコアデイメンション・ヴァルガ』って知ってる……？」

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。

けつたいな名前だ。そして聞いたこともない。

マフユは少し逡巡したような素振りを見せると、小首を傾げながら、遠慮がちに言葉を続けていく。

「……えっと、そのデイメンションだと、本当はダイバー同士の合意が必要なフリーバトルが、無制限で解禁されてるの」

「なるほど、つまり？」

「そのデイメンションにいる限り、理論上はだけど……無限にフリーバトルができる、ってこと、かな……」

なるほど。要するに一々募集をかけたリマッチング待ちをしないで、延々とフリーバトルができる場所ってことか。

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。そう聞くと案外悪いもんでもないような気がするけど、マフユは何でこんなに遠慮がちなんだ？

ふと疑問に思ったことを、そのままそっくり投げかけてみる。

「なあマフユ、なんかハイリスクとか言ってたけど、そのハードコアデイメンション・ヴァルガってまずいことでもあるのか？」

実はメガ粒子杯に参加するならそこに行つてはいけない、とかそういう理由があるんなら確かにリスクどころの話じゃないけど。

「……まずいというか……怖い、かな……」

「怖い？」

「要するにヴァルガつて四六時中フリーバトルしたいようなのが集まってるのと、単純にフリーバトルがいつでも解禁されてるから無法地帯になってんのよ」

マフユに代わつて俺の質問に答えたチナツ曰く、リスク、リンチ、上位ランカーを利用したMPK、他のゲームどころかGBNでもマナー違反でBANされかねない行為が、ヴァルガでは事実上合法化されてるってことらしい。

つまりマナーとか柄が悪い連中が好き好んで集まってるようなGBNのゴモラ。ダイバーポイントは稼げるかもしれないけど、陰湿なD・ジェイドのみたいなやつや、運が悪ければタイガーウルフさんのような上位ランカーに当たる可能性もある。

理論上、ダイバーポイントは確かに稼ぎ放題なのかもしれないけ

ど、それ以上にリスクがでかいから、マフユは遠慮がちだったのか。ようやく合点が行った。

稼ぐか死ぬかみたいな究極の二択が突きつけられるような無法地帯、そこに行けば今日だけでCランクに上がるのも夢じゃない。

その代わり、何も出来ずに終わる可能性だってあるというか、そっちの方がむしろ高い——そういうことだろう。

「教えてくれてありがとな、マフユ。俺……ヴァルガに行ってくる」
だとしても、毒を食らわば皿までだ。

近道がもしも用意されてるのなら、それは普通の道を歩くよりも遥かに険しく、厳しいものだったのはわかっている。

だけど、行くしかない。メガ粒子杯の予選受付締め切りまでに、何としてでもダイバーランクを上げるために。

俺は握っていたマフユの手を離すと拳を固めて、早速、操作したウィンドウにGBN攻略wikiを表示させて、ハードコアディメンション・ヴァルガへの行き方を検索する。

「ヴァルガに行くのね？」

「ああ、でもこれは俺だけの問題だから——」

「なら、アタシも同行するわ」

「チナツ？」

チナツは椅子から立ち上がると、GBNでもやたらとでかいツインをかき上げながら、ふふん、と小さく鼻を鳴らす。

その目にはいつものように勝ち気な自信のようなものが宿っていた。

「アタシは何度かヴァルガに潜ったことあるから、アンタに心得ぐらいは教えてやれるわ。そっから先はアンタ次第だけど」

「心得？」

「そ、ヴァルガにはヴァルガの生き残り方つてもんがあるのよ。だからそれを特別にアタシが教えてあげる」

感謝しなさいよね、とマフユは胸を支えるように腕を組みながら、ちらちらと俺の視線を窺ってくる。

感謝も何も渡りに船だ。ヴァルガについて何も知らないで特攻す

るよりはナビゲーターがいてくれた方がありがたい。

「マジかよ、ありがとな、チナツ！」

「ふ、ふんっ。別にアンタのためじゃないんだから！」

アタシだってちやうどフリーバトルしたい気分だったのよ、と付け加えると、チナツは元の椅子に腰掛けて、ぷい、とそっぽを向いてしまった。

何かまずいことでもしちまったんだろうか。

「……ユウヤ君、本当にヴァルガに行くの……？」

「おう、それしか手段なさそうだしな」

「……そっか……なら、私も……私も、行つていい、かな……」

邪魔になつちやうなら、お留守番してるけど。

マフユはもじもじと丈の余った袖で顔の下半分を覆いながら、横目で俺に視線を向けてくる。

ダイバーランクが既にCなマフユには特に旨味があるわけでもない話だとは思うけど、乗ってくれるんなら感謝の一言だ。

無制限のフリーバトルが解禁されているなら、味方は一人でも多い方がいい。

それに、マフユだつてランクCつてことはもうGBNで一人前つてことだ。そんなダイバーが手を貸してくれるっていうなら、断る理由なんかどこにもないだろう。

「ありがとな、マフユ！ それじゃ、早速ヴァルガに行くか！」

「お、おーっ……！」

「はいはい、とりあえずは格納庫で一番重要なこと教えるから、あんまり血気に逸るんじゃないわよ」

今にも飛び出しかねない俺に釘を刺すようにチナツはそう言つて、肩を竦めた。

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。

そこに今の俺が飛び込むつてのは、きつとヤバい香りが漂つてくる毒を食べるようなものだ。

だけど、得てして毒を持ったものつてのは美味かったりするんだよな。だったら、皿まで舐める勢いで喰らい尽くしてやるだけだ。



(いい？ ヴアルガにはまず一つの鉄則があるわ。それは……)

格納庫でいの一番にチナツが言っていたことを頭の片隅に浮かべながら、俺はゲートが開いてハードコアディメンション・ヴァルガに到着すると同時にスラストを全力で噴かす。

——まずは、ダイブした瞬間に回避運動。

チナツ曰く、ディメンション突入後の無敵時間が切れた瞬間を狙って撃ってくるスポーンキル狙いのやつが潜んでいるから、初手での回避運動は挨拶のようなものらしい。

それが間違いでないことを証明するように、無敵時間が切れたその瞬間を狙って、レーダーが全力でアラートを吐き出す。

「危ねえ……なあッ！ 次元霸王流、聖槍蹴りいつ！」

『嘘だろ、何だこいつ……うわあああッ！』

俺をスポーンキルしようと試みていたケルデイルガンダムサーガにアリオスガンダムのGNキャノンを持たせたダイバーの機体を、即座に聖槍蹴りで破壊。そのまま着地を狙ってきたやつらをいなすように、ハンドスプリングで体勢を立て直す。

「あのバカ、突出して……！ 援護するわよ、マフユ！」

「は、はいー！」

お返しを叩き込めたのはいいけど、早速囲まれてしまったのはヴァルガの洗礼ってことか。

いいね、燃えてきた。

俺を囲んでいるやつらは確かに敵かもしれないけど、全員が徒党を組んでいるわけじゃない。

チナツの号令を受けて、巡航形態に変形したマフユのG―エクリプティカが敵の注意を引くように、弾幕砲火を掻い潜りながら上空を旋回する。

チナツもそれを利用して、俺を包囲していたダイバーたちを分断するように、左のウエポンラックに装着していたロングビームライフル

で敵を撃ち抜いていく。

『まずいぞ、こいつらグルか!』

『こうなったらやるしかない!』

『うおおおおっ! 天誅ーッ!』

ヤケを起こしたのか、バウンド・ドックや確かヘイズル2号機、そしてティターンズカラーの方のガンダムMk-IIといった奴らがビームサーベルを構えて俺に殺到してくる。

この際味方なのか敵の敵なのかは知らないけど、とにかく俺を狙ってる同士での相討ちも辞さない覚悟で突っ込んできた度胸は称賛に値するのかもしれない。

だけど。

「次元霸王流! 旋風、竜巻蹴り!」

チナツ曰く四六時中雷鳴が轟き、晴れることのない鉛色の雲が立ち込めた空に、竜巻となって俺は飛翔する。

そして、機体を全速力で回転させて、殺到してきた奴らを一網打尽に仕留めてみせた。

普段のバトルじゃ中々使う機会の少ない技かもしれないけど、こういう多数を相手にする時、旋風竜巻蹴りは役に立つ。

『なんだこいつ、化け物か!』

『ええいどけ、天誅! ビビってるなら俺がやってやる!』

身動きしていたダークダガーLを背後から斬り裂くと、今度はペリシアで見たクロスボーンガンダムの白い方、確かX1がカトラスに似た形状のビームサーベルを構えて詰め寄ってきた。

「いいねえ、真っ向勝負と行こうじゃねえか!」

『天誅ーッ!!』

「次元霸王流! 疾風突き!」

相手が高速で突っ込んでくるのなら、その機動力を利用しない手はない。

クロスカウンターとして、カトラスに似た形状のビームサーベルが振るわれる寸前、俺は速さを重視して疾風突きを繰り出した。

疾風突きはボクシングのジャブに威力を持たせる方向の技で、破壊

力でいえば聖拳突きには劣っている。
それでも。

『バカな、ビームザンバーを振るより速く……』

「ビームザンバーっていうのか、その武器」

高速で移動するということは、何かにぶつかった時の衝撃もまた速度に比例して跳ね上がるということだ。

『ヴァルガを舐めるなよ、小僧！ 俺はここでも最弱……俺より強いダイバーが、お前を……！』

自分から疾風突きに飛び込んできたことになるクロスボーンガンダムX1は不穏な辞世の句を残して爆散する。

しかし、本当にありそうなのが怖い。

せめてCランクに上がるまではエンカウントしないことを祈る限りだ。

爆散したクロスボーンガンダムX1には目もくれず、俺は次々に襲いかかってくるガンプラを千切っては投げ、千切っては投げの勢いで叩き潰していく。

背後から襲いかかってきたイフリートだったか、そんな名前の奴を巴投げの要領でビルに叩きつけてビームサーベルをコックピットに突き立てる。

その後隙を貰ったとばかりにスナイパーライフルを構えていたギラ・ドーガにビームピストルの一丁をを撃ち抜かれたけど、聖槍蹴りで距離を詰めて破砕。

「はははは！ なんか楽しくなってきたな！」

「このバトルバカは……！ 舞い上がってる場合じゃないわよ、レーダー見なさい！」

「ユウヤ君、危ない……っ……！」

「レーダー？ うおおっ!?!」

どういうわけか、敵を示す赤い点がぞくぞくと群れをなして俺のところを集まっていることを、ストライク焔のレーダーは捕捉していた。

さつきまで襲いかかってきたやつらは全員テクスチャの塵に還し

たつもりだったけど、これじゃキリがねえ。

「アンタ、目立ちすぎたのよ！ ヴアルガじゃ目立つやつを狙う相手は珍しくない！ いくらアンタが次元霸王流免許皆伝でも、この数は無茶よ、一旦退きなさい！」

「……退路は援護します、だから、ユウヤ君……！」

「……ああ、わかった！ チナツ、マフユ！」

どうやら俺は舞い上がりすぎてたらしい。

流石に二十、三十の相手をいっぺんに相手にするのは骨が折れるというか、こつちの損耗も覚悟しなくちゃいけないだろう。

ヴァルガで重要なのは、とにかく生き残ること。生きて、稼いだダイバーポイントを持ち帰ることこそ、今回この場所を訪れた最大の目的なのだから、それを忘れてたんじゃしょうがない。

俺は、チナツが少し前に出て敵を引き付けている間に、マフユの援護を受けつつ機体を全力で後退させて、とりあえずはレーダーに反応がない廃ビルに身を隠した。

意図的に乱戦を発生させたチナツもまた、ヘイトを他のダイバーに擦りつけることに成功したらしく、とりあえずは三人で無事に合流した形になる。

「センサーに感なし、ミラージュコロイドディテクターも反応なし、か……とりあえず一息つけるわね」

「は、はい……生きた心地が、しなかった、です……」

「悪い、目の前の敵に気を取られすぎた」

「本当よ。とにかく今は冷静に、体勢を立て直して——」

『そのような余裕が、君たちにあるのか？』

息つく間もないとはこのことだ。

通信ウインドウがポップしたかと思えば、身を隠していた廃ビルが突然斜めにずり落ちて、瓦礫に姿を変えていく。

そして、向けた視界の先にはゆらりと鬼火を纏ったような機体が、刀を携えてゆつくりと歩いてくる姿が映し出される。

『我が名はアズサ……MS斬りの無頼』と人はいう。次元霸王流だったか……その力を拙者に見せてみよ』

「ははっ……ちよつと休憩してる暇もねえってか……!」

現れた、明らかにヤバそうなガンプラを見据えて、俺は一丁だけ残ったビームピストルを撃ち放つ。だけどそれは、揺らぐ紫炎にかき消されて、効果を表さない。

『MS斬りの無頼』……!　なんでこんなヤバいの引き当ててんのよ、アンタ!」

「あれは、フアントムライト……ビームが、通じない……!」

チナツの口ぶりからするに、どうやら相当にヤバいやつと当たってしまったようだ。

そして、マフユ曰くビームは相手に効果がないらしい。

だったら、拳で迎え撃つだけだ。

『良い闘志だ……では、推して参る!』

「こつちこそな!　次元霸王流……」

『破アツ!』

「聖拳、突きいッ!」

遠距離から「飛んできた」斬撃を打ち碎かれて尚、「MS斬りの無頼」とやらは止まる気配がない。

いいね、こういうのは燃えてくる。

俺はその紫炎を纏う機体を睨み、次の攻撃に備えて再び拳を固めるのだった。

Ep. 23 「その拳、天高く」

突如として現れた「MS斬りの無頼」なる存在は、鬼火のように纏っている紫色の炎を揺らめかせながら、じりじりと間合いを測るようにこつちとの距離を詰めてくる。

どういう原理かは知らないけど、ビームが効かないってんじゃ、それを主力にしてるチナツとマフユの援護は期待できない。

つまり俺一人でこの「斬撃を飛ばせる」ような手練れのダイバーを相手にしなくちゃいけないってことだ。

「ダイバーポイントのために出し惜しみしときてーとこだけど……出し惜しみして勝てる相手じゃねえよな！ 行くぜストライク焰！」

『良い、実に心地よい殺気……拙者の胸も昂ってきたぞ……！』

「次元霸王流！ 疾風突き！」

あの鬼火にビーム無効以外のどんな効果があるのかは知らないけど、物理攻撃まで無効化できるってんならクソゲーだ。

だから、そこは運営を信じる他にない。

目指すは弾丸より速く、スラスターを全開にした勢いを乗せた右の拳が、「MS斬りの無頼」が、アズサさんが構えた刀に直撃して火花を散らす。

『む……押されている……？』

『お楽しみはこつからだぜ！』

初手に疾風突きを選んだのはクロスレンジに踏み込むためだ。

タイガーウルフさんは体幹を崩しちやくれなかつたけど、こつちに勝機があるとしたらそれは、剣を振るう暇もないほど、息もつかせぬ連続攻撃で畳み掛けることだ。

「まずはワン、ツー！」

『ジャブとはまた面妖な……君の型は一つではないのだな』

「ああ……今まで学んできた全部が、俺の力になる！ 次はこいつを喰らいやがれ！」

アズサさんが防御姿勢に入ったのを見逃さず、俺は足払いからの一本背負いを選択したけど、相手も伊達に二つ名を持った存在ではない

らしい。

足払いをかける小足が出た瞬間を見切ってそれを膂力でガード、作戦変更。投げから右ストレートに攻撃を切り替える。

『ははは……愉快だ、愉快だな、君は』

「そいつはどうも！」

『だが……拙者の剣を受けることはできるか？』

デンプシーロールで畳み掛けるようにアズサさんの機体を殴り付けていた刹那、背筋が凍るような視線が、ウインドウ越しに突き刺さった。

この状況でも相手はまだ諦めていないらしい。いいね、そういうガッツは嫌いじゃない。

でも、そんなことを言ってるような状況じゃないってことぐらいはわかる。

一瞬の隙を縫ってストライク焰の胴体に蹴りを入れて吹き飛ばすと、廃ビルに叩きつけられた俺が体勢を立て直している間に、アズサさんは刀を構え終えていた。

——来る。

確信めいた予感が、俺の脳髓にビリビリと伝わってくる。

『斬ツ……！』

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

アズサさんが必殺の一撃として繰り出してきた居合に合わせて、俺は左の拳から流星螺旋拳を繰り出すことを選択。

だけど、その刃は火花を散らしつつも勢いを失うことなく、ストライク焰の左腕を、拳の中心から真つ二つに斬り裂いていた。

——強え。

その強さに、恐らく刀一本だけでこの魔境を勝ち抜いてきただけの実力に、俺は戦慄する。

メガ粒子杯にはこんなレベルのダイバーも出てくる可能性があるのか。

そう考えると少し怖いのは事実だ。だけど、それ以上にわくわくしている。期待している。

俺の強さがどこまで通用するのか、「高み」に至るまでどれぐらいの道のりがあるのか、そして、「強さ」に意味はあるのか。

いくつものハテナが俺の中では絶えない。

だけどきつと、その答えは拳と拳で語り合った果てに知れるものだということぐらいはわかる。

そのためにも、こんな場所で躓いてなんかいらねえよなあ！

アズサさんが放った攻撃が、威力を重視した後隙の大きいものだと判断した俺は、無事だった右手で全力のボディブローをその胴体へと叩き込む。

現実ならこれでノックダウンを狙えるレベルで深く決まってくれただけど、ここはGBNだ。そう上手くいってくれるものじゃない。

それに、現実だったら俺の左手はとつくに切り落とされたままだ。一瞬身体をくの字に折り曲げながらも、揺らめく鬼火を更に放出し、アズサさんの機体はもう一度体勢を立て直す。

『良い……良き戦いだ、いつまでも味わっていたくなる……！』

「全くだぜ……！」

GBNは広大だ。それはディメンションとして再現された世界の再現度だけじゃない。

俺が知らなかっただけで、タイガーウルフさんのような、アズサさんのような強敵がひしめいている。

まさに想像を超えた世界だ。父さんが、師匠が言ってくれた通り、この世界には俺の狭い視界には映らなかつただけで、ギラギラとした輝きを放ってるものが、いくつも眠っている。

流星螺旋拳が斬られるぐらいなら、と、残った右手で刀身の脇をパライシしながら、俺は高揚感と同時に覚えていた、僅かな恐怖を踏み倒すように、次の一手を考えていた。

クールダウンを挟むようにレーダーも確認、するとそこには、漁夫の利狙いなのか、あるいは俺とアズサさんの戦いに引き寄せられてきたのか、いくつもの赤い点が押し寄せてくる様子が映し出されている。

俺としちやこのまま決着が着くまで粘っていたところだったけど、

あまり悠長に戦ってる余裕はなさそうだ。

『真剣勝負に水を差しにくるとは、無粋な』

『全くだ。どうします？ アズサさん』

『この勝負、一度預けておく。先ずはあれを処理するために、力を貸してはくれないか』

「合点承知だ！ チナツ、マフユ、行けるか!？」

リーダーに映る赤い点はざっと五十かそれ以上。

そんな数の連中が脇目も振らずに襲いかかってくるんじゃないかとアズサさんの決着を待っていた辺り、もしかしてこの人、相当な高ランクだったりするんだろうか。

俺の疑問を込めた視線に答えることなく、アズサさんは口元にふっ、と小さな笑みを浮かべると、ビームの弾幕を掻い潜り、凄まじい速度で敵陣に突撃していく。

「どうやら話のわかる相手のようで助かったわね、いくわよシツクザール！」

「お願い、Gーエクリプティカ……！」

チナツとマフユが、先行したアズサさんを援護するように、アウトレンジからやってくる一団に向けて狙撃ビームと、最大出力でのビームライフルを放つ。

集団は一塊になっていたこともあって、狙撃とアズサさんの「飛ぶ斬撃」でそれなりに数を減らしていたものの、さっきとは違って勢いを止めることなく前進してくる。

『ヒヤア！ 久しぶりにデカイ獲物がかったぜエ……野郎共、わかってんな!?!』

『わかりやしたぜ、ボス！』

通信ウインドウに表示されたモヒカン頭にトゲ付き肩パッドがついたレーザージャケットという「いかにも」な格好をしたダイバーは、奇声を上げながら舌舐めずりをする。

あのモヒカン頭をボス、と呼んでたってことは、こいつらはさっきの連中と違って完全にグルってことだ。

まあ、通信ウインドウに映ってた部下もモヒカン頭だったから、正

直あんまり印象変わんねーけど。

『MS斬りの無頼だかなんだか知らねエけどなア……この「モヒー・カーン」様の縄張りに入ってきたのが運の尽きよー!』

名前までそのまんまだった。

モヒー・カーンと名乗った一団のボスは、見た目までそのまんまな、各所にスパイクやりベットを取り付けた世紀末カスタムなザクⅢが構えているジャイアント・ヒートホークを振りかざして、先行したアズさんを部下たちに迎え撃たせる。

いくらアズさんでも、あのままじゃ多勢に無勢だ。だったら俺がやることなんて決まってるよなあ!

「おおおっ! 次元霸王流、聖槍蹴り!」

『なんだこいつ、速——』

スパイクやりベットなどが取り付けられたモヒカンカスタムは、その分装甲が分厚くなっているのかもしれない。

ただ、エールストライカーの全速力を乗せて叩きつけられた聖槍蹴りを防ぐことはできなかったようで、世紀末なシュツルム・ディアス はあえなく爆散した。

『なるほど、噂に違わぬ凄まじき武よ……拙者も負けてはおられぬな!』

『なんだこいつ、俺のグランドスーパーエクストリームR・ジャジャのビームサーベルごと……ッ!』

アズさんは刀を振り抜くと、グランド……まどろっこしいからモヒカンカスタムでいいか。モヒカンカスタムのR・ジャジャが刃を受け止めようとしたビームサーベルごと、その機体を両断する。

そして、そのまま返す刀で背後から狙っていたモヒカンカスタムの量産型キュベレイのコックピットを的確に突き刺す。

『嘘だろお前?!』

『殺気が透けて見えている。それでは拙者に届くことはないな』

「こっちも持ってけ! 次元霸王流、流星螺旋拳!」

メガ粒子砲を塞いででも取り付けられた装甲板を抉る形で、モヒカンカスタムのドーベン・ウルフに俺は流星螺旋拳を叩き込んだ。

図らずもアズサさんが敵を引き付けてくれているおかげで擬似的な連携が生まれているし、背後ではチナツのアストレイシクザールが対艦刀でモヒカンカスタムを次々に両断、テクスチャの塵へと還していく。

いい調子だ。そう思った矢先だった。

『ぐっ……コイツらは後回しだ！ 空飛んでる女を狙え！』

『ヒヤッハー！』

「……ああ、っ……！」

俺たちには敵わないと判断したのか、モヒカンカスタムたちは、今度は比較的狙いやすと判断したのか、マフユのG―エクリプティカを狙って、手持ちの火砲を集中させる。

巡航形態の機動力である程度の弾幕は速度で振り切っているものの、なんせ数が数だ。

いかにG―エクリプティカの出来がよくても、全部は避けられないだろう。

襲いかかってくるモヒカンカスタムを蹴り碎きながら、俺はどうマフユを支援するか考える。

敵は恐らく、俺が釣られて突出したところを狙ってくるだろう。

というか、もしも俺がモヒカンたちだったら確実にそうしている。

手負いの敵をあえて放置することで、助けに来た仲間を屠っていく。戦いの常套手段だ。

なら、どうする。

俺にできることは。

「マフユ！」

「は、はいっ……！」

「俺は……お前を信じる！ 今は一機でも多くモヒカンカスタムを墜とすから、何とか持ち堪えてくれ！ マフユなら……きつとできるはずだ！」

助け舟を出さないのは大きな賭けだ。

リスクとリターンを天秤にかけて、結果的にマフユを見捨てたと取られてもおかしくない選択肢でもある。

だけど、マフユは。マフユは自分が卑下しているほど、弱いダイバーじゃない。

「……ぐすつ……ありがとう、ユウヤ君……!」

『戦場でラブコメやってんじゃねエ!』

「もう逃げない、もう負けない、ユウヤ君が……信じてくれた、私を信じる——トランザム!」

『んだとオ!?!』

マフユの叫びに応えるかのように、G—エクリプティカの装甲が赤熱し、両肩のGNドライヴから爆発的に粒子が放出される。

トランザムシステム。それは「機動戦士ガンダム00」に出てくる、一種の時限強化のようなものだ。

粒子を爆発的に放出する代償として、効果時間終了後には大きく機動力や戦闘力を損なうという欠点はあるものの、それでも強力なシステムであることとに変わりはない。

赤熱化したマフユのG—エクリプティカは、巡航形態と併せて更に速くなった機動力でモヒカンカスタムを翻弄しつつ、出力が増大したビームサーベルで叩き切る。

『バカな、俺のハイパーズサカスタムF6000がア!?!』

「切り抜け、る……っ!」

「やるじゃない、マフユ! アタシも負けてらんないわね……!」

マフユの奮闘に闘争心を掻き立てられたのか、チナツもまた光の翼を大きく広げ、残像でモヒカンカスタムたちを攪乱しながら、アロンダイトでの確にコックピットを突き刺し、斬り捨てていく。

『バカな……六十の部下が、圧倒されているだア!?! たった四機のガンプラにだぞオ!?!』

「よう、大将……待たせたな。決着つけようじゃねえか!」

『クソガキが……! このモヒー・カーン様を愚弄した罪は重いぜエ!』

愚弄も何も、そっちから勝手に吹っかけてきた喧嘩だろうが。

見事な逆ギレをかましながら、モヒー・カーンが操る重装甲世紀末カスタムのザクが、その見た目に違わないパワーで豪快にジャイアン

ト・ヒートホークを振り回す。

だけど、その攻撃はどれもこれも大雑把だ。タイガーウルフさんが言っていた、「行動の意味」を考えていない。

「隙だらけなんだよ！ 次元霸王流！ 桜花紅蓮脚！」

『ジャイアント・ヒートホークを、弾き飛ばしやがったア!?!』

大上段に蹴り上げる技で、モヒカンカスタムの手首を跳ね上げ、脅威になりそうなジャイアント・ヒートホークを叩き落とす。

そして、すかさず振り上げた足で震脚、モヒカンカスタムの足を一瞬止める。

『なんだア!?! 機体が、動かね……』

「こいつで終わりだ！ 次元霸王流！ 波動裂帛拳！」

そして、俺は敵じゃなく、地面を殴りつける。

瞬間、ストライク焔に組み込んだメタリックオレンジのパーツが赤熱し、地面を砕いた衝撃波に炎が合わさって、モヒカンカスタムのザクⅢを包み込む。

夢中になっていたからわからなかったけど、どうやら何かの変化がストライク焔の中では生まれているらしかった。

『バカな、そんなバカなアアアア！』

炎を纏って強化された波動裂帛拳が、重装甲に包まれているはずのモヒカンカスタムを焼き払い、溶かしていく。

そして、陳腐な断末魔を上げ、モヒー・カーンがテクスチャの塵へと還る。

おかしいな、こんな威力があるなんて自分でも思っちゃいなかったんだけど。

「ユウヤ君……ストライク焔が……」

「どうしたんだ、マフユ？」

「燃えて、る……!?!」

コックピットの視点からはよくわからないけど、燃えているというにはストライク焔にダメージはない。

なら、今何が起きているのか。

アズサさんとの協力で、粗方モヒカンカスタムを片付けたことで生

まれた僅かな時間を使って、コンソールから通知を辿れば。

【Congratulations!】

【ダイバー：ユウヤのランクがDからCに昇格しました】

【Unlocked:FINISH MOVE 01】

漁夫の利狙いの連中やモヒカンたちとやり合ってた間に、いつの間にかダイバーランクがCに到達していたらしい。まあ、結構な数片付けてきたな。

そうになると、波動裂帛拳が強化されたのは。

「おめでとう、ユウヤ。それがアンタの必殺技よ」

「必殺技……?」

「Cランクから解禁される、ダイバーの行動履歴から算出される要素。強力な分代償もあつたりするけど、アンタのそれは機体を強化するタイプの技だから、リスクは比較的少ないと思うわよ」

モヒカンカスタムの最後の一機、ガザDをアロンダイトで斬り捨てると、チナツはそう解説してくれた。

なるほど。タイガーウルフさんが必殺と言っていた、「龍虎狼道」とシステム上は同じものなのか。

俺の場合はストライク焰が炎を纏う必殺技——昔、子守唄のように師匠が、父さんたちが活躍していた学生大会の映像が脳裏をよぎる。

「バーニングバースト……」

「……ユウヤ君?」

「決めた、この必殺技は、バーニングバーストシステムだ!」

かつて師匠が使っていたトライバーニングガンダムが、カミキバーニングガンダムが使っていた技を、そこに込められた想いを継ぐように、俺は天高く、突き上げた拳を握り締めた。

大規模な乱戦が終わったことで一息つけるか、と思っていたのも束の間、大規模な戦闘の匂いを嗅ぎつけたハイエナたちが、狩人たちが俺たちを狙って突撃してくる。

『天誅ーッ！』

『ヒヤッハハハハ！ 天誅天誅天誅ーッ！』

『そんなお前を後ろから天誅！』

何だろうな、このデイメンションだと天誅って叫ぶのが流行ってるんだろうか。

俺じゃない、天がやれって言ったんだとばかりに責任とモラルを全力で放り捨てたダイバーたちが、俺との戦いと、モヒカンカスタムとの戦いを経たことで、決して軽くない傷を負っているアズサさんを狙って突撃してくる。

敵の一团に混ざっていたダガーLのジェットストライカーのパイロンに懸下されていたミサイルポッドからマイクロミサイルが飛び散り、アズサさんを狙う。

『破ッ！』

『ヒヤッハハハハ！ さようなら天誅！』

「やらせるかよ！」

ミサイルを斬り捨てるという凄まじい芸当を披露したアズサさんの後隙を狙う形で飛び出してきた、黒の部隊カラーのベルガ・ギロスに向けて、俺はバーニングバーストシステムの効果で燃え上がるように出力が増大したビームサーベルを突き立てた。

『ヒヤッハハハハ！ 私がさようならア！』

「……このデイメンションに浸かっていると多かれ少なかれあなつまうのか？」

『無明に堕ちるかどうかは君の心の持ち様よ。そして助太刀してくれなこと、礼を言う』

最後まで妙なテンションで爆散していったベルガ・ギロスを一瞥して、苦虫を噛み潰したような顔をしていると、苦笑らしきものを口元

に浮かべたアズサさんが言う。

なるほど、心を強く持つてないとああなっちゃうのか。確かにああはなりたくないもんだな。

そんな一瞬のやり取りすら許してくれないのか、完全に台風の目になった俺たちを狙って、ハイエナたちは絶え間なく襲いかかってくる。

物陰に隠れたバスターダガーとヴェルデバスターがその火力を惜しみなく叩きつけ、死角を狙ったトールギスが突撃してきて、飛び出してきたワイルドダガーがガトリング砲をぶちまける。

どいつもこいつもジャーゴンのように「天誅」と叫んでることも相まって、この世の終わりみたいな光景だった。

正直なところ、目標だったCランクには突入してるし、これ以上ここに留まっている理由はない。

ダイバーポイントを手土産に帰還するのが賢い選択肢なんだろうけど、横槍が入ってしまったって中断されたアズサさんとの戦いに決着をつけないまま帰還するのは、なんというか、筋が通らない気がする。

そんな理由で、俺たちは襲いかかってくるハイエナに立ち向かっていただけ、所詮は多勢に無勢。

バーニングバーストシステムによる強化も合わさって、襲いかかってくる敵自体は対処できているものの、いつエネルギーが底をつくかもわからない。

マフユが発動してるトランザムもそうだし、狙撃ビームを多用しているチナツもエネルギーが潤沢とはいえないだろう。

恐るべきはローラー作戦、人海戦術。そこに連携はなくとも、同じ敵がいるというだけで狙いを絞って襲いかかってくるのはタチが悪い。

多分だけど、あいつらの魂胆はこうだ。

ここで多くポイントを稼いだやつをどさくさに紛れて倒すことで、そいつのポイントを収奪する。

アズサさんのように辻斬りスタイルでコンスタントにポイントを

稼いでいけるダイバーじゃなければ、それが一番手っ取り早い。

だから、ヴァルガでポイントを稼ぐことは自ら無数のダイバーたちのターゲットになりに行くのと同じなのだ。

まさにハイリスクハイリターン。マフユが言った通りだった。

『隙あり天誅ーッ！』

「危ねえな！ 次元霸王流！ 蒼天紅蓮拳！」

ミラージユコロイドで身を隠していたのか、背後から襲いかかってきたブリッツガンダムに肘打ちを叩き込んで怯ませて、バーニングバーストシステムで強化された蒼天紅蓮拳をそのままコックピットに叩き込む。

『アバーッ！』

妙な悲鳴を上げてブリッツが爆散する。

冗談抜きに一息つく暇もねえ。

ふとアズサさんを見ると、涼しい顔で寄ってくるダイバーを次々と刀の錆にしていた。

ただ、アズサさんのガンプラは別だ。

纏っていた紫炎の勢いが衰えて、装甲各所にも細かなダメージが刻まれている。

俺たちと同じように、このままじゃアズサさんもまた、ジリ貧のまま、数に押されて吞まれてしまうだろう。

「……っ、トランザムの、限界時間が……」

「……で弾切れ!? あーもう、こうなったら砲身でぶん殴る！」

マフユとチナツも状況はほとんど同じだった。ここから何か巻き返しを図れる策のようなものでも思いつけばよかったんだけど、生憎どれだけ頭を使っても思い浮かびそうにない。

だけど、諦めたくはない。

これまでで、Cランクに昇格した後もお釣りが来るぐらいダイバーポイントは稼いでいるんだから、デスペナルティで多少失ったところで問題はないのかもしれない。

だからって、最初から諦めを前提にして戦うなんてダサイことはしたくねえ。

足掻いて足掻いて、最後まで足掻き抜く。

それでもダメだった時はにっこりと笑ってやればいい。

「撤退するか、チナツ、マフユ？」

「はっ、冗談じゃないわ。死んでも生き抜いてやるわよ」

「ユウヤ君が戦うなら、私も……っ！」

「ありがとな、それじゃ最後まで悪あがきに付き合ってくれよな、マフユ、チナツ！」

「はい……っ！」

「言われなくても！」

チナツが投擲したビームブーメランが一塊になっていた有象無象を斬り裂いて、テクスチャの塵へと還す。

その後隙をカバーするようにマフユがアストレイシックザールの背後から迫ってきた一団に向けてヴェスバーを放つ。

そして、俺は。

「次元霸王流！ 旋風竜巻蹴り！」

『ぬわあああああっ！』

『グワーツ!?!』

『ヌヴオオオオツ！』

固まって襲いかかってきた奴らを、旋風竜巻蹴りで迎撃し、纏めて倒す。バーニングバーストシテムの持続時間もほとんど危険水域だけど、これぐらいの悪あがきはまだ、できるんだぜ。

奮戦はしていたと思う。だけど、集団を倒すことで悪目立ちしてまたハイエナたちが寄ってくるという悪循環に陥っているのもまた事実だ。

一旦逃走してヘイトを他に擦りつけることも考えたけど、俺たちがもうこのエリアにおける台風の目である以上、どこにも安息の地はないだろう。

「きやあ……っ……い！」

「マフユ！」

マフユのG―エクリプティカが、片方のGNドライブをどこから飛んできた狙撃で撃ち抜かれて墜落していく。

助けようとしても、こっちはこっちでハイエナ共の対処で手一杯だ。背負い投げで地面に叩きつけたジャステイマにビームサーベルを突き立てつつ、俺は次に迫ってきた、赤い方のガンダムアストレアを蹴り飛ばしてあしらう。

その間に、マフユを救出できそうな隙はどこにもなかった。

最早これまでか、とばかりに通信ウィンドウに表示されていたマフユの顔が涙に歪んでいった、その時。

『気を付けろ、君！』

「気を付けろって、何に!?」

『大きいのが来る……避けるんだ！』

アズサさんが警告してくれた通り、コックピットにはコーションアラートが絶え間なく鳴り響いていて、その発信源を辿れば、ちょうど俺たちのほぼ真上にいるその機体が目に映る。

『GNロングレンジキャノン、GNホーミングレーザー、GNフェイダトンファー、フルバースト……マルチロック、セット……！』

淡々と言葉を紡ぎながら、無機質に、そして無差別にその機体が――ダブルオーガンダムの改造機と思しきそれが、構えていた武装をハイエナ集団に向けて一斉に撃ち放つ。

その中には当然俺たちも含まれていて、アズサさんが事前に警告してくれたのはそういうことだったのだろう。

デタラメな火力が、百鬼夜行を蹂躞する。

誰だか知らないけど、ヤバいのは一目瞭然だ。

五十を明らかに超す集団を蹂躞して尚、その機体が息切れした様子はなく、運がいいんだか悪いんだか、ほとんど無傷で生き残ったアズサさんに狙いを向けて、そのダブルオーガンダムはGNフェイダトンファーの銃口を向ける。

『君が噂のFOEさん、か……強制冷却は使い果たした、ここが拙者の最後の勝負となりそうだ』

『そういう君は「MS斬りの無頼」か。ここで会うのは珍しい』

『さて、死合おうとしよう……！』

FOEさんと呼ばれたダブルオーガンダムの改造機を使うダイ

バーは、アズサさんの太刀筋を見切ったかのように距離を取ると、徹底してファントムライトと呼ばれるあの紫炎に向けてビームを撃ち放っていた。

『……ファントムライトはビームを弾く。だが、いつまでも展開していられるわけではあるまい』

『ならばその光を斬り捨てるのみ、斬ッ！』

『……だとしたら、こちらは物量で押させてもらおう……！』

そこから先の戦いは異次元としか言いようがなかった。

GNホーミングレーザーがファントムライトを剥ぎ取るようにアズサさんの機体を蝕む傍らで、GNフェイダトンファアのバレルから放たれるビームは的確に切り捨てていく。

その反応速度も、そしてアズサさんほどの近接格闘戦の技量を持つていても尚接近することができていないあのダブルオーは、出てくる場所を間違えたような強さだった。

FOEと呼ばれているのも納得がいく。

ハイエナの一団がそのFOEさんによって一掃されたことで、ようやく一息つくことができた俺たちは、固唾を飲んでその戦いを見守ることしか、できずにいた。

下手に割り込めば邪魔になる。それどころか多分やられる。

強敵に挑みたいという気持ちを無理やり上から押さえつけるように、恐怖が、圧倒的な恐怖が俺たちの影を縫いとめていた。

「あれが、個人ランキング39位……」

「39位!?!」

「……だけど、あの人はもつと上に行ける実力を持つてるわ、多分10位代ぐらいの力があの人にはある。アタシは……」

チナツが珍しく表情を曇らせる。

それほどまでに、勝気なチナツが落ち込むまでに、FOEさんの戦いは冷徹だった。

——けどな。

「悪いけどな、アズサさんと戦ってたのは俺なんだよ！ 次元霸王流

！ 流星螺旋拳！」

『……なるほど、悪くない攻撃だ』

「何……ッ!？」

それを読んでいたかのように、ダブルオーの両腰にマウントされていたCファンネルが交差して、俺の一撃を食い止める。

信じられねえ。あのアズサさんと戦ってた片手間にだぞ？

なんて反応速度だ。これがタイガーウルフさんと同じように、「高み」に至った人の力なのか。

俺はあまりの実力差に愕然としていたけど、FOEさんがそれ以上の追撃を加えてくることはなかった。

それは見逃されたのか、あるいは最初から戦うに値しないと判断されていたのか。

どっちにしても、今の俺じゃあの人には届きそうもない以上、命があるだけ儲け物なのかもしれない。

「ユウヤ君、大丈夫……?」

「ああ、マフユ……あれもまた『高み』なんだな」

「……FOEさん。このハードコアディメンション・ヴァルガを根城にしているソロ専のSSSランクダイバーよ。無茶して……! 本当に命があっただけ儲け物なんだから、このバカユウヤ」

「悪い、でも気付いたら体が動いちゃってたんだ」

改めて、その熱狂から一步引いて戦いを見つめ直してみれば、アズサさんはFOEさんを相手によく戦っていたのだと思う。

ファントムライトとかいう紫炎を圧倒的な密度の射撃で剥ぎ取られて、尚も諦めることなく刀を構えて挑みかかっている辺り、その胆力も凄まじいものがある。

だけど、あのホーミングレーザーの弾幕砲火が関節部分を穿ち、とうとう「MS斬りの無頼」は膝を突こうとしていた。だけど。

『ふ、ふふ……拙者はこれでも頑固ゆえな……膝だけは、死んでも突かぬと決めている……!』

『……その胆力には敬意を表するよ。ならば僕も……剣で決着をつけねばなるまい』

『……来いッ!』

敗れかけて尚、氣勢を削がれることなく、膝をつくことなく、地面に刀を突き立てて、アズサさんは刮目する。

そこにF O EさんのダブルオーがGNフェイダトンファアからラストエツジを展開して、斬りかかろうとした瞬間だった。

コーションアラートが、俺たちのコックピットに響き渡る。

レーダーを見れば敵影が一機、こつちに近づいてきていた。

「一機？ 何がしたいの、あいつ……？」

「わかんねえ、だけど凄え嫌な予感がする……！」

ハイエナ狙いのダイバーたちも、F O Eさんに粗方一掃されたとはいえ湧いてこないこの状況で、一機で脇目も振らずに突っ込んでくるなんて、よっぽど無謀なのか、そうじゃなければ、何かを隠し持っているかしか考えられない。

「敵影、捉えまし、た……？」

マフユのGーエクリプティカが捕捉した敵影が、データリンクで俺たちにも共有される。

そこに映っていたものを見て、俺とチナツは同じように首を捻っていた。

「……ザク？」

「シャア専用ザクね、それも旧キットの」

「……わかんねえ、あのお爺さんが作ってたガンダムと違って、ただ適当に作ったようにしか見えね……」

敵影の正体は、旧キットのシャア専用ザクだった。

でも、その出来はお世辞にもいいものではなく、成型色の赤一色がやけに目立つ素組みのまま、ほぼ直立不動でバーニアを噴かしている。

この状況で、そしてあのレベルの出来でわざわざF O Eさんとアズサさんの戦いに割って入ろうなんて、何考えてんだ？

手の込んだ自殺にしか見えないその行為を俺たちが呆然としながら眺めていると、とうとうそのシャア専用ザクは戦闘エリアに到達する。

シャア専用ザクが狭い可動域で必死にザクマシンガンを構えた刹

那、背筋にぞわりと悪寒が広がったような気がした。

「気を付けろ、マフユ、チナツ！」

「……まさか……」

「……っ、そういうこと……!」

その嫌な予感は見事に的中して、シヤア専用ザクが紫色のオーラを纏ったかと思えば、機体の各所が、ガンプラのギミックとしては絶対にあり得ないような歪な変形を果たしていく。

そうしてブラッシュアップされたシヤア専用ザクは、気付けば全身が筋肉で出来上がっているかのような異形の姿に変わっていた。

『ブレイクデカール……!』

『はっはっはアー! そういうことよ! F O Eだかなんだか知らねえが、このブレイクデカールの前に敵はねえ!』

ブレイクデカールが発動したせいなのか、曇天に包まれていたはずのヴァルガに雷鳴が鳴り響き、雨が降り注ぐ。

そして、空が本当にひび割れるかのようにクラックが入ったりと、明らかに異常な現象が、紫色の強烈なオーラを放っているシヤア専用ザクを中心に巻き起こっていた。

あのD・ジエイドとかいうやつと戦った時も、最初に遭遇したアルケーガンダムと戦った時も、ここまで変な現象は起きてなかったはずだ。

だけど今は、見ての通りヴァルガの天気すら大荒れに変えて、素組みの旧キットがあんなムキムキにビルドアップされて。

まさか、前に戦った時よりもブレイクデカールが強力なものになっているのか。

俺の胸の内によぎった嫌な予感を肯定するように、一発一発が砲弾サイズになったザクマシンガンの弾が、F O Eさんとアズサさんを狙って放たれる。

『ブレイクデカール……よもやここまで強力なものになっているとはな』

『……なんと醜い、欲望を形にしたような姿だ』

『はっはっはアー! テメエら全員まとめて俺のダイバーポイントに

なりやがれ!』

シヤア専用ザクを操るマスダイバーが、力に酔いしれたような高笑いをあげる。

魑魅魍魎が跋扈するこのハードコアデイメンション・ヴァルガでも、それが明らかに「筋」の通らないことなのはわかりきったことだ。

『まだ動けるかい、「無頼」?』

『当然……マスダイバー如きに屈したとあつては拙者の名が廢るといふもの』

『よし……一時休戦といこう』

—— 僕らの敵は、マスダイバーだ。

FOEさんはぞつとするような冷たい声音でそう言い放つと、ブレイクデカールでビルドアップされたシヤア専用ザクへと、宣戦布告の代わりに、百鬼夜行を消しとばした総火力を叩き込むのだった。

Ep. 25 「呼応する悪意」

『ヒヤッハハハハ！ お前ら全員、まとめて俺のダイバーポイントになりやがれえ！』

ブレイクデカールによって異形の姿と化したシヤア専用ザクが、欲望のままにマシンガン……と呼ぶにはあまりにも威力が凶悪すぎる代物を撃ち放つ。

冗談でもなんでもなく、大砲が秒間何発単位でぶっ放されてるようなものだ。

弾のサイズも大型化している都合、でたらめに撃ち放たれたそれは、ヴァルガの大地に無数のクレーターを穿つ。

「きやあつ……！」

「くっ、なんて威力……！」

「大丈夫か!? マフユ、チナツ！」

とはいえ、こっちの状況も芳しくない。

ブレイクデカールのせいなのか、衝撃の余波だけでも結構なダメージをもらっている。

化け物じみた攻撃の威力と、そしてFOEさんのフルバーストを食らっても何故か生きている化け物じみた耐久力。控えめにいつても絶望的だ。

——けどな。

『ヒヤッハハハハ！ 二つ名持ちが、ハイランカーがなんぼのものよ！ これがブレイクデカールの力だ！』

『……ふざけた手段で粹がっているようだが、終わりにさせてもらう』『応とも……拙者の前でそのようなものを使ったこと、後悔させてやろう』

「ああ！ まだやれるよな、ストライク焰！」

バーニングバーストシステムの効果は既に切れているけど、問題はない。

確かにあのシヤア専用ザクの見た目と性能は化け物なのかもしれない。

でも、あいつからは、アズサさんと戦っていた時に、FOEさんと一瞬拳を交えた時にビリビリと伝わってきたプレツシャーが感じられなかった。

とどのつまり、あのマスダイバー、機体はともかくダイバーの腕は大したものじゃないってことだ。

冷たく言い放ったFOEさんは、最低限の動きでザクマシンガン回避し、直撃弾はGNフェイダトンファーで斬り裂くという離れ技を見せてから、アズサさんと一緒にシヤア専用ザクの膝関節を切断した。

それによってバランスを崩したマスダイバーの隙を突く形で俺はストライク焔を急上昇させ、スラスターを全開にしてガラ空きの胴体に突っ込んでいく。

「次元霸王流！ 聖槍蹴り！」

異形と化したシヤア専用ザクの胴体に、落下速度とスラスターの速度を乗せた巨大な質量弾と化したストライク焔が突き刺さり、貫通する。

いかに強力に見えるマスダイバーといったって、戦いようはいくらでもあるってことだ。

だけど、どうしてか手応えがない。

聖槍蹴りは確実に決まっただけだった。

FOEさんとアズサさんは確実にあのシヤア専用ザクの膝関節を斬り落としていたはずだった。

なのに、まるで倒した手応えがないのはどういふことなんだ？

『ヒヤハ……ヒヤツハハハハ！ 残念だったな！ テメエらの攻撃なんか……意味ねえんだよ、バアアアアアカ！』

その答え合わせをするように、マスダイバーが不快な高笑いを響かせる。

「ユウヤ君、あの機体の脚が……！」

「脚だけじゃないわ、胴体も！」

「嘘だろ……!?!」

マフユとチナツが口にした通り、破壊したはずの膝関節から下が、

そして俺が風穴を開けたはずの胴体が、まるで肉が寄り集まってしまうように、うねうねと再生していく。

なるほど、FOEさんのフルバーストを受けても無事だった理由はそういうことか。

あれだけ研ぎ澄まされた攻撃でも、ほとんど即座に再生してしまう辺り、こいつは今までのマスダイバーとは一味も二味も違うってことだ。

『恐れる必要はないよ』

だけど、FOEさんはその現象を見ても表情一つ動かすことなく、自分の中に確信を持った声音でそう言った。

「えっと……FOEさん？」

『……僕のダイバーネームは「キョウスケ」だが、君がそう呼びたいなら構わないよ』

「すいません、キョウスケさん……それで、恐れる必要はないって？」

『あの再生能力は確かに目を見張るものがあるかもしれない……だが、攻め続けていけば相手は後手に回らざるを得ない。攻撃の手を緩めないことが最も効果的だ』

要するに、再生速度を上回る勢いで攻撃を叩き込み続ければ、倒す見込みはある。

FOEさんは淡々と告げると、GNロングレンジキャノンを、再生中のシャア専用ザクへと撃ち放った。

再生能力が付いただけで、基本的には死ぬまで殴ればいつかは死ぬ。確かにシンプルでわかりやすい。

だけど、ここにいる五人だけでそれだけの密度を保った攻撃を続けられるのか。特に損耗している俺たちやアズサさんは厳しいだろうと、そう思った刹那。

『ふふ……IFSプロージョン、フルドライブ。IFBR、発射』
『何iiiiiiiiiiii!?!』

天から虹を纏った透明な光としか形容できない強烈な一撃が、マスダイバーへと降り注ぐ。

レーダーを確認、そしてモニターに映るその影は、虹の光を纏うG

―セルフのカスタムモデルと思しきものだった。

通信ウインドウの向こうで、ゴシツクな黒和装に身を包んだ女の子が妖艶に笑う。

その虹に集うかのように、レーダーが捉えた無数の光点がマスダイバーを指して殺到し、攻撃を加えていく。

『ユユか』

『ふふ……お兄様がお困りのようでしたので……』

『助かるよ、あれだけの再生能力だ。手数は多い方がいい』

再生する傍から破壊されていくシヤア専用ザクに、相変わらず容赦のないフルバーストを見舞いながら、キョウスケさんはユユ、というらしいあのG―セルフのカスタムモデルを操るダイバーと言葉を交わしていた。

お兄様、と呼ぶということは、あれだけの一撃を放ったユユってダイバーは、キョウスケさんの妹に当たるんだろうか。

だとしたら、あの人たちは兄妹揃って『高み』まで上り詰めているということになる。

本当に化け物と呼ぶべきは、あんな紛い物の力を手に入れて粹がってるようなやつじゃない。

本物の力をその手にしたやつをこそ、そう呼ぶべきなのだろう。

改めて自分がどれほどの相手と出会ったのかを考えると、武者震いが背筋をぞくりと駆け抜けていく。

「俺たちも負けてられねーな……いくぜ、マフユ、チナツ！」

「はい……っ！」

「当然よ！ ブレイクデカールなんてもんには手を出したこと、百万回は後悔させてやるんだから！」

ユユさんが連れてきたダイバーたちに加勢して、俺たちもまたマスダイバーが操る異形のシヤア専用ザクに攻撃を加えていく。

マフユはビームライフルとヴェスバーを、チナツは引き抜いたアロندانイトによる斬撃を、そして俺はいつも通りに。

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

多段ヒットの性質を持っている流星螺旋拳で、再生していくその傷

口を抉るように、倒れ伏したシヤア専用ザクの右腕を殴りつけた。

『クソッ！ なんなんだよ!? ブレイクデカールは無敵じゃなかったのかよ!』

『無敵……? そんなものはありえない。まやかしの力に縋っているだけのマスマイバーなど、僕たちの敵ではない』

通信ウィンドウ越しに頭を抱えて苦悶の表情を浮かべるマスマイバーヘキヨウスケさんは容赦なく通告すると、再生がとうとうダメージに追いつかなくなって、段々と異形の姿を維持できなくなっていたシヤア専用ザクに、GNフェイダトンファアのラスターエッジを展開して斬りかかっていく。

キヨウスケさんだけじゃない。アズサさんが、ユユさんが、チナツが、マフユが。

そして俺もまた、今できる全力を尽くして、こいつをここで仕留めようと最大の火力をコックピットに向けて叩き込む。

「これで……っ……!」

「終わりに!」

「して、やるぜ! 次元霸王流……聖拳突き!」

『バカな、そんなバカなああああつ!』

悪夢を見たような表情でマスマイバーがそう叫ぶと、異形のザクは元の旧キットの姿に戻って、炎の華をヴァルガの戦地に立ち上げた。

汚ねえ花火だ。

どっかの漫画で読んだ言葉が脳裏をよぎるけど、もういい。マスマイバーは仕留めたんだから、あとはアズサさんとの決着をつけて、ヴァルガから帰還するだけだと、そう思っていた、その時だった。『へへ……そうだよなあ、化け物に対抗するんだったら、こっちも化け物になんなきやダメだよなあ……!』

『トップランカーっていつても消耗した直後なんだ、万全には動けないはずだよな?』

『騙して悪かったな、ユユちゃん。でもヴァルガじゃ裏切りも合法なんだぜ』

ユユさんが連れてきたダイバーたちの一部が不穏なことを呟いた

かと思えば、再びヴァルガの空に嵐が吹き荒れ、そのガンプラが紫色のオーラを纏う。

どうやら味方面していたマスダイバーが、ユユさんが連れてきた中には紛れ込んでいた——と、いうよりは、その大半だったといってもいい。

あのシャア専用ザクがブレイクデカールを使ったときよりも凄まじい余波がヴァルガの廃墟都市を覆い、バケツをひっくり返したような雨が降り注ぐ。

『すまぬな、君たち……拙者と「戦国フアントム無頼」はここまでのようだ……』

「アズサさん！」

元々限界状態で稼働させていたせいもあってか、アズサさんのガンプラは、戦国フアントム無頼は各部関節がスパークした状態で尚も膝を突くことはなかった。

だけど、機体は明らかに地面に突き刺した刀にもたれかかっていて、本人の言葉通りにそれは、もうまともに立てるような状態じゃないことを、限界なのだということを何よりも雄弁に物語っている。

俺との戦い、キョウスケさんとの戦い、そしてマスダイバーとの戦いで蓄積されたダメージは、機体が動いているのが不思議なレベルだ。

『無念だが、拙者はバトルアウトする。また相見えた時まで、決着は預けたぞ……！』

「ああ、その時は誰にも邪魔されずに戦いましょう、アズサさん！」
テクスチャが解けてセントラル・ロビーへと帰還していくアズサさんを見送って、俺はマスダイバーたちを睨みつけ、拳を固める。

とはいえ、俺たちだつて状況は似たようなものだ。ストライク焰のコックピットにはレッドアラートが鳴り響いているし、通信ウィンドウ越しに見えるマフユとチナツのコックピットも赤く染まっていた。

だとしても負けたくない、その意地が、その理由が、たったそれだけの強がりだが、まだヴァルガの大地にストライク焰を立たせている。全く、倒したと思ったら湧いてくるとか、勘弁してほしい限りだ。

マスマイバーは一人見かけたら三十人はいると思った方がいいのか——心の中でそう強がって、ピンチを笑い飛ばして、俺は目の前にいたグスタフ・カールに殴りかかる。

「おおおおっ！ 次元霸王流……流星螺旋拳！」

『バカな、瀕死のやつにどうしてこんな力が……！』
なるほどな。

グスタフ・カールが偶然とはいえ一撃で爆散したことで、俺は一つの確証を得た。

どんなにブレイクデカールでステータスを強化しようとして、コックピットを貫通するだけの攻撃は防げない。そして、コックピットを貫通した時、多分中のダイバーにダメージがいつて、撃墜判定が下りるのだろう。

ちよつと違うかもしれないけど、怪我の功名つてやつだ。

マスマイバーの弱点がわかったのなら、あとはもう気合と根性で戦い抜くしかない。

「チナツ、マフユ！ コックピットだ、敵のコックピットを狙え！」

「ああ、そういう……わかったわ！ マフユはまだやれそう!？」

「……頑張りま、す……っ！」

次々と、嵐のように襲いかかってくるマスマイバーたちには、やっぱり恐怖を感じなかった。俺でさえこうなのだから、キヨウスケさんやユユさんは尚更なのだろう。

『裏切り……？ ふふ、そんなこと、ユユは最初から織り込んでいますよ……？』

『うおおおっ！』

グフイグナイテッドが、IFBRと対をなす武装……恐らくIFBSに焼かれて爆発四散する。

『ここまでブレイクデカールが広がっているとはな……だが、僕の前でそんなものを使ったのなら、容赦はしない……！』

『ぶべらっ！』

GNフェイダトンファーでの打突から刺突というコンボを食らって、コックピットにラスターエッジを突き立てられたターンXがテク

スチャの塵になる。

案の定というかなんというか、あの兄妹は消耗した様子も見せずに静かな怒りを胸に抱いて、マスダイバーを次々と撃破していた。

『アリム、お前、ブレイクデカルル持つてるって話じゃ……！』

『へっ、バーカ！ どうせお前らがマスダイバーだと見てついた嘘に決まってるんだろ。誰がそんな戦いを汚すもんなんか使うかよ……！』

『ぬわーっ！ だけどフリーちゃんにやられるなら本望……！』

『ふざけんな……ブレイクデカルルなんてもん、二度とあたしの前で見せんな！』

一人のマスダイバーから伝播した悪意を断ち切るかのように、ユコさんが連れてきたダイバーたちの一部、ブレイクデカルルを忌み嫌っていた人たちは的確にコックピットを突き刺して、マスダイバーを屠っていく。

俺もそれに倣って聖拳突きをグフカスタムのコックピットにぶち込んだ、その時だった。

「危ねえー！」

ベースがりボーンズガンダムか1. 5ガンダムかわからないけど、SDガンダムワールドヒーローズシリーズの装飾パーツで飾られたその機体に、背後からミラーージュコロイドを展開していたNダガーNが斬りかかろうとする。

俺は慌ててオープンチャンネルで警告を送っていたけど、間に合うかどうか——

『無問題！ このリンファとズイローンワンには……最初っから見えているもの！』

モーマンタイ？

多分中国語だったと思う言葉で返してきた、リンファというらしいダイバーは言った通りにNダガーNの接近に気付いていたらしく、くるりと踵を返してその一撃をマスダイバーに叩き込んだ。

『破ッー！』

『なんだ!?! ブレイクデカルルで強化されてるはずのVPS装甲で止められない!?!』

「この攻撃……八極拳か!？」

『是! 若干アレンジ入ってるけど……ね!』

『嘘だろ、何が起きてる!』

リンファさんは俺の問いかけを肯定すると、NダガーNを始末して、今度は向かってきたガブルに向けてその一撃を——発勁を打ち込む。

NダガーNの時同様、装甲を浸透してコックピットまで伝わったであろう衝撃に、ガブルを操っていたマスダイバーは、何が起きたのかもわからないままテクスチャの塵へと還っていく。

そうして、キヨウスケさん、ユユさん、アリムさん、フーラーさん、リンファさんに次々とマスダイバーは片付けられて、気付けば残っているのは俺の目の前にいるソードインパルスだけになっていた。

『バカな、こんな……ブレイクデカル使いを50人近く集めて、こんなことが……』

「言い残すことはそれだけか? なら終わりにしてやる! 次元霸王流——」

『破ッ!』

後退りをしたソードインパルスに、蒼天紅蓮拳を放とうとした刹那、リンファさんの声が響き渡る。

そして、敵機の真横から叩き込まれた寸勁が、マスダイバーを打ち砕いた。

「何のつもりだ?」

俺はそこまで血に飢えたバトルジャンキーってわけじゃない。ただ、目の前の相手を搔つ攫っていくというのは明確な挑発だ。

リンファさんを睨みつけて、俺は問いかける。

『アナタ、「トライダイバーズ」のユウヤでしょう?』

「ああ、そうだぜ。それとさっきの横取りに何か関係でもあんのか?」
『あるといえはあるし、ないといえはないわ。アナタ、今度のメガ粒子杯に出るつもりでしょう?』

「それがどうした?」

『改めて名乗るわ。リンファ。劉凜風よ。こっちの世界じゃ本名を名

乗るのはマナー違反だったかしら？ まあいいわ。さっきのは挨拶がわり、何故ならこのリンファも、メガ粒子杯に出場するつもりだもの』

——そこでアナタを、このリンファが、次元霸王流を完膚なきまでに叩きのめすわ、ユウヤ。

リンファは俺のストライク焰を指差すと、そう宣言してセントラル・ロビーへと解けていく。

「上等だぜ、受けて立ってやる……！」

挑発に乗るのは馬鹿馬鹿しいことかもしれないけど、ここまでやられて黙っているのもまた不甲斐ない。

あんな重装甲とブレイクデカールを掛け合わせた鉄壁の防御を貫くほどの拳を持つてるんだ、格闘家としちや花丸満点かもしれないけど、その挑発行為だけはいただけないな。

「ユウヤ君、その……大丈夫……？」

「ああ、心配すんなって、マフユ」

勝つのは俺と、次元霸王流だからな。

俺は静かに怒りを燃やしながら、マフユの問いにそう答える。

ようやくマスダイバーが全滅したことで、元の曇天を取り戻したヴァルガから、俺たちは帰還を選択してセントラル・ロビーへと解けていく。

リンファ。突如として次元霸王流に強烈な宣戦布告をしてきたその名前を、強く心に刻みながら。

Ep. 26 「夜の影から出ずるモノ」

「おめでとうございます、これでダイバーネーム『ユウヤ』さんの予選出場が決定されました！」

「っしやあー！」

ヴァルガから帰還した翌日、ちょうどメガ粒子杯バトルカイの予選エントリー締め切りの一日前に滑り込みで受付を済ませた俺は、ロビーでぐつとガッツポーズを固めていた。

ヴァルガじゃ色々あつたけど、とりあえずは、ランク制限に引つかかって予選に出られないという最悪の事態を回避できたただけでも今はよしとしたいところだ。

「何やってんのよ、まだ始まつてもいないでしょ？」

「あのままじゃ出られなかったからな！ 色々あつたけど改めてあげがとな、マフユ！」

「あ、う……そ、その……どういたしまし、て……？」

丈の余った袖に包まれているマフユの手を取って、俺は改めて礼を言う。

マフユからヴァルガに行く選択肢を提示されてなければ、絶対締め切りには間に合つてなかっただろうからな。

原稿を落とすか落とさないかの瀬戸際で追い詰められる作家の気持ちが始めてわかったかもしれない。できることならもう味わいたくないけど。

「アンタいつまでマフユの手え握ってるのよ！ 困ってるじゃない！」

「……あ、あの……チナツさん、私、は……」

「おつと、ごめんマフユ。でもありがとうな！ 本当助かったぜ！」

チナツが細い眉を逆立てて指摘してくるもんだから、俺はマフユの手を解いてもう一度頭を下げる。

ほそぼそと何事かを呟いていたマフユの表情が少しだけ残念そうに見えたのは、気のせいだろう。男に勝手に手を握られても嬉しいもんじゃないだろうしな。

それにしたってそこまでチナツも怒り狂うこともないだろうに。

なんて言ったら火に油だから黙っておくとしても、まずは何よりもメガ粒子杯にエントリーできたその事実が清々しい。

風呂上がりに牛乳を一気飲みしたような気分だ。

「出るのはいいけど、アンタそのままで行くつもり?」

などと薄らぼんやり感慨に浸っていた俺を、現実に引き戻すかのようにチナツは肩を竦めて片目を閉じると、呆れたようにそう問いかけてきた。

「そのままって?」

「ガンプラよ、調整とかしなくていいの?」

「調整か……具体的には何すりやいいんだ?」

確かにストライク焰はちよつと前まで俺ができることを注ぎ込んだものだったかもしれない。

だけど今は、マフユに色々教えてもらったおかげである程度ガンプラ製作の知識とかも身につけている。

それに、バーニングバーストシステムって必殺技を手に入れたかもしれないけど、必殺技は連発できるようなもんじゃないってことは、ヴァルガでの戦いでわかってたからな。

「そうね、具体的には塗装の見直しとか、デカール貼ってみるとかね。特にどこかで塗料が塗りすぎでダメになってたり、十分にかかってなかったりすると致命的よ?」

塗りムラは最大の天敵なんだから、と、チナツは肩を竦めたままそう言った。

確かにそう考えると、粗になってる部分を作り直すってのは悪くない選択肢かもしれない。

「ユウヤ君なら、今の實力でも戦えると思うけど……やって損はないと思う、よ……?」

「マフユが言うならそうなんだろうな……よし、今日の午前中はストライク焰を見直すことにする!」

今日が休日で、バイトも指名が入ってなくて助かった。いや、収入的にはちよつと困るんだろうけど、今はそれよりメガ粒子杯だ。

「アタシもその……特別に手伝ってあげてもいいわよ？」
「いいのか？ お前もメガ粒子杯出るんだろ、チナツ？」

敵に塩を送るような真似をしても平気なんだろうか。それとも、そんなことをしたところで自分が勝つから問題ないとも思ってるのか、あるいはその両方か。

「ふん、鈍感……」

「なんか言ったか？」

「別に！ ただ本調子じゃないアンタと戦って勝っても意味ないってだけよ！」

互角に戦って勝つ、ってことか。

なんだか、マフユの家で見た「逆襲のシャア」に出てくるシャア・アズナブルみたいなこと言い出したな。

でも、それはそうだ。俺だって、チナツとは本気で戦いたい。小さい頃から競い合ってきて、一度はチナツが次元霸王流の道を諦めたことで離れた道が、このGBNでもう一度交わったんだから。

「……わ、私は……ユウヤ君のこと、手伝いたいけど……お家わからないから、その……応援してる、ね……？」

「ん？ 家がわからないってだけなら迎えに行くけど」

「えっ……？」

「マフユにはいつも世話になってるからな、手伝ってくれるってんなら、その気持ちは受け取りたいんだ」

ガンダムやガンプラにほとんど詳しくなかったし、なんなら最初の方は「SEED」と「DESTINY」しか興味がなかった俺にここまでガンダムの知識を、ガンプラの知識をくれたのは他でもないマフユだ。

家がわからないってだけなら、お茶の子さいさいってやつだ。俺の方はマフユの家を完全に覚えてるしな。

「いいの……？ あ、でも、チナツさん……」

「ぐぬぬ……でも、アタシよく考えたらリアルでマフユに会ったことないのよね、顔合わせぐらいはしときたいかな」

「……ありがとうございます。その、ユウヤ君……よろしく、ね？」

「ああ！ それじゃ今から迎えに行くからな！」

なんだか一触即発みたいな空気だったけど、チナツの方も納得してくれたみたいで助かった。

一瞬不機嫌になったのはなんでか知らないけど。

それはともかく、善は急げだ。マフユを迎えに行くためにも俺は口グアウトボタンに手をかけて、早朝からログインしていたGBNから現実に戻っていった。



「いらっしやい、貴女がユウヤから聞いてたマフユちゃん？ ちよつと狭いけど、ゆっくりしていつてね！」

「は、はい……っ……！」

玄関口に立って、母さんからの歓迎を受けたマフユはそれはもう緊張してガチガチになっていた。そんなに気にすることもないのにな。

「チナツちゃんは久しぶりね、少し背が伸びたんじゃない？」

「本当ですか？ フミナさんがそう言ってくれるなら嬉しいです！」

チナツの方は相変わらず母さんたちの前では借りてきた猫のように優等生のガワを被っている。

本人なりには礼儀のつもりなんだろうからあれこれ言うのは野暮だけど、多分お前の気性の荒い部分、ユウマさんとミライさん経由で伝わってると思うぞ。

一軒隣に新築で建てられた家の方角を一瞥して、俺は小さく肩を竦める。

「三人で一緒にガンプラ作り、かあ……なんだか現役時代を思い出すなあ。いい、ユウヤ？ マフユちゃんにもチナツちゃんにも失礼のないうようにするのよっ。」

「わかってるって、母さん」

今日は出張稽古をつけるために師匠こと父さんは家にいないのが惜しいとこだ。

ユウマさんとミライさんもどっかに出かけてるらしいし、マフユに

皆を紹介できないのはちよつと心残りかな。

「塗装と改造なら私の部屋にある工具とか、好きに使っていいからね。でも溶剤の蓋は絶対開けっ放しにしちゃダメよ?」

「わかりました、フミナさん! 行きましょ、マフユ。それとユウヤ」
「俺はおまけかなんかかよ」

相変わらず猫かぶつてる時とそうでない時の温度差に風邪引きそうになるな。

言葉にこそ出さなかったけど、表情でわかってしまったのか、物凄
い力で俺はチナツに腕を引っ張られる。

格闘技経験者は伊達じゃないってか。

「け、喧嘩しないで……チナツさん、ユウヤ君……」

「喧嘩じゃないわよ、マフユ。ただのじゃれ合い、そうでしょユウヤ」
「あ、ああ……」

チナツの引きつった笑顔に、同じく引きつった笑顔でそう返す。ま
あ今回に関しては完全に俺の落ち度だから仕方ないな。

それより気になったのは、マフユの格好だった。

ガンプラをいじったり、塗料を扱ったりするのに、いつもと同じよ
うな袖が余ったゴスロリファッションで固めている。

よくわからねーけど、高いんじゃないのか、あの手の服って?

「わ、私の服……だ……ダメかな、ユウヤ君……?」

「いや? めっちゃ似合ってると思うけど、ガンプラ作るのにその服
で大丈夫なのか?」

「に、似合ってる……えへへ。ありがとう……えっと、予備とかはいっ
ぱいあるから、大丈夫だ、よ……?」

「ならいいんだけどさ」

パーツとか掴みづらそうだなって思うけど、マフユがいいって言っ
てるなら多分それでいいんだろう。

母さんもいつの間にかいなくなってるし、これ以上玄関で立ち話を
するのもなんだからと、俺は母さんの部屋に二人を案内する。

「一応ここが母さんの部屋だけだ」

「設備はうちとほぼ同じね。工具とか塗料とかは……ちやんときつち

り揃ってる。フミナさんらしいな」

「うん……機材もメンテナンスが行き届いてる」

「母さん、結構マメな性格だからなあ」

早速、俺は腰のポーチにしまっていたストライク焔を取り出して、作業机の上に立たせる。

あの時は無我夢中で作ってたけど、ペリシアとかで色んな作品を見てきた後だと、流石に粗が見えてくるものだ。

俺でさえこうなんだから、ガンプラに詳しいチナツとマフユからすればもつと厳しいんだろう。

「この分だと……直近で直せそうなのはフレームの合わせ目と白い部分のゲート跡、あと塗装のムラかしらね」

「一人でやると、時間がかかるかもしれないけど……」

「ま、アタシたちがついてるから大丈夫よ、ユウヤ。感謝しなさいよね」

「ああ、ありがとう、チナツ、マフユ」

下手したら全身に手を入れなきゃいけないかと覚悟してたけど、メガ粒子杯の予選に間に合う範囲ではあったようだ。

俺はチナツとマフユに指摘された通り、一旦ストライク焔を分解して、白いパーツとフレームパーツを作業机の上に並べる。

「それで、俺は何すりゃいいんだ？」

「ユウヤはそうね、白い部分に残ってるゲート跡をヤスリで処理して。マフユは……その服汚しちゃったら困るから、速乾性の流し込みで脚

部フレームの接着。アタシは他の細かいところ見たりとか、塗装する時はアドバイスするわ」

「サンキュー、チナツ。やっぱ自分のガンプラは自分で塗らねーとな」

「わかってるじゃない」

骨が折れる作業かもしれないけど、フォース戦の予約が入ってる夜、いや、余裕を持たせて夕方には終わらせよう。

俺たちはそう意気込んで、ストライク焔のリペア作業に取り掛かる。

パーツごとに分解してると、見えてくる粗に心が痛むけど、これも

また成長に必要なことだ。多分、きつと。



「もう当分ヤスリかけたくなえ……」

「何言ってるの、アレくらい基礎中の基礎よ」

なんとかストライク焔のリペアを目標だった夕方には終えて、マフユを家まで送り届けてからログインしたフォースネストで、俺は机に突っ伏して溜息をつく。

ゲート跡を削ること自体は簡単だけど、そこからサーフェイサーで隠せるくらいヤスリの傷を細かくしたり、マフユにも手伝わってもらったモールドの掘り直しとか、そういう作業は結構キツかった。

改めてペリシアに展示してあった作品の凄さを思い知らされた気分だ。

「でも、その甲斐はあったと思う、よ……?」

「ああ、間違えるくらい格好良くなった気がするぜ！ 早速お披露目といきたいとこだな！」

ゲート跡やシャープじゃない部分を削り直して、だるいモールドを掘り直して、ダメになってたりムラになってたところを塗り直してデカールを貼って、つや消しのトップコートを吹きかけて。

一連の作業を二人が手伝ってくれたおかげで、ストライク焔は見違えるほど格好良くなった。

その初陣になるフォース戦の相手は、いつぞやのシャフランダム・ロワイヤルで相手になった金ピカのハイペリオンが顔を出している、「ゴールデン・ドリームズ」とかいうやつらだった。

「ゴールデン・ドリームズ……」

「このハイペリオン、ネタに見えるけど厄介な相手よ。幸いアタシのアロンダイトには対ビームコーティングを施してるから、アイツはアタシが引き受ける。ユウヤはいつも通りマフユが攪乱した敵を遊撃して」

「応ともよー」

ヤタノカガミとアルミューレ・リュミエールによる二重防御は、理論上ビームに対しても実弾に対しても無敵を誇る。

この前勝てたのは、相手が油断してアルミューレ・リュミエールを攻撃に回してたからだ。

だからこそ、その唯一といつていい対策を持つチナツがああ金ピカハイペリオンを請け負う。理に適った作戦だ。

何よりメガ粒子杯の前に、こんなところで負けてるわけにはいかないよな。



『フハハハハ！ 俺のスーパーシユペールスーパーハイペリオンガンダムは無敵だア！』

「くっ、こいつ……！」

『おっとお嬢さん！ よそ見してる余裕はないんじゃない!?』

そうして開始されたフォース戦、やっぱりというかなんというか、相手はこつちを研究した上でメンバーを組んできたようだ。

スーパーなんとかハイペリオンと違ってアルミューレ・リュミエールこそ持っていないけど、ヤタノカガミを自前で持っているアカツキのシラヌイ装備。

そして。

『この勝利、ディアナ様のために！』

「このゴールドスモ、俺を釘付けにする気か！」

ヤタノカガミやアルミューレ・リュミエールこそないけど、Iフィールドによってビーム耐性を持っているゴールドスモ。

現状、マフユのG―エクリプティカが持っている武器の中でこいつらに有効なのがビームサーベルしかない以上、俺を釘付けにして、先にチナツを墜とそうとするのは合理的だ。

「チナツさんは……！」

『おっとお！ 接近戦をやるうってのかい、もう一人のお嬢ちゃん！』
「反応された……っ!？」

中でもシラヌイ装備のアカツキに乗ってるダイバーは勘がいい。

フリーになつていたマフユが巡航形態の機動力を利用して、奇襲をかけようとしたのを見抜いて、ビームサーベルでそれを迎撃しつつ、飛ばした誘導機動ビーム砲塔システム……まどろっこしいからドラグーンでいいか、は相変わらずチナツに差し向けているのだから。

『お前たちのフォースは拳法使いを除けばビームに偏っている！ その対艦刀で俺を墜とせると意気込んでいるようだが、無駄無駄無駄ア！』

「こんの……！ 言ってくれるじゃない、だったら機動力で攪乱する！」

チナツは怒りを見せながらも冷静に、デステイニーのウイングユニットから光の翼を放出すると、残像を発生させながら、機動力でスーパーなんかハイペリオンとのドッグファイトに持ち込もうとしていた。

幸い、アルミューレ・リュミエール展開中のハイペリオンの火力はたいしたことがない。

今のところはチナツに任せて大丈夫そうだ。

だったら、俺がやるべきことは一つ。このゴールドスモーを片付けてマフユの援護に回ることに他ならないだろう。

「次元霸王流！ 弾丸破岩拳！」

『なんという威力！ まともに喰らえば墜ちていたか！ しかしその隙貰ったぞ、ユニバ——』

空中から降下する威力を乗せた拳は虚しく空を切って、ゴールドスモーが左腕に搭載しているIフィールドバンカーを展開しようとした、その時だった。

突如としてコックピットに、ゴールドスモーの方向とは別なところからのアラートが鳴り響く。

無理やりスラストを逆噴射、アラートから遠ざかる形で俺は「それ」が飛び込みざまに放ってきた一撃を、すんでのところまで回避する。だけど、ゴールドスモーの方は無事では済まなかったようだ。

夜の闇から溶け出てきたような「それ」の一撃によつて真つ二つに

された機体がずり落ちて、爆散した。

『なんだ、何が起きてる!?!』

『……』

「きやあつ……!?!」

マフユのG―エクリプティカを肘打ちで弾き飛ばすと、戦場に突如として現れた「それ」は、シラヌイ装備のアカツキを狙ってデタラメな速さで攻撃を仕掛ける。

ここでアカツキが展開していたドラグーンを回収して、バリアを貼ったのはいい判断だったのかもしれない。

だけど、そんなことは関係ないとばかりに、ドラグーンバリアを貫通した棒状のものが、アカツキを頭からひしゃげさせる形で強引に叩き潰す。

『な、なんだ……何が、一体何が襲ってきてるんだ……!?!』

金ピカハイペリオンは一瞬で仲間を二機失った動揺から、いつもの高笑いも忘れて、その黒影にビームマシンガンを撃ち放っていた。

———だけど。

『ふ、フハハハハ！ 何が来ても恐れることなどない！ なぜなら、俺のスーパーシユペールスーパーハイペリオンは無敵———』
『消えろ』

その棒状の何かは、本来なら破れるはずがないアルミユール・リユミエールの守りを易々と貫通して、さっきのアカツキと同じ末路を金ピカのハイペリオンに辿らせた。

そうして、ようやく雲の切れ間から差し込んだ月明かりに照らされて浮かび上がってきたその影は。

「ユニコーン、ガンダム……」

「ペルフェクティビリティ……!?!」

「ブレイクデカールを使ってやがったのか!」

夜の闇に溶け込むかのように全身を黒で塗りつぶし、紫色のオーラを立ち上らせている、完全なる可能性の獣だった。

Ep. 27 「怪異・シャドウロール」

夜の闇から溶け出るようにして現れたそのユニコーンガンダムペルフェクティビリティは、一瞬のうちに撃墜した「ゴールドン・ドリムズ」に一瞥もくれることなく、ユニコーンモードだった機体をデストロイモードに変形させていく。

「RG? 違う……HGUCのペインティングモデルを改造したの!?!」

チナツが驚愕したように、展開された装甲から覗くサイコフレームの色は禍々しい、血の色を思わせる深い赤。

普通のユニコーンガンダムのキットの成型色じやどうやってても透明感を出せない色だった。

一転して、赤と紫のオーラを纏う怪物へと姿を変えたその機体は、左手に持っていた棒状の武器で、周囲を無造作に薙ぎ払った。

「多節棍か! 避ける、マフユ!」

「……っ、トランザム……!」

通常ではあり得ないほどの長さにまで伸びて、しなやかに曲がったその棍に、ブレイクデカールの力が上乘せされた一撃を、マフユはすんでのところでトランザムを発動して回避する。

多節棍というよりは棍そのものが自在に伸びたり曲がったりしている、物理法則も何もあつたようなもんじやない武器だ。

あれも、ブレイクデカールの力なのか。

武器の方はともかくとしても、それを振るう腕は自前だろう。なのに、何故。

「お前、それだけの腕を持っていながら、なんでブレイクデカールなんでものに手を出したんだ!」

『……』

ブレイクデカールを使ったとしても、操縦しているダイバーの技量が追いついていなければ意味がない。

それはあのヴァルガで、異形の姿になったシャア専用ザクを倒したキョウスケさんたちが証明している。

あいつが一瞬で「ゴールデン・ドリームズ」を撃破したのは、確かにブレイクデカールによる補正が入っていたかもしれない。

だけど、今の俺から見て、あの黒いユニコーンガンダムペルフェクティビリティの出来は凄まじいものを感じられたし、ダイバーの腕だつてそうだった。

あんなものに頼らなくたってガンプラバトルで十分勝てるだけの力があるのに、なんでそんなやつがブレイクデカールなんてものに手を出したのか。

俺の問いに答えることはなく、黒いペルフェクティビリティは、鬱陶しいとでも言いたげに再び自在に伸縮する多節棍を振り回した。

「ぐっ……い！」

「ユウヤ君……い！」

「ユウヤ！」

「大丈夫だ、なんとか受け流した……い！」

中国拳法には明るくないし、見様見真似だけど、化勁ってやつだ。衝撃をうまく受け流すことで致命傷は回避したけど、リペアする前のストライク焔だったらそもそも両腕を砕かれかねないレベルの攻撃だった。

一瞬でイエローコーションが灯ったその威力に舌を巻く暇もなく、黒いペルフェクティビリティはブーストを噴かすと、今度は右手に装備していたアームドアーマーVNを振りかざし、襲いかかってくる。

「この……ユウヤから離れなさいよ！」

チナツのアストレイシックスザールが、出力を絞り込んだ狙撃ビームを黒いペルフェクティビリティに向けて撃ち放つ。

並の重装甲なら容易に貫通していたはずのそのビームも、ブレイクデカールの効果なのか作り込みが反映されたのか、ペルフェクティビリティが纏うオーラにかき消されるように霧散してしまう。

「次元霸王流！ 桜花紅蓮脚！」

『……い！』

無造作に振り上げられたアームドアーマーVNが装着されたペルフェクティビリティの右手を、ハイキックの要領で弾き飛ばす。

この黒いペルフエクティビリティ、確かに強いかもしれないけど、やれないレベルの相手じゃない。

確かにかなりの作り込みにブレイクデカールが上乘せされているのは脅威だけど、FOEさんと拳を交えた時に感じた、致命的な断絶のようなものは、この黒いペルフエクティビリティからは感じられなかった。

「お前……本気で戦ってないのか？」

『……』

「だったら俺が本気にさせてやる！ 次元霸王流！ 疾風突き！」

ガラ空きになった胴体に、俺は右の拳にパルマ・フィオキーナのビームを纏わせて、最速のボディブローを叩き込む。

ブレイクデカールでどれだけ強化されてるのは知らないけど、コックピットを狙えばいいっていうのはこの前のヴァルガで学んだことだ。それに。

例え一ダメージしか入ってなくても、百万発ぶん殴ればいつかは倒せる。

射撃は無駄だと判断したのか、チナツもまた対艦刀を引き抜いて、夜空に残像を放出しながら黒いペルフエクティビリティへと切り掛かっていく。

「はああああっ！」

『……』

「っ、そんな……！」

そんな希望を打ち砕くように、そうじゃなければ少しの苛立ちを見せたように、黒いペルフエクティビリティが横薙ぎに振るつた多節棍は、チナツが振りかざしたアロンドイトをへし折っていた。

「チナツ！ この野郎、やってくれるじゃねーか……次元霸王流！」

流星螺旋拳！」

『……』

「ぐ……っ、うわあああっ！」

「ユウヤ君！」

流星螺旋拳と多節棍がぶつかり合い、火花を散らしたかと思えば、

強引に鍔迫り合いを振り解いたペルフェクティブリテイの膂力で、ストライク焔は地面に叩きつけられる。

強い。あの武器、ただチートで強化されてるってだけじゃなさそう
だ。

右肘のフレームが悲鳴を上げて、イエローコーションが絶え間なく
コックピットでは明滅している。

だけど、立てるってことはまだやれるってことに他ならない。そう
だろ、ストライク焔。

こういう窮地に陥った時こそ、あえて全力で笑い飛ばしてやる。そ
れが父さんの、師匠の教えだったはずだ。

「あの棍……ガンダリウム合金で……メタルパーツでできてる……
？」

「メタルパーツ？」

マフユは一旦着地を挟むと、自分なりに分析したのであろう仮説を
口にした。

ガンダリウム合金ってのは確かガンダムタイプの装甲材に使われ
てるものだったはずだけど、メタルパーツってなんだ。

そのまま直訳するなら金属のパーツってことになるんだろうけど、
そんなもん、GBNに持ち込めるのか？

「うん……金属でできたパーツ。あれだけの威力があるってことは、
あの棍は……」

「マフユの思った通り、ガンダリウム合金でできた棍、ってことか……
！」

その設定を再現するために、恐らくメタルパーツを使用して、ブレ
イクデカールの力で無限に伸ばせたり、曲げたりできるようにしたの
だろう。

金属がスキャンできるのかは疑問だったけど、多分マフユの口ぶり
からするに、それ自体はブレイクデカールを使わなくてもできること
で、割とカスタマイズの手法としては一般的ってところか。

ただ、金属パーツとなればその重さも凄まじいはずだ。

『……』

「危ねえ……なあっ！」

にも関わらず、まるで木の棒でも振り回しているかのように、黒いペルフエクティビリティはあの棍を軽々と扱っている。

それもまたブレイクデカールによるアシストなのか？

疑問は尽きないけど、検証してるような暇を与えてくれる相手じゃない。

カウンターで放った蹴りが直撃しても怯むことなく、黒いペルフエクティビリティは禍々しい赤と紫のオーラを纏ったまま、お返しだとはかりにアームドアーマーVNを振りかざした。

「お前……っ！」

『……』

「さつきから……だんまりじゃ、何も伝わってこねえんだよ！」

こいつの戦い方は完全に喧嘩殺法だ。

いってみれば力任せの、荒削りなものでしかない。

だけど、メタルパーツとブレイクデカール、そしてガンプラの完成度が粗野な戦い方を一流の領域まで押し上げている。

さつきから一言も喋らずに、淡々とガンダリウム合金の棍を振り回している黒いペルフエクティビリティには何を問いかけても無駄なのだろう。

だけど、まともに戦えばもつともつと、ちゃんと強くなれる素質を持っているのに、それを腐らせてブレイクデカールなんてものに手を出しているのはもったいない。

だから俺は、拳でそれを問いかける。

「聞かせてみるよ、お前の拳で、お前の思いを！ 次元霸王流！ 聖拳突きー！」

『……よく喋る』

「ッ!？」

聖拳突きをガンダリウム合金の棍で受け止めた時に返ってきた言葉は、底冷えがするほどに、ぞっとするほどに淡々として冷たいものだった。

この世の全てを拒絶するような、この世の全てを否定するような、

そんな憎しみが、多節棍を通して伝わってくる。

あの黒いペルフエクティビリティのダイバーは、多分声から推察するに、俺たちとそう歳が変わらない女の子だ。

そんな年頃の子が、これだけ大きな憎しみを抱えているなんて。

「なんでだ……なんでそんな憎しみを抱えてる！ GBNが……俺たちのことがそんなに許せないのか!? だから、ブレイクデカールに手を出したのか!？」

『……喋りすぎた。お前は潰す……!』

「ユウヤ君……っ!」

「マフユ!」

クロスレンジに潜り込んできた黒いペルフエクティビリティは、ガンダリウム合金の棍じゃなく、アームドアーマーVNを振りかぶって、今度こそ俺を、ストライク焔を引き裂こうとしていた。

回避が間に合わない。そう思った刹那、トランザムを発動していたマフユのG―エクリプティカが、俺を庇って前に立つ。

『……!?』

「マフユっ!」

「ごめんね、ユウヤ君……私、こんなことでしか……役に立てなくて……」

ブレイクデカールで強化された一撃を防ぐだけの装甲を、G―エクリプティカは持っていない。

それでもマフユは俺を庇って、アームドアーマーVNに引き裂かれるという選択肢を選んだのだ。

G―エクリプティカがバラバラになっていくのを、マフユがそう言っただけ涙を零すのを、俺はただ見ていることしか、できないのか。

「違う! マフユがくれた一瞬だ! 全力で行くぞ、ストライク焔!」

武装のスロットを「FINISH MOVE 01」に合わせて、俺は今が好機だとばかりにバーニングバーストシステムを発動させる。

メタリックオレンジのパーツから、アズサさんの戦国ファントム無頼が纏っていた、ファントムライトのような炎が放出されて、ストライク焔の双眸が力強く煌めく。

「よくもマフユを……！ アタシだって負けてらんない！ 行くわよ
シックザール！ エクストリームブラストモード！」

そして、チナツのアストレイシックザールもまた必殺技を発動した
のか、まるで月光蝶のようなサイズにまで拡大された光の翼が無数の
残像を生み出しながら、黒いペルフエクティビリティへと肉薄する。

『次元霸王流！ 聖拳突きいッ！』

ほとんどの武装が通用しないとわかっている以上、使える手札は格
闘戦だとばかりに、チナツもまた、パルマ・フィオキーナの光を纏つ
た次元霸王流拳法を解禁したようだ。

俺もまたバーニングバーストの炎とパルマ・フィオキーナの光に包
まれた拳を、クロスレンジ、しかも後隙を晒しているという絶好条件
の黒いペルフエクティビリティへと叩き込む。

正面と背後から、必殺技を使つての挟撃を受ければ、さしものこい
つもただでは済まないだろうと、そう思っていた。

——それでも。

『……苛々する……弱いやつほどよく吠える……キャンキャンと、頭
に響く……！』

「うわあああつ！」

「きやああああつ！」

ブレイクデカールで強化されたサイコ・フィールドが、俺たちの拳
を弾き飛ばして、黒いペルフエクティビリティが出力を上げたことで
バグが発生したのか、夜空に紫色のクラックが走る。

『弱いならあの女のように潰れる……！ 弱いなら這いつくばれ……
！ 這いつくばって許しを乞うことすらできないなら、ここで潰れて
消えていけ、「トライダイバース」……！』

「なんでお前、俺たちの名前を……っ！」

『黙れ……！』

チナツとマフユの協力でブラッシュアップしていなかったら即死
だったのだろう。無造作に振り下ろされたガンダリウム合金の棍が、
ストライク焰の左半身を砕く。

なんでこいつが、ここまで俺たちを憎んでいるのかはわからない。

だけど、強烈な憎悪が、そしてどこか切実な何かが、子供が暴れ回るかのように振り回される棍からは伝わってくる。

「クソツ……衝撃が殺しきれない……っ！」

「ユウヤー！」

『邪魔だ！』

「きやあっ……っ！」

援護しようと、パルマ・フィオキーナに光を灯して再度突撃を試みたチナツのアストレイシックザールが、振り回された棍に砕かれて、上半身と下半身が泣き別れする。

それでも撃墜判定が下りていないということは、ギリギリコックピットを外してしまったのだろう。

このマスダイバーは、怒りに吞まれて自分を見失っている。そこを突けば、あるいは勝てる可能性はあるのかもしれない。

だけど、ブラッシュアップしたストライク焰の力も、バーニングバーストも通用しなかったような相手に、どうやって。

諦めることだけはしたくない。

それでも、相手を倒すための解答がないというこの状況で、俺がなすべきことはなんなのか。

「何も、ないのかよ……っ！」

答えが出ない。レッドアラートが鳴り響くコックピットで諦めに吞まれかけ、きつく目を閉じた、刹那。

『いいや、君は果たすべきを果たしている！ EX……カリバーツ！』

『……！』

凄まじい衝撃が夜空を裂いて伝わってくると同時に、光の奔流が黒いペルフェクティビリティを飲み込んでいく。

ブレイクデカールで強化したサイコ・フィールドで、敵は突如として降ってきた一撃を防いでこそのいたものの、光が晴れたその時には、デストロイモードへの変身は解除され、機体の脚部や右腕も破壊され、まさしく満身創痍といった様子だった。

「チャンピオン……キョウヤさん！」

『遅れてすまない。マフユ君からの救難信号を受信してね……まさか

君たちまで「シャドウロール」に襲われていたとは』

「シャドウロール……?」

『あの黒いペルフェクティビリティさ。闇夜に溶けてメガ粒子杯の参加者を襲っていたからそう呼ばれていた……さて、ようやくお目にかかれたな、シャドウロール』

『……!』

チャンプが、キョウヤさんが来てくれたのは、マフユが撃墜される寸前に救難信号を飛ばしてくれていたかららしい。

だけど、正直助かった。

俺たちだけじゃどうしようもなかった相手を一撃でほぼ全壊状態にまで追い込んだキョウヤさんは、冷たい声でハイパードツズライフルマグナムの銃口を敵に、「シャドウロール」に突きつける。

どうやらあのシャドウロールは、再生能力までは持っていないかったようだ。

バチバチと各部が火花を散らして、尚も立ち上がった黒いペルフェクティビリティは、多節棍を捨てて、残っていた左手を振り上げると。

『なんだ……っ!』

「目眩しか!」

腰部の、本来ならビームマグナムのカートリッジが装備されているラッチに取り付けられていたらしい閃光弾を投擲すると、そのまま口グアウトを選んだのか、闇夜に溶けて、消えていった。

『取り逃がしてしまったか……大丈夫かい、ユウヤ君、チナツ君』

「はい、俺はなんとか……」

「アタシも……でも、マフユが……」

GBNでの撃墜は死を意味しているわけでもなければ、現実のガンブラが壊れるわけでもない。

だけど、あの「シャドウロール」の戦い方はまるで、暴力で心を折りにかかっているようなものだった。

繊細なマフユがその暴牙にかかってしまった今、大丈夫なのか気がかりなのはマフユの方だ。

『そうか……あの「シャドウロール」に襲われて心を折られたダイバー

は多いと聞く。君たちが大丈夫ならば何よりだが……マフユ君のことは』

「はい、俺たちでケアします。キョウヤさん」

『賢明な判断だ。それがいい。また「シャドウロール」が現れたら、僕に救難信号を送ってくれ。「AVALON」は今度こそ、奴を取り逃さないつもりだ』

そう言い残すと、キョウヤさんのAGEⅡマグナムはフェニックスモードに変形して、夜空の彼方へと消えていった。

シャドウロール。

俺とチナツは通信ウィンドウ越しに顔を合わせて、同じように苦い表情を浮かべる。

「……強かったわね、あのマスダイバー」

「ああ……だけど、それ以上に……」

悲しい、やつだった。

何かへの、きつとGBNやそこで楽しんでいるダイバーたちへの憎しみだけを燃やして戦っていたような黒いペルフエクティビリティの姿を脳裏に浮かべながら、俺たちは一足先に帰還していたマフユを迎えにくくため、セントラル・ロビーへと解けていった。

Ep. 28 「メガ粒子杯、開幕」

「マフユ、本当に大丈夫なのか？」

「うん……大丈夫。ユウヤ君も、気にしてくれて、その……ありがとう、ね……」

「だったらいいんだけど……」

あのマスマダイバー、「シャドウロール」の急襲を受けた翌日。メガ粒子杯バトルカ이의予選が始まるというのにもかかわらず、俺の胸中は決して穏やかなものじゃなかった。

大丈夫だと言い張っているけど、繊細なマフユのことだ。あれだけ暴力的な攻撃で負けたのを、今も気に病んでいるかもしれない。

「マフユが大丈夫って言うんなら大丈夫でしょ、それよりユウヤ。アంత、そんな状態で今の戦いに集中できるの？」

どこかナーバスになっていっている俺へと釘を刺すように、チナツがびしっと人差し指を立ててそう言い放つ。

あのマスマダイバーは、「シャドウロール」は、キョウヤさん曰く、まるでメガ粒子杯に参加するダイバーの心を折って回るかのように襲撃を繰り返していたらしい。

俺の方は大丈夫だと、そう答えるつもりだった。でも、マフユが。そう言いかけた途端に、飛んできたのはチナツからの平手打ちだった。

GBNの中だから痛みはフィードバックされないけど、現実で飛んできたなら一日は腫れが引かないような、強烈な一撃だ。

「アంత、マフユを言い訳にしてるんじゃないわよ」

「……っ、俺は……」

「マフユはね、アంతが思うほど弱い女の子じゃないわ。だからここにいる。それともアంతは、ここにいる仲間のことすら信じられなくなったの？」

チナツの鋭い視線が真っ直ぐに俺を捉えて、正論が胸の奥に突き刺さる。

確かに言われてみればその通りだ。信じると口に出していないながら、

心配しているつもりでいるのは、「シャドウロール」に襲われても、自分の足でちゃんとGBNにログインしてきたマフユを信じていないのと同じことなのだから。

やるからには何事にも全力で取り組む。危うく師匠の、父さんの教えを忘れるところだった。

「へへっ……今のは効いたぜ、チナツ。ありがとうな」

「ふん、やつと元に戻って……手間かけさせるんじゃないわよ、バカユウヤ」

「ぐうの音も出ねえな……マフユもごめん。お前が言ってくれた『大丈夫』って言葉……信じ切れてなかった」

チナツに平手打ちされた頬をさすりながら、俺は二人に改めて頭を下げる。

これからメガ粒子杯の予選が始まるっていうのに、その勝負に他の事情を持ち込んで全力で挑めないんじゃないや、次元覇王流を継ぐ者としては失格だからな。

なんでも一人でやろうとしない。なんでも一人でできると思わない。信頼できる仲間がいるのなら、背中を預けることも勝利への道、ウイニングロードだと、母さんだって言っていた。

「ううん……平気だよ、ユウヤ君。私、気が弱いから……心配かけちゃって、ごめんね」

「大丈夫だって！ だから俺……マフユを信じて、全力でメガ粒子杯を勝ち上がる！」

「うん……ユウヤ君。頑張つて、ね……！ チナツさんも……！」

「ありがと、マフユ。それじゃあ本戦決勝戦で会いませよ、ユウヤ」
「おう、組み合わせ運が良ければだけどな！」

まずは予選を突破しなければ本戦には出られない以上、目指すべきはそこなんだろうけど、掲げるべきはもつと高いところだ。

タイガーウルフさんが、アズサさんが、キヨウスケさんが、ユウさんが——ヴァルガで垣間見た「高み」に上り詰めるために、俺自身の中にある「強さ」の意味を確かめるためにもこのメガ粒子杯、絶対に負けられねえ。

俺と同じく壮大な啖呵を切ったチナツは、早速とばかりに予選へと向かうため、格納庫に解けていく。

「それじゃ、ユウヤ君……」

「ああ、行つてくるぜ、マフユー！」

予選とはいえ、トワさん曰くメガ粒子杯は上級者への登竜門だ。

どんな強者が待っているのか、今からわくわくする気持ちが止められない。

あの「シャドウロール」には苦い思いをさせられたかもしれないけど、今度こそブラツシユアップしたストライク焔の力を見せつけるために、勝ち上がるために、俺もまた格納庫へと解けていく。

「さあ、何だつてかかつてきやがれ……い！」

武者震いが、背筋をぞくりと駆け抜けていくのを感じながら。



『さて始まりました、メガ粒子杯バトルカイ予選大会！ 今回は参加の事前キャンセルが多くなつて、ワイとしても寂しい限りですが……それはさておき実況はご存知窓辺のモクシユンギク、ミスターMSがお送りいたします！』

さながら銅鑼を鳴らすように、ミスターMSと名乗ったサンングラスの男が高らかに、メガ粒子杯の開幕を宣言する。

事前キャンセルが多かつたのは、多分だけど「シャドウロール」に心を折られたやつらがそれだけ多かつたことだろう。

Cランクって一人前の証と必殺技を手に入れて、これから頑張ろうって時にあんな暴力でねじ伏せられたんじゃ、自信をなくしてしまいうのも無理はない。

ただ、逆にいえば今ここにいる、参加を表明したやつらはチナツを含め、「シャドウロール」の襲撃を受けても心が折れなかつた強者たちということになる。

カタパルトで発進準備体勢のまま、俺は深呼吸をしながら、試合開始の号令が下るのを待つ。

『さて、早速試合開始と行きたいところやけど、ちよいとダイバーたちにルールを説明させてもらいまっせ。予選のルールは単純明快、ランダムで選ばれたバトルフィールドで、相手のガンプラと制限時間十五分、一対一で戦っていく勝ち抜き方式になります。その中で本戦まで進めるのは八名だけ！今回はちよつと参加人数が少なくて残念やけど、いずれにしろ選り抜かれたダイバーしか本戦には出られないっちゅーことすわ』

ミスターMSは、実況席のスクリーンに過去に行われたと思しきメガ粒子杯バトルカイの映像を流しながら、戦いのルールを力説する。タイムンでの勝ち抜き方式ってのは、わかりやすくいい。だけど、厄介なのはステージがランダムってことだ。

幸いストライク焔は地形を選ばずに戦えるように組んだビルドだけど、どうしても水中戦だとか、そういう戦いにくいところでそういう地形を専門にしているガンプラと当たったら、どうなるかはわからない。

だから、一層気を引き締めてかからなきゃいけないってことだ。

俺は操縦桿を強く握り締めて、気合を入れ直す。

『ほんじゃ説明はこの辺にしといて……メガ粒子杯バトルカイ、予選スタートでっせ！』

「っしやあ！カミキ・ユウヤ、ストライクガンダム焔、出るぜ！」

試合開始のゴングが鳴らされると同時に、オールグリーンに表示が変わったカタパルトから、俺はストライク焔を発進させる。

ランダムで選ばれるバトルフィールドがどこになるかはわからないけど、どこに選ばれても全力を尽くすだけだ。

そして、絶対に勝つ。この予選を勝って本戦に突き進んで、絶対に優勝を掴み取ってやる。

そんな俺の意気込みを語るかのように、ストライク焔のカメラアイが明滅し、俺は予選の舞台となった戦場に投げ出される。

そして、選ばれたのは。

「いきなり水中かよ……!?!」

俺が、というより多分ダイバーの多くが苦手としている水中が、第

一試合のバトルフィールドだった。

マップを表示して地形を確認しても陸地が見当たらない辺り、陸に上がって戦うという選択肢も取れないガチのそれだ。ビームピストルは減衰して使い物にならないだろう。

そう判断した俺はビームピストルをその場に投棄する。

逆境も逆境、相手がどんな機体で襲いかかってくるかはわからないけど、こういうピンチの時こそにつこり笑うべきなんだ。

強張る口角を持ち上げて、敵の来襲に備えていた、刹那。

『やはり選ばれたのは水中か！ 俺は水に愛されている！』

「来たか！」

『このトリロバイトの力！ 存分に見ていくがいい！』

トリロバイト。確か「機動戦士ガンダム00」のセカンドシーズンに登場した、水中用のモビルアーマーだったはずだ。

劇中だとプロトレマイオスIIを足止めしたほどの武装を——ケミカルジェリーボムを持っていたはずだ。それに当たってやるわけにはいかない。

俺は放たれた弾を回避しつつ、エールストライカーのスラスターを全開にして水中を突き進んでいく。

「クソッ、地上より動きが鈍い……！」

『はははっ、そうだろう！ 不人気と呼ばれ続けた水中戦……その汚名を返上して運営にもっと水中戦ミッションを追加してもらおうためにも、俺は負けられない！』

「いいねえ……愛が伝わってくる動機だ！ だけど俺も、負けるわけにはいかない！」

小型魚雷を何発か貰いはしたけど、その後隙を狙ったトリロバイトのクローアームをすんでのところで回避、俺は水中では拳を振るう速度が鈍ることを鑑みた上で、繰り出す技を選択する。

「次元霸王流！ 弾丸破岩拳！」

『バカな、トリロバイトのクローアームがへし折れた?!』

全力を込めて打ち下ろす拳は、水中で多少動きと威力が鈍ったとしてもなんとかそれを最小限に留めてくれたようだった。

あるいはチナツとマフユがストライク焔のブラッシュアップを手伝ってくれたおかげか。

仲間がいてくれたことに感謝しながら俺は、追撃の手を緩めることなく次の技を繰り出しにかかる。

「次元霸王流！ 旋風竜巻蹴り！」

『ぬおおおっ!! 水流を作り出したのか!?!』

機体を高速回転させてから蹴りを繰り出すこの技は、対多数にも使えるけど、こういう使い方もあるんだぜ。

突如として発生した水流に囚われたトリロバイトは、吸い込まれるように俺のキリングレンジに、クロスレンジに近付いてくる。

『まだまだ……まだ負けん! 水中戦を頑なに追加しない運営に反省を促すためにも、水に愛されていることを証明するためにも、俺は負けない! トランザム!』

原作では使えなかったトランザムを起動して、トリロバイトは発生した水流から強引に離脱しつつ、大小のGN魚雷を撃ち放った。

トランザムという切り札を出し惜しみすることなくここで使ってくる度胸、そして水中戦への愛。それがあいつの中にある「強さ」の、それを求めることの意味なのだろう。

旋風竜巻蹴りの水流で放たれた魚雷を逸らしながら、俺はその「強さ」に敬意を表する。

「あんた、名前はなんていう?」

『今訊かなきゃいけないことか、それは!?!』

「ああ、そうさ! あんたは強い、強敵と見た! だからこそ、勝つても負けてもその名前を俺の心に刻みたい!」

『……いいだろう、答えてやる! 俺はサブマリン! 水中戦をこよなく愛する男だあっ!』

「サブマリン! その名前、しかと記憶に刻んだぜ! 俺はユウヤ、次元霸王流の後継者だ!」

サブマリンと名乗った男は、残っていたクローアームを囮にしつつストライク焔に肉薄し、すれ違いざまに展開したチェーンマインワームをエールストライカーに巻きつけていた。

「うわあああつっ！」

『どうだ、トリロバイトの切り札の味は！ エールストライカーを失ったストライクなど、水中戦ではなあ！』

爆発。エールストライカーを失ったことで姿勢制御が不安定になったストライク焰を狙って、クロージャームの先端からリニアスピアが伸縮する。

「嘖ッ！」

『嘘だろ、白刃取りで叩き折った!?!』

「エールストライカーをやられたのは痛手かもしれないけどな……ストライクは原作でもパツクなしで水中戦やってんだよ！」

とはいえ、あと少し反応が遅れていたら危なかった。

それにまだ、相手のトランザムの効果時間は残っている。このままだと機動力で翻弄されて、負け筋を残しかねない。

これがまだ予選に過ぎないのなら手札を温存しておくべきだとチナツなら言うだろう。

でも、例えこれが予選だとしても俺は、目の前の戦いに全力で挑むと決めたんだ。なら、出し惜しみをするのは筋が通らないよなあ！

『行くぜストライク焰！ バーニングバーストだ！』

『なんだ、機体が、燃えて……っ!?! いや、違う！ エールストライカーなしで、このトリロバイトに、トランザムに追いついてくるのか!?!』

「おおおっ！ 次元霸王流！ 聖拳突きいっ！」

『く、クソおおおっ！ 次こそは、なんとしても水中戦を追加しない運営に反省を——』

トリロバイトの正面装甲を、バーニングバーストシステムで強化された拳が打ち砕く。

サブマリンが上げた断末魔の叫びは切実なものだったけど、俺にだって負けられない理由はある。

「さよならだ……あんたは強かったぜ、サブマリン」

それはまだわからない。俺の中で言葉にすらなっていないのかもしれない。

だから、それを知るためにも、強さの意味を知るためにも、俺だつてこんなところで立ち止まっているわけにはいかないのだ。

【Battle Ended!】

【Winner:ユウヤ】

システム音声が無機質に俺の勝利を告げたことで、ひとまず予選第一回戦は無事に勝ち抜けたことが確定する。

一足先にセントラル・ロビーへと転送されていく中で俺は、改めて切実な、サブマリンの願いを踏み越えて進んだのだということを忘れないように、拳を握り締めた。



『決まりましたアー！　メガ粒子杯バトルカイ、予選第一回戦を一着で駆け抜けたのは、新進気鋭のフォース「トライダイバーズ」の拳法使い、ユウヤ選手です！　いや、なんかこの「トライダイバーズ」って名前と次元霸王流って聞いていると背中がむずむずしてくるのは気のせいやとして、今も予選会場では激アツなバトルが繰り広げられてまっせ！』

ミスターMSがシャウトした通り、モニターで観測するメガ粒子杯の予選はどれも激戦といって差し支えない試合ばかりだった。

『いくぞ、リバーズブリザード……！』

『へへっ、このラピッドジュアングについてこられるかな!?』

『ユウヤのやつに負けてらんない……！　ここで一気に片付けるわ！』

映し出された試合の中には、チナツのアストレイシックザールが、多分フルスクラッチと思しきザク50をアロндаイトで両断する姿が見える。

あいつも予選を順調に勝ち抜いたようで何よりだ。それにしたって相手のザク50ってチョイスもかなり攻めるといっつか渋いというか、こだわりの感じるものだったけど。

そして、分割されたウィンドウの映像の中に混ざって一瞬映ったそ

の機体を、俺は見逃さなかった。

「あれは……ビルドバーニング、いや、トライバーニングか……！」
リバースブリザードガンダムと呼ばれていたその機体、どうやら俺と同じで格闘を主体に戦っているらしい。

一瞬映ったジュアングとかいうのもそうだけど、今じゃ父さんたちが活躍していた時代のレプリカキットが発売されてるのも珍しい。

でも、それにしたってトライバーニングのカスタムモデルを使う相手までこのメガ粒子杯に出場してるなら、尚更負けられなくなってきた。

本戦では是非とも、あいつとも戦って見たい限りだ。

「燃えてきたぜ……これがガン普拉バトル、これがメガ粒子杯……落ち込んでる暇なんてないぐらい、俺の想像を超えたもんが山ほど待ってやがる……！」

父さんの、師匠の言葉を思い出して拳を固める。

ガン普拉バトルは、想像を超えた戦いだ。改めて思い知ったことを、噛み締めるように。

Ep. 29 「集う豪傑たち」

『ははははは！ バトルフィールドが宇宙だったのはツイている！
そして貴様はここで終わる！ この「ロゼ・ジオング」の前になあ！』
「何をごちやごちやとそんなこと！」

「メガ粒子杯、予選第二回戦。」

俺が今度放り出された戦場は、遮蔽物のない月面だった。宇宙戦はよく考えたら慣れてないってのに、一回戦の水中に続いて運が悪い。だけどそれ以上に、対峙している相手が化物だ。

ロゼ・ジオングとかいう、紫色に塗装されたネオ・ジオングのハルユニットに、ローゼン・ズールが収まっている機体はその六本腕からビームの束を放出して、ストライク焰を焼き払おうとしている。

ただ、その狙いは正確じゃない。

それもそのはずだ。そもそもビームライフル一丁で狙いをつけること自体が難しいってのに、それが六かけることの五で三十の銃口から放たれるビームを正確に制御できるやつがいるなら、そいつはもうニュータイプとかそういう領域にいるやつだ。

それでもあのロゼ・ジオングは勝ちを確信しているかのように高笑いを上げている。

つまり、奥の手を隠しているってことだろう。

マフユの家で見たアニメ版で、ユニコーンガンダムがああ六本腕に拘束されていたことを思い出し、俺はなるべく距離を取ることを意識しつつ、ビームピストルで狙いをつけた、その時だった。

『今武装を構えたな!? なら貴様はこれで終わりだ！ サイコ・シャアアアアド!!!』

やけにテンションの高い声で相手のダイバーが叫ぶ。

サイコシャード。確か、それは。

考えに答えが追いつく暇もなく、構えていたビームピストルが、エールストライカーにマウントしていたビームサーベルが、そして、両手に装備されているパルマ・ファイオキーナが爆発する。

「サイコ・シャード……武器を破壊する！」

『ご名答だ！ その機体……拳法を使うのに、デステイニーの腕を使っていたのが運の尽きだったなあ！』

確かに相手のダイバーが言った通り、ストライク焰の両腕はデステイニーガンダムのものを流用している。

その都合で、武装判定を受けたパルマ・ファイオキーナが爆発したのだろう。

これで両手首を使う技は使えない。

それを見て勝ちを確信したかのように、サイコ・シャードを展開しているロゼ・ジオングは、その巨体と質量でこつちを押し潰そうと接近してくる。

アニメでは猛威を振るっていたサイコ・シャードといえども、GBNでは万能じゃない。

作り込みが甘ければ、全ての「武装」を破壊するその効果は、敵だけじゃなくて味方にも適応される諸刃の剣だ。

だからこそ、遠距離からインコムやバズーカで攻めるんじゃない、サイコ・シャードの副作用を警戒した相手のロゼ・ジオングは巨体を活かしたパワーによる格闘戦を挑みかかってきたのだろう。

だけどな。

「なるほどな……両手を落とされたのは確かに痛いかもしれねえ……」

『そうだろう？ だが私は無慈悲だ！ ここでお前の快進撃も終わりにしてやろう、「トライダイバーズ」のユウヤー！』

なんだ、俺……というか俺たちのこと覚えてたのかこいつ。

本当にアトミラルさんと「GHC」はこのGBNでデカい影響を持っているらしい。

無慈悲だと宣言した通り、容赦なく六本腕がストライク焰をひっ掴もうと振り回されるけど、その速度はともかく、巨体に引つ張られてか、相手の腕は正確なコントロールができていなかった。

『何故だ！ 何故捕まらない!?!』

「動きが大雑把すぎるんだよ！ 次元霸王流……」

『ははははは！ 悪あがきを！ その拳では拳法は使えんぞ！』

「聖槍蹴りいいいいッ！」

『足技アアアアッ!? 忘れていた、この私が、ミケランジェロ・パウザーがアアアア!!』

手は出せなくても足は出せる。

六本腕の隙間を掻い潜って、スラスターの全推力を乗せた蹴りが、ハルユニットの中心に収まっていたローゼン・ズールのコックピットを、そのユニットごと蹴り砕く。

拳法家の拳を封じる。そういう意味じゃ、ミケランジェロさんとかいう相手の視点は悪くなかったのかもしれない。

だけど、次元霸王流には足技もあることを忘れていたのは大失態だったな。

【Battle Ended!】

【Winner:ユウヤ】

何はともあれ、これで第二回戦は無事突破。本戦までの折り返し地点に到達したってところか。

ミケランジェロ・パウザーさんも決して弱い相手じゃなかった。

だけど、強すぎる武装を過信して、それだけにこだわっていたんじゃ相手に読まれやすくなるし、何より動きが単調になってしまう。

「そういう意味じゃ、俺も気をつけねーとな……」

次元霸王流に頼みを置いている俺のストライク焔は、ミケランジェロさんがやっていたように他のダイバーたちには研究され尽くしていると思っがいい。

だからこそ、技の選択が単調にならないように、動きがパターン化しないように心がけているつもりだ。

それでも、読んでくるやつは徹底的にこっちの動きを読んでくるだろう。

（——このリンファが次元霸王流を完膚なきまでに叩きのめすわ、ユウヤ）

劉凜風。あのハードコアディメンション・ヴァルガで俺と次元霸王流に宣戦布告を叩きつけてきた、自分流にアレンジした八極拳使い。

あいつもこのメガ粒子杯に出ると言っていた以上、そして、ヴァル

ガで並いるマスダイバーを容易く蹴散らしていたその腕前を考えれば、本戦に出てくることは容易に想像できる。

俺個人ならともかく、次元霸王流の看板を背負っている以上、絶対に負けられない戦いだ。

一足先に試合を終えてセントラル・ロビーに帰還すれば、噂をすればなんとやら。

ライブモニターには、そのリンファとズイーロンワンの試合が映し出されていた。

『破ッ！』

『八極拳か！ 破壊力は拳法の中でも随一……だが、射程が致命的に短い！』

リンファが戦っていたのは、遮蔽物が比較的少ない荒野だった。

ズイーロンワンが放った発勁をホバー移動で回避した相手のガンダムレオパルドデストロイは、近づかせないとばかりにツインビームシリンダーと胸部のガトリングを展開して、ズイーロンワンへと浴びせかけていた。

圧倒的な弾幕だ。

そして、レオパルドデストロイのダイバーが言っていたように、八極拳はクロスレンジでの破壊力こそ次元霸王流に勝るとも劣らないけど、その射程は極端なまでに短い。

だからこそ、制限時間十五分間に撃破こそできなくても、徹底的に引き撃ちをすることでダメージを蓄積させて、判定勝ちを狙うレオパルドデストロイの戦術は極めて有効だ。

こうなれば、不利を覆すのはなかなか難しい。

『アナタ、つまらない戦いをするのね！』

『つまらなからうがなんだろうが結構だ！ 俺は戦いたいんじゃない……勝ちたいんだよ！』

『いいじゃない！ 戦い方は気に入らないけど、その志はこのリンファも同じ！ リンファは勝つためにここにいる！』

腰にマウントしていた青龍刀を引き抜くと、リンファはビームと実弾が緋い交ぜになった弾幕を斬り裂くという荒技を披露した。

だけど、相対距離は開くばかりで詰められていない。

ここからどう巻き返すのかと、俺が首を傾げたことがわかっていたかのようにリンファは口元に獰猛な笑みを浮かべると、恐らくフィン・ファングの代わりに装備されている四つの増加ブースターに点火。

凄まじい速度で、弾幕砲火の中に突っ込んでいく。

『正気か、貴様!』

『是! 虎穴に入らずんば虎子を得ず! このリンファ……リスクを恐れる闘士じゃないわ!』

そうは言っていないながらも、リンファのズイーロンワンは滑るような軌道でレオパルドデストロイの弾幕砲火をことごとく回避し、直撃コースの弾だけを青龍刀で斬り裂きながら、トランザムもなしにその懐へと飛び込んでいた。

『嘘だろ……!』

『不是! 全部が全部現実よ! 破あッ!』

『うおおおっ!?! やられる、俺のレオパルドデストロイが——!?!』

『このリンファに四龍吼を使わせたのは褒めてあげるわ、だけど勝つのはリンファと中国武術! 本戦でもそれは同じことよ!』

『ち、畜生おおおっ!』

圧倒的な弾幕に対してどう戦うのか。その問いに対してリンファが出した答えはシンプルなものだった。

四龍吼というらしい増加ブースターでの加速力で振り切って、直撃コースの弾だけを斬り払う。

いうだけなら簡単なことかもしれないけど、実際にやるとなれば難しいどころの騒ぎじゃない。

『あいつ……口はともかく腕は一級品どころじゃねえ……!』

自分に絶対の自信を持っているからこそ引き出される強さ。武道家としてのプライドと、それを支える確かな実力が、あいつを、リンファを一流たらしめているのだろう。

口は悪いけど、認めざるを得ない。あいつは間違いなく強敵だ。

リンファの試合が終わったことで、ライブモニターが次の試合を映

し出す。

『はあっ！』

『ホッ、拳法使い……いや、空手か!? メガ粒子杯は武道会じゃねーつての……!』

そこに映っていたのは、第一試合で一瞬だけ見た、トライバーニングガンダムのカスタムモデルだった。

師匠の、父さんのそれが燃えるような赤を基調としているなら、あのリバースブリザードガンダムはその対となるように青と黒を中心としたカラーリングでまとめられ、クリアパーツも塗り潰されている。

まるで氷を思わせるようなその機体は、空手をベースにしたような動きで、対峙していたガンダムデルタカイに肉薄していた。

『チツ……厄介だぜ、ここはナイトロシステムを使う!』

『ふん……そんなものを使ったところで、勝てないものは勝てない、単純なことだ』

『ホッ! 言ってくれるじゃねーの……なら教えてやるぜ! このズイウン・スバル様とガンダムデルタカイの恐ろしさつてやつをなあ!』

ナイトロシステムというらしい、恐らくはブーストアップギミックを使ったガンダムデルタカイのツインアイが真紅に染まり、その関節からは青い炎が噴き出す。

だけど、あのリバースブリザードガンダムはそれにも動じることなく、名前のように氷のような冷たさを保ったまま、デルタカイとの間合いを図り続けていた。

『ホハハハハ! メガ粒子の塊に焼かれる気分はどうだあ!』

『くっ……!』

デルタカイのシールドに装備されていたハイメガキャノンが火を噴いて、リバースブリザードガンダムを呑み込もうとする。

流星にハイメガキャノンの直撃だけは避けたかったのか、空中に逃れて一旦仕切り直しを図るも、デルタカイとの距離はさつきよりも開いてしまっていた。

『なあ格闘家あ！　ここは武道会じゃなくてGBNだ、まさか卑怯なんて言わねえよなあ？』

『さつきからベラベラとよく喋る……！』

『ホッ……？』

『うるせえんだよ、それに……こつちに遠距離攻撃がないとは一言も言つてねえ……！　雪花氷獄鳥！』

『ホアアアア!?!』

リバースブリザードガンダムの両手から強烈な冷気が放出されたかと思えば、それは氷の鳥を形作つて、デルタカイを飲み込まんと力強く羽ばたいていく。

素っ頓狂な声を上げていながらも、迎撃としてロング・メガ・バスターと、ハイメガキャノンの一斉射撃を選んでいたのは、ズイウンとかいうやつも中々クレバーなのかもしれない。

だけど、その先の想像力が足りていなかった。

雪花氷獄鳥自体はナイトロシステムが上乘せされたビームでなんとか迎撃できていたものの、その間にフリーになった本体が、リバースブリザードガンダムが急速に距離を詰めて、デルタカイのコックピットに強烈な貫手を放つ。

『ホハハハハ……この俺が？　ズイウン・スバル様が負ける？　ホヘッ……こんなの夢だ、あり得ねえ！』

『目え開けて寝ぼけたこと言つてんな……これが現実だ』

『ホアアアア!!!』

なんとも気が抜ける断末魔を上げて、ズイウン・スバルとデルタカイは爆発四散した。

そうして炎の華を背後に、リバースブリザードガンダムを操つていたダイバーは、撃墜した相手に一瞥をくれることもなく、セントラル・ロビーへの帰還を選択する。

なんてやつだ。リンファに勝るとも劣らないその拳、そして父さんのトライバーニングをカスタムしたあの機体。

例えレプリカだとしても血が滾り、拳が熱くなる。

これがメガ粒子杯。これが上級者への登竜門。豪傑たちの出現に、

俺の心はかつてないほどときめいていた。

そして、息つく間もなく次に映し出された試合は、チナツのものだった。

密林という遮蔽物だらけの地形で、アストレイシツクザールの武器である機動力は残念ながら活かそうにない。

そんな状況下でも怯むことなく、あくまでも冷静にチナツは敵との距離を測っているようだった。

『これだけ警戒してるのに、反応がない……ミラージユコロイドディテクターにも反応なし。一体どこに隠れてるのかしら』

トラップも警戒しながら、チナツは左のウエポンラックに接続されているロングビームライフルをいつでも撃てるように構えて、密林を掻き分けて進んでいく。

——だけど。

何かに引っ掛かったかのように、一瞬アストレイシツクザールの足が止まる。

そして、ガラガラと派手な音を立てて鳴子が響くと同時に、シツクザールの足元で小規模な爆発が発生していた。

『環境を制する者は戦場を制する……！』

そして、爆発を目眩しに、今までどこに潜んでいたのか、突如として現れたジム・スパルタンとブラツクライダーをミキシングしたと思しきガンプラが、ヒートナイフを構えてチナツの、アストレイシツクザールの首筋を狙っていた。

『っ！ 危ないわね！』

すんでのところでビームシールドを展開することに成功していたチナツはロングビームライフルをウエポンラックから切り離して、肘に接続されていたフラツシユエツジ2をビームサーベルモードで展開、ジム・スパルタンに返す刃で斬りかかる。

だけど、それすら読んでいたのか、相手は最低限の動きでそれを回避すると、右手に装着されていたグレネードランチャーから、煙幕弾を放ってチナツの視界を奪う。

『煙幕?! 小癩なことを……！』

『環境を、バトルフィールドを最大限に利用して、一体化した者こそがガン普拉バトルを制する……パウパド老師の教えだ。この「ジム・スパルタンB」、そう簡単に倒せると見くびるなよ』

煙幕の向こう側からブルパップ・マシンガンをぶちまけながら、ジム・スパルタンBを操るダイバーはチナツを撃破しようと、今度は右腰のマウントラッチに搭載されていたファイア・ナッツを投擲した。

まずい。チナツのアストレイじゃ、発泡金属装甲じゃ、まともに食らえば致命傷だ。

『きゃあああつー！』

『怯えろ、竦め……ガンプラの性能を活かせぬまま、敗退して——』

『あー、もう、クツソムカつくわね！』

『何ッ……!?!』

ビームシールドに身を包むことでファイア・ナッツの炸裂から機体を守っていたらしいチナツが怒りの咆哮を上げると同時に、デステイニーのウインググユニットから、ヴォアチュール・リュミエールが煙幕を吹き飛ばす勢いで放出される。

『環境だかなんだか知らないけど、勝利の道はアタシが作る！ アタシの力で……一番を勝ち取ってみせるんだから！』

『ヴォアチュール・リュミエールで煙幕を吹き飛ばして……！ ならば！』

『させるかあッ！』

大分チナツはお怒りのようだった。

次の一手を繰り出そうとしたジム・スパルタンBの左手をビームサーベルモードのフラッシュエッジ2で斬り裂くと、信じられないとばかりに相手が顔を歪めたその隙を見逃さずに、パルマ・フィオキーナをコックピットへと叩き込んだ。

『環境は絶え間なく変わるもの……変化についていけなかった、私の負け、か』

『違うわね！ 環境は作るのよ！ このアタシが飾るウインググローブは！ つまり、アタシ自身が環境なのよ！』

『それは……大きく出たな……』

地球が自分を中心に回っているかのような言い草で、爆散していく相手にそう叫ぶと、チナツは不機嫌そうに唇を尖らせて、胸を支えるように腕を組む。

なんつー理屈だ。

滅茶苦茶で、はちやめちやで、自信過剰で。だけど、それも含めてチナツらしい。

間違いなく猛者としての逆転劇を見せたチナツもまた、ふん、と小さく鼻を鳴らしてセントラル・ロビーへと解けていく。

絶え間なく試合は切り替わり、さつきまで存在を忘れてたけど実況席のミスターMSもここからが本番だとばかりにMCのテンションを上げる。

役者は揃いつつある、ってことか。

俺はモニターに映し出された、クロスボーンガンダムのカスタムモデルがバレルが二つある狙撃銃で敵を一撃で射抜くのを横目に、ぱしん、と拳を掌に打ち付けて、気合を入れ直した。

Ep. 30 「幕を開ける饗宴」

「次元霸王流！ 蒼天紅蓮拳！」

『まさかこのワシを、超えていくつもりか!?』

「ああ、そうさ……俺はあんたを、立ちはだかる強敵たちを超えて、優勝を勝ち取ってみせる！」

『ふっ、なんとという心意気……ワシは心でお主に負けておったか……』

【Battle Ended!】

【Winner:ユウヤ】

メガ粒子杯バトルカイ、最終予選。

第三回戦を勝ち抜いた後、一騎討ちに最適化された荒野で俺は、最後の相手になったマスターガンダムを討ち倒していた。

『決まったああああ！ 決まりました！ 「ユウヤ」選手、メガ粒子杯バトルカイ、一番乗りで本戦進出決定です！ 長き時を経てGBNに蘇った次元霸王流の申し子は、本戦でどんな活躍を見せるのか！ 背中がむずむずしてまうけど、これからもその活躍に目が離せませんわ！』

実況のミスターMSが、勝利のゴングを鳴らす代わりに叫ぶ。

色々と頭を使う戦いも嫌いじゃないけど、やっぱり戦うんだったら正々堂々、正面からやり合うのが一番気持ちいい。

そんなこんなで本戦進出一番乗りを果たして帰還したセントラル・ロビーでは、マフユがライブモニターの前で待っていてくれた。

「ユウヤ君、おめでどう……！」

「へへっ、ありがとな、マフユ！」

「本戦進出……Cランクに上がったばかりなのに、それだけのことをしちゃうのは、ユウヤ君の実力だよ……！」

「いやいや、マフユがストライク焔のブラッシュアップを手伝ってくれたおかげだって！」

マフユは眦に涙を浮かべながら、感極まったようにそう言ったけど、実際、ストライク焔をブラッシュアップしてなかったら危ない戦いもあった。

特に三回戦、ファンネルを巧みに使いこなしていたキュベレイを相手にした時は、こっちのフィジカルが強化されてなければ弾幕に耐えきれずやられてただろうからな。

もちろん俺だって全力を尽くしたつもりだけど、マフユたちが面倒を見てくれたストライク焔のパワーアップ効果は予想以上に大きかったってことだ。

「そんな……私なんか、ユウヤ君の役に立ててるなんて……」

「なんか、じゃないさ！ マフユがいてくれたから、ストライク焔を見てくれたから……応援してくれたから、俺だって頑張れたんだ！」

一人で強さを突き詰めていく道もある。

仲間たちと手を取り合って強さを突き詰めていく道もある。

どっちの道も険しいけど、もしも強さの深みにはまって無明に堕ちそうになったその時、支えてくれる誰かがいることだけは忘れちゃいけない。父さんの、師匠の言葉だ。

俺はまだ、俺の中にある「強さ」の意味を言葉にすることができないかもしれない。

だけど、マフユがいてくれたから、チナツがいてくれたから、そして、ガンプラバトルの道に誘ってくれた師匠が、俺にガンダムを見せてくれた母さんが、GBNで出会ったトッドさんやキョウヤさん、トワさん、タイガーウルフさん、アズサさん——色んな人がいてくれたから、俺はこうしてここに在ることだけはわかる。

縁が持つ力ってやつなのかもしれない。とにかく俺は、まだまだ一人前とはいえないかもしれないけど、その分多くの人に支えられている。そのことだけは、きつと忘れちゃいけないんだ。

「ストライク焔の面倒見たの、マフユだけじゃないわよ」

「チナツ！ ここにいるってことは……」

「ええ、アタシも本戦進出よ」

「わあ……二人とも、おめでどう、ございます……！」

「ありがと、マフユ。あとは決勝戦で決着つけようじゃないの、ユウヤ」

チナツはふふん、と小さく鼻を鳴らすと、相変わらずデカイツイン

テールを掻き上げて、俺に宣戦布告を突きつける。

最初に戦ったときは俺が必殺技を持っていなかったこともあって、いつてみればあいつは飛車角落ちで戦ってくれたようなものだ。

だからこそ、今度こそ互角の条件で優勝を競い合う。その提案は悪くない。

「ああ、チナツ！ 俺と当たるまで負けんなよ！」

「そのセリフ、そのままそっくりお返しするわ」

「あら、もう勝ったつもりでいるの？ お気楽ね」

チナツと約束を交わし合うように拳を突き出したその時、水を差すように勝ち気な声がセントラル・ロビーに響き渡る。

薄いピンク色、ストロベリーブロンドの髪に金色の瞳を持つそいつの顔を、俺が忘れるはずもない。

「リンファ……劉凜風か！」

「是。いかにもリンファはリンファよ。そこにいる子との約束もいいけど……このリンファの言葉、忘れたわけじゃないわよね？」

俺と次元霸王流を、完膚なきまでに打ちのめす。

そんな啖呵を切ってきたんだから、忘れようとしたって忘れられるものか。

「ああ、覚えてるぜ……だけどな、勝つのは俺とストライク焰……そして次元霸王流だ！」

「威勢がいいわね、嫌いじゃないわ。でも……アナタは一つ勘違いをしている」

「勘違い？」

おうむ返しに言葉が口をついていたけど、俺のどこに勘違いがあるというのか。

確かにリンファは拳法家としては超一流だ。どれだけ態度がデカくたって、それだけは俺もちゃんと認めている。

それに、あの1、5ガンダムカリボーンズガンダムをベースにしたズイーロンワン。

可動域が拳法を使うことを前提に拡張されていながらも、八極拳の激しい衝撃にも耐えられる剛性を失っていない。

ガンプラだって一級品だ。

「戦いというのは歴史の積み重ねよ。それはガンプラバトルもそう。アナタが次元霸王流を背負っているのなら、リンファは中国拳法の歴史を背負っている。その重みの違い……本戦でわからせてあげるわ」

「次元霸王流はできて日が浅い……だから拳法としちゃ未熟だって言いたいのか？」

「是。わかってるじゃない」

なるほどな。確かにその考え方には一理あるかもしれない。

伝統というのは、歴史というのは、それだけ多くの人が支え、創意工夫を重ねてこの現代まで受け継がれてきたものだ。

そういう意味じゃリンファが使う拳法の歴史は長く、重い。

けどな、歴史の長さだけで勝敗が決まるってんなら、それこそ勘違いだ。

「次元霸王流はできて日が浅い拳法かもしれないね……けどな、開祖や師匠が、俺の兄弟子たちが血の滲む思いで磨き上げてきたのは一緒だ。歴史の長さが、勝敗を分かた絶対条件じゃないってこと、こつちこそ教えてやるぜ！」

「ふうん……それは楽しみね。それじゃあ決勝戦でアナタがその思いを見せてくれること、リンファは楽しみにしてるわ」

リンファはそれだけ言い残すと、つかつかと踵を鳴らして去っていく。

強いけどいけ好かないってのはこういうことをいうんだろうな。俺自身はともかく、師匠たちが紡いできた次元霸王流に喧嘩を売られたってんならこつちも黙っちゃいねえ。

「何よアイツ……アタシは眼中にないってわけ？ ムカつくわね」

「全くだぜ。だけどチナツ、リンファの実力は大口を叩くだけあって折り紙付きだ」

「それはわかってるわ。アタシもG-Tubeのアーカイブに残った試合は見てるもの。だけど、勝つのはアタシよ」

絶対にアンタと一緒に決勝戦に勝ち上がってやるんだから、と、チナツは、リンファが去っていった方向を一瞥すると、腕を組んで唇を

尖らせる。

その自信が、闘志が、おそらくはチナツのモチベーションになっているのだろう。

自信がある、というとき大きく聞こえるかもしれない。だけど、誰よりもまず自分を信じられなかったんじゃ、勝負の舞台に上がる前に負けている。

要は気持ちの問題だ、っていうと今度は軽く聞こえるかもしれないけど、どんな時でも、例えばピンチに追い込まれても強い自分をイメージして、重なり合うように戦う。

それこそが戦いには肝要なのだ。

「二人は……強いね……」

「マフユ？」

「私は……怖くて、メガ粒子杯から逃げちやったから……なんだか情けなくて」

リンファと舌戦を交わしていた俺たちを俯瞰するようにそう呟くと、申し訳なさそうに丈の余った袖で、マフユは顔の半分を覆い隠す。

怖くて逃げた、か。

マフユ自身が認めてるってことはそうなんだろう。そこについて、俺は触れない。けどな。

「それを認められてるってことは、まず一步強くなったってことだけ、マフユ」

「ユウヤ君……?」

「逃げていることを認めるのは、勇気がいることなんだ。だから、それを認めて自分と向き合ってるマフユは偉い。誰がなんて言ったとしてもな」

「ふん……ユウヤにしては珍しく意見が合うじゃない。そうよマフユ。マフユがどう思ってるかはわからないけど、ありのままの自分を認めるってね、難しいことなのよ」

認めたくないことの二つや三つは誰にだってあるし、思い通りにいかないことなんてそれ以上に莫大だ。

それでも、上手いかない中で、認めたくないことがある中で、ま

ずそんな上手くない自分を、認めたくない自分を認めてやるって
いうのは、いってしまえばそれも一つの「強さ」に他ならない。

「ぐすっ……ありがとう……ユウヤ君、チナツさん……」

「一歩一歩でいいから、マフユがもし今より強くなりたいてんなら
積み上げていこうぜ。その時は、今まで手伝ってくれたお礼に、俺も
手伝うからさー!」

「アタシもよ。ま、メガ粒子杯が終わってからになっちやうけどね」

涙を零しているマフユを宥めるようにチナツの手が、綺麗な黒髪を
梳くように優しく撫でる。

そして、俺たちがそんなことをしている間にも予選は終わっていた
ようだ。

ライブモニターに投影されている映像が、バトルから特別席に切り
替えられる。

『さあ、泣いても笑っても最後の最終予選! 見事に本戦進出の切符
を勝ち取ったのは……何の因果か次元霸王流と深い関わりを持つガ
ンプラを、ドライバーニングガンダムのカスタムモデル、リバースブ
リザードガンダムを使う新進気鋭のドライバー「コードウ」はんでっせ!』
歓声がセントラル・ロビーに響き渡ると同時に、「コードウ」というら
しいドライバーの姿と、あのリバースブリザードガンダムの姿が大写し
になる。

なるほど。あいつ、コードウって名前だったのか。

本戦で当たるかどうかはわからないけど、覚えておかなきゃな。そ
してできれば拳を交える機会があることを、乱数の女神様に祈ってお
くのも忘れない。

『これで本戦に進出したドライバー八名が見事に決定されたわけですが
……ここからは皆さんお待ちかね! 本戦トーナメント表決定の時
間でっせ! まずはAブロック!』

ミスターMSがMCと共に、昔のGPD大会で使われていたのを模
した抽選機にかけられていた布を取り払って、ハロボタンに拳を打ち
付ける。

『おっと、これはあ!? Aブロック一回戦、拳法使いは惹かれ合っ

うのか！ 一番乗りで本戦進出を決めた期待のホープ、「ユウヤ」選手と対峙するのは本戦最後に進出を決めた「コードウ」選手！」

「っしゅあー！」

早速お祈りの効果が出てくれたことに感謝しつつ、俺は気合を入れ直すように、右の拳を左の掌にぱしん、とぶつけた。

あの「コードウ」ってダイバーと、リバーズブリザードガンダムは強敵には違いないかもしれない。

だからこそ、わくわくしてくる。血が滾る。早速本戦が楽しみになつてきやがった。

『続いてはBブロック！ 知る人ぞ知る、蠱惑の中性的な容姿を持つ可憐なダイバー、「カール」選手と、射撃、格闘……どれか一つに偏ることのないバランスが整った攻撃が特徴の「ヤマモト」選手！』

カールって、女の子っぽい見た目をしてるやつは確か、ラピッドジュアングとかいうガンプラを使ってたダイバーか。

AブロックとBブロックが決まったということは、俺とチナツは必然的に決勝で当たる可能性がある組み合わせになったってことだ。

そのことに気づいたのか、ふふん、と小さく鼻を鳴らしたチナツも上機嫌のようだった。

『続いてはCブロック！ まずはティアラと大きなツインテールが可憐なオールラウンダー「チナツ」選手！ いやー、無許可でMS少女を作りたなる、魅惑的なお顔やな……と、こほん！ さっきのは冗談だとして、相対するのは今大会、唯一スナイパーとして本戦進出を果たしたクールビューティー、「シーズン」選手でつせ！』

「チナツ、お前の相手スナイパーだってよ」

「ふん、上等よ。アタシも狙撃には心得があるんだから……にしてもあの司会、褒めてるんだろううけど気持ち悪いわね……」

「……まあ、本音だっただろうからな」

「……確かにあの人、きもちわるい……」

チナツがこのGBNでもリアルでも、いわゆる美少女とか美人とか、そういう部類に含まれてるのは俺でもわかる。

師匠の、父さんの姉さんがモデルをやったこともあって、その遺

伝なのかもしれない。

「だけど、無許可でMS少女を作りたいとか公然と言われたらドン引きも悪いところだ。」

「俺たちがドン引きしてたのはお構いなしとばかりに、司会のミスターMSは、最後のブロックになるDブロックの組み合わせを、拳を天高く突き上げながら発表する。」

「残るは最終、Dブロック！ もう顔触れ的にはわかってまうけど、全力で発表させていただきませ！ まずは新進気鋭！ Cランクでありながら伝統ある中国拳法でこの戦いを勝ち抜いた猛者、「リンファ」選手！ そして、その対戦相手は全てをねじ伏せる圧倒的な超火力でのし上がってきた「ヤヨイ・モモ」選手ですわ！ いやー、豪勢な組み合わせでんな！ しかあし！ 勝つか負けるかがどうしても決まってしまう勝負の世界は非情！ 強豪目指した新星が集い、どうなるかがわからないメガ粒子杯本戦は、明日から開催でっせ！」

——見応えバツチりなこの戦い、是非とも応援するダイバーたちは刮目してくださいな！

「ミスターMSがその言葉で予選大会を締め括ると同時に、盛大な拍手がセントラル・ロビーに響き渡る。」

「明日からか……わくわくしてきたな！」

「ええ、そうね……G—Tubeでアーカイブを確認して、相手がどんな戦術で攻めてくるのかをちゃんと研究しないと」

「私は……応援しかできないけど、二人を精一杯応援します、ね……！」

顔を赤らめ、丈の余った袖の中で両の拳をマフユは静かに固めてそう言った。

「気合十分つてところだな。」

「ありがと、マフユ。それじゃあ決勝で会いましょ、ユウヤ。それまで絶対に負けるんじゃないわよ！」

「ああ、そんなつもりはさらさらねえ！ 全力で……全力でぶつかって、決勝の舞台でお前と戦う！」

組み合わせ的に、リンファと当たらないのは不完全燃焼だといえ

不完全燃焼だけど、チナツが俺の代わりにやってくれるだろう。

一応チナツも次元霸王流は習ってるからな。それに、小さい頃にはよくやってた俺との組み手で、拳法家との間合いの図り方はよくわかってるだろうしな。

メガ粒子杯バトルカイ、本戦。強敵たちと拳を交える予感に胸を高鳴らせながら、俺もまた対戦相手の研究と、ストライク焰の微調整をするべく、ログアウトして現実に解けていくのだった。

幕間その3 「メガ粒子杯を語るスレより」

【上級者への】メガ粒子杯バトルカイについて語るスレ part.

53 【登竜門】

1. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここは中級者向けトーナメント「メガ粒子杯バトルカイ」について語り合うスレッドです。他の大会やダイバー個人、大会用の構築について語り合う場合は、当該スレでお願いします。

Q. メガ粒子杯って何？

A. 上級者への登竜門と位置付けられている大会です。予選を勝ち抜き式で行い、最終的に残った四組八人のみが本戦に出場できます。

Q. 参加資格とかあるの？

A. ダイバーランクC以上から参加できます。ですがあくまで中級者向けの大会なので、Sランク以上のダイバーは参加を暗黙の了解で自重しています。

Q. 明らかにCランクじゃない強さのやつが紛れ込んでるんだけど

A. よくあることです。

関連リンク

【GBN攻略wiki】 <https://>

【中級者がGBNを語り合うスレ】 <https://>

【ビルド構築スレ】 <https://>

前スレ

【上級者への】メガ粒子杯バトルカイについて語るスレ part.

52 【登竜門】

<https://>



368. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

今年もこの季節がやってきたか

369. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

上級者になりたいかーっ!? ランク詐欺は怖くないかーっ!?

370. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

上級者になりてえなあ俺もなあ

371. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

この大会、推奨ランクCなのに明らかにCランクじゃない強さのやつが毎回紛れ込んでるんだよなあ……

372. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあ参加の最低ラインがCつてだけでSランク以上の連中が出ちやいけないって決まりは特にないからな

373. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それもあるけど強さが明らかにCランクじゃないランク詐欺のこと言ってるんだと思う

374. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

極論ランクなんて飾りだからな、昇格戦出てこないだけで実力自体は二桁三桁ランククラスのやつらとか普通にいるし

375. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「深夜の十時軍」の連中とかランクに乗らない猛者としては有名だと思おう

376. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

赤砂のミワちゃんとかもランク自体は並だけどあたおかAIMしてるからな

377. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それ以上は別スレでやってもろて、まあランク詐欺なんてよくあることだよ、当たったところで事故だよ事故!

378. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

その事故で予選敗退しかねないから死活問題なんだよなあ……

379. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ワイ万年予選落ち、ガンプラ製作依頼に手を出す

380. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

製作代行なあ、ピンキリとはいえお高い分確実にガンプラのクオリティは上がるからな……

381. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
自分が作ったガンプラじゃなきやログインしちゃいけないって決まりはないけど複雑なんだよなあ製作代行……

382. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
いうて体が不自由な人や溶剤の関係で塗装が禁止されてる子供やマンション暮らしたかも活用してるからそこまで忌み嫌うようなもんじゃないと思うぞ

383. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
自分で考えた改造プランを組んだり塗ったりしてもらうのと一から全部向こうにお願ひするのでも大分違ってくるからな

384. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
それ以上は製作代行スレでな、しかしここ最近メガ粒子杯に関して不穏な噂が立ってるんだよなあ

385. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
噂って？

386. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ああ！

387. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
それって最近流れてる噂？

388. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
無限ループ構文やめろ

389. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
>>>384

結局その噂ってやつはなんなのさ

390. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
俺も又聞きでしかないけど、今年のメガ粒子杯、参加者が過去になり勢いで事前に辞退してるらしいぞ

391. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
つまりどうということだっばよ？

392. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
予選前に辞退してることか、どういう理屈なんだ？

393. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
私にもわからん

394. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
なんかメガ粒子杯に参加するダイバーを標的にしてるマスダイバーがいるらしいぞ

395. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
なんだその暇人は

396. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
メガ粒子杯参加者リストを調べてそいつらを襲撃してるのか？
なんでわざわざそんな嫌がらせじみたことを……

397. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
メガ粒子杯参加者を狙うマスダイバー？　なんだそれは！

398. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ククク……メガ粒子杯の参加者を狙っているマスダイバーとは「シャドウロール」の異名を持つ黒いユニコーンガンダムペルフェクティビリティを使うマスダイバーよ……！　その行為の悪質さから現在「ザ・シルバリー」、「ルミエル・ナイツ」、「AVALON」がその足取りを追いかけているぞ……！

399. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
サンキュー解説ニキ

400. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
結局なんでそんなことしてんのかはわからんけど悪質な存在ってことか、しかしその三フォースが追いかけても足取りを掴めないってどうなってるんだ？

401. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
わからん、ただ「シャドウロール」って名前には聞き覚えがあるな
402. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
勿体ぶらずに吐いちまえYO！

403. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺も風の噂でしか知らないんだけど、なんかわざわざ暴力でダイバーの心を折るような戦い方をするマスダイバー……らしい

404. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
それって要するに普通のマスダイバーでは？

405. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
マスダイバーなあ……俺のフレンドもマスダイバーにやられてからこっち、GBNにログインしなくなっちゃったし許せねえよ

406. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
つまりその「シャドウロール」とやらはメガ粒子杯に参加しようとしてるやつらの心を折ることが目的なのか？

407. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
かもしれんね、だけどなんでわざわざメガ粒子杯を狙ってんだ？

408. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ん……GBNで一番層が厚いCランクが参加するから、とか？

409. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
層が厚いと狙う意味ある？

410. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
メガ粒子杯に出るようなやつらは多かれ少なかれ上を目指してるから、そいつらの心を折って楽しんでるとか？

411. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
性格悪りーなオイ

412. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
俺も今年エントリーするつもりだったけどやめとこうかなあ……

現状マスダイバーが野放しになってるとか運営仕事して？



785. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
決まったああああ!!!

786. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

本戦出場者決まったかー

787. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
今年も案の定ランク詐欺みたいなやつが勝ってたな……

788. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
リンフアちゃん強くて可愛いとか惚れてまうやろ

789. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
チナツちゃん何とは言わないけどデカいからすき

790. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ミスターMSみたいなこというのやめてもろて……

791. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
しかしあのズイウン・スバルが一回戦負けとはな……

792. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
態度は悪いけど実力だけは確かだったからなあいつ

793. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
あのコドウってダイバーどっかで見たことある気がするんだよな

あ……

794. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
今気付いたけどユウヤとチナツってあの「トライダイバーズ」の二人か、マフユちゃんは出場しなかったのかな？

795. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
出なかったっばいね、ロビーで応援してるの見たわ

796. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
ヤヨイ・モモが本戦進出かー、パーフェクトストライクガンダムペ
ルフエクティビリティとかいうネタみたいな名前のガンプラ使つて
んのに腕前はガチなんだなあの子

797. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
シーズンってあのシーズン？

798. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
どのシーズンだよっていいんだけど多分お前が想像してるシーズ
ンちゃん都合ってる

799. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
「緋きスナイパー」と対をなすとまでいわれた「蒼きスナイパー」もメ

ガ粒子杯本戦に出るのか……

800. 以下、名無しのダイバーどつかでお送りいたします

本戦のステージって確かクツソ狭いから砂は不利じゃないのか？

801. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

過去のアーカイブ漁ってるとやっぱり近接格闘型とか汎用型が生き残ったり優勝したりする傾向が強いわね、砂でやってくのは厳しそうなもんだが果たして

802. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あのカールって女の子可愛い……可愛くない……？

803. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつ男だぞ

804. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

えっ？

805. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

中性的な顔立ちとドレスで勘違いするダイバーは数知れずだからな、俺もソーナノ

806. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

カールの性別を勘違いするのは誰もが通る道よ、噂じゃマギーさんに女装を学んだとか

807. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あのユウヤってダイバーもどつかで見た気がすんだよなあ……正確には次元霸王流とかいう拳法だけど

808. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それなら多分過去のGPD学生大会に出てたやつじゃないかな、ガンプラ学園を破って全国優勝したっていう

809. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ガンプラ学園、名前は冗談みただけのことGPDに関しちやガチの強豪だったからなあ……

810. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

じゃああのユウヤってやつは伝説の再来ってことなのか？

811. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そうなるかどうかは優勝できるかどうかよ

812. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

メガ粒子杯はまだ始まったばかりだからな

813. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

誰もヤマモト選手のこと語ってなくて草

814. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヤマモト君は特長がないのが特徴みたいなんやし……

815. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

乗ってるガンプラもジム・カスタムという奇跡

816. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあ逆にいえばジム・カスタムで本戦出場できる程度には強いってことなんだけどな



「これはどういう理屈だね、『シヤドウロール』……?」

「……」

「メガ粒子杯参加者の半分以上をこちらの手駒にできたことは素晴らしい。計画以上の出来だと褒めてやろう。だが、肝心の『トライダイバース』を引きこめていないのでは、意味などないではないか!」

鈍い拳が頬に食い込む感触と、血の味が広がっていく感覚。すっかり慣れたものだけど、この痛みからすれば、腫れが二日は引かないだろう。

トライダイバース。あの時チャンピオンを呼ばれていなければ、潰すことはできたのに、心をへし折ることはできたはずなのに。

怒りがぼうつと心の奥に灯り、私はきつく奥歯を食いしぼる。

「いずれにしろこれからも『トライダイバース』の監視は続ける。奴らを来たるべき日の手駒として使うのは確定事項だ。そこに変更は許されない。わかっているな、『シヤドウロール』?」

「……はい」

こんな時でも、この男は私の名前を呼ぶことはない。最後に呼ばれ

たのがいつだったのかも覚えていない。

(なんでだ……なんでそんな憎しみを抱えてる！ GBNが……俺たちのことがそんなに許せないのか!? だから、ブレイクデカールに手を出したのか!?)

あの時の、「ユウヤ」の——カミキ・ユウヤの言葉が脳裏にふと蘇り、燃える怒りに油を注ぐ。

憎い。許せない。

ブレイクデカールなんてものはただの手段でしかないとしても、私からすれば親の庇護を受けて呑気にあのゲームに興じていられる、あいつらが憎くて仕方ない。

それに、あのマフユ——ミホシ・マフユとかいう女にチャンピオンを呼ばれていたのも癪だ。あれさえなければ私は、カミキ・ユウヤをへし折っていたはずなのに。

とはいえ、楔は打ち込んだ。

メガ粒子杯に出たのが「ユウヤ」と「チナツ」だけならば、「トライダイバーズ」を内側から崩していくことは容易い。

千里の堤も蟻の穴から——日本のコトワザだったか。一度脆い部分ができてしまえば、あとはそこを突いてやるだけで、物事や関係とというのは簡単に崩れていく。

ミホシ・マフユの経歴については完全に調べ上げている。ならば、今はその爆弾を抱えたまま束の間の勝利に酔いしれていればいい。

絶対に。絶対に私は、あのカミキ・ユウヤを、コウサカ・チナツを叩き潰してやる。愛を受けて育ってきたやつらを、今も愛されているやつらを、この憎しみで焼き尽くすその時まで、私は絶対に、止まることはない。

だから覚えている、トライダイバーズ。

私の復讐は、私の正義は、なんとしたって果たされなければならぬものなのだから。

Ep. 31 「氷焰の拳」

「母さんから聞いたぜ、ユウヤ。ガン普拉バトルの大会に出るんだって？」

朝の稽古が終わった後に、師匠……父さんは母さん経由で仕入れてきたらしく、そんなことを問いかけてきた。

別に隠してるつもりじゃなかったからいいんだけど、そういえばガン普拉バトルに関して父さんに相談したり、話したりしたことはなかったな、なんてことを疲れた頭の片隅でぼんやりと考える。

メガ粒子杯、バトルカイ。第一回戦で早速当たる相手は、トライバーニングのカスタムモデルを使ってる拳法家だ。

そういう意味じゃ、因縁がなくもない父さんに何か助言を求めてもいい……のかもしれないけど、口じゃなくて拳で語るタイプだからな、俺の父さんであり、師匠は。

「ああ、メガ粒子杯ってんだけど……それがどうかしたのか、父さん？」

「いや、それ自体はユウヤの自由にすればいいさ。ただ一つ、教えてなかったことを思い出したのと、大会に出るくらい強くなったなら、これを教えてもいいかと思ったからな」

その口ぶりからするに、何か教えることがあるんだろうか。

とはいえ、次元霸王流に奥義や秘伝は存在しない。あるのはただ、己の全ての技を必殺の、奥義の域に高めるための極意だけだ。

そうなると、ガン普拉バトル関連のことになるのか？ でも父さんも次元霸王流を使って、昔の大会を勝ち抜いてきたらしいし、他に教えることなんて、技の冴えとかそういう基本的なことぐらいじゃ——
「ユウヤ」

薄らぼんやりとそんなことを考えている間に、父さんは、いや、師匠は、かつてないほどの気迫をその声に込めて、俺の眼前に拳を突き出してくる。

あの時のタイガーウルフさんと同じだ。そこに殺気はなくても、何かを伝えるために、何かを図るために突き出された拳。

俺は咄嗟に構えをとって、師匠の拳にいつでも応えられるように体勢を整えた。

「ユウヤ、今お前が反撃の構えを取ったのはなんでだと思う?」

「なんでって……そりゃ、師匠の拳が、俺に何かを伝えたがってたから」

「じゃあ、知らない街のチンピラが同じことをしてきたら、お前は どうする?」

「向こうから喧嘩を売ってきたってんなら、反撃するさ」

つまるところ、何が言いたいのか。

師匠の拳とチンピラの拳じゃ、腕前でもそこに込められた思いでも比べものにもならないし、向こうから攻撃してきたってんなら正当防衛として反撃の構えを取るのには間違っちゃいないはずだ。

——あれ?

俺はそこに僅かな違和感を覚える。

師匠の拳に拳で応えようとしたのはそこに思いがあるからで、チンピラの攻撃を仮定して反撃の構えを取るのには正当防衛のため。

理由はともかく、どっちにしたって俺は反撃の構えを取っている。それは当然のことであるはずなのに、喉に引っかかった小骨のように、心に違和感を残していく。

「攻撃に対して反撃の構えを取るのには当然のことだ。だけどそれは……お前の意思でやってることだろ、ユウヤ?」

「はい、師匠」

「じゃあ、もしもお前じゃなくて、操縦桿を手離した状態でストライク焔が攻撃を受けたらどうなる?」

師匠は相変わらず抽象的な質問を俺にぶつけてくる。

操縦桿を手離した状態で攻撃を受けたら、GBNがゲームで、オートパイロット機能も搭載されてないってんならストライク焔は何も手が出せないだろう。

やられるか、後ろに倒れるか。それだけだ。

「やられるだけです」

「そうだ。ストライク焔は……ガンプラは、それ単体だと何もするこ

とができない。ファイターがいて、初めてその力を発揮できる」

父さんの時代でも、お前の時代でも、それだけは変わらないはずだ。

師匠は真剣な光を眼差しに宿したまま、俺の肩にがっしりとその両手を置いた。

師匠が何かを、とても重要な何かを伝えようとしてくれていることはわかる。だけど、そのヒントがないから、わからない。

困惑する俺に、今度はふつ、と柔らかく笑みを浮かべて、師匠はもう一度次元霸王流の構えを取る。

「お前なら、目を瞑っていても殺気や闘志……拳に込められた思いを読み取って、対応できるな？」

「ああ、例えできなくなったら、やってみせます」

「いい返事だ……目を閉じろ、ユウヤ！」

「はい、師匠！」

「次元霸王流、聖拳突きー！」

俺は言われた通りに目を閉じて、その拳に込められた思いと気配、そして師匠の闘気を読み取って、その一撃をガードする。

痛え。手加減してくれたとはいえ、師匠の聖拳突きは相変わらず骨が痺れるような威力だ。

「今と同じことを、ストライク焰に乗ってもできるか、ユウヤ？」

「それは……はっ！」

「そうだ、ユウヤ。これからの戦い……どうしても窮地に陥った時こそ思い出せ。お前はお前だから、目を瞑ってても反撃ができる……だからお前が、ストライク焰の目に、手に、足に……ストライク焰そのものになるんだ」

ガンプラと自分を同化させるまでに磨き上げられた、極限の集中。それこそ、目を瞑った状態で操縦桿を握っていても、俺自身がストライク焰となることで、いつだって反撃ができるようになる。

まだ俺にそんな芸当はできない。でも、師匠が教えようとしているのは、そういうことなのだろう。

また一つ、「強さ」に繋がる師匠の教えが骨を、神経を伝って頭のとっぺんから爪先まで広がっていく。

「アシムレイト……俺の時代はそう呼ばれていた」

「師匠……」

「頑張れよ、ユウヤ。これで俺が教えられることは全部教えた……あとはお前自身が、お前自身の手で、強くなっていくな」

険しくも優しい「師匠」の顔つきから、慈しみ深い「父親」の顔に戻って、父さんは俺の頭をくしゃくしゃと撫で回した。くすぐつてえ。

だけど、こうされていると子供の頃を思い出すようで、悪くない気もする。

なんて、感傷に浸っている時間もないか。

メガ粒子杯、本戦の開幕は近づいている。

アシムレイト。師匠が最後に伝えてくれた極意が、俺に使えるのかどうかはわからない。

だけど、その思いを胸に抱いて、可能な限り思い描く理想に己を近づけようとすれば、いつかはその境地に至れるはずだ。

父さんより先にシャワーを浴びさせてもらっている間にも、俺はただその最終極意、アシムレイトと、対戦相手である「コードウ」のことについてだけ、考えを巡らせていた。



『さあ、始めましたメガ粒子杯バトルカイ、本戦Aブロック第一回戦！ ここを勝ち抜いた猛者こそが、勝利の栄光を手にすることができ、天下分け目の大決戦つちゅーわけですわ！ 対峙するのは、今をときめく期待のホープ！ 次元霸王流の申し子「ユウヤ」選手！ そして、鍛えた空手が冴え渡る！ そのガンプラは氷のように、その闘志は炎のように！ 流しのガンプラファイター、「コードウ」選手でつせ！』

メガ粒子杯本戦のため、特別に用意された会場に、観客たちの歓声が響き渡る。

例年なら本戦一回戦は予選と同じようにバトルフィールドはラン

ダムで戦ってたらしいけど、今年は参加者が少ない都合で盛り上げるために本戦一回戦から専用会場で戦うようになってる……らしい。チナツが言っていたのを聞いただけだ。それはともかく。

用意された闘技場の上に、ストライク焔と相手のリバーズブリザードが、ブロックノイズが組み合わさっていくように姿を表す。

試合前に何か言葉を交わすのなら、きっと今この瞬間しかない。

「よう、待ってたぜ。コドウさん……!」

「お前は……確か、次元霸王流の」

「ああ、ユウヤだ! 次元霸王流を継ぐ男だ!」

「……コドウでいい。しかし、次元霸王流とはな……」

何か含みのあるような言葉を残すと、コドウは踵を返してリバーズブリザードガンダムに乗り込んでいく。

俺もストライク焔のコックピットに自らを転送することで、これから始まる戦いに備える。

『一回戦といえども実質的には準々決勝! 二人の拳法家が、どんな熱い戦いをワイラに見せてくれるのか! 目が離せないメガ粒子杯バトルカイ、本戦が今、スタートでっせ!』

【Gunpla Battle SET READY……】

【Battle Start!】

ミスターMSがゴングを鳴らすように叫ぶと同時に、システムダイアログが起動して、ガンプラバトルの開始を告げる。

「はあっ!」

俺は開始と同時に間合いを図るため、ビームピストルをリバーズブリザードに向けて撃ち放つ。

オーディエンスは格闘戦を期待しているんだろうけど、まずは相手の間合いを見極めない限り、格闘戦に踏み込むのはリスクが大きい。

だからこそ、堅実な一手を選んだ、そのつもりだったが。

『その程度か、後継者! てやあああっ!』

「蹴りでビームを弾き飛ばしやがったのか!」

『そうだ……そして、この構えに見覚えがあるはずだろう! ユウヤ

！』

「ボクシング……？」

コドウは蹴りでビームを弾き飛ばしたと思いきや、予選で使っていた空手の構えじゃなく、ボクシングの構えを取って、俺を手招くように拳を固める。

ビームピストルを投棄しつつ、ボクシング使いとの因縁が何かあったか、記憶の中を浚ってみただけど、ぱっと思いつかんてくるものはない。

そうなる、俺とのものじゃない……つまり父さんの、師匠の因縁か？

だったら、一つだけ心当たりがある。

小さい頃、子守唄のように見ていた「チーム・トライファイターズ」の戦いの記録。その中には確か、ボクシングを使うデステイニーガンダム乗りと、師匠のビルドバーニングガンダムが戦っていた映像があったはずだ。

「なるほどな……そういうことかよ！ なら、尚更負けられねえ！」

『思い出したか……それはこっちも同じだ！』

「はあああつ！ 次元霸王流！ 疾風突き！」

『どうした、後継者……！ カミキ・セカイの技の冴えは、もつと研ぎ澄まされていたぞ！』

「くっ！」

渾身の疾風突きをガードで凌がれて、その後隙を狙うようにコドウは右左のストレートを打ち込んでくる。

フリーになつていた左手のビームシールドで防いでいなければ、危ないところだった。

そしてこの、後隙を徹底的に潰すやり方も、見覚えがある。確かこれは、タイガーウルフさんの。

「あんた……タイガーウルフさんに学んだのか？」

『ああ、いかにも俺はあの人の弟子だ……元、だけどな』

「いいねえ……GBNじゃ同門ってわけだ！」

『そういうことだ！』

次元霸王流の技は威力がデカイ分隙もまた大きい。この弱点だけは否定しようがない。

手数と破壊力を重視した空手の拳を、こっちもお返しだとばかりに取ったボクシングの構えとマーシャルアーツで打ち崩しながら、俺たちは拳と拳をぶつけ合う。

「ワン、ツー！」

『せいっ、はあああっ！』

「ぐっ……！」

なんて重い、研ぎ澄まされた一撃だ。

凌ぐなんて考え方をしていること自体が間違いだ。このまま純粹に殴り合いを続けていたら、打ち負けるのは恐らく俺に違いない。

だったらここは、リスクを承知で、全力で突っ込んでいくしかない！

「行くぜ、ストライク焰！ バーニングバーストシステムだ！」

『ようやく見せてくれたか、お前の本気を！』

「ああ、こいつが俺の必殺技だ！ 次元霸王流……蒼天紅蓮拳！」

『だったらこっちも見せてやる……我流！ 蒼天紅蓮拳！』

「何だどっ!？」

相手のリバースブリザードガンダムが放ってきた技は、俺が放ったのと全く同じ、蒼天紅蓮拳だった。

拳と拳がぶつかり合い、火花を散らす。

バーニングバーストシステムを使って五分か若干有利が取れるくらいだと思っていたけど、相手も次元霸王流を使えるならその認識は大きく揺らぐことになる。

いいねえ、面白くなってきたじゃねーか！

客観的に見たら大ピンチだからこそ、俺は唇の端を持ち上げて不敵に笑う。こういう時こそ笑顔でいるんだ。

足掻いて、足掻いて。それでもダメだった時もまた同じ。最後まで、最後の最後まで、にっこり笑っていたやつが強い。そうだろ？

「はあああっ！」

『せいやああああっ！』

蒼天紅蓮拳を打ち合ったことで浮き上がっていた体勢から、俺とコドウは全く同じタイミングで蹴りを放つ。

そして、蹴りがダメなら今度こそ拳の出番だとばかりに、纏れ合ったまま、俺たちはノーガードで殴り合う。

「行くぜ、コドウー！」

『来やがれ、ユウヤー！』

ストライク焔の、パルマ・ファイオキーナの光を纏った拳がリバースブリザードの頬を砕く。

リバースブリザードの氷を思わせる拳が、ストライク焔の頬を抉つて、イーゲルシュテルンの片方が爆発を起こす。

それでもまだ、俺たちは殴り合いを止めずに空中で纏れ合いながら、飯綱落としのように武舞台の床に墜落する。

「へへっ……楽しくなってきたじゃねーか……！」

『俺も……ここまで燃え上がったのはいつ以来だ？』

互いにバツクブーストで距離を取りつつ、俺はイエローコーションが鳴り響くコックピットでコドウに呼びかける。

あいつの拳から感じた思いは、機体の名前と違って氷なんかじゃない。燃え上がる炎、ひたすら「高み」を目指そうという同じ闘志が、ビリビリと骨の髄まで伝わってきた。

純粋な「高み」を目指す思いを、元だとしても、この世界で同じ師を持った人間同士、いつかはタイガールフさんをも超えていきたいという思いを、こうして拳で語り合えるのは、幸せな限りだ。

だけど、戦いはいつまでも続いてくれるもんじゃない。

いつかは決着という形で終わりが来る。

だとしたら俺は、あいつに、コドウに……例えば純粋なダイバーとしての技量では負けていたとしても、絶対に勝ちたい！

「おおおおっ!!! 燃え上がれ、ストライク焔!!! バーニングバーストシステム、最大出力だ!!!」

『それがお前の真の本気か！ だったら俺も……必殺で応える！』

俺の全てを焼き尽くす焔をも凍らせるように、全てが凍てつくような吹雪が、リバースブリザードを中心に巻き起こる。

圧倒的な闘志。圧倒的な力。そして何より、ダイバーとして戦ってきた経験。

その全てを、コドウは俺にぶつけようとしてくれているのだ。

こんなありがたいことはそうないね。

改めてメガ粒子杯に参加することを提案してくれたタイガーウルフさんと、そしてそこには「強さ」の意味があると教えてくれたトワさんと、今も観客席で応援してくれているマフユに感謝を捧げながら、俺は両の拳に今出せる、ありったけの力を込める。

『必殺！ 雪花氷獄鳥！』

「次元霸王流だけじゃない……その先へ行くための、師匠の、父さんの思いを受け継ぐための！」

『なに……っ!?!』

「カミキガン普拉流奥義！ 鳳凰霸王拳！」

ストライク焰の拳から放たれたその一撃は、奇しくもコドウが放ってきた「雪花氷獄鳥」と対をなすような、炎の鳥を、鳳凰を象った灼熱の奔流だった。

「勝負だ、コドウ！」

『負けるかよ、ユウヤ！』

互いに全力を込めて撃ち放った氷の鳥と焰の鳥がぶつかり合い、モニターを白く染め上げるような閃光が走る。

感覚がフィードバックされていないはずのGBNで操縦桿がびりびりと震えるような、固まってしまったかのような錯覚を覚えながら、俺は凍てつくそのエネルギーを、歯を食いしばって受け止めた。

予選でズイウン・スバルとかいうやつに撃ってたのとは威力も、何もかもが違う、全力の「雪花氷獄鳥」。

俺が付け焼き刃で放った鳳凰霸王拳とは、比べ物にならないくらい技としては完成されている。

改めて、コドウが凄いやつなんだってことが、冷たくも熱く燃え上がっているやつなんだってことが、その拳からはひしひしと伝わってきた。

だけど、例え付け焼き刃だとしても、俺にはここまで支えてくれた人たちの思いが、そしてチナツとマフユ……「トライダイバーズ」としてこのGBNで戦ってきた思いが生み出した、バーニングバーストシステムがある。

託された思いを無下にしないためにも、俺にとつての「強さ」の意味を見つけるためにも、俺は、ここで負けるわけにはいかないんだ！

「おおおおっ!!!」

『はああああっ!!!』

そうして、閃光が晴れていく。

ぴしり、と何かがひび割れる音と共に、ストライク焔の右腕が砕け散っていく。

『ユウヤ君……っ！』

マフユの声が、聞こえたような気がした。

そうだ。マフユ。俺にガンダムの世界を教えてくれた、ガンプラの世界を教えてくれた。

だから、俺は。

レッドアラートが鳴り響くコックピットの中で歯を食いしばり、俺は這々の体に成り果てながらも、アズサさんのように、膝だけはつくまいと立ち続ける。

それは相手も同じだった。

ボロボロになったリバースブリザードガンダムは全身の関節がスパークしていて、ダメージが危険域に突入していることを如実に表していた。 فقط。

「はあ、はあ……こっからが……!」

『っ、はあ……ああ、そうだ……』

『第二ラウンドだ!』

俺は残っている左の拳を構え、コドウは残っている右の拳を構えて、互いにボロボロになった機体を加速させていく。

ただ、「高み」を目指すためだけに。勝利を勝ち取るためだけに、そして。

何よりも、自分が一番強いんだという、意地を張り通すために。

「はあ、はあ……こっからが……！」

『っ、はあ……ああ、そうだ……』

『第二ラウンドだ！』

ストライク焰もリバースブリザードも、どう見たってまともに戦える状態じゃない。

必殺技をぶつけ合った反動で全身のフレームにガタが来ているし、ストライク焰の右腕は鳳凰霸王拳の出力に耐えきれなかったこともあって自壊している。

だとしても、勝負はまだ終わっちゃいない。

試合終了のゴングが鳴るまでは、どちらかが倒れるまでは、いかにボロボロであろうと、いかに力尽きていようとも、戦いは続く。

残った左の拳を構えた俺と、鏡に写したかのように右の拳だけが残っているコードウのそれが交錯して、互いの頭部ユニットを打ち据える。

そうしてできた後隙を狙うかのように膝蹴り同士がぶつかり合い、一度着地を挟みつつ、俺たちは半壊状態の武舞台で流派も何もなく、ただ意地を張るだけの殴り合いを続けていた。

「楽しいなあ、コードウ！」

『全くだぜ、ユウヤ！』

その気持ちに嘘はなくとも、とつくにレッドアラートが点滅している俺たちを支えているものは、「こいつより早く倒れたくない」というプライド、あるいは一種の意地みたいなものだ。

武術家として、戦った相手には勝ち負け問わず敬意を払う。

だけどその武術家として、何よりも目の前の相手に勝ちたい。

矛盾するような思いを抱えながら、コードウが放ってきた蹴りを左の拳で受け流しつつ、クロスカウンターとして俺もまた蹴りを叩き込む。

『次元霸王流はどうした？ 限界か？』

「へっ……そっちこそ、空手の型が崩れてきてるぜ！」

『言ってくれる！』

リバースブリザードが再びスラスターに点火して急加速、推力を乗せた正拳突きがストライク焰の胴体に突き刺さる。

流星に今のは効いたな。だけど、もってくれよ、ストライク焰。

バーニングバーストシステムのおかげで辛うじて出力を保っている機体を転倒から復帰させて、俺はお返しだとはばかりに追撃をかましかきたコドウへと技を繰り出す。

「次元霸王流！　桜花紅蓮脚！」

『ぐっ！　知らない技だど!?!』

「へへっ、次元霸王流は日々進化してるからな！」

蒼天紅蓮拳と対をなす、脚での蹴り上げが胴体に直撃し、今度はコドウのリバースブリザードが武舞台に後ろから倒れ込む。

ここがチャンスだ。けどさっきの俺みたいにあの体勢からカウンターを繰り出してくる可能性は大いにある。

というか、間違いなくやってくるだろう。

——そうだとしてみだ。

「ビビって攻めあぐねてたら勝つものも勝てねえ！　次元霸王流！」

閃光魔術蹴り！」

『その技は見切ってる！』

スピードを生かすため、天高く飛び上がってからの蹴りと膝のコンビネーションを選んだのはよかったのかもしれないけど、コドウはそれをすで見切っていたようだった。

初撃の蹴りが躲された後隙に、強烈な右ストレートが炸裂する。

「ぐああああっ！」

『そうだ……まだ終わっちゃいねえ……！　俺も、リバースブリザードも……！　俺にとつての強さを見つめ直すため、もう一度、あの空に羽ばたくために！　俺はまだ、終われねえ！　我流！　流星螺旋拳！』

「そうだ……俺だって止まれねえ！　皆がいてくれたから、チナツが、マフユがいてくれたからここにいる！　俺も、俺にとつての強さの意味を知るためにも、終わらねえんだ！　次元霸王流！　流星螺旋拳

！」

二つの流星螺旋拳がぶつかり合って火花を散らす。恐らくはどつちもフレームに、関節にガタが来ている以上、ここから先はガンブラ同士の我慢比べだ。

根を上げてくれるなよ、ストライク焰。

俺はストライク焰を、チナツとマフユと俺の三人でブラッシュアウトしたこのガンブラを何よりも信じている。

自分にとって、「好き」の原点になった機体。それは武術の先にある想像を超えた景色が見られるという、父さんの、師匠の言葉があつてのことかもしれない。

ストライク焰を組み上げられたのは、母さんがジャンクパーツを提供してくれたからかもしれない。

だけど、それでも、「ストライクガンダムが大好きだ」という気持ちは俺の、俺だけのものだ。

「行けええええッ！」

『ち……くしょうッ！』

鏢迫り合いを押し切ったのは俺の方だった。大きく体勢を崩したリバースブリザードに、今度こそ引導を渡すために、意識を深く集中させる。

水の雫が凧いだ湖面に溢れて落ちるような、そんなイメージを思い描き、ただ一点を穿つのに、全力を尽くす。

「次元霸王流！・ 桜花紅蓮脚！」

『まだまだ！ その技、見切らせてもらった！』

「なにつ!？」

すんでのところで体勢を立て直し、桜花紅蓮脚の衝撃をいなして防いでみせたコドウが不敵に笑う。

まだ、まだ足搔けるとばかりに、リバースブリザードガンダムから放出される粒子が爆発的に増大する。

『今度は俺の……番だ！』

「ぐっ、ああああっ！」

透き通るダイヤモンドダストを思わせる光の粒子を纏ったりバ―

スブリザードガンダムの拳が、ボディブローのように胴体を抉つていく。

これがもしも現実なら、試合の決着はここでついていたことだろう。

だけど、ここはGBNだ。

タイガーウルフさんの言葉を思い返す。

ダイバーとしての動き方。ガンプラバトルには、全ての動きに意味がある。

師匠の言葉を思い出す。

俺自身が、ストライク焔の目に、手足になるほどに、意識を深く、深く同調させて、ガンプラと一体化するように、ストライク焔そのものになる。

「そうだよな……痛くて、痛くて堪らないよな、ストライク焔……」
けどまだだ、この痛みを超えた先に、俺たちが目指す答えがある！

ガンプラの声を聞く。トワさんに案内されたペリシアに溢れていた「好き」を思い返して、俺はストライク焔に語りかけていた。

当然、ガンプラが答えてくれるはずはない。

だけど、俺にはストライク焔が今、涙を堪えて立っているように、「まだ頑張れる」と叫んでいるように聞こえたのだ。

「ああ、そうだ……まだ頑張れる！ まだ戦える！ そうだろマフユ！ そうだろ、ストライク焔！」

どうしてマフユの名を呼んでいたのかはわからない。でも、きつと今だってセントラル・ロビーでマフユは俺の勝利を祈って、願って応援してくれてくれるはずだ。

だったら、それに応えなきゃな。

一人のダイバーとして、男として。託されたものを背負って、心に湧き上がった願いを抱いて、俺はどこまでも止まらない。

『機体に語りかける、か……あいつを思い出すな……なあ、リバーズブリザード。お前も苦しいだろう、痛いだろう。それでも少しだけ……我慢してくれ！』

「俺が……俺自身がストライク焔になる！ おおおおっ!!!」

俺がガンダムだ、という刹那・F・セイエイの言葉を思い返しなが
ら俺は、意識を自分の内側よりも更に深く、どこまでも深く集中させ
ていく。

強さとは何か。応援してくれている仲間が、信じてくれている仲間
がいる。二人の師匠に教えられたことがある。この世界を楽しみたい。
い。

いくつもの言葉たちが泳いでいる心を掘り進むように、意識を空白
の彼方に飛ばしながら、俺はきつく目を瞑って操縦桿を握りしめた。

『戦いの最中に、目を閉じるなど！』

「……見えた！ 揺らぐ炎の一欠片！」

それは、一瞬のことだった。

空っぽになった頭の中に、心の中に俺は炎が雫となつて滴り落ちる
イメージを見る。

そうして、モニター越しに見ていたはずのリバースブリザードガン
ダムが殴りかかってくる姿が、一瞬だけやけに立体的に、まるで肉眼
で見ているかのように、瞳の奥に映し出された。

「次元霸王流！」

『我流！』

『聖拳突きいいいッ!!』

抜き撃ちを所望するかのように、スラストを全力で噴射して殴り
かかってくるリバースブリザードへと、俺はクロスカウンターの要領
で左の拳を突き出していた。

多分、どっちが悪かったとかじゃない。

俺たちはこの戦いにベストを尽くしていた。出せるものは全て出
し切つて、戦いの舞台上がっていたはずだ。

それでも、もし勝敗を分かつものがあつたとしたなら、それは。

俺が一瞬だけ見えた「ストライク焔の視界」の分だけ、その一瞬だ
け、技を早く繰り出すことができているからなのかもしれない。

たった一度だけでいい。たった一瞬だけでいい。勝利を手にする
ためだけに、それ以外の全てを燃やして、俺は、ストライク焔は、リ
バースブリザードガンダムの胴体を打ち貫いていた。

『……負けた、か……』

「はあ……っ、はあ……っ……」

何かを返そうにも、言葉すら出せないほどの痛みと疲労感が、一気にのしかかってくる。

これが、父さんの、師匠の言っていたアシムレイトってやつなのかどうかはわからない。それでもあの一瞬だけ、俺は確実にストライク焔に「なっ」いた。

それだけは、確かなことだ。

『だけど、いつ以来だろうな……こんなに晴れ晴れとした気持ちで拳を振るったのは、こんな清々しい気持ちで誰かと拳を交えたのは』
「ああ……いい、戦いだったぜ……コードウ……い！」

『次は負けねえぞ、ユウヤ』

「俺だって、負けてやるつもりはないさ」

『言ってくれるじゃねえか……』

何か、憑物が落ちたような表情を浮かべて、通信ウィンドウに映し出されるコードウの姿がブロックノイズ状に解けていく。

絶え間なく鳴り響くレッドアラートの中で、俺は目を開いているのも困難な眠気と疲れ、そして痛みを襲われながらも、システムが読み上げるその一言を聞くためだけに歯を食いしばって武舞台の大地に立つ。

【Battle Ended!】

【Winner:ユウヤ】

破れんばかりの歓声が巻き起こり、半壊どころじゃない始末の武舞台を包み込んでいく。

だけど、それすら今は遠く、どこか他人事のように聞こえるくらい、清々しい戦いの余韻に俺はただ身を任せるように浸っていた。

勝った。なんとか、本当にギリギリだったけど、勝つことができた。

極限の戦いの中に俺は、虹を見たような気がした。

もちろんそれはただの比喩でしかないけど、何か自分の中で眠り続けていたものが目を覚ますその瞬間を、強烈なまでに光を放つ一瞬を見てしまったという感覚は抜けない。

それがもしかしたら、師匠のいうアシムレイトの境地なのかもしれないし、はたまた違う、別の何かなのかもしれない。

だけど、この戦いから得られたものは確実に大きいはずだ。

実況のミスターMSが何やら声を張り上げているのも意識の外に追いやられたような感覚のまま、俺は第一試合の勝者としてセントラル・ロビーに転送されていく。

ゲームの中でログインし直すような転移の感覚に眠気を覚えながらも、ここで寝たら強制ログアウトがかかるからとそれに抗いながら、俺は勝利の凱旋を果たすのだった。



「すごい、すごいよ……ユウヤ君……!」

「ああ、ありがとな、マフユ。お前が応援してくれてたからかもしれない」

「そんな……えへへ、もしそうなら嬉しい、な……」

丈の余った袖に包まれたマフユの両手が俺の手を取って、柔らかく、あたたかく包み込む。

あまりの戦いの激しさに忘れてしまいそうだったけど、これまだ一回戦というか、準々決勝戦なんだよな。

疲れた。とにかく疲れた。

GBNじゃそういう感覚のフィードバックはされてないって話だったけど、それにしても説明できないほどの大きな疲労感が俺の両肩にはのしかかっていた。

「あ……ごめんね、ユウヤ君、疲れてるよ、ね……」

「ああ、いや、疲れてるのは本当だけど、気にしなくて大丈夫だぜ」

幸い、戦いが終わった後に感じていた強烈な眠気は飛んでくれた。たし、何より前みたいにマフユの前で二度も寝落ちするわけにはいかないからな。

「なら、よかった……私、その……頑張って、応援してたから……ユウヤ君が勝ってくれて、嬉しい、な……」

「そこまで言われるとなんか照れるな……でも応援してくれてマジでありがたいな、マフユ」

土壇場でマフユの名前を呼んでいたのは、きっとそのエールが届いたからだろう。

だとしたら、この勝利の立役者はマフユということになるのかもしれないな。

なんてことを、照れ笑いを誤魔化すように頭の片隅に浮かべていた時だった。

「おい、ユウヤ」

「あんたは……コドウか」

「……っ……！」

「心配すんなって、マフユ。コドウはいいやつだ、拳を交えた俺にはわかる」

「……そこまで言われるのは照れくさいな」

「……ただ、本当のことだ。」

拳は武道家を映し出す鏡のようなものだ。そこに邪念や煩惱、雑念が入っていれればすぐにわかる。

コドウの拳には迷いのようなものが少しだけ感じられたけど、それでも真っ直ぐでひたむきな強さが伝わってきた。

だから大丈夫だと、俺の後ろに隠れたマフユを宥めつつ、俺は照れくさそうにしているコドウに向き直る。

「それで、なんか用か？」

「ああ……よければなんだが、フレンド申請をしておきたくてな」

元とはいえ、同門のよしみもある。

コドウがそう言ってぶっきらぼうに投げしてきたフレンド申請にこっちも申請を投げ返して、俺はコドウをフレンドに登録した。

同門のよしみ、か。元、つてとところに何があったのかを訊くつもりはない。

でも、拳と拳を交えたあの瞬間から俺たちは実質ダチのようなものだ、少なくとも俺は思っている。

どんな過去があったっていい。どんなに言いたくないことがあつ

たっている。

それでも、今のコドウはその時よりもきつと、ずっと輝いているのだから。

「これでいいよな、コドウ」

「ああ……次は負けないからな、ユウヤ」

「次も勝ってやるさ」

「大きく出やがって」

ははは、と、声を揃えて、俺たちは冗談を交わしあいながら一頻り笑った。

次に戦ったらどっちが勝つのかはわからないけど、それでも負けたくないのはお互いの本心だろう。

だから、同門のよしみつてやつと、フレンドとして、ダチとしての日が来るまでは互いに高め合っていこうと、そう俺は心に刻む。

「じゃあな、ユウヤ。俺は……俺自身の強さの意味を見つめ直す。またどこかで会ったら、組み手の一つでも付き合ってくれよ」

「ああ、いつだって構わないぜ！」

「それと……勝てよ。お前は、俺に勝ったんだからな」

「……ああー！」

背負うものが、託された思いが、また一つ増えていく。

だけどそれを、重荷に感じることはなかった。マフユが未だにぶるぶると震えながら後ろに隠れていることに苦笑しつつ、俺はコドウの言葉に親指を立てて応えてみせた。

強さの意味。強さとは何か。それは、俺だって探し続けていること、だからこそ、メガ粒子杯にこうして出場したんだ。

だから、絶対に掴み取ってやるさ。

この先に何が待っていたとしても、どんな強敵と拳を交えることになっても、口先よりも胸を張って、俺自身が辿ってきた道と、俺が作って、三人で磨き上げたストライク焔のことを信じて。

雑踏に紛れていくコドウの背中を見送りながら、俺はそう、静かに拳を固めていた。

Ep. 33 「乙女たちの小戦争」

「狭い本戦のステージで、スナイパーが狙ってくるのは一つ……!」
『……』

「出力を絞り込んだ、ワンショットキル!」

メガ粒子杯バトルカイ、本戦二日目。Cブロックに配置されていたチナツを応援するために、俺とマフユはセントラル・ロビーのライブモニターから、その戦いを眺めていた。

チナツの相手になっている「シーズン」というらしいダイバーは、クロスボーンガンダムにレドームユニットを増設して、バレルが二つあるスナイパーライフルで武装した、純粋な狙撃手といった風情だ。

だからこそ、チナツの見立ては間違っていないかった。

出力を絞り込んで、弾速と貫通力に特化させたビームが、アストレイシツクザールの頬を掠めて宙に消えていく。

初撃を外したスナイパーを見逃すまいと、チナツは右手に持ったビームライフルと、左のウエポンラックに接続されているロングビームライフルで、相手のスナイパーを狙い撃った。

「これでえっ!」

『……まだ!』

「避けられた!?!」

ただ、相手も伊達にクロスボーンガンダムをベースの機体として選んだわけじゃないらしい。

無茶な体勢から、フレキシブル・スラストターの推力で強引にチナツの一撃を回避すると、絞り込んだビームを放っていた上の銃口からじゃなく、下の銃口から実弾を放つ。

多分だけど、徹甲弾だ。

弾速に優れているそれは見事にアストレイシツクザールのロングビームライフルを射抜き返して、小規模な爆発が起きる。

「きゃあああっ!」

「チナツ!」

「チナツさん……!」

俺たちの言葉がモニターの向こうのチナツに届くことはない。わかっていても、そう叫ばずにはいられなかった。

恐らくは狙撃を返されるリスクが消滅したアドバンテージを活かすために、相手のクロスボーンは、左肩に接続されているユニットから三基の実体弾を発射する。

ミサイルか？ それにしては剥き出しで危ない武装配置だけど。

マフユにあれが何であるのかを訊くより先に、これが答えだとばかりに一定距離を進んだ弾頭が自動的に爆発し、凄まじい閃光がモニターを白く塗り潰す。

——閃光弾か。

目眩しは古典的だけど戦術としては有効だ。恐らくはチナツも警戒はしていたのかもしれないけど、目をやられたのか、シックザールの動きは鈍っていた。

『……この隙は逃がさない、確実に仕留める』

閃光弾に混ざって、煙幕弾も配置されていたのが中々にいやらしい。

煙幕に混じってキラキラと光る何かが見えるところから考えると、あと一つは、恐らくジャミング弾か。

二重三重に罫を仕掛けて、狙撃で倒す。スナイパーの常套手段だ。

「チナツ！ こんなところで負けんなよ！」

「チナツさん……頑張って……！」

届かないとわかっていても、俺たちは声を張り上げて、煙幕の中で戸惑っている様子のチナツを激励する。

ここで負けたら、決勝で会おうって約束はどうなっちゃうんだ。

それに、マフユだって一生懸命に応援してくれている。だから絶対諦めるんじゃないぞ、チナツ。

最善の巻き返しを祈るように、だけど、最悪の予感からも逃げないように刮目して、俺はモニターを凝視していた。

確かに今は最大のピンチかもしれない。

だけど、見方によればチャンスでもある。

何にしても、これで相手は全部の手札を使い切ったはずだ。初撃で

のワンショットキル、そして、肩のパーツにマウントしていた三基の噴進弾による強引なチャンスメイク。

この局面さえ凌いでしまえば、相手に狙撃を許すような隙は、そうそう生まれない。

奥の手を隠している可能性だってあるけど、ステージの狭さや遮蔽物のなさを考えれば、スナイパーという特性はこの武舞台においてはかなり不利になる。

それをわかっているからこそ、相手は最後のチャンスに全てを賭けたのだろう。

出力が極限まで絞り込まれた、弾速と貫通力に特化したビーム。

『ビームシールドは使わせない……！』

「チナツさん、このままじゃ、ニードル・ヴェスバーが……！」

ニードル・ヴェスバーというらしいそれが、銃口に灯った閃光から間を置かずに、煙幕を貫いて、青空に溶けていく。

そして、小規模な爆発音が武舞台に響き渡った。

まだだ。まだ、バトル終了の判定が下りていない以上、勝負が決まったわけじゃない。

俺はチナツを信じる。信じている。

あいつはこんなところで負けるようなやつじゃない。こんな逆境に屈するようなやつじゃない。

念には念を入れてと、相手が徹甲弾が装填されている下のバレルから狙撃を放とうとした、刹那。

「あーもう、搦め手つてのはわかっててもムカつくわね！」

『……生きていたか！』

「事前の位置取りから弾が飛んでくる方向を逆算するなんて朝飯前よ！ アタシだって、スナイパーなんだから！」

煙幕の中から連射されたのであろうビームライフルから放たれる閃光が、クロスボーンが構えていたスナイパーライフルを貫く。

チナツはあえて左腕を犠牲にすることで偽装爆発を起こし、この状況を利用してみせたのだ。

「っしやあー！ それでこそチナツだぜ！」

「チナツさん……!」

狙撃手が狙撃銃を失ってしまえば、その戦闘能力はガタ落ちする。チナツのアストレイシックザールは肘からパージしたフラツシユエッジ2をキャッチすると、ビームサーベルモードで展開して、スナイパーライフルを失った蒼いクロスボーンガンダムへと斬りかかっていく。

相手も流石に一筋縄ではいかないようで、腰にマウントしていたアサルトナイフを引き抜いて、チナツの刃を受け止めていた。

けど、根本的な出力ではアストレイシックザールの方が上回っているのか、終始押され気味であったことには変わらない。

距離を取り直したチナツはフラツシユエッジ2を投擲、アロンダイトに手をかけて、「光の翼」を広げながらクロスボーンに肉薄する。

「これで終わりよ、スナイパー!」

『まだだ、まだ終わるわけにはいかない……! M E P E X A M !』

「あれは……!」

「質量を持った残像と、EXAMシステムを掛け合わせてる……!?!」

その瞬間、緑色であるはずのクロスボーンガンダムのカメラアイが赤く染め上がり、怒りの雄叫びを上げるようにフェイスマスクが展開した。

そして、残像を発生させるほどの機動性で対艦刀による一撃を回避すると、胸部ガトリングをチナツに浴びせかけながら、強化されたスピードでそのままアストレイシックザールに突っ込んでいく。

『……私はただの劣化品で終わるつもりはない、この戦いを勝ち抜いて……一流の狙撃手として、ミワよりも私の名を轟かせる!』

「ミワって……赤砂がどうかしたのかは知らないけど、残像同士の対決してわけね! 面白いじゃない! エクストリームブラストモード、始動!」

すんでのところでアサルトナイフによる一撃は、チナツが発動させたエクストリームブラストモードによる残像に吸い込まれて空を切る。

ミワってのが誰かは知らないけど、相手が相当執心している辺り、

腕利きのダイバーなんだろう。多分。

そんな事情はともかくとしても、互いにロックアシストをズラす効果を持った残像を発動した状態なら、頼れるものは自分の目だけだ。だったらチナツは滅法強い。

小さい頃は次元霸王流を習ってたんだ、武道家として、その目は鍛え上げられている。

だから、勝てよ。勝って決勝まで上がってこい。

祈るように歯を食いしばった俺の軍服の裾を、マフユもまた祈りを込めるように袖の中からそつと掴んで力を込める。

『対艦刀による一撃は隙が多い……!』

「そんなもん、百も承知よ!」

『……くっ、懐に飛び込めば、こちらが……っ!?』

フレキシブル・スラストに点火して、相手が逆手に構えたアサルトナイフを振りかざし、チナツの懐に飛び込もうとした瞬間だった。背後から接近していた「何か」が、その右腕を斬り裂いて、ナイフを握っていたはずの手が武舞台にごとりと落ちる。

なるほどな。あれは「戻り」か。

モニターの前で俺が口角を吊り上げたように、チナツもまたしてやったりとばかりにほくそ笑む。

確かに質量のある残像はロックアシストを無効化し、誘導切りの効果を持っているかもしれない。

だけど、一度投擲されたビームブーメランは、「投げた機体の位置」を参照して戻ってくるようになってる。

つまり、「戻り」の通り道に相手がいれば、誘導を切つていようが透明化していようが、それには引つかかってしまうということだ。

体勢を崩した蒼いクロスボーンを見て、ここが好機だとばかりに、チナツは対艦刀を、アロンダイトを大上段に振りかぶった。

「これでえっ! 終わりよおっ!」

『ブーメランの戻り……こんなことを失念していたとは、だが……まだ、終わりではない……!』

無理やり踏ん張って転倒を避けた相手は、残っていた左手のビーム

シールドを展開して、その一撃を防ごうと試みる。だけど。

ビームシールドを引き裂いて、チナツが振り下ろした斬撃は、蒼いクロスボーンのコックピットを穿っていた。

対ビームコーティング。

あの「ゴールデン・ドリームズ」との戦いはうやむやになったまま終わってしまったけど、それが功を奏してくれたのかそうでないかはわからない。

でも、本来チナツの対艦刀はこういう守りを貫くことを想定して作られたものなのだ。

『……完敗ね、いい戦いだったわ』

「こつちこそ、ハラハラさせられたわ」

『……だから、次は負けない。貴女を狙い撃つ』

「上等！ 何度だって避けて、倒してやるわよ！」

互いに啖呵を切り合って、指でピストルの形を作った「シーズン」とかいふダイバーはブロックノイズ状に解けて消えていく。

チナツが言った通り、見てるこつちもハラハラするような戦いだっただけど、それでも最後に笑ったのはあいつの方だ。

ブーメランの「戻り」も計算に入れた戦い方。激情に駆られながらも頭脳は冷静に状況を利用する。

プライドを優先するチナツにしては珍しくクレバーな戦い方をする辺り、本気で勝ちたかったのだろう。

チナツは勝利を手にする、システム音声勝利を告げると同時に、セントラル・ロビーへと転送されていく。

そして、フレンドワープを利用して俺たちのところへと一瞬のうちに帰還を果たしていた。

「まずは一勝、おめでとうだな、チナツ！」

「ふんっ……あれくらい勝って当然よ！ だって、アンタと約束したじゃない……」

「ああ、決勝で会おうってな！ 忘れてないぜ！」

「わかってるならいいのよ。でも、勝つのはアタシなんだからね！」

びしっ、と人差し指を突き出して、チナツは豊かな胸を反らす。

こいつの負けん気の強さは相当だ。だけど、俺だって人のことをどうこう言えたもんじゃねえ。

「ああ……けどな、俺は勝つき。お前にもな！」

「ふんっ……強がつてられるのも今のうちなんだから。マフユも、応援ありがとうね」

俺の時とは百八十度態度を変えて、チナツはマフユに柔らかく微笑みかける。

こういう笑顔を浮かべてる時は間違いなく可愛いんだから、いつもそうしてればいいのに。

なんて、口に出した日にはそれこそ怒り狂って三日は口を聞いてくれないさそうだから、心の内側に留めておこう。

「いえ……私、応援ぐらいしかできない、ので……」

「応援してくれる誰かがいるってだけで戦えるのよ。だからマフユ。マフユがいてくれるだけで、嬉しいものなの。ついでにユウヤもね」

「俺はおまけかなんかかよ」

「付け合わせのミックスベジタブルみたいなの？」

「この野郎」

誰が羨びたフライドポテトだ。

冗談はともかくとして、互いにこうして一回戦を、事実上の準々決勝は勝ち抜いたのだから、残るは準決勝と決勝だけだ。

ライブモニターには、ちょうどDブロックの試合が映し出されている。

リンファ。劉凜風。多分だけど、チナツが次に当たるのはあいつになるはずだ。

ストライクフリーダムガンダムとにかく武装を盛りまくったその機体が放った超火力のビームを、ちょうどさっきのクロスボーンガンダムがやっていたように、背面に装備された四基の増加ブースターを利用したマニューバで巧みに躲してみせる。

そして、クロスレンジに飛び込んだリンファのズイーンワンが、得意の八極拳——鉄山靠で、ストライクフリーダムのカスタムモデル

を、武舞台へと叩き落とす。

「多分だけど、お前が次に当たるのはリンファ……あのリボーンズガンダムのカスタムモデルだぜ、チナツ」

「ええ、多分アンタの見立てで合ってるわよ、ユウヤ。ふん……拳法家ってことは、いいウォーミングアップになるわね」

「……油断して勝てる相手じゃねえぞ」

「……わかってるわよ」

リンファは強い。言動はともかくとして、武道家としての腕前だけなら一流の更に上を行くレベルの相手だ。

だからこそ、俺は釘を刺す意味でも、あえて強くそう断言していた。

チナツは勝ち気な態度を崩さず、胸を支えるように腕を組む。それでも、その背筋は武者震いなのか、微かに震えていた。

「忠告は受け止めておくわ。でも、アンタこそ、次の対戦相手の試合とが見なくていいわけ？」

「俺の次の相手？ ああ……そうだな、見ておかないとな。ありがとう、チナツ」

「相変わらず抜けてるわね。でもなんだか、アンタの顔見ると緊張してたのがバカらしくなってきたわ」

「どういう意味だよ？」

「別に。アンタがいつも通りで安心した……それだけよ」

チナツはふと、マフユに浮かべてみせたような柔らかな笑顔を俺に向けてくる。

笑うと可愛いんだよな。つまりその、なんだ。そういう笑顔に向けてくるのって、反則だろ。

俺がいつも通りで安心した、か。自分のことを二の次にしちまう悪い癖だと思ってたけど、チナツがそう言ってくれたんなら、案外悪いもんでもないのかもしれない。

なんてことを、頭の片隅に浮かべて苦笑していると、軍服の裾を引かれたような感覚がした。

振り向いてみれば、マフユが少し不機嫌そうな表情で、眦に涙を浮かべながら頬を膨らませている姿がある。どうしたんだ、急に？

「……なあ俺、なんかやつちまったのか、マフユ？」

「……ううん」

「じゃあなんでそんな顔を……」

「別に……なんでもない、よ……」

なんでもなくはなさそうなんだけどな。

相変わらず俺の裾を袖の余った服に包まれた小さな手で引きながら、マフユは頬を膨らませる。

「アンタってそういうところよね……」

「なんだよ、チナツ？」

「別に。その……マフユ」

「……」

「アタシはいつだって、なんだって、負けてやる気はないからね！」

そう言って、チナツは踵を返すと、ライブモニターに映し出されているリンファの試合に視線を向け直した。

なんでマフユに宣戦布告じみたことをしてるんだ、こいつ？

ますます訳がわからないこの状況、誰か説明できるもんなら説明してほしい。

「……私だって、負けないもん……」

マフユも何事かを小声で呟くと、今度は俺の左腕に両腕を絡めて、もたれかかってくる。

なんだろうな、突拍子もないことに走るのが女子の間ではブームだったりするんだろうか。

とりあえずは膨れっ面でもたれかかってきたマフユを受け止めながら、俺もまたライブモニターに視線を戻す。

『破ッ！』

『そんな、物理が効かないはずのVPS装甲なのにー!?』

だけど、試合の方はもう決着がついてしまったようだった。

発動を叩き込まれたストライクフリーダムのカスタムモデルの腹部が大きく凹んで、ひしゃげたところから爆発四散する。

相変わらず、馬鹿げた破壊力だ。

『き、決まりましたアー！ 本大会最速！ 最速での決着！ 突如と

して現れた超新星、リンファ選手の快進撃を止められるダイバーはお
るんか！ ワイもビビってまうほどの闘志が、全身から伝わってきよ
るで！』

啞然とするギャラリーの前に、当然だとばかりにリンファはストロ
ベリーブロンドの髪を優雅に掻き上げて、勝者の余裕を見せつける。

勝者の余裕、か。ともすればそれは慢心にも繋がる。だから。

負けるんじゃないぞ、チナツ。

EP. 34 「変幻のカール」

多分だけど、ジュアッグとジオングをベースにしたのかもしれない奇妙な外見をしたガンプラが、その両腕に装備されているロケットランチャーをぶっ放す。

直撃コースの弾だけをバルカンとジムライフルで迎撃した、ジムカラーに塗装されているジム・カスタムは、射撃を続けながらその奇妙なガンプラ——確か、ラピッドジュアングとかいう名前のやつに突撃していく。

『その色、その機体……君はかのライナー・チョマー氏をリスペクトしているな！』

『リスペクトも何も、僕の父さんだけどね』

『なんと……！ なら君を倒せば、事実上俺がドイツチャンプを倒したことになるな！』

『んー、そうかもしれないけど、随分余裕だね、君？』

『ふっ……可憐な乙女の手前、鮮やかな勝利を手にしてみせるさ！』

そしてダイバーたちに知らしめるのだ、無改造こそ、最もバランスが整った至高のビルドだと！』

チナツに言われた通り、あの後ログアウトしてから俺はG—T u b eのアーカイブに残っていたBブロックの試合を見ていたわけだけど、なんといかどっちもこだわりが強いダイバーだった。

確か、対戦カードには「カール」と「ヤマモト」って書いてあったな。

あのラピッドジュアングを使ってる女の子がカールさんだったはずだから、無改造のジム・カスタムを使ってるのがヤマモトさんか。

GBNには、当たり前前だけどカスタムモデルが多い。

それもそのはずだ。いわゆる「俺の考えた最強のガンダム、ガンプラ」で戦える場所こそが、GBNなのだから。

父さんたちが戦っていたGPDも細々と稼働してはいるらしいけど、完全に時代からは取り残されている——そんな話はともかくとして、ヤマモトさんはジムライフルを左手に持ち替えると、右手でビー

ムサーベルを引き抜いてラピッドジュアングへと斬りかかっていく。
『避けたか！』

『ははっ、遅い遅い！ このラピッドジュアングに……その機体で、ついでこられるかな！』

『なんのツ！』

カールさんは小さく笑うと、ジム・ライフルによる弾幕を、巨体にも関わらず全て回避してみせると、今度はジュアツグの腕に搭載されているロケットランチャーから、ビームを撃ち出す。

「ジュアツグの腕からビーム!? そうか、内部で切り替え式になつてんのか……」

チナツに言われてアーカイブを見返してなかったら危なかった。俺も引つかかっていたかもしれない。

ヤマモトさんは俺と同じような驚愕を見せると、同時に機体の両腕が落とされていたことを理解して、屈辱なのか絶望なのかはわからなけれど、歯を食いしばっていた。

『まだだ……まだアツ！』

『バルカン砲かあ、頑張るなあ……でも、今度こそこれでチェックメイトだ！』

『ぬわあああアツ！』

マフユの家で前に見た「機動戦士ガンダムUC」の劇中で、ビームサーベルを防いでいたほどに頑強な砲身と一体化したジュアツグの腕が、空手チョップの要領でジム・カスタムのコックピットに叩きつけられる。

ヤマモトさんも諦めずに最後まで足掻いてたけど、カールさんが言ってたように、今度こそチェックメイトだ。

ジュアツグの腕に叩き潰されて、ジム・カスタムのコックピットがひしゃげて歪む。

『あ、そうそう。メイドの土産？ つてのに一つ教えてあげるけどさ』

『な、何を……』

『僕、男だからね？』

マジかよ。

試合を見ていた俺と、その言葉を突きつけられたヤマモト選手の表情は完全に一致していたかもしれない。

宇宙を背景にした猫のように驚愕が覚めやらないまま、Bブロックの試合は終わりを告げた。

「マジかー……」

なんとというか色んな意味で濃いな、あのカールさんってダイバーは。

ライナー・チョマーって名前に聞き覚えはないけど、ヤマモトさんがドイツチャンプがどうか言うてたし、多分有名な人なんだろう。

そして、それほどのファイターの息子と俺は拳を交えるってことになるわけだ。

「いいね……燃えてきた」

ベッドに寝転がったまま、右の拳を左の掌にぱしん、と強く打ち付ける。

明日の第二試合、準決勝戦。コドウとの戦いも熱く燃え上がるような戦いだったけど、それと並ぶものが期待できそうだ。

ふと机の上に視線をやれば、そこにはメンテナンスも終えて万全な状態のストライク焰が直立している。

アシムレイト。まだ、俺はその扉の前に立って、兆しを見ただけなのかもしれない。

だけど、俺自身がストライク焰になったようなあの感覚——コドウとの戦いの中、無我夢中でなんとか辿り着けたその兆しをモノにできたのなら、俺は、ストライク焰はもつと強くなれるはずだ。

「だから、明日もよろしくな、ストライク焰」

物言わぬ相棒に語りかけて、俺は部屋の電気を消した。

アーカイブを見てた都合上、早寝……とは行かなかつたけど、明日は早起き。俺は目を伏せて、眠りの淵に飛び込んでいく。

闇雲にただ長い時間研鑽を積み重ねるものではない。健康な睡眠は健康な心身の維持に繋がる。父さんの、師匠の教えを思い返しなごら。



『さあ始まりました、メガ粒子杯バトルカイ、準決勝戦！ 予選を勝ち抜いて選び抜かれた強豪たちが、超新星が、優勝目指して火花を散らす熱い試合が今日も皆を待ってまつせ！ 第一試合は次元霸王流の申し子、今尚快進撃が止まらない「ユウヤ」選手！ そして、かのドイツチャンプ、伝説の第七回、第八回ガン普拉バトル世界大会に出場を果たしたライナー・チョマー氏の血を継ぐまさかの男の娘！ その性別と戦い方も変幻自在、「カール」選手の対決でつせ！』

ミスターMSの前口上に、破れんばかりの歓声が沸き起こる。

性別はともかく、あのカールさんは常に相手の意表を突くような、変幻自在の戦いを得意にしているのは事実だ。

ロケットランチャーが来ると思わせておいてビーム。ジュアツグをベースにしているから、格闘戦はできないと思わせておいての砲身チョップ。

この戦いでも何が来るかはわからない。

俺も気を引き締めてかからないとな。

そう意気込んで拳を固め、操縦桿に手を掛け直したその時だった。

『君が「ユウヤ」君だね？ 会いたかったよ』

「確かに俺はユウヤだけど……カールさん、俺とどつかで会ったことありましたっけ？」

藪から棒にカールさんはそんなことを言ってきたけど、俺とあの人の間に因縁なんて特になかったはずだ。

コドウの時みたいに師匠との因縁かと思っただけど、ライナー・チョマーって人と師匠は戦ったことないらしいし、それも考えづらい。

なのになんでそんなことを、と、俺が首を傾げていると、カールさんは肩を竦めてふっ、と小さく笑う。

『カールでいいよ。君には……絶対に負けられないからね』

「おっ、宣戦布告か？ だったらこっちも受けて立つぜ！」

『いいね、張り合いがある……それでこそ、マフユちゃんを巡る僕のラ

イバルだ!』

「はっ。」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

カールと俺の間に因縁なんてないし、なんで今マフユの名前が出てくるんだ。

しかも勝手にライバルってことにされてるし。どういう理屈なんだよ。

『誤魔化さなくてもいいよ、何せ僕らはライバルだからね……! この戦いで君を圧倒して! 僕はマフユちゃんに勝利の栄光を捧げる!』

「なんだか知らねーけど……マフユがどう関係あるんだ?」

『ふふっ、とぼけちゃって……これ以上は戦いで語ろうか、ユウヤ!』

「……ああ、そうだな! カール!」

正直何がなんだかわからんけど、拳を交えればあいつの思いも伝わってくるはずだ。

ミスターMSが背後でニュータイプ of 修羅場がどうのこうのと宣っている間にも、システムのダイアログは立ち上がり、バトルの開始を告げていた。

『ガンプラバトルの鉄則は、初手で相手を翻弄すること!』

「くっ、出遅れたか!」

ジュアツグとジオングを合体させたような機体に更にシナンジュ・スタインのフレキシブル・スラスターを装備しているラピッドジュアングは、その名前に恥じない機動力で俺の背後に回り込もうと試みる。

けれど、速いってんならマフユのG-エク립ティカと、チナツのシックザールも負けてねえ。つまり何が言いたいかって、この後れは取り返せるってことだ!

『ロケットランチャーを喰らえ!』

「それなら昨日見切ってたよ!」

ヤマモトさんがそうしていたように、俺はビームピストルで直撃コースの弾だけを叩き落として、ピストルの下部からビーム刃を発振

する。

そして、そのままリーチを活かした攻撃で、ラピッドジュアングへと斬りかかっていく。

『残念だったね！ このラピッドジュアングは……ビームも撃てるのさ！』

「それだって、予習済みだ！」

直撃弾を叩き落として突っ込んできた相手を、ビームによる攻撃で叩き落とす二段構えの戦術。変幻自在の二つ名に相応しい捌め手だけど、チナツのおかげで命拾いした。

アーカイブを見てなきや、今頃俺もヤマモトさんと同じ末路を辿ってただろうからな。

機体を空中で宙返りさせてビームを回避、斬りかかるモーシオンをフェイントにして、俺はラピッドジュアングの背後を取る。

「後ろ、取ったぜ！」

『ちえっ、見切られてたか……！』

「喰らえええっ！」

ビームピストルの一撃をフレキシブル・スラスターに向けて撃ち込んで、プロペラントタンクを誘爆させる。

そうして武舞台に倒れ伏したラピッドジュアングに、俺は油断せずに、容赦せずに追撃を叩き込む。

「次元霸王流！ 聖槍蹴りいいっ！」

『ふっ……』

「なんだ!?!」

『流石だね、ユウヤ。マフユちゃんを巡る僕のライバルだ……だけど、君はジュアングという機体の本質を見誤っている！』

スラスターを潰せば立ち直るのは難しいだろうと判断しての攻撃だった。

だけど、カールは自信満々にそう言い放つと、聖槍蹴りの勢いに怯えることもなく、武舞台に倒れ伏しているラピッドジュアングの体勢を、瞬時に立て直していた。

そして、ハンドスプリングの要領で聖槍蹴りを回避すると、その後

隙を狙って腕からビームを発射してくる。

危ねえ。ビームシールドはなんとか間に合って命拾いしたけど、やられるところだった。

それにしたってどういう理屈であの状況から、姿勢を一瞬で立て直せたんだ。

「なんだ!? どういう……足!?!」

俺が脳裏に浮かべた疑問に対する答えだとばかりに、バックパックを損傷したラピッドジュアングは、武舞台の上に「立って」いた。

『ふふふ……ジュアング、パーフェクトモード! そう、この機体は変幻自在! 戦場を選ばずに戦える、オールラウンダーなのさ!』

水陸両用モビルスーツであるジュアングと、宇宙用のモビルスーツであるはずのジオングをミキシングする発想がどこから出てきたのかはわからない。理論的には混ぜれば確かにオールラウンダーだ。

だけど、俺はカールの言う通り、ただ飛行スキルのおかげで地上戦ができてるもんだと、確かにあのガンプラの奇天烈な見た目に惑わされて、本質を見誤っていた。

あの機体は自前で宇宙戦、陸戦、水中戦をこなせるように設計された、極めて洗練されたガンプラなのだ。見た目こそネタっぽいけど。

『さあ終わりだ! メガ粒子砲に焼かれて焰の華と散るがいい、僕のライバル!』

「まだまだ……まだお前とは拳を交えてなかったな! 油断してた、慢心してた! 認める! だから、今度は全力でぶん殴る! バーニングバーストシステム、起動!」

メガ粒子砲の威力に押されそうになっていた形勢を逆転させるように、バーニングバーストシステムを発動させたことで、展開していたビームシールドが炎のように揺らぎを纏う。

そのままカールの攻撃を防ぎ切った俺はビームピストルを投棄、エールストライカーのスラスターを全開にして、ラピッドジュアングへと殴りかかる。

「次元霸王流! 疾風突き!」

『今の攻撃を受けても立ち上がるんだ、やるね!』

ガチガチに作り込まれたジュアツグの腕が、疾風突きを止めて火花を散らす。

元から威力よりもどつちかというスピードを重視した拳ではあったけど、バーニングバーストを使って尚止められる辺り、あのラピッドジュアングの作り込みは俺より遥か上を行っているのだろう。罅迫り合いを強引に振り解くと、足をスカートの中に収納して、ラピッドジュアングは飛び上がる。

『必殺技を披露してくれた君に敬意を表して……そしてライバルとしてこの一撃を捧げる！ 見ていてほしい、マフユちゃん！ これが僕の……思いの全力だ！ 必殺、ジュアング・フルバースト！』

「マフユは関係ねえだろうが！ カミキガン普拉流奥義！ 鳳凰霸王拳！」

なんでか知らないけど、こいつにマフユの名前を出されると妙にムカつくというか、なんか胸の辺りがもよもよとした感じになる。

それはそれとして、必殺技として強化されたビームの塊を迎撃するために、俺も機体の全出力を振り絞って、鳳凰霸王拳を放つ。

コドウの時と同じだ。カールの必殺技は、あの雪花氷獄鳥に匹敵する威力を持っている。

そして、認めたくはないけど、その拳からはマフユに対する思いが、確かに伝わってきた。

なんであいつがマフユに執着しているのかはわからない。そして、なんで俺がこんなことで苛立っているのかも同じだ。

だけど、絶対に負けたくねえって気持ちには、その気持ちにだけは偽りは無い。

「負ける……かよおおおっ!!!」

『負けられ、ないっ……!!!』

エネルギーの塊同士がぶつかり合って弾け飛ぶ衝撃の余波と、あまりの出力に耐えきれなくなったことで、ストライク焔の右腕が、あの時と同じく自壊していく。

それでも、ジュアング・フルバーストを相殺することはできている。だったら条件はイーブンだ。ここからは全力で殴り合う。

『なんていう力……僕のジュアング・フルバーストが誇るパワーと互角の一撃なんて、久しぶりに見た！ やっぱり君は僕のライバルだ、ユウヤ！』

「拳での強敵だったらいつでも歓迎してるぜ……けどな、マフユは関係ねえだろ、マフユは！」

『ふっ、まだとぼけるんだ……君はもうわかっているんじゃないかな？』

「なにっ!？」

『拳で語り合うファイターなら！ 武道家なら、いや、違う！ ガンプラファイターなのなら、君はわかっているはずだ！ マフユちゃんへの……思いを！』

過剰出力のビームで内部が焼け付いたのか、ラピッドジュアングは砲身を使った格闘戦に移行してくる。

一見やけっぱちに見えるけど、砲身が突き出されるリーチは拳よりも長い。

槍よりはリーチが短いとはいえ、得物を持った相手と戦ってるのと同じだ。

『はあっ!』

「次元霸王流！ 桜花紅蓮脚！」

油断せずに俺は左手でカールが放った空手チョップを受け止めつつ、ガラ空きの胴体に全力を込めて大上段への蹴りを叩き込む。

ラピッドジュアングの鼻……？ 鼻みたいなダクトパーツが砕け散り、辺りに破片を撒き散らしながら吹き飛んでいった。

「やるとまだ、カールは、ラピッドジュアングは勝利を諦めていない。『やるね……見ていてくれマフユちゃん！ これが僕の勇姿、例え最後になろうとも全力で戦い抜いてみせる！』

「いいねえ、その心意気……そういう心には、曇りのない心で応えなきゃな！」

「そうだ。マフユは今関係ない。」

俺ともあろう人間が、戦いの中で戦いを見失うところだった。

まだまだ己が武道家としては未熟なのだとか心に刻みながら、それで

も勝利を勝ち取るために、俺は残された左の拳に全力を込める。

『ジュアング・パーフェクトモード！ これで……：終わりだあああ
あっ!!』

「次元霸王流……波動裂帛拳！」

武舞台を殴りつけたことで発生した火柱が、飛び上がって砲身空手
チョップを叩きつけようとしてきたラピッドジュアングを呑み込み、
燃やし尽くしていく。

それでも勢いを止めなかったのは、カールの意地が、認めたくはな
いけど、マフユへの思いがそうさせたのだろう。

空手チョップが叩きつけられて、ストライク焔の左半身が歪む。そ
れでも。

揺らぐ炎の一欠片を、俺は視界の奥に、心の奥底に見た気がした。

コドウの時と同じ、全てを空っぽにした思考と、どこまでも深く、深
く心の海を潜っていくような感覚と共に、ストライク焔の痛みが、そ
して叫びが、確かに伝わってくる。

——俺はまだ頑張れる。だから負けるなよ、ユウヤ。

ストライク焔は、確かにそう叫んでいた。

そうだ、俺は負けられない。背負ってきたものがある。このGBN
でいっぱい教えてもらったことがある。そして、何より。

マフユに、ガンダムのこととガンプラのことを教えてもらった、恩
がある！

「次元霸王流、桜花紅蓮脚！」

『まだ動く……のかっ……!? ふっ……あくまでこの勝負は、僕の
……完敗だね……』

この勝負は、ってなんだ。この勝負はって。

僅かに消化不良感が残ることだけを言い残して、桜花紅蓮脚が直撃
したカールのラピッドジュアングが爆散する。

【Battle Ended!】

【Winner：ユウヤ】

勝負には勝ったのかもしれないけど、なんかすげー複雑な気分だっ
た。

Ep. 35 「駆け抜ける嵐」

全力は尽くしたはずなのに、微妙に不完全燃焼な準決勝戦を終えて、俺はセントラル・ロビーに帰還していた。

相変わらずギャラリーたちは試合の結果やら、カールがあの特徴で実は男だったことをがやがやと騒ぎ立てている。

チナツが戦う第二試合まではインターバルを挟むからまだ時間もあるから、とりあえず一息ぐらいはつけそうか。

俺は全身にのしかかる疲労感や、GBNではフィードバックが切つてあるはずである痛みのような感覚を吐き出すかのように、壁にもたれかかって溜息をつく。

「お疲れ様、おめでとう、ユウヤ君……」

「マフユか、ありがとうな」

ブロックノイズが集まって、テクスチャが再構成されるようなエフェクトと共に、控えめな笑顔を浮かべているマフユが、俺の隣に現れる。

フレンドワープだ。チナツに教えられたから覚えてはいるけど、なんだかんだいつもは待ち合わせ場所で合流してるから、なんだか新鮮な感覚だった。

マフユは俺の隣で壁にもたれかかると、柔らかくはにかんだまま、視線をこっちに向けてくる。

「次は決勝戦だ、ね……」

「ああ……チナツとガチで戦うことになる」

準決勝戦第二試合の結果次第とはいえ、あいつだったたらリンファを倒して勝ち上がってくれよう。

マフユの言葉にそう返して、俺は気を引き締めるように拳を固める。

心配がないかと訊かれて、首を縦に振れば嘘になる。確かにチナツは強い。だけど、いくら強くたって「絶対」は存在しないのがガンブラバトルなのだ。

「……チナツさん……リンファさんに、勝てる、かな……?」

「勝つき、チナツだからな」

「そうだね……チナツさんだから」

あいつの気性の荒さとプライドの高さ、そして逆境を跳ね除ける強さは誰よりも近くで見えてきたつもりだ。

その誇りにかけて、ダイバーとして全力を尽くして、絶対にチナツなら勝利をもぎ取ってくれるだろうと信じた。

隣で何だかわからんけどもじもじと恥じらう様子を見せていたマフユを横目に、押し寄せる疲労感や痛みの残滓に浸るかのようになり、目を伏せた、その瞬間だった。

「ふふふ……果たしてそう上手くいくものかな？」

「お前は……カール！」

「いかにも僕がカールだよ、ユウヤ！ 準決勝では辛酸を舐めさせられたけど、改めてここで決着をつけにきたのさ！」

まさかリアルファイトで決着でもつけようってのか。

突如として現れたカールが、何を仕掛けてこようと対応できるように構えを取る。このゲーム、一応ダイバー姿にも耐久値的なものは設定されてるからPKが可能といえれば可能なのだ。

まあ、やったところで「GBN―ガードフレーム」とかいう、運営のパトロール隊的なやつらが飛んできて最悪アカウント停止だろうけどな。

それでも拳で決着をつけようってんなら、応えてやるのが筋ってもんだろう。

身構えて、体に残された闘志を燃やし尽くすように俺は、いつでも次元霸王流の技を繰り出すイメージを固める。

「野蛮だなあ、暴力はいけないよ。ユウヤ」

「じゃあ何しにきたんだよ、お前は」

これ見よがしに肩を竦めて呆れた様子を見せるカールに、俺はとっぴあえず敵意は……あるんだろうけど、リアルファイトをする気はなさそうだと判断して構えを解く。

しかし、準決勝での雪辱を晴らしに来たってんなら他に何か用でもあるんだろうか。

訝るような俺の視線もどこ吹く風とばかりにカールは堂々と、野次馬たちの視線を一身に受けながらも歩き出し、そして。

「僕の答えはこれだ……マフユちゃん。惜しくも準決勝では敗れてしまったけど、僕の君への思いは確かに感じてくれたはずだ」

気障つたらしい仕草でドレスの隙間から一本の、花卉が水晶でできているようなバラを取り出すと、カールはマフユに跪くような仕草でそれを差し出す。

「そういやこいつ、マフユにご執心だったな。」

何やってんだこいつ、と呆れる気持ちと、なんだか胸の奥がもやもやするような気持ち半分半分、俺は唇を引き結んでカールを見遣る。

「だからマフユちゃん、君のために採取したこの薔薇に乗せて、君に僕の思いを伝えさせてほしい！僕は君のことが大好きだ！君を初めて日本で見かけたあの時から……一目惚れだった！」

言い切りやがったぞ、こいつ。

突然の愛の告白にギャラリーたちは黄色い悲鳴を上げて、俺とマフユ、そしてカールにセントラル・ロビー中の視線が集中する。

なんだろう、多分こういうのを針の筵っていうんだろうな。

「マジかよ、あいつ『クリスタルのバラ』を……!?!」

「実物を拝んだのは初めてだぜ……あのカール、本気も本気だ！」

「だがちょっと待ってほしい、男の娘と女の子の関係は百合と呼べるのか？」

「それは普通に百合じゃないんだよなあ……」

「ぐっ……それでも俺は男の娘と女の子の関係性を諦めない！」

すっかり置いてけぼりを食らった俺のことなど眼中にないとばかりに、野次馬たちはあれこれ好き勝手なことを騒ぎ立ててくれているけど、なんかもう好きにしてくれて感じて。

ひたすらげっそりしたような感覚と共に俺は肩を落として、本日二度目の溜息を零す。

「だけどもあ、あいつらの話を聞く限り、カールが差し出している「クリスタルのバラ」とやらは激レアアイテムで、それを惜しげもなく差

し出す辺り、あいつは本気なのだろう。

そう思うと、胸の奥とか胃の辺りがなんか知らんけどムカついてくる。

あいつが誰を好きになろうと、そしてマフユがその言葉にどう答えようと、それは本人たちの自由なはずなのに、なんなんだろうな、この感覚は。

そんな俺を差し置いて、立ち上がったカールは壁に左手を突くと、マフユを閉じ込めるようにアプローチをかける。

「さあ、聞かせてほしい。君の言葉を……僕の情熱にかけるそのたった一つの言葉を。恥ずかしがらなくなつていい、群衆はきつと僕たちを祝福してくれるさ！」

なんか知らんけどもう告白が成功した気になつてるぞ、こいつ。

悦に浸るカールと、困惑に目をぐるぐると回しているマフユを交互に見遣つて、俺はどうしたものかとばかりにやたらと集まつてきたギャラリーを一瞥する。

「カールは本気だぞ、そのままでもいいのか、少年！」

「これが……ニュータイプの修羅場か……！」

「さしもの次元霸王流も愛の前では形なしなのか……!?!」

見るんじやなかった。

相も変わらず好き勝手なことを囃し立てるやつらから視線を逸らして、俺は再び壁と自分の体でマフユを挟み込んでいるカールと、目をぐるぐると回しながら助けを求めるかのように周囲を忙しく見つめているマフユに向き直る。

それと、次元霸王流は関係ねえだろうがよ、次元霸王流は。

呆れる俺をよそに、カールは相変わらずぎらぎらと滾るその熱視線をマフユに注いでいた。

マフユの方も助けは得られないと覚悟を固めたのか、目をぐるぐると回したまま、どこか悲壮な覚悟をその目に込めて、錆びたブリキ人形のようにぎこちない動きでカールに向き直る。

「やつと視線を向けてくれたね……さあ、マフユちゃん！ 聞かせておくれ、僕の愛に応えるその言葉を！」

「……え、えつと、えつと、そ、その、その……ごめんなさい……っ！」
マフユはあまりの緊張に声を震わせ、目をきつく瞑りながらも、セントラル・ロビーに響き渡るような声でその一言を口に出す。

ギヤラリーたちが盛大にずっこける音と、ぴしりと、カールの中で何かかひび割れるような音が聞こえたような気がした。

なんとというか……なんだ、これ？ さつきまでもやもやしてたはずなのに、急に同情というかそんな感じの気持ち湧いてくる。

「そ、そそそそれはどういう意味かな、マフユちゃん？」

「わ、わわわ……私……もう、好きな人が……心に決めた人が、いるんです……っ！」

「はうあっ!？」

追撃のボデイブローを食らったかのようにカールが膝から崩れ落ちる。

マフユにも好きな人……というか、恋してる人がいるんだな。

それは自由なはずなのに、当たり前なはずなのに、どういうわけかカールにあれこれ言われてた時よりも、遥かにもやもやした気持ち俺の胸には湧き起こっていた。

一瞬カールから目を逸らしたマフユと視線が合った気がするけど、どことなく、なんとなく気まずい。

「ふ、ふふふ……」

「あ、あの……?」

「流石は僕のライバルと言っておこう、ユウヤ！ だけど僕は……諦めたわけじゃないんだからなああ！」

妙な捨て台詞を残して、カールは全力でセントラル・ロビーを走り去っていく。俺が何か関係でもあるのか？

準決勝戦の時もそうだったけど、なんとというか全体的に訳がわからないというか、嵐のようなやつだったな。

「あ、そうだ。一つ言い忘れてたよ」

「まだ言うことあったのかよ……」

目の幅涙を流しながらロビーを全力疾走してたかと思いきや、急に立ち止まって、カールはくるりと俺に向き直った。

ただ、さつきまでの失恋のショックはどこへやら、その眼差しはダイバーとしての、ファイターとしての真剣な輝きを宿している。

「どうやら、呆れ返っている場合じゃなさそうだ。」

「ユウヤ、これは君をライバルと認めての忠告だよ」

「忠告？」

「もし決勝戦をあの手ライク焰で戦うつもりだったら……君はあの機体の弱点に気付いた方がいいよ。あるいはもう気付いているのかもしれないけどね」

カールの言葉は揺さぶりでもなんでもなく、確かに忠告としての重みを持って胸の奥に響く。

弱点。あいつに改めて指摘されて、俺は準々決勝と準決勝、戦ってきた試合を思い返す。

俺自身の弱点を振り返るのであれば、きつと窮地に立たされた時にしか見えなかった「ストライク焰の視界」を会得することができていないことだろう。

だけど、ストライク焰そのものの弱点となれば、それは。

ブラッシュアップを経たことで、ストライク焰の完成度自体は上がっている。そのこと自体に間違いはない。

カールが言ったことを鑑みるのなら、それでもストライク焰には尚、欠陥があるということだ。

それを考えられる範囲で、思いつく範囲で挙げるとするなら。

カールが言ったようにそれは、わかり切っていたことなのかもしれない。

だとしても俺は、このメガ粒子杯をストライク焰で、俺だけのストライクで戦い抜くと、そう心に決めていているんだ。例えその欠陥に目を瞑ることなのだとしても。

「……ああ。だとしても俺は勝つ。ストライク焰で、勝ち抜いてみせるさー！」

「そのプライドも流石だよ、僕のライバル……でも、マフユちゃんを諦めるつもりはないんだからな！」

「往生際が悪いな……」

あれだけこつぴどく振られても一瞬で立ち直るその面の皮の厚さというか、メンタルの強さというかは俺も見習うべきなんだろうか。ちらりと視線をマフユに向ければ、ドン引きしたように、ぎこちない表情で固まっていた。

まあ、あれだけはつきりと振っておいてそんなことを宣われたんじゃあ無理もないだろう。誰だってそうする、俺だってそうする。

『さあ、インターバルも終わったところでメガ粒子杯バトルカイ、準決勝第二試合の始まりでっせ！』

俺とマフユの間に漂っていたどことなく気まずい空気を吹き飛ばすように、ミスターMSのマイクパフォーマンズが、ライブモニターを通してセントラル・ロビーに響き渡った。

第二試合。チナツとリンファの戦いが、始まろうとしている。

俺とマフユは視線を合わせると、モニター越しにもビリビリと伝わってくる緊張感に息を呑んだ。

「ユウヤ君……」

「ああ、大丈夫だ。チナツは勝つき」

「うん……」

マフユは祈るように目を閉じて、丈の余った袖に覆われている両手を組む。

不安なのは俺にもわかる。いかにチナツが強くなったって、リンファは一流の上を行くファイターだ。それだけは認めざるを得ない。

あのズイーロンワンも、有効射程が極端に短い八極拳の弱点を補うために、リンファのやり方に合わせて最適化されたガンプラだ。

どっちが勝ってもおかしくはない。

どっちが負けてもおかしくはない。

だとしても、負けるんじゃないぞ、チナツ。

さつきまで色恋沙汰に夢中だった群衆も、思わず静まり返って一様に息を呑むほどの緊張が漂う中で、システムが試合開始のゴングを鳴らす。

「八極拳の弱点はそのリーチの短さ……そしてそれを補うためにアンタは増加ブースターを使ってる！ だったら！」

『このリンファを前に策を弄したつもりかしら？ 残念だけど、リンファはその作戦ごと貴女を打ち砕く！』

「ほぎけっ！」

チナツのアストレイシックザールが、開幕から全力で飛ばしていくとばかりにエクストリームブラストモードを起動した。

開かれたデステイニーのウイングから放出される光の翼が無数の残像を作りながら、狭い武舞台の全てを活用するように、ズイーンワンを攪乱する。

エクストリームブラストモードの残像には、F91が積んでいる「質量を持った残像」と同じく相手の攻撃の誘導を切る効果があったはずだ。

リーチが短い八極拳に、更に狙いを絞らせないことで自分のアドバンテージを盤石にして速攻をかけるのが、どうやらチナツが選んだ作戦のようだった。

ビームライフルとロングビームライフルの弾幕が無数の残像の中から飛来して、ズイーンワンに襲いかかる。

更には、念には念をとばかりに、ビームの火線を回避した先を読んで投擲されたフラッシュエッジ2が、ズイーンワンの装甲を抉っていた。

『ふうん……少しは手応えがあるのね、いいわ！ このリンファ、全力で応えてあげる！』

「だったらその全力とやらを出し切る前にアンタを倒す！」

『いい闘志ね！ 四龍吼！』

リンファは痺れを切らしたのか、その言葉通りに本気を出したのか、フィン・ファングの代わりに増設された四基の増加スラスタに火を灯し、機動力で圧倒していたチナツのシックザールへと襲いかかる。

「嘘、速い……!?!」

『当然よ！ 破ッ！』

「ライフルがっ!?!」

今までは絶対にクロスレンジを取られないように立ち回ってきた

はずのチナツが、驚愕に目を見開く。

それほどまでに、一瞬の内に距離を詰めていたズイーロンワンが、挨拶がわりだとばかりにチナツが構えたロングビームライフルに発勁を叩き込む。

浸透した衝撃がバレルを伝ってウエポンラックに到達、発生した小爆発によって、チナツのアストレイシックザールはわずかに体勢を崩し、よろめいてしまった。

『その隙を見逃すリンファアではないわ!』

「ぐ……っ、ぬあああつ!!」

今度こそ終わりだとばかりに発勁の構えを取って上から襲いかかってきたリンファアの攻撃を、チナツは意地と根性で強引に機体を立て直すことで回避し、今度は自分の番だとばかりにズイーロンワンの背後を取る。

「負けらんないのよ……負けらんないのよ! 約束を果たすために、アイツと決勝で戦うために、こんなところで、アタシはあッ!」
そうしてガラ空きになった背中にビームライフルを叩き込もうとした、刹那。

ズイーロンワンの両手が逆方向に百八十度回転し、更に前腕がぐるりと回る。

まずい。ベースが1・5ガンダムでもリボーンズガンダムだとしても、あれは。

『このリンファアに捌め手を使わせるなんてね……認めるわチナツ!』

貴女は素晴らしい闘士よ!』

「きゃあああつ!」

「チナツっ!」

「チナツさん……っ!」

そこから放たれたエグナーウィップがシックザールのビームライフルと、本体を拘束して電撃を流す。

自分のやり方にガンプラを合わせるだけじゃなく、ガンプラそのものが持っているギミックの有効活用。少なくともリンファアは、その境地に至っているってことだ。

エグナーウィップの電撃を喰らったことでビームライフルが爆発し、チナツのアストレイシクザールはあえなく動きを止めてしまふ。

『名残惜しいけどこれでおしまい……破アツ！』

「まだよ、まだ負けられないんだから！ 次元霸王流！ 聖拳突きいッ！」

『貴女も次元霸王流を使うのね……なら、尚更負けられなくなった！』
強引にエグナーウィップを右手のパルマ・フィオキーナで引きちぎったチナツは、リンファが繰り出してきた発勁に合わせる形で、左の拳をカウンターとして繰り出していた。

その反応速度は俺も舌を巻くレベルだったけど、でも。

発勁が直撃したことで、チナツが左手で繰り出した聖拳突きはあえなく止められて、そこから浸透した衝撃が内部からシクザールの左腕を破壊していく。

「そんな……っ！」

『勝つのはこのリンファと中国武術！ 貴女とユウヤを倒して、リンファは世界にそれを知らしめる！』

「アイツを倒すのはアタシよ……それだけは、譲らない！ 譲るつもりは毛頭ない！」

発勁の後隙を狙うかのように、右手で対艦刀を引き抜いたチナツは、力任せにそれを振り下ろした。

「けどそれが悪あがきであることを、リンファが見抜いていないはずはないだろう。」

『噴ッ！』

「嘘……っ!?!」

四龍吼を巧みに操ったマニューバで姿勢を強引に立て直すと、リンファのズイーロンワンは白羽取りの要領でアロンドイトを挟み取り、へし折っていく。

そして、そのままガラ空きになったチナツの胴体に、今度こそ最後だどばかりにリンファの発勁が直撃した。

『破アアアッ！』

「嘘……アタシ、こんな……負けて……？」

【Battle Ended!】

【Winner:リンファ】

システム音声が告げたのは、そして俺たちが見届けたのは、チナツのアストレイシックザールが発勁によって粉々になっていく姿と、そして。

チナツが敗北を喫したという、俺たちにとっては悪夢のような事実だった。

Ep. 36 「託された願いを胸に」

『破アアアッ!』

『嘘……アタシ、こんな……負けて……?』

チナツの組み立てた作戦は間違っていないかった。リーチの短い八極拳を封じるために残像と機動力で攪乱し、遠距離攻撃で徹底的に攻めていく。

そして、それを実現できるだけのクオリティを、アストレイシックザールは持つていたはずだ。

それでも、上を行ったのはリンファとズイーロンワンだった。

全力で挑んだ勝負なら後悔はないというかもしれないけど、全力で挑んだからこそ、全身全霊をかけたからこそ、負けた時は悔しくなるのだ。

セントラル・ロビーに帰還してから、チナツは気丈に振る舞ってこそいたけど、あいつのことだから、きつと今頃塞ぎ込んでいるかもしれない。

メガ粒子杯準決勝戦を終えてのインターバル期間。俺は何度もチナツとリンファの戦いをアーカイブで見返しながら、やるせない気持ちを抱いていた。

チナツからの連絡はない。

GBNにもログインしてみたけど、通知を切っているのか本当にログインしてないのかはわからないけど、フレンド欄から辿ったログイン情報では、あいつのアクティビティは沈黙したままだった。

この程度のことと落ち込むようなタマじゃないのかもしれないけど、チナツは意外と繊細なところがあるから、心配といえば心配だ。

「なんだかなあ……」

一応ユウマさんとミライさんに話を聞いてみようとはしたけど、チナツから口止めされてるのか、教えてくれなかったし。

そんな具合に薄らぼんやりとインターバル期間を特にやることもなく過ごしていた時だった。

ぴこん、と間抜けな音を立ててスマートフォンが何かしらの通知を

受ける。

「なんだ、バイトの指名……って、マフユか」

確認してみればそれは、マフユから入ったバイトの指名だった。

バイトの方はメガ粒子杯で最近ご無沙汰だったし、存在を完全に忘れかけてた。慌てて外行きの服に着替えて、部屋を飛び出していく。

携帯用のポーチにストライク焔を詰めていくことも忘れない。

このポーチ、元はGPD時代に作られた公式グッズで父さんのお下がりで。

最初は俺だけのガンプラが完成した嬉しさから持ち歩いてたけど、ここ最近は何となく、父さんから受けたアシムレイトの教えに少しでも近づけるんじゃないかと思って、ストライク焔を肌身離さず持ち運んでいる。

気休めかもしれないけど、鰯の頭も信心から、ってやつだ。

「あらユウヤ、お出かけ？」

「ちよつとバイトでマフユの家まで！」

「行つてらっしゃい！」

廊下ですれ違つた母さんに手短かに用件を告げてザックを背負い、俺は軒先に停めてある自転車に飛び乗った。

チナツのことが気がかりにならないかといわれてそうだと答えれば嘘になるけど、何をやつても梨の礫だったし、今はまず、頼まれた仕事を優先しないとな。



インターフォンでマフユを呼ぶと、俺は相変わらずデカイ門を潜つて豪邸の敷地に入る。

家がこんなにデカイのに、マフユが頼んでるのはいつも通りのハンバーガーセットで、案外庶民的だ。

まあ誰が何を食つてようと当人の勝手だから、突っ込むだけ野暮つてもんだけど。

俺は普段と同じ場所に自転車を止めて、玄関先にも設置されている

インターフォンを押して、マフユが出てくるのを待つ。

「ごめんね、ユウヤ君……遅くなっちゃって」

「ああいや、俺は大丈夫だぜ」

マフユの格好はいつもと変わらない、袖の余ったゴスロリドレスに、フリルがあしらわれた黒のカチューシャを頭に乗せて、白いボンで髪の毛をお嬢様結びにしているものだったけど、今日ほどことな
く雰囲気が違うような感じがした。

「マフユ、もしかしてイメチェンしたか？」

具体的に何がどう違うのかと訊かれると答えに困るけど、なんとなくかただでさえ可愛らしい童顔が際立っている……ように見える。

なんともなしに問いかけてみたら、マフユは何故か頬を赤らめて、何度も縦に首を振り続けていた。

「う、うん……！ よくわかった、ね……？」

「なんていうかその……雰囲気微妙に違った気がする」

マフユの長くて綺麗な黒髪は腰まで届くほだけけど、手入れは行き届いてこそいてもそれを切った形跡は見当たらないし、じゃあどこが変わったんだって感じはする。

でも、確実にこう、纏うオーラというか漂う感じというか、そういう曖昧なものが変わっていた気がするのだ。

「……えへへ。お母さんにお化粧教えてもらって、ちよつと試してみたの」

「なるほど、化粧か！」

それは盲点だった。

確かによく見れば白い肌を引き立てるようにファンデーション……？ とかそういうのが乗せられてるし、唇だって多分色付きのリップか何かで彩られている。

母さんも大概若々しく見える童顔だけど、どっちかというと血色がよく見えるように化粧をしているのに対して、マフユはその肌の白さが際立つような化粧をしているのは、なんか対照的だな。

「あ、あれ……？ 気付いてなかった……？」

「いや、なんか違うなーとは思ってたけど具体的にどこが、って言われ

ると」

「……そっか……」

「だってマフユ、化粧しなくても可愛いだろ？ でも化粧したらまた違って見えてくるから凄いな！」

化粧とかスキンケアとかそういうのは生憎だけど俺にはさっぱりだ。それでも、チナツや母さんが日頃から気にしてたりする辺り、女子にとっては外せないことなのだろう。

マフユはそういうのがなくても十分に美人というか美少女というか、そういうカテゴリーに入るのかもしれない。

だけど、化粧をしたら今度はまた違った綺麗さが引き立てられてるんだから女の子ってのは不思議なもんだ。

「……か、可愛い……えへへ、そっか……なら良かった、な……」

「ごめんな、すぐにわかってやれなくて」

「ううん、大丈夫。ユウヤ君に、その……可愛い、って言ってもらっただけで、嬉しい、から……」

なんだか背中がむずむずする言い回しだ。

でもまあ、喜んでくれたんならそれに越したことはない。

俺は背負っているザックを下ろしていつものハンバーガーセットをマフユに手渡すと、手招かれるまま、いつも通りにリビングルームへと上がっていた。

「今、飲み物と……そ、その……お腹減って、る……？」

「確かに腹は減ってるけど」

そういやチナツとリンファの戦いを俺なりに分析することに夢中で、昼飯食べるの忘れてたな。

しかしなんで腹が減ってるかなんて、訊いてくるんだ、と、俺が首を傾げて頭上にクエスチョンマークを浮かべていると、マフユはぱあつと笑顔を輝かせて、言葉を続ける。

「よかった……じゃなくて、その……私、お昼ご飯作ってみたから、食べてくれ、る……？」

「お、おう」

「えへへ……それじゃ、持ってくるから、ね……」

昼飯自前で作ったのに出前頼んだのか？

なんてことを問いかけるよりも先に、マフユはどこか浮かれた様子でぱたぱたと台所の方に駆け出していく。

うーん、女子つてのは謎の生き物だ。自炊できるけどめんどくさいから出前頼んでるってんならわかるけど、自前で飯作ってから出前頼むパターンには人生で初めて遭遇した気がする。

「えっとね、これ……よければ、いっぱい食べて、ね……？」

「サンドイッチか！　ありがとな、マフユ！」

「……えへへ」

まあでも、腹減ってる時にちやうど食事をもらえるってのは、理由は謎だとしてもありがたいことだ。

クラブハウスサンドが乗った皿と、コップに注がれたコーラをマフユは俺の前に差し出すと、自分は頼んだハンバーガーセットをもきゅもきゅと、小鳥のように啄む。

俺の方もご厚意に与るとして、楊枝でピン留めされているクラブハウスサンドにかぶりつく。

「……どう、かな？」

「……すげー美味しい！」

嘘じゃない。マフユのクラブハウスサンドは、思わずそう叫んでしまふぐらいの代物だ。

美味かった。マジでこれだけのクオリティで飯を作れるのに、なんでも出前を頼んでるのがますますわからなくなってくるレベルで美味かった。

もしやもしやと残りを頬張りながら、少しソースの味が濃くなってきた口の中をコーラでリセットする。うーん、美味しい。

「よかった……その、ユウヤ君のために、作ったから……」

「俺のために？」

「あ、えっとね、えっと、えっと、その……その……め、メガ粒子杯の決勝戦、頑張つてね、って……！」

おうむ返しに問いかけると、マフユは顔を真っ赤にして腕を振りながら、突然激励を飛ばしてくる。

なるほど、そういうことだったのか。

なら納得がいく。出前を頼んだのは俺を呼び出すためってことか。

「ありがとうな、マフユ」

「ど、どう、どう、どういたしまして……」

「それと、俺を呼びたいだけだったら今更だけど、わざわざ出前取らなくてもいいように連絡先交換しとかないか？」

GBNではフレンドワープとかがあるから不自由してなかったけど、よく考えたらリアルで連絡先を交換するの、すっかり忘れてたな。

真つ白なナプキンで手を拭くと、俺はポケットからスマートフォンを取り出して、連絡用アプリを起動、QRコードを表示する。

「えっと……いい、いいの？」

「いいもなにも、マフユなら大歓迎だぜ」

「そっか……その、ありがとう、ユウヤ君……」

マフユは眦に涙を浮かべながらそれを読み取って、連絡先の交換が成立する。

そんなに感動するほどのことでもないと思うんだけどな。

でも、不謹慎かもしれないけど、泣いてるマフユも可愛らしい。

「そういえばマフユ、あれからカールの野郎に絡まれてないか？」

あいつが突然諦めないとかどうとか言ってたことを思い出して、俺はふとマフユにそう問いかけていた。

GBNで過剰な粘着行為と認められればガードフレームが飛んでくるらしいから心配はないとしても、あいつがマフユに絡んでる姿を想像するのはどういいうわけかとかく癪だ。

「ううん、全然。だって、その……私、もう……心に決めた人が……好きな人がいる、から……」

「そっか、あいつもそこまで往生際は悪くなかったか」

なら良かった。マフユが心に決めた相手が誰なのかはわからないし、それを考えるともやもやするけど、誰を好きになってどんな恋をするかなんてのは相手の自由だ。

他人の幸せを祝いこそしても、妬む理由にはいけない。それは拳を曇らせることになるから。

師匠の教えだ。

「……にぶちん……」

「えっ?」

「……なんでもない、よ?」

何事かをぼそりと呟いたと思いきや、マフユは控えめな笑顔を浮かべてみせる。

——ユウヤ君はユウヤ君だな、って。

マフユがはにかみながら続けた言葉に俺は首を傾げる。俺は俺。当たり前のことだ。

俺は俺以外の何かになることなんて——

ふと、天啓のようなものが降りてきたのは、そんなことを思った瞬間だった。

そうか、俺は俺。ストライク焔はストライク焔。その二つが重なり合った時、本当にストライク焔のことを、俺と呼べるまで理解した時、きつと。

「ありがとうな、マフユ!」

「えっ……?」

「マフユのおかげで、俺、なんかわかってきた気がする! 父さんが……師匠が教えてくれたことが!」

真のアシムレイト、その境地に辿り着くための極意。それはきつと相手は相手だと理解した上で、心を重ね合わせることもなのかもしれない。

それは相手が物言わぬガンプラでも同じことだ。

ストライク焔のことを、もつと深く。自分のことを、もつと深く。窮地に追い込まれた時にそれができていたのは、危機からくる過集中がそうさせていたからだろう。

だから、いつでもその集中力を引き出せるようになる。それがインターバル中に、俺がやっておくべきことなんだ、きつと。

「俺、何をすればいいかわかった気がするんだ。だから改めてありがとうな、マフユ!」

丈の余った袖に包まれているマフユの手を取って、俺はもう一度礼

を言う。

「……うん。ユウヤ君の役に立てたなら……私も、嬉しいから、その……」

ありがとう。マフユも控えめにその言葉を口に出して、そつと何かをしまい込むように、そうでなければどこか呆れたようにはにかんで見せる。

俺は俺、か。

もう一度マフユの言葉を思い返して、こんな時にもガンプラとガンプラバトルのことを考えてしまう自分に苦笑したんだろうな、と振り返る。今度、ちゃんとした埋め合わせはしないとな。



その後はいつも通りにマフユと一緒に見てなかったガンダム作品を見て家に帰ったら、どういう理屈か、道着に着替えたチナツが、腕を組んで立っている姿があった。

「遅い」

「……俺、なんかお前と約束してたか?」

「してないわ、ただアンタに用があつてわざわざこんな格好してんだから、さつさと着替えて道場に来なさいよね!」

びしっと人差し指を突き立てて、チナツは道場の方に歩いていく。

道着を身につけてるってことは、そういうことなのか?

いつ以来かわからないけど、チナツから突きつけられた組み手の誘いを突っぱねるわけにもいかない以上、俺もまた急いで道着に着替えて、道場に足を踏み入れる。

「どういう風の吹き回しだ、チナツ?」

「メガ粒子杯の決勝戦、アンタが戦うのはアイツでしょ? なら、アタシだって……負けたかもしれないけど次元霸王流をやってたのよ、ちよつとは練習になると思わない?」

「……そういうことか。いつでもいいぜ、チナツ!」

でも、怪我だけはさせないようにしないと。

そんなことを考えている間にもチナツの鋭いハイキックが頬を掠めて、連携の後ろ蹴りが襲いかかってくる。

両腕を交差させてその一撃をガード、俺はカウンターとして、そのままチナツの体幹を崩すように足技を仕掛ける。

「今のがアイツの発勁だったら、アンタやられてたわよ！」

「ああ、そうだな！」

それを巧みに回避するとチナツは距離を取り直して、再び次元霸王流の構えをとった。

確かにチナツの言う通りだ。リンファの拳は一撃必殺、防ぐという概念が意味をなさない。

あるいはキョウウヤさんや、キョウスケさんぐらいに作り込まれたガンプラならできるのかもしれないけど、カールに指摘されたように、コドウとの戦いでわかったように、ストライク焔には弱点が——鳳凰霸王拳の出力に、根本的にはバーニングバーストシステムの最大出力に機体の強度が耐え切れていないというそれがある。

要するにまだまだ、俺のガンプラは、リンファと比べて未熟だということだ。

だからこそ、一発だつて食らつてやらないという自信を持たなければ、あいつが一発を打ち出す前にこつちが手数で圧倒しなければ、勝ちの目は恐らく気が遠くなるほど薄くなる。

そんな状況であいつに勝つのなら、こつちが使える手札は二枚。一つはさつきの手数、そして、もう一つは。

雑念を振り払い、心の海をどこまでも深く掻き分けて潜っていく。そうして俺は、そこに揺らぐ炎の一欠片を見る。

「次元霸王流！」

「っ、次元霸王流！」

『聖拳突き！』

俺の拳とチナツの拳がぶつかり合つて、骨が痺れるような感触が伝わってきた。現役を退いたとはいえ、まだまだチナツの拳は凄まじい。

そして、拳を通じて理解する。チナツが今、深い悲しみに包まれて

いることを。悔しくて悔しくて、仕方がないことを。

「……やっぱ、馬鹿力よね。アンタ」

「手加減抜きでやってくれって、チナツの拳がそう言った。だから全力で応じた」

「ふんっ……それでいいのよ。変に気遣いとか、同情とか、いらないんだから！ だから、その……」

——勝ちなさいよ、ユウヤ。

その一言を呟くと同時に、チナツが噛み締めていた薄い唇が震えて、噛み殺すことができなかった嗚咽が夕暮れの道場に響く。

「……頑張ったな、チナツ」

「バカあ……っ……！……ぐすっ……うええええ、んっ……！」

「俺は……お前の思いも背負ってあいつに、リンファに絶対に勝つ、だから」

——俺の胸でよければいくらでも貸す。

だから、その悲しみが晴れるまで、悔しさを飲み込めるまで、好きなだけ泣いていいんだ。

俺の言葉を聞いた途端にチナツの涙は絶え間なく溢れ出し、どうして、という悔しさと、俺と戦いたかったという思いの丈を、何度も何度も胸板にぽこぽこ軽く当てられる拳と共にぶつけてくる。

赤い夕陽が、西の空へと沈んでいく。

俺は夜の帳が下りるまでただ、チナツの思いを受け止めて、ここまですべて背負ってきたものを一つ一つ確かめるように、自分の覚悟を見つめ直していた。

EP. 37 「セルリアン」

インターバルが明けてのメガ粒子杯バトルカイ、決勝戦。ここまでやれるだけのことはやってきたつもりだ。

リンファの戦い方を俺なりに分析して、ストライク焰の微調整をして、チナツとの組み手で拳法家との間合いを体に覚えさせて。

そして、俺自身が。

決勝の舞台上がってきたリンファを一瞥し、俺はきつく拳を固める。

優雅にストロベリーブロンドの髪を掻き上げる仕草は、相も変わらず余裕綽々って感じだ。

だけど、あいつもあいつなりに気合を入れてきたのだろう。いつも着ている服じゃなくて、チャイナドレスに身を包んでいる。

「やっぱり決勝で会うことになったわね、ユウヤ」

「ああ……けどな、負けるつもりはないぜ」

「それはこちらと同じことよ。前にも言ったけど、勝つのはこのリンファと中国拳法。背負った歴史がアナタを倒す」

「背負ってきたものの重さなら、俺だって負けるつもりはねえ……次元霸王流だけじゃない、ここまで俺を連れてきてくれた全てに誓ってお前を倒す！」

俺をガン普拉バトルの道に連れてきてくれた師匠と母さんが、GBNを歩んだマフユとの日々が、トワさんが教えてくれた愛が、タイガーウルフさんやキョウヤさん、キョウスケさんが教えてくれた「高み」が、コドウとの激闘が、カールの思いが、そして、チナツの悔し涙が。

俺をここまで鍛え上げてくれた。ここまで連れてきてくれた。

まだまだ俺は未熟かもしれないけど、背負ってきたものから逃げ出すような真似はしない。

「これ以上言葉で語るのは無粋ね、拳で決着をつけましょ、ユウヤー！」
「ああ、リンファー！」

そのために負けられないというのなら、そこに言葉はいらない。

あとは俺とリンファのプライドをかけて、そしてその誇りを乗せたガンプラで、最後まで戦い抜くだけのことだ。

『両選手とも気合十分！ 泣いても笑っても最後のメガ粒子杯決勝戦、今ここに幕を開けまつせ！』

【Gunpla Battle SET READY……】

【Battle Start!】

ミスターMSのシャウトと同時にシステムが起動、ガンプラバトルの開始を告げる。

『行くわよズイローンワン！ 四龍吼、起動！』

「最初から全力で来るってんならこっちもそれで応えるだけだ！ 行くぜ、ストライク焰！ バーニングバーストシステムだ！」

先手を取ろうと背面の増加ブースターに点火したズイローンワンが懐に飛び込んでくるのを回避しつつ、俺もまたストライク焰のバーニングバーストシステムを起動させる。

バトルフィールドも狭く、遮蔽物もない以上、状況を利用するのも難しいこの勝負、出し惜しみをしている余裕はない。

俺がリンファを研究してきたように、リンファだって俺のことを研究してきたはずだ。

だったら、この場で相手の上に行くしか、全力を超えたその先を見せつけるしか、勝利への道はないと思っ正しい。

四龍吼を巧みに操って体勢を立て直したリンファは、再度八極拳の短いリーチを補うために機体を急加速させる。

その間合いはチナツのおかげで覚えていた。そして、チナツとの組み手で武道家相手との戦い方、間合いの測り方——要するに勘は取り戻してきた！

『破アツ！』

「次元霸王流、旋風竜巻蹴り！」

『くっ……このリンファに一撃当てるとは、やるわね、ユウヤ！』

「いいや、まだまだ！ 一撃で済ませるつもりなんかねえ……次元霸王流！ 弾丸破岩拳！」

旋風竜巻蹴りを喰らって体勢を崩したズイローンワンの胴体に、俺

は威力を重視した拳を叩き込む。

バーニングバーストと弾丸破岩拳の合わせ技でも、精々正面装甲が歪んで凹む程度に抑えている辺り、ズイーンワンの作り込みはガチだ。

でも、倒せない訳じゃない。拳を交えたことで、俺はそう確信していた。

体勢を崩したズイーンワンに、その隙を見逃すまいと、俺は連続しての攻撃を加える。

次元霸王流だけじゃない。今まで学んできた格闘技の技術を活かして、パンチとキックを絶え間なく、息をつかせる暇も与えずにただ拳を、脚をぶつけていく。

「おおおおっ！」

『くっ……やるわね、ユウヤ！』

「発勁は使わせねえ！ 次元霸王流……流星螺旋拳！」

サマーソルトキックが顎に直撃したことで大きな隙を晒したズイーンワンにトドメを刺すつもりで、俺は流星螺旋拳を放つていった。

バーニングバーストの炎と、パルマ・フィオキーナの光を纏った拳が回転し、激しく唸る。

一発の威力は聖拳突きに劣るかもしれないけど、その分流星螺旋拳は攻撃の速度と破壊力を相手に蓄積していくための技だ。

これで終わるとは思っていないからこそその、リンファの武道家としての腕を見込んだからこそその選択、そのつもりだった。でも。

『発勁を封じるために手数と距離でこのリンファを翻弄する……悪くない作戦ね！』

「なんだ!? 流星螺旋拳が止められて……いや、化勁か！」

『是！ ガンプラ流に……アレンジされてるけどね！』

放った流星螺旋拳を、ズイーンワンは両手を交差させて防いでいた。でも、それだけじゃない。

流星螺旋拳の回転を受け流すかのように、衝撃を殺すのに加えて、前腕を流星螺旋拳の回転とは逆方向に高速回転させることで、俺の攻

撃をいなしていたのだ。

やっぱり、冗談抜きに凄まじいファイターだ、リンファは。

なんて、感心している場合じゃない。

後隙の大きい技を凌がれたことで、攻撃の手番は相手に回ってしまつたといえる。

そして、そこから繰り出されるのは。

『破アアアアッ!』

「当たる、かよおおおっ!」

溜まっていた鬱憤を晴らすかのように放たれた全力の発勁が襲い掛かる。

なんとか胴体を逸らすことでコックピットへの直撃は避けられたものの、掠めただけで凄まじい衝撃が浸透し、パーツを、フレームを歪めていく。

掠めただけでこの威力だ、直撃していたらどうなっていたかわからない。

「ぐうううっ……!」

『まだよ! 四龍吼!』

武舞台へと落下していくストライク焰を追撃するように、背面の増加ブースターを噴かしたズイーンワンが発勁の構えを取って襲いかかってくる。

冗談じゃねえ、こんなところでやられてたまるか。

こつちもエールストライカーのスラスターを全力噴射、急制動で機体を立て直し、リンファの発勁を寸前で回避する。

『不敢相信……避けた!?! あの体勢から!?!』

「胴体が……ガラ空きなんだよ!」

『きやあっ!』

そのまま勢いを利用した回し蹴りを放って、今度は逆にリンファが武舞台へと墜落していく。

俺の番が回ってきたってことだ。

だけど、クロスレンジに飛び込めば発勁が飛んでくる可能性もある。流星螺旋拳を凌がれたように、化勁で衝撃を殺してくる可能性

だつてある。

なら、俺の選択はこれだ。

目を伏せて、心の奥の奥、海の底深くまで潜っていくイメージを抱きながら、それ以外の全てを、雑念を切り離して、瞳の奥に揺らぐ炎の一欠片を見る。

アシムレイトの兆し。俺が使える最後の手札にして、全力の証。

「次元霸王流！ 波動裂帛拳！」

その瞬間だけストライク焰と一体化したような感覚と共に、俺は武舞台を殴りつけて、そこを起点にバーニングバーストの炎をぶつけるかのように火柱を立てる。

燃え盛る火炎は、四龍吼を操ることで墜落を紙一重で阻止することに手一杯だったズイーンワンを呑み込んで、燃やし尽くす。

『ぐ……ぬっ……！』

リンファは化勁の要領で前腕を回転させることで威力を少しでも削ぎ落とそうとしているようだけど、だったら。

「バーニングバーストシステム、最大出力だ！」

『このリンファが……こんなところで、やられるわけには……いかないのよー！』

「おおおっ！ そのまま、沈めええっ！」

バーニングバーストシステムの最大出力を引き出すことで、右腕が痺れるような感覚が、そうじゃなければ無理やり引き抜かれそうな感覚が、ストライク焰から伝わってくる。

過剰なエネルギーに機体が耐え切れていない——カールのいう「弱点」が、まだ兆しの状態とはいえアシムレイトを行っている状態でははつきりとわかる。わかっってしまう。

だとしても、俺だつてここで負けるわけにはいかないんだ。お前だつてそうだろ、ストライク焰。

相棒に、もう一人の俺とでもいうべき分身に激励を送って、右腕の痛み能耐えながらも、バーニングバーストシステムの最大出力を超えたその先へと踏み込む。

限界を超えた百二十パーセントの領域までその出力を引き上げ、火

柱が荒れ狂う炎の奔流と化した、刹那。

『嘖ッ……！』

「なんだ!？」

波動裂帛拳の炎に呑み込まれて焼き尽くされたと思っていたズイーロンワンが、炎の奔流を斬り裂いて、中からその姿を現す。

流星に無事とはいかなかったようで、装甲の各部が溶け落ちているものの、四肢は健在でメインカメラも生きていた。

バーニングバーストのその先を、アシムレイトの兆しを、持てる全てを引き出して使ったのに、何故。

『やるわね、ユウヤ! このリンファに真の全力を……奥の奥の手まで使わせるなんて! 認めるわ、次元霸王流。認めるわ、ユウヤ! アナタを闘士と見込んで、リンファは全てを出し尽くす! トランザム!』

驚愕する俺へと、答え合わせをするかのようにリンファが言い放つと同時に、ズイーロンワンの装甲が赤熱化する。

トランザムシステム。と、いうことは、チナツとの戦いで使ってたエグナーウィップも鑑みるに、ベースはリボーンズガンダムの方だったのか。

なんて、呆けている暇はない。

さつきまでとは比べ物にならない速度でズイーロンワンが空中に急上昇、ストライク焔に肉薄し、当て身を喰らわせてくる。

ストライクフリーダムのカスタムモデルと戦ってた時に使ってた鉄山靠だ。

集中力が途切れてしまったことで、見えていたはずの揺らぐ炎の一片は、そのイメージは脳内から掻き消えてしまう。

「クソッ……!」

『さつきより動きが鈍くなった? トランザムまで使わせただから……このリンファを失望させないでよね、ユウヤあつ!』

「まだまだ……勝負はこっからだぜ!」

強がりでにつこりと笑ってみせたのはいいけど、こっちは手札を使い尽くした状態だ。

武舞台に投棄したビームピストルのうち、無事だった一丁を拾い上げて機体を上昇、連射するけど、反応速度が圧倒的に上がっているズイーンワンの前では焼け石に水だった。

腰から引き抜いた青龍刀でビームを切り刻みながら、そのままリンファはストライク焔へと機体を肉薄させて、流れるような剣撃を放つ。

『強がるのね……でも、今度こそアナタに勝ち目はない！ズイーンワンの攻撃、その状態のストライク焔で受け切れるかしら!?!』

「できるかどうかじゃねえ、やるんだよ!」

『なら、行動で示してみせなさい!』

振り下ろされた青龍刀は展開したビームシールドを斬り裂いた。

だけど、そこで多少勢いが殺されたのか、その刃は俺の両手に挟まれて、コックピットに直撃する寸前で止まっている。

ストライクフリーダムがデステイニーに対してやったのを見様見真似した白刃取りだ。バーニングバーストの補助がなければ、コックピットが切り裂かれていたかもしれないと、冷や汗が滲む。

「ふんっ!」

『くっ……よくも!』

とはいえ、止められたことは事実だ。

青龍刀の刃をへし折って、俺はリンファが放ってきた蹴りを膝でガード、そのまま武舞台に脚を振り下ろすことで見様見真似の震脚を披露する。

タイガーウルフさんがやっていた技だ。これで相手の動きは一瞬止まる。

「次元霸王流!」

『ちよこぎいな! それなら!』

「悪りーけどな、それはチナツとの戦いで見切ってたんだよ! 聖拳……突きいいいッ!」

リンファはぐらつく機体を制御しつつ前腕を回転、そこからエグナーウィップを射出してきたけど、それなら織り込み済みだ。

最低限のマニューバでエグナーウィップを回避、そのまま勢いに

乗って聖拳突きを叩き込もうとした、その瞬間だった。

何か強烈に嫌な予感が背筋を撫でる。

何かを見落としているような、見当違いな考えを抱いてしまったかのような違和感。

——今、エグナーウィップはどっちの腕から射出された？

その答えは左だ。つまり。

『わざわざやられに来てくれるとは、殊勝な心がけね！』

「しまっ……」

『破アアアッ!!』

カウンターとして放たれたリンファの発勁と、俺の聖拳突きがぶつかり合って激しい火花を散らす。

だけど、リンファが使っている発勁という技の性質は、その威力の本質は外側にあるわけじゃない。むしろ。

答えを示すようにストライク焔の右腕がひび割れ、砕けていく。俺の次元霸王流でも、俺の力でも、あの発勁を真正面から潰すことはできないのか。

絶望と共に吹き飛ばされたストライク焔が、武舞台に背中から叩きつけられる。

ダメなのか。俺の全力を出しても、百二十パーセントの力を出し切っても、こいつに、リンファに勝つことはできないのか。

一番嫌いな「諦め」が脳裏をよぎるほどに、操縦桿を握る手が思わず緩んでしまうほどに、リンファは強かった。「高み」に近づいているとさえいつてもいい。

「俺は……負けるのか、ストライク焔？」

あれだけの思いを背負ってきて、次元霸王流の看板を背負って、そして、探し続けていた「答え」の意味もわからないまま、ここで敗れて朽ちていくのか？

ストライク焔は答ええない。ただ一瞬が永遠にも感じられるような沈黙の中を揺蕩っているだけだ。

全力を尽くして負けるのなら、それは恥などではない。己を燃やして戦ったのであれば、どのような結果であれ悔いはない——師匠の言

葉が脳裏をよぎる。

いや、違う。師匠だって、父さんだってファイターだったんなら、わかってるはずだ。

全力を尽くして負けることがどれだけ悔しいか、死力を尽くして尚届かなかった時の絶望が、どれだけ凄まじいものなのか。

きっと、父さんは、師匠は、それを乗り越えろと、その悔しさと絶望を後悔に費やすのではなく、バネにして飛び上がれとっているのだろう。

だとしても、負けられない。

俺はこんなところで負けたくない。俺にとつての強さの意味を知るために？ 違う。その答えなら、もうきつと、とっくに出ているはずなんだ。

俺にとつての——強さ。それは。

いくつもの言葉が、いくつもの縁に恵まれた記憶が脳裏をよぎる。コドウから託された誇りが、チナツが流した悔し涙が、そして、どんな時でも俺のことを応援してくれていたマフユの笑顔が。

——ユウヤ君は、ユウヤ君だなんて。

そうだ、マフユ。俺は俺だ。

そして、ストライク焰はストライク焰だ。

だから俺は、ストライク焰の痛みを、言葉こそなくても、確かに今も上げ続けている叫びを聞かなければいけない。

痛い。苦しい。もう限界だ。

胸に手を当てれば、伝わってくる。どれだけストライク焰が痛い思いをしてきたのか、リンファの攻撃がどれだけ苛烈で、そして俺がどこまで未熟だったかが、嫌というほどに。

だけど、その未熟さや痛みも含めて俺なんだ。だから、お前の痛みを俺に分けてくれ。

お前の叫びを、痛くて苦しくて仕方なくても、決して諦めたりなんかしない、今だって、「それでも勝ちたい」と叫び続けているその魂を！

『目を閉じるなんて、やられる覚悟ができたってことかしら！』

「俺たちに限界は……ない！」

目を閉じたその先に、心の海を深くかき分けたその果てに見えたものは、揺らぐ炎の一欠片。

そこから道標を辿るかのように炎の中に飛び込めば、俺の視界を焼き尽くすかのように燃え上がる太陽が心の中に浮かび上がる。

「俺は俺だ……お前はお前だ！ けどこの時だけは、俺はお前で、お前は俺なんだ、ストライク焰！」

『何を訳のわからないことを……破アアアアッ！』

「見えた！ 赫く輝く太陽が！」

『な……ッ!?!』

必殺の発勁を直撃寸前で回避されたリンファの表情が、驚愕に歪む。

そして俺にははつきりと、モニター越しじゃなくて肉眼で、ズイーンワンが体勢を立て直そうとしている兆しが見えていた。

「させるかよー！」

『ぐっ……きやあああっ！』

膝蹴りを腹部に叩き込んでズイーンワンを吹き飛ばし、俺は、ストライク焰は次元霸王流の構えを取る。

右手が砕け散った今、使えるのは左の拳と足技だけ。だとしても、問題はない。

そして、全身を刺すような痛みが、右腕を引きちぎられたかのような激痛が、さっきよりもはつきりと、仮想であるはずの身体にも伝わってくる。

これがお前の感じていた痛みなのか、ストライク焰。だとしても、ここまですぐ戦ってくれた。ありがとう。本当にありがとう。

だから、もう少しだけ俺の無茶に付き合ってくれ、相棒。

モニターを取り払ったようにクリアな視界に捉えたズイーンワンに向けて、俺は全力でスラスターを噴射して肉薄していく。

『考えなしにクロスレンジへ飛び込んできたところ……ッ!?!』

「次元霸王流……ッ！」

俺の、俺にとっての「強さ」の意味。

それをこのGBNで追い求める理由は。

「憧れに近づいたためだけじゃねえ……俺の歩んだ道が、結んできた縁が、皆がいてくれる絆が、このGBNで過ごす皆との時間が、俺の求める『強さ』の理由だあああッ!!! 聖拳……突きいいッ!!!」

『絶対王者とは孤独なもの！ 馴れ合うだけでは強くはなれない！

孤高に、孤独に、誇り高く飢え続ける！ それこそがリンファが歩む王座への道よ！ 破アアアッ!!!』

この際、どっちが正解かなんてことはどうでもいい。

やつと、やつと見つけたんだ。俺の理由を、俺だけの「強さ」の意味を。それはずつと一緒にくれたチナツとマフユが、出会ってきた皆が、そしてストライク焰が教えてくれたことだ。

だから、どれだけリンファが重い覚悟と理由を背負ってこの武舞台に立っているとしても、ここで倒れてやるわけにはいかねえよなあ！

『そんな、反応速度がさつきまでとは……ッ!?!』

「喰らえええッ!!!」

ズイーンワンを上回る反応速度で懐に飛び込んだ俺は、発勁を打たれる前に、そのコックピットにバーニングバーストシステムの炎と、パルマ・フィオキーナの光を纏った全力の聖拳突きを叩き込んだ。ぴしり、とひび割れる音を立てて、ズイーンワンが砕け散っていく。

『それでもおッ!!!』

最後の力を振り絞って放たれた全力の発勁が頭部に直撃しようとしていた、その瞬間だった。

ひび割れたリンファの拳が砕け散り、肘のところに装着されているGNドライブが爆発を起こす。

もう、ズイーンワンに戦う力は残されていない。それを証明するように拳が直撃したところを起点に爆炎が巻き起こり、その機体が爆散する。

『嘘……この、リンファが……?』

「俺の……勝ちだ!」

【Battle Ended!】

【Winner：ユウヤ】

システム音声が、その言葉を示すかのように読み上げられた。極度の疲労に、痛みに倒れそうになりながらも、俺は唇の端を持ち上げて不敵に笑う。

果たしたぜ、約束を。そして見つけたぜ、俺の答えってやつを。

Ep. 38 「風を呼ぶ少女」

『き……決まったあああ！ 決まりました！ 熾烈なる決勝戦を制してメガ粒子杯バトルカイ、優勝の座を勝ち取ったのは次元霸王流の申し子、「ユウヤ」選手でっせ！』

約束は果たしたぜ、コドウ。仇はとったぜ、チナツ。

全身を蝕む疲労感と痛みに、強制ログアウト措置が働きそうなレベルの眠気。あの時、無我夢中で発動した真のアシムレイト——兆しを乗り越えたその先にあるものの反動だろう。

だけど、俺は勝った。その喜びと約束を果たしたという達成感だけが今、この仮想の身体を支えていた。

「負けたのは悔しいけど……おめでどう、ユウヤ」

「リンファ……ああ、ありがどうな」

「次元霸王流……このリンファ、歴史ばかりを見て、そこにある武術家たちの血と汗と涙を見てこなかった。きつとその時点で、歴史だけに胡座をかいて驕っていた時点で、闘士としては負けていたのね。一から研鑽を積んで出直してくるわ」

だから、次こそは負けないんだから。

リンファはそう言い残して握手を交わすと、ブロックノイズ状に解けてセントラル・ロビーへと帰還していく。

「何度でも来いよ、リンファ。お前の純粋なその気持ち……闘士でありたい、王者でありたいって気持ちに、いつだって俺は全力で応えてやる！」

「……謝謝。それじゃあね、ユウヤ」

とはいえ、この勝利もまた紙一重だった。

マフユがあの時何気なくかけてくれた言葉がなければきつと俺は真のアシムレイトに辿り着くことなんてできなかったし、コドウやチナツから思いを託されていなければ、ここまで踏ん張ることもできなかったかもしれない。

俺の中で見出した「強さ」の意味と、リンファが掲げている「強さ」の意味は大きく違う。それでもきつと、どの道を歩こうとも、ガンブ

ラバトルの楽しさと、相手への敬意だけは忘れちゃいけないと思う。

タイガーウルフさんが言っていたように、このメガ粒子杯バトルカ
イで俺は確かに自分なりに強さの意味を見つけ出せたかもしれない。
だけど、ここはゴールじゃない。あくまでもチャレンジャーとして
一步を踏み出すための、スタート地点なんだ。

果てしない頂点——アズサさんやキョウスケさん、そしてタイガー
ウルフさんやキョウヤさんのような「高み」に至るそのために、羽ば
たくために。そのための第一歩だ。

「いやー、優勝おめでとうございますわ、ユウヤ選手！ 早速ヒーロー
インタビュアーに入らせてもらいますけど、ズバリ！ あれだけの激闘
を制することができた秘訣っちゅーもんがあつたら是非ともお答え
くださいな」

歓声が鳴り止まない中、実況役と司会進行を務めていたミスターM
Sが武舞台に降り立って、俺にマイクを向けてくる。

ヒーローインタビュアーか。そんなこと言われても、正直何がなんだ
か無我夢中だったから、記憶が曖昧なところもある。

それでも、胸を張って答えよう。それが、勝った者に与えられる責
務なんだから。

「はい！ 俺が勝てた理由……それは、『トライダイバーズ』の皆や、G
BNで出会えた皆との縁があつたからに他なりません」

「なるほど、最後にモノを言ったのは縁の力……絆の力っちゅー訳で
すな。『トライダイバーズ』といえば今をときめく新進気鋭のフォー
スだとは不肖このミスターMSも聞き及んでまつせ。チナツ選手は
惜しくも敗れてまいりましたが、その分も、っちゅーことでっか？」

「はい！ 今まで戦ってきたライバルや、今まで俺を支えてくれた人
たちがいたから、土壇場で踏ん張ることができたんです！」

どんな時だって、そこにある絆と呼ぶべきものが、縁の力が俺をこ
のGBNで支えてくれた。

そのことに偽りはない。もしも俺一人でただGBNをやつてただ
けだったら、きつとここまで来ることなんてできなかつただろう。

確かに始まりは、拳法のその先にある、「想像を超えた戦い」がした
いっていう感情が、好奇心が、俺にとっては戦う理由であり、強さを
求める理由だった。

でも、今は違う。

チナツがいて、マフユがいて。皆がいるこの世界で、切磋琢磨しな
がら、楽しむ気持ちを忘れずに、強くなっていきたい。

だってこの世界は、GBNはいつだって、俺の想像を超えた戦いに、
出会いに満ち溢れているのだから。

「なるほど、フォースのために、皆との思いを胸に……青春でんなあ。
ワイもチームのために一日でも長く戦おうとした現役時代を思い出
して少しほろりときてしまいましたわ！ 会場でご覧の皆様、そしてモ
ニター越しにご覧の皆様！ 新たなメガ粒子杯王者の誕生に、ユウヤ
選手に今一度、盛大な拍手をお願いいたしまああああすっ！」

惜しみのない称賛が、祝福が拍手や歓声と共に浴びせかけられる。
きつと、誰だつてこの光景を夢見て戦ってきた。リンファも、コド
ウも、カールも、チナツも——予選に参加していたダイバーたちも。
だけど俺が勝ったということは、そんな皆が夢破れていく中で、そ
の屍を足元に積み上げて優勝台に立っているのと同じなんだ。その
ことだけは、一生懸命に戦った相手がいたということだけは、絶対に
忘れちゃいけない。

それを忘れて勝利だけを求めるようになった時、きつと人はアズサ
さんや師匠が言っていた「無明」に堕ちてしまうのだから。

表彰式を終えて、トロフィーをミスターMSから受け取った俺は、
唇を固く引き結びながら、セントラル・ロビーへと帰還していく。

優勝した嬉しさと、そしてまた背負うものが増えたその重さを噛み
締めるように、トロフィーを胸に抱きながら。



「おめでとう、ユウヤ」

「ユウヤ君……おめでとう」

セントラル・ロビーに帰還するなり俺を出迎えてくれたのは、やっぱりというかなんというか、チナツとマフユの二人組だった。

チナツはいつも通りに勝気な笑みを浮かべて胸を支えるように腕を組んで、マフユは丈の余った袖で顔の半分を覆い隠すようにしながら、祝福の言葉を投げかけてくる。

なんというか、二人におめでとうと言ってもらったことで、ようやく実感が湧いてきたような、そんな気がした。

「ああ、ありがとうな、チナツ、マフユ！ チナツと練習したおかげで間合いの測り方もバツチリだったぜ！」

「その割には結構苦戦してたじゃないの」

「そりやそうだろ、相手はあのリンファだぜ？」

「それもそうね。でも……仇をとってくれてありがと。決勝で戦えなかったのは残念だけどね」

「そうだな」

でも、ガンプラバトルはやろうと思えばいつだってできる。そういうことじゃないのかもしれないけど、いつだって俺たちはチャレンジャーとしてぶつかり合えるんだ。

チナツが片目を瞑って差し出してきた拳に軽く拳を当てて応える。

その瞬間にチナツは顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまったけど、なんかそんなに恥ずかしいことでもしたんだろうか。

助けを求めるようにマフユを見れば、マフユもなんだかご機嫌斜めなのか、可愛らしく頬を膨らませてぷい、と視線を逸らしてしまう。

なんか悪いことでもしちゃったんだろうか。メガ粒子杯優勝早々縁起が悪いな。

ブロックノイズが寄り集まってくるエフェクトと共に、誰かが姿を現したのはなんてこったとばかりに天を仰いで目頭を押さえていた時だった。

「ふふふ……はろーやーやー、少年。大戦果だったじゃあないか」

「トワさんー！」

「しかし水臭いぞ少年、このトワさんも誘ってくればよかったのに」
眼鏡のブリッジを持ち上げながら、ぼっち勢は辛いんだよ、と、冗

談なんだか本気なんだかよくわからない一言を零して、トワさんは大袈裟に肩を竦めてみせる。

確かにトワさんに声をかけるのは忘れてた。あのあとに色々あったとか言い訳はできるけど、まずは謝らないとな。

「すみません、トワさん」

「なに、気にすることはないよ少年。次からはトワさんも頼りにしてくれればそれでいいからね……っと。早速だけど、君のメガ粒子杯における戦いは全部観察させてもらったがね」

「……ストライク焰の限界、ですか」

「そこまで見抜いているとはね。ビルダーとして腕を上げただけじゃなく、アシムレイトの境地にも達した君らしいよ、少年」

トワさんは飄々とした態度でコンソールを立ち上げて、ウィンドウに準々決勝、準決勝、そして決勝戦におけるストライク焰の動きを投影してみせる。

どれもこれも、勝てたからいいけど、改めて見るとバーニングバーストシステムを上手く制御し切れていない。

多分だけど、リンファとの戦いで真のアシムレイトが上手くいってくれたのも、バーニングバーストシステムの出力が落ちていたからだ。

もしも百二十パーセントの出力と併用していたら、ストライク焰はバラバラに砕け散っていたことだろう。

「繰り返して言うが、君のストライク焰の出来は決して悪くない。むしろこの大会に向けてブラッシュアップしてきたんだろう？ それぐらいはトワさんにもわかるさ。でも、バーニングバーストシステムは過剰出力ともいえるほど、爆発的にストライク焰の出力を増大させる——つまるところ、余剰エネルギーをうまく逃がせていないのさ」それをどうするかについては、今後の少年次第だけだねえ。

トワさんはウィンドウを閉じると、凝り固まった肩をほぐすように腕を回す。

ストライク焰の弱点。ストライク焰の欠陥。それはどれだけ俺が「ストライクが好きだ」という気持ちを込めて作ったのがストライク

焰でも、今後もバトルを続けていくなれば向き合わなきゃいけないことだ。

「少女のシックザールはその辺り上手くやれていたね、過剰出力を光の翼に変換することで外に逃す。流石はあの人の娘といったところかな?」

「ありがとうございます、でも、アタシ……一からシックザールを作り直そうと思っんです」

「ほう?」

何かの参考になるかもしれないよ、とばかりにチナツへ話を振ったトワさんは、あいつの返答が想定外のものだったのか、小首を傾げて興味深げに相槌を打つ。

「今度リソファと戦っても負けないように、アタシ自身のウイニングロードを作り出せるシックザールを作り出すために……一からやり直そうって、そう思ったんです」

「なるほどねえ。それも一つの選択肢だから、トワさんがそれにどうこう言う権利はないよ。だから頑張りたまえよ、少女」

「はい!」

チナツは極めて明るく、トワさんの言葉にそう答える。

ガンプラを一から作り直す、か。

確かにそれも選択肢としてはありなんだと思う。ストライク焰は、もうできうる限りのブラッシュアップを施して、いつてしまえばこれ以上伸び代が期待できない状態だ。

オーバーホールして細部まで作り込むって選択肢もあるけど、それも一から作るのと手間は大きく変わらない。

要するにここから先は、チナツがその道を選んだように、俺がどうしたいか、どうしていくかを決める番だということだ。

考える。俺はストライク焰をどうしたい? ストライク焰とどう付き合っていく?

マフユが何か言いたげにこっちを見てきたのに、大丈夫だと視線で応えながら、考えを巡らせていた、その瞬間。

「ユウヤ——貴方、メガ粒子杯を優勝したカミキ・ユウヤでしょう?」

ロビーの隅っこから俺を呼ぶ声がしたかと思えば、そこにいたのは、深緑色のパーカーについているフードを目深に被って、迷彩色のスボンを着込んだ見知らぬ女の子だった。

俺のリアルネームまで知ってるってことは、何か因縁があるのかもしれないけど、生憎俺の方にあの女の子と一悶着あった記憶はない。じゃあ人違いかと思っただけど、メガ粒子杯を優勝したカミキ・ユウヤなんて同姓同名の人物がいたならそれこそ奇跡だ。

「ああ、俺がユウヤだけど……あんた、何か用でもあんのか？」

「用ならある……はあっ！」

「くっ、またリアルファイトかよ!? いや、あんたのその技、まさか……!？」

くるりと勢いよく身体を回転させてその勢いを乗せて放った蹴りが——次元霸王流、旋風竜巻蹴りが俺の眼前でぴたりと止められる。

「次元霸王流、旋風竜巻蹴り。今に対応してみせるのは流石といったところだけど、反応がコンマ単位で鈍い」

「そりやどうもな！ で、結局お前は何がしたいんだ！」

「明日、ここに指定されている場所まで来なさい。本当の『戦い』が貴方を待っている」

「待てよ、いきなり何なんだよ!? せめて名前の一つも……」

「……ジェニ。だけどここでの名前は意味を持たないと言っただけ言っておく。逃げるつもりなら、来なくてもいい」

言いたいことだけを一方的に捲し立てると、ジェニ、と名乗ったダイバーはログアウトボタンに手をかけて現実へと解けていく。

結局、あいつが何をしたかったのかはわからない。

ただ、あの旋風竜巻蹴りの練度は凄まじいものだったし、その拳からはリンファに勝るとも劣らない闘気が伝わってきた。

「本当の戦い……?？」

「……それって、まさか……」

傍で見ていたチナツもジェニの行動には理解が及ばなかったのか、小首を傾げて固まっていたけど、マフユは何か心当たりがあるのか、はっとした様子で目を見開いている。

本当の戦い。あいつの残した言葉に、一体どんな意味があるんだ。
「ちよつと失礼、少年」

俺がマフユに問いかけようとするのを遮るかのように、トワさんが、ジエニから一方的に投げつけられたメッセージを覗き込む。

「あいつについて、何かわかつたんですか？」

「いや？ ジエニって子のことはさっぱりだが……この指定されているアドレス、旧ヤジマ商事の廃倉庫だねえ」

ヤジマ商事。確か、GPDの全盛期においては他の企業の追随を許さない勢いで成長していた、GPD研究のスペシャリストだったはずだ。

でも、その勢いはGPDの衰退と共に衰えていって、今では多くの施設が売却されたり、潰れたりしている。

父さんたちが全国大会を戦い抜いたヤジマスタジアムだって、今は都営の総合体育館に変わっていたはずだった。

でも、なんでジエニはそんなところの廃倉庫に俺を呼び出したりしたんだ。

謎が深まる中で、恐る恐るといった調子で、マフユが沈黙を破って口火を切る。

「じ、GPD……」

「GPD？ どういうことだ、マフユ？」

「多分だけど、その……あのジエニって人、ユウヤ君と……GPDで決着をつけようと思ってるの、かも……」

GPDは衰退した。それに伴って稼働できる筐体の数は加速度的に減っていったし、メーカーのサポートも今ではほとんど切れているはずだ。

なのに、GPDで決着をつける——俺の方からすれば、ジエニにとつての因縁も何も知らないけど、とにかく勝負したがってるってのはどういうことなのか。

「ユウヤ、アンタ行くつもりなの？」

チナツがそう問いかける。

確かに俺からすればジエニとの因縁なんて知ったことじゃないし、

変なやつが喧嘩をふっかけてきた、で済ませていいことなのかもしれない。

「だけど、ジエニの拳を、脚を通して確かに伝わってきた。あいつは俺と、本気で戦うことを望んでいる。」

「ああ……どうやらあいつも本気みたいだからな」

「ふむ……なるほどなるほど。君が行くというなら止めはしないよ、少年」

「……トワさん」

「……ただし一つだけ忠告しておくことがあるよ。GPDはね」

——GBNと違って、戦ったガンプラにダメージがフィードバックされるんだよ。

トワさんはすれ違いざまに耳元でそう囁くと、ログアウトボタンに手をかけて現実へと解けていく。

「ユウヤ君……」

「ユウヤ……」

「心配すんな、マフユ、チナツ！俺は……俺とストライク焔は、絶対に勝つ！」

多分、そういうことじゃないのはわかっている。

最悪、ストライク焔は壊れるかもしれない。そして、二度と修復できなくなるかもしれないと、そう心配してくれているのはわかっている。

「だけど、本気で挑まれた勝負には、本気で応えなきゃいけない。師匠の教えだ。」

GPD。最後の筐体は父さんたちが戦ってきた時と大分違ってるけど、同じ戦場に立つことができるという高揚感と、ストライク焔を壊してしまうかもしれないという恐怖の間で板挟みになりながら、俺は精一杯強がって、二人へにつこりと笑ってみせる。

風のように現れて、風のように去っていったジエニ。その因縁を解き明かすためにも、何より挑まれた勝負に勝つためにも。

何より、気持ちで最初から負けるわけにはいかないからな。

ジエニが指定した廃倉庫まで自転車で行くのには、結構な時間がかかった。

もしも本当にマフユの推測通り、あいつがGPDで何かしらに決着をつけようと望んでいるのなら、それに応えるためにもストライク焰をいつものポーチにも入れてある。

錆び付いた鎖が千切れて垂れている廃倉庫にはどことなく不気味な雰囲気を感じるけど、この敷地に踏み込んだ時からビリビリと伝わってくるのは、もつと異質なものだ。

錆で汚れている正面のシャッターは微妙に、ちょうど人間一人が通れるくらいの大きさに開いている。

それは、「来い」というジエニからのメッセージなのかもしれない。自転車を適当なところに停めて鍵をかけると、俺はストライク焰をポーチから取り出して、廃倉庫の中に足を踏み入れる。

「来たぜ、ジエニ！ 姿を見せやがれ！」

元々ヤジマ商事の所有物だっただけあって、廃倉庫の中には古いゲーム機やらクレーンゲームの筐体やら、そういうものが溢れている。

唯一その中で異質な存在感を放っているのが、比較的新しめの布が被された何かしらの筐体と思しきものだった。

俺の呼びかけに応じたのかそうでないのか、壁にもたれかかっていた何者かががちやり、とレバーを起動する音が響く。

薄暗かった廃倉庫の中にぼんやりとした明かりが灯って、布に覆われていた筐体が光を放つ。

「待っていたわ、カミキ・ユウヤ」

ジエニと思しきその黒髪の女の子は、筐体に被せられていた布を取り払うと、薄らぼんやりと照らされた口元に微かな笑みを浮かべる。

綺麗だとは思うけど、やっぱり俺の中にある記憶のどれともその顔立ちは符合しない。

それでも因縁をつけてきたってことは、ジエニの方に何かがあるの

か、それとも。

「ここでは無料な名前は必要ない。改めて名乗る。私はスミ……イノセ・スミよ、カミキ・ユウヤ」

「イノセ・スミ……？」

ジエニ改め、イノセ・スミと名乗った女の子は、その瞳に爛々と輝く闘志を宿しながら、真っ直ぐに俺の瞳を睨みつける。

「悪いけど、その名前にも聞き覚えはない。

ただ、心のどこかで何か引つかかるものがあるのは確かだった。

なんだ。何が俺の中で引つかかっている？

眉根にシワを寄せて考え込むけど、答えは喉元まで出かかっているのに、中々形にならなくて、もやもやする。

スミ。イノセ・スミ——まさか。

「お前、まさか……！」

「やっと気付いたのね、鈍い男……そう。私はイノセ・ジュンヤの娘。お父さんの雪辱を晴らすために、このGPDで貴方と戦うために日本に戻ってきた」

イノセ・ジュンヤ。父さんの、師匠の兄弟子に当たる人で、今は何をやっているのかわからないけど、小さい頃に——本当に俺が物心つくかつかないかの頃に、会った記憶は微かに残っている。

ただ、師匠はジュンヤさんについての話をあまりしたがらない——というか、ジュンヤさん自身が自分のことについて口止めしているのかもしれないけど、とにかく、俺が知っているのは精々それぐらいのことと。

そして、かつての全日本ガンプラバトル選手権、準々決勝戦で戦った相手だということだ。

なるほど、ジエニ改めスミが決着をつけようとしているのは、その時の因縁なのか。

師匠からは何も聞いていない以上、ジュンヤさんがあの戦いのあと、どうなったのかはわからない。

でも、GPDの映像を見る限り、あの時のジュンヤさんは、勝利のためなら手段を選ばない、無明に堕ちていた。

スミもまさか、そうなってしまったのか。
だとしたら、俺にできることは。

ポーチから取り出したストライク焔を突きつけるように、俺は次元霸王流の構えを取る。

「スミ、お前の因縁が終わってないっていうんなら……無明に堕ちたっていうんなら、俺とストライク焔が、次元霸王流が相手になる！」
「私が無明に……？　面白いことを言う。私はただ、貴方を倒すことでお父さんの雪辱を晴らす！　それだけよ！」

「その因縁はもう、終わってるんだよ！」

そうでなければ、たった一度とはいえ、ジュンヤさんがうちの敷地を跨ぐことはなかったはずだ。

だったら今のスミは過去に囚われた亡霊だ。終わったはずの戦いに固執して、自らの強さの本質を見失っている。

それを無明に堕ちたと言わずして、なんと言うのか。

「戦う者の間に言葉は無粋……だから」

「拳で語る！」

『それが、次元霸王流の極意だ！』

起動したGPDの筐体に、俺とスミはそれぞれのガンプラをセットする。

昔はGPベースとかいう、ダイバーギアのプロトタイプみたいな、個人データを登録するための機械が必要だったけど、時代の進化に伴ってその辺は簡略化されていったらしい。

あくまでも発進台にガンプラを乗せて、プラネットコーティングとかいうものの充填が完了したら、操縦桿で動かすだけ。

その操縦桿のインターフェースも、GBNに近いものになっている。

違いがあるとするなら、GPDは文字通り自分のガンプラが動くことと、そして。

——トワさんが言っていたように、戦いのダメージがガンプラにフィードバックされることだ。

形成されたバトルフィールドの中に降り立ったストライク焔を動

かしてみた感覚は、インターフェース通りにGBNとそう変わらな
い。

とりあえずは慣らし運転も兼ねてレーダーを注視しつつ、ストライ
ク焔は大量のデブリが転がっている砂漠のステージを飛ぶ。

とりあえず一通り動かした限りでは、関節に砂が詰まったりとかは
しなさそうだ。

そして、慣らし運転を終えて着地したその時だった。

物陰に身を潜めていたのであろうスミのガンプラが、ゆっくりとそ
の姿を現す。

「なっ、そのガンプラは……!?!」

「プライドバーニングガンダム……私の誇りをかけた、雪辱戦のため
の機体」

「ビルドバーニング……師匠の、父さんのガンプラを!」

「そう、だからこそ。貴方の父を、カミキ・セカイを超える力を今ここ
で貴方に見せる! カミキ・ユウヤ!」

その機体は、師匠が使っていたビルドバーニングガンダムの脚部
を、ブレイジングガンダムとかそんな感じの名前だった昔の有名フア
イターのレプリカモデルに置き換えて、ジュンヤさんが使っていた
デナイアルガンダムのような塗装を施したものだだった。

ビルドバーニングの方もレプリカモデルには違いはないだろう。だ
けど、その機体で俺に挑むということが、俺に勝つということが、ス
ミにとっての誇りを証明する手段なのだとしたら、それは。

「上等だ! 俺にとって、あの時の父さんを……師匠を超えるってこ
となら真っ正面から勝ってやる! 次元霸王流、聖拳突き!」

「……次元霸王流、聖拳突き!」

二つの拳がぶつかり合って火花を散らす。

技の冴えという意味では、俺とスミの間にそこまで差は開いていな
いのかもしれない。

だけど、例えるならスミの拳は獣の牙だ。

俺の拳が教え通りの型通りに運ばれたものだとするのなら、スミの
それはあくまで実戦の中で磨かかれた、闘争心が形になったようなも

のだった。

だからなのかもしれない。

最初は互角にぶつかり合っていたストライク焰の拳が、次第に揺らぎ始める。

「……ッ、次元霸王流！」

「次元霸王流」

『旋風、竜巻蹴り！』

拳を解いて蹴りの態勢に移行、だけど、それを見計らっていたかのように相手も疾風竜巻蹴りを選んで、今度は脚がぶつかり合う。

この時俺は一つ失念していた。

相手の脚部はビルドバーニングそのままじゃない。ゴッドガンダムのプロテクターみたいなパーツが配置されているブレイジングガンダムを取り入れているということ。

「——閃光・竜巻蹴り！」

「うわあああつ！」

プライドバーニングの右足が紫色に光り輝き、ストライク焰の胴体を抉る。

コックピットへの直撃こそ免れていたけど、もしも当たっていたら、今頃。

「おおおおつ！ ストライク焰、百二十パーセントだ！」

「バーニングバーストシステム……」

脳裏に浮かんだ想像もしたくない事態を振り払って俺は、今度こそ反攻に転じるために、バーニングバーストシステムを起動する。

GPDでも使えるかどうかは不安だったけど、どうやら使えるようだった。

そのことに感謝しつつ、俺は百二十パーセントまで出力を上げたバーニングバーストで、プライドバーニングの懐へと切り込んでいく。

「次元霸王流！・ 流星螺旋拳！」

「くっ……！」

今のは結構効いたはずだ。胴体に流星螺旋拳が直撃したことを確

認して、俺はすかさず体勢を崩した相手を畳み掛けに行く。

「次元霸王流！ 閃光魔術――」

「ふ、ふふ……」

「蹴りッ……!?!」

「バーニングバースト……貴方がそれを使ってくるのは想定内。そしてそれは、こちらにもある！」

アズサさんが纏っていたファントムライトと似たような紫炎がプライドバーニングの背中から吹き出し、形成された粒子のフィールドのようなものが閃光魔術蹴りの初段を受け止めて、ストライク焰を弾き返す。

素体が粒子の放出に特化したトライバーニングじゃなく、ビルドバーニングの時点で完全にバーニングバーストを相手は、スミは使いこなしている。

だからこそ、プライドの名を自分のガンプラにつけたのかもしれない。

互いに百二十パーセントの出力で起動したバーニングバーストで俺たちは殴り合い、蹴り合い続けてこそいたものの、次第に機体に蓄積したダメージが、ストライク焰の動きを鈍らせていく。

「ぐっ……」撃が、重い……!?!」

「私の次元霸王流は実戦で磨かれたもの。ただ型をなぞるだけの貴方とは違う……!?!」

「いいや……違うね！」

「なに……!?!」

繰り出されたスミの疾風突きがストライク焰の頬を掠めて、イーゲルシュテルンが誘爆する。

クロスカウンターで放った疾風突きが、プライドバーニングの頬を掠めて抉り取る。

確かにスミの次元霸王流は、破壊力に特化した、リンファを思わせる攻撃的なものだ。

そこに他の武術のエッセンスを取り入れているのも俺と同じだ。でも、スミがそう言った通り、確かに俺のそれは型通りに嵌ったもの

でしかないのかもしれない。

「だとしても、型は武術の基本！ それを破るのは、型を極めてからのことだ！」

「それはカミキ・セカイの言葉？」

「ああ、師匠の言葉だ！」

型があるのとないのとは大きく違う。

守破離。一つの道を極めるのなら、何事もまずはその教えを忠実に「守る」ことから始めなければならない。

例えどれだけスミの武術が実戦で鍛え上げられたとしても、その経験が力を与えているのだとしても、基本を極めていなければ、それは形無しになってしまう。

「そう、だったら見せる。型を超えた、私とプライドバーニングの本当の力を……！」

「なっ……!?!」

スミは一瞬目を伏せたかと思えば、すぐさまに刮目し、クロスカウンターで崩れていた体勢を立て直して回し蹴りを放ってきた。

速い。そして早い。あの反応速度は。

考えている間もなく、今度は紫色の光を足先に纏った聖槍蹴りが飛んでくる。

「危ねえ……ッ……！」

「仕留め損ねたか……！」

「お前、アシムレイトを……!?!」

「そう。百二十パーセントのバーニングバーストとアシムレイトの同調……それが私が実戦で身につけた、プライドバーニングと共に戦ったことで手に入れた力！」

自分に戦いの痛みが跳ね返ってくることも厭わずに、スミはアシムレイトを発動させると、バーニングバーストの出力と合わせて、手刀を放つ。

ただの手刀であれば、避けるのは容易かった。だけど、それはあまりの速さで四つに分裂したかのように見えて。

「ぐああああっ！」

「直撃、取った……！」

幻惑に翻弄されて動きを止めた、ストライク焔の胴体に直撃する。まずい。これ以上胴体にダメージを受けたら、ストライク焔は。俺は歯を食いしぼり、目蓋を閉じる。

ストライク焔に存在している欠陥。それは、百二十パーセントのバーニングバーストによって発生する余剰出力を制御し切れていないことだ。

それがアシムレイトによって倍増したのなら、今のストライク焔ではまず耐えられない。

かといってこのまま黙っていれば、確実に俺は撃墜される。死力を尽くしてそうなったならいい。だけど痛みを恐れて、ガンプラが壊れることを恐れて負けたのなら、それはストライク焔にとっても屈辱なはずだ。

「ごめん、ストライク焔……それでも力を貸してくれ！ お前は俺だ、俺はお前だ！」

そうして俺は、迷いを捨て去って、視界の奥に、心の底に潜り込み、揺らぐ炎の欠片が示す太陽を仰ぎ見る。

百二十パーセントのバーニングバーストとアシムレイトの同調。リンファとの戦いではできなかったことには成功していたけど、立っているだけで全身の骨が軋むような、ストライク焔の痛みが伝わってきた。

そう長くはもたないだろう。だから。

「次元霸王流！ 聖拳！」

「聖拳！」

「疾風！」

「疾風！」

『突きいいいッ！』

短期決戦で畳み掛けるべく、俺はプライドバーニングに向けて今出せる最高速で、最大の出力で拳を叩き込もうと試みた。

でも、そのことごとくが同じ技に阻まれて、拳はスミに届かない。それだけじゃない。

「ぐああああっ……！」

「この程度の痛みに、音を上げるなど！」

蓄積されていた戦いのダメージと、そして今も身を削り続けているストライク焰の痛みが流れ込んできて、全身が激痛に苛まれる。

それはスミも同じはずだ。

なのに、平然と耐えているように見えるのが、実戦を経験してきた強さってやつなんだろうか。

「負ける……かあッ！」

実戦とやらがどこまでで、何を相手にしてきたのかはわからない。それでも俺だって、今日までGBNを、メガ粒子杯をストライク焰と共に戦い抜いてきた意地がある。

歯を食いしばって、耐えて、耐える。

そうして、最後はにっこり笑ってやるんだ。

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

「……次元霸王流、流星螺旋拳！」

炎と光を纏った右の拳と、紫炎を纏った右の拳が唸りを上げてぶつかり合う。

骨が削れていくような痛みと、腕が千切れそうになる感覚に音を上げそうになるのを堪えながら、俺はただ、ストライク焰との同調に意識を傾けていた。

そうだ。まだだ、まだ終わっていない。

スミの流星螺旋拳に押されて、ストライク焰の拳が砕け散る。凄まじい痛みには操縦桿を手放したくなるのを堪えて俺は、エールストライカーに装備されているビームサーベルに右手を伸ばす。

「ぐうううっ、あああああッ！」

「傷口に、ビームサーベルを!？」

塩どころの騒ぎじゃない。

激しいという言葉でも足りない痛みには歯を食いしばりながら、失った拳の代わりにビームサーベルをその穴に突き刺して、プライドバーニングの右関節を、燃える炎のように揺らぐビームの刃で叩き斬った。

「……ッ……！」

「……悪いな、ストライク焔……あと少しだけ、俺の無茶に付き合ってもらうぜ……！」

流石に肘から先を切り落とされる痛みがフィードバックされれば、さしものスミもポーカーフェイスを維持できないようだ。

もうストライク焔は限界を超えている。

フレームは軋みを通り越してヒビが入る音が聞こえてくるし、それは全身の骨に亀裂が入ったような痛みとして俺にも跳ね返ってくる。普通なら死んでるところだ。

それでも死んでないってことは、アシムレイトは要するに、どこまでいっても強烈な思い込みでしかない、ってことだろう。

プライドバーニングの方も、アシムレイトと百二十パーセントのバーニングバーストを重ねがけするのは無理があったのか、戦いのダメージが蓄積しているのか、あるいはその両方なのか、フレームが軋むような音を立てている。

「これが戦い、これがGPD……これがお父さんの見た景色……！だから、私はその雪辱を晴らしてみせる！ カミキ・ユウヤ！ 貴方をこのGPDで倒すことで！」

「やってみろよ、イノセ・スミ！ お前に俺とストライク焔の拳で教えてやる！ 次元霸王流の、その極意を！」

『はあああッ!!』

互いに余裕がもう残されていないのなら、やることは一つだけだ。

最後の一撃に、全身全霊をかける。

泣いても笑っても、どのみちこれが最後なら、俺は。

俺は、最後までお前と一緒に笑っていたんだ、ストライク焔。

『次元霸王流！ 聖拳突きいッ！』

クリアになった視界に、モニターを取り払ったかのような視界にプライドバーニングの胴体を収めて俺は、バーニングバーストの全てを乗せた左の拳を打ち込んだ。

一瞬だ。クロスカウンターとして放たれたスミの聖拳突きは胴体を逸れて、ストライク焔の頭部を打ち砕く。

だけど、その頃には俺のアシムレイトはもう解けてしまっていた。きっとそれは、スミも同じだろう。

胴体にパルマ・ファイオキーナの光とバーニングバーストの炎を纏った拳が直撃したことで、プライドバーニングの上半身と下半身を繋ぐ軸がひび割れ、その胴体にも衝撃が浸透していたのか、上半身が砕け散る。

本当に一瞬の差だった。型通りに放たれた聖拳突きと、我流で磨き上げたことで威力こそ上がっていても、動きの癖のせいで僅かにタイミングが逸れてしまったことで生じた差だ。

【Battle Ended!】

【Winner: Prayer 2!】

「やって……やったぜ……!」

「私が、負けた……?」

そしてまた、過剰出力に耐えきれなくなったストライク焰も、バトルが終わったことで無理やり機体を維持していたプラネットコーティングが解けて、同じ痛みを共にした相棒が、ほとんどバラバラに砕け散っていく。

「ありがとう……ごめんな、ストライク焰……」

勝った。だけど、上手く笑えねえ。

勝利というにはそれは、あまりにも苦く、悲しさが残るものだったからだ。

Ep. 40 「新しい扉の先に」

勝つには勝った。だけど、払った代償もまた大きなものだった。

上半身が内側からの圧力で破裂したように砕け散ったストライク焔を、その欠片を拾い集めて俺は、ポーチにしまつてしゃがみ込む。

今の今まで一緒に戦ってきた相棒を失ったのは、簡単に割り切れるようなことじゃない。

「ごめんな……ありがとう、ストライク焔……」

だけど、最後に笑うために、全力を尽くして戦ったのに、そのためにストライク焔は力を尽くしてくれたのに、俺が泣いて立ち止まっていたんじゃ台無しだ。

しばらく呆然としていたスミも腹部からコックピットにかけて大穴を空けられ、上半身と下半身を繋ぐ軸がへし折れたプライドバーニングをその手に取ると、ぎゅっと胸に強く押し付ける。

悔しかったのだろうか。それとも、悲しかったのだろうか。

俺にはよくわからない。でも、GPDで戦ってきたってスミの話が本当なら、きつと何度だってその感覚に慣れることはないのかもしれない。

そんなことをぼんやりと頭の片隅に浮かべながら、立ち上がった瞬間だった。

びし、っとチナツのようにスミの人差し指が、俺に真っ直ぐ突きつけられる。

「なんだよ、戦いなら終わっただろ？」

GPDでは負けたけど、リアルファイトで決着をつけるとか言い出すんだったら、流石にごめんだ。

そんな気力も今は使い果たしたし、何より本当に戦うんだったら、スミを怪我させてしまう可能性だってあるしな。

「違う。貴方の技の冴えは見事だった。カミキ・ユウヤ」

「そりやどうもな、お前の力も……プライドバーニングを通して伝わってきた、ガンプラへの思いだって凄かったぜ」

仮に俺を倒してジュンヤさんの雪辱を晴らしたいってだけだった

ら、あそこまでビルドバーニングを作り込んで、バーニングバーストシステムを制御できるまでにブラッシュアップしていない。

例えその出発点が復讐であったとしても、スミが心に描いている「こうありたい」「こうなりたい」という、やりたいことのイメージが、あの拳からは伝わってきた。

それはきつと、トワさんが言っていたような「愛」がなければできないことだ。

言い残すと、今度こそ廃倉庫を出ようとした俺の前に立ちはだかつて、燃えるような輝きをその瞳に宿しながら、スミが俺のそれを覗き込んでくる。

なんなんだ。一体何がしたいんだ、こいつは。

なんだか知らねーけど本気なことだけは伝わってくる思いを滾らせてスミは、俺を真っ直ぐに見据えていた。

「ユウヤー！」

「ユウヤ君……！」

まさかこんなに朝早く、七時にもならない内にバトルを始めていたとは思っていなかったのか、慌てた様子で廃倉庫のシャッターを潜つて、チナツとマフユが駆け寄ってくる。

ナイスタイミングだ。なんだか知らないけどチナツだったら同門のよしみでこいつをなんとかしてくれるんじゃないか——そんな樂觀的な期待を抱いたその瞬間だった。

「カミキ・ユウヤ……いや、ユウヤー！ 責任をとって私と結婚しなさい！」

「はあ?！」

ナイスタイミングじゃない、前言撤回だ。

スミは俺を再び指差すと、廃倉庫に凜と響き渡る声音でそう言い放つ。

なんの責任なんだ。なんで結婚なんだ。

訊きたいことは山ほどあるけど、駆けつけてきたチナツとマフユがフリーズして顔を見合わせる程度に、その爆弾発言はこの場を見事に凍らせてくれていた。

「貴方の技と私の力。その二つが合わされば最強のファイターが生まれるのも夢じゃない。だから責任をとって私と結婚しなさい、ユウヤ」

「責任ってなんだよ!? わざわざ誤解されるようなことを——」

慌ててその発言を取り消させようとするものの、テコでも動かないといった具合にスミは人差し指を突き出したまま、俺の瞳を真っ直ぐに見据えている。

「ユウヤ……あんた、まさか……?」

「GPDで戦うんじゃない、なかつた、の……?」

最悪だ。見事な誤解がクリーンヒットして、チナツの表情は怒りに染まって、マフユの表情はこの世の終わりが来たかのように悲壮な色を帯びていた。

大体結婚も何も、スミがいくつかは知らないけど俺はまだ中学生だ。

話が早すぎるってレベルじゃねえ。

「年齢の問題など些末なこと。お父さんの雪辱を果たすためにも私は待ち続けた。だから何年待つかなんて苦にもならない」

「お前の問題じゃなくて俺の方の問題なんだよ!」

「次元霸王流の正当後継者たる者が、まさか責任から逃げるつもり?」

「そうじゃねえよ! なんといかまず……説明をさせてくれ!」

ブレーキの外れた暴走機関車のようにスミが一方的に捲し立ててくるのを制して、俺はチナツとマフユに向き直る。

滅茶苦茶怒ってるぞ、これ。どうしてくれんだこの空気。

眉を逆立てるチナツと頬を膨らませるマフユの癪に障らないように俺は、できるだけ穏便な形で今までの経緯を説明した。

「……ってなわけで、こいつは……スミは、ジュンヤさんの娘で、俺はその雪辱を果たすとかでさつきまでGPDやってたんだよ、それ以上のことは本当に何もしてない」

「ふーん……どうだか。でもスミさんでしたっけ? なんでいきなりこの朴念仁で唐変木で鈍感なユウヤに結婚なんか申し込んだんです?」

ひでー言われようだな、おい。

俺の心のツツコミを無視するかのようにチナツはスミを真っ直ぐに睨みつけながらそう口にする。

こめかみの辺りに青筋が浮かび上がっている辺り、本気でキレてるんだろう。恐ろしい限りだ。

「さつきも言った通り、私の力とユウヤの技がかけ合わさったなら、最強のファイターが生まれる。端的に答えるなら、果てのない強さを求めるため」

「はあ？　はあ……そういうことって、もつと段階を踏んでやるものじゃないんです？」

「話しづらければ普通に話していい。コウサカ・チナツ……段階とは何？」

「それはその、恋とか、その……愛とか……」

要するにそういう話をするのはもつと仲良くなってからじゃないのかってことだろう。

それぐらいは現在進行形で朴念仁と罵られている俺にだってわかることだ。

恋だの愛だの、カールの時もそうだったけど、そういうのが絡んでくるのはどうにも苦手な仕方ない。

「ふむ、段階を踏めば結婚を受けてもいいと。ならユウヤ、責任を取って私に恋しなさい」

「無茶言うなよ……」

心の底からげっそりした声が出た。

ただでさえこっちはストライク焔を失って、ナーバスになってるつてのに、畳み掛けるようにそんなことを言われたんじゃ、とてもじゃないけど精神がもたない。

スミは確かに美人かもしれないけど、まだ恋だの愛だのなんののかんのかって俺にはわからないし、結婚となれば尚更だ。

「……私は恋するに値しない？」

「そうじゃねえけど……なんていうか、それより前の話をしてるんだと思うぞ、チナツは」

「そうよ！ 珍しくこの朴念仁が言った通りよ！」

朴念仁は余計だろ、朴念仁は。

心の底から残念そうな表情をしているスミに俺はフォローを入れつつ、先ほどからすっかり頬を膨らませて黙り込んでいるマフユに視線を向ける。

一瞬目が合ったけど、すぐに逸らされてしまった辺り、こっちも相当お怒りらしい。

「結婚とか、そういうことは正直全然わかんねえ。でも、ダチになってくれるってんなら、俺は大歓迎だぜ」

「ダチ……友人のことね。それが恋の前に必要なら、そして私の敗者としての誇りにかけて、勝者の貴方がそう言うのなら、受け入れる」

「じゃあ決まりだな！ とりあえずGBNのフレンド申請を……」

「それならもう送っておいた」

「早いな!？」

なんだかよくわからないけど、共に全力を尽くして戦った結果として、敗れたとしてもその誇りを失わずに立っているスミの胆力は凄まじいものがある。

恋とか愛とかは置いといて、とりあえずフレンドから始めようってことで、なんとかこの場は収まってくれたようだ。

スミからのフレンド申請を受諾して送り返し、その受諾も確認したところで俺は、ダイバーギアを背負ってきたリュックの中にしまい込む。

「ユウヤ君は、ああいう積極的な人が好きなのかな……」

「呼んだか、マフユ？」

「う、ううん……！ なんでもない、よ……?？」

「ならいいんだけどさ」

疲れた。果てしなく疲れた。

真なるアシムレイトの反動とかじゃなく、単純にかなり気疲れした。

チナツとマフユもスミが妥協……してくれたのかはわからないけど、とりあえずはいきなりぶち上がった結婚話が棚上げになったこと

に安心してしている様子で、こっちも一安心だ。

「ああそうだ、スミ」

「なに？」

「もしよければだけどき、俺たちのフォースに入らないか？」

さつきエックした限りでは、スミのフレンド欄は新規に追加された俺たちを除けばマギーさんだけと、見事にソロ専といった風情だった。

もちろん傭兵とか、フォースを組んではいるけどフレンド登録はしてないとかそういうケースも考えられるけど、友達から始めるってんなら、何かきっかけになるものがあつた方がいい。

そう思つての提案だった。スミはしばらく考え込むような仕草を見せて、小さく頷く。

「わかつた。元からGBNはソロでしかやっていない。勝者の貴方が言うのなら、敗者の私はそれに従う」

「そこまで気負うもんでもねーと思うけどな……とりあえずはよろしくな、スミ！」

「ええ、ユウヤ。それと、コウサカ・チナツ。それと」

「チナツでいいわよ、そっちの子はマフユ。ミホシ・マフユよ」

「ミホシ……？」

チナツの言葉に、スミの眉がぴくりと動く。別に珍しい苗字ってわけでもないだろうし、なんかまた因縁でもあつたんだろうか。

押し寄せてくる修羅場のプレッシャーに胃の辺りがきりきりと痛み出すのを感じながらも、俺は一触即発といった様子でマフユに近づいていくスミに視線を向ける。

「わ、私は、その……ミホシ・マフユです、けど……それが、なにか……？」

「ふむ……単なる私の勘違い。誤解させたなら謝る。よろしく」
「よ、よろしくお願い、します……っ！」

誰と何を勘違いしてたのかはわからないけど、とりあえずは穏便な形でこの場は収まってくれたようだ。

スミはマフユに簡潔な挨拶をすると、GPD筐体に供給されていた

電力を停止して、再び布を被せる。

今までが怒涛のような出来事ばかりでそれどころじゃなかったけど、確かに俺はここでスミと戦って、そして。

ポーチの中に収めていたストライク焔の残骸を取り出す。無事なパーツは数えるぐらいしか残っていない惨状だった。

「ユウヤ、それ……」

「ああ、ストライク焔は全力で戦って……全力で応えてくれたんだ」

チナツが、上半身がほぼ完全にバラバラになってしまったストライク焔を指して表情を曇らせる。

昔はこれが普通だったとはいえ、軸が歪み、へし折れて、砕けて、修復不可能なレベルまで相棒が壊れてしまったのは俺だって精神的に大分くるというものだ。

ただ、使えそうなパーツが残っていない訳じゃない。

「ユウヤ君……」

「俺、直すよ。例えそれがストライク焔とは別物になっても……こいつの魂は一緒に連れていく。だから……あんま悲しまないでやってくれよな」

俺まで悲しくなってくるからさ、とは少し恥ずかしくて言えなかったけど、正直大分泣きそうだ。

ここまで自分がガンプラバトルに、ガンプラに……ストライク焔に思い入れを抱いているなんて、きっとGBNを始める前は思いもしなかったのだろう。

だけど、もうその頃には戻れない。憧れというキラめきを浴びてしまったから。強くなっていける理由を、その楽しさを知ったから。だから、こいつだって——笑って最期を迎えてくれたんだと、そう信じたいんだ。

それなのに、俺が泣いてるわけにはいかないよな。そうだろ？

そうだよな、ストライク焔。

「悪い……俺がもつと、お前を上手く扱えてたら……!」

「つらいつて気持ちちは、一人で抱え込むもんじゃないわよ、ユウヤ」

「チナツ……」

「アタシも直すのを手伝うわ。だから……今ぐらいは思いっきり泣いたっていいんじゃない？」

頹れた俺の肩にそっと手を置いて、チナツは呆れたように笑ってみせる。

マフユもただ、何も言わずに俺の肩に手を置いて、小さく頷く。

同じ悲しみを完全に分かち合うことなんて、できないのかもしれない。それでも少しは自分たちにも背負えるからとばかりに、小さくても、確かな温もりが広がっていく。

なんだろうな、そんなつもりなんてなかったのに、泣けてくるじゃねえか。

スミはもう廃倉庫から姿を消して、どこかに行ってしまったようだ。

そのことに少しだけ安心を覚えている自分に嫌悪感を抱きながらも俺は、流れるままに任せて涙を零す。

「ちくしようっ……！ 畜生っ……！ ごめんな、ストライク焔……っ！」

GPDでは、ガンプラにダメージがフィードバックされる。

トワさんの言葉を軽く見ていたつもりはない。そのつもりで臨んだ戦いでもあった。

父さんたちは、俺たちより前に戦っていたファイターたちは、きつとこんな悲しみを乗り越えて、一歩ずつ前に進んでいったんだろう。

俺に「大好きだ」という気持ちくれたGBNが偽物だなんて思わない。

だけど、作り上げて、壊れて、また作り直して。

その繰り返し果てにガンプラとの絆を見出すのがGPDなのだとしたら、それを「本物」と呼んでいたスミの気持ちもなんとなくではあるけど、理解できる。

その上で、俺がストライク焔にしてやれることは、この経験を糧にして一緒に前に進んでやることだけだ。

そう言ったように、そう誓ったように。

何回だって直し続ける。何回だって立ち上がる。

だから、そのために今は。
今だけは、少しだけ泣くのを許してくれ、俺の相棒。



「なるほどなるほど……随分派手にやったみたいだねえ、少年」

「はい、全力を出し切りました、俺もこいつも！」

善は急げとばかりにGBNにログインした俺は、とりあえずはストライク焔をどうしていくかを、その方向性を考えるためにチナツとマフユだけじゃなく、他の人の意見も聞いてみようってことで、たまたまログインしていたトワさんに相談を持ちかけていた。

ペリシアであるのスノーホワイトプレリユードを作ったトワさんだったら、何かいいアドバイスももらえるんじゃないか、って期待してたところがないといえば嘘になる。

でも、ストライク焔の魂を連れたガンプラを作るなら、それはきつと。

「ふむふむ……トワさんも少年の相談に乗るといいうなら吝かではないよ」

「ありがとうございます！」

「ただし、一つだけ条件があるよ」

ちちち、と人差し指を振って、トワさんは少し勿体つけたような仕草で条件とやらを持ちかけてくる。

「自分のガンプラは自分で考えて作る……ま、少年もそれを望んでいるだろうから言うだけ野暮だろうけどね？ 要するに、トワさんに丸投げするのはダメってことさ」

「はい！ 俺、チナツやマフユの手は借りるかもしれませんが……それでも、俺のストライクは……俺だけのストライクは、自分の手で考えたいんです！」

「うむ、素直でよろしい。そうなるとトワさんにできることは、君の参考になりそうなデータを提供するのと、バーニングバーストの改善案かな？ ともあれまあ、中々骨が折れる作業なだけに一日二日ででき

るかはおわからないんだ。少しだけ待っておくれよ」

「わかりました！」

トワさんはしーゆーあげいん、と言い残してひらひらと手を振ると、善は急げとばかりにログアウトを選択して、現実に向けていく。

これは、きつと俺に与えられた新たなミッション——挑戦だ。

格納庫エリアで出撃不可の通知が周囲に浮かんでいる、大破状態のストライク焰を見上げて、俺はぐっ、と硬く拳を固める。

だからもう少しだけ待っていてくれよ、ストライク焰。そして、まだ見ぬ俺の新しい相棒。

本戦第一回戦から熱いバトルだったな

285. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
熱いというか暑苦しいというか

286. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
絵面が完全に天〇一武道会なんよ

287. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
カラテを主体にしているダイバーが三人……来るぞ！

288. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
やはりノーカラテ・ノーダイバー……カラテは全てを解決するのだ
な

289. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

予選生き残るのはキツそうだけど本戦まで進んでしまえば狭い特設会場だからな、今年は例外的に一回戦から専用会場使ってたけどそれも格闘型にとっちゃ追い風だろうよ

290. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

でも本戦見据えて格闘寄りのビルド組むとその予選で詰みかねないんだよなあ……

291. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

逆に予選じゃ無双してたけど本戦だと地の利を活かせずに負ける、みたいなパターンもあつたしな……シーズンちゃんとか

292. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それでも奥の手として質量を持った残像とEXAMシステムの合わせ技を残してた辺りやり手だと思うぞシーズンちゃんは、チナツちゃんがその上を行ってただけで

293. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

互いにポロボロになっても立ち上がり戦うガンプラからしか撮取できない栄養素がある

294. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

コドウvsユウヤは今大会屈指のベストバウトだな、変な小細工なしで正面から殴り合ってるのが小気味いい

295. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

カールは相変わらず訳わからん戦い方するな……と思ったたら訳わからんことも言ってる草

296. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつ普段はM A使ってるのにラピッドジュアングを持ち出したってことは大会規定かなんかに引つかかるのを嫌ったのか本気だったのか……

297. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

本気だと思うぞ、その後ロビーでマフユって子に告白して盛大に振られてたけど

298. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

草

299. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マフユちゃん可愛くてどことは言わないけどでつかいから好き

300. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俗にいう地雷系ファッションそのものなダイバールックだからなマフユちゃん、好みは分かれるけど好きな人は好きになるだろう

301. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

本人曰く心に決めた人がいるっぽいけどな

302. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

十中八九あいつのことだと思うけど、当のあいつが気付いてなさそうなのが不憫で可愛い

303. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それ以上は別スレでやってもろて……俺はリンファちゃんが優勝すると思ってたんだけどなあ

304. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

言動はちよつとアレな子だけのことカラテに関しちやマジで強いからなリンファちゃん

305. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヤヨイ・モモのパーフェクトストライクガンダムペルフェクティブリテイがよもや一撃でやられるとは……

306. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヤヨイちゃん、ネタみたいな名前のガンプラ使ってるけどこと砲撃火力に関してはお化けだからな、ドラグーンフルバースト潜り抜けてくるリンファちゃんがおかしいだけで

307. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

リボガンを中華風に改造しつつクロスボーンガンダムよろしくフレキシブルスラスターを取り入れる発想……嫌いじゃないわ！

308. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あれ動き見るに関節の可動域も拡大してるな？

309. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

でもよお、物理無効とはいかなくても軽減ボーンナス入ってるはずのVPS装甲を歪ませて破壊できるのはなんでなんだ？

310. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

多分あの発動が内部に衝撃を浸透させてフレームごと歪めてる……んだと思う

311. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

昔GPD時代に似たような技使ってた有名ファイターがいたしそれと同じ原理なんじゃね？

312. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

昔使ってた粒子の代わりにGN粒子を使った感じか、アーリージーニアス、侍なのに発動使うつてどうなのよとは思ってたけど嫌いじゃなかったぜ

313. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そんなリンファに勝ったユウヤつて奴はどんな化け物なんだよ……

314. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

噂の次元霸王流くんか、しかしいつ聞いても次元霸王流ってなんといか仰々しいとか物々しいとか

315. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それも実在する武術だし、何よりGPD時代にも次元霸王流使って全国大会優勝してるファイターがいるしな

316. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「GPD時代の話題多くなーい？」

317. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

GBNから新参のワイ、何を話しているのかさっぱり理解できていない

318. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>317

昔実機バトルがあったこと自体は知ってるだろ？ その時に次元霸王流やらあのマジカル発勁使うやつらがいたってことだ

319. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジカル発勁は草、でも化勁もガンブラ流にアレンジしてたしあれは八極拳を名乗った別の何かだと思うの

320. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

鉄山靠はそのまま使ってたからセーフ

321. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

次元霸王流で調べてみたら恐ろしいほど情報が引っ掛からねえ……GPD時代の話題ばっかだよ

322. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そりやマイナーな拳法だからしゃーない

323. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

GPDで全国優勝したってんならもっと注目されても良さそうなものだが

324. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

聞いた話だと修行が物凄く過酷らしいぞ、ギアナ高地とか行かされるらしい

325. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

うみみ……（戦慄）

326. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

サニー○兄貴このスレにも湧くのか……

327. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

サ○ーゴ兄貴もメガ粒子杯を観戦していた……？

328. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここまでヤマト選手の話題なし

329. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヤマト君は空気みたいなもんやし……

330. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

色変えたのと可動範囲拡張した以外は無改造のジム・カスタムで本戦に出てるのは凄いなと思う

331. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「無改造こそ最もバランスが取れたビルド」ってあいつの言葉が自慢の愛機に盛るペコしてる時に突き刺さる

332. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあ発想だけならわからんでもないが

333. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

無改造で突き進むには上位の壁がね……

334. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いうて第七機甲師団のクルトとかほぼ無改造だしやっぱ腕前よ

335. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あーそれめっちゃわーかーるー

336. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ガンプラは自由だから盛るペコしようが削るリーヌしようがそのままだろうがよいのだ

337. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

三代目の言葉に救われたビルダーたちは多い

338. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>336

削るリーヌは草なんよ

339. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

強い武装をひたすら盛るペコして色々試行錯誤の末に結局ライフとシールドとサーベルみたいな汎用構成に回帰する、あると思います

340. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それこそ今回優勝した「ユウヤ」みたいにステゴロで行くつても

ある種わかりやすいビルドではあるな、まああいつビームピストル
持つてるけど

341. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

射撃はあくまでも牽制と割り切って本命のカタテを叩き込むスタ
イル、嫌いじゃないわ！

342. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

てか今回の決勝戦、ユウヤもリンファもCランクなんだな

343. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつらがCランクって事実に見えるワイ万年Bランク

344. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あー、そう考えるとリンファの発勁は必殺技も兼ねてんのかな？

345. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

射程が極端に短い代わりに発勁コストが低い必殺技か、あるんじや
ね？

346. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そういや不気味なことにメガ粒子杯の予選中も本戦中もマスダイ
バーを見なかったな……

347. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マスダイバーが殊勝に大会なんて出てくるかね？

348. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

チートでイキりたい奴なら普通に出ると思うぞ、そう考えると謎だ
な

349. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「シャドウロール」とかいうやつも結局予選前にしかダイバーを襲撃
しなかったんだろ？ 何がしたいんだ？

350. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

わからん、でもブレイクテカールが末端にまで広がってるのは事実
みたいだしな

351. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そういうのとは無縁だったはずのベアツガイフェスに二回もマス
ダイバーが出てきてるしなあ

352. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

本人の名誉のために名前伏せるけど、そいつ結局ブレイクデカール使ったこと運営に自供したんだろ？　なのにブレイクデカールもマスタイバーも減るところか増えてるっておかしくね？

353. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ブレイクデカールなんてもん配ってるやつが何考えてるかはわかんねーけど、もしかしてマスタイバーを増やしたいのか？

354. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それ以上は雑談スレでな、まあとりあえず今回の大会は事前の被害の割には穏便に終わってよかったんじゃねーの

355. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

熱いバトルが見れたから満足したぜ、それはそれとして来年もエントリーしないとな

356. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そろそろ予選通過してえなあ俺もなあ

357. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

強者への登竜門は狭く険しいのだ

358. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

優勝した「ユウヤ」には敗退した俺らの分も頑張ってもらわないとな

359. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

勝ったんだから笑えよってやつか、クロスボーンガンダム的に言え

ば

360. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつなら言われなくても笑って前に進んでくれるだろうよ

361. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

後方彼女面スレ民

362. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

彼氏かもしれないだろ！

363. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

またあいつが修羅場に巻き込まれるのか

364. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
そもそもチナツちゃんとかマフユちゃんという二大美少女に囲ま
れるのが羨ましくすぎるんだが？

365. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺も次元霸王流習おうかな……

366. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

動機が邪すぎて門前払いされそう



「クク……呑気なものだな、ダイバーという人種は……ミスタ・S、こ
ちらの『手駒』集めは順調ですよ、来るべき日に向けて……貴方が望
む終末は間もなく訪れるでしょう」

『ああ……ブレイクデカールを数多くばらまいてくれたって意味じゃ
あアンタには感謝してるよ、レミング・ワトキンス』

男——レミング・ワトキンスと電話口でやり取りしているミスタ・
Sと呼ばれた人物は、どことなく不機嫌そうな受け答えをしていた。

そいつのこの世の全てに不満を抱いているような、この世の全てに
不平を抱いているような、そんな声には、シンパシーを感じるところ
はある。

私もそうなのだから。とにもかくにも全てが憎くて仕方ない。

「これはこれは……もったいないお言葉ですよ、ミスタ・S。貴方の理
想が、GBNの崩壊が実現した暁には」

『ああ、好きにしろよ。ぶっ壊れた偽物の後始末になんざ興味なんか
ねえからな』

「その言葉……確かに受け取りましたよ？」

『俺とアンタの利害は今のところ一致している。それじゃあ不満か
？』

「いいえ、とんでもない……GBNの崩壊は我々……いえ、私としても
望むところですからね」

そのための盾として私がデコイを引き受けたのですから。

レミング・ワトキンスはどこなく上機嫌な口ぶり、ミスタ・Sと呼ばれる相手の言葉に答える。

このペーパーカンパニー、「オールズカンパニー」の存在が、GBNの捜査班に対してどれほどの目眩しになっているのかはわからないけれど、ここまでブレイクデカールをばら撒き続けてきたということは、それなりに機能しているのかもしれない。

まあ、どうだっていいけれど。

「それでは、貴方の計画が実現したその時に、また」

『ああ……手駒集めには期待してるぜ』

ブレイクデカールはばら撒かれるだけばら撒かれた方がいいからな。

そう言い残して、ミスタ・Sは電話を切る。

「さて、『シャドウロール』……お前の役目はわかっているな？」

「はい」

「メガ粒子杯の優勝者……伝説の再来が我々の手駒になってくれれば、必ずや来るべき日において大きな力となる。手駒を集めろ。そして『トライダイバーズ』を引きこめ、それがお前の……『シャドウロール』の役割だ、ミリア」

任せたぞ、と一方的に会話を打ち切って、レミング・ワトキンスはいつもの——このペーパーカンパニーを設立した本体ともいえる企業、「白虎電子」との連絡を取りに戻った。

今日は珍しく殴られることはなかったな、と、名前を呼ばれたのはいつ以来かな、とぼんやりと考えながら私は、メガ粒子杯の優勝を成し遂げた「ユウヤ」の顔を、「トライダイバーズ」の幸せそうな顔を脳裏に浮かべて憎悪を燃やす。

「……許さない」

幸せに生きる者を、幸せに生きている者を。計画とは反することに
なるだろうけれど、別に「ユウヤ」を引き込む必要はない。

ただ、不幸のどん底に突き落とせばいい。

その為の楔はもう既に打ち込んだ。「ユウヤ」を引き込むのに失敗したところで、いつものように殴られるだけなんだから、私は私でや

りたいようにやる。

ただ、それだけだ。

そして、あの男たちが言っていたように、GBNの終末は間もなく訪れる。

多くの幸せを踏み碎いて、私が笑う時が、心から笑える時が、ようやく来るのだ。

Ep. 41 「羽ばたくために」

トワさんからダイバーギアを通じた連絡が来たのは、ストライク焔の状態を見せた翌日のことだった。

すぐにはデータを用意できないとか言ってたのに、たった一日で揃えてみせたあたり、あの人は何者なんだろうか。

薄らぼんやりとそんなことを考えながらメッセージを読んでいると、宛先が俺だけじゃなく、チナツとマフユにも向けられていることに気付く。

【From:トワ】

【To:ユウヤ、チナツ、マフユ】

【Message:はろーやーやー少年少女。トワさんだよ。ストライク焔の改修に少女たちも付き合うんだろうと踏んでこのメッセージを送らせてもらったよ。ときに少年、君に必要そうなデータはこちらで揃えたから、少女たちと共にガンダムベース本店まで来たまよ。トワさんはユニコーンガンダム立像の前で待っているからね。格好は来ればわかるさ、それではしーゆーあげいん】

リアルで呼び出しを喰らったのがスミの一件だっただけに、よもやまたバトルか、なんて一瞬身構えてしまったけど、そもそも今の俺はバトルに使えるガンプラを持ってない。

母さんに訊けばプチツガイ——で、合ってたよな——の一つくらいは融通してもらえそうだけど、なんか違う気もするし、そもそもプチツガイ自体、戦いに向けたガンプラじゃないしな。あれで次元霸王流が使えるなら見てみたいもんだ。

そんなわけで、応急処置できそうな破損箇所はマスクングテープでぐるぐる巻きにしてあるストライク焔を、完全に壊れてしまったパーツも含めていつものポーチに入れて、工具箱片手に外へ出る。

それにしてもガンダムベースか。存在は知ってたけど、いつもGBNにログインしてるのは家庭用からだっだし、行ったことはなかったな。

なんだかんだで新しいところに行くのを楽しみにしている自分に

苦笑しながら玄関を潜ると、細い腰に手を当てたチナツが、怒ったような表情で立っている姿が視界に飛び込んでくる。

「遅い」

「遅いって……まだ開店には間に合う時間だろ？」

「そういう意味じゃないわよ、女の子をあんまり待たせるもんじやないって言うってんの」

「待っててくれたのか……そりゃ悪かった」

それなら連絡の一つもくれればよかったのに、と言うのは多分野暮なのだろう。

チナツが待っていると知ってたらもうちよつと早く家を出たのに――なんてのも言い訳だな。

少しご機嫌斜めのチナツに俺は素直に頭を下げて、最寄りの駅へと歩き出す。

「わかればいいのよ、わかれば」

「そりゃどうも……つと、チナツ、お前やたら気合い入った荷物持っているけど、なんかあつたのか？」

チナツの左手には大きめのバッグが握られていて、その中身はなんだか知らないけど、はち切れそうなほどに膨らんでいる。

ストライク焰を直すのを手伝ってもらえるのはありがたいけど、まさかそこまで気合いの入った準備が必要なんだろうか。

最低限の工具しか持ってこなかったし、今からでも引き返して色々取りに行くべきなのか？

「アンタのことだからどうせ最低限のものしか持ってこないと思って色々持ってきたのよ、それに、アタシも制作ブースに用はあるしね」

「おお、すげえ……ありがとな、チナツ」

首を傾げて頭上にクエスチョンマークを浮かべていた俺に、呆れた様子で肩を竦めながらチナツは小さくふん、と鼻を鳴らす。

なんだろうな、チナツが今は女神様に見えてきた。

素直に礼を言ったことに機嫌を良くしたのか、チナツの表情が今度はぱあつと明るい笑顔に変わる。

「ふん、そうよ、わかればいいのよ……ねえ、ユウヤ」

「ん、なんだチナツ？ 用があるならなんでも聞くぜ！」

なんでもかんでもしてもらえばなしたのは性に合わない。ただでさえストライク焰を直すのを手伝ってもらえるってのに、工具とかも色々融通してもらえるんだ。

だったらチナツの言うことの一つや二つ、こつちも快く応えてやらなきや筋が通らない。

あいつが言うならジュースでもお高いパンケーキでもなんでも奢らせてもらう……金があるかどうかを密かに確認しつつ、俺は突然頬を赤らめてもじもじとそっぽを向いてしまったチナツに視線を向ける。

「……ん」

「うん？」

その横顔をしばらく眺めていると、どこか遠慮したような様子で、空いていたチナツの右手が控えめに差し出される。

これはつまり、どういうことなのか。

どういふこともなにも、そういうことだよと、反射的にすつとぼけたくなった俺を蹴飛ばすように、理性はそう主張して憚らない。

懐かしいな。

差し出されたチナツの手をそつと握って、その小ささや指の細さに、俺は昔を思い出す。

昔はよく、こいつも喧嘩してたっけ。自分が正しいと信じたことは貫いて、筋が通らない理不尽は決して見逃さず、相手が年上の男子でも果敢に挑みかかつては倒したあと、密かに泣いていたのがチナツだった。

いくらチナツに次元霸王流の心得があるといっても相手は年上の男子で複数人だ。

俺もよくその喧嘩に助太刀として首を突っ込んで、父さん……いや、師匠に、そして母さんにも怒られてたな。次元霸王流は無闇に振りかざすもんじゃないって。

その時は怒られるのに怯えてたチナツと手を繋いで一緒に帰ってたな。何もかも懐かしい……ってほど歳を食ってるわけじゃないけ

どな。

「……アンタにしては気が利くじやない」

「なんか昔みたいだなんて思ってたさ」

「……ああ、そう。でも……今はいいわ。許したげる」

よくわからんけど許された。

俺が握った手に指を絡めて、チナツは肩にもたれかかってくる。

重い、って言ったら怒られるのは当然だとしても、あの頃とは色んなものが全然違うんだなって、改めて思い知った。

チナツ自身のこともそうだし、俺自身のことも、ガンプラのことも、GBNのことも。

そんなセンチメンタルを感じてしまうのは、多分良くないことなんだろうな。

それに、今はストライク焔を直す、というよりは作り直す、リビルドすることが目的なんだ。

だから、今はそんな感傷に見て見ぬ振りをして、俺たちはそれ以上言葉を交わすこともなく、最寄りの駅まで歩いていく。

それでもチナツは機嫌を悪くするどころか、緩み切った笑顔のままだったんだから不思議なもんだ。乙女心、ってやつはどうにも理解が及ばない。

だから唐変木とか言われるんだろうな、と苦笑しながら、俺たちは一路、トワさんたちが待っているお台場へと向かうのだった。



「いつ来ても混んでるわね、ここ」

「凄え……まだ開店前だぜ？」

等身大のユニコーンガンダム立像がお出迎えしてくれるガンダムベース本店が入っている複合ビルの前、俺はその巨体と、開店前だというのに集まっている人々の間で忙しなく視線を往復させる。

お登りさん全開だけど、正直ここまでガンプラとかガンダムとかが人気だとは思ってなかったというか、いや、GBNのアクティブユー

ザーが二千万人だから知ってはいたけど実感できなかつたというか、とにかくそんな感じなのだから仕方ない。

まさかここにいる人たちが全員ガンダムベース目当てってことはないだろうけど、ユニコーンガンダム立像の写真を撮ったり、その前でガンプラを並べてたりする人たちを見ると、八割ぐらいはそんな気がしてきた。

そんな具合にチナツと手を繋いだまま、しばらくユニコーンガンダム立像を見上げていた、その時だった。

「ユウヤ君！ ごめんなさい、お待たせ……？」

「お、マフユか……ってどうしたんだ？」

いつもの袖の丈が盛大に余っているゴスロリドレスに身を包んだマフユがやってきたかと思えば、信じられないものをみたような表情で硬直する。

そして、フリーズしてたかと思えば、次の瞬間にはどこことなく不満げに頬を膨らませて、眦に涙を浮かべながら俺たちに詰め寄ってきた。

チナツもそうだけど、万華鏡みたいに表情が変わるな。

そんなこと言ってる場合じゃないんだろうけど、現実逃避というかそんな具合に思考を逸らしてしまう。

工具とかが詰まっているのであろう大きなバッグを持ってきたマフユは、頬を膨らませたまま詰め寄ってくると、俺の右手に腕を絡ませて、どこことなく抗議するような視線をチナツへと向ける。

こつちに視線を向けてきた野次馬がニュータイプ of 修羅場がどうのこうの、とか囃し立てているけど、それGBNでも聞いたぞ。なんなんだ一体。

「むう……」

「ふふん」

頬を膨らませるマフユと小さく鼻を鳴らすチナツ。その短いやり取りの間に一体どれだけの言葉が詰め込まれていたのかは想像もつかないけど、タダごとでないのは俺にもわかる。

どこことなく険悪な空気を醸し出していた二人は視線を向け合うこ

とで何かに納得したのか、マフユが渋々といった調子で小さく頷くと、俺の右手に絡めている腕に込めた力を強くして、身体を押し付けるようにしなだれかかってきた。

多分針の筈ってのはこういうことをいうんだろうな。通行人や開店待ちの客からの視線が痛い。

「なあ、チナツ、マフユ……ところでトワさんを見なかったか？」

このなんともいたたまれない空気を変えるために、俺はやや強引に引きつった笑みを浮かべながら二人にそう問いかけた。

メツセージには、来ればわかる的なことが書いてあったけど、休日だからか客の数が多いこともあって、それらしき人物を探すのにも一苦労だ。

俺の問いに、どことなく険悪な感じだったチナツとマフユは顔を見合わせると、小さく首を横に振る。

「全然。てかアンタと一緒にだったんだからわかるでしょそんなぐらい」

「私も、今来たばかりだから……」

「それもそうか、仕方ないな……こうなったらダイバーギアでメツセージでも」

「ふふふ……その必要はないよ、少年」

人混みの中から聞き覚えのある声が飛び込んできたのは、そもそも両手が塞がってるからダイバーギアを取り出すのも難しい、というのに気付いた瞬間だった。

まるでタイミングを見計っていたかのように俺たちに近寄ってきたその人は、癖のある……とかほぼ寝癖であろう金髪をポニーテールに結わえて、白衣を私服の上から羽織っているという、GBNで見たのとほとんど同じ格好をしていた。

そして、人差し指で眼鏡のブリッジを持ち上げるその仕草。メツセージで来ればわかる、といっていたのにも納得がいく。

「はろーやーやー、少年少女。こっちでははじめましてかな？ 今日
も青春してるねえ」

「ええと……」

「何を隠そうトワさんがトワさんさ。キジマ・トワ……それがトワさ

んのリアルネームだよ」

隠すもなにも最初から全開にしているようにしか見えなかったトワさんが、GBNと変わらないうような格好で、ほして変わらない言動でふふふ、と不敵に笑う。

確かに来ればわかるといってたのには頷けるけど、それにしたってGBNとリアルでここまで変わらないとは逆に驚きだ。

まあ、あっちじゃ地球連合の軍服を着崩している以外はダイバーネームとダイバールックがほぼ現実そのままな俺が言えたことじゃないんだろうけど。

「はじめまして、トワさん。ええと……キジマ、ってまさか……」

トワさんのリアルネームを聞いたチナツは、驚愕したように何かを言い淀む。

キジマ。キジマ・トワ。脳裏でトワさんの名前を反復していると、俺も記憶のどこかに何か引つかかるものを感じて、首を傾げる。

なんだったかな、確実に聞き覚えはあるんだけど、ド忘れしちまつたのか、思い出せない。

「ふふふ、そのまさかだよ少女。トワさんはキジマ・ウイルフリッド……君の父親と少年の両親とGPDの学生大会、その決勝戦で戦った男の、娘なのさ」

「キジマ・ウイルフリッド……」

確か、四代目メイジン・カワグチを指していたんだったか襲名したんだったかは忘れたけど、その人は確かに師匠の、父さんのライバルだったはずだ。

スミの時といい、こんなところにも血脈に刻み込まれた因縁が転がっていることに、偶然という言葉では片付けられない作為性を感じながら、俺は改めて飄々とした笑顔を浮かべているトワさんの瞳を真っ直ぐに見据える。

「その顔はなにかを疑っているね、少年？」

「いや……気を悪くしちゃったら悪いんですけど、偶然にしちやできすぎてるな、って」

スミは師匠とジュンヤさんの因縁を覚えていたから偶然じゃない

とすれば、トワさんとの縁ができたのは偶然といえるのかもしれないけど、果たして本当にそうなんだろうか。

疑いの目を向ける俺に、大して気を悪くした様子もなくトワさんは悪戯っぽく笑う。

「ふふふ、君は本当に勘が鋭いねえ……最近話題の次元霸王流使い。それだけでトワさんにピンとくるものがあつたのは事実さ」

「じゃあ、ペリシアにいたのも……」

「それは偶然だよ、あるいはトワさんたちの血脈がその運命を引き寄せたのかもしれないけどね？」

出来すぎに見えることだって、蓋を開けてみれば案外そんなものだったりするのさ。

トワさんは飄々とした態度を崩さずに肩を竦めて、何やら重そうなたたしユケースを片手に歩き出す。

血脈の因縁。そして運命。

そんな漫画みたいなことが転がってるだろうかと思っただけど、現にトワさんが俺たちの全てを監視していたわけじゃない以上、その言葉は本当なのだろう。

「なんていうか、漫画みたいね」

「……ユウヤ君の周りには、凄い人が集まるんだ、ね……」

「いやあ……偶然だろ、きつと」

二度はともかく三度続けばそれは偶然じゃあないとか、ドラマの中ではそう言っただけど、例えばダイスを振った時にゾロ目が何度も出ることだってある。

つまりはそういう出来すぎた偶然だって、ないとは言いきれないのだ。

事實は小説より奇なり、っていうしな。

「そろそろ開店だよ、少年少女」

「ああはい、今行きます！ 行こうぜ、チナツ、マフユ」

「わかったわ」

「はい……」

できればその手を離してほしかったんだけどな。

結局エスカレーターに乗るまでの間、チナツとマフユは磁石で引つ付いたかのように、俺の手を握って、あるいは抱き寄せていた。

青春だねえ、と先を行くトワさんがしみじみ呟いていたけど、通行人の視線で針の筵になるのが青春なのかどうかは大いに疑問が残るんだけどな。



トワさんの案内で辿り着いた制作ブースには開店と同時に数人の客が入ってたけど、俺たちが座るだけのスペースは確保されていた。

というか結構な人数揃えても対応できそうな辺りは流石のガンダムベース本店といったところだろうか。

一瞬感心してたけど、俺がここでやるべきことは一つだ。

机の上を持ってきた工具と、バラバラになったストライク焔を並べつつ、俺はトワさんが何やらアタツシユケースの中からタブレット端末を取り出すのを横目に見やる。

多分、あの中に俺に必要なデータとか、そういうのが入っているんだろう。

押し寄せてくる緊張に息を呑む。

「さてさて、GBNでも言わせてもらったけど、トワさんにできることは君の参考になりそうなデータを見せることやちよつとした手伝いぐらいだよ、少年。そこから先は……君だけの新たなガンプラは、君にとつての愛の中からは生まれえないのさ」

「俺の、愛……！」

「そうとも、愛さ。だからトワさんが君に見せるのは——きつと君がもつとストライクガンダムという機体を好きになる、そして『好き』の可能性を広げるためのきつかけさ。なあに、心配はいらない。君ならきつと気付けるはずさ。君なら想像の翼をはためかせ、トワさんの想定を超えたガンプラを作り出してくれると期待しているよ、少年」

一息にそう言い切ると、トワさんはタブレット端末を操作して、ホロスクリーンを映し出す。

その中に収まっている映像は、どれもこれもストライクガンダムという機体が絡んでいるガン普拉バトル、それもGPD時代のものだった。

作り上げて、壊して、また作り直す。その繰り返しだった先達の、その繰り返しを経て洗練されていったストライクガンダムの勇姿が収められた映像に、俺はただのめり込む。

自分の中に、新たな可能性が芽生えようとしている確かな息吹を、高鳴る心臓の鼓動に感じながら。

Ep. 42 「俺の『挑戦』」

「凄え……皆、俺の発想を超えた……俺が想像もできなかったようなカスタムをしてる。それだけじゃねえ、何度も作り上げて、何度も直して……きつとそんな繰り返しで磨きあげられてった『好き』って気持ち伝わってくる！」

トワさんが見せてくれたGPD時代の戦いに、今にもガンブラを作りたいと逸る気持ちと高鳴る鼓動を抑え込みながら、俺はただ目を輝かせていた。

伝説のビルダーにしてファイターであるイオリ・セイさんが残した「ビルドストライクガンダム」の記録。そして、名前は聞いたことないけど、その記録映像から確かにストライクガンダムへの愛が伝わってきた「サツキ・トオル」って人の戦い。

こんな貴重な映像がどこに眠っていたのか、どこから持ってきたのかって疑問はさておくとしても、戦いのログに魅入られてるばかりじゃ始まらない。

俺の、今にも溢れ出しそうな「好き」という思いを、心の形を、ストライク焰の魂を連れたガンブラに吹き込むために、それを作るために、アシムレイトをする時のように呼吸を落ち着かせ、自分の心の奥深くへと、その海の底へと潜っていく。

ストライク焰と共に駆け抜けてきた日々。ストライク焰に残されていた課題。

それを踏まえて、俺が作るべき——小さな相棒の魂を吹き込むに相応しい器の姿を探して、俺はどこまでも深く、深く、自分の記憶と心を辿る。

ガンブラは心の形を表すものだ——心そのままに作るものだと、どこかで聞いた言葉がふと脳裏をよぎって駆け抜けていく。

心の形。チャンピオンと、キョウヤさんと出会ったことで見えてきたものが、ペリシアで見えてきたものが、そしてタイガーウルフさんと拳を交えて伝わってきたものが、メガ粒子杯を勝ち抜いたことで俺が手にしたものがそうであるのなら、それは。

——どこまでも、ずっと、あのGBNの空を羽ばたいていきたい。行き着いた答えは、辿り着いたその言葉は、俺のものだったのか、それともストライク焔のものだったのか。

きっとそれは、両方なのだろう。

閉じていた目を開けて、GPDのアーカイブを真っ直ぐに、心を空っぽにして見据えれば、そこには確かに俺が、ストライク焔が「こうなりたい」と、「こうあつてほしい」と願った姿が鮮烈に浮かび上がってくる。

「ありがとうございます、トワさん！俺ちよつと、素体のガンプラを買いに行つてきます！」

「お役に立てたなら何よりだよ。いいねえ、少年。今の君の瞳には、愛が……溢れんばかりに輝いているよ」

「はい！」

今持っている俺の技術で、俺の発想をどこまで形にできるかはわからない。

それでも、全力でやる。少しでも理想に近づくために、少しでも、ストライク焔が願ったことを形にしてやるために。

だからこそ、これは俺の挑戦だ。

新しい世界に羽ばたくために、新しいガンプラを作り出すために、超えなければいけない壁が立ちはだかつてきたのなら、それをぶつ壊してでも前に進む。

チナツとマフユに手伝ってもらうところもあるかもしれない。だけどその発想は、「どうありたいか」、「どう作りたいか」という願いだけは、俺自身の手で叶えるものだ。

善は急げとばかりに、ガンプラが数多くなんて言葉じゃ片付けられないぐらい並んでいる売り場の中から目当てのものを探して、俺は店を駆けずり回る。

幸い、今はGPD時代に活躍した有名ファイターが使っていたガンプラのレプリカキットも豊富に取り揃えてある。

だから、ベースになるストライク系の選定にはそんなに困ることはなかったけど、一つだけ懸念があった。

こう言ったら失礼なのかもしれないけど、そこまで有名じゃないファイターが使っていた機体のレプリカまでは流石に売ってないんじゃないか——そう思いながらレプリカキットのコーナーを回っていたら。

「マジか、あるのかよ!?!」

流石に厳しいかと思っていたストライク系列のレプリカが、値段こそ張るものの、そこには確かに鎮座していた。

その箱には版元のロゴと、元のファイターから正式な許可を得た証であるパッケージアートに添えられた写真とコピーライト、そしてもう一つ、普通のガンプラには見られないロゴが版元の隣に押されている。

コトモリ財団。聞いたことはないけど、レプリカキットの製作に何かしら囁んでいるのであろうその名前を一瞥して、俺は幸運にも残り一個だったその箱をカゴに放り込む。

「残り一個……危ねーところだったな」

色んな意味で奇跡を感じる。ガンダム的にいえば、俺、神様信じる! っつてやつだろうか。

ともかくにもこれでベースの選定は終わった。あとは俺の中に構想だけが存在していた武装類のミキシングをするために必要なガンプラを買うだけだ。

そんな具合にすっかり浮き足立って歩いていたのが悪かったのかもしれない。

どん、と何かにぶつかったような鈍い感触が伝わってくる。

どうやら他の客と体をぶつけてしまったらしい。

「すみません、俺、ぼーっとしてて……!」

「ああいえ、大丈夫です! 俺もちよつと考え事してただけですから!」

「リツくん、大丈夫?」

「ちよつとー、ちゃんと前見て歩いてくださいよー!」

「すみません……」

金髪的眼鏡男子にリツくんと呼ばれていた、俺がぶつかってしまった

た同い年ぐらいの男子は、鼻の頭を指先で摩ると悪くないのにわざわざ頭を下げてくれる。

友達と思しき赤毛の女の子はご立腹だったけど、ぐうの音も出ねえ。

仮称リックくんさんが優しくなかったら、今頃俺は大分面倒な事態に巻き込まれてたことだろう。自業自得といわれればそれまでだけど。

「ええと……リックくんさん？ 改めてすみませんでした！」

「リックくんさん……なんか面白い呼び方ですね。えっと、俺、リックです。ミカミ・リックつていいます！」

「リックさんか、さっきは本当に申し訳ない！」

「そんな！ 俺だってぼーっとしてましたし……それに、リックでいいですよ！」

なんだか大人びているというか礼儀正しいというか、俺よりよっぽど人間できてるな。

リックはどこか照れ臭そうに笑うと、これもなにかの縁だとばかりに手を差し伸べてくる。

「俺はユウヤ。カミキ・ユウヤだ！ ここで会ったのもなにかの縁だ、こっちもタメで構わねえ。よろしくな、リック！」

「はー！」

俺もまたその手を握り返す。細身だけど、どことなく筋肉質な、だけどまだ柔らかい手だ。ただ、よく見れば脚は引き締まってるし、サッカーでもやってるんだろうか。

詮索するだけ野暮つてもんか。でも、次元霸王流を習ったらいい線行きそうな身体をしてるな。習ってないのが惜しいぐらいだ。

健全な精神は健全な肉体に、なんて古臭いことをいうつもりはないけど、その礼儀正しさもきつとスポーツマンシップから来ているものなのかもしれない。

「ユウヤさん、クロスボーンガンダムを探してたんですか？」

リックの隣にいた金髪眼鏡の男子が、藪から棒にそんなことを問いかけてくる。

「よくわかったつすね、えっと……」

「あ、僕はヒダカ・ユキオです！ ガンダム ベースって作品のシリーズごとに売り場が分かれてますから」

「そうだったのか……えっと、当たりつす。ビームザンバー？ ってのが欲しくて探してたんです」

「ビーム・ザンバー……なるほど、ユウヤさんの選んだキットと合わせて……高機動近接型のビルドなんですね！」

「凄え。俺のカゴを見ただけで今から作ろうとしたガンプラの方向性がわかるなんて、ユキオさんも、もしかしたら相当腕が立つビルダーなのかもしれない。」

「ビームザンバーを選んだ理由は単純に格好いいってのもあれば、ヴァルガでクロスボーンガンダムと戦った時にピンときたのもある。」

「マスダイバーの、「シヤドウロール」の乱入でうやむやになってしまったけど、俺たちの中で相手のビームシールドを貫ける武器を持っているのがチナツだけだ、ってのもある。」

「マフユから聞いた話では、ビームザンバーはビームシールドを上から叩き斬れるらしい。だから、それをちよつとコスミック・イラ風にアレンジしてみようと思ったのだ。」

「へー、あたしはよくわからないですけど、ユウヤさんもGBNやってるんですか？」

「一応つすけど……えっと」

「モモカ。ヤシロ・モモカです！」

「ああ、モモカさん！」

「もうこんな時間……すみませんユウヤさん、それじゃあ俺たち、GBNにログインするんで！」

「ああ、足止めして悪かったな、リク！ あつちで会ったらその時はまたよろしくな！」

「はいー」

スマホで時間を確認して、リクたち三人組はゲームブースの方に駆け出していく。

リク、か。なんだか気風のいいやつだったな。

そんなことを考えながら、なんともなしにポケットからスマホを取

り出して時間を見れば、結構な時間が経っていた。そういや、俺ものんびりしてる暇はないんだ。

確かX-1だったはずの白いクロスボーンガンダムと何枚かのデカールを慌ててカゴに放り込み、俺は会計に早歩きで向かう。

「お会計の方、こちらになりませう」

愛想よく笑うエプロンのお姉さんがレジに表示した金額を、俺は思わず二度見した。いや、払えないわけじゃないけど。

高額なレプリカキットを買ったせいか、多めに持ってきたはずのバイト代が結構ごっそりと削られる感覚にげっそりしつつも、これは先行投資、必要な買い物なのだと自分に言い聞かせて俺は万札に別れを告げる。

さらば万札、お前のことは忘れないぞ。

そんな冗談を頭の片隅に浮かべつつ、俺は会計を済ませた商品を手にも、製作ブースへと引き返していく。

全ては、ストライク焰の魂を連れた新しいガンプラを作るために。俺の想像を、「こうありたい」と思った心を形にするために。



「そのパーツ、まだ傷付いてるわよ」

製作ブースに戻って一時間近く。とりあえずはチナツとマフユの協力を得ながらパーツのやすりがけや必要な部分の接着と表面処理、そして使えそうなストライク焰のパーツの移植を済ませてサーフェイサーを吹いた素体を眺めて、チナツは自分のガンプラを組み立てながら、そう呟く。

「マジか、結構頑張ってやすりがけしたんだけどな……」

「一回で済むと思わないことよ、それに一回サーフェイサーを組んだまま吹き付けるのは、傷をチェックする意味合いの方が強いもの」

「なるほどな……」

「……と、特に……今回ユウヤ君がメタリック塗装をしたい、って言った部分は、傷の影響をたくさん受ける、から……」

「ありがとな、チナツ、マフユ！ よし……また表面処理だ！」

欲しかったパーツを寄せ集めて素組みする段階を二人が手伝ってくれたおかげで、予定してたよりも早く進捗は上がっている。

だから、まだ焦る時間じゃない。

ビームザンバーと、それをマウントするためのサイドアーマーをクロスボーンガンダムX1から持ってきた素体を手に取って、俺はストライク焰と同じメタリックオレンジに塗る予定だったところに、細かい番手でのやすりがけを慎重にやっっていく。

ビームザンバーは、確かザンバスターとかいう合体銃になる機構を省いた代わりに、先端をちよつとだけ改造してある。

そしてストライクの腕も、微妙に構造を変えて、他のキットから持ってきたパーツを接着してある。

「えつと……ユウヤ君、ここに隙間ができてるから、パテで埋めておく、ね……？」

「ごめん、ありがとなマフユ！」

ただ、その接着面に微妙な隙間ができていたらしく、マフユはメタリックオレンジに塗る予定だったパーツを一通り取り除いたストライクの素体を手に取ると、あらかじめチナツが用意していた粘土のような物体を爪楊枝でそつと詰め込む。

パテ、っていうのかあは。知らないことばかりで、ガンプラの奥の深さと、俺がまだまだビルダーとしては未熟だということを思い知る。

消したつもり合わせ目が凹んでいないか、そして二度目のサーフェイサーを吹き付けてメタリック塗装を予定しているパーツに傷がついていないか。

確認しなきゃいけないことや、やらなきゃいけないことは沢山だ。だけど、その一つ一つをクリアしていくことが、その一つ一つに挑戦していくことが、俺とストライク焰を高めへと押し上げてくれるなら、全力でやる他にない。

「ふむ……少年、そのパーツはメタルパーツに置き換ええないのかい？」

「メタルパーツ？」

「なに、そのままそっくりその通りの意味さ。金属製のパーツだよ。その銃口……ビームサーベルの余剰を利用して作ったのは素晴らしい発想だけど、より威力を高めたいならそれもおすすめさ」

無理にとは言わないけどね、と前置きすると、トワさんは机の上に横たわっていた二丁のビームピストルを手にとって、穴が空くように凝視する。

なるほど、それもまた課題の一つってことか。

サーフェイサーを吹いたパーツからほぼ完全に傷が消えていることに安堵していたのも束の間、新しい壁が聳え立つ。

「わかりました、俺、メタルパーツ買ってきます！」

「ああいや、ここでは売ってないよ、少年。半ば公認されてるとはいえ、外部製品だからね」

「マジっすか……」

使おうと思ったものが売ってないってのは中々にショックというか、やるせない思いが漂ってくるな。

俺が肩を落とすことを見透かしていたかのように、トワさんはぽん、と俺の肩を叩くと、手のひらに何か金属みたいな光沢を放つ小さなパーツが入っている小さな袋を乗せて、差し出してくる。

「なに、気落ちすることはない。そんなわけでトワさんからのプレゼントさ、受け取ってくれたまえよ」

「これがメタルパーツ……いいんですか？」

「構わないとも。ただし組み付け方は少年、君が調べてくれたまえよ」「わかりました！」

ビームピストルもどうやら修正が必要になってくるようだ。トワさんが机に置いた二丁を手にとって、俺はまずビームサーベルの余剰で作った銃口を引き剥がす。

当然表面は荒れてるからそこにやすりを当て直して、トワさんからもらったメタルパーツを、作業の片手間に調べた通りに接着して。

チナツが貸してくれたプライマーとやらを塗布することで、とりあえずは乾燥待ちってことで一段落。冗談でもなんでもなく、全身の力

が抜けそうだった。

「つ、疲れる……」

「そ、ガンプラと向き合うって思ったより体力と集中力持ってかれるでしょ?」

「ああ……本当、チナツも、マフユも、トワさんも……ありがとう。皆が手伝ってくれなきゃ、俺……」

「おっと。感傷に浸るのは完成してからだ、少年。まだまだ工程は残っているよ?」

「……マジっすか……」

「が、頑張ろう……ユウヤ君。私も一緒に頑張る、よ……?」

「ありがとな、マフユ……よし、気合入れ直していくか!」

ぐつ、と拳を固めて、上目遣いに瞳を覗き込みながら囁いてきたマフユの言葉に応えると、俺はまずマフユが腕の隙間に詰めてくれたパテの成形に着手した。

これははみ出たところを削るだけで終わるから楽な方だ。

だけど、今度は詰めたところに隙間ができてないかとかを確認しなきゃいけないから、気を抜いていい訳じゃない。

そうして、いつか「クオン」さんがやってたようにKPSのプラ板を切り出して、俺が構想しているユニットの接続アームを作ったり、そのズレを修正するためにもう一度やすりがけをしたり——例えば、やすりかけてばっかだな。

それはともかく、あれこれと必要な作業をしている間にもあつという間に時間は過ぎていって、本塗装に入れたのも、ほとんど夕陽が沈みかけていた頃だった。

ただ、エツジのシャープ化だとか、額のパーツは元のクリアパーツを活かしたりだとか、成型の都合上色分けされてない部分をマスキングで塗り分けしたりだとか、あれこれ手間をかけてきただけはある。

本塗装が済んで仮組みを済ませる頃には、概ね俺が思い描いていた通りのストライクが作業机の上に直立していた。

「こいつが、俺の思い描いた新しいストライク……!」

「ふーん、アンタにしては悪くないわね」

「ユウヤ君、凄く頑張ってたから……それが、とつても伝わってくる、よ……」

あとは細々したデカール貼りとか、作業はまだ残ってるけど、それはマフユが協力してくれるおかげで、どうにか閉店前には終わりそうだ。

トップコートを使い分けるために一旦メタリックオレンジのパーツを分解し、貼れそうなパーツに切り出したデカールを貼り付けていく。

この辺は記録映像の見様見真似とフィーリングだけど、デカールを貼り付けるとなんとなく「本物」っぽくなっていく感覚は小気味いい。一人でやったら気が遠くなりそうだけどな。



「大体こんなもんか……って、もうこんな時間か」

「集中してしていると、時間が早く感じちゃうよ、ね……」

「ああ、でもトップコートは多分間に合う！　今まで手伝ってくれてありがとな、マフユ、チナツ、トワさん！」

俺は心の底から感謝を込めて、三人に腰を折って頭を下げた。

「どういたしまして。アタシは自分の作業と並行してだったからあんまり役に立てなかったかもだけど」

「……私も、ユウヤ君のお手伝いできてたなら、嬉しい、な……えへへ」

「なに、礼には及ばないよ少年」

チナツはどこか素直じゃなくて、だけど確かに礼を返してくれて。マフユは照れてしまったのか、顔を真っ赤に染めながら柔らかくはにかんで、トワさんは腕を組んで静かに頷いて。

まさしく三者三様といった感じの反応に俺も安心するやらありがたいやらでどこか照れくさくなって、小さな笑いが込み上げてくる。

「そして少年、トワさんからの最後のプレゼントを受け取ってくれたまえ」

鷹揚に頷いていたトワさんはアタッシユケースの中から小瓶を取り出すと、それを俺の手に握らせてきた。

見た感じ、微かに虹色の輝きが揺らめく透明な液体って感じだけど、なんなんだろうか。

「ありがとうございます！ それで……なんつすか、これ？」

「それはプリズム光沢トップコート……トワさんが研究開発した、パールコートともまた違う塗料さ。詳しい原理はさておくとして、こいつは輝きを増すメタリック塗装と相性がいい。かの『ヨノモリ塗料』のコーティングにも勝るとも劣らない……と、トワさんは思っているよ！」

研究開発したって。

この人の本職がなんなのか一瞬気になって呆気にとられたけど、ネトゲの知り合いのリアルを、本人が望んでなさそうなのに訊くだけ野暮ってもんだ。

「ん？ ああ、トワさんのリアルなら研究者だよ。ちよつとばかり塗料の研究をしていてね」

将来的にはゲーミング塗料とか作ってみたいねえ、と、俺の心を読んだかのようにそう言うと、トワさんは目を伏せて頷いてみせる。

ゲーミング塗料か。約一千万だったかの色に輝く塗料ってのはイメージつかないけど、多分このトップコートも、その過程で生まれたものなんだろう。

「ありがとうございます、俺、早速使ってみます！」

「うむ、希釈済みだからそのままエアブラシに入れるだけで使えるよ、少年」

言われた通り、エアブラシに充填したそのプリズム光沢トップコートをメタリックオレンジのパーツに吹き付ければ、メタリックカラーが光沢を帯びるだけじゃなく、その輝きに複雑な深みが生まれる。

ヨノモリ塗料とやらがどんなものなのかはわからないけど、トワさんの塗料は、俺にとって十分すぎるほど凄いものだった。

「凄え……これでは本体につや消しを吹けば……！」

「いいコントラストが生まれるだろうねえ。さてさて少年、善は急げ

だ。そろそろ蛍の光が聞こえてきそうだよ」

「はい！」

ガンダムベースの塗装ブースに乾燥機が置いてあって助かった。

もう夜の帳は降り切っている。もしなかったら、とつくに蛍の光が流れているところだったはずだ。

つや消しをある程度組みつけてから吹き付けて、乾燥したら関節や可動部を曲げて、隠れていた隙間もちゃんとコートして。

そうして最後の組み立てを終えれば、俺の思い描いた新たなストライクが、作業机という名の大地に立つ。

「完成したのね。いいじゃない」

「わあ、凄い……！」

「うむ、『愛』を感じるいい出来だねえ……時に少年、この機体の名前を決めてあるのかい？」

チナツたちは、完成した新たなストライクを色んな角度から眺めて、それぞれに感想を口に出す。

そして、トワさんから投げかけられた問いに、俺はこいつを組み上げた時から、いや、きつとその前から決まっていた名前を、「こうありたい」という願いを、チナツに、マフユに、そしてトワさんに向き直って、言葉に紡ぐ。

「ストライクガンダム……俺の『好き』って気持ちと『挑戦』を形にしたガン普拉、こいつの名前は……ストライクガンダムスフィードだ！」

しれっと塗装の乾燥待ち中にスマホで調べていた「トライ」の言い換えを、チャレンジャーとして常に挑み続けたいという俺の願いと、ストライク焰の魂を名付けの祈りにして、新たなストライク改め、ストライクスフィードへと託す。

何事にも挑み続ける。どんなに高い限界だってかき消して、限界なんかないと自分に言い聞かせ、いつか高みに上り詰めるという思いと願う。

それこそが、俺の「挑戦」なのだから。

Ep. 43 「鉄仮面ズ」

ストライク焰の魂を連れた新機体、ストライクスファイダーを完成させた翌日。

善は急げとばかりに、学校から帰っていつもの稽古と風呂、夜飯その他を済ませた上で俺はストライクスファイダーをダイバーギアの上に乗せて、GBNへとログインしていた。

たった数日離れてただけなのに、随分と懐かしい気がしてくる辺り、俺もすっかりこの世界に対する愛着みたいなのは持ち合わせてしまったらしい。

「あらあ、ユウヤ君じゃない！ メガ粒子杯の決勝戦以来かしら？ 見てたわよ、アナタの活躍」

「マギーさん！」

その声が聞こえたのは、とりあえずはマフユがいつも待ってる場所に行つてからフォースネストにワープするかと思つて歩き出した時だった。

てつきり何か嫌なことでもあつたのかつて心配だったのよお、と、マギーさんは本当に心配そうな表情でそう迫ってくる。

なんというか、色々とキャラが濃い人ではあるけどこの人は純粹にいい人なんだろう。他人の不幸を肩に乗せられて、他人の幸せを喜べるやつこそ本当に強い。師匠の言葉だ。

「リアルで色々あつて、その……新しい機体を作つてたんです」

「あら！ それは……素晴らしいことばかりじゃないわね。でも悲しみを乗り越えて作ったガンプラなんでしょう？ よければアタシにも見せてもらつていいかしら？」

「はいー」

俺はマギーさんの言葉に応えて、エリアを格納庫に切り替える。

そこには、十八メートルサイズに拡大されたストライクスファイダーが、出撃の瞬間を今か今かと待ち望んでいるように佇んでいた。

今日ログインしたのは他でもなく、ストライクスファイダーの初陣を飾るためだ。

チナツはまだ新機体の完成にちよつと時間がかかるからつて言つてたし、今日はログインしないみたいだけど、その分スミ……こつちではジエニだったな——はガンプラを修理してたみたいで、ログインしてくれる旨を伝えてくれている。

マフユと合わせて一応三人は確保できている。そんな状況だった。「そのガンプラ、燃えてる……」

囁くような声で、そんな言葉が耳朶に触れる。

聞いたことのない声の主は振り返った俺の背後、マギーさんの隣にいつの間にか立つて、小首を傾げていた。

燃えてる。見た感じ物理的な意味じゃないよな。じゃああれか、こいつは、スフィードは今、闘志に満ち溢れてる、つてことか。

「えつと……ガンプラの気持ちとかわかる人なんつすか？」

「うん……そのガンプラ、とつても喜んでる。生まれてきてよかつたつて、もつとあなたと一緒に戦いたいって、そう言ってる」

いつの間やらマギーさんの隣に立っていた銀髪の不思議な女の子は、柔和な笑みを浮かべると、ストライクスフィードのツインアイを一瞥して、微笑みかけてくる。

嘘か本当かはわからない。ガンプラは喋らないから、この子の言葉を聞いたやつが、そんなの嘘だつて思うのも無理はないだろう。

でも、俺にはどうしてかその言葉が嘘には聞こえなかった。根拠こそなくても、きつとこの子は本当のことを言ってくれているという確信があったのだ。

「あらあ。サラちゃん、いつの間に……紹介するわね、この子はサラちゃん。フォース『ビルドダイバーズ』の一員よ」

「ビルドダイバーズ……聞いたことないですね」

「あら、そうなの？　なら、調べる価値はあるつて言っておくわよお」ビルドダイバーズは、今をときめく超新星なんだから。マギーさんはウインクを飛ばしながら、そう断言する。

それにしてもビルドダイバーズのサラか。あたたかくて優しいそうだな子だとは思うけど、なんか底知れない感じもして、不思議な感じだ。「それにしても、額の赤いクリアパーツに翼を増やしたユニット……」

ふふ、これ以上語るのは野暮ね。いいガン普拉を見せてもらったわ。この子のデビュー戦が楽しみね」

「ありがとうございます！ ちょっとヒントをもらったり、手伝ったりしてもらいましたけど、こいつは今の俺にできることを詰め込んだつもりですから！」

「そうね、サラちゃんが言った通り……アナタと一緒に戦いたくてもうずうずしてるみたい。まさしく燃え盛る愛の炎のようなガン普拉ね！」

組み込んだストライク焰のパーツも、一から表面処理と塗装をやり直す程度には気合と魂を込めて作ったのがスフィードだ。

マギーさんほどの人にそう言ってもらえるのは素直に嬉しい。

「それじゃまた、何かあれば！」

「ええ、デビュー戦、応援してるわよお！」

「ばいばい、ユウヤ……スフィード。頑張ってる！」

俺はエリアをセントラル・ロビーに切り替えて、マギーさんと、ビルドダイバーズのサラって子の二人組と別れると、マフユがいつも待っている場所へと駆け出していく。

マギーさんたちにスフィードを披露してた分ちよつとだけ遅くなっちゃったけど、そこにはいつもと変わらず、マフユが壁にもたれかかっている姿があった。

「悪い、マフユ。ちよつと遅れちゃって」

「ううん、大丈夫……マギーさんたちとお話してた、の……？」

「ああ、スフィードをお披露目してたんだ」

あの人には、ヤスとかいう変なやつから助けてもらった恩があるしな。

間接的とはいえ、トワさんを介してタイガーウルフさんに引き合わせてくれた人でもある。そう考えると、マギーさんの人脈の広さはGNでも指折りなのかもしれない。

「そう、なんだ……それなら今日のフリーバトル……負けられない、ね……！」

「ああ！ まずは募集に乗ってくれるかどうかだけど……」

「それなら、通知欄開けばいいんじゃない?」

聞き慣れた声と共に、ブロックノイズが寄り集まってテクスチャを再構成していく様子が目に映る。

そうして構築された姿は、礼服に銀のティアラと、いつものでかいツインテール。

意外なことに、そこに現れたのは後継機を作っているはずのチナツだった。

「チナツ、お前今日ログインしないんじゃないのか?」

「ガンダムベースで大体作業は終わってたから、ちよつと急ぎで仕上げたのよ。アンタと、その……一緒にデビュー戦したかったし」

微かに視線を逸らしながら、頬を赤らめてチナツは言う。

お互いに新しいガンプラをお披露目したいって気持ちはなんとなくだけどわかる。

そう考えると、スフィードだけじゃなくてチナツにとつての新しいシックザールのデビュー戦だ。尚更負けられなくなってきたな。

「そりゃ嬉しいけど、ガンプラのクオリティとかは……心配ないか」

「よくわかってるじゃない。例え急ぎだつて、アタシの辞書に妥協の文字はないわ」

俺の心配を吹き飛ばすように、チナツはとんと心臓の辺りを拳で軽く叩いて笑ってみせる。

スフィードを作る時に俺の手伝いと並行しながら新作を作っていたチナツだ。その言葉は信じていいのだろう。

それに、こいつが妥協を何よりも嫌ってるのは昔から知ってることだしな。何事にも、どんな状況にも全力で挑む。それがチナツという女だ。

「それじゃ一旦、フォー스ネストに移動するか!」

「アタシはそれで異存ないわよ」

「はい……っ!」

チナツとマフユの同意を得られたところで俺はフォー스ネストへの転移を選択、それに相乗りする形でチナツとマフユもダイバールックが解けて、セントラル・ロビーから転送されていく。

ゲームの中で再ログインするような感覚と共に俺もまた数秒の内に意識とアバターが再構築されて、人波に溢れていた景色が、戦艦の一室みたいな殺風景なものに切り替わる。

初期に支給されるものだけあってそれなりに手狭なそこには、既にログインと転送を済ませていたジェニが壁にもたれかかっている姿があった。

……なんというか、出会った頃とは違って随分ガリーな服装で。ポニーテールに括っていた髪は解いてるし、上着はフード付きのコートこそ羽織ってるけど、袖がないセーターの真ん中、ちょうど胸の谷間はハート型に開いているし、下の方はショートパンツだ。

なんというか、一念発起ってやつなんだろうか。その割には平然としていて、俺は少し困惑する。

「遅い。何をしていたの」

「悪い。ちよつとした野暮用と待ち合わせだよ」

「そう……なら次は私にも連絡しなさい」

それが好きになる相手への礼儀というものでしょう、とジェニはよくわからない理屈を並べ立てたけど、要するに寂しかったのだろう。

そんな、確定事項みたいに言い切ったジェニの言葉に、チナツとマフユが顔を見合わせて、鏡合わせのように頬を膨らませる。

ファーストコンタクトの印象がよくなかったのはわかるけど、今は同じフォースの、トライダイバーズのメンバーなんだから打ち解けてほしい限りだ。ジェニもジェニで、誤解を招くような言い方はやめてほしい。

「誤解も何もそうなると決まっていること」

「決まってるわいよー!」

「……そ、そうです……っ!」

「……ユウヤ、罪な男。だとしても私のお父さんとお母さんがそうだったように、運命は自らの手で勝ち取るもの」

それがお母さんの教え、とジェニはそう断言する。

ジュンヤさんに会った記憶は既に朧気だし、ましてやそのパートナーの記憶なんて皆無に等しいけど、なんというか、色々強烈な人

だったみたいだな。

ジエニが思い込んだら一直線なのはそんな母親に似たからなのかもしれない。

「そうね、アンタもたまにはいいこと言うじゃない。アタシのウイニングロードはアタシが勝ち取る」

「……わ、私だって……っ！」

「そう。ところでユウヤ、フォース戦をするという話だったけど、具体的には何をやるの」

チナツとマフユが叩き返した宣戦布告——そもそも何と戦うっていうんだ——を華麗に躲けてみせたジエニは、何事もなかったかのようにならそう問いかけてくる。

「とりあえず通知開けてチナツに言われてるから……つと、なんだこの数!?!」

相変わらず開かない通知欄を開けてみると、そこにはフォース戦の申し込みと思しきものが、「GHC」の特務分隊と戦った時以上に殺到していた。

一通一通開封してたら夜が明けそうなぐらいに溜まってるのはあれか、メガ粒子杯の影響か。

唐変木だの朴念仁だの言われる俺でもそれぐらいは察しがつく。強いやつと戦ってみたい。噂の相手と一戦交えたい。好戦的なファイターならきつと、誰しもそう考えるだろう。

そう考えると俺も一角の強者として認められたってことなんだろうか。

それは素直に嬉しいけど、そこにあぐらを掻くわけにはいかない。

いくらメガ粒子杯で優勝を取めたからといっても、まだまだタイガーウルフさんやキョウスケさん、キョウヤさんのような「高み」には程遠いのが現実だ。

それに、いつだってチャレンジャーでいたいという気持ちで作ったのがストライクスファイダーなんだからな。

そんな具合にぴしやりと両頬を叩いて気合を入れ直し、溜まっていたメツセージをスクロールする。

時間とか実力とかが合う適当なフォースが見つければいいんだけど、そうすると申し訳ないけど古いものよりも新しいものを辿った方が良さそうだった。

「とりあえず最近来た申し込み、っと……」

「これなんかいいんじゃないの?」

「どれどれ、『鉄仮面ズ』……?」

「……そ、そこ……結構有名で強いフォースだ、よ……?」

「私はどれでも構わない。ユウヤの好きにして」

チナツが指定した鉄仮面ズなるフォースはマフユ曰く結構有名なところらしい。

清々しいまでに丸投げしてきたジエニを横目に苦笑を浮かべつつ、俺はとりあえずコンソールを開いて、wikiかなんかに載ってないもんかと「鉄仮面ズ」で検索する。

「なになに……? 『フォースメンバー全員が歴代ガンダムに出てきた仮面キャラのコスプレをしていて、ガンプラもそれに因んだものになっているが、一発ネタ止まりではなく高いランクを維持しているフォース』か……」

概要を流し読みする限り、マフユが言った通りの強豪って感じだな。

注釈にはあのアトミラルさんが「あのリーダーとはサシではやり合いたくない」とか言ってたなんてことも載せられている。確かアトミラルさんの順位って、三桁だったはずだよな?」

そんな人に警戒されるレベルのフォースか。今の俺たちからすれば、確かに無謀な挑戦なのかもしれない。

だったら逆に考えればいい。スフィードがどこまでやれるのか、今の俺がどこまで通用するのか、腕試しとしてみるか!

「俺はチナツの案に賛成だけど、マフユはどうなんだ?」

ジエニがなんでもいって言った都合、多数決に従うなら「鉄仮面ズ」と戦うことになるけど、格上に挑むんだから、マフユの意見もちやんと聞いておきたい。

俺に合わせなくても大丈夫だと、そう付け加えた上で、ぐるぐると

宙を彷徨っていたマフユの視線を真っ直ぐに見る。

もちろん、マフユが嫌だと言ったら、別なフォースを探すつもりだ。

「うん、大丈夫……ユウヤ君が、いるから。私も……戦う、よ……！」

一分ほどの時間をかけて、マフユは息を呑むと、意を決したように小さく頷く。

「ありがとな、マフユ！ それじゃあ『鉄仮面ズ』とフォース戦と洒落込むか！」

「いいわね、燃えてきたわ！」

「お、おーっ……！」

「……別に、なんでも誰でも構わない」

イベントバトルじゃなくて、あくまでもフリーバトル申請ということで、指定されていた待ち合わせ場所である、セントラル・エリアのバーに俺たちは再び転移する。

そうして、そこに待っていたのは。

「君たちが噂の『トライダイバーズ』かな。我々の挑戦状を受け取っていただけたようで光荣だよ」

機動戦士ガンダムF91に出てくる鉄仮面と、それを取り巻くように顎が割れているシャア・アズナブルや、小太りのミスター・ブシドー、そして微妙にパチモノっぽいハリー・オードのダイバールックをしたダイバーたちだった。

鉄仮面さんの再現度はめちゃくちゃ高いけど、なんというか他のメンバーは「あえてパチモノっぽく揃えてみる」というこだわりすら感じるレベルで絶妙に本物感がない。

そういうところが、ネタフォースとして名を馳せている理由なのだろう。

だけど、見た目に騙されちゃいけない。

いつだって勝負の場に持ち込まれるのは本質なのだから。

拳は正直で嘘をつけない。師匠の言葉だ。

その証拠に、鉄仮面さんから漂ってくるオーラは、紛れもなく強者に特有な、向かい風のような圧を感じさせるものだった。

「はい、俺たちが『トライダイバーズ』です！ 今日『鉄仮面ズ』の

皆さんに胸を借りるつもりでここに来ました！」

「ほう……我々の実力を知って尚挑んでくるとは、好ましい」

「これが若さか……」

「ユニバース……」

「この気持ち！ まさしく愛だ！」

鉄仮面さんが鷹揚に頷きながら呟いたのに同調して、他のメンバーもまたそれっぽいガンダムの名台詞を口にする。

いや、若さだの愛だのはともかくユニバースってなんだよ。

ロールプレイなのはわかっているけどどこことなく気が抜けそうなそのテンションに引きずり込まれかけたけど、危ないところだった。

これも戦う相手の闘志を削ぐための番外戦術の一種なのかもしれない。

そう考えると、一層気合を入れ直さないと。

格納庫でやったように、感触はなくても俺はぴしやりと強く両頬を叩く。

「……多分あの人たち、何も考えてないと思うわよ」

「……あ、あはは……」

「それで、ここにいる四人が対戦相手？」

どこか呆れたようなチナツとマフユ、そして気合を入れ直していた俺を一瞥すると、ジエニが淡々と鉄仮面さんへそう問いかける。

「いかにも。我がフォースの精鋭を揃えてきたつもりだ。そちらが四人に増えているとは聞いていなかったがね」

「なんていうか……突然のことだったんで」

「構わないよ、ユウヤ君。むしろこれで人数差という条件は埋まった。誰の良心も傷めぬ公平なバトルだ」

鉄仮面さんはそう頷くと、フリーバトル申請へと手を伸ばす。

フォースの精鋭を連れてきてくれたってことは、それだけ俺たちの実力が高く買われてるってことだ。

それ自体は光栄だと思う。嬉しくもある。

だけど、それは相手が俺たちに相応のバトルを期待してくれてるということだ。

だったら無様な戦いをするわけにもいかないし、尚更負けるわけにはいかない。

鉄仮面さんから送られてきたフリーバトル申請を承諾して、合意が成立したことで、俺たちは格納庫へと転送されていく。

「いい、ユウヤ、マフユ、ジェニ。相手はガチのガチで固めたフォースよ。一筋縄じゃないわい」

「わかってる。油断するつもりはない」

「……私も、全力で頑張り、ます……！」

「ああ！ スファイダのデビュー戦だ、最初から全力で行くぜ！」

カタパルトにスファイダの脚部が固定されて、シグナルが赤から青へと変わる。

「これがお前の初陣だ。勝っても負けても、全力を尽くそうぜ、スファイダ。」

「カミキ・ユウヤ！ ストライクガンダムスファイダ、出るぜ！」

お決まりの出撃台詞と共に、俺たちはバトルフィールドに選ばれた漆黒の宇宙へと飛び出してゆくのだった。

Ep. 44 「疾風チャレンジャー」

「コウサカ・チナツ！ ウイニングロードアストレイ、出撃するわー！」
「……ま、マフユは、G-エクリプティカで出ます！」

「……ジエニ。プライドマスターガンダムで出る」

俺に続く形で、チナツたちの機体がゲートを通って戦場へとその姿を表す。

そうして、全員がバトルフィールドに揃ったことを確認して、システムがバトルの開始を告げる。

チナツの新機体がロードアストレイをベースにしたのはガンダムベースで作業してたからわかってたけど、ジエニもまた、プライドバーニングを修理するんじゃないかと、新しいガンπραを作り上げたらしい。

ロードアストレイにデステイニーの翼とパルマ・フィオキーナ、そしてシツクザールの時のロングライフルを手持ち式に改造したチナツのウイニングロードアストレイ。

そして、ディナイアルガンダムの頭にトライバーニングガンダムの胴体、ブレイジングガンダムの下半身にゴッドガンダムの腕という格闘系でまとめたジエニのプライドマスター。どっちもやりたいことが明白で、いいコンセプトのガンプラだ。

マフユのG-エクリプティカも、ひっそりと作っていたのか、新しい武装、多分手持ち式のビームキャノンを二丁構えている。

「へへっ……皆、いい感じだな！」

「当然！」

「私も、頑張った……よ……！」

「……これぐらいは当然」

通信ウインドウに映るチナツたちの表情は三者三様って感じだけど、気合は十分に伝わってきた。

あとは「鉄仮面ズ」がどう打って出てくるかだ。

「チナツ、索敵どうだ!？」

「問題ないわ、データリンク！」

「サンキューー！ さて、どう来る……!?」

チナツのウイニングロードアストレイから転送されてきたデータを見るに、相手の陣形は、隊長機を前に出したオーソドックスなものだった。

つまり、小細工なしで真正面からの殴り合いをこそ希望ってことだ。そうだってんなら話は早い。

なら、こつちも全力で応じるだけだ、といきたいところだけど、まさか有名フォースが何も考えずに突撃陣形を取っているわけじゃないだろう。

「探りを入れるわ、マフユ、手伝って！」

「は、はい……っ、チナツさん……！」

相手からの攻撃はまだ飛んでこない。

つまりチナツとマフユがアウトレンジからの攻撃を得意としているなら、アドバンテージはまだこちらにあるということだ。

ウイニングロードアストレイが構えた長距離長射程ビーム砲と、G―エクリプティカが構えた二丁のビームキャノンから閃光が迸る。

『アウトレンジ攻撃とは……御し難い』

『ユニバーズ！』

案の定、相手はそれを想定していたかのように、鉄仮面さんのF91……を、ビギナ・ギナIIをモデルにカスタマイズした機体が、随伴していたゴールドスモ―を前に出して、Iフィールドによる防御を展開させた。

チナツもマフユも機体を新しいものに変えたり、新しい武装を作ったりしていたけど、それがビームに偏重しているのは変わらない。

よく調べられてるってことだ。だけどな。

「先行するぜ、チナツ！ マフユ！ ゴールドスモ―の足止めは任せた！」

「ああ、そういうこと……なら行ってきなさい、ユウヤー！」

「……はいっ……！」

『そんな道理、私の無理でこじ開ける！ トランザム！』

相手も恐らくは盾役、いわゆるタンクを担っているであろうゴ―

ルドスモアが狙われるのは承知の上だったらしい。

それを叩こうとしていた意識の隙間を突くように、トランザムを発動したスサノオが急速接近してくる。

なるほど、三人だったら確かにこの時点で苦戦させられてたかもしれないな。

「ジエニ！」

「わかった。ブレイジングキック起動、次元霸王流……聖槍蹴り！」

随伴してくれていたジエニのプライドマスターが放ったブレイジングキックによって強化された聖槍蹴りが、スサノオの構えていた二本のブレードとぶつかり合い、火花を散らす。

ジエニのプライドマスターもかなり作り込まれているはずなのに、それでも互角に渡り合ってる辺り、「鉄仮面ズ」の評判はガチつてことに偽りはなさそうだ。

今のところフリーで動ける相手は鉄仮面さんのF91とシャアっぽい人のシャア専用リックドム。なら、俺がやるべきは、さっさとゴールドスモアを叩いて、相手の戦力を削いでおくことだ。

「行くぜスフィード、全開だ！」

スラストアを全開にして、俺はバーニングバーストシステムを起動、腰のビーム・ザンバー改め——「リユミエール・ザンバー」に手をかける。

こいつはちよつとした変わり種だ。

だからこそ、あのフィールドに対する勝算があると踏んで、真つ直ぐに突っ込んでいるのだ。

『真つ直ぐに向かつてくる……仕掛けるか！』

『ええい、「トライダイバース」の新型は化け物か!?!』

『フハハハ……しかし怖かろう、そのシステムの弱点は展開時間……しかも機体が耐えられない過剰出力！ 何をするかは知らぬが、自滅を待てば済む！ その隙に敵の砲撃型を叩け！』

『了解した！』

F91の隣にいたシャア専用リックドムが、俺と同じように遊撃手としてチナツとマフユを叩きに駆け抜けていく。

その速度は本当に通常の三倍を名乗ってもいいんじゃないかってぐらいに尋常じゃない。多分、切り札を切ったスファイダといい勝負ができるだろう。

「ぐ……っ！」

「……来る……っ……！」

チナツとマフユも多分そろそろ限界だ。

そこまで作り込まれたIフィールド、そして盾役として二人を釘付けにしていたゴールドスモーに敬意を評して、俺もまた奥の手を切る。

「今だ、スファイダ！ 超過排熱機構……イクシードチャージだ！」

『なんと!?』

『ユニバース!?』

バーニングバーストの炎を纏ったスファイダの速力が更に増大していく。これが、イクシードチャージこそが、バーニングバーストシステムの課題を克服するために考えた、俺の奥の手だ。

腕部に増設したカバーが展開し、ガンダムDXを参考にしたラジエーターが露出、余剰出力を、炎として排出する。

これに加えて、閉じていた放熱板も兼ねたウイングを開くことで余剰出力を外に逃しながら更に推進力を強化する。その分操作はかなりピーキーになったけど、自壊のリスクと比べれば安いもんだ。

「行くぜええっ！」

『こちらのフォローが追いつかない速度か……しかしそれだけ無茶をしたのなら自壊も早まる、御し難いな!』

「それはどうだかな! そしてこれが!」

ビームを受け止めていたゴールドスモーに向けて、俺は抜き放ったリユミエール・ザンバーを一息に振り抜いた。

Iフィールドによる防護を貫くように、緑色の刀身が上からその透明な壁を叩き斬る。

『Iフィールドの上からといったか!? おのれえええっ!』

『Iフィールドを上から叩き斬るとはな……御し難い……!』

「ああ、こいつが俺のリユミエール・ザンバーだ!」

ハイペリオンがアルミューレ・リユミエールを攻撃に転用していたのを参考に、最初からアルミューレ・リユミエールを刃として出力することで、同系統の防護武装に対してのある種特効みたいなものを得る。

それがリユミエール・ザンバーの真価だった。

『ユニバアアス！』

Iフィールドごと機体を斬り裂かれたゴールドスモーが爆散する。こんな時でもロールプレイがブレない辺りは流石といふかなんといつか、一周回って尊敬するレベルだ。

それでもまだ、戦況は相手の盾を一枚墜とただけにすぎない。

『フハハハ……怖かろう、もうすぐ貴様は自壊するのだ……！』

「いいや、しないね！」

『何だと……!?!』

「イクシードチャージ……こいつの真価を見せる時だ！ 行くぜ、鉄仮面さん！」

残っていた一丁のビームピストルを、ようやく追いついてきた赤いF91へと、牽制として撃ち放つ。

実際、牽制のつもりだった。ただ、銃口から迸る閃光は明らかに以前のそれよりも威力を増している。

バグを改造したのであろう赤いF91の小型シールドを抉り取ったその一撃は、撃った俺でさえ目を疑うレベルだった。

『以前のデータとは違う……なるほど、その精度……銃口をメタルパーツに置き換えたか！』

「当たり前だぜ！ けどな、本命は……！」

『フハハハ……次元霸王流だろう……！ ならばこちらも対抗しよう、M・E・P・Eだ……！』

M・E・P・E。質量を持った残像。

確か、メガ粒子杯の本戦一回戦で、チナツが当たった蒼いクロスボーンガンダムも使ってたはずだ。

ロックアシストの効果を切るそれは、次元霸王流に対するカウンターとしてはかなりのものだろう。

赤いF91のフェイスカバーが展開するのと同時に、機体が金色のオーラを纏ったかのように淡く発光する。

動きに合わせて生み出された残像の方をロックアシストは追尾していて、自動照準は当てにならない。

厄介な攻撃だ。だけど、GBNに絶対は、一強になるようなぶつ壊れ武装は存在していないなら、必ずどこかに攻略の糸口はある。

『フハハハ……！』

「当たらねえぜ！」

F91が持っていたショットランサーから放たれるヘビーマシガン回避しつつ、俺は次元霸王流を叩き込む前にキャンセルしたことで幸運にもまだ右手に残っていたビームピストルで直撃弾を撃ち落とす。

このままのらりくらりとやっていけば、いつか相手の方に限界は来る。

でもそれは、スファイダも同じことで、戦況全体を俯瞰するならば、チナツとマフユのところ、フリーになったシヤア専用リックドムが行ってる時点で悠長にやってる余裕はない。

「ぎゃあっ……！」

「マフユ！」

それを示すかのように、マフユの小さな悲鳴が通信ウィンドウから聞こえてくる。

よそ見をしている余裕があるのかとばかりに、F91が持っていたショットランサーが放たれて、コックピットにアラートが鳴り響く。

まずいな。弾自体には質量を持った残像の効果が乗ってないことを逆手にとって、ビームピストルで叩き落としたけど、戦況はこっちが押されつつある。

『なるほど良い武装だ……しかし、不慣れなパイロットではな！』

「ああ……っ……！」

いってしまえば、俺たち「トライダイバーズ」が得意にしているのは電撃戦だ。真正面から展開して、各々の火力を活かした上で早期に畳み掛ける。

新しくジェニがメンバーとして入ってくれたけど、あいつも得意距離は俺と同じクロスレンジだ。同じ次元霸王流使いだから当たり前だと言われればそれまでだけど。

それはともかく、こうして足止めや工夫を凝らした長期戦になりそうな戦いを俺たちが不得手にしているってのは、とつくに鉄仮面さんが調べ上げているのだろう。

「あ、ああ……っ……い！」

「アタシがマフユのフォローに入るわ、ユウヤ、アンタはF91をー」
通信ウィンドウに映るGーエクリプティカのコックピットに、イエローコーションが点灯する。

あのシャア専用リックドムは相当な軽量化と機動力強化が行われているみたいだ。俺がビームピストルにそうしたように、バーニアとかをメタルパーツに置き換えてるんだろうか？

いや、そんな疑問は後で訊けばいい。今重要なのは、いつの間にかトランザムを発動していたGーエクリプティカを翻弄するほどの機動性が、あのシャア専用リックドムにはあつて、ビームキャノンを失ったマフユが今、追い詰められているということだ。

フォローに入ろうかと逡巡した俺を制して、チナツが叫ぶ。

ジェニはスサノオと格闘戦をやっている以上、確かに今、フリーで動けるのはあいつしかいない。

「任せたぜ、チナツ！」

「任せられたわー！ 赤い彗星だか何だか知らないけど……アタシたちのウイニングロードは揺らがない！」

威勢のいい啖呵を切つて、チナツのウイニングロードアストレイが光の翼を展開、Gーエクリプティカに一撃離脱を繰り返していたシャア専用リックドムを追跡する。

これで俺も、鉄仮面さんの相手に集中できるつてわけだ。

ただし相手も黙ってるわけじゃない。こつちも舌を巻くほどの機動性で無数の残像を放出しながら、鉄仮面さんは俺を翻弄するように円運動の動きで、ヘビーマシンガンを浴びせかけてきた。

『フハハハ……い！』

「そうそう時間は稼がせねえよ……！　チナツ！」

「ええ、見えたわ！　正射必中！　これがアタシたちのウイニングロード！」

『なんと……っ!?』

シヤア専用リックドムを追跡していたチナツが俺の指示で反転すると、手にしていたロングビームライフルで、質量を持った残像を展開している赤いF91の肩に一撃を喰らわせる。

センサー系の強化と、一部装甲がレアメタルΩでできていることで生存力を強化したチナツのウイニングロードアストレイは、シックザールの時に抱えていた課題を全て片付けた優等生だ。

ロックアシストに頼らず、目だけで質量を持った残像の本体に一撃ぶち当てるのは、間違いなくチナツの実力だろうけどな。

「だったら俺も負けてられねえ！　あいつに続くぜ、ストライクスファイダー！」

『いかん、排熱が追いつかん……！　ええい、何故バーニングバーストがそこまでもつのだ！』

「イクシードチャージ……これが俺の新しい力だ！」

『なるほど、放熱フィン……フハハハ、奇しくもこの機体と同じ手段を取ったか……しかもメタリックオレンジのパーツも増設されている！』

揺らぐ炎に覆われている中でもギミックの正体を見抜いた辺り、やっぱり鉄仮面さんの実力は指折りなのだろう。

だとしても、この一瞬はチナツが繋げてくれたウイニングロード、勝利への道標だ。

切り札を叩き込むなら、相手が質量を持った残像を維持できなくなった今しかない。

「次元霸王流！　疾風突き！」

『御し難い……！』

バグを改造したシールドが、燃え盛るスファイダの拳を受けて爆散する。

そして、内部にもその衝撃は浸透していたのか、疾風突きを喰らっ

た赤いF91の左腕はぐにやぐにやと歪んでいた。

『威力が低いと見込んでいた、疾風突きでこのダメージだと……!?』
「色々強化されてんだよ、色々とな……!」 これ以上は言葉じゃなく
て拳で語る!」

流石にこれ以上接近戦を挑むのはまずいと踏んだのか、鉄仮面さんの
赤いF91は俺から露骨に距離を取りながら、ビームマシンガンを
連射する。

とはいえ、あの赤いF91も得意としている間合いはこっちと大差
ないはずだ。

つかず離れずでちまちまとこっちの耐久値を削っていくつもりな
んだらうけど、そうはさせねえ。

「次元霸王流! 流星螺旋拳!」

『化け物か!?!』

逃げるF91をデブリ帯まで追い詰めて、俺は流星螺旋拳をその胴
体にぶち込むために、燃える拳を振りかぶった。

パルマ・フィオキーナの光と、百二十パーセントまで引き上げた
バーニングバーストシステムの炎、二つが一つに絡み合って拳に収束
したその一撃は、今までの流星螺旋拳を超えた流星螺旋拳といってい
いのかもしれない。

赤いF91が腕を交差させてガードしたのも虚しく、その両腕ごと
と、フレームごと、燃える炎の拳は抉り取り、ひしゃげさせ、コック
ピットに到達する。

『御し難い……いや、見事といっておこう』

「ありがとうございます!」

『フハハハ……だが戦いは続いている……ゆめゆめ油断しないことだ
な……!』

もちろん、そのつもりはない。

赤いF91を墜としたことで逸る気持ちを抑え込みながら、俺は再
び戦況を俯瞰する。

「次元霸王流、聖拳突き、流星螺旋拳、閃光魔術蹴り……!」

『なんとという力……これぞまさしく愛だ!』

「やかましい」

『お約束を理解しないとは……無粋だな、ガンダム……!』

トランザムを発動したスサノオを食い止めていたジエニも、その太刀筋を見切ったのか、どうやら反撃に転じたようだった。

次元霸王流による怒涛のラッシュを受けて、強化サーベルがひび割れ、砕け散る。

そして体幹を崩した相手にブレイジングキックを起動した飛び蹴りからの膝蹴りが直撃し、スサノオの体勢を大きく揺らがせた。相変わらず容赦がない。

『ならば死なば諸共! 武士道とは、死ぬことと見つけたり!』

「なにを……!?!」

「危ねえ、ジエニ!」

スサノオの武器は二本の強化サーベル「ウンリユウ」と「シラヌイ」だけじゃない。肩と胸部のパーツが展開し、光球が形成されようとする刹那、俺は拳を突き出して、更に機体の出力を引き上げる。

「行くぜスファイダー! イクシードチャージ、百四十パーセントだ!」

『なんとつ……!?!』

炎を纏い、燃える流星となって、ストライクスファイダーが駆け抜ける。

ただ速度と出力に任せて拳を突き出したそれは技とすら呼べないのかもしれない。だけど威力は折り紙付きだ。

トライパニツシャーを放とうとしていたスサノオの腰が歪んで、その狙いがジエニから逸れる。

「感謝するわ、ユウヤ。一瞬でも隙ができれば十分。次元霸王流、旋風竜巻蹴り……!」

『ふっ……愛の前に敗れたか……』

「敵にしてはよくわかつている」

愛かどうかはさておくとしても、俺とジエニのコンビネーションでコックピットを貫かれて撃墜されたスサノオは、テクスチャの塵へと還っていく。

これで残されたのはチナツが戦っているシヤア専用リックドムだ

けだ。

『ええい、冗談ではない!』

「こつちも冗談やってるつもりはないのよ!」

光の翼を広げてシャア専用リックドムに迫るチナツのウイングロードアストレイは、その速度も出力も、シックザールの時とは比べものにならないほど増大していた。

一から表面処理をやり直したり、一部を作り直したとはいえ、デステイニーのウイング自体はシックザールから流用しているのに、これだけの違いが出るってことは、やっぱり作り込みだとか、トワさんの言葉を借りるなら、愛の力がなせる技なのかもしれない。

「これでえっ、終わりよー!」

『認めたくないものだな。自分自身の、若さ故の過ちというものを……』

絶対それ言いたかっただけだろ、あんた。

懐に飛び込んだチナツにアロンドイトを突き立てられると、どこもなく満足そうな表情で、顎の割れたシャアみたいな人はロビーに強制送還されていく。

【Battle Ended!】

【Winner:トライダイバーズ】

そうして、システム音声が俺たちの勝利を告げる。

勝った。それもかなりの大金星だ。

「っしやあー!」

コックピットの中で俺は、勝利の美酒を煽るかのように、拳を固めてガッツポーズをする。

無意識の内にアシムレイトを使っていたのか、どつと疲労感が押し寄せてくるけど、そんなのはどこ吹く風とばかりに強がつて、スフィードと共に掴み取った初めての勝利、その余韻に身を浸す。

スフィードだけじゃない。チナツが、マフユが、ジェニがいてくれたからこそ、輝く星に手が届いたのだ。

「ありがとうな、スフィード。ありがとうな、皆……!」

初めての「挑戦」に成功した喜びは何物にも替えがたいな。

俺は結んだ縁がもたらしてくれた勝利に感謝を込めて、皆にお礼の言葉を告げた。

Ep. 45 「戦い、更なる戦い」

「ユウヤ！ ハルルトがそっちに行つたわよ！」

「ああ！ 迎え撃つ！」

データリンクを通して聞こえてくるチナツの警告が、通信ウインドウ越しに響き渡る。

あの「鉄仮面ズ」と戦つた翌日、俺たちは溜まっていたフォース戦依頼を片付けるために、断りの返事を出したり引き受けていたりしていたわけなんだけど、それでも尚メッセージボックスには多数の依頼が山積みになっている有様だった。

有名フォースを倒した新進気鋭のフォースだとかなんとか言われているけど、正直そんな実感が湧いてこない——とか言つてる暇もなく、対戦相手に選んだフォース「トゥルブレンツ」のハルルト最終決戦仕様が、漆黒の宇宙を切り裂くようにシザービットを展開して急襲をかけてくる。

「ビットなら撃ち落とせばいい！」

『ふっ……落とされることはわかってる！ トランザム！』

「こいつ、まさか……！」

押し寄せてくるシザービットをビームピストルで叩き落としながら、本体の攻撃に備えていた俺をスルーして、トランザムを発動したハルルトはその脇を通過していく。

ビットに気を取られていたけど、俺を攻撃しないんならこいつの狙いは。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

「きゃあ……っ！」

「マフユ！」

果たしてその予感は当たりだったようで、後方で砲撃態勢を取っていたマフユに、ハルルトはGNソードライフルを連射しながら呐喊していた。

シザービットは撃ち落とされた。

今からフォローに入れば間に合わないこともない。

そう思つてバーニングバーストを発動した刹那、またロックオンさ
れていることを示すアラートがコックピットに鳴り響く。

いつの間に近づいてきたのかは知らないけど、マニニューバストライ
カーを装備したエクリプスガンダムがビームサーベルを構えて、俺の
背後に迫っていた。

「ビームシールドは、間一髪か……!」

『悪いけど、君たちの戦術は完全に研究させてもらっている! リー
ダーの邪魔はさせんよ!』

「高機動型で固めてんのもそういうことかよ……! だったらこいつ
も受けてみる! 次元霸王流、弾丸破岩拳!」

『ぬうううっ!』

リユミエール・ザンバーを抜き放つには、相手が接近しすぎている。
ビームピストルを放棄した俺は、いつも通りの徒手空拳で、おそら
くはミラージュコロイドを使って接近していたのであろうエクリプ
スガンダムに殴りかかった。

ただ、相手もそれは織り込み済みだったのか、攻撃のモーションを
キャンセルすると即座にビームシールドを展開、弾丸破岩拳を受け止
めようと試みるが。

『やはり噂通りの威力か……! だが、ヴィント!』

『了解した、無茶は承知!』

「こいつ、自分を囮にして……!?!」

「ごめん、ユウヤー!突破されたわ!」

発生器を通してフレームに浸透した衝撃でエクリプスガンダムの
左腕はひしゃげて潰れていたものの、相手が組み立てた戦術の代償だ
と割り切るなら、損害はこっちの方が大きい。

ランスの代わりにメガキャノンを装備しているツールギスFが、チ
ナツの狙撃を掻い潜ってハルルトと合流する。

ジエニもそのフォローに回ろうとしてくれていたけど、付かず離れ
ず、次元霸王流の射程とプライドマスターの機動力を見た上で立ち
回っているEガンダムに釘付けにされている状態だ。

つまるところ、俺がエクリプスを片付けるか、チナツが合流するま

ではマフユが何とか自分で持ち堪えるしかないってことになる。

高機動かつ複雑なマニューバで飛び回るハルードとトールギスFを、光の翼を広げたチナツのウイニングロードアストレイが追撃しながら狙撃するものの、そのことごとくを二機は掻い潜って進む。

『どこを見ている、まだ戦いは終わってないぞ！』

「そうだな、だったら終わらせてやる！ 次元霸王流、流星螺旋拳！」
エクリップスガンダムが振り下ろしたビームサーベルと、パルマ・フィオキーナの光、そしてバーニングバーストの炎を纏った拳がぶつかり合う。

機動力に振ってる分、パワーの面じゃ多少劣るかと思ってたけど、そんなことはないみたいだ。

けどな。

「だったらこうだ……俺はお前だ、お前は俺だ！ イクシードチャージ発動、バーニングバーストシステム、出力百二十パーセント！」

『くっ、急にパワーが上がって……!?!』

「悪いけどな、強引に踏み倒させてもらうぜ！」

一瞬、閉じた目蓋の裏側に、俺は赫く輝く太陽を見る。

ストライクスファイダと繋がったような感覚を抱きながら、エクリップスガンダムのビームサーベルが拳を押し返そうとする圧力を右手に感じながら、バーニングバーストシステムの出力を引き上げていく。

メタリックオレンジのパーツを増やしたのと、腕に増設したラジエーターのおかげで余剰出力を逃がせるようになったスファイダだからこそ出せる、限界を超えた力。

真剣勝負を楽しみたい気持ちはあるけど、挟み撃ちを喰らっているマフユのフォローに入るためにも、このエクリップスだけでもさっさと撃墜しておきたい。

その一心で俺は、右腕に力を込めて、ビームサーベルの刃を打ち砕く。

『バカな……っ!? だが、それだけの力を出せば反動も……!』

「それなら克服済みだ！ いくぜ！ 次元霸王流……蒼天紅蓮拳！」

『ぐ、うわあああつ！ すまない、リーダー！』

体勢が崩れたエクリプスガンダムのコックピットに全力のアツパーカットを叩き込んでそれを貫くと、リーダーと通信を使って、マフユの状態を確認する。

トランザムを発動しているハルルトと、それについていけないだけの機動力を持ったトールギスF。その二機に挟まれていたということもあって、G―エクリプティカはなんとかその追跡を振り切ろうと抵抗していたものの、すぐに追いつかれてしまっていた。

マフユがトランザムを発動していてもこの状態なんだから、はつきりいってかなりまずい。

ハルルトのGNソードライフルから放たれる連射ビームが火線を作り、そこから逃れようとしたG―エクリプティカを狙って、トールギスFのメガキャノンが放たれる。

「ぎゃあつ……いー」

「マフユー」

「ごめんなさい、ユウヤ君……私……」

逃げ場を意図的に作った上で強力な攻撃の射線に追い込む。

戦術としては常套手段なもの、マフユが使えるような武器がビームサーベルと、足が止まる腰のヴェスパーしかなかった以上、ハルルトを相手にしても足が止まって、逃げればメガキャノンが待っていてという、本人からすれば地獄のような状況だ。

撃墜されてしまったのも仕方ないことだろう。

マフユは表情を暗くして、俯きながら謝ってくれたけど、仕方ないものは仕方ない。

とはいえ、俺がエクリプスを落とした以上、数としてはこれで三対三。厄介になりそうなのはあのハルルトとトールギスFの連携だろう。

だったらこっちも、得意な形に持ち込ませてもらうだけのことだ。

「チナツ！」

「わかってるわ！」

『おのれ！』

マフユを討つために足を止めていたトールギスFのメガキャノンごと、その右腕をチナツが撃ち抜く。

これで当面の驚異はなくなった、と言えるほどではないにしても、相手のアタツカーは火力が一枚落ちしたことになる。

ジェニが上手いことファンネルミサイルを回避して三ガンダムを引き付けてくれている間にハルルトとトールギスFを分断、各個撃破で片をつけるのが、いつてみれば俺たちの戦術だ。

脳筋といわれればそれまでの話だけど、それがどうした。

要するに最終的に全員倒せば済む。そのためにスファイダは近接火力と機動力に振ったカスタマイズを施しているのだ。

チナツがトールギスFをターゲットにしてくれたことを確認し、現状では多分最も厄介なハルルトを狙って、俺はスファイダのスラスタターを全力で噴かす。

『俺とハルルトに追いつこうなどとは！ 事前の調べはついている、こちらはトランザムで一段上を行くんだ！ そう簡単にはいかせるものか！』

『だったら無茶を押し通す！ バーニングバースト、百四十パーセントだ！』

ストライクスファイダが発する炎がその勢いを増して、流星のような軌道を描くハルルトにそのまま追いつがる。

相手はデブリ帯に逃げ込むことで機動力勝負を仕掛けてきたようだけど、面白え。

どっちがやるかやられるか、あるいはデブリに当たって宇宙の藻屑になるか、一か八かの勝負を挑んできたってんなら負けられない。

リュミエール・ザンバーを引き抜いた俺は、ハルルトをロックしつつ、デブリをギリギリのところまで回避しながらそのまま距離を詰めていく。

それに、最悪デブリ程度ならリュミエール・ザンバーで斬れなくもないし、追加ブースターで脚が長くなっている都合、直線加速力はともかくとしても、小回りだったらこっちの方が利くはずだ。

振り向いてGNソードライフルから弾を連射するハルルトもそれ

に気付いたのか、追いかけてこをやめにして、真つ向勝負を挑むことを決めたようだった。

『くっ……「トウルブレンツ」の誇りにかけてこの勝負、負けるわけにはいかない!』

「いいねえ、そういうの……でもな、こつちだつて負けてらんねえんだよ!」

『ならば!』

「拳で語り合おう!」

ソードモードに切り替え、交差することで防御体勢を取った相手のGNソードライフルの刃と、俺が振り下ろしたリユミエール・ザンバーがぶつかり合つて火花を散らす。

これがエクリプスの時みたいにビームサーベルだったなら「ビームを斬る」特性で事を有利に運べたんだろうけど、贅沢はいつていられない。

「うおおおっ!」

『トランザムでパワー負けしているだど!?!』

鏢迫り合いを強引に押し切つて、ハルトを背中からデブリに叩きつけると、俺はすかさずリユミエール・ザンバーを腰にマウント、できた隙を狙つて拳を突き出す。

「次元霸王流、聖拳突きいッ!」

『ぐあああつ! ヴイント、ホーゼ、あとは任せたぞ!』

『リーダーっ!』

「よそ見をしてる暇なんて、与えないわよ!」

「……今までの攻撃で弾が尽きたのね」

『言ってくれる!』

聖拳突きでコックピットを貫かれたハルトのダイバーは仲間たち以後を託したようだったけど、数的優位はこつちが取つてる上に、トールギスFは手負いの状態だ。

ジェニと戦っていたΞガンダムも、今までの攻撃でファンネルミサイルや各部のミサイルを撃ち尽くしていたのか、攻め手が大分緩んでいる。

そして俺がフリーなら、やることはもう決まっているだろう。

「チナツ、トールギスFは任せた！」

「任されたわ！ アンタはジエニを！」

「ああ、わかってるぜ！」

実弾の類を撃ち尽くしたとはいえ、ダメージらしいダメージを受けずに立ち回っていたΞガンダムを放置しておく選択肢はない。

ジエニも今までは弾幕に圧されて回避重視で立ち回っていたものの、反撃の時は来たとはかりに、アグレッシブにΞガンダムへと攻めかかっている。

バーニングバーストの出力はまだまだ衰えていない。いかに巡航形態に変形したΞガンダムが相手でも、やれるはずだ。

「ジエニ、合わせられるか!？」

「合わせてみせる」

『拳法使いが二人……！ 振り切れるのか!?!』

いいや、振り切らせねえ。

その言葉に代えて機体を加速、Ξガンダムの背後をとる形で、さつきハルトとトールギスFがマフユにやっていたように、ジエニと俺で相手を挟み撃ちにする。

悪いけど、これで終わりにさせてもらう。

アロンダイトを引き抜いたチナツのウイニングロードアストレイがトールギスFの左腕と翼を切断、そのままの勢いで胴体を横薙ぎに斬り裂いたのを一瞥し、俺とジエニは呼吸を合わせる。

『次元霸王流、流星螺旋拳!』

『く……っ、身構えている時は、死神は来ないはずだ!』

Ξガンダムが宙返りからの急上昇でそれを避けてみせたことでプライドマスターとストライクスファイダーがニアミスを起こしかけるけど、それも織り込み済みだ。

機体を急速制動、互いにぶつかり合う寸前で停止して、俺たちはつがえた二の矢を放つ。

『次元霸王流、蒼天紅蓮拳!』

『作戦は完璧だったはずだ……なら、個々の強さで負けていた、か

……」

「Eガンダムのダイバーは、それだけを言い残してテクスチャの塵へと還っていく。」

実際、相手の作戦自体は脅威だった。

恐らくはマフユを真つ先に仕留めて、数的優位を確保しようという魂胆だったのだろう。

「ありがとうな、ジエニ」

「脅威になりそうなものから対処する。当然のこと」

「だとしてもだよ」

「……そう。私も、ありがとう」

その作戦の第一段階は成功していたといえるし、俺自身も大分振り回された。

これでEガンダムまでフリーになっていたら負けてたのは恐らくこっちだっただろう。意図せずにタンク役を担ってくれていたジエニに感謝しつつ、アシムレイトと緊張の糸が解けたことで押し寄せてくる脱力感にほっと息をつく。

今日のフォース戦も勝つには勝ったけど、やっぱり相手がわざわざ言ってくれたように、こっちの戦術は研究し尽くされているといってもいいだろう。

戦術というか、個々の力で正面突破を図るという極めて脳筋かつ単純なものではあるんだけど、その分対策もしやすければ、逆に有利な状況から捲られもする。

つまり、ここから先の戦いにスタイルを変えずに挑むのであれば、俺たちに試されるのは、個々の力量ということになるのだろう。

連携らしい連携をしてないわけじゃないけど、どっちかというところスランドプレーから生まれる結果的なもんだしな。

逆に考えるのなら、そういう戦術を練った上で戦うって道も残されてはいるのだろうか。

ただ、悲しいことに俺自身がそういう頭を使う戦術をあまり得意にしてない都合、そっちの方針で行くならチナツやマフユに丸投げするのは確定事項だ。

実際、戦闘中に戦場を俯瞰して指示を下してるのはほぼチナツだからな。

【Battle Ended!】

【Winner: トライダイバーズ】

それはさておき、システム音声が「トライダイバーズ」の勝利を告げたことで俺たちもまた、セントラル・ロビーへと解けていく。

「……」

「マフユ?」

「……あ、ううん。なんでもない、よ……? ちょっと、ぼーつとしちゃってて……」

「そっか、悩みとかあったら、遠慮なく言ってくれよな!」

「……うん」

撃墜を示す灰色の通信ウィンドウ越しに見たマフユの表情に一瞬影が差していたように見えたから、何かあったのかと問いかけてみたけど、とりあえずは大丈夫そうだった。

遠慮がちにはにかみながら、眦に少し涙を滲ませたマフユはいつも通りに小さく頷いて、ロビーへと転送されていく。

俺もまた、ゲームの中で再ログインするような感覚を抱きながら、帰還を果たすのだった。



「さすがはあの『鉄仮面ズ』を倒しただけはあるね、凄い実力だったよ」「ありがとうございます! ついていても、ほとんど力押しでしたけどね」

ロビーに帰還した俺は、一足先に戻っていた「トウルブレנטツ」のリーダー……ハルト最終決戦仕様を操っていたダイバーである、「ペンスロット」さんと健闘を称え合っていた。

俺より少し背が高い、癖毛の黒髪にソレスタルビーイングのパイロットスーツという格好をしたペンスロットさんのダイバールックは、どこことなく刹那・F・セイエイを思わせる。

だけど、乗ってるのはハルルトだし、パイロットスーツの色はロックオン・ストラトスを思わせる緑色だ。

なんというか、一人ガンダムマイスターズって感じだな。テイエリア要素ないけど。

そんなことを薄らぼんやりと頭の片隅に浮かべながらも、俺はペンロットさんが差し出してきた手をとって握り返す。

少し何か違ってれば、どっちが負けてもおかしくないような戦いだった。そういう意味じゃ、いい戦いだったんだろう。

「ところで君たちは、そのスタイルを貫くつもりなのか？」

ペンロットさんは、どこか真剣な表情で俺たちにそう問いかけてくる。

近接型が二人、オールラウンダーが二人という「トライダイバーズ」の構成自体は、GBNでも珍しいものじゃない。

ただ、あの人が心配してるのはその近接格闘型をやってる俺とジェニのリーチが短いことを心配しているのだろう。

「はい、俺は……俺の次元霸王流で行けるとこまで行ってみたいんです」

「そうか……だが先達として一つだけ忠告させてもらうのなら、君たちの道は険しいよ、ユウヤ君」

「わかってます、だから……日々、腕とガンプラを磨いていきます！」

「……真っ直ぐな目だ。俺も、ガンプラを見直して初心に帰る時かな。余計なことを言っつてすまなかつたね」

「いえ、大丈夫です！」

「ありがとう、ユウヤ君」

それじゃあ、再戦の機会があつたらまたよろしく頼むよ。

そう言い残し、ペンロットさんたちは踵を返して去っていく。

戦いに次ぐ戦い。あの人が警告してくれたようにそれが茨の道だとしても、俺とスライダーが、俺たち「トライダイバーズ」がどこまで行けるのか、それも含めての「挑戦」だ。

—— だったら、背中を向けるわけにはいかないよな。

そう振り返って親指を立てれば、チナツもそれに笑顔で応じてくれ

て、ジエニも控えめながら目を伏せて小さく頷く。

そしてマフユも遠慮がちにはにかみながら、小さく首を縦に振る。

ただ、恥ずかしげに顔を赤らめて俯いてしまったことで、その表情はよくわからなかった。

Ep. 46 「愚か者のサーカス」

「止まらぬマスダイバーの脅威、ブレイクデカールを何故運営は放置してるのか……ねえ」

相変わらず窮屈さを感じるフォースネストで、チナツは有志が発行しているGBN内でのニュースをまとめた電子新聞をぱらぱらと捲りながら、そんなことを呟いていた。

あれからこつち、殺到するフォース戦依頼やら何やらに翻弄されつつあったこともあって、今日は休みにしよう決めていたんだけど、それにしたって不景気な話だ。

幸い俺たちは、あの「シャドウロール」と出くわして以来、マスダイバーとは遭遇してないけど、巷じゃその被害が拡大してるらしい。

「マスダイバー……」

「何か心当たりでもあるのか、ジエニ？」

「いいえ。私にはない。ただ暇な連中だと思った、それだけ」

勝ちたければその分だけ己とガンプラを磨き上げればいい。

ジエニはそう言い放つと、壁にもたれかかったまま目を伏せる。

確かにそれは正論で、俺だってそうしてきたつもりだけど、本当にマスダイバーは暇を持って余しただけの、楽に勝ちたいってだけの連中なのか。

何か止むに止まれぬ事情があってブレイクデカールに手を出してしまつたやつらもいるんじゃないだろうか、とは思うけど、そこに同情の余地があつたとしても、ブレイクデカールというチートツールに手を出してしまった事実が揺らぐことはない。

その上、ベアツガイフェスやヴァルガでも見た通り、ブレイクデカールを介することでGBNそのものにバグが広がっている可能性だってあるのだ。

マスダイバーが暇を持って余しているかどうかはともかく、こうして実害が出てしまつて以上、どんな事情があつても、ブレイクデカールに手を出すのは許されない。

「……どうしても勝てない人も、使ってるのかな」

「マフユ？」

「……あ、ううん。なんでもない、よ……？」

「本当か？」

最近のマフユはなんだか普段より三割増ぐらいで落ち込んでると
いうか、元気がない感じがするから余計に心配になってしまふ。

大丈夫だと答えて柔らかくはにかむその笑顔はいつも通りに可愛
らしいものだったけど、なんというかそこに違和感みたいなものを覚
えるのは、気のせいだろうか。

俺もまた、首を傾げて考え込む。

でも、前にもチナツに言われた通り、マフユを信じると決めたのな
ら、それは貫き通すべき筋なのだろう。

なら、本人が大丈夫だと言ってるんなら、それを信じるほかにない。

「うん。本当だ、よ……？」

「なら良かった。けど、もしもなんか不安なことかあったら、遠慮な
く相談してくれよな」

俺じゃなくなつて、チナツとかジェニがいるわけだし、フォースつ
てそういうものだろうからな。

ジェニは申し訳ないけど正直あんまり相談役には向いてないかも
しれない。でも、リアルで顔を合わせたことがあるチナツなら、多少
言葉は厳しくても打ち明けられた悩みを真つ向から受け止めてくれ
るはずだ。

俺の言葉にマフユは小さく頷くと、相変わらず丈が余っている袖に
覆われた手でコンソールを操作すると、チナツが読んでいるのと同じ
電子新聞をスクリーンに投影する。

「……わあ、凄い……ユウヤ君の活躍、記事になってる」

「えっ、マジで？」

「これ……『メガ粒子杯優勝ダイバー、快進撃止まらず』だつて」

マフユが見せてくれた三面記事には、確かにそんな見出しと共に一
昨日戦った「鉄仮面ズ」の赤いF91をストライクスファイダーが撃破
するシーンが載せられていた。

こういうのって相手から許可取ってるのかな。

俺たちのところに話が来た覚えはないけど、山のように届いていたフォース戦依頼の中に埋もれてしまってる可能性もゼロじゃないから、そういうもんなのかもしれない。

平たくいえば暗黙の了解ってやつだ。

まあ有志で発行してる電子新聞に載ったところで何かしら実害があるかと訊かれたら多分ないと思うし、いいってことにしておこう。

それはさておきとして、肝心の記事の内容はというと、概ね俺がメガ粒子杯を勝ち抜いたことと、チナツも準決勝まで進んでいたこと、そして「トライダイバース」が「鉄仮面ズ」を倒したことで編集部への期待が高まる、という無難なものだった。

期待してくれるのは光栄なのかもしれないけど、ここまで注目されるのには慣れてないから、なんだかそわそわするというか背筋がむずむずする。

それに、新聞に載ったとなれば多少は知名度も上がるわけで、昨日の「トゥルブレんツ」との一戦と同様に、こっちの戦術に対する研究はどんどん進むと見ていいだろう。

そう考えると、浮き足だった感じもすぐに立ち消えて、代わりに武者震いが背筋を駆け抜ける。

「つまりこれからは強敵と当たるってことだな、面白え！」

できることなら「度胸ブラザーズ」やコードウと戦った時みたいに正面から作戦勝ちとかじゃなく、フィジカルで競い合う戦いがしたいのが本音だったけど、皆勝ちたいってのが正直なところなら、それを否定するつもりはない。

それに、「トゥルブレんツ」は人数をこっちに合わせてくれたけど、数で圧してくる相手と当たることもあるだろう。

どっちにしろ、ペンスロットさんが言ってくれたようにこれからは茨の道が待ってるってことだ。

「喜んでる場合じゃないわよ、本当、バトルバカなんだから」

「でも、気持ちで負けてちゃ勝てるもんも勝てねーだろ？」

「まあ、それはそうね」

例えどんなに困難が待ち受けていても、何事にも全力で挑む。それ

が父さんの、師匠の教えだ。

「……ユウヤ。休憩すると言っていたけど、何もしないのは性に合わない」

そんな具合にチナツたちと駄弁っていると、退屈を持て余したのか、壁にもたれかかっていたジェニがそう零す。

確かに戦いに飢えてる感じがするジェニからすれば、この状況は暇も暇なのだろう。

それでもログアウトせずにはちゃんと付き合ってくれてる辺りは律儀というかなんというかだけだ。

「それならミツションでも受けに行くか？」

俺は退屈そうに欠伸を噛み殺しているジェニに向けてそう提案した。

思えばヴァルガだの大会だの終わらないフリーバトルだの、戦いに明け暮れてばかりでミツションの方は進めてなかったから、気分を変えらるって意味ではありじゃなからうか。

無双ミツションなんかはストレス発散にちょうどいいかもしれないけど、基本的にはAI操縦の敵を蹴散らすだけだから、歯応えって意味じゃ少し物足りないかもしれないけどな。

「ユウヤが言うなら私は従う、それが将来の伴侶としての務め」

「誰が伴侶よ、誰が！」

「私」

「相変わらず面の皮VPS装甲でできてるわね、アンタ……！」

「それはどうも」

「ほんっと、いい性格してるわよね……！」

一転して一触即発の空気に、胃の辺りがきりきりと痛んでくるような感じを覚えるけど、GBNは感覚フィードバックを実装してないし、アシムレイトもしてないんだから多分気のせいだろう。

伴侶どうこうはともかくとして、ジェニが納得してくれたんなら無双ミツションでストレスを発散するのも悪くないだろう。

チナツがアホ毛を逆立ててジェニと睨み合っている空気に怯えたのかそうでないのか、マフユは俯いたままぶるぶると背筋を震わせて

いた。

「とりあえず無双ミッションでも受けに行こうぜ、ここ最近、バトルばっかで疲れてるだろ？ ジェニも、チナツも、マフユもさ」

苛々してるのも多分そのせいだろう。

半ば丸投げされた役目とはいえ、リーダーとして仲裁するように、俺は三人へとそう提案する。

「私はさっき言った通り」

「アンタがリーダーなんだから、アタシもそれに従うわよ」

「私も……」

「なら決まりだな、とりあえずロビーに移動するか」

とりあえずは全員が納得してくれたということで、俺はチナツ、マフユ、ジェニをフレンドワープの対象に含めてエリアを切り替えた。

そうして降り立ったセントラル・ロビーは夜だったのにもかかわらず相変わらず人でごった返っていて、相変わらずの同接人数とアクティブユーザーの多さに改めて感嘆する。

それを処理してるサーバーの負荷も相当なもんだろうけど、今のところブレイクデカル絡みのこと以外で目立ったバグが出ていないのはむしろ、運営も頑張ってる方なんじゃないだろうか。

「おんやア？ 天下の『トライダイバーズ』が今更ミッションなんか受けるつもりツスカア？」

挑発するような声がかかったのは、そんな益体もないことを考えながらカウンターへと足を運んでいた時のことだった。

振り返れば、そこに立っていたのはピエロの格好をした集団で、その中でも一際痩せぎすで背が高い男が、あからさまに舌を出しながらこつちを煽っている様子が嫌でも目に映る。

なんだこいつら。感じ悪いな。

「用件があんなら聞くぜ」

「インヤア……？ 最近ご注目されてる『トライダイバーズ』が今更ミッション受けるなんて……チョーダサくね？ って思っただけツスよっ。」

「なるほどな……つまりてめーらは喧嘩売ってるってことか」

「ピンポーン、大当たりイ！ つーわけできア、オレらといっちょ喧嘩しようぜエ、『トライダイバース』？」

長身瘦躯のピエロはくるりと一回転してクラッカーを鳴らすと、不愉快な笑みを浮かべながらフリーバトル申請を叩きつけてくる。

ただ、はつきりいつてこいつの話を聞いてやる義理も義務も俺たちにはない。

俺たちの戦術を研究しようが何しようがそれは相手の自由だからいい。だけど、ペンスロットさんたちみたいに、礼を尽くしてそうしてるならともかく、最初から無礼な態度で迫ってくるようなやつらが相手なら、こつちも無礼で返すだけの話だ。

「やだね。断る。行こうぜ、チナツ、マフユ、ジエニ」

「おんやア……？ まさかメガ粒子杯の優勝者がア、オレたちに恐れをなして、尻尾巻いて逃げ出すってコト、ツスカア？」

「お前がなんて言おうと勝手だ、無礼には無礼で返す、師匠の教えだ」「えエ〜？ こんなくだねエ言い訳並べて逃げ出すようなチキン野郎を巡ってアンタたち修羅場ってんツスカア？ チョーお笑い話ツスねエ〜」

ピエロはチナツとマフユ、そしてジエニを指差すと、心の底からおかしそうに腹を抱えて爆笑する。

待てよ。俺に突つかかってくるってんなら何を言っても構わねえ。けどな、チナツとマフユとジエニは関係ねえだろうがよ！

「てめえ……！」

「おやおやア？ ようやくやる気になった感じ？ でもリアルファイトはいけないなア、オレ傷ついてガーフレ呼んじやうよオ〜？」

「ユウヤ、アタシたちは……！」

「しよっぼい男を巡って争うクツソくだらねエー乙女たち、ああ、青春って麗しゆうございますねエ〜」

「今なんて言った、アンタ!？」

制止にかかったチナツをも挑発するように、舌を出してピエロは俺たちをひたすら嘲笑う。

その間、黙っていた仲間たちも腹を抱えて笑ってみせたことから

わかるように、本格的にこいつらは俺たちを侮辱してるってことだ。俺はともかくとして、チナツが、ジェニが、マフユがこんな奴らに侮辱されるのは我慢ならない。例え相手取るに足らないようなド三流だとしても、超えちゃいけない一線つてもんを気軽に踏み越えてくるようなやつらを許してはおけない。

それはチナツもジェニも、マフユも同じことらしく、珍しくマフユも細い眉を逆立てて、ピエロ集団に対して怒りを露わにしている。

ジェニに至っては次元霸王流の構えをとって、例えガードフレームを呼ばれたとしてもリアルファイトも辞さない覚悟を示していた。

だけど、こんなくだらないことで運営に通報されて、ジェニのアカウントが凍結されるのも馬鹿馬鹿しい。

相手の思惑に乗ってしまいう形にはなるけど、ガン普拉バトルで決着をつけるのが一番穏便……というか、互いにとって納得がいく選択肢だろう。

あの腐れピエロ共は俺たちに喧嘩を売りたい。俺たちはあの腐れピエロ共をぶん殴りたい。

だったら、挑発だとわかってても売られた喧嘩を言い値で買ってやるだけのことだ。

「……わかった、てめーらは俺たちに喧嘩を売りたい、俺はてめーらを許せねえ、だったらガン普拉バトルで白黒つけようぜ」

「最初っからそう言ってるのに、理解力ないツスねエ〜」

「俺のことならなんとでも言え、でもチナツたちに言ったことは絶対に取り消してもらおう！」

「クッククク、負けたら土下座でもなんでもしてやるツスよオ〜、御託はいいから、さっさとバトロウぜエ、『トライダイバース』よオ〜」

腐れピエロが突きつけてきたフリーバトル申請を受諾する前にチナツたちの方を振り返れば、皆一様に怒りの表情を浮かべたまま頷いていた。

皆も納得してくれたってんならこの喧嘩、言い値で買ってやるだけのことだ。

もちろんあの腐れピエロ共も、なにか勝算があつてわざわざこんな

喧嘩の売り方をしてるんだらうけど、そんなのは承知の上だ。

あいつらがなにを企んでようが、それを上から踏み倒して、ぶっ倒してやるだけだ。それ以上でも以下でもない。

「クックック、そんなじゃア、フェアにやろうぜエ〜?」

「上等だ、真正面から叩き潰す!」

フリーバトル申請が受諾されたことで、格納庫エリアへと俺たちは転送される。

身を焼き尽くさんばかりの怒りに脳内は支配されていたけど、それを鎮めるように目を伏せて、俺はコックピットの中で小さく深呼吸をした。

いかなる理由があつたとしても、怒りに吞まれたまま戦つてはいけない。

それは拳を曇らせるから、曇つた拳で相手を討ち倒していれば、それはいつしか無明に落ちていくことになるから。

師匠の教えであり、次元霸王流の極意だ。

例えどれだけ相手が卑劣漢だとしても、例えどれだけ相手がふざけた野郎だとしても、この拳だけは曇りなく、明鏡止水の境地で振るわなければならない。

「チナツ、マフユ、ジエニ、相手はこつちを挑発して迂闊な動きをすることを狙つてるはずだ、冷静に行こうぜ」

「わかつてるわ、本音を言えば今すぐ全力でぶちのめしてやりたいとこだけど……慎重に行くわ」

「……私も、チナツさんと同じ、だよ……!」

「……相手は取るに足らない三流。でも、ユウヤが言うならそう戦う」
「ありがとうな、それじゃあ行くぜ!」

——トライダイバーズ、ゴー・ファイト!

声を揃えて気合を入れると、カタパルトのシグナルが赤から青に変わったことを確認して、俺はストライクスファイターと共にゲートを通過、戦場となる荒野へと飛び出していく。

相手のフォースの名前は確か「シルク・ドウ・イディオ」だったか。直訳するなら、愚か者のサーカス。自覚してるってんなら尚更タチ

が悪い。

わざと相手を怒らせるような真似をして、見下して楽しむ。そんな相手なら、なにがあつたとしても負けるわけにはいかない。だけど、激しい怒りは心に押し込めて、あくまでも澄み渡る湖面のように冷静な頭で勝つ。

師匠の教えを、次元霸王流の極意を何度も脳裏で繰り返しながら、呼吸を整えて、俺はチナツからのデータリンクによってレーダーに映し出される、十機の機影を睨みつけた。

Ep. 47 「侵食」

『クツクツク、それじゃア、予定通りにやっpegこうぜエ』

『オッス、団長!』

『いくい返事だア、そんじやま、コイツは挨拶がわりってことでエ、受け取ってもらえっかなア!』

団長と呼ばれたあの腐れピエロは部下に指示を下すと、敵十機の内九機を構成しているサーペントの一機が前に出て、バズーカのようなものをぶつ放す。

挨拶がわりとか言う割には随分とスケールが小さい攻撃だけど、多分あれは罠だろう。

俺たちに弾頭を迎撃させるか、もしくは弾頭自体に特殊な仕掛けが施されているかのどっちかだと思っpegいい。

チナツは言わなくてもそれを理解していたようで、放たれた弾頭ではなく、それを撃ったサーペントに向けて、ロングビームライフルからの狙撃を敢行する。

「バレバレなのよ! 墜ちなさい!」

『グワーツ!? 俺はやりましたよ、団長ーツ!』

『クツクツク、いい働きだったぜエ? そんじやア、本日のショーはこっpegからっpegなア!』

チナツの狙撃によってコックピットを撃ち抜かれたバズーカ装備のサーペントが爆発四散するのを確認した上で、団長と呼ばれた男は指を鳴らす。

すると、一定距離を進むことで自爆する仕掛けが施されていたのか、俺たちに迫っていた弾頭が炸裂し、強い閃光と、煙幕を撒き散らした。

目眩し。古典的ではあるけど有効な、比べるのも失礼なんだろうけど、メガ粒子杯で「シーズン」さんが使っていたのとよく似た戦術だ。

「目眩しか! チナツ、マフユ、ジエニ! レーダーが潰されてる……敵は背後から回っpegくるはずだ!」

「わかってるわ、迎撃態勢は取る!」

「私も……っ！」

「問題ない、気配でわかる」

ただこれも、あれだけ悪辣な連中が挨拶がわりだの、シヨーだのと
言ったにはどうにも拍子抜けだ。

あの腐れピエロが何を考えているのか全くわからない辺り、用心に
用心を重ねて警戒しておくに越したことはない。

ジェニと同じように気配で背後からの奇襲を警戒した刹那、アラ
トがコックピットに鳴り響く。

『背後からの奇襲ウ〜？ クックック、そんなに慌てなさんなってエ、
そう簡単に終わっちゃア、シヨーにならねエんだからよオ〜』

四条の閃光が飛来し、咄嗟に回避体勢を取った俺たちの陣形が寸断
される。

シヨーだのなんだの言ってる戯言はともかくとして、あの団長とか
いう腐れピエロが使ってる機体はかなり火力に寄せてきてるんだら
う。

煙幕の向こうから撃ってきたことで姿はわからないけど、開幕にチ
ナツからのデータリンクで送られてきた情報はあつた。

「撃ってきたってことは、そこにいるってことだよな！」

それを検索すると並行しつつトリガーを引き絞って、俺は腐れピ
エロがいたのであろう位置にビームピストルを撃ち放つ。

検索したデータによれば、見た感じ、相手の機体はエンドレスワ
ルツ版のガンダムヘビーアームズといった風情だった。

恐らくダブルガトリングの代わりにツインバスターライフルを二
丁連結したものを両腕に装備しているのだろう。

『アンドウスリーアンドウスリー！ へいへいピッチャービビって
るウ〜？』

「離脱されたか！」

とことんムカつくやつだけど、腕に関しちや覚えがあるみたいだ。

広範囲に撒き散らされた煙幕と、レーダーが阻害されていることで
相手がどう出てくるかがわからない以上、こっちは後手に回るしか
ない。

戦力差は九対四、おおよそ二倍開いている都合、こつちとしてはさつさと畳みかけたのをわかった上でやっているのだろう。

『あー、団員諸君、配置についたかなア?』

『つきましましたぜ、団長!』

『オウケエイ……そんなじゃア演目第一幕、ミサイルのアンサンブルを受け取ってもらおうかア』

全方位からのアラートが鳴り響く。配置についたって腐れピエロの言葉から察するに、多分相手の取った戦術は。

「こつちを取り囲んでの一斉掃射……まずいわよ、ユウヤ!」

「ミサイルだったら問題ねえ! ジェニ!」

「了解、ユウヤに合わせる」

父さんが、師匠がGPD時代にやっていたことの記録映像は子守唄がわりに見せられてきたんだ、その中には当然、ミサイルに対処する方法だって収められている。

ジェニのプライドマスターが背後にいることを気配で感じ、俺はジェニと息を合わせて飛び上がった。

『次元霸王流! 旋風竜巻蹴り!』

『おっ? おっ?』

旋風竜巻蹴りの予備動作を利用しての鎌鼬で飛来するミサイルを迎撃する。

飛んでくる弾幕の規模こそ違っても、要領は師匠がやっていたことと同じだ。

加えてジェニもいてくれるなら、この程度の弾幕砲火なら問題なく切り抜けられる。

ミサイルを撃ち落とされたことで少しの動揺を見せたのか、それとも事が思い通りに運ばずにイライラしてるのかは知らねーけど、通信ウィンドウに映る腐れピエロのムカつく笑顔は少しだけ引きつっていた。

だけど、いい気味だと思うにはまだ早い。

こつちは依然として包囲されているんだから——二つの旋風竜巻蹴りが煙幕まで吹き飛ばしたことで、鮮明になった状況を把握して、

俺は呼吸を整える。だけど。

『クツクツク、バアアアアカ！ 迂闊に飛び上がったのが運の尽きだぜエー！』

「なんだ……っ!?」

『そんじやア第二幕、色とりどりの花火を楽しんでつてくれよなア〜!』

腐れピエロが指を鳴らすと同時に、サーペントが手にしていたミサイルランチャーを放棄すると、腰の辺りに手を回し、ハンドグレネードを投擲する。

「ぐあああつー！」

「くっ……い！」

投擲してから間を置かずに炸裂したその正体は果たしてフラツシユグレネードで、さつきと違って飛び上がった状態からの目眩しをもろに喰らった俺とジエニは、一瞬機体の操作を手離してしまったことで、もつれ合いながら地上に落下してしまった。

まずい。完全にあいつらに戦いのペースを握られてしまっている。

倒れたところに何が飛んでくるのかもわからない以上、さつきと復帰して体勢を立て直さないといけないのに、何色もの閃光が爆ぜた影響で目がチカチカしてしまう。

『クツクツク、お楽しみいただけただけだよだなア〜？ そんじやあ第三幕、ガンプラ解体マジックと洒落込むぜエ〜?』

「ユウヤ、ジエニ！ これ以上ふざけたことなんかさせないわよ！」

『おっと狙撃かア〜、悪くねエけど読めてんだよなア！』

「ぐっ……い！」

部下に指示を下した隙を狙って放ったのであろうチナツの狙撃にあの腐れピエロは対応したらしく、ばちばちとビームがぶつかり合う音が聞こえる。

いくらウイニングロードアストレイの出力がシックザールから強化されているといっても、ツインバスターライフルが相手だと分が悪いはずだ。

チカチカする目を擦りながら立ち上がって、俺は援護射撃として二

丁のビームピストルを放とうと試みたけど、それもわかっていたかの
ように「シルク・ドウ・イデオ」のメンバーは、その隙に拾い上げ
ていたミサイルランチャーで俺とジェニに狙いをつける。

『悪რიいが団長の演目は絶対なんぞな』

『邪魔はさせないぜ？ 次元霸王流使いよお』

「クソ……っ、こいつら！」

「……私が攻めに転じる、状況を強引にでも変えに行く」

のたうち回るように弾幕砲火を回避し、直撃弾をビームピストルで
撃ち落としながら、俺は体勢を立て直す。

目がチカチカするのも大分治ってきた。

それはあいつも同じだったらしく、痺れを切らしたのかそう言い放
つと、ジェニはスラストに点火してバーニングバーストを発動、腐
れピエロの部下へと殴りかかっていく。

『団員諸君、わかってるなア？』

『了解、団長！』

『クツクツク、八機もいれば上等だアな……演目に支障はねエゼ〜？』

「ぐ……っ、圧された、アタシが……ごめん、ユウヤ！」

「いいや大丈夫だ、乱戦だったらこっちが有利だ！ こっから立て直
してあいつを全力でぶん殴る！」

ガンプラ解体ショーとやらが何を意味しているのかは知らないし
知る気もないけど、ミサイルランチャーを再び投棄したサーペントは
ビームサーベルを構えて、異様な速度で突撃してくる。

その戦力の振り分けは俺に一、チナツに一、団長とかいう腐れピエ
ロも含めた残り全部は、マフユに集中していた。

なんでだ？ 意図が全くわからない。だけど六対一なんていくら
腕がいいドライバーだって絶望的すぎる。

それに、マフユが持っているのはアウトレンジからの攻撃で真価を
発揮するビームキャノンだ。

接近されたんじゃ、分が悪いどころの話じゃない。

まさか、あいつが解体ショーとか宣ってたのは。

『おっ、ようやく正解に辿り着いたかなア？ ピンポーン、おめでとさ』

ん！ それじゃア第三幕を気兼ねなく見物してもらおうかア！』

「ふざけたこと言ってるじゃ……っ!?」

『団長の命令は絶対だ!』

「まさかこいつら、アタシたちを拘束するつもり……っ!?」

俺たちに向かつてきていたサーペントの左腕から射出されたヒートロッドが、スフィードとウイニングロードアストレイを拘束して電撃を流す。

「電撃か……っ!」

「あーもう、さつきからムカつくわね!」

耐えられなくはない威力だけど、絡まったヒートロッドを振り解くまでには数秒のラグが生じる。

当然その間は何もできないわけで、マフユの援護に入ろうにも身動きが取れない。

それに、唯一動けるジエニは距離を離している。次元霸王流の射程が短いことや俺たちの戦術を徹底的に研究した上で捌め手を使ってくる。

態度こそ最悪だけど、あの腐れピエロ、思ったよりも考えてやがる。団員たちの士気も高い辺り、クソ野郎だけカリスマもあるらしい。

「マフユ、避けられるか!?!」

「が、頑張る……! トランザム!」

『クーっ、バカの一つ覚えな青春にオレ、感動しちゃうねエ! さてここで問題です、トランザム発動したとこで……スーパーバーニア装備のオレたちに囲まれたらア、逃げ場はどこにあるでしょうかア! はい死ぬ前に答えてエ!』

どうやらサーペントがかなりの早さで陣形を展開できた秘密は、背負っていたスーパーバーニアにあるらしい。

そして団長とかいう腐れピエロのヘビーアームズも同じものを背負っている。

GBNにおける時限強化に優劣は基本的にないといっている。

トランザムもEXAMもHADSもその他諸々も、微妙な特性の違いやそれぞれの欠点があつて、だからこそバランスの均衡が取れて

いるって話はさておくとしても、トランザムは極端な話、あくまで火力と機動力を大幅に引き上げるだけの時限強化だ。

反応速度や、速度とかの上がり幅は元のダイバーの能力やガンプラの作り込みに依存している。

つまるところ、マフユがトランザムを切つてあのスーパーバーニア装備のサーペントたちから逃げようとしても、ムカつくことに腐れピエロが言った通り、包囲を振り切るだけの機動力を持ってない限りは、あるいはルートの策定ができていなければ、六対一という状況は簡単に覆せるものじゃないってことだった。

それを示すかのように、サーペント二機の攻撃を強引に振り切ったと思えば、その先にもサーペントが待ち構えていて、Gーエクリプティカはビームサーベルによる攻撃でビームキャノンを喪失、足を止めた一瞬を狙って、ダブルガトリング装備のサーペントからの弾幕砲火がマフユに降り注ぐ。

「きゃあああつ……！」

「マフユ！」

『あくア、可哀想になア……頼れるお仲間がいないとこの程度なんだからア』

「……つ……！」

『ホーント可哀想だぜエ、腕のないダイバーに扱われるガンプラがよオ、なアマフユちゃアん……オメー、才能ねエよ』

「あ……あ……」

ガンプラバトルのよオ。

そう冷たく言い放った腐れピエロが放った四丁のツインバスターライフルから放たれた閃光がGーエクリプティカを呑み込んで、その装甲を溶解させていく。

この野郎、どこまでもふざけたことを。

「てめえら、いい加減ふざけてんじゃねえぞ！ 次元霸王流、流星螺旋拳！」

ヒートロッドを引きちぎって、俺は湧き起こってきた怒りに身を任せ、立ちはだかったサーペントのコックピットをぶち抜いて飛ぶ。

マフユを包囲していたサーペントも、バーニングバーストを発動した貫手と膝蹴りでそのコックピットをぶち抜いて、狙うはあの腐れピエロの首だけだ。

「…………ごめんなさい、ユウヤ君…………っ…………」

「マフユ！ クソっ、てめえ！」

『おーっと怒っちゃったア？ でもよオ、事実を言われてキレるのつてエ、チョーカツコ悪いんツスよオ！』

助けるのがあと少しのところの間に合わせて、マフユのコックピット表示がレッドアラートから撃墜を示す黒へと、コンソール類の表示が止まった状態へと切り替わる。

もう少しヒートロットを早く振り解けてれば、そもそも俺があいつらの術中にハマることがなければ。

自分の不甲斐なさに怒りを爆発させながら俺は、チナツの援護を受ける形でサーペントを振り切って、腐れピエロへと肉薄していた。

「次元霸王流！ 疾風突き！」

放たれたツインバスターライフルを回避、速度を重視した拳で俺は、腐れピエロが交差させた右腕を強引にもぎ取っていく。

何が事実だ。囲んで棒で叩いただけだってのにあそこまで暴言が吐けるその腐った性根を百万発ぶん殴って叩き直してやる。

沸き起こる怒りに任せて俺は腐れピエロのヘビーアームズの首根っこを左手で掴み取り、締め上げていた。

『たかが事実を言われたぐらいでそうマジになんなよオ、それにさ、テメーだつてさア、気付いてるんじゃないやねエーの？』

「なんだと…………!?!」

『テメーらのフォース、あの才能ゼロの哀れなマフユちゃんを介護することがア、作戦の前提になっちゃってるつてエことをよオ』

「この野郎…………言わせておけばつけ上がりやがつてー！」

ヘビーアームズの胸部ハッチが開いたのを確認して俺はそこに仕込まれていたガトリング砲を、右のボディブローで破壊する。

これ以上こいつの戯言を聞いてやる義理も義務もない。

だったら、終わらせてやるだけだ。

『クツクツク、流石に零距离じゃア、メガ粒子杯の優勝者には敵わねエかア、でもよオ、テメーらいつまでお荷物抱えて戦うつもりなんだア？ テメーは強エ、認めてやんよ。あっちのジエニってヤツとチナツちゃんもそうだ、けどよオ』

「次元霸王流！ 聖拳突きいッ！」

これ以上は我慢ならねえ。いや、これ以上も何もねえ、最初から最後まで徹頭徹尾こいつを許すつもりはねえ。

聖拳突きをコックピットにぶち込んで、俺はそれを黙れ、という返事の代わりにする。

だけど、この程度で黙ってくれるようなやつだったら最初からこっちにあんな喧嘩の売り方をしないだろう。

『もう一度言うぜエ、何度でも言うぜエ、マフユちゃん、オメー才能ねーよ。ただのフォースのお荷物だ』

「……………」

「黙りやがれ！」

『そうカツカすんなってエ、言われなくても黙ってやるさア。それじゃあボンボヤージュ、「トライダイバース」よオ』

最後までムカつくことを言い残して、腐れピエロのヘビーアームズが爆散する。俺があいつを殴っている間にチナツとジエニがサーペントを片付けてくれていたおかげで、戦いに勝つことはできた。

【Battle Ended!】

【Winner:トライダイバース】

それを示すように、システム音声が無機質に俺たちの勝利を告げる。

だけど、それは決していつものように喜べるようなものじゃなかった。

腐れピエロが残っていた禍根に、俺たちはただ眉をひそめて、顔をしかめる。

「……………えぐつ……………ぐすつ……………」

マフユは、沈黙したコックピットの中で一人涙を零して啜り泣く。あんなやつ言うことなんて、真に受ける必要なんてない。それは

マフユもわかっているのだろう。

「気にすんなよマフユ、あんなやつ言うことなんか」

「…………ぐすつ…………えぐつ…………ごめん、なさい…………」

だけど、直接的に向けられた悪意が、そして、「トウルブレンツ」との戦いが脳裏を侵食するようにリフレインして止まらないのだろう。

ごめんなさい、と悲痛な言葉だけが通信ウインドウ越しに聞こえてくる。チナツも、ジエニもフォローは入れてくれていたけど、その言葉も耳に入らないかのようにマフユはただ、涙を零し続けていた。

Ep. 48 「シャドウロール、再び」

流石に度を越した悪質な行為だと判断した俺たちは、バトル後に「シルク・ドウ・イデオ」の団長と呼ばれていた男のログデータを運営に提出していた。

負けたら土下座でもなんでもするとか言ってた割にそそくさと姿を消して雲隠れしやがったようだけど、そっちの方がよっぽどダサいんじゃないだろうか。

愉快犯にしては悪質な、マフユだけを狙った精神攻撃。何がしたかったんだ、あの腐れピエロ共は？

「マフユ、落ち着いた？」

「……はい……色々ごめんなさい、チナツさん、ジエニさん」

「くだらない連中の言葉を真に受ける必要はない」

ぶつきらぼうな言葉ながらも、ジエニはマフユを気遣うような言葉をかける。

あいつらがどう思ってるかなんて、知ったことじゃない。

俺は、俺たちはマフユをフォースのお荷物だと思ったことなんて一度もない。だから気にする必要なんてどこにもないのに、それでも気にしてしまうであろうマフユをピンポイントで狙って心を折ろうと試みてる辺り、あいつらは何らかの狙いがあつて動いていたと見ていだろう。

やがて、通報が受理されたのか、悪質な行為だと運営も判断したらしく、人型サイズのガードフレームに抱えられて、「シルク・ドウ・イデオ」のリーダーが不愉快な笑顔を浮かべたまま、セントラル・ロビーに連行されてくる様子が目に映る。

通報から逃げ回っていた割には随分と余裕ぶって見えるのも含めて不愉快だ。

それは俺だけじゃなく、チナツとジエニも感じているのか、どこか殺気立った雰囲気、二人の背中からは漂っていた。

「クックック、グッドゲームだぜエ、『トライダイバース』？」

「戦いを侮辱する輩の言葉を聞くつもりはない」

「ジエニが言った通りだ、お前にもし敗者としての誇りがあるんだつたら、俺たちの質問に答えろ」

なにがグッドゲームだ。相変わらずちゃらけた態度を取っている腐れピエロは、俺たちの反応を見て満足げに口角を吊り上げると、ふざけた笑顔を浮かべながら言い放つ。

「イヤだよバアアアカ！ オレってば、お荷物の介護に追われて大変だって事実を言っただけで通報された可哀想な身なんだぜエ？ むしろそつちが謝るべきなんじゃないのオ〜？」

「この野郎……！」

懲りもせずにマフユを侮辱するような態度を取った腐れピエロに、思わず殴りかかる態勢を取っていたけど、それを引き止めるように、チナツは俺を羽交い締めにしていった。

「落ち着きなさい、ユウヤ！ どうせこいつには運営から処分が下るわ、PKでアンタもしよっ引かれてちゃ世話ないでしょ！」

「これが落ち着いていられるか！ こいつを百回はぶん殴らないと気が済まねえんだよ！」

これだけの状況で口で言っても聞かない上に反省の色も見せないと来たら、それはもう喧嘩を売っているのと同じことだ。

例えPKの汚名を被ろうと、マフユに言ったことだけは取り下げてもらおうと拳を固めた刹那、俺の前に立ったジエニが静かに首を横に振る。

「拳を振るう価値もない相手。ユウヤが損をするだけ」

「だとしても……！」

「殴られたところで反省するような相手じゃない。ああいう手合いは腐るほど見てきたからわかる」

ジエニは淡々と、だけど瞳の奥には確かな怒りを宿しながら冷静に俺の蛮行を諫めるような言葉を紡ぐ。

確かにあいつを百回ぶん殴ったところで、百万回ぶん殴ったところで、反省の言葉なんてものは出てきやしないのだろう。

それでも、こつちとしてはあの腐れピエロがマフユに言った侮辱だけはなんとしたって取り消してもらいたいのだ。

一触即発の空気に、通りすぎるダイバーたちがぴりぴりと神経を逆立てる感覚が肌に伝わってくるような気がした。

悪い意味で今の俺たちは注目の的ってことなのだろう。

反省の欠片もなく、今もニタニタと人の神経を逆立てするような笑みを浮かべている腐れピエロをどうしてくれるかと、俺が怒りに囚われていたその時だった。

「残念ながら、そちらのダイバーが言う通りだよ」

確か「SDガンダムフォース」に出てくる「ガンダイバー」の姿をしたダイバーが、ガードフレームを二機従えて、セントラル・ロビーに姿を表す。

ガードフレームを従えてるってことは、運営関係者なのだろうか。俺たちと、ガードフレームに拘束されている腐れピエロの間に立つと、そのガンダイバーは無機質な表情を保ったまま、淡々とあの腐れピエロに通告する。

「フォース『シルク・ドウ・イデオ』……彼ら『トライダイバーズ』からの通報は受け付けさせてもらった。それ以前にも複数回の警告処分は行っていたはずだが、今回は規定の回数を超過した上に反省の色もないということで、アカウントを凍結させていただく」

「おいおい、そりゃあないんじゃないか、運営さんよ、オレはただ事実を言っただけだぜエ？ そのフォースが、『トライダイバーズ』がお荷物抱えて可哀想だつてよ」

「君の言うことが事実かどうかは関係ない。しかしその言動は特定個人に対する誹謗中傷と判断するに足りるものだ。加えて再三に渡つての警告無視。よって君のアカウントは無期限凍結する。この処分が覆ることはない」

ガンダイバーが指を鳴らすと同時にその処分が下ったのか、何か言いたげにしていた腐れピエロはテクスチャの塵に還って、強制的に口グアウトさせられていた。

あのガンダイバー、それだけの権限を持つてるとことは相当運営の中でも高いポジションにいるんだろう。

そんな人がわざわざ出向いてきて直接アカウントの永久凍結を言

い渡す辺り、あいつらに俺たちと似たような思いをさせられたフォー
スは少なからず存在していると考えると、なんだかやるせない気持ち
になる。

「さて、騒がせてしまつて済まなかつたね」

「あの……すみません。ゲームマスター、ですよね？」

「いかにも私がゲームマスターだが」

チナツが小首を傾げて問いかけた言葉を、ガンダイバーもといゲー
ムマスターは静かに首を縦に振つて肯定する。

上の方どころか、運営のトップだった。

ゲームマスターが直々に出向いてきた辺り、やっぱりあの腐れピエ
ロ共の罪状は相当なものだつてことに間違いはないようだ。

「通報したアタシたちが言うのもなんですけど……本来であれば運営
は個人間のトラブルには介入しない。そうですね？」

「本来であればその通りだ。しかし、今回の件は今までに寄せられた
通報の件数が極めて多かつたのと、彼がこちらからの警告を再三に
渡つて無視してきたことに対する、ある種例外的な措置だ。ログデー
タを渡してくれた君たちには感謝しているよ」

「つまりあの腐れピエロ、それだけ多くの人に迷惑かけてたつてこと
なんですか」

「平たく言えばそうなる。それでは私は運営業務に戻らせてもらう
よ」

なんて野郎だ。罰が降つた以上、これ以上言うのは野暮つてもんな
んだらうけど、それでも怒りは治らない。

腐れピエロにやつた時と同じように指を鳴らすと、従えていたガー
ドフレームと共にゲームマスターはどこかへと解けて消えていく。

ブレイクデカールの件とか、色々調査してくれてるだろうに、わざ
わざ呼び出す形になったのは申し訳ないけど、こうして明確な違反に
は迅速に対応してくれる辺りはありがたい。

「……それにしても解せないわね」

「なにがだ、チナツ？」

「今回は偶然もあつただらうけど、違反行為にこれだけ早く対応して

くれる運営が、マスダイバーを取り締まられてないのがよ」

確かに、言われてみればその通りだ。

ブレイクデカールを使ったであろう映像データだとかログだとかはサーバーに残ってるはずなのに、今の今までマスダイバーが検挙されたという話は、一件も聞いたことがない。

俺たちが遭遇しただけでも結構な数のマスダイバーがいて、その口グだつて逐一観測しているだろうに、それでも誰一人として検挙されていないのは不自然にも程がある。

「聞いた話じゃブレイクデカールとここ最近発生してるバグは無関係じゃないって話なのに、それでも運営が動かない……なんだかイヤな予感がするわね」

「……ああ」

腐れピエロが捕まったことを喜ぶ、とまではいかなくともある程度溜飲が下がったのが元に戻っていくかのように、新しい不安の影が俺たちを包む。

最近遭遇していないとはいえ、マスダイバーが日に日に多くなつて、ブレイクデカールが末端にまで広がっているというのはこの前読んだ電子新聞に書いてあったことだ。

もしもブレイクデカールと、発生するバグが無関係でないのなら、マスダイバーの母数が増えれば増えるほど、それが引き起こされる回数もまた増えていく。

一体誰が、何の目的で。

考えても、答えは出てこない。

どつちにしても今は、マフユを侮辱したあの野郎のアカウントが永久凍結されたことに感謝すべきなのだろう。

「マフユ、さつきも言ったけどさ、あんなやつ言うことなんて気にするなよ」

「……ユウヤ、君……」

「マフユは俺たちの仲間だ。だから……上手く言えないけどさ、迷惑だとかそんなこと、思っていないからな」

むしろお互い迷惑をかけ合つて、お互いにそれを解決していく方が

きつと望ましい。

だから俺は、マフユにはつきりと、力を込めてそう言った。

仲間って、そういうものだろう？ 少なくとも俺は、そう思っている。

「……ありがとう。私、頑張る、よ……」

「そう気負うなって、肩の力抜いてこうぜ」

「珍しくユウヤの言う通りよ。マフユは真面目だからなんでもかんでも背負い込んじゃうけど……少しぐらいはアタシたちに分けなさいよ」

チナツはフォローに入るように優しくマフユの肩に手を置いて、微笑みかける。

それにしたって珍しくは余計だろ、珍しくは。

「珍しくってなんだよ？」

「ふん、言葉通りよ」

「この野郎」

俺たちのやり取りを聞いていたマフユがおろおろと困ったように周囲を見ていたけど、こんなのは冗談というか、いつものじゃれ合いみたいなもんだ。

わかっているからこそ、ジエニもどこか呆れたような表情でこっちを見ているのだろう。

多分それぐらいの温度でちょうどいい。最近は大ガ粒子杯の優勝者だとか、有名フォースを倒したとか色々尾鰭がついてるけど、思えば俺たちは、階段を急いで駆け上がりすぎたのかもしれないな。

「名前が売ればいいことも悪いこともある、か……その通りだな」
「全くよ」

「……強い相手と純粋に戦える。それだけならいい」

相手だって勝ちたいから必死にやってて、策を弄したりもするんだろう。

でも、いつかもいつたけど、俺としてはまたあの「度胸ブラザーズ」やコドウと戦ったときのように正面からぶつかり合って戦いたい。

フォース戦の依頼を受ける時はその辺を基準にしてもいいのかもしれないな。

「とりあえずフォースネストに戻ってバトルの相手でも探すか」

「アタシは賛成。マフユは？」

「……私も、それでいいかなって……」

「ユウヤが、将来のパートナーが決めたなら私はそれに従う」

淡々とそんなことを答えるジエニと、それに眉を逆立てるチナツと
いういつもの構図に苦笑しつつ、全員の同意を得たことで俺は三人を
対象に選択してフレンドワープを執行する。

とりあえず目先の目標としては、正面からガチでやり合ってくれる
フォースを探すことか。



果たしてそんなノーガードでやり合ってくれるフォースがそう簡
単に見つかるのかという話だけど、結論からいえば見つけた。

名前はメッセージ曰く「ケモノミチ」だとか。

なんでも、タイガーウルフさんの「虎武龍」をリスペクトしている
フォースらしく、格闘術や剣術だけで、どんな相手とも真正面から戦
うことをモットーにしているらしい。

その辺は「度胸ブラザーズ」とどこか似たところがあるな。

果敢に斬りかかってきたAGEー1ソーディアを流星螺旋拳の一
撃でノックアウトして、実に戦力差三倍というハンデを少しでも埋め
るために、俺は次から次に向かってくる相手を正面から迎え撃つてい
た。

『その胸借りるでござす！ ちえええええすとおおおっ！』

『おっと危ねえ！ 次元霸王流、弾丸破岩拳！』

『ぬおおおっ！ 無念！』

息つく間もなく真つ正面から大上段に刀を構えて斬りかかってき
たAGEー2ザンテツを打ち倒し、その後ろに控えていたガンダム
マックスターに回し蹴りを放つ。

正直、キツイところはある。

なんせ相手の頭数はこっちの三倍だからな。だけど、これだけ戦つ

てて気持ちいい相手も久々だ。

「……次元霸王流、閃光魔術蹴り」

「たまには狙撃だけじゃなくて、ガンダム的には斬り合うのも一興つてやつね！」

ジェニのプライドマスターが閃光魔術蹴りで赤と白の配色を逆転させたシャイニングガンダムを打ち砕き、チナツのウイニングロードアストレイが、同じように「ちえすと」の奇声を上げて斬りかかってきたソードストライクの胴体を両断する。

皆なんだかんだで鬱憤が溜まっていたのだろう。

それをぶつけるように俺たちは「ケモノミチ」のダイバーたちをちぎっては投げといった風情に片付けていく。

「なんと……これがメガ粒子杯優勝者が率いるフォースの実力！ それでこそ、それでこそ俺たちが挑む意味がある！ 行くぞマタドールガンダム！」

「レッドフラッグは使ってこないか！ どこまでも潔いな、あんたたち！」

「最高の褒め言葉だ、ではフォース『ケモノミチ』が『ノリミチ』、いざ！」

手足と頭を収納して、闘牛の頭を思わせる形態に変形したマタドールガンダムがヒートホーンを赤熱化させて、スライダーに向かって一直線に突進してくる。

後先を考えていない捨て身の一撃だ。躲すのは容易いだろう。

だけど、それじゃあ真つ正面からぶつかり合ってくれている相手に対して筋が通らない。

「行くぞ……俺たちも全力で迎え撃つ！ お前は俺だ、俺はお前だ！」

イクシードチャージ発動！ バーニングバーストシステム、出力百四十パーセント！」

瞳を閉じて目蓋の裏に太陽を仰ぎ見れば、俺とストライクスファイダは一心同体となって、猛り狂う雄牛を迎え撃たんと、赤いマントの代わりに全身から炎を噴き上げる。

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

『ぬおおおっ！　これが我が道、獣道！　道がなければ創って拓く！』

『はああああっ！』

右手に凄まじい衝撃が走るのもお構いなしに、俺は唇の端を吊り上げて不敵に笑う。

こんなに楽しい戦いなんだ、いつまでだって楽しんでいたくなるけど、勝負つてのはほぼ必ず、白黒がつくものだ。

互いに全力を出すからこそ、礼節を尽くして拳を交えるからこそ負けられない戦いがある。

それが今この瞬間だつてことだ。

パルマ・ファイオキーナの光とバーニングバーストの炎を纏った拳と、ヒートホーンがぶつかり合つて火花を散らす。

百四十パーセントまで引き上げたバーニングバーストと互角にぶつかり合う辺り、この人が作ったマタドールガンダムは相当作り込まれているし、思いがこもっているのだろう。

拳を通して伝わってくる。どんなに不器用だとしても、どんなに不格好だとしても、茨の道を突き進んでいくというこの人の、ノリミチさんの覚悟が。

だったら俺もその覚悟に応えてこそだ。そうだろ、スファイダ。

右手に走る痛みを堪えながら、歯を食いしばって俺は更に意識を深いところへと沈めていく。

「……見えた！　バーニングバースト、出力百六十パーセントだ！」

『なんだと!?　戦いの中で進化する、これが……!』

「そうだ！　俺とスファイダ、そして次元霸王流だ！」

『ふっ……見事だ……!』

出力を更に引き上げたバーニングバーストの一撃でマタドールガンダムを粉碎すると、押し寄せる、鉛のような疲労感に抗うように歯を食いしばって、俺は周囲の警戒に移行する。

ジェニとチナツが暴れまわってくれたのもあって、相手の数はかなり減っていた。

この分なら、二人に任せてても問題はないだろう。ただ、気になる

のはマフユがどうなってるかだ——そんなことを考えていた、その時だった。

『速さならばこのレコードブレイカーも負けはしない！ ちええええええええすとおおおおお！』

「きや……っ……！」

「マフユ！」

マフユのGーエクリプティカに、レコードブレイカーというらしい赤い機体が急接近して、ビーム・ザンバーを振り上げる。

トランザムに追いつく辺り、あの光の翼も相当作り込まれているのだろう。

俺が救援に向かおうと機体を反転させた、刹那。

「なんだ!？」

コックピットにアラートが鳴り響いたかと思えば、何かバトルフィールドの中に割り込んできて、急速でマフユのGーエクリプティカへと向かっていく。

この感覚には覚えがある。あの時、「ゴールデン・ドリームズ」と戦っていた時の。

「……『シャドウロール』か！ マフユ、気をつけ——!？」

『……』

夜の闇を切り裂いて現れた「シャドウロール」と黒いユニコーンガンダムペルフエクティビリティは、レコードブレイカーにガンダリウム合金製の棍を叩きつけて破壊したかと思えば、Gーエクリプティカの両肩を掴んで、額と額を触れ合わせた。

なんなんだ、何が狙いなんだ？

攻撃するでもなく、ただ頭を軽くぶつけて、「シャドウロール」はそのまま夜の闇へと溶け込んで消えていく。

「マフユ、大丈夫か!？」

「……え……あ、うん……大丈夫だ、よ……?？」

「ならよかったけど……何しに来たんだ、あいつ……?？」

俺だけじゃなく、マフユもまた、意図がわからない「シャドウロール」の行動に困惑しているようだった。

無理もない。突然現れてやってきたかと思えばただ頭を軽くぶつけるだけで帰っていくんだから、前に戦ったあいつの行動から考えれば異常極まっている。

【Battle Ended!】

【Winner:トライダイバーズ】

チナツとジエニが残っていた相手にトドメを刺したことで、「ケモノミチ」とのフォース戦は俺たちの勝利に終わった。

けどなんだか、せっかくの戦いに水を差された気分だ。

そしてあいつは、「シヤドウロール」はわざわざ何をしにきたのか。それが今はただ、心の奥にできたしこりのように、引っかかっていた。

Ep. 49 「禁忌の力」

「なあ、マフユ……結局『シャドウロール』は何がしたかったんだ？」
結末的には色々と釈然としない「ケモノミチ」とのフォース戦が終
わったあと、俺は直球でマフユにそう問いかけていた。

あいつに何の意図があつてそうしたのかはわからないけど、あの動
きは確実にマフユに対してコンタクトを取るため、頭をぶつけてた
のも、接触回線を開く意味があつたんだと思う。

でも、どうして俺やチナツ、ジェニじゃなくて「シャドウロール」は
マフユに接触を図ったのかについては解せないままだ。

「……ごめんなさい、ユウヤ君……わからない。何も言つてこなかっ
たから……」

「接触回線開いてんのか？」

「うん……」

マフユは静かに首を縦に振る。

元々メガ粒子杯の参加者を襲撃してた割にメガ粒子杯本戦には全
く姿を表さなかつたり、かと思えば突然現れてマフユにコンタクトを
取るだけ取つて何も言わないときた。

ますます何を考えてるんだかわからなくなってきたな。

「何か、データを転送されたりは？」

俺に代わつて、フォースネストの壁にもたれかかっていたジェニが
そう尋ねる。

確かに何らかのデータを転送してる可能性もあるといえばあるな、
果たし状とか。

でも、果たし状だったらマフユじゃなくて俺に叩きつけてくるのが
筋つてもんだらう。マスダイバーなんかやつてる時点で礼儀だとか
筋だとか、そんなもんは関係ないんだらうけど。

「……特には、何も……」

「通信でもデータの転送でもないのに、わざわざマフユと接触して回
線を開いた……？」

「今までの話を総合すると、そうなるな」

チナツが細い顎に指をやって唸り声を上げるのに乗っかる形で、俺もまたこみ上げてくる溜息を押し殺しながら言った。

ここまで不自然が極まっていると、マフユが嘘をついている、という可能性も、信じたくはないけど浮上してくる。

あの「シヤドウロール」が奇行に走っているだけだという可能性もゼロじゃない。でも、順当に考えるならどっちの可能性が高いかといえば、残念だけど前者の方だ。

俺たち三人の視線を一身に受け止めるマフユは俯き、丈の余った袖で顔を半分ほど覆い隠していた。

マフユとしても、あいつの奇行に巻き込まれて困っているだけなのだ、できることならそう信じたい。

仲間に疑いをかけるなんてことは、こつちとしてもしたくもないしな。

「……あの、その……私……」

「マフユが何もないって言うなら、俺はそれを信じたい」

「ユウヤ……」

「……」

「俺は……仲間を疑いたくない。本当にマフユが何もないって、『シヤドウロール』の奇行に巻き込まれただけだってんなら話はそれでおしまいだ。だから、マフユ自身の言葉で伝えてほしい。俺たちは信じたいんだ、マフユを」

俺から言えることは、これが精一杯だ。

例えどれだけ怪しくても、怪しいってだけじゃ証拠にならない。

一度疑い始めればその疑念は際限なく膨らんでいく。

マフユが嘘をついているってだけじゃなく、「シヤドウロール」とあの瞬間に何らかの取引をしていたとか、もしくは、仲間になるように誘われたとか、考えるだけで悪い可能性はキリがない。

だから、マフユ自身の言葉で決着をつけてほしかったのだ。

固睡を飲んで俺とチナツが見つめる中で、マフユは丈の余った袖で顔の半分を覆い隠したまま、しばらくフリーズしたように固まっていた。

無理もない。口ではああ言ったけど、状況的には針の筵だ。チナツだつて、ジエニだつてマフユを疑いたくないとは思っているだろう。

だけど、どう考えたつて、情報を整理した上で物事に整合性が取れてないなら、発言者を疑わざるを得ないのもまた事実なのだ。

逡巡するマフユに、困惑と疑いが縋い交ぜになった視線が突き刺さる。

じわり、と眦に涙が滲んでいる辺り、マフユとしてもこの状況は好ましくないはずだ。というか、好きで疑われるやつなんかいない。

でも、例え返ってきたのがどんな答えだとしても、それがマフユにとって「真実」なのだとしたら、俺はそれを信じたいし、信じるつもりなのも確かなことだ。

言葉じゃなくて視線に想いを込めて、琥珀色の大きな瞳を真っ直ぐに見据える。

もうこれ以上言うことはない。

あとはマフユを信じるだけだ。

「……すう、はあ……」

「マフユ」

「……何も、ない。何でも、ない、よ……」

「そつか。ありがとな、マフユ。じゃあこの話はこれでおしまいだ」

マフユの答えはただ、それだけだった。

針の筵になりながらも、ちゃんと答えてくれたことに感謝しつつ、俺は約束通りにこれ以上疑いをかけないことを、この話を続けないことを宣言する。

あとはフォース戦の反省会をするのもよし、個人的にやりたいことがあるならよしつてことで一旦解散にしておこう。

「つてことで、今日は解散な」

「わかったわ……アンタがそう決めたつてんならアタシから言えることは何もないわ」

「私も同じ。ユウヤが信じると言ったなら」

チナツの言葉が、何か言いたいことを飲み込んでのそれだったのは

わかる。

ジエニはいつも通り、俺に選択を委ねてくれているのもわかる。だからこそ、この決断が正解だったのか間違っていたのかについて責任を負うべきは俺一人だ。そもそもマフユの言葉を信じるなら、そんなことを考える必要もないんだけどな。

悪い予感だとか、そういうものに限ってよく当たると話もわかる。それでも、一度信じると決めたならそれを貫き通すのが筋つてもんだらう。

父さんの、師匠の教えだ。

「俺はログアウトするけど、マフユはこの後なんか予定でもあるのか？」

「……うん、うん……G―エクリプティカの武装とか、見直したかったから……」

「そっか、それじゃまた明日な！」

「……うん。また、明日……」

チナツとジエニがログアウトして現実へと解けていく中で、おどおどしながら佇んでいたマフユに声をかけてみれば、その心配は取り越し苦労だったとばかりに、いつもの控えめな笑顔を浮かべて、長い袖に包まれた手を振ってくれる。

やっぱり杞憂だったんだな、と、そこに少しの安堵を覚えながら俺は、無限に上っていくエレベーターに身を委ねるような感覚と共に、リアルへと帰還していく。

あとで何か疑っちゃったことに対してお詫びとかもしなきゃな、と、そんな、どこか能天気なことを頭の片隅に浮かべながら。



「チナツ、そっち行ったぞ！」

「了解！ この速度なら狙うんじゃないやなくて叩き斬る！」

『ちいつ、トランザムに追いつがってくるとは……だが！』

ちよつとした一悶着があつた翌日、俺たちはいつも通りに色々を殺到してきた依頼の中で、ダイバーランク的な実力が近いフォースを見繕つてからフリーバトルを引き受けていた。

今回対戦するフォースは「ヴァモーズコンバット」とかいう、可変機を主軸にしているとこだ。

そのせいかは知らないけど、選ばれたフィールドが宇宙だったというこもあつて、相手の方が空間を上手く使つて戦つてる印象が強い。

俺とジェニの次元霸王流、そしてチナツの狙撃、マフユの砲撃。その全ての有効射程を把握した上で一撃離脱を繰り返している都合、俺とジェニは相手を追いかけて、チナツとマフユは相手に追いかけて、と見事に分断されてる状態だ。

はつきり言つて、状況的にはかなりまずい。

バーニングバーストを発動させて追いつたオーバーフラッグを流星螺旋拳で貫き、破壊すると、俺は次の相手をレーザーで確認して、腰にマウントしていたビームピストルの一丁を撃ち放つ。

『各機急降下！ この場でストライクスファイダーを釘付けにする！』
『了解！』

アラートが頭上から鳴り響くと同時に、プロペラントタンクの代わりにミサイルをそのパイロンに懸下しているゼータプラスC1型が急降下してくる。

ビームピストルが命中したことで一機落とせたのは良かったけど、それでも編隊を維持してこつちにミサイルの雨を浴びせかけてきた辺り、相手の練度はかなりのものだ。

直撃弾を頬のバルカンで叩き落としつつ、それでも落とすきれなかったものはビームシールドで防御する。

機動力で上を取られるつてのは中々に厄介だ。だけど、こういう状況もまた燃えてくるものがあるのは確かなことだ。

『反転急上昇！ 次はヤツにスマートガンの雨を浴びせかけて……！』

「だったらこつちも出し惜しんでる暇なんかねえよなあ！ 行くぜ、

ブレードドラグーンだ!」

『なに……っ!? おのれ、小癩な!』

スフィードにはいくつか隠し球を用意してある。それはイクシードチャージや、それを利用したバーニングバーストのオーバーストであつたり、リユミエール・ザンバーだったりするんだけど、今回切ることに決めたブレードドラグーン……本来は放熱板も兼ねたウイングパーツもそれに当たる。

俺はマニュアルで全部を操れるほど要領がいいわけじゃない。

だけど、オートであつても全方位攻撃が強力なのは確かなことだ。

ブレードドラグーンによる包囲攻撃で編隊に乱れが生じたゼータプラスをリユミエール・ザンバーで切り裂いて、指揮官機と思しき、灰色じゃなくて白とオレンジで塗り分けられていた機体に俺は突進する。

「あんたがリーダーか!? いや、どっちでもいい! こいつで終わらだ!」

『ちいつ! まだ終わらせるものか!』

モビルスーツ形態に変形したゼータプラスが、手にしたビームスマートガンでこつちを狙ってきたけど、それは読んでいる。

『バカな、反応速度が違いすぎる……ぐわあああつ!』

狙撃ビームを最小限の動きで回避、バーニングバーストの加速力を利用して、俺は手にしていたリユミエール・ザンバーでその隊長機と思しきゼータプラスを両断、撃墜した。

「ジエニ、チナツ、マフユ、状況は!」

「こちらに問題はない、少し手間取ったけど始末できる」

「こつちにキュリオスの編隊が来てる! アタシもエクストリームブラストモードで叩き落としてるけど、多分こいつら……!」

「……っ、私を、狙って……!」

『砲撃火力はこちらにとって脅威になる! ならばアタッカーを釘付けにして支援機を叩くのは当然のこと!』

相手の、キュリオスで組まれた編隊の狙いはマフユだったようだ。

エクストリームブラストモードを発動したチナツがキュリオスた

ちを追いかけていくけど、それを阻止するかのように、今度はデブリ帯に隠れていた、宙間迷彩が施されているリゼルC型――の、ディフェンサーBユニット装備型が真下からチナツを強襲する。

「あのゼータプラス、指揮官じゃなかったのか!？」

『こういう時のために、指揮系統は引き継ぎを行えるようにしておくものだよ、拳法少年!』

ジェニが蹴散らしていたレイダーガンダムの群れを束ねていたレイダー制式仕様を駆るダイバーが、得意げに笑いながらそう言い放った。

なるほど、リーダー役がやられたら次に指示を出せるやつが指示を出せるように徹底的な統制を行って、その体制を整えておくってのも一つの戦術だ。

恐らくはジェニがレイダー制式仕様にとドメを刺したとしても、残っている誰かがまた指揮権を引き継いで、編隊を維持した上での連携攻撃を仕掛けてくる。

ダイバーランクは強さを表す指標だというけど、あくまで指標は指標でしかない。

こうして戦ってみることでしかわからないこともまたあるのだ。

なんて、感心してる場合じゃないな。

幸いゼータプラスの編隊は片付いて、俺はフリーになった状況だ。

分断されてる以上、ここからできることは、必然的にジェニの援護に向かうか、チナツの援護に向かうか、マフユの援護に向かうかの三択になる。

だから、まずは状況を整理しよう。

レイダーガンダムの編隊はスリーマンセルを維持した上で、決して次元霸王流の射程に入らないような位置どりをしてジェニを翻弄している。

リゼルC型の編隊は急上昇攻撃でチナツのウイニングロードアストレイに一撃喰らわせた上で、今度は俺にやったのと同じ、急降下爆撃の態勢に移行している。

そしてキュリオスの編隊はそのミサイルコンテナから大量のミサ

イルを吐き出して、トランザムで逃げるマフユを追い詰めている。

誰のフォローに入るのが一番いいのか、正直頭が混乱してパニック状態だ。

位置関係で近いのはジェニで、逆に遠いのはマフユってことになる。

だけど、損害的にはメガビームランチャーを食らったチナツが深刻で、マフユもミサイルの雨霰に晒されて、コックピットにはイエローコーションが点滅していた。

「どうする……!?!」

『君たちは強い、認めよう！　だがそれは個々の力が突出しているだけだ！　我々のように集団戦を徹底するのもまたGBNの醍醐味よ！　キュリオス部隊、手負いのエアマスターから片付けるぞ！』

『サー、イエッサー！』

指示役に回ったレイダー制式仕様を操るダイバーが命令を下すと同時に、トランザム中のキュリオスがミサイルコンテナを切り離し、MS形態に変形する。

まずい。いくらキュリオスの手持ち武器がGNビームマシンガンだけとはいえ、三機に囲まれた状況はいくらマフユとG―エクリプティカでも持ち堪えられないだろう。

「マフユ！　今フォローに回るから持ち堪えてくれ！」

そう判断した俺はチナツとジェニを信じて、即座にブレードドラグーンを回収、バーニングバーストの出力を引き上げて救援に向かうとした、その瞬間だった。

「……やっぱり私が狙われる……やっぱり、私が皆の足を引っ張って、る……嫌……私……私は……お荷物になんか、なりたくない……っ！」

『な、なんだ!?!』

モビルスーツ形態に変形したキュリオスが、三方向からビームマシンガンを浴びせかけて、撃破とはいかなくなっちゃって大破させたと思ったのも束の間、弾幕砲火の中から、無傷のG―エクリプティカが姿を表す。

——その機体に、紫色のオーラを纏いながら。

「マフユ、お前……っ!？」

「私は……フォースのお荷物なんかじゃない……私は……ユウヤ君の足枷なんかじゃない! ああああああっ!!!」

『なんだ、ビームサーベルの出力がこんなに!?!』

『まさか……ブレイクデカール、なのか……!?!』

『ふ、副隊長! 指示を! うわあああっ!』

ビームサーベルというよりはほとんどライザーソードの域まで達している、紫色をしたビームの刃がキュリオスの編隊を呑み込んで、テクスチャの塵へと還していく。

「あああああっ!!! うわあああああっ!!!」

そのままであらめな機動力でマフユはその瞳に涙を浮かべたまま、言葉にならない叫びを発して、チナツの片翼を腕いでいたりゼルC型を、腰のヴェスバーから放たれた大出力という言葉でも足りない一撃で葬り去る。

あまりの出来事にしばらく呆然としてたけど、あれは間違いなくブレイクデカールだ。

宇宙が裂けて、紫色の雷鳴が走る。

でも、どうしてマフユが。やっぱり俺たちに嘘をついていて、「シヤドウロール」から何か吹き込まれたのか?

いや、そんなことを考えてる暇なんてない。

止めなきやいけないんだ。例えそこにどんな理由があったとしても、ブレイクデカールなんてものを使ったら、マフユは。

「やめろ、マフユ!」

「……っ、離して! 離して、ユウヤ君! 私は……私は、フォースのお荷物なんかじゃない……皆の足を引っ張ってるだけじゃないって、これで……!」

「ダメだ! そんなまやかしに縊ったって、何も得られるものなんかじゃない! 今すぐやめろ、マフユ!」

ブレイクデカールなんてものに頼ったところで、その力はまやかしに過ぎない。

それに、マフユだつて知つてゐるはずだ。一見強力に見えるマスダイバーだつて、その更に上をいくようなダイバーにやられている。

つまり、自分自身の腕を磨かずに、ツールに頼つたところで、それは自分の目も曇らせるだけで、この世界にも、GBNにもバグが生まれて、いいことなんて何一つない。

だからやめろと、そう言つたつもりだった。

「ユウヤ君も……私を否定するの……?」

「違う、俺は!」

「違わないよおつ! だつて……ユウヤ君も……チナツさんも……ジエニさんも、皆凄いの……お父さんと、お母さんも凄いの……私だけ何も持つてない……私だけ、平凡で、皆の足を引つ張つて……ユウヤ君には! できる人には! 私の気持ちなんて、わからないよおつ!!!」

マフユはコックピットで涙を流しながら、その叫びと共にブレイクデカールの力で強化された武装とトランザムで、一瞬呆気に取られた俺を振り切り、「ヴァモーズコンバット」の機体を次々に叩き落とすしていく。

「やめなさいマフユ! ユウヤの言うことを……」

「チナツさんも……私にGBNをやめろつていうんですか……つ!

足を引つ張つてゐるからつて、お荷物だからつて……!」

「違うわ、マフユ! 話を——」

「私は……お荷物なんかじゃない! 私は、足手纏いなんかじゃない! うわあああああつ!!!」

『な、なんだ……なんなんだ……? 何が、起きて……つ!?』

ジエニを包囲していたレイダーガンダムが、ライザーソードのように伸長されたビームサーベルに焼かれて消し飛ぶ。

唯一残されたレイダー制式仕様は、状況が飲み込めないのか、ただ困惑していた。

「私は……わたし、は……つ……」

「今ならまだ間に合う! ブレイクデカールを使うのをやめろ、マフユ!」

「…………もう、遅い、よ…………」

『…………契約は履行された』

『なんなんだよ、うわあああつー!』

その隙を見計らっていたかのように、宇宙の闇から溶け出てくるかのように姿を現した「シャドウロール」がレイダー制式仕様をガンダリウム合金製の棍で叩き潰すと、G―エクリプティカの手を取って、バトルフィールドから離脱していく。

「クソツ、マフユー！ 逃がすかよ!」

「ダメよ、ユウヤ…………」

「…………もう、遅い」

黒いペルフェクティビリティと、その手を取って彼方に消えていこうとするG―エクリプティカを追いかけようとした俺を制止するうちに、チナツとジェニがそう呟く。

【Battle Ended!】

【Winner:トライダイバース】

システムのダイアログが勝利を告げると、同時にバトルフィールドが消失し、俺たちは強制的にセントラル・ロビーへと転送される。

「なんなんだよ…………なんなんだよ、畜生ツ!」

振り上げた拳を下ろす場所をなくして俺は、「シャドウロール」とマフユが消えていった漆黒の宇宙を見つめ、意識が再構築されていく感覚の中でそう吼えることしか、できなかつた。

Ep. 50 「フォニー」

マフユが、ブレイクデカールを使った。

その事実、俺とチナツを動揺させるのには十分すぎるものだった。

ジエニはまだ「トライダイバース」に加入して日が浅いせい、冷静に状況を俯瞰できてるみたいだったけど、俺たちはそうもいかない。

(違わないよおっ！ だって……ユウヤ君も……チナツさんも……ジエニさんも、皆凄いの……お父さんと、お母さんも凄いの……私だけ何も持ってない……私だけ、平凡で、皆の足を引っ張って……ユウヤ君には！ できる人には！ 私の気持ちなんて、わからないよおっ!!!)

あの時マフユが吐き出した言葉が、何度も脳裏でリフレインする。俺が、俺たちがどうこう思っているとかじゃない。きつとマフユは、言葉にしなかつただけでずっとそのコンプレックスを抱え続けていたのだろう。

できる人には、わからない。その言葉から感じられる断絶は、痛みは、きつと俺が今想像しているよりも遥かに深く、切実なものなのだろう。

重苦しい沈黙がフォースネストの中に漂って、空気が鉛を含んだように重たくなる。

話をしようにも、マフユはもう「シャドウロール」とどこかに行ってしまったから、足取りを追うのも難しい。

いつの間にか、フレンド欄からもフォースメンバー欄からもマフユの名前は消滅していて、そもそも今ログインしているのかさえわからない有り様だ。そうなったのも、全部。

「俺のせいだ……」

「ユウヤ……」

「俺が、マフユの本当の気持ちに気付いてやれなかったから……本当はずっと辛くて苦しくて、バトルどころじゃなかったんだって、わ

かってやれなかったから……」

そうだ、全ての責任は俺に帰結する。

チナツが気遣うようにそつと肩へと乗せてくれた手が重い。

慰めてもらっているんだろうけど、それがただ俺を惨めにさせて、そう感じてしまう自分に嫌悪感が沸々と湧き上がってくる。

リーダーの俺が本当であれば、誰より早くマフユの気持ちに気付いてやらなきゃいけないかったんだ。

チナツのせいじゃない。ジエニのせいじゃない。ただ俺が、俺が悪いんだ。

頭を抱えて、フォースネストの机に蹲る。それまでにどうすればよかったとか、あの時ああしていればよかったとか、後悔ばかりが心の奥底から溢れ出してきて止まらない。

「……それで、ユウヤ。貴方はどうするの」

「……ジエニ」

「時間は戻ってくれない。私は貴方に落ち度があるとは思わない。だけど、マフユがブレイクデカールを使つて、フォースを抜けた事実は何かわらない」

だから、これから貴方はどうするつもりなの。

淡々と、だけど、俺という人間の器を見定めるように、失望させてくれるなよ、とばかりにジエニの鋭い視線が突き刺さる。

確かにジエニが言う通りだ。俺が悪いと言い続けたところで、そこにマフユがいないのなら、その言葉が届くことはない。

だったら、これからはあいつが言った通りに俺はこれからどうするのか、どうしたいのかって話だ。

正直な話、それを考えられるような頭じゃないところはある。今だって絶え間なく沸き起こる後悔と自己嫌悪に苛まれて、すっかり脳内メモリはキャパオーバーを起こしている。

でも、そんな状態でも一つだけわかることが確かにあった。

それは、マフユがもうこのフォースにはいないということと、「シャドウロール」と一緒にどこかへ消えてしまったという事実だ。

そこから推測するなら、GBNの中では「シャドウロール」の足跡

を追いかけることが、マフユを見つけてることに繋がるだろう。でも、どうやって追いかければいい。

『シヤドウロール』……あいつを追えば、マフユは見つかるかもしれない」

「そうね、最後に一緒に行動してた以上、その可能性は高いわ。でも……『AVALON』や『ルミエル・ナイツ』、『ザ・シルバリー』が本気出して追いかけても見つかからないようなやつ足取りなんて……」

チナツがぐくりと肩を落としながら呟いたように、それはあまり現実的な手段じゃないことぐらいは俺にもわかる。

でも、他にどうやってマフユを探せばいい。会って話をしなければきつとこの問題は解決しない以上、どうにかして話をつけなきゃいけないのに。

俺とチナツが頭を抱えていると、ジエニが被っていたパーカーのフードを鬱陶しげに払って、小首を傾げながら言葉を紡ぐ。

「……ユウヤは、マフユのリアルを知っているはず。なら、直接訪ねて訊くのも手段」

「……その手があったかー」

GBNで会えないなら、リアルであって話をつける方法もあるだろう。

幸い、俺はマフユの住所を知ってるし、自転車を飛ばして行けばすぐだ。

状況を冷静に見られている分、ジエニの視界は俺たちよりも遥かにクリアだ。今はそのことに感謝しつつ、善は急げとばかりに俺はログアウトボタンに手をかけた、刹那。

「……話してくれるとは限らない。それでもいいの」

ジエニがそれを制止するように、冷徹な視線で俺を見据えて鋭く言い放つ。

GBNで話しづらいことでもリアルなら、って訳にはいかないことぐらい想像はつく。

実際、ジエニが言う通り、マフユが話してくれない確率の方が圧倒

的に高いのかもしれない。だとしてもだ。

「……わかんねえ、でも今は少しでも可能性があるなら、賭けてみたいんだ」

だとしても、話をしようとしなければ何も始まらない。もしもマフユが口を閉ざしてしまったら、その時は。

その時は、どうすればいいのか。

新たな不安が胸をよぎる。もしもリアルで話してくれなかったら、俺たちは今度こそ完全に手がかりを見失ってしまう。

でも、そんなことを考えたって何も始まらない。まずはやってみなきゃわからないんだ。

「……そう。ユウヤがそうするなら止めはしない」

「ジエニ……」

「重ねて言う。私はユウヤが悪いとは思わない。ブレイクデカールに手を出したのはマフユの問題。だから……難しい」

無明に堕ちた戦士を救うのが難しいように、一度深みに嵌まってしまえば、抜け出すのは容易なことじゃない。

ジエニはぶつきらぼうながらも俺を気遣うようにそう言ってくれた。

失敗したとしても気に病むな、と、そういう意味も込めているのだろう。

「ありがたいな、ジエニ……だけどこれは、やっぱり俺の問題だから」
「そう」

「だから、ケリをつけに行く」

ジエニと、そして腕を組んで俯いていたチナツにそれだけ伝えて俺はログアウトを選択する。

現実へと解けていく、どこまでも上るエレベーターに乗せられたような感覚と共にリアルへの帰還を果たした俺は、よそ行きの服に着替える間もなく、軒先に止めてある自転車に向かってひた走った。

途中ですれ違った母さんが何事かを問いかけようとしたのも遮るように、俺はペダルを漕いで家を出る。

夜の空気が溶け出したように、しとしとと雨が降っていた。

傘も雨具も持たないまま、ただ俺は、髪や服が濡れるのも厭わず、一心不乱に前へと進む。

待っていてくれ、マフユ。今、謝りに行く。それで済む話じゃないのもわかっているから、どんな償いだつてする。だから。

だから、どうか心を閉ざさないでくれ。言葉を閉ざさないでくれ。そう願って、俺はペダルを漕ぎ続けた。



「頼む、門を開けてくれ、マフユ！　こんな時間に済まない、でも俺、お前に謝りたいんだ！」

そうして辿り着いた高級住宅街の中でも一際大きなマフユの家の前門で、インターフォンを鳴らしながら俺は呼びかけ続けていた。

だけど、いつものように控えめな言葉が返ってくることはなく、鉄の門は固く閉ざされたままだ。

勢いを増した雨に濡れながら、俺はインターフォンについている監視カメラに向けて頭を下げる。

どうにか、たった一言でもいい。

ただ、俺が悪かったと謝らせてほしいんだ。

その結果、マフユが俺を許さないってんなら構わない。これ以上フォースにいたくないと言うんなら構わない。だからどうか、話だけでも聞いてくれないか。

祈るように目を閉じて、俺はインターフォンの前で頭を下げ続けていたけど、返答はなく、ただ静かに降り頻る雨がアスファルトを叩く音だけがいやにはつきりと聞こえてくるだけだった。

時折通り過ぎていく誰かから後ろ指を刺されたり、妙なやつを見るような目で見られたりするのにも構わない。これは俺が、俺自身の意思でやっていることなんだから。

たった一度、たった一言でもいいと待ち続けること二時間近く、何度かインターフォンを押し直したりもしたけど、結局マフユからの回答は、拒絶の二文字に還元されていた。

「……マフユ……」

謝ることすら許さないという意味なのか、俺の顔も見たくないということなのか。

それがマフユの意思なのだとしたら、俺にはもう、できることなんて何もないんじゃないか？

それを認識した途端、膝から力が抜けたかのように崩れ落ちて、俺は呆然と天を仰ぐことしかできなかった。

祈りが届くことはなく、降り頻る遠い雨に押し流されて消えていく。

曇った夜空に星はなく、人工の明かりだけが頼りなく俺を照らしていた。

まるで願いをかける星など、祈りが通じる場所などどこにもないばかりに。



ダイバーギアを通じて、一通のメッセージが届いたのはその翌日だった。

雨の中で濡れ鼠になっていたせいで危うく風邪を引きそうになっていたというのに、母さんが何も訊かないでくれたのは優しさなのだろう。

幸い体調を崩すこともなかった俺は、それがマフユからの連絡かと思つて、どこかで期待を抱きながら、メッセージを大慌てで開封したが、そこに書いてあったのは全く違う人からの、全く予想外な内容のものだった。

【From:クジヨウ・キョウヤ】

【To:ユウヤ】

【Message:やあ、ユウヤ君。久しぶりだね。まずはメガ粒子杯バトルカイの優勝おめでとう。あれから、GBNを楽しめているかい？ 多分訊くまでもないだろうね。前置きはここまでにして、早速本題に入らせてもらおうよ。君と『トライダイバーズ』に伝えたいこと

がある。近々、遣いの人間がコンタクトを取るだろう。その時はよろしく頼む。全てのダイバーが、変わらずGBNを楽しむために……」

キョウヤさんからの、チャンピオンからの名指しでの呼び出し。マフユの件も大事だけど、これもフォースで共有しない訳にはいかないだろう。

早速ストライクスファイダーをダイバーギアに立たせて、俺は大慌てでゴーグルを被り、GBNへとログインする。

緊急案件ってことでチナツとジエニには今すぐフォースネストに来てくれとメッセージを飛ばしておいた。

リアルでの連絡先というか住所がわからないジエニが来てくれるかはわからないけど、チナツは来てくれるはずだ。

果たしてそんな期待は、セントラル・ロビーに降り立つてからすぐに実現することとなった。

二分かそこらで、ログインとフレンドワープを同時に行ったのである。チナツとジエニが、目の前でダイバールックを形成していく。

「来てくれたのか、チナツ、ジエニ！」

「そりゃ緊急案件って聞いたら来ないわけにはいかないでしょ？」

「ユウヤが来いと言った。だから来た」

「ありがとな、早速だけどフォースネストにワープさせてくれ、用件はそこで話す！」

チナツとジエニを対象に含めてフレンドワープ、相変わらず狭苦しい宇宙戦艦の一室みたいな部屋に俺たちは集まって、チャンピオンから、キョウヤさんから届いたメッセージをスクリーンに映したものに視線を向ける。

「全てのダイバーが変わらずGBNを楽しむために、ね……なんか大事っぽいわね」

「……チャンピオン。クジヨウ・キョウヤが直々に私たちを指名してきた。私はともかくユウヤ、チナツ。多分貴方のネームバリューが見込まれてる」

ジエニが言う通り、俺たちがメガ粒子杯本戦まで残って、有名フォース「鉄仮面ズ」を討ち倒したという話が出回っていて、それを

キョウヤさんが拾ってくれた可能性は大いにある。

それ自体はありがたいことだと思う。

だけど、俺たちはマフユがブレイクデカールを使ったという問題、そして「シャドウロール」と共に消えていったという問題を抱えている状態だ。正直キャパオーバーも甚だしい。

「マフユはどうだったの？」

「……ダメだ。答えてくれるどころか、門を開いてもくれなかった」

「そう……なら、『シャドウロール』を追って直接訊くしか……」

俺がその問いかけに首を横に振ると、チナツは珍しく弱気な表情でそう呟く。

恐れていた最悪の可能性。『AVALON』すらも足取りを追えないようなマスダイバーを探して回らなきゃいけないという途方もない絶望が現実になってしまった。

がつくりと肩を落とす俺とチナツに、ジエニは理解できないといったように小首を傾げながら、キョウヤさんからのメッセージを投影したスクリーンを向けてくる。

「あの『シャドウロール』を探すなら、この状況は利用できる」

「どういうことだ、ジエニ？」

「簡単に言う。今、私たちは『AVALON』とコンタクトが取れる状態。つまり、『シャドウロール』の件について、情報を持っているチャンピオンと直接話ができるかもしれないということ」

そうか。言われてみればその通りだ。

確かに俺たちだけで闇雲に探し回るよりは、少しでも「シャドウロール」を知ってそうな誰かに話を聞くというのは悪くない。

でも、チャンピオンが、キョウヤさんが話を聞いてくれるかどうかはまた別な話だ。

だけど、可能性はある。

昨日は可能性に賭けてダメだったかもしれない。

なら今日こそは、というつもりはないけど、少なくともキョウヤさんが直接コンタクトを取ってきたということは、少しぐらい相手に対話の意思があると見てもいいだろう。

「ありがとな、ジエニ。ちよつとキョウヤさんに返事をしてみる」

「……これぐらいは当然のこと。だけど、ユウヤ」

「なんだ、ジエニ？」

「……貴方はどうしたいの？」

俺は。マフユを探して、会って、どうしたいのか。ジエニは尖ったナイフのような視線で、試すように俺の両眼を射抜く。

その答えなら決まっている。俺は、謝りたい。できることならマフユともう一度、「トライダイバーズ」としてやり直したい。

それが身勝手なエゴだと言われても構わない。だけど、マフユがもしもその言葉を否定しなければ、きっとやり直せるはずなんだ。

「俺は、もう一度皆でやり直したい。マフユに謝って……ブレイクデカールを使ったことが罪だっていうなら、それは俺たちも一緒に背負っていく」

「……本当にそれだけ？」

「……どういう意味だ？」

「……今はそれでいいかもしれない。マフユにもしも会えたなら、私たちの言葉だけじゃない。貴方自身の言葉がなければ届かない」

「俺自身の、言葉……」

ジエニの言葉が、俺の胸を深く抉るように突き刺さる。俺たちの言葉。俺の言葉。

今はまだ、と言ってくれている辺りはジエニの優しさなのだろう。だから、猶予が与えられている内に俺はきつと見つけなければいけないんだ、「俺たちの言葉」じゃなくて、「俺の言葉」を。

幕間その5 「審判の日は来たる」

GBN総合スレ part. XXX

1. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガンプラバトルネクス・オンライン、通称GBNについて語るスレッドです。各種ミッションの攻略、ビルド構築の相談、フォース勧誘などは専門スレでお願いします。

【関連リンク】

GBN攻略wiki

[https](https://)

ビルド相談スレ

[https](https://)

フォース勧誘・傭兵募集スレ

[https](https://)

【前スレ】

GBN総合スレ part. XXX

[https](https://)



341. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あのロンメル隊がパーフェクトゲームで負けたってマジ？

342. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
嘘だろ流石に

343. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

エイプリルフルはとづくに終わってんだよなあ……

344. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

エイプリルフルだとしてもこんなバレバレの嘘なんかつかねーだろ

345. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ロンメル隊こと「第七機甲師団」ってGBNのフォースランキング

第2位だぞ？ そんなやつらにパーフェクトゲームかますのなんて「AVALON」でも無理だつてこの前のフォーストーナメントでわかっただろ

346. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

正面から搦め手なしでやり合ったらまあロンメルでもチャンプには敵わないだろうけど、それでもパーフェクトゲームはねーって

347. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

一応その試合のアーカイブ自体は残ってるんだよなあ……

【G—Tubeへのリンク】

348. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんだこれ？ 攻撃された相手が即座に再生してやがるぞ

349. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それに機体から出てる紫色のオーラ……あつ、ふーん……

350. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ブレイクデカールか……でもロンメル隊だぞ？ 並のマスダイバーなんて戦術と連携で軽く蹴散らせるだろ？

351. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

一応動画時間クツソ長いから遅滞戦……というか消耗戦はやってみたいけど、それでも相手のガンプラがダメージ喰らった側から再生していくから結局押し切られたつて感じだろうな

352. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

けどよお、ブレイクデカールに再生効果なんてあったか？ あれ、あくまでチートで機体の出力を引き上げるだけだろ？

353. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

わからんけど「ルミエル・ナイト」も「ザ・シルバリー」も一泡吹かされたつて噂聞くし、もしかしたらブレイクデカールが進化してるのかもしれない

354. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ナノスキンとかDG細胞の線は？

355. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺ターンX使ってるけどナノスキンのリジエネ効果なんてGBN

じや微々たるもんだし、もしシャフリヤールが作ったとしても即時再生、しかも失われた武装まで復活するのはゲームバランス的に流石に無理だろ

356. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

昔オートドラグーン・トランザムガン逃げ戦法とかバグを使ったミラコロダインスレイヴ構築とかバランスぶっ壊れた事件はあったけど基本的に三日も経たずに修正されてるからな

357. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジカー、じやあれもブレイクデカールの仕業なのか……

358. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

チートでイキって手に入れた勝利の味は美味いか？

359. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マスダイバーからすりや死ぬほどうめえんだろうな、俺らとしちや唾吐く案件だけど

360. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

最近「シャドウロール」とかいうおかしなマスダイバーを見かけねーと思ったらこれだよ！

361. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺「ルミエル・ナイツ」だけどその効果はブレイクデカールで間違いないぞ、俺も何度か戦ったことある

そして正直メンバーのモチベーションがやべーことになってる、今までは普通に倒せたマスダイバーが普通のやり方じゃ倒せなくなってるからストレスがマツハよ

362. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>361

そつちもか、俺はシルバリーだけど、マスダイバー狩りの効率落ちたというか一部の隊長格しか倒せなくなったもんだから過激な自治活動まで始めるやつらが出てきてもう末期よ

363. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

もう終わりだあ！

364. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

救いはないんですか!?

365. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

救いはないのですか??

366. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そこになければないですね

367. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

無限再生まで手に入れたブレイクデカールがこれからは広まっていくと考えるともうGBNはマジでダメみたいですね……移住先考えないといけないかなあ……

368. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

一応コックピットをピンポイントでぶち抜くか再生しなくなるまで袋叩きにするか細切れにすれば再生ブレイクデカール持ちでもなるとかなるぞ

369. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ブレイクデカールで強化されたガンプラを相手にそんな曲芸をしろと申すか

370. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そんなことできたとしても一部の人外だけやろ、こんなんつらたにえんのむりちやづけよ

371. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

各地でバグが発生してるって聞くし、今回ばかりはもうダメなんじゃねーかな……おう運営仕事しろや（マジギレ）

372. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

G | Tube に動画まで残ってるのになんで運営はBANの一つもしないんだ?

373. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

この前「シルク・ドゥ・イデオ」のクソピエロがGM直々にBANされてたのは見たけど

374. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの煽り厨か……いい加減BANされねーかなと思ってたからいい気味だわ

375. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

話聞いてた限りだと運営からの警告も散々無視して超えちゃいけないライン超えたからBANされたみたいだけどな、クソピエロ

376. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

でもよお、クソピエロがムカつくのはあいつにボロカスに言われたから俺もわかるけど、いつてみりやあいつのやってたことってただのファンメみたいなもんだろ？ 普通に考えてブレイクデカールの方が遥かにヤバいと思うんだけど

377. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あーそれめっちゃわるー、いやなんでマスダイバーをBANせんねん運営は

378. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それがどうも証拠がないって話だぞ

379. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

証拠がないって……G-Tubeにご丁寧にアーカイブまで残ってるし、ベアツガイフェスの時にブレイクデカール使ってた女の方は運営にゲロったって噂じゃねーの？

380. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

正確にはログデータにブレイクデカールを使った履歴とかデータを改竄した痕跡が残らない……って噂だな、噂だからなんとも言えんけど

381. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ログデータの改竄が真実だとしたらそれもうメインプログラムまでクラックされてんじゃね？

382. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

オイオイオイ

383. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

死ぬわGBN

384. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

コントやっつてる場合じゃねーよ！ なんでもいいし誰でもいいから助けてくれーっ！

385. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
チャンプなら……それでもチャンプならきつとなんとかしてくれ
る……

386. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
いくらチャンプでもメインプログラムを改竄できるような相手を
なんとかできるとは思えんが……

387. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
クラッキングなんてコスイことやるぐらいならガンプラバトルで
勝負しろよな、どうせガンプラバトルのガの字も知らねーような暇人
がやっつてんだらうけどよ

388. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
そのガンプラバトルでブレイクデカール使っても負けた腹いせに
こんなことやっつてんじゃねーの

389. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
有名フォースとかランカーもブレイクデカールに手を出したとか
聞くし一回使うと抜け出せなくなるんやろなあ……それでどんどん
GBNにバグが広がっていくんだから世話ねーわな

390. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
勝てないからってブレイクデカールに手を出したところで別に自
分の実力は上がらんのに、それをわかるんだよマスダイバー

391. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
わかってても手出ししちまうんやろなあ……

392. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
楽しんで勝ちたいってだけのやつらが使ってんなら同情の余地なし
だけど、正直連敗に連敗が重なってメンバーがギスリまくってた
フォースが勝つために手を出した……とかならまあ正直わからんで
もない……

393. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
マスダイバーに同情の余地とか一切ないやろ何言っつてんだお前

394. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
同情の余地がない、までは言い切れんな俺は……昔聞いた「シヤノ

「ワール」解散事件とか考えると大切なフォースを守りたいって気持ちにはなる

395. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
でもそのフォースを守るために最悪バグでGBNがなくなっちゃまうかもしれないなら本末転倒だと思うんだけどな

396. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
いつも通りスレ民が大袈裟に言ってるだけで流石にGBN消滅なんて事態にはならんやろ……ならんよな？

397. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします
今回ばかりは正直なんとも言えんね……なるようになるとしたか

398. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

GBN消滅なあ……それこそ流石に嘘だろ……

399. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

考えたくもないことではあるけどな、ここまできたら運営がパッチの開発をしてくれてることを信じるしかねえ！

400. 以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんだかんだで今まではどんな違反にもバグにも迅速に対応してきた運営なんだ、クラッカーの一人や二人ぐらいなんとかしてくれてるって信じてるぜ……！



「クククク……ハハハハハ！ ダイバーという人種のなんと滑稽なことか！ なんと愚かなことか！ この状況に至ってもまだ運営に希望を託している？ チャンピオンがなんとかしてくれる？ それこそ夢物語だ！ そうでしょう、ミスタ・S……いえ、ミスター、シバ・ツカサ？」

レミング・ワトキンスはモニターに表示しているGBN内の掲示板を腹を抱えて笑う。

GBNの崩壊。それがヤツの、レミング・ワトキンスと、ミスタ・Sと呼んでいた男——シバ・ツカサが望む結末だった。

元々、ヤツがシバ・ツカサとかいう日本人と手を組んだ理由は単純なもので、ブレイクデカールと呼ばれるチートツールがGBNの基幹プログラムにクラッキングを仕掛ける性質を持っていたからこそ、「GBNの崩壊」という可能性が実現することに賭けていたのだ。

GBNが崩壊したあと、シバ・ツカサが何をしたいのかについては私も、レミング・ワトキンスも知るところじゃない。

ただし、レミング・ワトキンスが、忌々しいことに私の——ミリア・ワトキンスの戸籍上は父親にあたる男が望んでいることは極めて俗物的なことだ。

いくつもの偽装工作を経て、香港にこのペーパーカンパニー、「オーブルズカンパニー」を設立した事実上の親会社である「白虎電子」が、あらかじめクローリングしていた、崩壊する前のGBNのデータを基に海外資本として第二のGBNを立ち上げる。

そうすれば多額の金が自分の懐に入ってくる。どこまでも俗物的な、嘲笑したくなるような理由で、あの男はGBNの崩壊に肩を貸して、いや、違う。

シバ・ツカサに乗っかっているだけだ。

権利関係についてシラを切り通せるだけの根回しをしていることばかりは周到だけど、果たしてそれが実現したとして、上手くいくのかどうかは私の知ったことじゃない。

「お前もよくやってくれたよ、ミリア。褒めてやろう。『トライダイバーズ』の『ユウヤ』と『チナツ』を引き込めなかったのは落ち度だが……これだけのブレイクデカールがあれば、GBNのメインプログラム陥落など容易いこと！　そうでしょう、ミスター・シバ？」

通話を繋いでいるシバ・ツカサの前でのリップサービスなのかそれとも単純に浮かれているのかは知らないけど、レミング・ワトキンスは、あいつにしては珍しく私への褒め言葉を口にする。

それもどうだっていい。褒められたところで、なんの感慨も湧いてこない。

殴られなかったというだけの話だ。

『あア……そろそろ切るぜ、レミング・ワトキンス。俺も最後の仕上げ

に入らなきやいけねえからな』

「おつと……それは失礼。では来たるべき終末には、お約束通りこの私も微々たるものながらお力添えをいたしましょう。貴方からいただいたこの『ビルケナウ』とやらでね……！」

『そいつは俺からのプレゼントだ。強化型のブレイクデカールも貼り付けてある……くれぐれも壊すんじゃねエぞ、「その時」まではな』
「ええ、ええ、わかりましたとも！ ではこれにて……！」

通話が切れる。

あいつは気付いているのかいないのか、電話口から聞こえてくるシバ・ツカサの声は、明らかに苛立ち紛れなものだった。

ブレイクデカールの拡散とGBN運営への隠蔽工作としてのデコイが必要だったとはいえ、こんな俗物と手を組んだシバ・ツカサも大概物好きなものだ。

「さて……これで私の復讐は叶う。これだけの政治的工作能力を、これだけの力を持っていながら私を拒んだ連中への復讐が！」

GBNの運営に、「GHC」こと「グローリー・ホークス・カンパニー」。どちらも巨大な資本を持つ日本企業だけど、この男は、レミング・ワトキンスはそこに入社することが適わなかった。

ただそれだけが動機の、どうしようもなくみみっちい復讐。そして見せつけるかのように他人のものを横取りして得た大金をせしめるだけという浅い算段。

こんなのが自分の父親であることが笑えてくる。

「わかつているな？ GBNの運営とミスター・シバから連絡があったチャンピオンたちが何をしてくるかはわからんが、お前の仕事は変わらない。抵抗が予想されるダイバーたちを叩きのめせ」

「はい」

淡々と答える。感情を逆撫でしないように、どこまでも平坦に、どこまでも従順なフリをして。

この男の野望も動機も、もうどうでもいい。

私の復讐は、あの「ユウヤ」とかいふダイバーと「トライダイバーズ」とかいふフォースに対する復讐は、買収した有名な悪質ブレイ

ヤーを、「シルク・ドウ・イデオ」とやらをバイパスに、「マフユ」へ
ブレイクデカールを使わせた時点で、フォースの絆とやらを引き裂い
た時点で、もう完了しているも同然なのだから。

あとは滅びゆくGBNで、もしも見かけたなら「ユウヤ」を潰せば
いい。

ガンプラとかいうおもちゃを握り締める手に力が籠る。

愛を噛み、絶望を嚙り上げるのだ。全ては、私が心から笑うために。

Ep. 51 「有志連合」

「突然押しかける形になっちゃってすみません、キョウヤさん」
「構わないよ、私としても君たち『トライダイバーズ』には元から用があつたからね」

あのあと、キョウヤさんに「諸々の話を伺いたいのとこちらとしても緊急で話しておきたいことがある」という趣旨のメッセージを送ったことで俺たちは、使者として派遣された副隊長二人に連れられる形で「AVALON」のフォースネストを訪れていた。

名前は確かエミリアさんとカルナさんだったか。不躰なのにもかかわらず、気前よく申し出に応じてくれたチャンピオンの人柄の良さも窺える。

けど、ロビーやセントラル・エリアの施設で直接じゃなくて使者を通して「AVALON」の本拠地も同然なフォースネストで話がしたいと返された辺り、キョウヤさんたちが抱えている案件も結構重そうだ。

トップオブトップ、このゲームの個人ランキングとフォースランキング共に1位を獲得している生ける伝説と会うだけあって、チナツはもうガチガチに緊張している様子だった。

無理もない。むしろフードこそ脱いでいるけど、いつも通りに冷静な目で事態を俯瞰してるジェニの方が物怖じしないというか恐れ知らずってだけの話だ。

そんな俺たちの緊張を解すように、キョウヤさんは柔らかく微笑むと、副隊長二人を下がらせて、一步前に入るように促してくる。

「さて、緊急の要件ということだったが……ユウヤ君。それは一体？」
指示通りに一步前に踏み出して俺は、すつ、と冷静に問いかけてくるキョウヤさんの目を、その刃にも似た鋭い輝きを真っ直ぐに見据えて口を開く。

「……俺たちのフォースから、マスタイバーが出ました」

下手に取り繕ったり、隠し事をするよりは全てを明らかにした方がいい。

元からその話をするつもりだったというのもあるけど、その方がどんな形であれ、後々禍根を残さずに済む。

マスダイバー、という言葉聞いた途端にキョウヤさんの表情が途端に険しいものへと変わる。

一秒がどこまでも引き延ばされていくような感覚の中で、俺は険しい顔つきのキョウヤさんから注がれる厳しい視線を受け止めて、真っ直ぐにその瞳をただ見つめ返す。

信じてほしい、というの無理があるのかもしれない。でも、俺が出せる限りの誠意は、俺にできる限りの全てはこの目に込めて、尽くしたつもりだ。

だから、ここで門前払いを喰らうなら仕方ない。それまでの話だったというだけだ。

「……なるほど。おおよそ君たちの事情は把握した。身内から出たマスダイバー……それは恐らく、マフユ君だね？」

「はい、でもあいつは……マフユはズルをしたくてブレイクデカールに手を出したんじゃないんです、俺が……俺のせいで、マフユは……」
「ふむ……」

キョウヤさんは俺を見定めるようにそう呟くと、どうしたものかとはばかりに小さく首を傾げる。

「わかった。少しばかり詳しく事情を話してほしい。君たちを疑いたくはないが、こちらの用件もマスダイバー絡みのことなのでね」

「はい、マフユは……『シャドウロール』に唆されてブレイクデカールに手を出したんです。直接の原因になったのは……『シルク・ドウ・イデオ』とかいうフォースの連中に悪口を言われたのと、何より俺自身の未熟さです」

『シルク・ドウ・イデオ』……常日頃から悪質な言動をしていたフォースだね。先日ゲームマスターが動いたとは聞いていたが……」

あのクソピエロ共がマフユの心を傷つけて、ブレイクデカールに手を出させるきっかけになったのは確かなことかもしれない。

だけど、直接の原因になったのは俺の至らなさだ。

あの時クソピエロ共の挑発に乗っていなければ、いや、違う。もっ

と前だ。フォース戦の申し込みを受け続けたりしなければ、もっと早くマフユのSOSに気付いていれば、きつとこんなことにはならなかった。

いや、事が起こってしまった以上、これもたらればの話でしかない。覆水盆に返らずという以上、俺にできるのは、ただ至らなさをキョウヤさんへ、正直に告げることだけだ。

できるやつにはわからない。マフユの言葉が脳裏にリフレインする。

きつと戦いばかりの日々の中でマフユは、その心をすり減らし続けていたのかもしれない。

それに気付いてやれなかったのは、間違いなく俺の落ち度だ。

「はい、あいつらはアカウントを凍結されました。そのあと……俺たちは『ケモノミチ』ってフォースと戦いました。そこで現れた『シャドウロール』が、フォース戦に割り込んできて、マフユに接触回線を開いたんです」

「なるほど。『シャドウロール』はそれ以外に何もしなかったのかい？」

「はい、これは推測ですけど、多分その時に……マフユは『シャドウロール』からブレイクデカールの情報を受け取ってたんだと思います」

そして、そのあとに「ヴァアモードコンバット」とのフォース戦で、マフユはブレイクデカールを使って、「できるやつにはわからない」という言葉を残して、俺たちの前から姿を消した。

これが、俺たちに説明できる全てだった。

全ての説明を聞いたキョウヤさんは険しい表情を崩さずにふむ、と細い顎に指をやると、考え込むように小さく俯く。

「君たちの事情は把握した。それで、君たちは私に何を望んでここに来た、『トライダイバース』？」

「俺は……俺たちは、マフユを取り戻したいんです。マフユは……きつと望んでブレイクデカールを使つたんじゃないって、そう信じて

ます。こんなことを言える義理じゃないのもわかってます。だけど、キョウヤさんが……チャンピオンが『シャドウロール』について何か知ってるなら、それを聞かせてもらいたいと思って、ここまで来ました」

だから、どうか俺たちに『シャドウロール』のことを教えてください。

チャンピオンの厳しい視線から目を背けずに、真っ直ぐそれを受け止めて、俺は心の底から頭を下げる。

本当ならこんなことをお願いできる身じゃないってことはわかってる。今すぐ出ていけと言われてたっておかしくない。

もちろんキョウヤさんが、チャンピオンがそう言ったのなら、俺たちはそれに従う。それが通すべき筋つてやつだからな。

もしそうならなつたらなつたとしても、手当たり次第に「シャドウロール」について調べて、マフユを探すだけのことだ。

なんとしたって、どれだけかかったって、それが砂粒ほどの可能性だとしたって諦めない。また一緒に笑い合える日のために、また一緒に、GBNを楽しむために。

「結論から言おう。私が……我々が『シャドウロール』について知っている情報は、ないに等しい」

「そうですか……すみません、突然押しかけてしまって」

「待ちたまえ、話はまだ終わっていないよ、ユウヤ君」

頭を下げてチャンピオンの部屋を去ろうとした俺たちを引き止めるように、ふっ、と柔らかく笑う。

「終わってないって……どういうことですか、キョウヤさん？」

「そのままの意味だよ。我々が『シャドウロール』について知っていることはないに等しいかもしれないが、君たちに伝えられることはある、ということだ」

再び、キョウヤさんの視線が鋭さを帯びる。

言い換えるならそれは、あの「シャドウロール」についての情報は無いに等しいが、俺たちに伝えられることは、伝える価値がある情報は持っている、ということだ。

俺とチナツ、そしてジェニは無言で顔を見合わせて、小さく頷く。それがチャンピオン直々の言葉とあれば、もし少しでもマフユを取り戻すための手がかりになるのなら、聞かないという選択肢はない。キョウヤさんも初めからそれをわかっていたかのように、むしろそれを伝えたかったからこそ俺たちをフォースネストに招いたのだとばかりに、試すような視線が向けられる。

多分、ここから先は後戻りできない。

チャンピオンが話したがっている情報がなんであれ、どうであれ、それを聞いた時点で一蓮托生になることは避けられないはずだ。

だとしても、俺は。俺たちは。

ごくり、と固唾を呑み込みながら、俺は力強くキョウヤさんの言葉に頷いてみせた。

「……聞かせてください！」

「いい返事だ。察しているとは思うが、ここから先は他言無用で頼む」「はいー」

望まない形とはいえ、身内からマスダイバーを出してしまった俺たちがそれだけ重大な秘密を預かれる身なのかどうかはわからない。

だけど、キョウヤさんが話をしてくれるということは、俺たちの事情を汲んだ上で、マスダイバーを出してしまったという事実を受け止めた上で話すだけの価値があると判断してくれたということだ。

だったら、その信頼には全力で応えなきゃいけないだろう。改めて感じたチャンピオンの懐の深さと器の大きさに圧倒されつつも、感謝を込めて俺は答える。

「現在、GBNに様々な異常が……バグが発生していることは君たちも知っているだろう？」

「はい、確かブレイクデカールの仕業だとか聞いてます」

「その通りだ。ブレイクデカールは不正なコードを読み取らせて……GBNのメインプログラムに干渉していると、私はそう見ている。まずはこの映像を見てほしい」

キョウヤさんがそう言って指を鳴らすと同時に、コンソールから出現したスクリーンに、一つの動画が映し出される。

それは一見、普通のフォース戦に見えた。

「智将ロンメル率いる『第七機甲師団』のフォース戦……」

「確か、フォースランキング2位だったか？」

「ええ、ユウヤ。相手の動きは硬いわ。この程度ならロンメル大佐の戦術でなんとかなるんじゃないか……？」

チナツが言う通り、始まった当初はロンメルって人が率いている「第七機甲師団」のメンバーが地形を利用した挟撃やトラップを利用した奇襲で一方的に有利を取っていた。

このまま行けば、なんの問題もなくパーフェクトゲームで終わるのであろう戦いだ。

だけど、キョウヤさんがわざわざ見せてきたということは、この戦いには「何か」があるに違いない。

そう睨んで、画面を見つめていたその瞬間だった。

俺と同じように、スクリーンへかじりついていたらチナツが驚愕に目を見開く。

それまでは無感情に俺たちのやり取りを一步引いて見ていたジェニも、その光景には目を疑ったか、あるいは不快感を示すかのように眉をひそめていた。

「ガンプラが、再生したの……!?!」

「この効果……まさか!」

ロンメル隊からの十字砲火を受けて倒れ伏したガンプラが、まるでその損傷など最初からなかったかのように無傷の状態で戦線に復帰する。

その光景には俺とチナツも見覚えがあった。

ダイバーランクを上げるため、ヴァルガに潜っていた時に遭遇した旧キットのシャア専用ザクだ。

あの時のシャアザクは確か肉が寄り集まるかのように再生していたはずだけど、この映像に収められているマスダイバー機の再生速度は、それを遥かに凌駕している。

ロンメル隊はそれでも動じることなく消耗戦の構えに突入し、何度もマスダイバーの機体にダメージを与えていた。

だけど、それも虚しく再生したマスダイバーに押し切られて、とうとう全機が弾切れを起こし、白兵戦に移行、その後は言うまでもない。格闘攻撃ですら深傷を負わせるには至らずに、再生を繰り返すマスダイバーの前に、ロンメル隊は、フォースランキング第2位というGBNの頂点に近い強者たちは、パーフェクトゲームでの敗北を喫するという結末を辿っていた。

誰が見たってこれは異常事態だ。

チナツもジエニも、眉を逆立てて、ガッツポーズをしているマスダイバーに嫌悪を示す。

ヴァルガで遭遇したシャアザクの時よりも強化されたブレイクデカールの力。

そしてキョウウヤさんが語ってくれたことが本当なら、GBNを支えているメインプログラムは今もクラックされ続けているということになる。

それも、より強力になったブレイクデカールによってだ。

「君たちも心当たりがあるようだね。ならば話は早い。ブレイクデカールは日々悪辣な進化を遂げている……もしこのままこの事態を放置しておけば、最悪GBNが崩壊すると私は見ている」

「GBNが、崩壊……」

「そんな！ でも、こんなになるまで運営はどうして……!」

あまりの事態に脳が理解を拒んだのか、俺はただ、おうむ返しに同じ言葉を繰り返すことしかできなかった。

そんな中でも、チナツが果敢にも食ってかかったのに対して、キョウウヤさんは心から残念そうに目を伏せて首を横に振る。

「証拠がないんだ」

「証拠が、ない……?」

「詳しくは話せないが、運営の調査によればブレイクデカールを使用したデータはログに残っていない、というのが見解だ。だからこそ、私とロンメル大佐はあれがメインプログラムに干渉し、データを改竄しているという仮説を立てた」

一時的なステータスの改竄を行うだけのチートプログラム、不正な

処理を強引に割り込ませるだけならその痕跡はログとしてデータに残る。

でも、それが無いってことは、メインプログラムに対して「不正なコードを割り込ませた」という事実を書き換え、なかつたことにしていると見ていいだろう。

そして、ログが残ってない以上、キョウヤさんが言ったことは十中八九本当で、事態は俺たちが思うよりも遥かに深刻だったことだ。

「なにか……なにか俺たちにできることはないんですか!？」

マフユを探すことを諦めたわけじゃないけど、ブレイクデカールがここまで深刻な被害を出してる以上、そしてキョウヤさんがそれを聞かせてくれた以上、はいそうですかと黙っているわけにはいかない。

今この瞬間も、GBNは崩壊に向けて進んでいる。それをなんとか食い止めなきゃ、マフユを探すどころじゃなくなっちゃう。

焦る俺たちに対して、スクリーンを閉じたキョウヤさんは瞳に鋭い輝きを宿しながら静かに頷いてみせた。

「……ある。それが、君たち『トライダイバーズ』に呼びかけた理由でもある」

「本当ですか!?! 俺たちにできることがあるなら、なんでもやります! だから!」

「アタシも、この事態をなんとかできるなら……その手段があるなら、全力で!」

「……ユウヤがそうすると言うなら、私はそれに従う」

俺たちは声を揃えて、チャンピオンの言葉にそう返す。

「ありがとう。君たちが協力してくれるなら心強い……そして、これはマフユ君の居場所にも繋がるかもしれない情報だ」

「マフユの、居場所……?」

「現在我々と『第七機甲師団』はブレイクデカールを配っている元締め
の潜伏先を特定する作戦を遂行している。そしてこれは『GHC』か
らのリークだが……マスダイバーとの遭遇頻度が以前に比べて減つ
たという報告があった。これらの情報を総合すれば、黒幕が潜んでい
るエリアに、マスダイバーが集結している可能性が非常に大きい」

「つまり、そこにマフユが……『シャドウロール』が現れる可能性がある！」

「そういうことになるね。だからこそ、我々は信頼できるフォースやダイバーに協力を募って、有志連合の結成を画策しているんだ」

有志連合。その言葉から察するに、恐らくキョウヤさんたちはマスダイバーの元締めがいる地点を特定して、そこに乗り込むつもりであるのだろう。

そして、推測とはいえその本拠地を守るためにマスダイバーが集まっているのなら、対抗する戦力も必要になってくる。

そこで俺たちにも白羽の矢が立てられた、という筋書きか。

「有志連合……俺……いえ、俺たち、やります！ だけど、俺たち、身内からマスダイバーを出してるのに、どうして……」

筋書きそれ自体は理解できた。

だけど、身内からマスダイバーを出してしまっている以上、俺たちの事情や言い分はともかくとして、内通の嫌疑がかけられることは避けられない。

なのに、キョウヤさんはここまで協力的に、そして最重要機密であろうことを話してくれている。

「簡単なことさ。こちらとしては一人でも多くの戦力が欲しい。君たちにとってはマフユ君を、『シャドウロール』を探すための手掛かりになる。互いに損はないはずだ」

どうして、という無言の問いに答えるかのようにふっ、と笑って、チャンピオンはあつけらかんと答えてくれた。

だけど、それにしたって。

喉から出かかったその言葉も予見していたかのようにキョウヤさんは前に歩み出た俺たちを制して、そつと微笑む。

「何より私は、僕は……君たちの愛を信じたいんだ」
「愛……」

「この世界に対する、GBNに対する愛。そして、ガンプラに対する愛。それは真っ直ぐで曇りないものだ。だから話した。マフユ君もきっと、それは同じだと信じている」

「キョウヤさん……」

「ただいたずらに、私利私欲だけでこの世界を、GBNを破滅に導いているのなら同情の余地はない。だが、僕は君たちを信じると決めた。マフユ君も心を病んで、止むに止まれずブレイクデカールを使用してしまったのだろう。だが、きつと彼女は今もこの世界に対する愛は失っていない……そう信じて、君たちを是非、有志連合に迎え入れたいんだ」

ありがてえ。それ以外の言葉が見当たらない。

チャンピオンともあろう男が俺たちをここまで信じてくれていることに、マフユを信じてくれていることに、ただただ俺は感服する。としかできなかつた。

キョウヤさんが差し伸べてくれた手を握り返して、強く頷く。

「お願いします、キョウヤさん……いえ、チャンピオン。俺たちを……」

『トライダイバーズ』を、有志連合に協力させてください」

「こちらこそ願ってもないことだ。よろしく頼むよ、『トライダイバーズ』の皆」

固い握手を交わして俺は、チャンピオンの作戦に協力することを、有志連合へ加盟することを志願する。

こんな俺たちをあたたく迎え入れてくれたキョウヤさんのためにも、そして、今もきつと苦しんでいるマフユともう一度話をするためにも、この世界を壊そうとするマスダイバーの元締めを倒すためにも。

戦うんだ。そして、取り戻すんだ。平和なGBNを。

そして、マフユとの日々を。

感謝と決意を込めて俺は、もう一度キョウヤさんの手を握り返した。

そこに言葉は、いらなかつた。

Ep. 52 「集え英傑、御旗の元に」

再び俺たち「トライダイバーズ」にお呼びがかかったのは、キョウヤさんに有志連合への参加を許可してもらった翌日のことだった。

なんでも、本来なら今日、有志連合の結成を大々的に発表するつもりだったらしい。

それについて先に聞いて大丈夫だったのかと問い合わせたら、関係者筋の中ではキョウヤさん自らオファーに行ったダイバーもいるから問題ない、とのことだった。

相変わらずフットワークが軽いというかなんというか、GBNを心の底から愛しているからこそ、そういうことができるんだろうな。

しかし、チャンピオン自ら出向いて参加を要請しに行かなきゃいけないほどのダイバーか。こんなご時世じゃなけりや、是非とも胸を借りたいところだったな。

なんてことをぼんやりと頭の片隅に浮かべながら、俺たちはエミリアさんとカルナさんの案内に従って、昨日も訪れた「AVALON」のフォースネスト前に立っていた。

「昨日も見ただけど本当大きいわね……これ確か、上位のフォースにしか支給されないフォースネストだったわよね？」

「そうなのか？ 俺は詳しくないからわからねーけど」

「右に同じ」

「アンタらねえ……はあ、これじゃアタシがお上りさんみたいじゃない」

正直チャンピオンと話をするってだけでも大分緊張したってのに、とチナツは零したけど、わからないものはわからないんだから仕方ない。

まあでも、俺たちの使ってる初期支給品と比べるのも失礼なぐらいデカイフォースネストなんだ、上位フォースにしか支給されないって話もさもありなん、ってところだな。

苦笑する俺と、どこか夢心地なチナツはともかく、その手の話にジエニは根本的に興味がないらしく、そのまま口を閉ざしてつかつか

と早足で歩いていった。

「アンタ、なんていうかユウヤ絡みのこと以外は本当淡泊よね」

「フォースネストの規模は重要じゃない」

「ああ、そう……」

「大事なのはどれだけの實力を持った面子がどれだけ集まっているかの方」

「それは……そうね、あの強化型ブレイクデカール持ちのマスダイバーとやり合うんだから」

ジェニの淡々とした返しに呆れ半分怒り半分といった様子だったチナツも、本題を切り出されてからは真剣な目つきで考え込む。

再生能力を持つブレイクデカールは、ロンメル隊を、フォースランキング第2位のトップランカーを壊滅させるほどに強力なものだ。

チナツが言う通り、俺たちはこれから、そんな相手とやり合わなきゃならない。そう考えると大分憂鬱になってくるけど、落ち込んじゃいけない。

「相手がなんだろうとやるしかねえよ。それに、キョウスケさんが言ってただろ？ 再生する前に叩くか、再生できないほどのダメージを与えちまえば、理屈の上じゃ倒せるはずだ」

「それは……そうね。もしもロンメル隊に敗因があったら、ブレイクデカールを上から潰せる、大火力の武器を持っていなかったことだもの」

「それに、全てのマスダイバーが強化型ブレイクデカールを持っているとも限らない。勝算があるとクジヨウ・キョウヤが踏んでいるなら、そしてユウヤがそれに賭けるなら、私も相乗りさせてもらう」

「へへっ、ありがとな、チナツ！ ジェニー！」

俺たちの目的はあくまでもマフユの奪還もしくは「シャドウロー」と接触しての情報収集だけど、有志連合に参加する以上、優先すべきは作戦の方だ。

運良く戦場で出会えることを祈るしかないのは歯痒いけど、GBNが崩壊してしまつたら元も子もない。

とりあえずはどれだけの顔触れが出揃っているのかとばかりに大

広間に繋がっている扉を開けると、そこはもうとんでもないほどにびりびりとした空気が伝わってくる、修羅の巷だった。

「君は確か……『エターナル・ダークネス』のクオンだったか」

「そういう貴方は私を……ごほんっ、私のヴァイスアルケーを消し飛ばしてくれたFOEさんだな？」

「……範囲攻撃に巻き込んでしまったのなら申し訳ないと言っておう」

「気にすることでもない。次は我が勝つ。高みにて待っている」

「ああ、待っているとも——『ジャバウオックの怪物』と全てをかけて戦える日を」

この前デイビニダドの翼をプラ板から削り出していた、半人半竜の女性といった具合のダイバールックをした、クオンというらしい人と、キョウスケさんが談笑していたかと思えば、この前戦った「鉄仮面ズ」の面々が他のフォースと思しき制服の集団と思いに語らっている姿もある。

「嘘、あの人って『天地神明』の、個人ランキング10位のテンコ様……!? 滅多に人前に姿を見せないのに……ごめんユウヤ、アタシ、サイン貰ってくる！」

「お、おう……」

俺はまだGBNの事情につきちゃ半端者だ。

だから、誰がどれぐらい凄いかってことについて、具体的な数字だとかデータを持っているわけじゃない。

それでも、チナツが興奮するのがわかるのは、ここに集まっているダイバーたちがまとっている闘気とでもいうべきものが、神経を逆立てるように伝わってくるからだ。

「ふむ、妾のさいんが欲しいとな」

「はい！ 是非！」

「構わぬよ、一枚で足りるかの？」

「はいっ！ ありがとうございます、テンコ様！」

「良い良い、若き命が、愛が燃え滾るこの感覚は妾にとっても心地よいものじゃ」

テンコ様、と呼ばれていた狐耳の女の人は、チナツの申し出に快く応じて、サインをさらりと達筆で書き上げると、色紙を笑顔であいつに手渡した。

なんというか、GBNのトップランカーって、フットワークが妙に軽いよな。まあ、気前つてのはいいに越したことはないからそれでいいんだけど。

すっかり浮かれた様子で戻ってきたチナツと合流して、俺たちはビュツフェ形式で様々な料理が並べられている会食の場を歩いて回る。

「あっちにいるのは……眼帯二つつけたザビーネ・シャル……？」

「ダブル眼帯……ああ、ペリシアで会った人か！ あの人も呼ばれてたんだな」

「……奇抜なセンス」

確かクロスボーンガンダムX2のジオラマを前に妙にテンションが高い言動をしたのもあって、記憶に残っていたみたいだ。

その隣にはペリシアの時と変わらず、包帯で顔の半分を覆った女性が苦笑を浮かべながら立っている。あの人の相棒かなんかなんだらうか。

それはともかく、チナツが興奮で鼻血を噴き出しかねないぐらい豪華な面々が揃っているこの会食場は、俺とジェニにとつても武者震いが止まらない魔窟だ。

「あっちは……『ルミエル・ナイツ』のシャーロットさんね。個人ランキング43位……SD使いの中でも最高峰の一人って言われてるわ」
金髪碧眼に、水色のドレスを纏い、長い王冠を頭上に載っている背が高いダイバーを指してチナツが言う。

SDガンダム。確か手足が短くて頭がデカイ体型のガンダムをそう言うんだっただか。

手足が短いと近接戦闘とかじゃ不利を背負いそうなものだけど、それでも「騎士」の名を冠して二桁ランカーにまで上り詰めてるんだから、そのシャーロットって人は相当な実力者なんだろう。

「へえ……そいつは一度戦ってみてーもんだな」

「やめときなさい、二桁ランカーは魔物って呼ばれてるぐらいなんだから。アンタなんてどうせ五秒で三枚おろしよ」

「やってみなきやわかんねえだろうがよ」

強がってはみたものの、FOEさんことキョウスケさんとやり合った時の手応えから察するに、そうなる可能性は否定できないのが悲しいところだ。

「だけど、いつかは追いついてみせる。」

どんなに高い壁だって、どんなに長い道だって、いつかは乗り越えて、肩を並べていけるって、俺はそう信じているからな。

「ユウヤの言う通り。戦う前から諦めていたら、その時点で負けている」

「ま、そりゃそうよね。今回ばかりはアンタの言う通りよ、ジエニ」
「当然のことを言っただけ」

淡白な返しにチナツのこめかみにぴくりと青筋が浮かんだけど、これに関してはジエニの方が正しいと俺は思う。

「あちらにいるのは個人ランキング15位、『Morgan's Castle』のルーフェア殿……これだけの面子が集まるとは、リヒト……」

「ああ、ただ事じゃないってことだな、アキノ」

チナツとジエニがばちばちと火花を散らして睨み合っている間に俺は、何やら銀色の制服に黒のインナーとネクタイといった具合の格好をした集団とすれ違う。

あのアキノとリヒトって人たちが言ったことから察するに、窓際でたそがれているあの銀髪をポニーテールに括った女の人個人ランキング15位か。随分とまあ豪華な面子が集まったもんだな。

これもひとえにチャンピオンの、キョウヤさんの人徳ってやつなのだろう。

感心してぼんやりとしていたのか、注意散漫な状態で歩いていたのが災いして、誰かにぶつかる感触が伝わってくる。

「まずいな、俺も浮かれてる場合じゃない。謝らないと。」

「すいません、ぶつかっちゃまって……って、お？」

「ああいや、こつちこそぼんやりしてたから……つて、あ？」

そこにいたのは、なんの因果かメガ粒子杯で拳をぶつけ合った相手である流しのファイター、コドウだった。

「コドウ！ お前も呼ばれてたんだな！」

「ああ、その口振り……いや、ここにいてるってことはお前もそうか、ユウヤ」

この分だとカールのやつも呼ばれてるのかもしれないけど、なにぶん人が多くて誰が誰やらつてところで確かめようがない。

そんな中で知り合いに、コドウに会えたのは運がよかったのだろう。

俺たちは軽く拳をぶつけ合つて、再会を祝う。

「ええ、と……コドウさん、その人は？」

「ん、ああ……シンリとシーエオは初めて会ったな。こいつはユウヤ。メガ粒子杯で俺が戦った相手だ」

「ユウヤ……確か、メガ粒子杯で優勝した人、ですよね？」

シーエオと呼ばれていた、バニー姿のダイバールックに身を包んだ女の子がそう問いかけてくる。

なんだかんだで結構知れ渡ってるもんなんだな。

とはいえ、隠す理由もないから俺はその疑問を肯定する。

「ああ。そのユウヤで間違いないです、えつと……シーエオさん」

「いえいえとんでもない！ むしろ私なんか恐れ多いというかその、気を遣わなくても大丈夫ですから……！」

「そつか、じゃあ俺もタメで構わないぜ、シーエオ！」

「うひゃあ……陽の民だ……あつはいよろしくです、ユウヤさん……」
陽の民とやらがなんなのかは知らないけど、とりあえずは自己紹介を終える。

そして、ジエニと何か因縁があつたのか、それとも格闘家として引き合うものを感じていたのか火花を散らしていたコドウに向き直つて、俺は問いを投げかけた。

「この二人はコドウの友達なのか？」

「友達……まあ、そうなるな。色々あつただけど、正直説明が難しく

てな」

「ああ、こつちもその辺まで踏み込むつもりはねーよ。それじゃあな」
「待て、ユウヤ」

会場を回るのに戻ろうと踵を返した俺を引き止めて、コドウは目の前に全力で拳を突き出してきた。

幸い顔面に直撃することはなかった、というか寸止めしてくれたから助かったものの、もしコドウにその気があつたら俺は今頃会食場のテーブルを薙ぎ倒して、壁に叩きつけられていただろう。

そうしてその拳から、俺は臍気ながらもコドウが言いたかったことを理解する。それは。

「ユウヤ……お前、迷ってるな？」

「コドウ……」

「なんで迷ってるかは訊かねえ。でもな、お前は俺に勝ったんだ。そんなやつが辛気臭く背中丸めて歩かれてちやかなわねえ」

「……俺は」

迷っている。そうだ。あれこれと頭の中で理屈を並べ立ててこそいるものの、俺が結局心配しているのは、マフユについてのことだ。

もしもマフユに会えたとして、ちゃんと話を聞いてくれるのか。聞いてくれたとして、俺たちのところに戻ってきてくれるのか。

そして、ジェニから言われた「俺だけの言葉」という課題。その探し物はまだ、見つかриそうにない。

だからこそ、迷って——気が抜けていたのだろう。

コドウの鬪志を滾らせた瞳に映る俺のそれは、情けないほどに虚ろで、ぼんやりしていた。

「迷うんじゃねえよ、ユウヤ。お前は……俺の目を覚まさせてくれた拳を持つてんだ。お前が思ったことを、やりたいことをその拳で貫き通せ。生憎お前の抱えてる事情はわかんねえけどな、それだけはわかる」

だから、お前の拳を貫き通せ。

コドウは苦笑すると、固めた拳で俺の胸を小突いてみせる。

言われてみればその通りだ。今更なにを怖気付いているんだ、俺

は。

マフユに謝りたい。もう一度皆で過ごした日々を取り戻したい。願いを確かめてみれば、それはひどくシンプルなものに感じられた。そうだ。あれこれと言葉を尽くすより、考えるより、いつだって俺はこの拳で道を切り開いてきたはずだ。

だったら、今回も同じことだ。マフユとは言葉だけじゃなく拳で語り合う。それがきつと、ジエニが言っていた「俺だけの言葉」にも繋がっているのかもしれない。

「へへっ……ありがとうな、コドウ」

「ダチが困ってんだ、このぐらいお安い御用ってもんだ」

「ああ、もう迷わねえ……もう怖気付かねえ。俺はこの拳で全てを取り戻す！」

ぐっ、と拳を固め、俺はそれを天高く掲げてみせる。

俺だけの言葉。俺の拳に込める、マフユへの想い、それは。

今までマフユと過ごしたいくつもの日々が頭をよぎった、その時だった。

「な、なにになに？ なんなの……!?!」

「これは……エンジン音か!?!」

「皆、窓の外を見ろ！」

轟音が響き渡り、びりびりと窓ガラスと大気を揺らす。

誰がそう言ったのかも定かじやないまま、俺たちは最初に言い出したダイバーの指示に従う形で、開け放たれた会食場の窓の外へと視線を注ぐ。

そこにあつたのは、巨大な艦影としか言いようのないものだった。

「あれ……微妙に改装が入ってるけど、ラー・カイラム級……!?! 随伴艦の三隻は……随分改装されてるけどアレキサンドリア級!?! もしかしてあれ、1/144スケールで全部フルスクラッチしたの!?!」

チナツが驚愕に目を見開きながらそう叫ぶ。

フルスクラッチとやらがどれほどの難易度なのかは、クオンさんがデイビニダドの翼をプラ板から削り出していた時点で察せられたし、ストライクスファイダーを作った時に身に染みてわかっていた。

あれだけのデカブツを作り出すとなれば、その苦労は尋常じゃないだろう。

「ははは！ その通りだよチナツ君！」

「その声は……アトミラールさん！」

「久しぶりだね、ユウヤ君。我々『GHC』も此度の集まりに呼ばれたものでね、つい童心に火がついてしまったといったところだ！」

アトミラールさんが、随分興奮した様子でそう語る。

多分だけど、あの戦艦に乗り合わせてる人たちが、俺たち「トライダイバーズ」の初陣を飾ることになった「GHC第八十八特務分隊」の元締めであるフォース、「GHC」の本隊といったところなのだろう。確か二万の戦力を有してると話だから、その中でも精鋭を集めてきたのかもしれない。問題はその精鋭の規模があまりにデカすぎることなんだけだな。

あまりの出来事に会食場がざわざわと喧騒に包まれる中、無事フォースネスト近くに着陸した戦艦からぞろぞろと精鋭を引き連れたアトミラールさんが、扉を開く。

その数は、ざつと五十近くといったところか。若干少なく感じるのは多分感覚がバグってるからだろう。

それに、五十は五十でも二万から絞り込まれた五十人だ。マスダイバーを確実に潰してやるという強い意志を感じる。

「さて……諸君、お騒がせして申し訳ない。先ほども申し上げた通り、我々『GHC』も此度の集まりに呼ばれた故に馳せ参じたといったところさ」

「戦艦で乗りつけるとは……相変わらず貴方らしいですね、アトミラール」

「そう言ってくれるな、ルーフェア。さて……これで役者は揃ったと言ったところかな？」

ルーフェアさんの言葉に苦笑と共にそう返すと、アトミラールさんは扉の前で呆気にとられていたカルナさんにそう問いかける。

「あー……すいません、まだ来てないフォースがいるっす。今案内してるはずなんで、もうしばらく待ってほしいっす」

「そうか……大トリを務めたつもりだった故に少々残念だが、致し方あるまい。コンゴウ、フラン、アリカ。と、いうわけだ。時間が少し余ったから、好きに過ごしてくれたまえ」

「Yes! それじゃ提督ウ、皆にご挨拶といきマース!」

「はは、そうだねコンゴウ。おや、そこにいるのはランディ君か。久しいね」

「相変わらずやる事が滅茶苦茶だよ、あんたらは……だがま、『GHC』が呼ばれたってんなら心強い」

ランディと呼ばれた、タンクトップに「7」の数字が刻まれた、バスケツトボールの選手みたいなダイバールツクをしている人が肩を竦めて、苦笑しながらアトミラーさんの言葉に答える。

その一方で俺たちはというと、「GHC」が引つ提げてきた諸々のスケール、そのデカさにただ圧倒されるばかりだった。

チナツは間近で見るHGスケールの戦艦に見入ってるし、ジエニも珍しく目を丸くしている。

「これだけの面子が呼ばれたのか……つてか、俺たち、分隊とはいえとんでもないフォースと戦ってたんだな……」

「ユウヤお前、『GHC』とも戦ってたのか……」

「まあな……でも俺たちが戦ったのは本当に分隊も分隊だ。もしも本隊、それも精鋭部隊と真つ正面からやり合うなんてことがあれば……燃えてくるな!」

流石に二万の戦力を単機でなんとかできるとは思ってたねーけど、アトミラーさんたちが選抜した猛者たちと拳を交えるってんなら、こつちとしてもやぶさかじゃない。

「へっ……お前らしくなってきたじゃねえか」

「ああー コドウのおかげさ、ありがとうな!」

「どういたしましたして、つと……どうやら最後のゲストのお出ましか?」
がちやり、と音を立てて会食場の扉が開かれると、エミリアさんに案内されて現れたのは、ジャージに胸当てをしたようなダイバールツクをした、俺とそんなに年頃も変わらなそうな男子たちだった。

でかい帽子を被った金髪の男子に、猫耳と猫尻尾にピンク髪の女

子。その傍らには背が高い、エルフのようなダイバールツクの男と、忍者みたいな格好をした女の子と、小柄な銀髪の女の子が控えている。

「あれが真打ちってやつか？」

「さあな。どうであれ、ここにいてことはチャンピオンから呼ばれたってことだ。相応の資格はあるってことだろうよ」

「へっ……違いねえ」

マギーさんとタイガーウルフさん、そして名前はわからないけど狐耳に狐の尻尾という獣人風のダイバールツクをした細身の男がその男子たちを取り囲む。

なんか、あのジャージに胸当て装備した男子、どっかで見たような顔だけど、流石に気のせいだよな。

「すごいよりツくん！ 個人ランキング7位のランデイさんに、あつち是有名フォースの『鉄仮面ズ』！ ああつ、あつちは『GHC』のアトミラールさんに、一桁ランカーのブルムフランメさん！ それだけじゃない！ ロンメル隊に、極天征伐戦の覇者にしてヴァルガの災厄、個人ランキング39位のキョウスケさんと、64位のユユさん兄妹も！」

興奮した様子で名だたる猛者たちが轡を並べている会場を見渡している帽子の男子を見遣りながら、俺はそんなことを考える。

……リツくん、って呼び名もなんかどっかで聞いたことあるんだよね。

訝るように首を傾げる俺を尻目に、宴は滞りなく進行していく。そこに集った英傑たちが英気を養うかのように、これから始まる戦いに向けて、静かに火を焚べるかのように。

Ep. 53 「決戦前夜」

「クジヨウから皆様への言伝にはまだ少しばかり時間がございますので、しばしご歓談ください、では」

眼鏡をかけた女性、エミリアさんがそう言って頭を下げる。

多分だけど、有志連合結成に向けてフォース間での交流を持つておくとか、そういう狙いがあるのかもしれない。

たとえここに集まっているのが個人ランキングに名前を連ねるような猛者たちだとしても、最低限の連携や意思疎通が図れなければ烏合の衆だ。

だからこそ、ここで最低でもメンバー間の顔を覚えておくことで少しは事が優位に進む……のかもしれない。多分だけど。

「アンタにしては珍しく考え込んでるわね」

「ああ、まあな……」

あくまでもその可能性があるってだけで、有志連合そのものについて心配があるわけじゃない。

極端な話、猛者たちはGBNでかなりの場数を踏んできたわけで、スタンドプレーを連携に繋げることだって不可能じゃあないはずだ。

そうなると、別にあれこれ悩んだりする必要なんてものはどこにもないんだけど、それとは別に、この作戦にマフユが現れるのか、あるいは「シャドウロール」が現れるのかという懸念が俺の中にあるのは確かだった。

有志連合の結成がまだ全員に知れ渡ってはいない今、その話を大っぴらにするわけにもいかないのが悩みどころではあるな。

それに、何より。

壁に寄りかかっているジェニに視線を向ければ、それに気付いたのか目と目が合う。

あいつからの宿題、「俺だけの言葉」。

拳で語り合おうって選択をしたのはいいとして、具体的に俺からマフユに言える、フォースとしてでもなく、仲間としてでもなく、俺だけの言葉となると中々これが難しい。

「……マフユのこと、心配？」

「ああ、そりやあな」

「そう……でも元気出さないよ、アンタがそんな顔してたら、帰ってきづらいでしょ」

遠慮がちに笑ったチナツに言われて初めて気付く。

そんなに強張った顔をしていたんだろうか。コドウと話してたときはそんなつもり、なかったんだけどな。

ぴしやりと頬を叩いて気合を入れ直す。チナツの言う通り、俺が難しい顔をしてちや始まらない。

「むー、このワタシをよびだしておいてすがたをみせないとは、どういうつもりだクジヨウキョウヤー！」

それとタイミングを同じくして、会食場を去っていったエミリアさんとカルナさんに噛みつくかのように、銀髪に赤い瞳の小さい子が、憤慨も露わにそう叫ぶ。

当然といふかなんというか、カルナさんが苦笑を浮かべた以外は特に反応もなく、二人は扉の外に去っていく。なんというか、ガキンチヨそのものだな。

でも、おかげで気が抜けた。

懸念だの心配だのはそこら辺に置いていけばいい。俺だけの言葉ってやつも、戦ってるうちに見つかるとはかもしれないからな。

「はろーやーやー、少年少女」

「トワさんー！」

「君たちもチャンプに呼ばれてここに来たのかい？」

なんてことを薄らばんやりと考えてるうちに、声をかけてきたのはトワさんだった。

ソロ専ってわけじゃなくてもフレンドが少ないって嘆いてたはずなのに、失礼だけど、ここにすることが少し不思議になる。

俺たちが知らないだけで、この人もチャンピオンとフレンドだったりするんだろうか。

そんな具合に俺とチナツが首を傾げたのに答えるかのように胸を反らしたトワさんが、言葉を続ける。

「なに、トワさんがここに居るのは君たち経由でチャンピオンに情報が伝わってたからさ。それに……これでもトワさん、SSランクダイバーだったりするからね」

「SSランク……？ うわ、マジだ！」

「そういえば、トワさんのプロフィール、確認したことなかったわね……」

えっへん、とドヤ顔を披露するトワさんのプロフィールをフレンド欄から覗き見てみれば、そこには確かにSSランクという文字が燦然と輝いていた。

ペリシアで会ったときは確認してなかったというか、するの忘れてたから随分驚きだ。

まあでも、あのスノーホワイトプレリユードを作れるぐらいのビルダーなんだから、それぐらいの実力あって当然なのかもしれない。

「おいおい、揃いも揃ってトワさんのプロフィールを読んでくれないとは……ちよつと傷付くよ？」

「いや、すみません……なんていうか、色々あったのと、単純に忘れてたんで……」

「アタシも右に同じ……ジエニは確か、トワさんとの面識ないわよね？」

「ない」

そんなわけで今のところ俺たち全員、あの人のプロフィールを読んではなかったりそもそもフレンドどころか知り合いですらなかったりしたので。

いや、本当に申し訳ない。

頭を下げる俺たちに、トワさんは言葉とは裏腹に大して気にした様子もなく、そんなわけさ、と一言呟いて肩を竦める。

「いやいや、気にすることはないさ少年少女。知らないことを責めたところでなんにもならないからね、ところで」

「どころで？」

「マフユ君の姿が見当たらないようだが……なにかあったのかな？」

ああ、言いたくないなら別に構わないけどね」

やっぱり、というか当然俺たちの異変には気付いていたようで、トワさんは少しばかり目つきを険しくして、俺たちにそう問いかけてきた。

言いづらいことではあるけど、信じられる人に隠し事をするのは筋が通らない。

だからこそ、俺はここまでにあつたあれこれをトワさんに洗いざらい伝えることにした。

「……なるほど。それで君たちはここにいてというわけか」

「トワさんがチャンピオンから……キョウヤさんからどこまで聞いているかはわかりませんが、主旨からは外れてるってのは確かです」

有志連合の目的はマスダイバーの撲滅、というよりブレイクデカールを広めている黒幕の確保というところに尽きる。

マスダイバーの反撃があるかもしれない、というのは十中八九そうだとしたもまだ未確定事項だ。

それに、確定事項だとしても大規模な反攻が予想される中でマフユか、もしくは「シャドウロール」と遭遇できるかどうかははつきり言うて運に等しい。

「だとしても……俺たちは必ずマフユを取り戻します、そのつもりでここにいます」

「なるほどね……だが、可能性は著しく低いものであることはわかっているんだろう?」

「それでも、です」

いちかばちかの賭けつてやつだし、俺たちが企てているマフユもしくは「シャドウロール」の確保という算段をキョウヤさんたちが許可してくれるかどうか微妙なところだ。

それでも、やるしかない。それが俺たちの有志連合に参加する理由なのだから。

トワさんの試すような視線を真っ向から受け止めて、俺は決意を込めた瞳でその碧眼を覗き込む。

「ふっ……なるほどね。それほどの決意を見せてくれたのなら、トワさんも一肌脱ごうじゃないか、少年少女」

「トワさん……」

「それに……マフユ君が欠けたというのはトワさんにとっても望ましいことじゃないからね。君たちの手伝いをするのもやぶさかじゃない」

トワさんは眼鏡のブリッジを持ち上げると、さっきの試すような視線が一転、いつも通り飄々とした、どこか捉え所のないものに戻る。

ありがたい限りだ。猫の手でも借りたといって状況だっただけに、Sランクのトワさんが力を貸してくれるってんなら鬼に金棒つてやつだろう。

俺はトワさんにありがとうございます、と告げて頭を下げると、そろそろ待ち兼ねたぞとばかりにチャンピオンの到来を待ち望んでいる会場を一望した。

そして、その期待に応えるかのように、会食場に繋がる扉が開き、エミリアさんとカルナさんを従えたチャンピオンが、キョウヤさんが堂々とした態度で入場してくる。

「待たせてすまない、皆。これより君たちを呼び出した真意について語ろうと思う。ブリーフィングルームまでついてきてほしい」

「そこで我々が事のあらましについて説明しよう」

そして、群衆から抜け出てきた白いオコジヨ、ロンメルさんがキョウヤさんの隣でそう告げた。

いよいよ、始まるのか。

GBNの崩壊を防ぐための、そしてマフユを取り戻すための戦いが。

俺はこれから先に待ち構えている戦いを想像し、思わず拳をきつく固めていた。



「用件も告げずに呼び出して済まない。そして集まってくれてありがとう。ここにいるダイバーは私が心から信頼を寄せているダイバー達だ。故に今から話すことは他言無用でお願いしたい」

議会のようなブリーフィングルームの壇上に上がったキョウヤさんは、一礼すると、やはりというべきか、この有志連合結成の話がトツプシューレットであることを告げる。

身内からマスダイバーを出してしまった俺たちにもその事情を語ってくれたのは、信じてくれていたからだと思うと感謝と同時に、どこか後ろめたい気持ちが湧き起こってくるけど、こんなところで立ち止まってはられない。

「皆も知っての通りGBNで不正ツールを使うマスダイバーはその数を増やしつつある。しかも彼らの手口は巧妙で運営側も手をこまねいているのが実情だ。よって私は、ブレイクデカールの氾濫を阻止すべく、有志連合の結成をここに提案する！」

『うおおおおおっ！』

チャンピオン直々の提案とあつてか、呼び出されたダイバーたちは一様に歓声を上げている様子だった。

俺たちも事前に知らされてたとはいえ、こうして公に発表されるとなんというか、感慨とかそういうものが湧いてくるから不思議だ。

静かなながらも目を伏せ、腕を組んだジエニも小さく頷いていて、改めてキョウヤさんの人徳というものを実感させられる。

「現在私のフォース『AVALON』は、ロンメル隊と共にある秘密作戦を実行中だ」

「ここから先は私が説明しよう。我々有志連合の目的は、ブレイクデカールをダイバーたちに配布している黒幕を突き止めることにある」キョウヤさんに代わって説明役を担ったロンメルさんが、コンソールに映像を投影し、作戦の概要を説明するために口火を切った。

かいつまんでいうなら、作戦の概要はこうだ。

ロンメル隊こと「第七機甲師団」の諜報員がブレイクデカールの胴元と接触したところを特定、黒幕と接触次第俺たちが出撃して現場を包囲する、という単純といえば単純なもの。

ただ、そう簡単にいくものじゃないってことは、ロンメルさんも織り込み済みのようだった。

『GHC』から提供された情報を元に我々は諜報員を送り込むサー

バーをある程度絞り込んだ……だが同時に、該当するサーバーにマスダイバーも集結しつつあるという情報も提供された通りだ。つまり、本作戦にはマスダイバーによる大規模な反攻が予想される」

ロンメルさんの言葉にブリーフィンググループがざわめき立つ。

だけど、作戦を告げられた時にそのリスクを覚悟していなかったダイバーはいないようで、漏れ聞こえてくる声には賛同や、むしろ待っていたとばかりに上がる鬨の声が多く混ざっていた。

「要するに、マスダイバーとやり合えばいいんだろ？」

「あいつらに仲間が酷い目に遭わされたんだ、やってやるさ！」

「こんだけの猛者が揃ってんだ、楽勝だって！」

どこか楽観的に、集まっていたダイバーの一部が強気な声を上げる。

だけど、それとは反対にどこか沈鬱な、覚悟こそ決めてはいるものの、この大規模作戦に勝ち目が本当にあるのかどうかを疑うようなフォースがいるのも確かだった。

会食場ですれ違った確か「アキノ」と「リヒト」という銀色の制服に黒いインナー、銀のネクタイといったダイバールックの集団や、チナツが言っていたSD使いの「シャローロット」さんの周りにはいるダイバーがそうだ。

「その心意気は頼もしい限りだ。しかし楽観しないでほしい。我が隊が壊滅的な被害を受けた際、マスダイバーはガンプラに異常なまでの再生能力を有していた。更に発生するバグに巻き込まれる可能性もある。危険な作戦だと言わざるをえない」

ロンメルさんの言葉と共にコンソールへと映し出されたそれには、先に俺たちが見せてもらっていた、「第七機甲師団」とマスダイバーたちによるフォース戦の様子が収められていた。

その異常な再生力を前に、さつきまで強気だったはずのダイバーも流石に押し黙って、唇を引き結ぶ。

改めて見れば、気持ちにはわかる。こんなのが大量に集まるとか、想像もしたくないような光景だ。

「だが活路はある。これは殲滅作戦ではない。黒幕の正体……そのI

Dさえわかればいいんだ」

支援部隊が戦線を持ち堪えさせる、もしくは押し上げて、その間に突入部隊による機動作戦で黒幕の確保を試みる。

それが、今回の有志連合に課せられたミッションということだ。

俺たちがどつちに配属されるかはこの先で決まるのだろう。けど、どつちでもやることは変わらない。

「頼む。それまで君たちの命を預けてくれ」

壇上のキョウヤさんが敬礼をするのに呼応して、ダイバーたちもまた同じく立ち上がり、敬礼を返す。

俺たちもそれに倣う形で、キョウヤさんとロンメルさんの二人に敬礼する。さて、問題はここからだ。

「作戦の概略を説明する前に、簡単な質疑応答の時間とさせてもらいたい。無論、この作戦に異議があるものは退室してもらって構わない」

「へっ、そんな腰抜けがこの場にいるかよー！」

「……頼もしい限りだ、タイガーウルフ。私は幸せ者だな……さて、感慨に浸るのはここまでにしておこう。この場にいる全員の覚悟が定まったと見て、今一度、我々に確認したいことがあるならば、是非とも質問してほしい」

タイガーウルフさんの声に乗っかる形で沸き起こった歓声を鎮めながら、キョウヤさんは議場の全員を見渡して言う。

俺たちも配置についてあらかじめ知っておきたかったけど、真っ先に手を挙げたのは「GHC」のアトミラールさんだった。

「チャンピオン。少しばかり質問があるが、構わないかね？」

「先述の通りだよ、続けてくれ、アトミラール」

「承知した。此度の作戦、艦隊による支援は必要ないかね？」

その必要があれば、追加の兵力と戦艦を用意させるが。

しれっととんでもないことを言い放って、アトミラールさんはモノクルの奥にある瞳へと鋭い光を宿す。

「追加の戦艦って……流石は二万の兵力を持つフォーサライアンスってどこね……」

「あのデカいのがまだあんのか……」

「……まるでカルロス・カイザーね」

俺とチナツは思わず顔を見合わせてそう呟いていた。戦艦一隻辺りにどれぐらいのガンプラと兵員が積めるのかはわからない。

けど、二万の戦力を持つているなら、それを収容する母艦も大量に必要なと考えると「GHC」の本拠地には中々衝撃的な光景が広がってそうだ。

ジェニが呟いていたカルロスなんちやらさんについては心当たりがないけど、過去にもそういう人がいたって辺り、ガンプラバトルつてのは奥が深いんだな。

「気持ちはあるがたいが、今回は電撃作戦になる。機動力を活かして戦線を押し上げなければならぬ都合上、足並みを揃えづらい戦艦の投入は控えてくれると助かる」

「そうか……ならば予定通り、こちらは我々が選抜した五十名で支援に当たろう」

それでも五十人用意してる辺りスケールがデカいというか、五十人でも少なく感じる辺りバグってるというか。

分隊も分隊とはいえ、ある意味とんでもないフォースと俺たちは事を構えちまつたらしいな。

戦艦が投入できないことが残念だったのか、着席するアトミラーさんはだいぶしょんぼりして見えたけど。

「他に質問がある者はいないか？」

「はいー」

キョウヤさんの問いかけに、俺は今度こそとばかりに反射で手を挙げていた。

「ユウヤ君か、それでは質問を頼む」

「はい、チャンピオン！ えっと……俺たち『トライダイバーズ』は突入部隊と支援部隊のどっちに配属されるんですか？」

ちよつとせつかちな気もしたけど、立ち位置をはつきりさせておいた方がこつちとしても動きやすい。

機密に触れるとかじゃなければ、この場で知っておきたかった。

俺たちの質問に、キョウヤさんは少しばかり考え込むような仕草を見せると、ロンメルさんと顔を合わせて頷き合う。

「あとで説明するつもりだったが……いいだろう。我々の想定では、君たち『トライダイバーズ』をはじめとしたいくつかのフォースには遊撃部隊を担ってもらうことになっていた」

「遊撃部隊……」

「突入部隊を支援しつつ、マスダイバーを叩いて支援部隊のために戦線を押し上げる役割を担う過酷なポジションだ。それでも構わないかね？」

「要するに、私たちの判断で動ける。そういう理解で構わない？」

「チャンピオン」

「そういうことだ、ジエニ君。高度な判断力と柔軟性が求められる。行き当たりばったり、ともいうが、君たちの働き次第で突入部隊も支援部隊も格段に動きやすくなる。頼んだよ、『トライダイバーズ』の諸君」

「はいー」

俺は威勢よく返事をして敬礼をする。

要するに、作戦の名目を守りつつも俺たちが自由に動けるポジションを、キョウヤさんは確保してくれたということだ。

それについては感謝が尽きない。あくまで突入部隊、支援部隊双方の支援役という建前は守りつつも、俺たちはマフユか「シャドウロー」を探すことに全力を尽くせるってことだからな。

本当に、何度頭を下げてでも足りないぐらいだ。

キョウヤさんの厚意に感謝しながら席について、聞きたいことを聞いた俺たちは、有志連合の面々が質問を重ねていく様子を見守っていた。

待つてくれよ、マフユ。必ず、必ずお前を取り戻す。

決意と共にチナツとジエニと視線を交わし、俺はそう意気込んで、拳をきつく握り締めた。

Ep. 54 「開戦」

キョウヤさんからの連絡では、今日の十五時に初心者用サーバー、エリア11のラグランジュ4へ集結するように指示されていた。

多分だけど、そこがブレイクデカールをばら撒いてる黒幕がいるところなんだろう。

初心者用のサーバーってことで俺たちが入れるのかどうかが若干心配だったけど、そこは問題ないらしい。

「全員、読んだか？」

「ええ、今日の十五時、エリア11のラグランジュ4に集結。そうだしよ、ジエニ？」

「それで間違いない。行きましょう、ユウヤ」

「ああ！ それじゃあ行くぜ！」

——トライダイバーズ、ゴー、ファイト！

チナツとジエニからの確認を取ったところでメッセージを閉じて、俺たちは声を揃えて初期支給品の椅子から立ち上がる。

まだ出撃予定時刻までは時間があるけど、格納庫で機体の最終確認とか調整とか、できることは色々ある。

ギリギリの時間まで粘って、できることをやる。そして、GBNを崩壊の危機から救って、マフユを助け出す。

それが、俺たちの今回やるべきことだ。

よく考えたら結構な大事だと、緊張しているのに何故か笑えてくるのは武者震いの類なのだろう。

「頼むぜ、スフィード……俺とストライク焔の魂を、連れて行ってくれ」

転送された格納庫で機体の最終確認をする傍らで、俺は苦笑を浮かべながら十八メートルサイズまで拡大されたストライクスフィードを仰ぎ見る。

最悪、GPDの時みたい本体がぶっ壊れたりはしないだろうけど、「シャドウロール」と戦うことになるのなら、そして、再生能力を持ったマスダイバーたちと戦うことになるのなら、機体の破損は避け

られない。

マフユのところには辿り着くまでは可能な限り被弾を抑えたいところだけど、俺たちがつく遊撃隊のポジションは、ある意味一番過酷なところだ。

防衛隊を守りながら、突入部隊を援護し、戦線を前に押し上げていく。

それを、多数出現することが予想されるマスダイバー相手にやらなきゃいけない。

ヴァルガの時みたいに、一機だけにかまけているわけにはいかない都合、マスダイバーの再生能力がロンメル隊を壊滅させた時と同じなら、厄介極まりないことになる。

だとしてもだ。

こんなところで挫けていたら、戦う前から諦めていたら、なんにもならない。

全てのチェックを終えて、コックピットに乗り込んだ俺は、操縦桿を握り締めながら唇を真一文字に引き結ぶ。

「出撃予定時刻二分钟前よ、ユウヤ！」

「こちらは準備に問題ない。発進はいつでもできる」

「よし、こつちもオツケーだ！ それじゃ出撃するぜ！」

『了解！』

「カミキ・ユウヤ、ストライクガンダムスフィード、出るぜ！」

カタパルトから滑り出したストライクスフィードが、セントラル・エリアの青空を舞う。

続いて出てきたチナツのウイングロードアストレイと、ジエニのプライドマスターの姿を確認すると俺は、無数の機体と一緒に、エリアー1、ラグランジュ4へと繋がっている転送ゲートに飛び込んでいく。

百鬼夜行ならぬ百機夜行とでもいうべき光景に、セントラル・エリア中の視線が俺たちへと注がれてくるけど、そんなものを気にしている場合じゃない。

そうしてゲートを通過した先に見えたものは、青々と輝く地球を背

にして、巨大な資源衛星が見える宙域だった。

「有志連合各機に通達する！ 黒幕を取り逃さないために、全機の到達を確認次第このサーバーは閉鎖される！ そのため、一度撃墜されてロビーに戻されたら、再出撃はかなわないものと思ってくれ！」

「了解！」

威勢よく返事はしたものの、チャンピオンの、キョウヤさんの言葉に戦慄が走る。

再出撃が不可能ってことは、どう足掻いても一発勝負ってことだ。

それは、「シャドウロール」を見つけることも、マフユを見つけることも全く同じ。つまり、この一回が事実上、俺たちにマフユを探すために与えられた、最初で最後のチャンスって話になる。

それに、俺たちがやられれば、ブレイクデカールの影響でバグが広がってGBNが崩壊する。

マフユも探して、「シャドウロール」も探して、GBNも守る。やることが盛り沢山って感じだけど、だから燃えてくるんだ。

続々とゲートから飛び出してくる有志連合各機に続いて、俺たちもまた所定のポジションにつく。

「マスダイバー機、資源衛星内から多数出現！ 資源衛星内に残存する戦力のモニタリング不可！ プロテクトがかけられていると予想されます！」

「バグの影響がそこまで……いや、メインプログラムへのクラッシュを仕掛けられているということか……！」

エミリアさんの分析に、チャンピオンが歯噛みする。

リーダーに映る、敵対勢力を示す赤い点は現在も尚増え続け、ざつと数える限りでは百をゆうに超えているんじゃないかってぐらいになっていた。

有志連合側が持っている戦力は現状で打ち止めなのに対して、マスダイバー側が残している戦力が秘匿されている以上、数的不利を背負うのは避けられないか。

「有志連合各位に通達！ これより突入部隊を支援する！ 防衛部隊及び遊撃部隊の中で可能な者は砲狙撃戦体勢に移行！」

『了解！』

ロンメルさんからの指令が下ったことで、大火力や狙撃能力を有している機体が前面に展開し、迫りくるマスダイバーたちにその銃口を向ける。

「チナツ、出番だぜ！」

「わかってるわ！ 切り開いてみせる、アタシの、アタシたちのウイニングロードを！」

チナツのウイニングロードアストレイは光の翼を広げると、前線に出た砲狙撃隊に合流して、右手のロングビームライフルと左のウエポンラックから展開した長距離長射程ビーム砲をマスダイバーたちへと向ける。

「ユウヤ、私たちは」

「……今はまだ損耗を抑えたほうがいい！ 俺たちの役目はあくまでも機動戦で敵戦力を叩くことだからな！」

ジェニが仄かしていたのは、鳳凰霸王拳のことなのだろう。

確かにあれの威力は砲撃に匹敵するけど、その分エネルギーの損耗が極めて激しい。

俺たちに任せられたことを考えれば、ロンメルさんには悪いけどここはエネルギーを温存しておくことの方がきつと重要だ。

「ならばその役目、我に任せてもらおう……仮想バレル展開、リミッター解除！」

「GNロングレンジキャノン展開、GNホーミングレーザー、GNフェイダトンファア、マルチロック、セット……！」

前線部隊の真ん前に躍り出た、怪獣のような外見をしたガンブラー前に配信で見てた、デイビニダドの翼を装備したクオンさんの機体と、ヴァルガで遭遇したキョウスケさんの機体が、先陣に立ってその砲口をマスダイバーへと向ける。

「終末の竜が息吹を、我が『ジャバウオック』の炎を受けよ！」

「GNハイマツトフルバースト……！」

「これがアタシの……ウイニングフルバースト！」

ジャバウオックというらしい、クオンさんの機体から分離したサイ

コプレートが、恐らくはユニコーンのサイコ・フィールドも利用して形成したバレルから、終末の竜を自称するのに相応しい威力と範囲を誇るビームが放たれたのを皮切りに、キョウスケさんとチナツが全砲門からの一斉射撃を放つ。

『なっ……ブレイクデカールがあれば、チャンピオンでもなんでも余裕じゃないのかよ——』

「斯様なまやかしの力に頼った者など、我が前に立つことすら叶わぬと知れ」

バリエントに乗っていたマスダイバーが、テクスチャの塵へと還される中で呟いた戯言を一言で切って捨てて、クオンさんのジャバウオックが咆哮を上げる。

あの技の威力はローエングリンもかくやってほどにとんでもない。俺ですら自分の目を疑ったほどだ。

だけど、マスダイバーの機体は再生能力を持っている。

直撃を喰らって塵に還ったやつらはともかくとして、範囲から多少逸れていた機体群はどうなるのか——俺が一瞬だけ抱いた疑問は、果たして即座に解決を見ることになった。

キョウスケさんの放ったフルバーストと、チナツのウイニングフルバーストは扇状に広がる「ジャバウオック」の一撃の範囲と被らないよう、微妙に軸をずらしていて、再生途中のマスダイバーをGNロングレンジキャノンが、GNホーミングレーザーが、そしてチナツのウイニングフルバーストが焼き払う。

『こ、こんな……馬鹿な、馬鹿なあああっ！』

「今だ！ 突入部隊各機は突撃！ 防衛部隊はこの隙に一気に前線を押し上げろ！」

「了解したぜ、ロンメルさん！ 次元霸王流……疾風突きいつ！」

俺とジェニはまだしぶとく残っていたマスダイバーの機体を破壊して、防衛部隊と共に前線を一気に押し上げていく。

ただ、マスダイバーの数は膨大だ。

どれだけクオンさんやキョウスケさんたちの、チナツの攻撃が強力

なものであったとしても、無尽蔵かと疑いたくなる勢いで続々と資源衛星内から湧き出てくる。

「怯むな！ マスダイバーと決して一対一で戦おうと思わず、スリーマンセルでの連携を徹底するんだ！」

『了解いたしました、提督！』

アトミラールさんが駆る銀翼のフラッグ……その改造機がり・ガズイカスタムや、BWSを装備したり・ガズイを従えて前進しながら、後に続く、エールストライカー装備のウィンダム隊に指示を下す。

アトミラールさんの、「GHC」の戦い方は、分隊とはいえ一度矛を交えたのだからある程度はわかっている。

徹底した連携。決して相手に擬似タイマンを許さない高密度なその体勢は、マスダイバーが相手だったとしても揺らぐことはない。

「航空隊各機に通達！ これより我々はマスダイバーの上をとつての急降下爆撃を行う！ 全機、僕に続け！」

『了解！』

そして、アトミラールさんが一気に機体を上昇させると、前に出てきたマスダイバーのドーベン・ウルフやゲーマルクといった重モビルスーツに向けて、その死角となる真上からの爆撃を敢行する。

本来であれば増槽がマウントされているであろう、リ・ガズイBW Sの翼は大型化され、対艦ミサイルを懸下している。そしてそれは、リ・ガズイ部隊を率いるカスタムタイプも同じだった。

「今だマイ、征け！」

「さあ、パーティーの始まりよ！ そう簡単にくたばってもらっちゃ張り合いがないってもんだから……ガッツを見せなさいよ！」

上空という死角を取られたことで雨霰のように降り注ぐ弾幕砲火を晒されたマスダイバーたちは、マイと呼ばれたり・ガズイカスタムを操るダイバーの期待に応えることなく、メガ・ビーム・キャノンや対艦ミサイルの直撃を受けて爆散していく。

『なんだこいつら……!? ブレイクデカールがあれば余裕だって話じゃねえのかよ!?!』

『ふぎげやがって……お前も俺たちをコケにするのか!』

『だが、背中を見せたのは迂闊だったな航空隊!』

急降下爆撃を受けたことでマスダイバーたちは動揺していたものの、立ち直ったバンシイ・ノルンがビームマグナムを構えて、マイさんたちの背中に狙いをつけた、刹那。

「させんと言った!」

アトミラールさんのフラッグが急速変形を行って、手にしたライフルでビームマグナムを射抜く。

発射寸前だったビームマグナムが暴発したことで、バンシイ・ノルンの右腕は碎け散るものの、即座にまた再生してしまう。

だけど、再生までの間には、僅かとはいえラグがある。

「アトミラールさん、援護します! おおおっ! 次元霸王流!

流星螺旋拳!」

『速い!? いや、強い……ぐわあああつ!』

再生してからビームマグナムをぶつ放すつもりだったのであろうバンシイ・ノルンに強襲をかけて、俺は流星螺旋拳をそのコックピットへと叩き込んだ。

そして、バンシイ・ノルンはそのまま爆散して宙域から消失する。

いくら再生能力を持つてようが、コックピットを一撃でぶち抜かれてしまえば、どうやら再生はしないらしい。

なるほど、いいことを聞いた気分だ。

確かに乱戦の中でピンポイントでコックピットをぶち抜く一撃を当てるのは難しいかもしれない。

だけど、いくら即時再生能力を持つていたって完全に無敵じゃないってわかれば、いくらか気が楽になる。

「このまま押し切るぜ、ジェニー!」

「わかった、ユウヤ」

『次元霸王流、旋風竜巻蹴り!』

ジェニーのプライドマスターと背中合わせになって、俺は機体を回転させ、旋風竜巻蹴りをマスダイバーにお見舞いした。

これで全てを仕留めることを期待しているわけじゃない。

とにかく相手の機動力を奪って、再生までに生じる僅かな隙を利用

して後続にコックピットをぶち抜いてもらいたいだけだ。

「ユウヤ君……そうか、各位、コックピットだ！ 榴弾や貫通力のある武装でコックピットを狙えば、マスダイバーといえども撃破できる！」

「なるほど、そういうことかアトミラール……聞いたな！ 防衛部隊は敵の足止めをしつつコックピットを狙って頭数を減らしていけ！」
俺からのサインを受け取ってくれたアトミラールさんに呼応する形で、ロンメルさんが有志連合全員に通達する。

それで防衛部隊の陣形が一気に集団戦の構えに入るのだから、トツプランカーの影響力つてのは凄まじい。

「マスダイバー、第二波来ます！」

「それなら、アタシの出番ね！ フォース、『アダムの林檎』、ガンダムラヴフアントム……行くわよー！」

マギーさんの、ストライクフリーダムをベースにしたのであろうガンダムラヴフアントムというらしい機体が、持っていたビームカメラをぶん投げる。

およそカメラを投げただけとは思えないほどの範囲と破壊力で、資源衛屋内から出てきた第二波のマスダイバーたちを足止めしていたものの、やっぱりコックピットへの直撃を喰らわなかった機体は即座に再生してしまう。

「ちよっと、そんなのズルいわよお！ クオンちゃん、次の一撃にはまだ時間がかかりそう!？」

「リキヤストには時間がかかる……それに我もマスダイバーに取りつかれた！ 砲撃支援は難しいと思つて！」

「それは厳しいわね……キョウスケ君！」

「わかっている、マギーさん！」

クオンさんが撃てないならその代わりに、とばかりに、再びビームカメラを投擲したラヴフアントムに続く形で、キョウスケさんのダブルオーガンダムを改造した機体が二度目のフルバーストを放つ。

あれだけ強力な一撃で畳み掛けられてしまえば、敵が木っ端微塵になるのにそう時間はかからなかった。

だけど、フルバーストを二発も放てばそれ相応にエネルギーは消耗するはずだ。

俺は襲いかかってきたマスダイバーのベルティゴを弾丸破岩拳で粉碎しつつ、キョウスケさんと、その隣に展開してIFBRを敵陣に撃ち込んでいるユユさんに視線を向ける。

「ならばここは妾に任せてもらおう……アブソープ機構、デイスチャージ。マスダイバーとやらの攻撃が苛烈な分、此方も回復が強固になるでの……！」

「助かるよ、テンコ様」

「よいよい。此度の戦い、妾の『天照大稲荷』は長期戦を見越して持ち出してきたものよ。遠慮なく戦うがよいぞ、キョウスケの坊……いや、有志連合よ」

「ならばお言葉に甘えて……存分に暴れさせていただけよう！ ユユ！」

「ふふ……了解しました、お兄様」

キョウスケさんとユユさんの兄妹は高く飛び上がると、一気に機体に力を集中させてそれを解き放つ。

「トランザムブーストモード、ツヴァイアクセル！」

「ふふ……if sプロージョン、フルドライブ……！」

チナツがサインをもらいに行ってた、あのテンコ様ってダイバーの機体はどうやらビーム攻撃を吸収して、そのエネルギーを他に分配することができるらしい。

マスダイバーのガナーザクウォーリアが放ったオルトロスの一撃を難なく吸収し、狐耳を模したパーツがあしらわれ、メガ粒子砲をクリアパーツに置き換えたゲーマルク、「天照大稲荷」は戦場に堂々たる姿で君臨する。

そして、全力を解き放ったキョウスケさんとユユさんは、宇宙に新たな星座を描くかのような機動力でマスダイバーをなます斬りにして、次々に敵を塵に帰せしめていく。

「アタシたちも負けてらんないわよ、ユウヤ！ ここで一気に戦線を押し上げるわ！」

「チナツ、エネルギーは大丈夫か!？」

「アタシもテンコ様に回復してもらったから！ 行くわよ、ジエニも！」

「言われるまでもない」

少なくとも「天照大稲荷」が健在なら、ある程度かつ飛ばしてもいけるってことだ。

チナツの提案に乗る形で俺もまたバーニングバーストシステムを起動して、防衛部隊の要石になったテンコ様を狙う敵を蹴り飛ばし、殴りつけて破壊していく。

……いや、特に面識とかあるわけじゃねーんだけど、なんか様をつけなきゃいけない気がするんだよな、テンコ様。

そんな事情はともかくとして、俺たちもまたキヨウスケさんたちに続く形で夜空に星座を刻み、最前線のマスダイバーたちを薙ぎ倒す。相手が無尽蔵だろうがなんだろうが、やってやれないことはないってんなら、やってやるさ。

この世界を守るためにも、そして、マフユを助けるためにも。

Ep. 55 「今は前に進め」

「マスダイバーの機影、百を超えて尚も増大中！ こちらの戦線が押し返されつつあります！」

「一体どれだけのマスダイバーが潜んでいたというのだ……各機、ここでマスダイバーを押しとどめろ！ 突入部隊への支援を絶やすな！」

偵察機に同乗していた「GHC」の制服を着ている女の人が報告した通り、最初は有利をとっていたはずの戦況は次第にこっちの不利になりつつあった。

いわゆるジリ貧ってやつだ。

トップランカーがどれほど強力であったとしても、マジで無尽蔵なんじゃないかってぐらい次々と資源衛星内から現れるマスダイバーの連中は、再生能力と数の合わせ技でこっちを押し返してきたのだ。加えて、初撃を放ったクオンさんはガチガチに警戒されていて、ジャバウオツクの巨体もあってか、常にマスダイバーからの攻撃に晒されている。

キョウスケさんとユユさんも時限強化を発動してマスダイバーを薙ぎ払ってこそのるものの、その数が百をゆうに超していることもあって、体感的な戦力は全然減ってない、というのが実情だった。だからといって、ここで諦めるわけにはいかない。

「手伝え、タイガーウルフ！」

「言われなくても！」

「高濃度圧縮粒子、完全解放！ 吹けよシムルグ、『アルフ・ライラ・ワ・ライラ』！」

「奥義！ 『龍虎狼道』！」

見たところ、マギーさんや、突入部隊にいたタイガーウルフさんともう一人、セラヴィーガンダム改造機を使っていたダイバーが援護に回ったことで、突入側の方はなんとか目的を果たせそうだった。

なら、俺たち遊撃隊がやるべきことは突入部隊の支援よりも、防衛部隊の支援だったことだ。

幸いなことにテンコ様の「天照大稻荷」は健在で、「GHC」の精鋭部隊がその護衛についている。

——だったら、ある程度全力でぶっ放しても問題ないよなあ！

「行くぜ、ストライクスファイダー！ バーニングバースト始動、イクシードチャージ！ カミキガンプラ流奥義……鳳凰霸王拳！」

「お前ばっかにいい格好させるかよ、ユウヤ！ 必殺、雪花氷獄鳥！」
俺が固まっていたマスタイバーに鳳凰霸王拳を撃ち放ったのを見計ったかのように、前線に飛び出してきたコドウのリバースブリザードガンダムが、メガ粒子杯で見たのと同じ氷の鳥を象ったエネルギーの塊を放つ。

炎の鳳凰と氷の鳳凰。正と負の二つのエネルギーを持った技は瞬間的に合一して、即興の新必殺技とでもいうべきものに昇華していた。

『ぶ、ブレイクデカールで強化したGNフィールドが!? うわあああつ!』

『ヴァーチエが墜ちたか! クソツ、誰でもいいから砲撃できるヤツはあの「ジャバウォック」を狙うんだ——ぐわあああつ!』

対消滅のエネルギーとなった鳳凰が羽ばたくと共に、固まっていたマスタイバーの機体をフォトン・トルピードの如く消し飛ばす。

なにはともあれ、敵の狙いがジャバウォックに集中しているのが、これで明らかとなった。

あの「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」に匹敵するか下手をすればそれ以上の威力を誇るビーム砲を持っているクオンさんをフリーにさせていれば、被害は甚大なものになる以上、当たり前ではあるんだけど。

「あれでも再生しやがるか……ユウヤ、やれるか!？」

「当たり前前だぜ、コドウ！ チナツ、ジエニ！」

「了解よ、ユウヤ！ ウイニングロードアストレイ、エクストリームブラストモード！」

「……バーニングバースト始動、同調。次元霸王流、聖拳突き！」

光の翼を一段と強く広げたチナツのウイニングロードアストレイ

が、残像を周囲にばら撒きながら、手にした対艦刀でジャバウオックに狙いをつけていたマスタイバーのケルディムガンダムを両断する。バーニングバーストを発動したジェニのプライドマスターが、それに動揺したハイゼンスレイを聖拳突きで破壊して、テクスチャの塵へと還す。

今のところ、遊撃隊は順調にキルスコアを重ねていて、これといった損害もない。

俺は背後からの奇襲を凶ったネロブリッツをブレードドラグーンで細切れにして、残った胴体を蒼天紅蓮拳でぶち抜きながら、戦況を俯瞰する。

遊撃隊の戦果は上々だとしても、なんせ数が数だ。寡兵である都合上、どうしても防衛部隊に敵が殺到してしまうのもまた事実だ。

それを見込んでか、防衛部隊は必死にジャバウオックや天照大稲荷から狙いを逸らそうと、ヘイトをわざと引き受けるために突出する機影もあった。

「俺のガデラーザが盾になる！ その隙にクオンちゃんはもう一度ハイパーメガ粒子砲を！」

「感謝するが……ガデラーザの火力でも敵の殲滅には十分なはず、何故そこまで我を守ろうと？」

「これでも俺……亡者つすからね！」

「……そうか。感謝するぞ」

亡者つてのがなんなのかはわからないけど、とにかくその巨体を盾にしてくれたことで、ジャバウオックへの攻撃は一時的にGNフィールドを展開したガデラーザに集中する。

「怯むな！ なんとしてもテンコ様をお守りするのだ！」

「砲撃はガデラーザが引き受けてくれてる！ ならばこちらは機動部隊を叩けばいい！」

「ええい、数ばかりごちゃごちゃと！」

天照大稲荷がビームを吸収できると踏んでか、実弾持ちで機動力が高いレイダーガンダムや、ブレイクデカルで機動性を強化しているジム・クウエルといった機体は「GHC」仕様のウインダムを翻弄し

ていた。

テンコ様の護衛に当たっている部隊は最初から防衛が目的だったのか、ジム・ガードカスタムの盾を持っているからそう簡単に守りを崩されることはないものの、ジリ貧といえればジリ貧だ。

俺たちが助けに行くには天照大稲荷は大分距離が遠い。なら、どうするべきか。

迷いがストライクスファイダーの動きを僅かに鈍らせた、刹那。

「ヒヤッハハハ！ 何度でも蘇るのなら、何度でもさようならだ！」

「君は相変わらずだね……しかしその通りだよ。クロスボーンガンダムは接近戦に強く調整されている……恐れるな！」

天照大稲荷を狙っていたレイダーガンダムのコックピットへ、ペリシアで見たダブル眼帯の人がサーベルを一息に突き入れる。

それと同時に、クロスボーンガンダムX1をベースにしたと思しき包帯の女性が、ジム・クウエルをビーム・ザンバーで真つ二つに斬り裂く。

どうやら心配はいらなかったみたいだな、と安堵した刹那。

「次元霸王流！ 桜花紅蓮脚！」

『グワーツ!? だがこちらには再生能力が……』

「消えなさい！」

『アバーツ!?!』

俺の動きが鈍ったと見てか、背後から奇襲を仕掛けてきたシュトルム・ガルスを蹴り飛ばし、頭を吹っ飛ばした後、追撃としてチナツが放った長距離長射程ビーム砲がそのコックピットを撃ち抜くことで、宇宙に一つの花火が上がった。

「あつぶねえ……サンキュー、チナツ！」

「油断してる場合じゃないでしょうが！ アタシたちは戦線を押し上げるのよ、そうでしょユウヤー！」

「……ああー！」

遊撃隊は自分の判断である程度動いていいと、キョウウヤさんから認められている。

俺の目的は、GBNの崩壊阻止は大前提としても、マフユを助け出

すことだ。

そのために勝手な行動をしていいというわけじゃないけど、少なくとも。

「待たせたな、大儀であったぞ……ハイパーメガ粒子砲、チャージ完了！ 射線上の味方は直ちに退避せよ！」

ガデラーザがその身を盾にしてくれていたことでチャージを完了させていたジャバウオックが、相変わらずデタラメな射程をこっちのコンソールに提示して、再びその炎を放たんと大口を開ける。

『ジャバウオックのチャージが完了したぞ！』

『止められるやつはいないのか!?!』

『逃げるんだよ！ ええい、どけ野次馬ども！』

ここに来て露わになったのは、マスダイバー側が連携に乏しいという事実だった。

確かに、ブレイクデカールの攻撃力と再生力は脅威に値するかもしれない。

だけど、相手にはアトミラルさんやロンメルさんのような用兵家がない。つまるところ、どれだけ個人が強くてそれをまとめる人間がいなければ、烏合の衆だってことだ。

「仮想バレル形成、終末の竜が怒りを知れ……！ ハイパーメガ粒子砲、発射！」

ジャバウオックの、クオンさんの怒りがそのまま形になったかのよう二度目のハイパーメガ粒子砲が放たれる。

ただ、その威力は一回目と比べて大幅に減少していたせいもあってか、マスダイバーが展開していた第二陣の壊滅には至らなかった。

チャージが足りていなかった、というわけじゃないのだろう。むしろ、一発目の威力がなんらかの形で機体に無茶をさせてたんじやないかと、俺はそう推察する。

こうなってくると、全損まで持っていかなければ即時再生するというマスダイバーの能力は厄介極まりない。

実際、ジャバウオックの撃ち漏らしをロンメルさんたちが叩いてこそいたけど、大部分は即座に復活して、何事もなかったかのように襲

いかかってくる。

『どうやらあのジャバウオックは息切れのようだなあ!』

『ランカーと渡り合えるなんて、ブレイクデカル様様だぜ!』

『全員ぶっ叩け! これ以上あいつらに好き勝手させるんじゃねえぞ!』

水を得た魚とばかりに、ジャバウオックの損耗を見抜いたマスダイバーたちは攻勢を強めてきた。

「防衛部隊各機に通達! 機動力に優れた部隊は連携して攻勢を強めてきたマスダイバーの対処に当たれ! ブレイクデカルがいかに再生能力持ちといえども、決して無敵ではない! 突入部隊が戻ってくるまで、この戦線を死守するのだ!」

ロンメルさんが味方を鼓舞するように叫ぶと同時に、防衛ライン際に配置されていたランカーたちの部隊もまた攻勢に転じる。

「どうやら、突入部隊は無事に資源衛屋内に突入することができたようだ。」

「だったら、あとはこつちとしても思いつきり暴れるだけだ。」

「へっ……好きに暴れられるってんなら好都合だ! 行くぜチナツ、

ジェニー! 俺たちが突破口を開く!」

「わかったわ、ユウヤ!」

「了解。こちらも全力で仕掛ける」

「俺たちも続くぞ、シンリ、シーエオ!」

「わ、わかりました……!」

「了解っ!」

ストライクスファイダーを加速させるのと同時にブレードドラグーンを展開、俺は全方位から襲いかかってくるマスダイバーを適当になります斬りにしつつ、後続のチナツたちに処理を任せる形で最前線に突っ込んでいく。

バーニングバーストにもまだまだ余力は残されている。

最悪、テニコ様に補給を頼ることはなるだろうけど、天照大稲荷がいる限りエネルギー配分にそこまで気を使わなくてもいいってのは朗報だ。

「次元霸王流！ 弾丸破岩拳！」

『俺のバイアランが!? ぶ……ブレイクデカールで強化されてるのに、どうして!?!』

「悪いいな、俺とストライクスファイダーは……次元霸王流は、そんなもんじゃ止まらねえんだ！」

リンファから学んだように、今の俺とストライクスファイダーなら、コックピットへと衝撃を浸透させる形で中のダイバーにダメージを与えられる。

一体ずつの処理になる分、効率は良くないけど、その分マスダイバーに有効打撃を与えられるって意味じゃあ確実だ。

例え撃ち漏らしたとしても、チナツがフォローを入れてくれるし、ジエニだって俺と同じ芸当ができるんだから、遊撃隊としては上々だろう。

そんな具合にマスダイバーを薙ぎ払いながら、マフユを探して前線を彷徨っていた、その時だった。

警告音がコックピットに響くと同時に、「何か」が宇宙から溶け出るように、攻撃を浴びせかけてくる。

「危ねえ……っ! 『シャドウロール』か!?!」

この襲撃パターンには見覚えがあったから、すわあいつかと思いきや、出てきたのは忍者を思わせる、いわゆるSD体型のガンプラだった。

「誰だか知らねーが、立ちはだかるってんなら容赦はしねえ! 次元

霸王流——」

「ま、待って! その機体……!」

その忍者ガンダムに殴りかかろうとしたのを制止するように、コードウからシーエオと呼ばれていた同じSD使いのダイバーが、俺の前に立ちはだかる。

それがなにかは知らねえけど、どうやら訳ありの様子だ。

動作を寸前でキャンセルした俺は、シーエオがその忍者ガンダムに相対するのを見据えていた。

「あの機体……G参影丸! イマリちゃん、どうして……どうして、ブ

レイクデカールなんかに！」

『……っ……！』

「シーエオ！」

「先に行ってください、コドウさん！ ユウヤさん！ この子は、イマリちゃんは私が……っ！」

「どうやら本格的に訳ありのようだ。なら、俺たちが出る幕じゃない。」

イマリと呼ばれたマスダイバーに向き合ったシーエオのガンプラがそのステッキを構えたのを見計らって、俺たちはこの場を離脱、ひたすら敵の只中に前進する。

「良かったのか、コドウ？」

「……どうしても譲れねえ理由があるってんなら拳で語り合うしかねえ。そうだろ、ユウヤ？」

「……ああ、そうだな！」

ある意味、俺もシーエオとは似たようなものだ。

マフユを探して、マスダイバーの中にその姿を見つけたその時、事が思い通りに運んでくれるとは限らない。

むしろ、マフユのことだから、頑なになって、話を聞いてくれない可能性だってある。

その時に道を切り開いてくれるのは、きつとこの拳だ。

拳をぶつけ合えば全てがわかるとまではいわなくたって、わかることは確実にある。

リンファがその苛烈なまでの闘志を教えしてくれたように、ジエニがGPDでジュンヤさんに対する思いを伝えてくれたように、そして、チナツがあの時悲しみを俺に拳で教えてくれたように。

「だから諦めねえ……何があっても、何が出てきてもだ！ 行くぜスファイダー！」

『なんだ？ メガ粒子杯の優勝者がこのこと前線に出てきやがって……まあいい、あいつを潰せばボーナスが出る！ 行くぜ野郎共！』

『おう！』

フォース全員がマスダイバーになってしまったのか、やけに統制が

取れている集団が、前線を突き進む俺に襲いかかってくる。

相手の戦力は全部で八機、その内訳はガンダムヴァサゴチエストブレイクが一体、ガンダムアシユタロン・ハーミットクラブが一体、残りはドートレス・ネオで構成されていた。

元はガンダムXをリスペクトしたフォースだったんだらうか。だとしたら悲しいものがある。

とはいえ統制の取れたマスダイバーが八機だ。一機ずつ各個撃破してきた今までは違って、集団戦を仕掛けてくるのは中々に面倒だ。

ドートレス・ネオの弾幕砲火を回避しつつ、展開したブレードドラグーンでその機体を切り刻む。

だけど、その際にできた隙を狙って、ヴァサゴチエストブレイクが持っていたストライクシューターから放たれる一撃が、ストライクスフィードに襲いかかってくる。

「ぐっ……！」

『はははは！ やっぱブレイクデカールはいいなあ……真面目にやってたのが馬鹿らしくなるぜ！ メガ粒子杯の優勝者だっけこうして圧倒できるんだからなあ！』

「そんなまやかしに縋って、GBNが壊れちまってもいいのかよ!？」

『まやかしでもなんでも構わねえ！ 俺たちは勝ちたいんだよ……負けたくてGBNやってんじゃねえんだ！』

「そのGBNが壊れるかもしれないって言ってるんだよ！ 次元霸王流、流星螺旋拳！」

『そうだ、リーダーをやらせはしない！ もうこれ以上……僕たちは負ける痛みを味わいたくない、好きなものを嫌いになりたくないんだ！』

身勝手な理屈でブレイクデカールに手を染めたヴァサゴチエストブレイクに俺はパルマ・フィオキーナの光とバーニングバーストの炎を纏った流星螺旋拳を叩き込む。

だけど、すんでのところで割り込んできたアシユタロンハーミットクラブが、ギガンティックシザーズでそれを受け止める。

流石にブレイクデカールで元の装甲が強化されているのもあって、一筋縄ではいかないようだ。

こんなところで足を止めてるわけにはいかないってのに。

微かな焦燥がちりちりと血管を焦がすような感覚となって全身を伝っていく。

ひしやげて破損したギガンティックシザーズは即座に再生して、何事もなかったかのように、ハーミットクラブがストライクスフィードを捉えようとその手を伸ばしてきた、その瞬間だった。

「我流！ 蒼天紅蓮拳！」

戦場を震わせる叫びと共に、コドウのリバースブリザードが再びギガンティックシザーズを打ち砕く。

「コドウ！」

「先に行けよ、ユウヤ！ お前も……なにか理由を抱えてるんだろ!？」

「だったらこいつは俺たちが引き受ける！」

「……済まねえ！ でも、ありがとうな！」

「なに……ただな、俺ともう一度戦うまで、やられるんじゃねえぞ、ユウヤ！」

「ああー！」

引き受けてくれたコドウたちに感謝をすると同時にこの場を託して、俺たちは前に進む。

マスマイバーにだってそれなりの事情だとか理由がある。それはマフユだって同じなのだろう。

「だけど、そのためにGBNが壊れてしまったんじゃどうしようもない。」

「だから、俺たちは進み続けるんだ。」

マフユにこれ以上罪を着せないために、どんな理由や事情があつたとしても、必ず引き戻すために。

そして、もう一度——メガ粒子杯を優勝したあの日と同じ顔で笑い合うために。

Ep. 56 「哀しみの黒影」

「アリカ、戦況はどうなっている!？」

「マスダイバー機、増援の勢いは衰えています！」

「聞いている通りだ！ 諸君、ロンメル大佐に代わって通達する！ この曲面を乗り切れば我々の勝利に大きく前進するだろう！ 各員奮起せよ！ GBNの興亡、この一戦にあり！」

アリカさんというらしい、偵察機に同乗している女の人からの報告を受けて、航空隊を引き連れて遊撃に回っていたアトミラーさんが宣言する。

マスダイバーも流石に無限とはいかないようで、こっちとしても一安心だ。

コドウたちがヴァサーゴチェストブレイクとアシユタロンハーミットクラブの対処を引き受けてくれたことで、俺たちは最前線に近いくところまで歩を進めていた。

だけどその分、マスダイバーからの攻撃は一層その激しさを増す。当たり前だ。敵の懐に飛び込んだんだから、それ相応に覚悟は決まなくちやいけない。

『隙あり天誅ーッ！』

「なにが天誅だ！ 次元霸王流、聖拳突きいッ！」

『鮮やかな天誅返し……くっ、敵ながら天晴れ……!』

ガーベラストレートを大上段に構えて斬りかかってきたアストレイレッドフレームのコックピットに俺は、聖拳突きを叩き込んで破壊する。

自分の敵を称えることができる度量を持っているようなやつでも、マスダイバーになつてちまうのかよ。

改めて、魔力にも似たブレイクデカールの誘惑と、そして勝利を求めぬあまり、敗北に傷つくあまり、その心につけ込んでマスダイバーを生み出す黒幕への怒りが募っていく。

「データリンク！ 遊撃隊の戦況を転送するわ、ユウヤ、ジエニ！」

マスダイバーが駆るバウンド・ドックのコックピットにパルマ・

ファイオキーナでの貫手を叩き込みながら、チナツがデータを転送してくる。

俺たちが現状、戦線を強引に押し上げている都合上、見えていなかった状況がクリアになるのはありがたい。

コドウたちがチェストブレイクとハーミットクラブを相手に奮戦している中で、ドートレス・ネオを斬り裂きながら、一機のガンプラがこっちに急速接近してくる様子がモニターへと映し出された。

「はろーやーやー、少年少女……全く、無茶ばかりするもんじゃあないよ」

「トワさん！」

「いかにもトワさんはトワさんさ、早速ではあるが、遅れた分の仕事はさせてもらうよ。このダブルオートワクアンタ、フルセイバーでね……さあ、実験を開始しようじゃないか！」

トワさんが乗り付けてきたダブルオークアンタのカスタムモデルの全身がトランザムによって赤熱し、流星となって宇宙を駆ける。

SSランクというだけあって、その腕前は相当なものだ。俺たちに群がるマスダイバーを撫で斬りに、時には撃ち抜き、フルセイバーの多彩な武装を使い分けながら、トワさんはマスダイバーを撃退していく。

「流石はSSランク……だけど、アタシたちも負けちゃいけないわ！」

「敵はパワーダウンしている。なら押し込むだけ」

「応ともよ！ 行くぜマスダイバー……次元霸王流！ 旋風、竜巻蹴り！」

トワさんに呼応するように、俺たちもまた立ちはだかるマスダイバーを蹴散らして進む。

全部を仕留めきれなくてもいい。

再生までのタイムラグを利用して、損傷したマスダイバー機を後続に撃破してもらう。

フォース「ヴァームーズコンバット」との戦いじゃあ、確かに俺たちの連携の甘さとでもいえるべきものがあつた。

アトミラールさんとロンメルさんという用兵家がいるだけで、突出するんじゃないかって誰かに背中を預けることで、趨勢が大きく決まるのもまた戦いというものだ。

それに、防衛部隊がある程度戦線を維持できると踏んだのか、遊撃に回る部隊も若干ではあるけど増えてきたことが、チナツのウイニングロードアストレイからのデータリンクで伺える。

「おらおらおらおらあ！ チートでイキるだけが脳で、腕前の方はからつきしみてーだなあ！」

「アリムには負けてらんない……あたしも一気に押し込む！」

「ふふつ、二人とも頑張ってますね！ さて……私とトリスタンサファイアもひと暴れしましょうか！」

ヴァルガでも見たアリムさんとフリーラーさんは、いがみ合いながらも抜群のコンビネーションを、マスダイバーのジャステイスガンダムにぶつけて撃破していた。

そして、二人の背後を狙った敵には、トリスタンサファイアと呼ばれていた重装備のガンプラがミサイルの雨霰を浴びせて爆散させる。

「やるじゃねえか……尚更こつちも負けられねえな！ 次元霸王流、聖槍蹴り！」

抜群のコンビネーションだ。その連携に舌を巻きながらも、俺は決して油断することなく、EXAMシテムを発動して襲いかかってきたブルーデイスティニー3号機へと裏拳を叩き込んで体勢を崩したところに、追撃の聖槍蹴りを放つ。

『ち、ちくしよおおおつ！ 俺は、俺はただ負けたくないだけなのに！』

「負けたくないなら己を磨け！ 負けたくとしても、その敗北を糧にして何度でも立ち上がれ！ 師匠の言葉だ！」

『く、クソがああああッ！』

爆散して宇宙に火花を上げるブルーデイスティニー3号機を一瞥して、俺はそう叫ぶ。

負けたくねえって気持ちはわかる。俺だってそれは同じだ。

だけど、ズルして強さを手に入れたって、本当の、自分の強さまで

もいべきものは身につかない。

それはあいつもわかつてることなんだろう。

だとしても、負けて、負けて……嫌気が差しちまったら、ああなつてたのは俺かもしれないと考えれば、他人事じゃいられない。

楽をして勝ちたいと欲望を剥き出しにするやつがいる。一方で、泣きながらブレイクデカールという偽りの希望に縋りつくやつがいる。

そのどっちも、犠牲者といえば犠牲者なんだろう。楽して勝ちたいってのは言語道断だけど、それでも、悪いのはブレイクデカールをばら撒いている黒幕だ。

一体、誰がなんでそんなことをしてるのかはわからない。

だけど、楽しみをやつかむように、幸せを踏みにじるようにこのGNを破壊しようとしているのは確かなことだ。

それも他人を利用してだ。自分の目的のために、他人の弱みにつけ込んで、まるで物のように扱うやつを、許してなんかおけるものか。

「ジエニ！ 一気に畳み掛けるぜ！」

「わかった、ユウヤ」

怒りと共に操縦桿を握りしめて叫ぶ。

そして、眼前に現れたデストロイガンダムの巨体に、俺とジエニは、拳を合わせる形で共に突っ込んでいく。

『次元霸王流！ 蒼天紅蓮拳！』

『う、うおおおっ!? 俺のフルスクラッチデストロイガンダムが……ッ……！』

「……そんだけすげーもの作れんのに、ブレイクデカールなんかに手を染めやがって……」

「……心の弱さ。人は容易く無明に墮ちる。だから、ユウヤ。貴方が気にする必要はない」

俺が苦々しく吐き捨てた言葉に、気にするなとばかりにジエニがそう返す。

ドライに聞こえるけど、誰かの都合を際限なく背負っていたら潰れてしまうのもまた確かなことで、そして、どんな事情があつたとしても、このGNにバグを生み出しているブレイクデカールを使つたと

いう事実が許されることはない。

だから気にするなど、他人の分まで痛みを背負う必要はないと、ジエニはそう言ってくれたのだろう。

「……ありがとうな、ジエニ」

「気にする必要はない、ユウヤ」

ぶつきらぼうで不器用な優しさに感謝しながら、俺はストライクス
フィーダで戦場を駆け抜ける。

今のところ、マフユのG―エクリプティカの姿は敵陣に見受けられ
ない。

増援として資源衛星の中に潜んでいるのか、それとも単純にここ
には集まらなかったのか。

どつちにしても、焦燥は加速して、ちりちりと神経を焦がすような
感覚が脊髄を駆け抜けて全身に広がっていく。どこだ、どこにいる
んだ、マフユ。

『おいおい……たったこれだけの戦力に戦線を捲られるたあ使えねえ
やつらだな……!』

「ユウヤ、危ない!」

「くっ、ビームシールドで!」

考え込んで一瞬でも気を緩めてしまったせいか、ブレイクデカール
によって強化されたビームが一瞬の隙を狙って放たれる。

危なかった。チナツが警告してくれなきゃ、ビームシールドの展開
が間に合わなくてお陀仏だっただろうからな。

改めてビームが飛来した方向に向き直れば、そこにいたのは、アル
ヴァトーレの中に埋まっている、金色のガンダム・グシオンという、ど
ことなく悪趣味な機体だった。

金ピカは金ピカでも、あの「ゴールデン・ドリームズ」にいたハイ
ペリオンの人とは全く違う。

ただシナジーも考えず、自分の力を誇示するためだけに作られた
器。トワさんの言葉を借りるなら、あれは「愛がない」ガンプラだ。

「まずいわね、この大型……ヤタノカガミ加工とGNフィールド持
ちつてことは、この前のハイペリオンと戦術は同じ……!」

『そのハイペリオンってやつがなんなのかは知らねえがな、お前らはやりすぎた……ここで消えとけや!』

「だったら、リユミエール・ザンバーでGNフィールドの上から……!」

俺が腰のリユミエール・ザンバーに手をかけて突撃をかけようとした、その時だった。

「その声はモチダか……!　　ようやく見つけたぞ!」

『ククツ……おいおい社長さんよお、ゲームでリアルネームをバラすのはマナー違反ってやつじゃねえか?　　ここでの俺は「グルヌイユ」様よ……!』

グルヌイユとかいうやつが操っているあの金ピカグシオンの上を取る形で、遊撃隊に合流していたらしいアトミラールさんと、随伴していた「GHC」の航空隊が急降下攻撃を放つ。

GNフィールドを展開されたことでメガ・ビーム・キャノンや対艦ミサイルは防がれてしまったものの、その爆風を目眩しにする形でアトミラールさんたちは再び体勢を立て直した。

「貴様の名前など知ったことか……!　　ユウヤ君!　　ここは我々に任せてほしい!　　奴は……!」

「ワケあり、ってやつですね!　　わかりました……!　　けど、手伝いはさせてもらいます!」

『フヘヘヘヘ!　　何をしようと無駄だア!』

グルヌイユの放つビームを曲芸飛行じみたマニューバで回避しながら、「GHC」の航空隊は鉄壁に覆われた金ピカグシオンを破壊しようとして試みる。

そして、あのグルヌイユが航空隊に狙いをつけた隙を見計らって、俺は大上段に構えたりユミエール・ザンバーで、金ピカグシオンのGNフィールドを一息に斬り裂いた。

『な、なんだ!?　　GNフィールドが!?　　貴様……何をしやがった!?』

「答えてやる義理はない!　　行くぜチナツ、ジエニ!」

「了解よ、ユウヤ!」

「わかった」

これだけのダメージを与えれば、いくら再生能力を持っていたとしても、大きな隙ができる。

助太刀はここまでにして、俺たちは再びマフユを探して最前線を飛び回った。

世話になった義理を果たした以上、あとの因縁はアトミラルさんたちのものだ。俺たちが踏み込んでいいところじゃない。

「あーもう、四方八方からちよこまかと！」

「チナツ、冷静さを欠かないで。数ばかり多いだけ。コックピットを潰せば戦える」

「言われなくてもわかってるわよ！」

ハイパージャマーを発動した瞬間を狙って放たれたチナツの狙撃が、ジェニに言われた通り、ガンダムデスサイズヘルのコックピットを正確に撃ち抜いて爆散させる。

ジェニもまた、ゴッドガンダムのガントレットを展開した貫手で、マスダイバーが操る、ティターンズカラーのシャイニングガンダムを撃墜していた。

今のところ、戦いそのものは順調に進んでいる。問題はマフユと、マフユのことを知っているのであろう「シャドウロール」が現れていないことだ。

こればかりは流石に運を天に任せるしかないかと、歯を食いしばってマスダイバーのアビスガンダムを撃破した刹那、爆風を裂いて「何か」が急速に迫ってくる。

「この攻撃……！」

『……外したか』

宇宙の闇から溶け出るようにして現れたのは、今度こそ「シャドウロール」の機体である、黒いペルフェクティブリティだった。

攻撃を外したと見るや否や、伸ばしていたガンダリウム合金製の棍を元に戻すと、鮮血のような色合いをしたサイコフレームを展開、デストロイモードへと移行する。

なんだか知らねーけど、渡りに船だ。探してた相手が自分から飛び込んできてくれたんだからな。

「行くぜスファイダー……！ イクシードチャージ始動！ バーニングバースト、出力百六十パーセントだ！」

こうなれば、出し惜しみはなしだ。

俺はバーニングバーストの出力を引き上げて、アームドアーマーVを振り上げてクロスレンジに飛び込んできた「シャドウロール」にアッパーカットを叩き込む。

例えばダメージが減衰していたとしても、メインカメラを揺らされれば、ダイバーの視界もその分揺れ動く。

ちよつとばかりしダーティな手段だけど、使えるもんは全部使うと決めてる。

マフユを取り戻すために、謝るために、そしてもう一度笑い合うために。

目が眩んだのか、一瞬の隙を見せた黒いペルフエクティビリティに、俺はスファイダーに出せる全力を叩き込む。

「次元霸王流！ 聖拳突きいッー！」

『くっ……！』

コックピットを狙った一撃を、サイコ・フィールドで弾いた辺り、「シャドウロール」の腕前もガンプラの出来も、やっぱりそこらのダイバーとは一線を画している。

あいつがブレイクデカールをマフユに広めた理由はわからない。

だから、拳で聞くだけだ。

ボクシングの構えに切り替えた俺は、デンプシーロールで赤黒いオーラを纏う黒いペルフエクティビリティに、息をつかせる暇もなく殴打を加えていく。

「ワン・ツー！」

『……調子に乗るな……！』

デンプシーロールをサイコ・フィールドで完全に防ぐと、その力場を反発に転用する形で、「シャドウロール」は俺とストライクスファイダーを弾き飛ばした。

『なぜ姿を表す……なぜ弱いやつがここまで吠える……！ お前たちの絆は、引き裂いたはずなのに……！』

「悪りーけどな……ブレイクデカールを使ったことなんかで、俺はマフユを見捨てたりなんかしない！ マフユが罪を背負うってんなら、俺も一緒にそれを背負う！」

『世迷言を、綺麗事を……！ 力もないお前たちが、私の前でキャンキャンと吠えるな……！ 頭に……響くんだよ！』

体勢を立て直した黒いペルフエクティビリティが、ガンダリウム合金製の多節棍を伸ばして、鞭のようになぎ払う。

身を屈めてその一撃を回避した俺は、ブレードドラグーンを射出して「シヤドウロール」を牽制した。

あの時は全く見えなかったけど、ストライクスファイターと一体になっているような今なら、リアルタイムで、ラグなく多節棍の動きが見える。

真なるアシムレイトの反動で、細かく刻まれたダメージがフィードバックされて全身を蝕む。

それでも俺はアシムレイトを解かずに、歯を食いしばって「シヤドウロール」に拳を叩き込む。

「なんでそこまで力のないやつを憎む！ なんでそこまで、力だけに縋ってる！ さあ、聞かせるよ……お前の思いを！」

『……調子に乗るなアアアッ！』

「次元霸王流！ 聖拳突き！」

激昂する黒いペルフエクティビリティが、アームドアーマーVNを収納状態にして殴りかかってきたのを見切って、俺はクロスカウンターとして聖拳突きを叩き込む。

ブレイクデカールによって強化されたその拳からは、腕の骨が砕けそうになるほどの衝撃が伝わってくる。

だけど、おかげであいつが考えていることが、あのガンプラに込めた思いがわかった。あいつは、「シヤドウロール」は。

「お前……悲しんでるのか」

『なにを……！』

「本当はもっと笑ってえんだろ、心の底から笑顔になりてえんだろ！ だったら……このGBNはお前の願いだつて受け入れてくれるん

だ！ それを壊そうとするのが間違いだって、わかるんだよ！」

『……ずけずけと人の心に踏み入って、勝手なことをほざくなあツ!!』
伝わってくる。

黒いペルフェクティビリティの無軌道な攻撃は、自分の力を誇示することで相手の心をへし折るような戦い方は、自分に構ってほしいと、自分を認めてほしいという駄々っ子のような切望だ。

本当は「シヤドウロール」だって、友達と一緒にガン普拉バトルがしたいのかもしれない。だけど、なにかがあったから、誰かの幸せを奪うことでしか幸せを感じられないのだろう。

そこまで歪んでしまった理由があいつの外にあるのだとしたら、「シヤドウロール」だってブレイクデカールを巡る事件の被害者だといえる。

もちろん、マフユにブレイクデカールを渡したことは許せない。だけど、あいつだけが悪いわけじゃないってんなら、本当に、心から笑いてえんだったら、俺がこの拳で教えてやる。

ガン普拉バトルの楽しさを、そして、心から笑うための仲間が、ライバルが、超えるべき壁があることを。そのかけがえのなさを。

Ep. 57 「黒き闇を祓って」

『なにが悲しんでいるだ……お前になにがわかる！　ぬくぬくと、愛されて育ったお前たちなどに！　私のなにがわかるというんだあッ！』

ガンダリウム合金製の多節棍を振り回しながら、激昂した「シャドウロール」が咆哮する。

愛されて育った。それは、思わずあいつの口について出てきた言葉だったのだろう。

愛に飢えているからこそ愛を嗜い、楽しみに飢えているからこそ楽しみを嗜う。

他人から奪い取ることでは、嘲笑うことでは、幸せを感じる事ができないのが、あいつの育った環境のせいだというなら、そして今も苦しんでいるというなら、それは呪いだ。

確かに俺は「シャドウロール」のことをなにも知らない。

わかるのは、拳をぶつけ合って伝わってきた悲しみだけだ。助けてほしいと、心から楽しみたいと、心から笑いたいと願っているあいつの心が悲鳴を上げていることだけだ。

だとしても、理由なんてそれで十分だろう。

多節棍を振った隙を狙って、黒いペルフェクティブリティの左腕を、その手首を蹴り上げる。

あれだけ重いものを振り回してるんだから、本来なら関節にくる負担も相当なものだ。それを狙って、俺は「シャドウロール」から厄介な多節棍を引き剥がしていた。

「ああ、俺はお前のことを何も知らない！　だから、もつと聞かせてくれよ……その拳で！」

『ほごくなあッ！』

展開状態になったアームドアーマーVNを振りかざして、「シャドウロール」はストライクスフィーダを引き裂こうと試みる。

だけど、その攻撃は大振りすぎだぜ。

当て身の要領で、リンファと戦ったときの記憶を頼りに見様見真似

の鉄山靠を見舞えば、黒いペルフェクティビリティは体勢を大きく崩して、錐揉み回転で宙を舞う。

『ふざけるな……ふざけるなあッ！ 私は、私は弱くない……この力でお前たちを潰して、GBNを潰して、それでようやく笑えるんだ！』
「いいや、違うね！ 俺たちを潰したって、GBNを壊したって、お前の渴きは満たされない！」

『知ったような口を聞くな！』

黒いペルフェクティビリティは咆哮と共にその背中からアームドアーマーDEを分離させて、オールレンジ攻撃を仕掛けてくる。

その制御は恐らくオートになっているのだろう。円運動を描いているんだから間違いない。

でも、死角からメガキャノンをぶっ放し、時にはアームドアーマーDEそのものが質量弾として飛んでくるんだから厄介なものには変わりなかった。

そして、多節棍を取り戻した本体が、俺とストライクスフィードを粉々にしようと大きくそれを振りかぶった。

だけどそれも、今の俺には見えている。

ストライクスフィードの視界が、真なるアシムレイトを通じてダイレクトに感じられている今、そして限界を超えたバーニングバーストを発動している今、どれだけ攻撃が速かろうと、どれだけ威力があろうと、受け流すべきところは、手に取るようにわかっていた。

「嘖ッ……！」

『チッ……受け流したか……！』

パリイと化勁の応用だ。

ガンダリウムの棍による一撃を、衝撃を殺しながら弾き飛ばすことで、被害を最小限に抑える。

それでも腕が痺れるような痛みが伝わってくる辺り、あの棍の威力は油断ならない。ブレイクデカールで強化されてるんだから尚更だ。

「いいか、『シャドウロール』！ お前の渴きを満たすにはな、GBNをぶっ壊しちやいけねえんだよ！」

『戯れ言を……！』

「GBNは……色んなやつを受け入れてくれる世界なんだ！ 武道にしか興味がなかった俺だって、この世界で仲間と一緒に遊んで、戦って！ そうする内に、ガンプラバトルだけじゃなく、この世界そのものが好きになってたんだ！」

思い出すのはいくつもの出会い。マギーさんに助けてもらったことや、ジョーさんとトッドさんと拳を交えたこと、そしてチナツと喧嘩したこと、フェスで皆と楽しんだこと。

ペリシアではトワさんに出会って、ガンプラへの「愛」を知った。メガ粒子杯では、立ちはだかる強敵たちと拳を交えたことで、コドウとの友情が生まれて、カールには色々とききさせられて、リンファとはプライドをかけて全力でぶつかり合って、俺にとつての「強さ」を知った。ジェニとは、スミとは過去の因縁を清算するために戦って、「痛み」を知った。

そしてきつと、落ちてきたマフユを助けたところから、俺の旅路は始まったんだと思う。

皆に支えられて、俺はここにいる。

それはきつと、俺だけじゃない。チャンピオンのキヨウヤさんがフォースを組んでいるように、ロンメルさんが、アトミラールさんが戦略や戦術を探究するように、誰もが誰かに支えられて、誰かを支えて、この世界は、GBNは成り立っているんだ。

「だから、お前の悲しみを癒すのは壊すことじゃねえ！ この世界を……人の善意を受け入れるんだ！ 悪意だけに吞まれて、誰かを嘲笑っていたって、幸せになんかなれるもんかよ！」

『ふざけるな……ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなアツ！ 親に愛されて育ったお前になにがわかる！ 実の娘を悪事の手駒にするような親を持ったこともないお前が、欲しかったクリスマスプレゼントなんて一度も貰えたことがなかった、適当なものを体裁のためだけに押し付けられた私の苦しみを！ 私の……私の悲しみを、理解なんてできるものかアツ!!』

「だったら！ 伝えてくれよ！」

振り回されるガンダリウム合金製の多節棍を打ち払いながら、俺は

「シャドウロール」に、そのあだ名に、その影に覆い隠された女の子の、本当の名前に向けて呼びかける。

力になれるかどうかなんてわからない。無責任だと言われたって構わない。

だけど、話を聞いてやることぐらいは、少しでもその痛みと悲しみを肩代わりしてやることは、俺にだってできるんだ。

「お前の痛みを、お前の悲しみを、お前の苦しみを！　この世界は、GNは受け止めてくれるところなんだよ！」

『それがどうした！　今更喋ったところで私の過去が消えるものか！　私の取りこぼした幸せが……私が奪われた幸せが……戻ってなんかくるものかあああつ!!』

あいつが、「シャドウロール」が振り上げたアームドアーマーマーVNの一撃が、その悲しみを乗せてストライクスファイダーへと振り下ろされる。

だけど今度は、避けなかった。

ストライクスファイダーの左腕が引き裂かれ、胴体にも深々とその爪痕が刻まれて、俺自身もまた、身を振りたくなくなるような痛みに苛まれる。

『何故避けない！　馬鹿にしているのか!?!』

「逃げねえって決めたんだ……お前がそこまで苦しんでるなら、お前がそこまで悲しんでるなら、俺はその悲しみと拳で向き合う！」

『知ったような口を聞くなあああツ!』

叫びと共に薙ぎ払われた多節棍の一撃を、俺は残った右手に出力を集中させることで受け止めていた。

コックピットには既にイエローコーションが明滅していて、これ以上戦えば危険だと、どこそこが不全を起こしているという通知がコンソールに明滅している。

それでも、言った通りだ。俺はもう「シャドウロール」の悲しみと苦しみから逃げたりなんかしない。

その全てを受け止めて、その上で、この拳で伝えるべき全てを伝えるために。

内部出力が、イクシードチャージによる排熱限界を超えて高まっていく。

百六十パーセントから百八十パーセントへ、そして俺が仰ぎ見た、赫く輝く太陽のように、二百パーセントへとその出力は到達する。

「……そうだな、過ぎちまった幸せは……お前が取りこぼしちまったもんは、戻ってこねえ」

パルマ・フィオキーナの光と限界を超えたバーニングバーストによる炎を纏った拳が、ガンダリウム合金製の多節棍をぐしゃり、と握り潰す。

全身の骨が軋むような、内側から身体を灼かれているような感覚が、ストライクスフィードから伝わってくる。

この熱さが、この痛みがお前の抱えているものだとしたら、紛れもなく今の俺はお前だ。今のお前は俺だ。

アシムレイトの限界点、ガンプラとの完全な同調と、二百パーセントまで引き上げられたバーニングバーストの力は、俺自身も想像していなかったほどに強烈で、今も内部フレームが軋みを上げている。

だとしても今はその痛みすら愛おしい。

ストライクスフィードの怒りが、そしてストライクスフィードの悲しみが、アシムレイトを通して伝わってくる。あの「シャドウロール」の闇を払えと心に囁く。

「だけどな！ 今お前がGBNを破壊すれば、これから手に入る幸せを壊すことになるんだ！ 過去はどうしようもねえ、変えることなんてできねえ！ だったら……変えられる未来に目を向ける！ お前が痛くて、つらくて、苦しいんなら、俺がそれを背負ってやる！ お前の思いの捌け口になってやる！ だから！」

『だから、なんだ！ 未来の幸せだと……!? 私は……私が欲しかったものは……っ……!』

「拳を交えればダチになれる！ 確かにお前がマフユにブレイクデカールを渡したことは許せねえ……だからこの戦いで、この拳でおあいこだ！ そつから先のごときはその時に決めりゃいい！」

誕生日プレゼントだろうがクリスマスプレゼントだろうがなんだ

ろうが、ダチになったら贈ってやる。

あいつがそれを望むんなら、俺がダチになってやる。

全部が全部許せるわけじゃないとしたって、それでもおあいこにすることぐらいはできるはずだ。

あいつは、「シャドウロール」はマフユにブレイクデカールを渡した。俺は「シャドウロール」の過去を知らなかった。

だったらあいつの過去を知った今、未来に向けて歩き出すことだってできるはずだ。

許せないことがあつたって、それを呑み込んで、壊すんじゃないって作る未来だって、手を取り合う未来だって選べるはずだろう。

『私は……私は、ただっ……っ！』

本当は、適当なビジネス書なんかじゃなくて大きなクマのぬいぐるみが欲しかった。

本当は、いつも同じことが書かれているクリスマスカードじゃなくて、その年ごとに成長した自分に向けた言葉が欲しかった。

本当は、殴るんじゃないくて頭を優しく撫でてほしかった。

慟哭する「シャドウロール」は、涙を零しながら、アームドアーマーVNを収納状態にして殴りかかってくる。

この悲しみと苦しみを止めてみせると、できるのなら解き放つてみせるとばかりに慚愧と慟哭を拳に乗せて、真っ直ぐぶつけてきたのだ。

だったら俺も、真正面から応えるしかねえよな。

オートで攻撃を命じられているアームドアーマーDEが放ったメガキャノンが右足を破壊するのも厭わずに、俺は拳を構えてブレードドラグーンをパージする。

機体の中で行き場をなくしていた余剰出力が揺らぐ炎の形になって、ブレードドラグーンをマウントしていたところから、さながら翼のように焰を噴き出す。

それはさながらファントムライトのように、もう一基のアームドアーマーDEが撃ち放ったメガキャノンを弾き飛ばし、撃ち落としていた。

「次元霸王流！ 聖拳突きいッ！」

『私は……私はあああッ!!』

二百パーセントのバーニングバーストが噴き出す炎、そしてパルマ・ファイオキーナの光を纏った拳が、ブレイクデカールで強化されたサイコ・フィールドを纏うアームドアーマーDEとぶつかり合い、激しい火花を散らす。

右腕のフレームが軋む音が聞こえる。

ストライクスファイダが感じる痛みが、右腕を駆け抜けていく。だ
けど。

「負けねえ……負けるわけにはいかねえ！ ここでお前の悲しみを払うためにも！ マフユを助け出すためにも、俺は負けられねえんだ！ ストライクスファイダ！ 連れて行ってくれ！ 俺の魂を！ ストライク焔の魂を！ そして、『シャドウロール』の哀しみを！」

『……ッ……い！』

「弱くたって……力がなくなっても……人は助け合って生きられるんだ！ 例えどれだけ綺麗事だと言われたって構わねえ！ 俺は選ぶだ！ 壊すんじゃないじゃなくて作り上げる未来を！ だから……お前の悲しみはここに全部置いていけ、『シャドウロール』！ ストライクスファイダが、俺の拳が、全部受け止める！」

あいつがどれだけ苦しかったことか。

あいつがどれだけつらかったことか。

あいつじゃない俺には、その全部を理解してやることは難しいのかもしれない。

だとしても、たった一欠片だけでいい。

もう二度と、あいつが誰かを嗤って生きなくていいように、あいつが誰かの幸せを踏みにじって生きていかなくていいように、悲しみを俺もぶつけられる形で背負う。

だから、応えてくれ。ストライクスファイダ。俺の、俺たちの魂を乗せたガンプラなら、ガンダムなら、あいつの心に巢食う闇を、呪いを討ち祓ってくれ！

『私……は……』

「お前は……もう『シャドウロール』じゃなくていいんだ！ 生きろ！ 生きるんだ！ 痛みと苦しみを誰よりも知ってるなら、きつと誰より優しくなれる！ その殻を……脱ぎ捨てるんだ！」

アームドアーマーVNが砕け、そこから黒いペルフェクティビリティがひび割れていく。

鮮血のような色をしていたサイコフレームが、安らぎを感じさせる青緑へと変わって、ブレイクデカールが放つどす黒いオーラは、「シャドウロール」がその役目から解き放たれたかのように宇宙へと溶ける。

ストライクスフィードの拳がやがて、黒いペルフェクティビリティの右腕を完全に打ち砕くと同時に生まれたクラックが広がって、出力に耐えられなくなった機体は崩れるように自壊していった。

「最後に、聞かせてくれよ……『シャドウロール』じゃない、お前の名前を」

『……私は……私は、ミリア……お母さんにもらった、たいせつな、なまえ……っ……』

「ミリア……お前は確かにいろんな人の大事なものをぶっ壊しちゃったかもしれないねえ……だけど、ここからやり直すってんなら、俺は……少なくとも俺だけはお前を許す。さつきも言ったけど、この拳で今までのことは全部おあいこだ」

正直に言ってしまうば、「シャドウロール」のことを、ミリアのことを憎む気持ちがないかと訊かれて首を横に振るなら、それは嘘になる。

だとしても、ここで俺があいつを許さなければ、何も始まることはない。

憎しみ合い、妬み合い……誰かを傷つけ合うことは簡単だ。だけどそうせずに、どこかで引き金を引かない未来を誰かが選ばなければ、悲しみは終わらないんだ。

だからここで、俺が終わらせる。

ミリアの哀しみを。あいつが本当に欲しかったものの重さを、「愛」の重さを受け止めて、前に進んでいく。

きつとそれが、俺にできる精一杯だから。

『ユウヤ……私は……貴方が、羨ましかった……貴方たちが……羨ましくて、仕方なかった……』

「ああ……」

『ごめんなさい……ごめんなさい、私……っ……私は……っ……』

ただ、愛してほしかっただけなのに。

ミリアはそう呟いてはらはらと涙を零す。

愛されないことの悲しみ。愛してほしいと願うが故に生まれてくる憎しみ。俺には、全部は理解できないけれど。

だったらその全てを、ここに置いていけばいい。これで全部だ。これで最後だ。

もう誰も傷つけるな。もう誰も嗤うな。

俺が願うのは、ただそれだけだ。

『……マフユは資源衛星に増援として控えてる』

「ミリア……」

『これが私にできる精一杯の償い……ごめんなさい、ユウヤ……ごめんなさい、皆……』

「……ありがとうな、ミリア。もし……この世界がぶっ壊れなかったら、その時はまたガンプラバトル、やろうぜ」

『ユウヤ……』

「きつと、GBNの皆がお前のことを受け入れてくれるとは限らない。だけど、きつきも言ったけど……少なくともここに一人は許すやつがいるんだ。今度はブレイクデカル抜きで……全力でぶつかり合おうぜ、ミリア」

その方が、きつと楽しいからな。

涙と共にブロックノイズとなつて、黒いペルフェクティビリティは、「シャドウロール」はその役割を終えたかのように解けていく。

きつと、ミリアなら変わるさ。根拠はないけど、今はただそう信じたい。

そして、あいつが教えてくれたことが本当なら、マフユは恐らく次の増援として現れるのだろう。

マスダイバーたちの対処に当たっていたチナツとジエニが戻ってきたのを確認して、俺は操縦桿をきつく握りしめる。

ここからが、俺の戦いだ。そして、俺に残された課題を、精算する時が来たのだ。

資源衛星から増援として現れた機影を見据えて、俺は静かに固唾を呑み込んだ。

その中に、マフユのGーエクリプティカの姿があることを認めて。

Ep. 58 「マフユの涙」

「マスダイバー機、第三波出現！　ですが、数はそれほど多くありません！」

「ここで在庫切れと見るか温存していた精銳を出してきたと見るか……各機、聞こえたな！　アトミラールに代わって私が宣言しよう！　ここが作戦の正念場だ！　奮起せよ、奮励せよ！　突入部隊が戻るまで、なんとしてもこの戦線を死守するのだ！」

アリカさんからの報告を受けたロンメルさんが、オープンチャンネルで檄を飛ばす。

こつちで確認した限りでは、資源衛星の中から先陣を切って出てきたのはサイコガンダム、シャンプロ、ガンダムAGE-1タイタスと、そして。

マフユの、G-エクリプティカだ。

ある意味では、ここが俺たちにとつての正念場なのだろう。

マフユを取り戻せるか取り戻せないかは、全て俺たちの手にかかっている。

恐らくはあのタイタスが元締めなのか、それに続く形で後続のマスダイバーがぞろぞろと現れてくるのを一瞥して、俺は操縦桿を強く握りしめた。

ストライクスファイダの右足は欠損、左腕も脱落し、胴体にも深刻なダメージを負っている。

こんな状態でまともにマスダイバーと戦えるのかどうかはわからないけど、スファイダも俺も、今は二百パーセントだ。

それに、俺たちにとつての勝利条件はマフユを取り戻すことと、突入部隊が戻ってくるまで戦線を死守することであって、敵の殲滅じゃない。

だったら、やってやれないことはないはずだ。

俺がストライクスファイダのスラスターに点火し、マフユが待っている資源衛星付近……最前線も最前線に突撃しようとしたその時、チナツが制止するかのようにロングビームライフルの銃身を割り込ま

せてくる。

一体、なんの意図があつて。いや、違う。本当はもう、俺はわかつていたはずなんだ。

「……行く前に一つだけ訊かせて、ユウヤ」

「ああ、チナツ」

「アンタはどうしてマフユを助けたいの？ 仲間だから？ 友達だから？ 違うわよね。アタシたちのことはいいい。アンタだけの理由を、聞かせて」

悲壮な覚悟が灯った瞳で、チナツは通信ウィンドウ越しにそう呼びかけてくる。

マフユを助けたい理由。それはあいつが言ったように、仲間だから、友達だからつていうのもまた確かなことだ。

だけどそれは、ジェニが言っていたように、「俺」の言葉じゃない。あくまでも「俺たち」の言葉だ。

それじゃ通じないのなら、届かないのなら、俺という個人がどうしてもマフユを助けたいのか、ブレイクデカールの呪縛から解き放つてやりたいのか、それを考えなくちゃいけない。

いや、もう違う。考えなくちゃ、じゃないな。

答えは、とつくに決まっていた。理由は、とつくにわかっていた。俺がただ、そこから目を背けていたというだけの話で。

「この先のことを、女の子に言わせるつもり？」

チナツは今にも泣きそうになりながら、唇を噛んで微笑む。

何かを選ぶというのは、何かを選ばないということだ。

いつだって選択には犠牲が伴って、全部を掌に収めようとしたつて指の隙間を通り抜けて、零れ落ちていく。

「……ごめん、チナツ。ジェニ」

「……」

「俺がマフユを助けたいのは……マフユのことが好きだからだ。ああ、そうだ。俺は……マフユのことが好きだから、また一緒にいたいから、取り戻したいんだ！」

チナツはずっと俺に好意を寄せてくれていたのだろう。

ジエニは無感情に見えるけど、それでも「結婚」という言葉を持ち出してきた辺り、自惚れじやなきや、俺という人間にそれだけの価値を見出してくれていたのだろう。

「ただ俺は、そんな二人を選ばなかった。」

「選べなかつたんじやない。俺自身の意思で、俺自身の選択として、チナツとジエニの好意には応えられないということをはっきりと口に出す。」

「もしも神様がいて、俺たちの人生を見ているのなら、この選択が一つの分かれ道になっていることを知って、俺をここまで運んできたのかもしれない。」

「ただどそれは、神様や世界のせいじやない。選んだのは俺だ。俺という人間が、人間の意思が、チナツとジエニを選ばないという道に進むことを決めたんだ。」

「……わかつたわ、ユウヤ。行きなさい！　ここはアタシとジエニが守り抜くから！」

「背中は預けてくれていい。例え伴侶になれなかつたとしても……私はユウヤが選んだ道を尊重する」

「チナツ、ジエニ……」

「ロングビームライフルを構えたウイニングロードアストレイと、拳を構えたプライドマスターが背中合わせになって、襲いかかってくる。マスダイバーの機体を撃退する。」

「もう後ろには引き返せない。きつと全てが終わったあとも、俺たちの関係がどんな形であれ、今まで通りに戻ることはないのだろう。」

「それでも、二人は前に進むと決めた俺の背中を押してくれた。」

「……ありがとう！　俺、行ってくる！」

「マフユを泣かせるんじゃないわよ、バカユウヤ！　それと！」

「それと!？」

「……恋させてくれて、ありがとう！　アタシに夢を見させてくれて……アタシに……だから、行きなさい！　誰の理由でもない、アンタ自身の理由のために！」

「私はユウヤの決断を尊重する。だから……ここは任せて。必ず守り

通す……！」

涙を零しながらも必死に笑って、チナツが思いの丈をぶちまける。ジエニも眦に涙を一雫だけ滲ませながら、拳を構える。

俺にはもつたいたいぐらいの二人だった。

でも、俺は選んだんだ。マフユのことを。

マフユがいなければ、あの時落ちてきたマフユを助けていなければ、きつとここまでGBNにのめり込むことなんてなかった。

マフユがいてくれたから、俺はガンダムとガンプラの世界に触れて、父さんから、師匠から言われた「想像を超えた戦い」の世界に飛び込むことができた。

だから、俺は。カミキ・ユウヤという人間は、ミホシ・マフユに惚れ込んでいたのだ。

不器用でも懸命に何かをやり遂げようとするその生き方に、潤んだ大きな瞳に、そして、ガンプラへの愛に。

だから、必ず取り戻す。

操縦桿を握り締めて、俺はG―エクリプティカが待つ要塞前へと機体を加速させる。

『なんだこの機体？ 手負いだったのに馬鹿正直に突っ込んできやがる！』

『いや、よく見ろ。あいつはボーナスの対象だ！』

『メガ粒子杯の優勝者だかなんだか知らねえけどなあ、のこのこ出てきたのが運の尽きだったな！』

当然のように、中破状態のストライクスファイダーを狙って、マスダイバーたちは攻撃を仕掛けてきた。

「ぐう……っ……い！」

二百パーセントのバーニングバーストが噴き出している炎の翼、衣のおかげである程度は弾き返しているけど、それでもブレイクテクニカルで強化された攻撃は強烈だ。

だけど、こんなところで立ち止まるわけにはいかない。

そうだ、こんなところでやられるわけにはいかない。だから力を貸してくれ、ストライクスファイダー。これが最後になったとしても。

「ユウヤは……やらせないって言ったでしようがあああッ！」

「チナツ……！」

「次元霸王流……流星螺旋拳！」

「ジエニー！」

立ち向かう覚悟で臨んでいたところに、光の翼を広げたチナツのウイニングロードアストレイが割り込んでくる。

そして、紫炎を纏ったジエニーのプライドマスターも同じだ。

俺を狙ったマスダイバーのガンプラを一刀両断し、あるいはコックピットを抉り抜き、マスダイバーからの苛烈な攻撃を受けながらも、二人は反撃の手を緩めない。

「やっと追いついたよ、少年……そうか、君は行くのか……ならば未来への水先案内人はこのトワさんが務めさせていただくでしょう！」

ダブルオートワクアンタフルセイバー……ここが最後の一仕事だ！」

「トワさん！」

「振り返るな、少年！ 君が決めたことなら……前に進むんだ！ トワさんには手伝うことしかできないが……その思いは君のものだろう！」

上空から奇襲をかけようとしていたギャプランとアツシマーとゼータプラスをGNソードIVフルセイバーで一刀両断すると、トワさんもまた、俺に群がってくるマスダイバーを排除しようと、損傷していた機体を加速させる。

ありがてえ。ただ、ただ、それしか言葉が見つからない。

これからやろうとしていることは、言ってしまうえば俺の身勝手なのに、自己満足に過ぎないのかもしれないのに、こんなに付き合ってくれる人がいる。

これが縁のもたらす力なら、俺は。

この世界に来てよかった。GBNに来てよかった。胸の奥にじわりとあたたかく滲む熱を握り締めるように、俺は心臓に手を当てる。これだけの絆に恵まれたんだ、俺は。そきてそれは、マフユだって同じはずだ。

「だから、取り戻す……！ 行くぞ、ストライクスファイダー！」

『なんだか知らねえが無防備でボーナスがうろついてやがるとはなあ……ラッキーだぜ!』

「タイタスか!」

ドツズライフルを二丁構えたAGEー1タイタスが、狙いもつけずにそれを連射しながら俺に向かってくる。

当たりはしなかったけど、掠めただけで二百パーセントのバーニングバーストが放つ炎が削り取られた辺り、あいつのブレイクデカールは多分だけど、攻撃力を異常強化するものなのかもしれない。

マフユがいるところまであと少しだったのに、厄介な相手だ。

チナツも、ジエニも、トワさんもマスダイバーの猛攻を受けている今、支援は期待できない。

だったら俺が戦う他にないと、拳を固めて殴り合う構えを見せると同時に、タイタスの両腕が肥大化して、パワードレッドの如くアンバランスなものに変わっていく。

だけど、質量そのものが増えたわけじゃないらしい。それを示すように、タイタスは肥大化した巨腕を軽々と振り回していた。

「ぐあああつ!」

『へへへ……ちよろいもんだぜ、この程度の相手を殺るだけでボーナスが入るんだ、だから大人しく俺の懐の肥やしになりな!』

「この野郎……! やられっぱなしでいられるか、次元霸王流……!」

「俺のこの掌が光を放つ! 平和を守れと、ウルトラ叫ぶ! 必殺!

アルファ、フィンガあああツ!」

『な、なんだあツ!?!』

両腕を肥大化させたタイタスが俺にビームリアットをかまそうとした瞬間を見計らっていたかのように、傷つき、中破状態になっていたコドウのリバースブリザードが割り込んでくる。

アルファフィンガとかいうらしい、メガ粒子杯では見られなかった必殺技は、タイタスが広げた左腕を真っ向から貫通していく。

「立ち止まるんじゃない、ユウヤ!」

「コドウ!」

「言ったら……俺と戦うまで負けんなって! 何かを失ったってんな

ら取り戻せ！ 俺の目を覚まさせてくれたあいつのように！ そしてあの日、燻っていた俺に好敵手をくれたお前の拳で！ ゼスティウム！ エンドオツ！」

『な、なんだこのめちゃくちゃな攻撃はあ!?!』

アルファフィンガーによって内部に注ぎ込まれたのであろう凍結エネルギーが溢れ出して、タイタスの左腕から両肩が凍りつき、爆散する。

だけどそれは、強化型ブレイクデカール力で即座に再生してしまう。

それでも、俺がタイタスから距離を離すだけの時間を、コドウは命がけて稼いでくれたのだ。

だったら、それを無駄にするわけにはいかない。マスダイバーからの攻撃を回避しながら、時には二百パーセントのバーニングバーストを頼りに強引に突っ込みながら、俺はマフユの元へと一目散に駆け抜けていく。

そうして俺がG―エクリプティカをリーダーと肉眼で捉えたということは、相手も、マフユもストライクスファイダーのことを認識しているってことだ。

拒絶するように、ブレイクデカールによって強化されている、紫色の光を纏ったビームキャノンの一撃が襲い来る。

「マフユ！」

呼び掛けても、通信チャンネルは閉ざされたままだ。

だったら仕方ない。俺は回線をオープンチャンネルに切り替えて、マフユの攻撃をいなしながら、声をかけ続ける。

「聞いてくれ、マフユ！ 俺は……お前の痛みに気付いてやれなかった！ お前の苦しみに寄り添ってやることができなかつた！ だからまず、それを謝らせてくれ！」

『……………!』

クロスレンジまで飛び込まれたことで、ビームキャノンを放棄したマフユは、サイドアーマーからビームサーベルを取り出すと、それを振りかぶってストライクスファイダーに叩きつけようと試みていた。

だけど、大ぶりの攻撃だ。隙はある。

G―エクリプティカが、振りかぶった右腕を掴んで、俺はマフユへと呼び掛け続けた。

「マフユ！ 俺……お前に出会えたから、GBNを楽しめた」

『……ユウヤ、君……』

「お前に教えてもらった、ガンダムとガンプラのことを、大好きだった気持ち……だから……今からでもいい、戻ってきてくれ、マフユ！」

『……もう……もう、遅い、よ……私……』

接触回線が開かれたことで聞こえてくるマフユの声は涙に震え、G―エクリプティカの右腕もその悲しみに寄り添うかのように力を失っていく。

「遅くなんかねえ！ ブレイクデカールを使ったことが罪だってんなら……俺は、お前の方も罪を背負う！ この世界の誰もがお前を許してくれなくなったら、俺だけはお前の味方になる！」

『……なんで……なんで、ユウヤ君はそこまで……！ なんの才能もない、お父さんとお母さんの娘とは思えないような……ブレイクデカールに手を染めた、私なんかを……！』

「私なんか、じゃない！ 俺は……マフユがマフユだから、助けたいと思っただけ！ 苦しんでるなら、悲しんでるなら、それを少しでも分けてくれ！ お前が泣いてるなら、せめてその隣にいさせてくれ！

俺たちは……いや、違う！ 俺は……心の底からお前のことが大好きなんだ、愛してるんだ、マフユ!!!」

『……っ……！』

オープンチャンネルで呼びかけていたことで、この告白は多分有志連合にもマスダイバーにも筒抜けになっているんだろうけど、それで構わない。

俺の気持ちに偽りはない。恥じるとこなんてどこにもない。だったら、告白の一つや二つ、聞かれたところでそれがどうしたって話だ。

だから、俺は。俺は、マフユを。

『……ユウヤ、君……っ……』

「そうだ……何度だって言ってる！ 俺だけはお前の味方になる！」

俺はお前を愛してる！ だから、父親とか母親とか、罪とか罰とか、今は関係ない！ お前の気持ちを聞かせてくれ、マフユー！」

『私……わたしは……っ……』

「どんな罪でも俺だけは許す！ どんな罰でも俺は一緒に受ける！ だから！」

『……わ、私っ……わたし、は……好き……ユウヤ君が……私なんか
に、光をくれた……クラスでも一人ぼちな私なんか、優しくして
くれた……私のお話を、聴いてくれた……ユウヤ君が……好き……っ
……！』

嗚咽まじりにそう言い切ると、マフユはコックピットの中で膝から
頰れて、長い袖で顔を覆いながら嗚咽を漏らす。

きっとマフユの中には、拭えない自己嫌悪があるのだろう。偉大な
父や母と比べて見劣りした自分というコンプレックス。俺たちの中
で、バトルの腕が一段落ちていたから狙われ続けたというつらさ。

その全てをわかってやることはできない。それでも、隣に寄り添っ
てやることはできる。

『ぐすっ……でも、私は……！』

「罪とか罰とか……関係ねえって言ったろ。もしも罰を受けるんな
ら、罪を背負わなきゃいけないなら、俺も一緒だ。だから……帰って
こいよ、マフユ」

『……っ……ぐすっ……ユウヤ、くん……っ……！』

——ありがとう。

ブレイクデカールの強化効果を切ったのか、G―エクリプティカの
全身から立ち上る紫色のオーラは消失して、力なく俯く機体だけが宇
宙を漂う。

これで全部が元通りになるわけじゃない。きっとこれからもマフ
ユは罪を背負っていかなきゃいけない。きっとこれからも、後ろ指を
さされるのかもしれない。

それでも、俺はマフユの味方していると決めた。マフユの隣で、その
罪を少しでも肩代わりすることを決めた。

だから、今はそれでいい。

帰ってくる場所はここにあるんだ。例えそれが元通りのものじゃなくたって、チナツも、ジエニも。きつと笑って、お前を受け入れてくれるさ。

Ep. 59 「光る翼」

リーダーに警告音が響いたのは、泣きじやくるマフユを抱き寄せて、泣き止むのを待っていたその時だった。

邪魔すんじゃない、と言いたるところだったけど、戦いそのものはまだ続いているんだ。気を緩めていたのは俺たちだから仕方ない。

突入部隊がどうなったのかはわからないけど、資源衛星の中から飛び出してきた一機のモビルアーマーが、あのグルヌイユとかいうやつと同じように金ピカに染め上げられたビルケナウが、明らかに俺たちを狙って突撃してくる。

『どいつもこいつも使えない駒ばかりだ……「トライダイバーズ」の一員だからと引き込んでみれば情に絆され、駒として教育したはずの「シャドウロール」すらそれに流される！ 下らん！ 情や絆という言葉ほど、この世界で信用ならん言葉はないというのに女というのは御し難い！』

金色をしたビルケナウの中で恨み節を呟いているマスダイバーとは面識がない。

だけど、「教育した」という言葉がその口のから出てきたということとは、「シャドウロール」という言葉が出てきたことは、紛れもなくあのビルケナウに乗ってるやつが、ミアアを不幸に陥れ、マフユを泣かせた元凶なのだろう。

沸々と怒りが胸の奥で滾っていくのがわかる。こいつのせいでミアアは、マフユは。

「あんたか……あんたか！ ミリアに親としての愛情すら与えなかった野郎は！」

『親としての愛情だと？ 下らんことを言うものだよ、ミスター・ユウヤ。それにさっきの三文芝居……見ているこっちが悪い意味で鳥肌ものだったよ』

「俺のことはなんでも言え！ 子供を愛することすらできないなら……親をやる資格はてめえにはねえ！ ミリアがどれだけ傷ついて

いたか、どれだけ苦しんでいたのか、それすらわかろうとしないてめえが！」

『何かを勘違いしているようだがね、ミスター・ユウヤ。この世は弱肉強食だ。愛？ 情？ そんなものがなんになる。生き残れないのなら、役割を果たせないで野垂れ死ぬのならそれは娘だろうがなんだろうが自己責任なのだよ、むしろ「教育」してやってるだけ感謝してほしいね！』

「てめえ……いい度胸してやがるじゃねえか……！」

本当にこの世界が弱肉強食であったとしたなら、誰かと誰かが手を結ぶことをやめてしまったら、誰かが世界から弾き出されないように頑張っている誰かの努力はなんになる。

それを結果だけ見て嘲笑っているようなやつが、ましてや娘を相手にそんなことを言い切るようなやつが、許せるわけもねえ。

エネルギー残量は大分厳しいけど、それでもストライクスフィードは俺の怒りに応えるかのように、二百パーセントのバーニングバーストを維持して、炎を全身から滾らせている。

「行くぜストライクスフィード！ こいつはなんとしてもぶっ倒す！」

『ははは！ 無駄だ、無駄だ！ クライアントからいただいたこのビルケナウは装甲にダイヤモンドコーティングが施されている！ 生半可な攻撃など——』

「うるせえッ!!!」

『なっ……』

「だったら見せてやるよ……俺とストライクスフィードの怒りを！」

次元霸王流……流星螺旋拳ッ！」

ビルケナウの正面装甲に、俺はパルマ・フィオキーナの光とバーニングバーストの炎を纏った拳を真っ向からぶつけていく。

強化型ブレイクデカールがなんだ、ダイヤモンドコーティングがどうした。

俺の拳は真正面からそれを打ち砕く。娘を野望の道具にしたそのドス黒く燃える野心を、そして愛や絆を噛み浅はかな欲望を。

ストライクスファイダーが俺の怒りに呼応して、そのツインアイに光を灯す。

二百パーセントでも足りないのなら全部持つていけ。こいつは、こいつだけは粉々に打ち砕かねえと気が済まねえ!

限界を超え、更にその先を超えたかのように赤熱化していた全身のメタリックオレンジのパーツからも燃え上がる炎がその勢いを増す。イクシードチャージを使って尚排熱しきれないラジエーターが悲鳴を上げる。

「おおおおっ!!!」

『な、なんだ!? 押されている!? この、このビルケナウが!? なにが起きているというんだああッ!』

「ストライクスファイダー、二百五十パーセントだあああッ!!!」

『う、う、うおおおおっ!! この私が!? このレミング・ワトキンスが!? 私の計画が!? な、なぜです! なぜ助けてくれないのですか、ミスター——うわあああッ!』

二百五十パーセントまで引き上げられた出力にストライクスファイダーの全身が軋み、背中に装着していたプロミネンスブースターが内側から自壊していく。

だけど、その分の代償として威力を極限まで引き上げられた拳は、ビルケナウの正面装甲を打ち砕くどころか、内側に浸透した衝撃によってその全身を打ち砕くまでに至っていた。

砕がっていた割には安い台詞を残して爆散したビルケナウと、レミング・ワトキンスとかいうやつを横目に、俺は全ての力を使い果たしたストライクスファイダーと共に宙を漂う。

「ミリア……これで済んだとは思わねえけど、一発ぶん殴ってやったぜ」

本当ならあと百万発ぶん殴ったって足りないぐらいだけど、あの男の企みはこれで粉碎したはずだ。

資源衛星を見遣れば、先行していた突入部隊が帰還してくる様子が視界に映る。

その内訳は、キョウヤさんのAGEⅡマグナム、タイガーウルフさ

んのジーエンアルトロン、そして残りは狐耳の人のセラヴィーと、ダブルオーをベースにカスタムした機体だった。

中でなにがあったのかはわからないけど、無事に帰還してくれたってことは作戦目的は果たせただろうか。

微かな安堵に胸を撫で下ろした、刹那。

『あれは……ユウヤ君、逃げて！』

「なんだ、また新手なのか!？」

宇宙を引き裂くかのように、資源衛星を真つ二つにして、「それ」は戦場に姿を表す。

初代と呼ばれる映像作品、「機動戦士ガンダム」に登場する巨大モビルアーマー、ピグ・ザムだ。

だけどその大きさは明らかに異常な域に達していて、一体何分の一スケールなのか判断がつかないほどだった。

『チツ……どいつもこいつもまるで役に立ちやしねえ……だが、これだけのブレイクデカールが残ってりゃあ、目的自体は達せられるだろう……!』

「あいつが、ブレイクデカールの黒幕なのか……!？」

「その通りだよ、ユウヤ君」

「アトミラールさん！」

グルヌイユとかいう趣味が悪い金ピカグシオンを片付けたのか、ほとんど這々の体になりながらも、両翼をアスタロトオリジンの改造機と、リ・ガズイカスタムに護衛されたアトミラールさんが、どこか苦々しげな表情で俺の言葉を肯定する。

「すまない、皆！ 黒幕は取り逃した！ だがあのピグ・ザムには黒幕が乗っている！」

それに遅れる形で、オープンチャンネルで開かれたチャンプの、キョウヤさんの言葉が有志連合全員に通達された。

突入部隊は黒幕を取り逃したみてーだけど、あれに乗ってるってんなら話は早い。

ぶん殴つてでも洗いざらい悪行を吐かせてやれば済む話だ——そう思つて拳を構えた、刹那。

『塵芥と成り果てる!』

ビグ・ザムの胴体を一周するように配置されている小型メガ粒子砲から紫色の閃光が走ると同時に、枝分かれして有志連合の機体に襲いかかってくる。

「避けるんだ、ユウヤ君! 各機散開! 固まっていればあれの餌食になるぞ!」

「了解つす、アトミラールさん! 行くぜマフユ!」

『ま、待って、ユウヤ君……機体の、コントロールが……っ!』

さつきまではブレイクデカールによる強化を切っていたはずのG―エク립ティカが、悶え苦しむように蠢き、俺に攻撃を仕掛けてくる。

なんだ、なにがどうなってるんだ。

困惑する俺をよそに、ビグ・ザムと同じように赤黒いオーラを纏ったG―エク립ティカは、マフユの意思を無視し続けるように、ビームサーベルによる無軌道な攻撃を繰り返す。

『お願い、止まって……っ!』

「マフユ! 畜生、どうなってやがるんだ……!?!」

「恐らくはあのビグ・ザムがブレイクデカールを操っているのだろう! あれをなんとかしない限り、GBNは……! ぐっ!」

アトミラールさんはそう叫ぶ。

残存していたマスダイバーの機体も赤黒いオーラを纏うと同時に、枝分かれしたビームは宇宙空間を文字通りに切り裂いて、テクスチャに穴が空いたところから漏れ出る稲妻が、アトミラールさんの機体を打つ。

ビームローターが破損していたけど、対艦ミサイルを全て使い切っていたおかげで誘爆はしなかったようだ。護衛の二人に抱えられて、アトミラールさんは最前線を離脱していく。

『誰が泣いているだ!?! 知ったような口を聞きやがる……まあいい、奴らが閉鎖したこのサーバーをめちゃくちゃにできればそれで十分だと思っていたが……まさか強化型ブレイクデカールの影響が、メインプログラムにまで達するとはな!』

「聞こえるか、有志連合の諸君！ あのビッグ・ザムの攻撃によって発生したクラックは、GBNのメインプログラムに介入してデータを消去してしまう代物だ！ なんとしても阻止するんだ！」

キョウヤさんが慌てた様子でそう言い放つ辺り、とんでもない代物をあのビッグ・ザムはばら撒いてるってことだ。

そしてアトミラルさんの考察が確かなら、あいつはこの戦場に存在しているブレイクデカールを媒介にして、メインプログラムにバグを侵入させているのかもしれない。

閉鎖されたサーバーからどうやってメインプログラムまでバグをばら撒いてるかはわからないけど、多分、閉鎖状態を解除する形でクラッキングしているのだろう。

なんて、考えてる暇じゃねえ。

一刻も早くあいつをなんとかしないと、GBNが減びちまう。

失くさせてたまるか、失くさせてたまるもんか。マフユとの思い出があるこの世界を、マフユが帰ってくる場所を。

「各機砲狙撃戦用意！ あれだけの巨体だ、ビッグ・ザムに一斉攻撃を仕掛けることで撃滅する！」

ロンメルさんの指令が届くと同時に、有志連合側で余力が残っているダイバーが一齐に、各々の持てる最大火力を叩き込んでいく。

でも、あのビッグ・ザムは身動き一つせず、真つ二つにした資源衛星の上に陣取ったままだ。

『効かんよ。裁きの時は訪れた……さようなら。嘘っぱちの世界。偽りのエデン』

マスタイバーの親玉と思いき目つきの悪いハロがそう呟くと同時に、システムを侵食するバグの発生は加速する。

このバトルフィールドを破壊するまで、そう時間はかからないだろう。

それをわかっているのか、目つきの悪いハロはくぐもった笑い声をあげながら、胴体正面に装備されている大口径のメガ粒子砲から、ジャバウオックの初撃もかくやといわんばかりの一撃をぶっ放した。

「射撃が通じないのなら、零距离攻撃で対処する！ 大佐と私で二方

向からビグ・ザムを挟撃する！ 他の有志は支援を頼む！」

「まずいな……このままでは我々が不利だ、しかし泣き言は言っていない！ 『GHC』各位に通達、チャンピオンとロンメル大佐の支援に当たれ！」

こんな時に何もできない自分がただ恨めしい。ストライクスファイダーはもう限界を超えている。

最低限のマニューバを行う分のエネルギーこそ残っていても、限界を超えたことで放熱装置は溶け落ちて、バーニングバーストはもう使えない始末だ。

せめてビームピストルの一丁でも持っていたら攻撃には参加できなかったらうけど、焼け石に水だ。

自動制御で襲いかかってくるG―エクリプティカをいなしながら、俺は自分に何ができるのかをただ考える。

チナツはまだ余力を残していたのか、右腕を脱落させ、各部を欠損させながらも残った左手で長距離長射程ビーム砲を撃って、チャンピオンたちを支援していた。

ジエニも比較的余裕があるからか、零距离での格闘戦に参加しようと機体を加速させている。

ビグ・ザムの枝分かれビームを押し返すように、ジム・ガードカスタームの盾を構えたゲルググが三機ほど対処に当たったけど、その守りも貫通してあえなく塵になっていく。

こいつは本格的にヤバイ。そして、後続にあとを託すしかない自分が恨めしい。

「うおおおっ！」

「はあああッ！」

有志連合の支援を受けたロンメルさんとキョウヤさんがビグ・ザムに零距离攻撃を仕掛ける。

だけど、待っていたのはロンメルさんのチェインソーはバラバラに碎けて、キョウヤさんのシグルシールドはへし折れるという、おおよそ想像しうる限り最悪の結果だった。

『ははははは！ 万策尽きたってどこかア!?!』

「チャンピオンと智将ロンメルですら歯が立たないなんて……」
「ビームも駄目、零距离攻撃も効かない……あんな化け物、どうやって倒せばいいんだ……」

チャンピオンと、フォーランキング第2位の「第七機甲師団」を率いるロンメル大佐ですら歯が立たなかったのを見て、有志連合の士気は急速に下がっていく。

ジェニヤ、他のフォースのメンバーもキョウヤさんたちに紛れる形で零距离攻撃を敢行していたけど、それでもあのビッグ・ザムには届かずに、脚部が粉碎したり剣が折れたりと散々な様相を呈していた。

ここまでか。ここまでなのか。

「諦めるな！」

俺の心も、微かな諦めに吞まれかけたその時だった。

チャンピオンの、キョウヤさんの力強い言葉が、地の底に落ちていた有志連合の士気を押し上げるように戦場へと響き渡る。

「諦めたら全てはそこで終わる！　だが、諦めなければ、例えそれが砂粒ほどわずかであったとしても勝利の可能性は失われない、絶対に！」

「チャンピオンの言った通りだ！　ここで我々が諦めれば、GBNは滅びる！　各位、クジヨウ・キョウヤに、チャンプに全てを託す覚悟を決めろ！　その僅かな砂粒を拾い上げるために！」

キョウヤさんが、チャンピオンとして皆を激励したのに合わせる形で、アトミラールさんが全員の決意を後押しするように叫んだ。

「……そうだな……そうだよな……！」

『ユウヤ君……』

「諦めたらそこで終わりだ！　だったら俺も諦めない！」

トランザムを発動して、武器が壊れているにもかかわらず、ビッグ・ザムのモノアイレールを殴り付けていたダブルオーのカスタムモデルを一瞥し、俺もまたキョウヤさんと、アトミラールさんの言葉を噛みしめる。

ストライクスファイダーに残っているものは僅かなエネルギーだけ。背負っていたプロミネンスブースターも破壊された今、できることな

んで残されちやいないのかもしれない。

だけどな。

「ああ！誰が諦めるかよー！」

「ぜってえ倒してやる！ 失くされてたまるかよ、俺たちのこの世界をー！」

「……ヴオーパルソード展開。終末の竜の端末たる我が必殺の一撃を受けよー。『エンド・オブ・ワールド』！」

「聞いたな、ユユ。僕らも道を開く。『ビルドダイバーズ』に続くぞ……GNハイマツトフルバースト！」

「ふふ……了解しました、お兄様……IFBR、最大出力……！」

「ヒヤツハハハハ！ マスダイバーとはこれでさようならあー！」

「夜明けは近い。ならば眼前の勝利を掴み取るのみです……このルーフェアとトランジェントガンダム・キャメロットの全てをにかけて……GNイヴェルブラスター……！」

「今こそ『ルミエル・ナイト』の矜持が試される時でありますな！ ノブレス・エクスキューション！」

「必殺！ 雪花氷獄鳥！」

闘志を鼓舞されたダイバーたちが、先陣を切る形で突っ込んでいったダブルオーのカスタムモデルを援護した「ビルドダイバーズ」というらしいフォースの面々に続いて、各々が持っている最大火力をビッグ・ザムに叩き込んでいく。

それである、ブレイクデカールの共鳴によって強化されたビッグ・ザムのIフィールドを貫けるかどうかはわからない。

だとしても、チャンピオンがそう言ったように、諦めた時点で全ては終わる。だったら。

『クソが……ッ！ なんだったんだ、こいつは……!?!』

「俺も行くぞ、ストライクスファイダー！ 持てるエネルギーの全てを注ぎ込んで……！」

「アンタばっかにはいい格好させないんだから！」

「脚は砕かれてもまだ手は残っている。だったら戦う」

「チナツ、ジェニ……ありがとうな！ 行くぜハ口野郎！ カミキガ

ンプラ流奥義……鳳凰霸王拳！」

持てるエネルギーの全てを攻撃に費やして、俺は、俺たちはあのビグ・ザムの鼻っ柱を叩き折るために攻撃を集中させる。

先んじて戦ってくれていたダブルオーのおかげもあってか、それとも戦略兵器クラスのトップランカーたちが持てる最大火力を叩き込んだおかげかはわからないけど、全てが収束した一撃はIフィールドを貫通して、攻撃を受けたビグ・ザムが身動く。

そしてそのダブルオーはというと、GNドライブがひび割れたかと思えば、崩壊したドライブから巨大なGN粒子の翼みたいなるものを展開して、ビグ・ザムを包み込んでいた。

『何が起こっている!?』

ハロ野郎が困惑した通り、ブレイクデカールの影響でひび割れていた宇宙が形を取り戻していく。

何が起きてるのは俺にもわからない。だけど状況から推測するなら、あのダブルオーが広げた光の翼が、バグを包み込んで浄化しているようにも見える。

『G―エク립ティカのコントロールが、戻った……』

『どうして……どうなってる、あの翼は?』

困惑するハロ野郎を尻目に、GNを覆っていたバグは消滅して、どういう原理かブレイクデカールもまた無効化されていく。

と、いうことは、あのハロ野郎が使ったチート効果ももうないってわけだ。

だけど、ストライクスファイダーはさっきの一撃で全力を使い果たしてもう動けない。

そのはずだった。でも。

「待たせたの、有志連合……! アブソープ機構、デイスチャージ!

妾が持てる力の全てを分け与えよう。そして必ず討ち果たすのじゃ、あの不屈き者を……!」

「ありがとうございます、テンコ様!」

前線に合流してきたテンコ様の「天照大稲荷」がデイスチャージ機構を使ったことで、底をつけていたストライクスファイダーのエネル

ギーもある程度は回復してくれた。

「へっ、リクばつかにいい格好させるかよ！ 奥義！ 『龍虎狼道』！」

「高濃度圧縮粒子、完全解放！ 吹けよシムルグ！ 『アルフ・ライラ・ワ・ライラ』！」

「斬り裂け、天空の刃！ EX……カリバーツ！」

それはチナツたちも、そしてマフユも同じのようで、示し合わせたように俺たちは頷くと、タイガーウルフさんと狐耳の人、そしてキョウヤさんが必殺技をそれぞれビッグ・ザムへとぶつ放したのを合図にして、持てる全力の一撃を再び叩き込む。

「ウイニング……フルバーストおっ！」

「一斉射撃……当たってえっ！」

「次元霸王流……弾丸破岩拳！」

「バーニングバースト、出力二百パーセント！ カミキガン普拉流奥義！ 鳳凰霸王拳！」

声を揃えて、俺たちもまた今放てる限り必殺の一撃を、ハロ野郎のビッグ・ザムへとぶち込んでいた。

『行つけええええ!!』

誰ともなしに叫んだ言葉が呼応して、戦場を、漆黒の宇宙を目映い白が、その閃光が塗り潰していく。

GNドライヴから光の翼を展開したダブルオーもまたその閃光の一部となって、ビッグ・ザムへと突撃をかける。

そうして、光が晴れたあと——そこにあったものは、木っ端微塵になつたビッグ・ザムの残骸。それが示すことはただ一つだ。

俺たちの、勝ち。

どっと押し寄せてくる疲労感も、バグを無効化したあの光の翼がなんなのかという好奇心も今はどこかに放り投げておけばいいと苦笑する。

『ユウヤ君……！ 私……私……っ……！』

「ああ、おかえり。マフユ」

G―エクリプティカの額と、プロミネンスブラスターとラジエーターを喪失したことでバーニングバーストの内部出力に耐えきれず、

ボロボロになった大破状態のストライクスファイダーの額を軽くぶつけ合い、俺とマフユは今、全てを忘れて、その喜びを分かち合っていた。

Ep. 60 「Re:Build」(終)

その後のことを、何から話そうか。

まずは有志連合戦だけど、あの戦いは俺たちの勝利で終わった。

黒幕には逃げられちゃったけど、あのダブルオーが発動した光の翼の力もあって、ブレイクデカールによるバグは撲滅、そのログを解析した運営はすぐさま修正パッチの制作に当たったらしい。

黒幕が何のためにブレイクデカールをばら撒いていたのか、この世界を「嘘っぱち」だの「偽り」だのとほざいていたのかはわからないけど——俺にとってはもう、どうでもいいことだ。

例えばGBNが黒幕の言う通り偽りでも嘘っぱちでも、その嘘に助けられてきた人間は山ほどいる。

たかがゲームだと笑うやつだっているかもしれないけど、アクティブルーザーを二千万人も抱えてれば、もうそれは一つの世界と呼んだって差し支えない。

「有志連合の諸君！ 作戦は成功した！ 今宵はログアウトするまで、存分に楽しんでいってくれ！」

キョウヤさんが「AVALON」のフォースネスト、その会食場に立ってワイングラスを高く掲げる。

そこにいるダイバーは程度に差はあれど、皆どこか浮かれた様子で、中には肩を組んで男泣きしているやつだっていた。

偶然と奇跡が重なったとはいえ、一つの世界を、このGBNを守れたんだ。そういう意味じゃ、確かに泣いていいのかもな。

だけど勝利を祝い、楽しむその前に、俺には果たすべきことが一つある。

「……キョウヤさん」

「なんだね、ユウヤ君？」

「俺……約束しました。マフユがブレイクデカールを使った罪があるなら、罰と一緒に受けるって。だから、なんでも言ってくください。運営に通報したって構いません。だけど、マフユだけが悪いんじゃないんです」

誠心誠意、伝わるように深々と頭を下げて、俺はキョウヤさんへと確かに言った。

もしもマフユのアカウントが永久凍結されるなら、俺のそれも同じペナルティを下してほしい。

今回の有志連合を集めたキョウヤさんほどの力があるなら、ゲームマスターと掛け合うのだって不可能じゃないはずだ。

「ユウヤ君、顔を上げてくれ。マフユ君は確かにマスダイバーとして、ブレイクデカールを使ったかもしれない……だけど、証拠がないんだ」

「証拠って……」

「ブレイクデカールの使用履歴はサーバーのログに残らない。だから、不正の証拠がない者を罰することはできない……それが今回の有志連合戦に際しての、運営の見解だよ」

だけど、無罪放免で全てが元通りに行くわけじゃない。

キョウヤさんが言っていた通り、会食場に立っているマフユに注がれる視線の中には、厳しいものも含まれている。

罰せられないからといって、罪が消えるわけじゃない。それを、俺はひしひしと肌で感じさせられた。

「だが……もしも君たちが良ければ、これからもGBNを楽しんでほしい。GMがどう考えているかはわからないけど、僕としてはそれが一番の罪滅ぼしになると考えているよ」

「キョウヤさん……ありがとうございます！俺、いや、俺たち、これからも全力でGBNを楽しんでいきます！」

「ごめんなさい……あ、ありがとうございます。私も、これからは、ユウヤ君と一緒に……」

「ああ、これからも励んでほしい。それと……君たちはあの戦いの中で愛を育んだ間柄だ、ここは一つ、祝福させてもらおうよ」

——おめでとう。

チャンピオンから、キョウヤさんからその言葉が贈られたことが、そして、マフユのことを許すとまではいかなかったも、罪滅ぼしの条件を「楽しむこと」という落とし所にくれたことには、感謝しても

えなくなるってことだ。それを今生の別れと捉えるのは縁起が悪いけど、それでも寂しいものは寂しい。

——でも。

「それが、お前の決めたことなんだろう？ ジェニ……いや、スミ」

「ええ。私はもつと強くなる。だから、私の恋を……貴方のことを思い出にさせてほしい。ユウヤ」

「……ああ！ しばらく会えないのは寂しいけど……必ず帰ってこいよ、スミ！」

お前が帰ってくる場所は、「トライダイバーズ」はいつだってここにあるんだから。

去っていく背中にそう告げて、俺は伸ばしかけた手を下ろす。

スミを選ばなかったことと、今回の旅はきつと関係ないとは言わなかつたって、俺が選ばなかったように、あいつもまた選んだというだけの話だ。

それでも、いつかまたこの空の下で会えるはずだ。

そう思いたい。そう願いたい。

繋がり合ったことで生まれた縁を、絆を信じて。



「新興企業『白虎電子』、組織立った不正なサイバー攻撃で一斉摘発、ねえ……GBNのデータを不正にクロールしていたとか聞くけど、ユウヤはなにか知ってるの？」

「いや？ 知らないな……」

「そうなんだ。この犯行の首謀者はレミング・ワトキンス、三十八歳……業務上横領と不正アクセス禁止法違反と、威力業務妨害に、追加の容疑で暴行罪、児童虐待防止法違反……なんていうか、犯罪の見本市みたいな人ね」

あいつ、捕まったのか。

ニュースを見ながら小首を傾げていた母さんがレミング・ワトキンスの名を呟いたことで、おおよそあいつが何をしようとしていたかは

見当がついた。

大方、ブレイクデカールでGBNが破壊されたあとに、クローリングしていたデータで第二のGBNを作ることとその後釜に収まろうとでもしたんだろう。なんというか、とにかくみみっちい。

でも、あの野郎が法の裁きを受けたことで、ミリアはきつと気が楽になったんじゃないだろうか。

あんなんでも実の親だから、思うところはあるのかもしれないけど、それでも過去に失った、奪われた分の償いをさせるって意味じゃ溜飲が下がるところもあるんだろう。

きつと。多分だけどな。

「それじゃユウヤ、行ってらっしゃい！」

「わかったよ、母さん……てか、なんでそんな喜んでるんだよ……」

「だってユウヤからマフユちゃんに告白したんでしょ？ 私の時は逆だったから、ちよつと羨ましいのよね。本当、セカイ君……お父さんをその気にさせるの、すつごく大変だったのよ？」

「そんな話を息子に聞かされても……」

俺が恋愛ごとに鈍いのは、どうにも父さんからの遺伝が強いらしい。

ただ親のデート事情とかどつちが先に告白したとか、そういう話って、どういう顔して聞けばいいのかまるでわからない。

母さんからすりやきつとジョークのつもりなんだろうけどさ、なんというか身につまされるものがある。

「とにかく！ 付き合ったなら絶対に傷つけちゃダメよ？ マフユちゃんは繊細な子なんだから」

「わかってるってば！ それじゃ行ってくる！」

「行ってらっしゃい、ユウヤ」

これ以上この場に止まってたら母さんのエンドレストークに引き摺り込まれると判断した俺は自転車の鍵を引っ掴むと、強引に話を打ち切って、玄関先に飛び出していく。

腕時計を見る限り、まだ時間には余裕がある。

今日はマフユとデート……というか、新しいガン普拉と一緒に作る

予定が入っているのだ。

マフユの家に向けて全速力で自転車を飛ばす。

高級住宅街を突っ切って、この前は固く閉ざされていた巨大な鉄の門にくっついていているインターフォンを鳴らせば、控えめな声が少しのノイズを伴ってマイク越しに聞こえてくる。

『は、はい……』

「よう！ 俺だぜ、マフユ！」

『ユウヤ君……門を開けるから、ちよつと待ってて、ね……』

重々しい音を立てて鉄の門が開いていく。

そして、玄関までの一本道を自転車を降りて歩いていけば、相変わらず手入れが行き届いている庭園が視界に入る。

なんとというか、懐かしい気分だな。会えなかったのなんてほんの数日ぐらいなのに、それでもずっと会っていなかったような気がするんだから、不思議なものだ。

玄関口の脇の方に自転車を停めて、鍵を閉める。そして扉の前に立てば、ぱたぱたと慌ただしく音を立てて、ドアの前までやってきた足音が聞こえてくる。

かちやり、という音を立ててドアが開く。

そして、そこから顔を見せたのは、いつもの袖の丈が余っているゴスロリ衣装に身を包んだマフユだった。今日は化粧もしてるな。

「待たせちゃった、かな……？」

「いや、全然！」

「なら、よかった……えつとね、入って大丈夫だよ、ユウヤ君……」

「そんじゃ、お邪魔します！」

マフユの許可を得て、俺は相変わらずデカイ家の中に足を踏み入れる。

ふわり、と香る花の匂いに混ざって漂ってくるシャンプーの香りが鼻先をくすぐって、ちよつとだけむずむずした。

「えつとね……ユウヤ君、今日はちよつと、手伝ってほしいことがある、の……」

「ガンπρα作るんだろ？ 俺にできることがあるならなんでも言っ

くれよな！」

「うん……ありがとう、ユウヤ君。だから、この部屋に一緒に来てほしいの」

そう言つて、マフユは階段に足を乗せると俺を手招く。

そういえばマフユと一緒に遊んでた時はずっとリビングルームだったから、二階に足を踏み入れるのは初めてだな。

マフユの案内に従つて、部屋数が相変わらず多い二階の廊下を歩けば、そこにあつたものはなんの変哲もない、普通の扉……のはずだ。

「ここで合つてるのか、マフユ？」

「うん……えつとね、ここ……お父さんの書斎なの」

「へー……マフユの親父さんの書斎かあ、でもなんで俺も一緒に？」

投げかけた問いかけにマフユは少し困つた様子で眉を八の字に歪めると、小首を傾げて口を開く。

「えつとね……お父さんのこと、私、ずっと避けてたから……お父さんと、お母さんは、凄い人だから……書斎を開ける勇気がなかったの」「そつか、じゃあ」

「……今日は、逃げない。お父さんと……向き合つてみたくて……でも、怖いから……勇気が、欲しくて……」

丈の余つた袖に包まれているマフユの手が、そつと遠慮がちに差し伸べられる。手を繋ぎたいのだろう。

それぐらいなら簡単だ。俺は優しく袖越しにマフユの掌を包み込んで、力強く頷いてみせる。

「……ありがとう、ユウヤ君」

「これぐらいならいつでも言つてくれよな」

「……じゃ、じゃあ……しばらく、このままでいい、かな……？」

「お安い御用だぜ」

他愛もない言葉を交わし合いながら踏み入つたマフユの親父さんの書斎は、海外にいて長いこと留守にしてるって割には小綺麗なものだった。

多分、マフユのことだからハウスキーパーさんとかも雇つてるのだろう。庭の手入れとか、一人でやるなんて想像もしたくないしな。

そんなことを薄らぼんやりと頭の片隅に浮かべながら、親父さんの机と思しきものにマフユが向かっていくのに手を引かれて、俺もまた辿り着く。

「これ……封筒か？ マフユの名前が書いてあるけど……」

机の上にはカッターマットと、もう機能を停止したのであろうGPベース、そしてその下に挟まれる形でマフユの名前が書かれている一通の茶封筒が置かれていた。

「……お父さんから、私に……？」

「開けるか？」

「う、ううん……私が、やってみる……」

親父さんからのメッセージ。ずっと受け取る勇気がないまま放置していたそれがなんなのかはわからない。

それでもマフユが勇気を出して一步を踏み出せたのは、紛れもなく成長なのだろう。

丁寧に、ゆつくりと封筒を開ければ、マフユはその中に入っていた一枚の紙を見つめて、じわり、と眦に涙を滲ませる。

「……っ……お父さん……」

「これって……」

嗚咽を堪えるように唇を引き結んだマフユが見つめていたものを、少し行儀が悪いけど覗き見てみれば、そこに記されていたのは、ガンプラの設計図と思しきものだった。

ガンダムフェニッチェリナーシタ。その名前を俺は知らない。

だけど、そのガンプラの設計図を娘に宛てて机の上に置いていたってことは、マフユの親父さんはきっと、それをずっとマフユへと託そうとしていたのだろう。

ここから先は、俺の勝手な想像でしかない。それでも、その設計図からは確かに親父さんからの愛が感じられた。

きっと親父さんは、マフユが勇気を出したその時、力になれるようにとその設計図を残していたのだろう。

不器用で、ぶつきらぼうで。だけどどこか粹なその愛情。マフユの親父さんは、相当な伊達男だったのかもな。

「……私、お父さんの設計図を使って新しいガンプラを作る、よ……だから……」

「ああ、手伝うぜ」

「……ありがとう、ユウヤ君……」

設計図を胸元に抱き寄せると、マフユは涙を眦に浮かべながらも、春に蕾が綻ぶような、満開の笑みを咲かせてみせた。

きつと、マフユにとっての冬はもう終わったのだろう。ずっと心に抱えていた冷たい思いが溶け出して涙に変わる。

だから、俺はそれが治るまで、零れ落ちていく涙が帰る場所を見つけるまで、強くマフユを抱きしめていた。



マフユが新しいガンプラのベースに選んだのは、ガンダムジェミナス01だった。

それとウイングガンダムをミキシングするのが当初の予定だったんだらうけど、それを急遽変更して、一部にはフェニーチェリナーシタのパーツを組み込むことに決めたようだ。

設計図に記された形をなぞり、ガイド付きのプラ板に当たりをつけて下書きをして、切り出したパーツを貼り合わせていく。

その単純にも見える作業は、その実、気が遠くなるほどに難しいもので、手作業なのもあって一枚一枚に出た微細なズレをやすりで修正して。

そうしてほとんど丸一日を費やして出来上がった、ガンダムジェミナス01をベースにしつつ、アンテナを二本から四本に増やしたり、本来は換装用のアサルトブラスターが接続される穴にはジャンクパーツの中で眠っていたスクランブルガンダムとかいうガンプラの羽を接続したりしたガンプラが今、力強く机の上という大地に立つ。

「これが……マフユの新しいガンプラか」

「うん……G-ジェミアン。今まで足りなかった、火力と手数を強化した、エク립ティカの魂を継ぐ、私の……私とユウヤ君の、ガン

ブラ……」

なるほど。俺も手伝ったから俺のガンプラでもあるのか。それなら、ストライクスファイダーも同じだな。

腰のポーチに入れてきたストライクスファイダーをGージエミニアの隣に立たせてみれば、窓辺から差し込む光がツインアイの光を反射して、出会えたことを喜んでるように、まるで涙ぐんでいるように見えた。

「……大好きなものと向き合うことって、楽しいだけじゃないって……怖いことなんだって、わかった」

「ああ」

マフユはぼつりとそんな言葉を零す。

確かにその通りだ。悔しさに怯えるのは、悲しさを避けて通りたくなるのは、誰もがきつと経験することだ。

俺だって、次元霸王流の修行がたらくて逃げ出したくなった時期がある。それでも、踏ん張ることができたのは。

「……でも、私……ユウヤ君と出会えた。大好きな世界で、好きだった人と思える人と、出会えた……だから……」

ソファに腰掛けていたマフユは俺の頬を両手で包み込むと、目を閉じてそつとその唇を寄せてくる。

唇と唇が触れ合う柔らかな感触とあたたかな温度が伝わって、どうしようもなく愛しいという感情が溢れ出す。

ああ、多分これが恋ってやつなんだろう。随分長い、遠回り。その果てにやつとわかった、最後の「大好き」だって気持ち。

「私を好きになってくれてありがとう、ユウヤ君……私を好きでいてくれて、ありがとう……愛してくれて、ありがとう……」

「……俺だって、ありがとう。俺……マフユを好きでよかった。マフユと出会えてよかった」

「……一緒、だね。えへへ」

ファーストキスはレモンの味だったのは一体どこの誰が言い出したのかはわからないけど、俺たちにとっては砂糖菓子のようなものだった。

生クリームの上に蜂蜜をぶっかけて、粉砂糖を袋ごとぶちまけたよ
うな甘さを何度も求めあつて、俺はマフユを抱きしめながらその唇を
そつと塞ぐ。

生まれてきてくれたことを祝福するように、ここにいてくれること
を祝福するように、夜の帳が降りつつあるリビングで、俺たちは互い
にその祝福を刻み続けた。



ぎつと思い出せる範囲ではこんなもんか。

本当に色々あつた。激動の一年、なんて言葉じゃ済まされないほど
に、あれこれと色々なことがリアルでもGBNでもあつて。

そんなあれこれを経て大体二年。俺たちは今二人で、ガンダムベ
ースシーサイドベース店に訪れていた。

「なんなのかなあ」

バイトと思しき明るい茶髪の女の子がガンプラを手に小首を傾げ
ている姿を見て、俺たちは踏み出すと、その子にそつと声をかける。

「それならバウだと思えますね、こっちの棚じゃないですか？」

「ありがとうございます」

ガンダムのモバイルスーツって立体化されてるだけでも気が遠くな
るほどあるからな。

覚えてられないって気持ちわかる。

愛想こそ良くても、どこか生返事みたいな女の子の返事に会釈をし
つつ、俺はマフユの手を繋いでシーサイドベース店を後にする。欲し
いものはもう粗方買ってたからな。

「二年、かあ……」

「二年、だな」

「……私たち、ずっと仲良しだね。えへへ」

「ああ、そうだな。喧嘩らしい喧嘩とかもしたことねーし……」

「じゃあ、ユウヤ君は……喧嘩、したい？」

「まさか。マフユと喧嘩するなんて、考えたくもない」

もうあの時みたいに会えなくなったり、言葉を交わすことすら拒まれたら、あの時以上にショックを受けて寝込んでしまうかもしれない。

いつものようにゆっくりと過ぎていく日々。そこにマフユがいてくれるだけで、俺はきつと十分すぎるほどに幸せだった。

「ん……」

目を閉じて、マフユがキスをせがんでくる。往来だつてのに気にしなくなつた辺り、マフユも随分変わったもんだ。

だけど、そんな可愛くて愛しい恋人の願いを叶えないわけにはいかないよな。

そつと唇を触れ合わせて、啄むような口付けから一歩だけ進んだ大人のそれへ。夜の街に灯る光を抱き寄せるように口づけを交わすと、俺たちは身を寄せ合つて、共に明日へと歩き出すのだった。

トライダイバーズ・エクストラミッション！ Ex. 01「ELダイバー」

GBNで再びバグが目立つようになってきたのは、有志連合戦からしばらくしてのことだった。

確かにブレイクデカールによるバグは、あのダブルオーが発動させた光の翼によって完全に無効化されて、そのデータを元にした修正パッチが当てられた旨が運営からも告知されている。

だけど、どういうわけか最近起きてるバグは、軽いものじゃなくてブレイクデカールが蔓延していたあの頃と似たような、有り体にいえばやべー代物だ。

バグに遭遇したことでしっちゃかめっちゃかになりつつもなんとか全員が完走したことで、協賛企業こと「サザメス」のイメージガールに参加していたマフユとチナツが認定されたのはいいとしても、問題はそこから先の話だ。

「バトル中に落ちた雷で決着って、なんとも締まらない結末よね」

フォースネストの背もたれに体重を預けて、ぐでーっとした感じになっているチナツが、どこか投げやりな口調でそう呟く。

こっちとしても気持ちはわかる。

さつきやつてたフォース戦の顛末が、フラッグ機にバグによる落雷が直撃したことで開幕勝利とかいうよくわからんことになったせいで、俺の方も大分手持ち無沙汰だ。

「まあ、レギュレーションでなんでもありなRTAやつてるんじゃないかねーんだからな」

バグすら再現性があればチャートに組み込んで最速クリアを目指す競技は俺も知ってるけど、GBNにそういうのを求めているわけじゃない。

拳を振るう間もなく、バトル開始と同時に宇宙が裂けて、そこから落ちてきた雷が勝利の要因でした、なんて消化不良もいいところだ。

新しい愛機の「G-ジェミニアン」を完成させて、最近は自信を取

り戻してきたマフユも手持ち無沙汰なのは同じのようで、すっかり投げやりな俺たちを見て、苦笑しつつもどこかやり切れない気持ちだが、その瞳から滲み出ていた。

「勝ったのは勝ったけど……勝った気にならない、っていうの……わかるかも」

「だよなあ、なんつーか……相手のフォーースも運が悪かったって笑ってたけどさ」

「笑って済むような話じゃあないわよね」

むしろ無理矢理笑い話にすることで場をもたせているというかなんの場合かは知らないけど。

というか、相手さんもネタにしなきゃやってけなかつたんだろう。

G—Tube にアップロードされたアーカイブを見てみれば、再生時間が極端に短いこともあって、とんだ笑い草になっている始末だ。

「運営はなにしているのかしらね、まさかまたログに証拠が残ってないとか？」

「流石にそれはないんじゃないか？」

チナツは頬を膨らませながら不満を口にしたけど、それが本当だとしたらまたGBNのメインプログラムは、ブレイクデカル並の技術でクラッキングされてることになる。

偶然は二度続かない。

いや、二度ぐらいは続くのかもしれないけど、流石にブレイクデカル並の技術を持った悪党がこの短期間でGBNに二回も目を付けるとか冗談にも程つてもんがあるだろう。

「でも、運営の人はちゃんとわかってる、よね……？」

「お知らせにはバグについての把握してる件書いてたし、プレボには対応が遅れてることへの詫びで配布されたBCとか色々入ってたからなあ」

マフユの言葉を俺は首肯する。

これで知りません存じません関係ありませんだったら暴動ものだけど、前に一度だけ会ったことがあるあのゲームマスターはよくも悪くも真面目な人って感じだったしそれはない。

だから、バグ対応の遅延に関する詫び配布も豪華なものが色々揃ったのだろう。

「GBNジャーナルでもオカルト案件というか謎の怪異扱いだし、掲示板とか見ても皆アタシたちと似たような感じだし……いつになつたら安心してGBNできるのかしらね」

「ここ最近、立て続けに色々起きてるから……」

メガ粒子杯に、ブレイクデカールを巡る騒動、そして有志連合戦。初めて数ヶ月で辿る道にしては随分なハードモードだ。

チナツが嘆くのもわからんでもない。

とはいえ、フォースネストで駄弁つてたところで謎のバグが解決するわけでもないし、常時バグまみれってわけじゃなく、起こらない時は起こらないんだから身体を動かして気分転換でもしておくのが吉つてところだろう。

「ここで駄弁つても仕方ねーし、なんかミツションでも受けるか？」
「ん、そうね……アタシは別になんでもいいけど、マフユは受けたいミツションとかある？」

凝り固まった背筋を解すように大きく伸びをしながら、チナツはマフユへと問いかける。

ミツションといえばチュートリアルとか受けたぐらいで、そういや全然やってなかったな。前に受けようとした時はクソピエロ共に茶々を入れられたし。

そんな苦い思い出はともかくとして、チナツからの問いかけにマフユはしばらく考え込むような仕草を見せると、殺風景なフォースネストを一望して、ぽん、と掌を拳で軽く叩いた。

「えっと、その。家具とか……どうかな、って」

「家具？」

「うん……このお部屋、ちよつと殺風景だから」

マフユは手狭な部屋を掌で指し示して苦笑する。確かに、言われてみればその通りだ。

なんというか、フォースネストの内装にまでこだわってる暇がなかったからといえればそれまでなんだろうけど、初期支給品のまま止

まっっているこの部屋は確かに殺風景だった。

スミが修行に行つて、いなくなつてしまったのもあつて、確かによく見ればどこか物悲しい。

「いいんじゃない？ 収集系ミッションで家具がドロップするやつつてあつたかしら」

「ミッションに関しちや俺はなんともだからな……マフユは何か知つてるか？」

「え、えつと……『ここ掘れ！ マウンテンサイクル』とか？」

チナツが手元のコンソールを操作してミッションのリストを検索している間にマフユへと問いかけてみれば、待つてましたとばかりにその名前が唇から紡ぎ出される。

ここ掘れマウンテンサイクル。

名前からするに、▽ガンダムが元ネタになつてるミッションだろうか。懐かしいな。マフユの家でこの前一緒に見たやつだ。

「▽ガンダムのミッションか、いいんじゃないかねーかな、マフユン家でこの前一緒に見たし」

「ゆ、ユウヤ君……は、恥ずかしい、よ……」

別に恥じらうようなことでもないと思うけどな。

一応付き合つてるんだし……つて考えたら俺の方も恥ずかしくなつてきた。やめよう。

「はいはい、新鮮な惚気ご馳走様でした……つと、冗談はともかく、パーツデータとかプラグインもランダムで採掘できるみたいだし、悪くないんじゃない？ はいこれ」

「サンキュー、チナツ」

チナツは手元に表示したスクリーンに「ここ掘れ！ マウンテンサイクル」の概要が記されている画面を投影すると、投げやりにそれを俺たちに手渡してくる。

コレクトミッション「ここ掘れ！ マウンテンサイクル」。旧世紀の遺物として色々なものが眠つてるマウンテンサイクル内を制限時間内に採掘して得られたものが報酬、という、内容としてはシンプルなものだ。

ただ、ドロップ関連はその分運任せってことなんだろう。ガンプラは一応持ち込めるけど、入り組んだ洞窟とかもあるから基本的には生身で掘るのが推奨されてるっぽいな。

「なるほど、生身でやるミッションってのもあるんだな」

「それもまたGBNの醍醐味ってやつよ」

「……私たち、戦ってばかりだったから、ね……」

「それについては本当悪かった」

ガン普拉バトルは確かに熱くて、楽しくて、最高にワクワクできるけど、一度興味を持つと何事ものめり込みすぎてしまうのが俺の悪い癖だ。

だからこそ、あんなことがあったわけだし。それについてはしっかりと向き合って反省していかないとな。

でも、マフユだって最近はやられっぱなしじゃない。機動力と火力のある近接支援役として俺が突っ込む時に後ろから援護してくれるし、苦手だった一対一の戦いも、より万能機らしくなったG―ジエミニアンの力とこれまでの経験を活かして上手く立ち回ってる。良くも悪くも人は変われる。

だから、俺だってマフユを見習って、変わっていかねーとな。

そんなことを薄らぼんやりと考えながら向けたマフユへと視線が交錯して、少し恥ずかしいともまた違うけど、むず痒い感覚が胸の奥に湧き起こってくる。

「……ゆ、ユウヤ君……私の顔、なにかついて、る……?」

「ああいや、なんでもない！　ただ俺もマフユを見習ってかないとなって！」

「あ、え……?　私、を……?　え、えつと……じゃあ、私も、ユウヤ君を見習って……!」

「はいはい、惚気はその辺にしときなさいよ、毎度のことだけど砂糖吐きそうだわ」

さっさとミッション行くわよ、と、チナツは呆れたように肩を竦めながらブロックノイズ状に解けてセントラル・ロビーへとワープしていく。

少しばかり気まずい空気を抱えながらも、俺たちもチナツの背中を追いかけるようにロビーへの転送を選択する。

そつと指を絡めて、手を繋ぎながら。



結論から言おう。発掘できた家具はお洒落なものというよりかはどっちかというと珍妙な……まあ人を選ぶようなものだった。

パーツデータとかビルドコインとかはそれなりに集まったものの、果たしてこの発掘されたガンダムとかザクをモチーフにしたのである。う埴輪のようなアイテムをどう扱ったものかと、俺たちが頭を悩ませていた、その時だった。

強制的にウィンドウがポップして、この前のガンダイバーこと、ゲームマスターの姿が大写しになる。

『運営よりお知らせがあります。GBN内で最近数多く発生しているバグに関してその発生原因を突き止めました。彼女の名前は、サラ』サラ、という言葉と同時にスクリーンに投影されたのは、あどけない顔立ちをした銀髪の女の子の姿だった。

そして俺は、それに見覚えがあった。

思わず埴輪を取り落として立ち上がり、運営からの公式アナウンスを食い入るように睨み付ける。

「どうしたの、ユウヤ？」

「サラ……この子に俺、見覚えがあるんだ」

「それって……」

思い出すのは、ストライクスフィードを作って「鉄仮面ズ」との戦い前にマギーさんに見てもらったときのこと。

あの時一緒についてきていた銀髪の女の子は、サラは、俺のストライクスフィードを見て「燃えている」と、そう言ってくれた子だ。

そのサラって子が、バグの元凶。なにかの冗談だと思いたいけど、ゲームマスターが直々に、恐らくは全てのダイバーに向けてそんな嘘をつくとは思えないし、仮にそうだとしても嘘をつくメリットが皆無

に等しい。

なら、やっぱりサラって子は。あの子は。

愕然とする俺に対して、チナツとマフユは小首を傾げてなにが起きたのかとばかりに顔を見合わせていた。

その辺の説明はあとでしなきゃいけないだろう。だけど、今優先すべきなのは運営の話を書くことだ。

焦る気持ちに拳を固めつつ、俺はゲームマスターが淡々と発表する言葉に耳を傾ける。

『彼女は人間ではありません。このGBN内で発生し成長した電子生命体……ELダイバーなのです。そして、このままこの存在を放置しておけば……GBN全体が崩壊する恐れがあります』

サラが、人間じゃない。

そして、そのまま放っておけば、ブレイクデカル事件の時と同じように、GBN全体が崩壊してしまう。

寝耳に水だとか青天の霹靂だとかそんなレベルの話じゃない。理解を超えた情報は脳味噌を直接金槌でぶつ叩いたかのような衝撃を残して、俺の耳にこびりつく。

「あの子が……人間じゃない……？ バグの、元凶……？ 何言ってるんだ……？」

短いながらも格納庫で言葉を交わしたあの時、サラからは悪意だとか、そういうものはなにも感じられなかった。

むしろ、俺のストライクスフィードを「燃えている」と、ストライク焔の魂を継いでいることをわかってくれて、嬉しかった。

そんなサラが、今GBNでバグを振り撒く電子生命体だなんて、信じられるか。

『しかし、心配はありません。現在運営側が適切に対処しており、修正パッチの作成を進めております。もし、GBN内で彼女を見かけましたら、むやみに接触せず、すぐ運営までご連絡ください。繰り返しします。彼女の名前はサラ。このGBN内で発生した電子生命体、ELダイバーなのです』

だけど、俺が信じるか信じないかどうかなんてことはお構いなし

に、運営はその事実を捲し立て、一礼すると同時に放送を切る。

電子生命体。ELダイバー。正直なにがなにやらって感じで、理解が追いつかねえ。

でも、ゲームマスターが直々にそう言ったってことは、サラが人間だろうがそうじゃなからうが、今このGBNにバグを振り撒いている元凶だったことに、間違いはないのだろう。

「ユウヤ……どうしたの？ 顔真つ青よ？」

「ユウヤ君、大丈夫、夫……う？」

「あ、ああ……そうか、チナツとマフユは知らないんだったよな……あのさ、俺……あのサラって子と会って、話したこと、あるんだ」

簡単に格納庫での顛末を俺は二人に語って聞かせたけど、正直その内容がちやんとしたかどうかは自信がない。

そのぐらいひどく動揺していたんだ。

ストライクスフィードの想いを汲んでくれたあの子が電子生命体で、バグの元凶で。そんなの、にわかには信じられないし、信じたくない。

それとも、あの柔らかい笑顔の裏に底知れない悪意を隠していたのか。

わからない。だけどあの時言葉を交わして得た直感に従うなら、サラは、あの子はそんな悪党じゃなかった。

俺は父さんみたいに、師匠みたいに人を見る目に自信があるわけじゃない。だけど、悪党かそうでないかぐらいは、見ればわかる。だったら。

「落ち着きなさいよ、ユウヤ。アンタの言い分を聞くななら、あの子が悪意をもってバグをばら撒いてたわけじゃない、ってことでしょ？」

「あ、ああ……」

「それに、運営はサラちゃんのことを……ELダイバーって、電子生命体って言った。もしあの子が本当にそんな存在なら、GBNのサーバーがサラちゃんのデータを維持できないからバグが発生してるって可能性だってあるわ」

チナツは冷静に俺の胸へと人差し指を当てると、銀のティアラを月

光に煌めかせながらそう言った。

メモリのオーバーフローとか、そういう技術関連のことに關してはなにがなんだかって感じだけど、要するにチナツの言い分は、この世界がダイバーたちの同時アクセスやマップの読み込み、ガンプラの読み込みや動きの処理といった諸々をサーバー上で行っている中に、電子生命体であるサラのデータが割り込んできたことで容量が圧迫されてるせいでバグが生まれてるんじゃないかって仮説だ。

それに、電子生命体ってのが本当なら、そのデータは生きているわけで、不規則な処理が走ったり割り込んだりすることでバグが生まれている可能性だってある。

だったら、運営が言う通りに俺たちは修正パッチの完成を待って――要するに、バグの元凶であるサラの抹消を、認めるかってことだ。運営が言ってることは正しいんだろう。それは俺にだってわかる。でも、サラが電子生命体だっていうなら、あの子はただのプログラムじゃない。

生きているんだ。俺たちのガンプラがスキャンされてこの電腦世界で動くのはちよつと訳は違うかもしれないけど、同じ思いがそこにはあるんだ。

それを、消せっていうのか。

「ユウヤ君……」

「……わかってる、俺は……」

有志連合戦に参加したのは、マフユを助けたって目的もあったけど、GBNを守りたいって気持ちもあった。

そこに嘘はない。なら、俺は。

俺はGBNを守るために、サラを消すという運営の選択を認めなきゃいけないのか。

そんなことを頭の中に浮かべながら、拳を固めていたその時だった。

「あつ……」

木陰から、怯えるようにして顔を出した小さな女の子の視線が俺たちに注がれる。

銀髪の女の子。それはたった今、運営からアナウンスがあつたばかりの、サラその人だった。

身構えるようにして、木陰に逃げ込もうとするその小さな背中に、考えるよりも早く、俺は呼びかけていた。

「待ってくれ、サラ！」

「……………」

「俺たちは君を運営に引き渡したりなんかしない！ だから……………」
少しでいい、話をさせてくれ！ 信じてくれ！」

腰のホルスターに収まっている拳銃を捨てて、両手を上げながら、
ゆっくりとサラへと近付いていく。

これで信じてもらえなければそれまでだ。

だけど俺は、どうしても話があったんだ。確かめたかったんだ。本当にサラが望んでバグを振り撒いているのかどうかだけでも。

「……………あなたは……………」

「俺はユウヤ。カミキ・ユウヤだ。前に、格納庫で会つたろ？」

「うん、覚えてる……………燃えてるストライクの人」

「ああ、そうだ」

警戒を解いてくれたのか、サラはぼつりと俺の言葉にぎこちないながらも反応を返してくれる。

チナツとマフユも同じように両手を上げて、敵意がないことを示しながらサラへと歩み寄っていく。

「アタシはチナツ。そっちのユウヤと同じで貴女を運営に引き渡すつもりはないわ」

「私は……………マフユ。ユウヤ君とチナツさんと同じで、貴女を運営に差し出すつもりはない、よ……………？」

「チナツ……………マフユ……………」

どうやら信じてもらえたのか、サラは小さく頷くと、意を決したように俺たちの瞳を見つめてから、小さく俯く。

「ごめんなさい、私のせいで皆に迷惑がかかっている……………私……………」

「それは……………サラ、君の意志でやったことなのか？」

「っ、違う……………私は、ただ……………」

俺の問いかけに、サラは怯えるようにして首を横に振る。

「ならよかった。さつきも言ったけど、俺たちは君を運営に引き渡すつもりはない」

今もこうして見れば、サラの細い脚は震えていて、いつ飛んでくるかもわからないガードフレームや運営のパトロール隊に怯えていると一目でわかる。

それで俺は確信した。この子は、サラは生きてがっている。電子生命体だかなんだか知らないけど、俺たちと同じように、命があつてここにいるんだ。

だったら、理由はそれで十分だ。

「……生きろよ、サラ」

「でも、私……」

「俺は難しいことはよくわからねえ……でもな、生きたいと願ってる命を見捨てるなんて、筋が通らねえ。必ず、君のことも、GBNのことも……両方救う道があるはずだ！ 慰めかもしれない、楽観論かもしれない、でもな！ 俺はその可能性を信じる！ だから生きてくれ、サラ！」

俺から言えそうなことは、ただそれだけだった。

GBNもサラのことも両方救える道があるかどうかなんてわからない。俺の言葉はもしかしたら、サラが消されてしまうその日までの慰めに、その日の絶望に変わってしまうのかもしれない。

それでも。

「……ありがとう、ユウヤ……」

目の前でこうして「生きたい」と泣いてる子を見捨てて、この世界を、GBNを自分だけのうのうと楽しむなんて、生憎俺にはできそうもなかった。

ただ、それだけだ。

去っていくサラの小さな背中を見送りながら、俺はきつく拳を固めていた。必ずその道があることを、信じて。

EX. 02 「決意の時」

チャンピオンから、キョウヤさんからの連絡があつたのはあの日、サラと言葉を交わしてから数日後のことだった。

なんでも、有志連合としてあの戦いに参加したほぼ全員に呼びかけているとか、そんな感じらしい。

有志連合のこと自体はともかくとして、俺たちが再び集められるのは他でもない、サラについてのことだろう。

それぐらいは想像がつく。

サラを消滅させる修正パッチが当てられる日は、レイドバトルの開始日だと公式から発表されている。

あの時言った通り、GBNとあの子の命を両方助ける方法が見つかったのかどうかについて、少なくとも俺たちもなにかできないかと調べてみたけど、あまりにも専門的すぎて無理だった、というのが結論だ。

あんなことを言った手前、それが見つけられなかったというのは気が引けるどころの話じゃないけど、それはそれとして、呼ばれたからには行かなきゃいけない。

「……本当に運営は、サラちゃんのことを消すつもりなのかしら」

「消さなきゃ、GBNが崩壊する……運営の立場に立ってみれば、そうするしかねーのはわかってる。でも」

「……あんな小さな子を消して……私たちは……」

一路「AVALON」のフォースネストに向かう俺たちは、すっかり消沈しきっていた。

マフユが呟いた通り、俺たちが昨日触れたのは、サラは、ただのバグなんかじゃない。

生きたいと願っている一つの命だ。それを消したあとに、はいそうですかと笑ってGBNが楽しめるもんか。

だけど、このまま放っておけばGBNそのものが滅びてしまうことも、また事実には違いない。

振り上げた拳を下ろす先を見失ったような、やるせない感覚を抱き

ながら、俺たちは「AVALON」のフォースネストへのワープを選択する。

そうして意識と仮想の躯体が再構成された中で目に飛び込んできたのは、やっぱりというかなんというか、どことなく殺気立ったような、あるいは困惑しているような警備係が小声で何やら言葉を交わしている光景だった。

「お待ちしていました、『トライダイバーズ』。クジヨウの元まで案内させていただきます」

「あ、はい……いつも丁寧にもつす、エミリアさん」

「お気になさらず。これが私の役目ですので」

眼鏡のブリッジに人差し指と中指を当てて押し上げるエミリアさんはいつも通りって感じで、警備係たちに比べれば動揺してないように見える。

それを非情だと感じる心がないかと訊かれて、首を横に振れば嘘になるのだろう。

だとしても、エミリアさんにはさつき俺たちへと言ったように、エミリアさんの役割がある。

有志連合の長を務めるトップフォースの副隊長が、揺らぐわけにはいかないってことだ。

相変わらず長い廊下を歩きながら、すれ違う「AVALON」の隊員たちも警備係とどこか同じように困惑している様子を横目に見て、俺はエミリアさんに聞こえないよう、溜息をそつと噛み殺した。

でも、その様子を見てどこか安心したところもある。

皆が皆、望んでサラを消そうとしているわけじゃない。

中にはそういうやつだっているんだろう。ただのバグだと、データの塊だと割り切って削除してしまえばいいと。

それがGBNにとって最善の選択なのはわかっている。だけど、それは本当に……俺たちに、ダイバーにとって最良の選択肢なのか？

俺たちにはわからない。

チャンピオンも……キョウヤさんも、同じように悩んでいるんだろうか。それとも、覚悟を決めて、汚名を被るつもりでいるんだろうか。

その答えは、この扉の向こうにある。

エミリアさんが開けてくれた扉を潜った応接間にいたのは、チャンピオンだけじゃなく、ロンメルさんも、そしてあのゲームマスターも一緒だった。

「待っていたよ、『トライダイバーズ』。早速で悪いが、君たちに持ちかけたのは他でもない……」

「……サラの話、ですか」

サラ、という名前が俺の口から飛び出た途端に、柔和な雰囲気も纏っていたロンメルさんの視線に、ゲームマスターの背中に緊張が走る。

なるほどな。運営は当然として、ロンメルさんはもう既に覚悟を決めてきた側つてことか。

だったら俺から言うことはなにもねえ。血も涙もないだとか、そう罵ることぐらいはできるのかもしれないけど、ロンメルさんはきつと、そんな軽い気持ちでここにいるわけじゃない。

一人の人間が覚悟を決めたつてんなら、それがよほどの過ちでない限りは口を挟むべきじゃない。父さんの、師匠の言葉だ。

サラを消そうとしていることは間違いないのかもしれない。だけど、消さずにいれば、GBNもそのまま消滅する。

そんなヤマアラシのジレンマの中で、GBNを、この世界を守ると決めたのがロンメルさんの「答え」だつてんなら、俺たちがそれに口を挟む権利はない。

「わかっているなら話は早い。単刀直入に言おう。君たち『トライダイバーズ』に私は、再び結成する有志連合に参加してもらいたいと考えている」

「有志連合……」

キョウヤさんが言ってること自体はわかる。でも、再びその集まりができて、今度はなにをするんだ？

そんな疑問を抱いた俺が首を傾げると同時に、今まで俯いて黙り込んでいたチナツが前に歩み出て、毅然とチャンピオンに問いかける。「チャンピオンの申し出はわかりました。でも……アタシたちが有志

連合に参加するメリットと、その目的がわかりません」

「……失礼なのはわかってます。目的を、聞かせてくれますか……？」

「俺からもお願いします、チャンピオン！」

マフユもまたチナツに追従する形でそう言い放って頭を下げる。

俺もそれに倣って、深々と礼をする。

キョウヤさんは二人の様子にふむ、と小さく頷くと、ロンメルさんとゲームマスターを一瞥し、二人が構わないとばかりに目を伏せたのを確認して言葉を紡ぎ出す。

「わかった。状況がわからないのでは君たちも混乱するだろうからね……現在、我々有志連合はサラ君の身柄を確保している」

「それって……」

俺はソファに腰掛けているゲームマスターを横目で見遣ると、キョウヤさんへと視線を戻して身を乗り出す。

まさか、サラを消滅させる予定を早めるだとか、そんなことはないのかもしれない。

けど、チャンピオンとゲームマスターが組んでいるなら、なにかの思惑があってもおかしくはないはずだ。

「そう警戒しないでほしい。我々有志連合がサラ君の身柄を預かっているのは、レイドバトルの期日までにサラ君とGBN、その両方を救える手立てを探している意味合いもある」

「サラと、GBNの両方を……それはあるんですか、キョウヤさん！」
「落ち着いてくれ、ユウヤ君。我々もまだそれについては探している最中だ。だから、少なくとも……レイドバトルの期日までの間であれば、我々有志連合はサラ君を運営に引き渡さず、消させないことを保証する。それが君たちに提示できる最大限のメリットだ」

「……」

すぐに首を縦に振れるような内容じゃない。レイドバトルの期日まではあと数日ってところで、裏を返せばそれまでの数日間だけはサラの命を保証するけど、その後は容赦をするつもりはない、ということだ。

だけど、俺たち三人じゃ、サラとGBNの両方を助ける方法を見つけれなかった。

だったらせめて、あと数日の命だとしても、サラを生かしておく。それだけでも有情だ、って話なんだろう。

ここで噛み付くことは簡単だ。だけど、俺たちには手札がない。言っつてしまえば、サラを消したくないと思っっているだけじゃ、チャンピオンを、ロンメルさんを、そしてゲームマスターを説き伏せるだけの材料にはならないってことだ。

想いだけでも、力だけでも。大好きなガンダムSEEDの言葉が、重たく両肩にのしかかってくる。

力がなければ想いを貫き通せない。想いがなければその力は暴力になる。

だけど、その両方が綺麗に揃ってくれることは滅多にない。

想いを取るか、力を取るか。きつとロンメルさんも、キョウヤさんも、苦渋の選択の末に、妥協案として、数日間だけサラを生かす、という答えを選んだのだろう。

そして、俺たちには力がない。

サラを生かして、GBNも救えるだけの力が。

もしもその方法があるんだったら、俺はそっちに賭けたいと思っっている。だけど、たった数日でそんな方法が見つかるのかどうかで考えれば、その答えはわかりきったことだろう。

「……わかりました、俺たち『トライダイバーズ』は有志連合に参加します」

「ユウヤ……！」

「落ち着け、チナツ。キョウヤさんも、サラとGBN……両方を救う方法を探してくれてる。だったら俺は、その可能性に賭けたい」

夢物語だと笑いたければ笑え。それでも俺は、サラの命を奪ってまでGBNを守る、という選択だけは選びたくない。

どっちも助ける。その方法が砂漠の中に落とされた一粒のダイヤモンドを探すぐらいに過酷なものだとしても、あと数日という猶予でそれが見つかる可能性に賭ける。

だからこそ、サラが運営に引き渡されない内に、それを探す。そのために有志連合へと参加するのだ。

「それが君たちの答えというわけかね？」

「はい。俺は……有志連合に所属します。だけど、サラの命を諦めたりなんかしません。ロンメルさん」

「……若さか。しかし、感情論で世界は救えない。もしもキョウヤや君たちがサラとGBNの両方を救う手立てを見つけ出したのなら、私もそれに従うつもりだ。だが、君たちが有志連合に所属するというのなら……その手立てが見つからなかった時の覚悟も問われる。それだけは言っておこう」

専門的なことはなにもわからない。

プログラミングだってハローワールドが精々な俺たちに、サラを救う手立てが見つけれられる可能性は限りなくゼロに等しいと、ロンメルさんはわかっているからこそ釘を刺してくれたのだろう。

俺たちは、キョウヤさんに一礼すると、踵を返して「AVALLON」のフォースネストを去る。

必ず、なんとしても見つけなきゃいけない。サラを助ける方法と、GBNを助ける方法、その両方を。

決意を込めて、俺は固く拳を握り締めた。

諦めたりなんてするものか。そんな道理は、俺たちの無理でこじ開けてやるんだ。



そう意気込んで啖呵を切ったはいいものの、中学生が三人で考えたところで文殊の知恵になるわけもなく、俺たちは日数だけが減っていくのに連動して、精神がすり減っていく日々を送っていた。

サラが消える。そのことばかりが俺の、マフユの、チナツの頭を埋め尽くす。

メッセージが届いた通知音がびこん、と間抜けに響いたのは、言葉もなく剣呑な雰囲気がフォースネストに渦を巻いていた、その時だっ

た。

「ユウヤ、メッセージ来てるわよ」

「ああ……でもこんな時に誰からだ？」

ウインドウを開いてメッセージを確認すると、その送り主は「ビルドダイバーズ」とかいうフォースからだった。差出人は「リク」って名前らしい。

リク。そういや有志連合戦の時にそんな名前のダイバーがいたよ
うな気がする。

前にガンダムベースで会った三人組の中にもリク、って名前の男子
がいた気がするけど、多分偶然だろう。

藪から棒にいきなりなんだと首を傾げながらもメッセージを読ん
でみれば、そこに記されていたのは、思わず目を疑うような内容だっ
た。

【From:BUILD DIVERS】

【To:トライダイバーズ】

【Message:初めまして、「トライダイバーズ」の皆さん。俺は
フォース「BUILD DIVERS」のリーダーをやってる、リクっ
ていいです。突然の連絡ですみません。最近話題になってる「サラ」
のことについて、俺たちから皆さんに伝えたいことがあります。GB
Nとサラ、その両方を救うための方法が見つかりました。詳しくお話
したいので、どうか俺たちのフォースネストまで来てくれませんか」
サラと、GBNの両方を救う方法が見つかった。それが本当なら、
願ってもないことだ。

もちろんこれが嘘の可能性もある。だけどそれは運営の発表と同
じで、相手に嘘をつくメリットがない。

マギーさんが言ってたことを思い出す。俺の記憶が確かなら、サラ
は「ビルドダイバーズ」の一員だったはずだ。

「ユウヤ君……」

だったら、尚更そうだろう。

マフユが心配そうな視線を向けてくる。だけど俺は、それを真正面
から受け止めて、力強く頷き返す。

「ああ、大丈夫だぜ。マフユ。リクってやつのことを……俺は信じる。信じたい。もし本当にサラとGBN、両方を救う方法があるなら、それに賭けたいって気持ちは嘘じゃねえ」

「アンタならそう言うと思ってたわよ」

「チナツ」

「当然！ アタシもそれに乗るわ！ サラちゃんと会った時間は、言葉を交わした時間は短いかもしれないけど……それでもあの子は生きてるって、生きたいってそう願ってた！」

「……うん……あの子は泣くのを堪えてた。私もいっぱい泣いてきたからわかる……だから、ユウヤ君」

「ああ……行こうぜ、チナツ、マフユ！」

二人の意味も確認できて、同意が得られたってんならあとは行くだけだ。

どれだけ俺たちが頑張っても見つからなかったその答えに「ビルドダイバーズ」が辿り着いたなら、それを信じて進む。

それがどんな茨の道であったとしてもだ。



「初めまして、『トライダイバーズ』の皆さん。俺、リクっていいいます。今回はいきなり連絡したのに、来てくれてありがとうございます」

その「ビルドダイバーズ」が所有しているフォースネストが存在するエリアまで出撃した俺を出迎えてくれたのは、ジャージの上に胸当てをつけているダイバールックの男子だった。

なんだろうな、こうして面と向かって会ったのは初めてなはずなのに、全然そんな気がしないのは不思議なもんだ。

リクが差し伸べてきた手を握り返しつつ、俺は記憶を辿っていく。

「初めまして、リクさん。俺はユウヤ。カミキ・ユウヤです」

「カミキ……？ ああ、違ったら申し訳ないんですけど、もしかして、俺たち……ガンダムベースで会ったこと、ありませんか？」

リクさんは俺の手を握ったまま、きよとんと目を丸くしてそう問い

かけてくる。

リク。ガンダムベース。

その二つが符合するような出来事なんてあったかと記憶の引き出しを片っ端から開け放っていけば。

「もしかして……ミカミ・リク、なのか？」

「やっぱり！ はい、俺、ミカミ・リクです！ あの時の！」

そういえばストライクスフィーダを作るためにガンダムベースに行った時、会ったことがあったな。

まさかGBNの、有志連合戦の立役者がその時のミカミ・リク本人だとは思ってもいなかったけど、世の中珍しいこともあるもんだ。

ってことは、その隣にいる帽子と眼鏡の男子がユキオさんで、ピンク髪に猫耳の女の子がモモカさんってところか。

まあ、リアルの事情をあれこれ聞き出すのも野暮だからこれ以上は言わないでおこう。

「奇妙なこともあるもんだな……ああ、ガンダムベースでも言ったけど、俺のことはタメで構わないぜ、リク！」

「わかった。じゃあ俺もそうするよ、ユウヤ！」

もう一度固い握手を交わして、俺たちはそんな運命の悪戯に唇の端を吊り上げて笑う。

ただ、ここに来た本題はそっちじゃない。

握手を解きつつ、俺はリクの真っ直ぐな瞳を見据えて問いかける。

「それで、サラとGBNの両方を救う方法が見つかったって、本当なのか？」

「うん、だけど……確率は高くない。今の段階では五パーセント。それでも可能性はあるって思っただけで、手当たり次第に色んなフォースにアライアンスを組んでくれませんか？、声をかけてただけ……」

「大体が有志連合側に回っちゃった、ってことか……」

サラとGBNを両方が救えたとしても、その成功確率が五パーセントと聞かされると、確かに説得材料としては弱いだろう。

でも、リクが言った通りに可能性はある。

だったら、俺の心は変わらない。俯くリクの肩に手を置いて、俺は

力強く言葉を紡ぐ。

「わかった！ 俺たち『トライダイバーズ』は……申し訳ないけど、有志連合に加盟しちまつてる。だけど、有志連合にいても、俺たちはサラとGBN、両方を救う方法を見つけたお前たちに全部を賭けて、出来ることならなんだってやる！」

「ユウヤ……」

「アライアンスとして協力はできねえかもしれねーけど……有志連合の中にいたって、俺たちにできることは必ずあるはずだ！ 例え汚名を着ることになったとしてもだ！」

俺の言葉が意味するところはただ一つ。その方法が失敗すればGBNがどうなるかはわからないけど、有志連合の連中に後ろ指をさされるであろうことは承知の上だ。

それでも、チナツとマフユは静かに、だけど力強く頷いて俺の言葉に乗ってくれた。

ありがてえ限りだ。いい幼馴染といい彼女を持って、俺はとことん幸せ者だよ。

「その通りだよ、『トライダイバーズ』、そして『ビルドダイバーズ』。そこに希望があるのなら、死中に活を見出すのみだ」

「アトミラーさん！ 来てくれたんですね！」

俺たちが決意を固めた直後に部屋のドアを開いたのは、あの「GH C」を率いるアトミラーさんだった。

よく見ると、その隣には巫女服を動きやすいように改造した女の人と、その人に隠れるようにしがみついている薄紫色の髪をした女の子もいる。

アトミラーさんの家族なんだろうか。いや、詮索するのは野暮か。

「残念ながら我々『GH C』も既に有志連合へと組み込まれてしまったがね……だが、我々にも意地と覚悟がある。ユウヤ君。君と気持ちは……この心は同じだと言っておこう」

「それじゃあ……！」

「我々は稀代の大罪人になるか、或いは英雄になるのやもしれんな

……と、冗談はともかくだ。リク君。寡兵にはなるかもしれないが……僕たちも君に協力させてほしい」

アトミラールさんがそう言ったのに続く形で、ドアの向こうで待機していたのであろう何十人かのダイバーが、一斉に部屋になだれ込んでくる。

言い分はそれぞれだったが、概ね皆、サラを消すという選択肢には反対だつてところは同じだった。

中にはクジヨウ・キョウヤは自分の獲物だと主張してた子供もいたけど、まあそういう理由があつてもいいよな、うん。

「これで役者は揃つたつてわけか……燃えてきたな！」

「ああ、絶対に……サラを助け出すんだ！」

盃を交わすように、拳と拳を軽くぶつけ合つて、俺とリクはそれぞれの決意を固める。

ああ、そうだ。あの小さな命を消させなんかするもんかよ。

絶対に、不可能を可能にしてやるんだ。俺の拳で、俺たちの力で。

EX. 03 「第二次有志連合戦」

EX. 03 「第二次有志連合戦」

「有志連合の諸君！ GBNの運営により修正プログラムが完成した。本日これより修正プログラムを実行する！ これを限りに、ELダイバーによるGBN崩壊の脅威は打ち払われる！」

そして、とうとうやってきたレイドバトル当日。キョウヤさんは「AVOLON」のフォースネストから、全てのダイバーに向けてそう宣言する。

言い換えるならそれは、サラを消すという事実を公表しているようなものだ。だけど、俺たちに動揺はない。

その宣言への歓声上がる中で、予定調和とばかりに空中へとウィンドウがポップする。

『チャンピオン。有志連合の皆さん。もう一度お願いします。俺達の仲間を……サラを返してください！』

リクだ。無理を承知で、有志連合の皆やキョウヤさんにまずは要求を突きつける。

当然のようにそれはゲームマスターに却下されたけど、それはあくまでブラフでしかない。

フット・イン・ザ・ドア。ブラフである初めの要求を取り下げる代わりに本命の要求を突きつける、交渉の常套手段だ。

『可能性は高くないけどGBNは壊さないしサラも消させない。俺たちにはそのための用意があります！』

「嘘をつくな！ そんなものがあるわけないだろ！」

リクの口から、二発目の矢が放たれる。

そしてこれもまた、本命の作戦を押し通すためのブラフであることを、俺たちはよくわかっている。

殺気立ったダイバーたちを宥めるように、そうじゃなければその怒りを代弁するかのようになり、キョウヤさんの隣に立っていたロンメルさんが、リクへと向けて声を荒らげた。

「君の言う可能性というのはたかだか五パーセント程度のものだろう

!? そんな低い可能性に、GBNの未来を託すことはできない!」
『でも、可能性はゼロじゃありません!』

「その低い可能性に賭ける価値があるというのか?」

「キョウヤ!」

「あります!」

ロンメルさんの制止を振り切って、キョウヤさんはリクへと問いかける。

価値のあるなしでいえば、あるに決まってるよな。

だけど、皆が皆そう考えられるわけじゃないことだつてわかってる。それを示すかのように、有志連合として集められたダイバーの中からは、当然のように反発の声が上がっていた。

「ふざけるな!」

「GBNを潰す気か!」

「わがままもいい加減にしろ!」

わかっちゃいるが、ちよつとムツとくるな。

でもここは、俺たちも黙って見ることが最善なのはわかっている。チナツとマフユの視線に、大丈夫だと視線で答えて、俺は次の言葉を待つ。

大事なのはここでリクの言葉に相手が噛み付いてくれるかどうかだ。そして、ここはガンプラバトルをするための場所で、サラを消すという選択肢をとった筆頭は、多分キョウヤさんじゃなくてロンメルさんだ。なら。

「馬鹿げている! 君の言う可能性とは言うなればランク外のフォー스가ほんの数機で並み居るトップランカー達の群勢を相手に勝利を得るようなものだ。そんなものはないに等しい!」

どうやら初めの賭けには勝ったようだな、リク。

ロンメルさんの言葉は、これからリクたちが持つていききたい展開へと誘導するには十分すぎるし、お釣りが来るようなものだった。

静かに吊り上がっていく唇の端を噛み締めて、俺たちはウィンドウの中で大勢からの批判を受けても尚毅然としているリクを見つめる。

『だったら……俺達がそれを実現できたら、不可能を可能にする力が

俺達にあると証明できれば俺達のやり方に賭けてくれますか?』

「そんなことが可能ならばな」

——かかった。

きつとここで、リクもほくそ笑んでいたことだろう。

なんにしても、ゲームマスターから直々に言質を取れたのはデカイ。そしてここがGBNなら、ガン普拉バトルをする場所なら、民意を問うのは投票でも多数決でもないはずだ。

『ならば勝負です! ガン普拉バトルで決めましょう!』

それを示すかのように、リクは画面の向こう側から、一つの挑戦を有志連合に、チャンピオンに突きつける。

『ここはGBNです。プレイヤーの意思決定は、多数決でも誰かの一声でもない! ガン普拉バトルで決めさせてください! 俺たちに……方に一つの可能性を貫き通す力があると、証明させてください!』

「なにを言っている!」

ゲームマスターがリクへと一喝したのを、まるで聞こえなかったかのようにキョウヤさんは前に歩み出て、その挑戦を、リクが放った本命の矢を真正面から受け止めていた。

「よかろう! そのチャンスを君たちに与えよう! フォースバトル形式は変則フラッグ戦。バトルフィールドは我がフォースネストのある、メトロニア・サーバー……参加資格は有志連合参加フォース及びビルドダイバースとそのアライアンス!」

『俺たちの勝利条件はフラッグであるサラの奪取!』

「我々の勝利条件は君たちビルドダイバースの殲滅……! 戦力比は二万対一以上。もし我々を打ち負かすことができたなら、君たちの計画の可能性に賭けてみよう!」

そのあとのことはもうどうでもよかった。ゲームマスターが泡を食ってキョウヤさんに噛みついてたけど、元々それができるならって言い出したのはあんたの方なんだから仕方ないよな。

そして、ロンメルさんがケジメという言葉を持ち出してきた辺り、やっぱりキョウヤさんの本心は、俺たちと近いところにあるらしい。

『僕たちの未来を決める！ このガン普拉バトルで！』

【Gunpla Battle Accepted!】

そうして、舞台の幕は上がった。

有志連合とビルドダイバーズで戦って、勝った方が言い分を通す。いいね、わかっちゃいたけどこういう展開は嫌いじゃない。

次々と、「AVOLON」のフォースネスト近辺に待機していたダイバーたちが、容赦はしないとばかりに各々のガン普拉を展開する。

「行くわよ、ユウヤ、マフユ！」

「ああ、行くぜ！」

「うん……！」

俺たちもそれに倣う形で、ストライクスファイダーを、ウイニングロードアストレイを、そしてGージエミニアンを出現させた。

そう、このバトルは有志連合とビルドダイバーズの戦いかもしれない。だけだな。

だけど、誰も有志連合からビルドダイバーズに寝返っちゃいけないって、そんなことは一言も言っていないよな？

もちろんこれが背信なのは理解している。

もし負けた時は、俺たちはさぞかし盛大に後ろ指をさされることだろう。

だけど、サラを消すという選択肢に同意できなかったダイバーは、俺たちだけじゃない。

作戦開始の時までは有志連合のフリをしながら、ビルドダイバーズの作戦が開始されると同時に寝返ってリクたちを支援する。

それがアトミラルさんの考えた、有志連合に所属しているながらもビルドダイバーズに協力するための方法だった。

だからまだ、事を起こす時間じゃない。

白い制服に着替えたキョウヤさんとロンメルさんたちがフォースネストへと引き返していくのを見送りながら、俺は唇の端を吊り上げて、この前の有志連合戦と同じポジションである「遊撃部隊」として進撃する。

ビルドダイバーズの作戦はこうだ。

自作の高速シャトルを利用して、大気圏外から「AVALON」のフォースネストが存在しているこの場所まで一気に接近する。

俺たちが事を起こすのは、その第一陣としてビルドダイバーズ側が戦端を開いたその時だ。

だから、あと少しの辛抱だ。待つてくれよ、サラ。必ずリクたちはお前を取り返しに行くし、俺たちはその手伝いをさせてもらう。

たった一つの小さな命。それを救うためだったら、汚名だってなんだって被ってやるし、世界の一つや二つ、救ってやるよ。



『上空から接近する機影を確認！ 数は……三機です！ 機体を照合、ビルドダイバーズです！』

『なに……？』

『上からだ……まさか、ロータス卿か！』

まだ生きている有志連合側の回線から、状況を確認する。

どうやら戦いは始まったみてーだな。

だったら、そろそろ俺たちも事をおつ始める時間か。

近くを警戒しているフリをしていた、「GHC」制式仕様として灰色と青のツートンカラーに塗装され、105ダガーのビームライフルとシールドを装備しているウインダムとアイコンタクトを交わして、俺たちもまた一つのタイミングに備える。

EWA C 装備のストライカーパックを背負っているウインダムがレドームを作動させて、同じように各地に潜んでいる「GHC」の部隊とセンサーとレーダーを繋ぐ。

そして、浮島に身を隠していた二隻の巨大な戦艦が、さながらビルドダイバーズを迎え撃つかのように空中へと浮かび上がった。

「さて、親愛なる有志連合の諸君、私だ。「グローリー・ホークス・カンパニー」総帥……否、総統、アトミラルだ。この戦いを始める前に、我々から諸君らに送る言葉がある。僅かな時間を頂戴するが、聞いていただきたい」

『激励のつもりか、アトミラール?』

「ふっ……そのつもりだよ、ロンメル君。さて……我々から諸君らに送る言葉は一つ。『心に従え』。繰り返す、『心に従え』。この世界を守りたいと思うその心に、そして……サラ君を助け出したいと思う、その心に!」

オーブンチャンネルで開かれた通信ウィンドウの中で、アトミラールさんはいつもの軍服をキョウヤさんのように脱ぎ捨てると、その下から宇宙戦艦が活躍するアニメとのコラボ記念衣装である総統のダイバールックに姿を変える。

それと同時に、近くにいた「GHC」のウインダムは装甲色が深緑へと変わっていき、メインカメラの色も黄色へと、そして戦闘態勢を示す赤色へと変わっていく。

『な、なんだ!? 急に「GHC」のやつら、色が変わって……!?!』

『それだけじゃねえ! ビルドダイバーズのシャトルを見る!』

『あの機体……カークス・ロストのサザンクロスとデューガ・ギスピスのX1.5!?! 宇宙海賊共め、ビルドダイバーズ側についてたつてことかよ!?!』

どうやら作戦は始まったようだな。

アトミラールさんとアリカさんが浮上させた二隻の巨大戦艦からは、同じように色を深緑にリペイントした航空隊やモビルスーツが次々に発艦していく。

だったら俺たちも、有志連合のフリをしてる必要はもうねえつてことだ!

「——ッ! 総統閣下より合図来ました! 総員に通達! 『心に従え』、繰り返す、『心に従え』!」

「総員、陣営転換! 偽装解除後、全艦戦闘配置! MS、MAは直ちに発艦! これより我々はGBNにとつての侵略者となる。されど輝く鷹の名のもとに、我ら恐れる物は無し! 各員の奮起に期待する!」

『う、撃ってきた!? 裏切りやがったのか!』

近くにいた「GHC」のウインダムが広域通信で有志連合の中に潜

んでいる「裏切り者」たちへと通達すると同時に、無警戒で近くを守っていたアデル頭のガンダムAGE-3フォートレスに攻撃を加えていく。

『おい、「トライダイバーズ」！ なにやってんだ、支援を——』

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

『まさか、お前らも……うわあああつ！』

アデルフォートレスを一撃の元に撃墜して、俺たちもまた引き返せないところに足を踏み入れる。

ここから先、俺たちはGBNの裏切り者だ。

勝とうが負けようが後ろ指をさされることになるだろう。

だけど、そんなの知ったことか。決めたことは貫き通す。師匠の教えだ。

「絶対にサラを助けるんだ……行くぜ、チナツ、マフユ！」

「わかったわ！」

「……うん、ユウヤ君！」

『く、クソツ……たつた三機とほんの少しが裏切っただけだ！ 全員、火力で裏切り者の始末を——』

「させない……っ！ ユウヤ君、チナツさん、GHCの皆さんは上に飛んで……！」

残ったモビルスーツ隊が俺たちへと銃口を向けてきたのを合図にして、マフユのG-ジェミニアンが、右手のバスターライフルの下に合体していたビームライフルを左手に持ちつつ、その両方から照射ビームを放って回転する。

いわゆるローリングバスターライフルってやつだな。

その威力は絶大で、攻撃を仕掛けようと試みていた多くのガンプラを光の奔流が舐め取り、溶かしていく。

『状況はどうなっている!?』

『わかりません！ ですが、識別信号の変化は二千以上！』

『おのれ、アトミラール……やってくれたな！ 識別信号が変わった機体への回線を遮断しろ！ 数が二千増えたところで、一万八千を有するこちらの有利には変わりない！ 包囲し、徹底的に殲滅するのだ』

！』

ロンメルさんのその言葉と同時に、有志連合側の回線が遮断される。

これでいよいよ俺たちは一万八千の戦力を敵に回したってことだ。周辺からも裏切り者を許すなどばかりに滲み出ている殺気が、びりびりと脊髄を伝って駆け抜けてくる。わかっちゃいたけど、武者震いがするな。

「さて……『海賊皇帝』とクーコが暴れてくれたおかげで、宇宙海賊連合で生き残ったのは俺たちとベルーナ、ミートローフだけか……だが敵さんは大分混乱しているようだ、行っておくか？ デューガ」

「ああ、そうだな、カークス……最後の火花だ、存分にチャンピオンの邪魔をしてやる！」

ビルドダイバーズのシャトルを護衛していた二機のクロスボーンガンダムの改造機の内、1・5ガンダムのバインダーを四つ背中に装備していた機体が、手にしていたショットランサーの先端に装備されていた小型の核弾頭を撃ち放つ。

『核弾頭だ?! 宇宙海賊共め……! 各機散開、対空防御を厳にしろ!』

『間に合いません、うわあああつ!』

『落ち着け! 俺たちの最優先目標はあくまでもビルドダイバーズだ! シャトルへの攻撃を絶やすな!』

各地に潜伏していた「GHC」のEWACウィンダムを通して伝わってくる情報を頼りに、俺たちは押し寄せてくる有志連合のガンブラを跳ね除けて、前に進む。

作戦の第一段階は成功したといってもいいのかもしれない。

だけど、問題はここからだ。

「チナツ、マフユ! わかってるよな!」

「ええ、アタシたちの最優先目標はビルドダイバーズの直接援護!」

「……そのためには、消耗を避けながら進んでいく……!」

アトミラールさんの策略のおかげで戦場は混乱している。だけど、それも一時的なものではない。

だから、リクたちを援護するためには迅速に行動して合流する必要があるのだ。

そのためには、各地に配備されている有志連合のガンプラとの交戦は避けられないけど、極力エネルギーを使わないためにも、拳法が主体の俺が前に出て倒す。中々難しいミッシェンだけど、サラを助けるためには泣き言なんて言ってる暇なんかあるわけねえ。

『ええい、裏切り者が！』

『何をするつもりかは知らないが、ここから先に行けると思うなよ！』
「行けるか行けないかじゃねえ！ 行くんだよ！ バーニングバースト始動！ 次元霸王流、波動裂帛拳！」

立ちほだかったガンダムヴァーチェとガンダムデユナメスのコンビに波動裂帛拳を叩き込んでテクスチャの塵へと還すと同時に、リーダーを注視しながら俺たちはリクたちの合流を目指して進んでいく。

画面を見る限り、リクたちは谷間を伝って「AVALON」のフォースネストに接近しようとしているらしい。この辺は事前の計画通りだな。

一方で俺たちが「遊撃」の名目で配置されていたのはどのゲートにも比較的近い場所であって、ゲートとは全く違う方向にある峡谷に到達するには、どう見積もっても時間がかかる。

それまでにリクたちがやられないことを祈るだけだけど、あいつらだって死線を切り抜けてきたんだらう。

だったら、それを信じて進むだけだ。

接近してきたカット・シーを桜花紅蓮脚で蹴り飛ばして、俺たちは状況を俯瞰するために一度上昇する。

「さて……我々は直接本丸を狙い撃つ。デスラー砲、発射態勢」

「了解、本艦『グローリアス・ジョージ』は総統の『イラストリアス・ウェールズ』に続きます！ 射線上の味方は迅速な退避を！」

アトミラールさんが通信ウインドウごしにそう呟く。デスラー砲ってのは確か、事前の説明だと艦底部に設置されてる特装砲のことだったか。

ローエン格林以上の威力を誇るらしいそれを直接「AVALO

「N」のフォースネストへとぶち込むとなれば、射線上にいたら大惨事だ。

レーダーで位置確認をしつつ、俺たちはデスラー砲の範囲外からリクたちに合流するためスラスターを噴かす。

その途中で眼下に見る機影の中に、どっからどう見てもデジタルなモンスターというかウオーグレイモンみたいな機体がある。クロード有志連合側のゴツグを斬り裂いている姿が目映える。

なんというか、まあデスラー砲をぶつ放す戦艦がスキャンできてるんだからシステムが弾かなかったってことはあれもありなんだろう。

それに、有志連合と敵対してるってことは俺たちの味方ってことだからな。そんな珍しい機体を一瞥しつつ、上空からの攻撃を加えてきたデインを、俺は回収していたビームピストルの連射で蜂の巣にして叩き落とす。

「デスラー砲、発射」

「デスラー砲、発射！」

『させん！ 斬り裂け、天空の刃！ EX……カリバーツ！』

二隻の巨大戦艦から、有志連合の航空部隊の多数を巻き込みながら撃ち放たれた真紅の閃光を、「AVOLON」のフォースネストから飛び出してきた一機の機影が対峙する。

ガンダムAGEⅡマグナム。色が白くなっていたり、各部の形状が変わっていたりしてるけど、紛れもなくチャンピオンの機体だ。

前に「シャドウロール」へと、ミアアへと放ったのとは段違いな出力のEXカリバーが、デスラー砲と交錯して激突したかと思えば、信じられないことにそれを押し返していく。

——嘘だろ。

そう言いたくなるほど、巨大な戦艦が二隻揃って放った特装砲を弾き返すどころか、逆に押し返してその砲身をも薙ぎ払っていたチャンピオンの本気に、俺たちは戦慄する。

「あれが……」

「……チャンピオンの……」

「ああ、キョウヤさんの本気ってことだ……！」

特装砲を真っ正面から粉碎して、本体の戦艦にもダメージを与えるという化け物じみたその戦果は、混乱していた有志連合の士気を立て直すのには、十分すぎた。

開戦からわずか十数分で、バラバラになっていた部隊が統率を取り戻し、連携を仕掛けてくるのは中々の悪夢だ。

だけど、俺たちは乗り越えなきゃならないんだ、この悪夢を。万に一つの可能性を通すために、サラとGBN、その両方を救うという、奇跡を見せてやるために。

EX. 04 「ギャンブル・ランブル」

「我がデスラー砲が撃ち破られるだけでなく、『イラストリアス・ウエールズ』に傷を負わされるとは……流石はチャンピオンと称賛しよう。一筋縄ではいかないか……総員、対空防御を厳にせよ！」
「はっ！」

「本艦と『グローリアス・ジョージ』はこれよりビルドダイバーズの盾となる。相手も本気で挑んでくるだろう……だが、恐れるな、諸君。我らはこの銀翼の誇りにかけて最後の一兵まで戦い抜く！ 奮起せよ！ 奮励せよ！ 志を同じくする者たちよ！ 未来は誰かを犠牲にして掴み取るものではない、共に作り上げるものだ！」

虎の子のデスラー砲を失いながらも、アトミラルさんは動揺を見せることなく、座乗艦のイラストリアス・ウエールズ」と、それに随伴する「グローリアス・ジョージ」を引き連れての機動戦に移行する。
それだけじゃない。

チャンピオンがあまりにも凄まじい離れ業を披露したことで、ビルドダイバーズ陣営の士気が下がり始めたことも見越して、俺たちを鼓舞するメッセージを送ってきた辺りも用兵家って感じだな。

「あの提督さん、いいこと言ってくれるじゃない！ この誇りがある限り……アタシたちは戦える。ウイニングロードはアタシたちが作り上げる！」

「ああ！ このまま俺たちもリクと合流して、一気に電撃戦で畳み掛ける！」

「……うん、ユウヤ君！」

有志連合の包囲網を縫うように掻い潜り、かち合いそうなら迎撃する、ということを繰り返しながら、俺たちはリクの、「ガンダムダブルオースカイ」との合流予定ポイントまで機体を加速させていく。

とはいえ、ブラフに引つかかってくれたり、各地のゲート前に配備されている戦力もいるとはいえ、相手の総数は一万八千もある。

そんな有様だから、比較的手薄になっっている今だって、空を飛んでいること自体がハイリスクなことには違いない。

でも、安全策を取って進んでる時間もなければ、そもそもこの戦場に安全地帯なんてもんは存在しない。

アトミラールさんが各地に分散して配置させたEWA Cウインダムとのデータリンクによって俺たちは戦場の全貌を概ね把握できているけど、今だって、少しずつリンクが切れてきている。

だから急がなきゃいけないんだと、逸る気持ちを宥めつつ、あくまでも冷静に立ちほだかる相手を排除しながら、俺たちは前へと進む。

『こ、このッ……！ 相手がいかに「トライダイバーズ」でも臆するものかよ！』

「いいねえ、その気概……！ けどな、俺たちもはいそうですかって止まってやるつもりはねえ！ 次元霸王流！ 聖槍蹴り！」

『うおおおおっ!? 動け、動けオーヴェロン！ ぐわあああつ！』
立ちほだかったオーヴェロンのコックピットを、ジ・Oに似せた偽装外装ごと撃ち貫く。

その後隙を狙って上空からの急降下攻撃を試みていたメツサーラを、チナツのロングビームライフルによる狙撃が正確に撃ち抜いて爆散させる。

炎の華が空に咲く中、爆炎に紛れたドーベン・ウルフが放ってきたメガランチャーの砲撃をマフユの撃ったバスターライフルカスタムの一撃が呑み込んで、テクスチャの塵へと還す。

それでも相手の数は減る気配を見せないどころか、EWA Cウインダムから転送されてくるデータによれば、各ゲートの前に配備されていた防衛隊が転進してきたという絶望的な状況に陥っている始末だ。

冗談じゃねえ、つて言いたいところだけど、こんなところで弱音を吐いてちゃサラを助けるなんて奇跡は起こせない。

どの道一か八かのギャンブルだってんなら、全部を賭けると決めた以上は、飛べる限りは、立てる限りは進むんだ、前に。

「ユウヤ君、気をつけて……！」

「上からかー！」

意識が前に向いてしまっていたところに、マフユの警告がそれを引き戻す。

アラートに従って回避運動を取れば、俺がさっきまでいた位置を撃ち抜いていたビームの光条が見える。

危ねえな、あのままじゃリクと合流する前にお陀仏だった。マフユには感謝しないとな。

『ほう……今の攻撃を避けるか。ククツ……噂通りに素質はあるようだな、「トライダイバース」……!』

『そう言う貴方は……ペリシアにいたダブル眼帯の!』

『以前にも会っていたか。しかしこのような形で戦場に肩を並べる日が来るとはな……私はTHE Biine。貴公らの覚悟を試させてもらおう!』

「くっ……!」

ビームを撃ってきた主である、THE Biineさんが駆る黒い方のクロスボーンガンダム、X2の改造機に残っていた左手のビームピストルを撃ち放てば、それはラフレシアのアーマーを縮小してマントにしたような追加装甲に弾かれてしまう。

『このクロスボーンガンダムEX2、フルールクロスを舐めて貰っては困るな!』

「フルールクロスみたいにIフィールドと積層ABCマントで弾いてるわけじゃないってことは、作り込みか……! だったら!」

木星製バスターランチャーを投棄して、ビーム・ザンバーを引き抜いたフルールクロスを迎撃するために、俺もまた腰にマウントしていたリュミエール・ザンバーを手にして構える。

頭部バルカンによる弾幕をあえて真正面から受ける形にはなるけど、ストライクスファイダーのスラスターを噴かして前進を選択。

そして、振り上げたリュミエール・ザンバーとTHE Biineさんが振り下ろしたビーム・ザンバーの刃が交錯して火花を散らす。

『ほう……? クロスボーンの武装を自分なりに改良したといったところか』

「くっ……! そう言うTHE Biineさんはクロスボーン本来の武装をブラッシュアップしたってどこか!」

『良い目をしている……しかし私の武器は、EX2の真髄はそれだけ

では終わらない!』

フルールクロスと呼ばれていた追加装甲の裏に仕込まれていたであろう、テンタクラードの先端に接続されていた小型のチェーソナーが、甲高い唸りを上げてストライクスファイダーの装甲を削る。パッシブスキルとして物理に強く設定されているフェイズシフト装甲じゃなきや死んでたところだ。

ダブル眼帯っていうインパクトの強い見た目に反して、この人の実力は本物も本物だ。確かにエネルギーは切り詰めて使わなきやいけないけど、出し惜しみをしてたらここでやられちまう。

「イクシードチャージ始動! バーニングバースト、百二十パーセントだ!」

『切り札を切ってきたか! しかしまだだ! ここで貴公の覚悟を示さなければ、奇跡を起こすには程遠いぞ!』

「だったら!」

「冷静になりなさい、ユウヤ!」

バーニングバーストの出力を引き上げようとしていた俺を制止して、対艦刀を構えたチナツが、EX2フルールクロスの背後から斬りかかる。

しかし、それも読んでいたのか、ノールックで背後にブランド・マーカーを展開した左手を突き出して、ピンポイントでアロンダイトの一撃を受け流す。

そして、THE Bineさんはフルールクロスの膂力で鏝迫り合いを強引に解くと、ウイニングロードアストレイに向き直り、後隙を狙って脚部からヒートダガーを射出する。

「きやあつ!」

「チナツ!」

『どうした! 貴公らが奇跡を起こすというのなら……この私の前で躓いている場合ではないぞ!』

「……私の攻撃まで、読んで……!?!」

ヒートダガーを撃ち放った隙を狙ってバスターライフル下部に接続しているビームライフルを放ったマフユの攻撃をビームシールド

で弾きながら、THE Biineさんはそう豪語する。

あの眼帯の下にどれほど厳しい目を隠しているのか。それは見えないからわからない。

だけど、拳を交えてわかったことがある。あの人はあくまでも俺たちの覚悟を試したいだけだ。だからこそ、今こうして生きていられるわけ。

だったらその覚悟に応えなきゃ、筋が通らねえ。エネルギーを節約しなきゃいけない制約の中でも、可能性が僅かでも、この拳に込めた思いを届かせるんだ。

お返しとばかりに肩の装甲に刺さっていたヒートダガーを投げ返したチナツと、ビームライフルで牽制を加えているマフユの連携が生み出してくれた一瞬、それを見過ごす俺じゃない。

そして全てを賭けるのなら、ここしか、今しかない！

「奇跡は起こす！ 起こしてみせる！ 次元霸王流！ 聖拳突きいッ！」

『ぐっ……フルールクロスに傷をつけるか！』

「そうだとも、君たちが言う通り、奇跡を見せてやろうじゃないか！」

『……やはり立ちはだかるか！ キンケドウウウ！』

怯んで体勢を崩したフルールクロスに、太陽を背にしたクロスポーンガンダムX1のカスタムモデルが、ビーム・ザンバーを構えてEX2フルールクロスへと突撃する。

「THE Biineえッ！ ここは……彼の相手は私に任せて前に進みたまえよ、『トライダイバース！』」

『ふっ……丁度いい。キンケドウ！ 貴様とはいずれ勝負をつけねばならぬと思っていたところだ！』

「奇遇だね、私もだ……！ さあ行け、振り返るな！」

キンケドウと呼ばれた、顔の半分が包帯で覆われている女の人は俺たちにそう促すと、空にスラスターの軌跡を鋭く刻みながら、フルールクロスと切り結ぶ。

あれがTHE Biineさんの全力か。確かに今の俺じゃ、俺たちじゃ届かないのかもしれないけど、だからこそ戦い続けてみたい、

挑みたいという心が湧き起こってくる。

それでも、あのキンケドウって呼ばれてた人が作ってくれたチャンスをふいにするわけにはいかない。俺たちのやるべきことは、あくまでもリクたちの援護だからな。

「ありがとうございます、キンケドウさん！」

「……私の名前はジェーン・ケドウだがね」

「……なんかすいません、ジェーンさん」

「いいさ。悪いのは彼の重度なクロスボーン好きが昂じたところだからね……さて、話はここまでだ！」

『ヒヤツハハハハ！ さようならあ、キンケドウ！』

「行きたまえよ！」

ビーム・ザンバー同士がぶつかり合って火花を散らす中で、俺たちはジェーンさんの厚意に甘える形で踵を返す。

振り返るな、進むんだ。前へ、前へ。

クロスボーンガンダムが戦っていたことに引き寄せられたのかやってきた、ビギナ・ゼラとダギ・イルス、そしてデナン・ゲートの編隊を、疾風突きで蹴散らして、一心に合流ポイントを目指して突き進む。

だけど、そうは問屋が卸してくれないってやつなのか、俺たちの進路を阻むかのように、一筋の閃光が空を引き裂いて迫り来る。

「マフユー！」

「うん、ユウヤ君……！ やってみる！」

あの規模のビームはシールドで受け止めるにはデカすぎる。エネルギーを使わせることにはなってしまうけど、俺は即座にマフユへと支援を要請した。

前に出たG―ジェミニアンが最大出力で撃ち放ったバスターライフルのビームと、飛来した閃光がぶつかり合い、スパークする。

砲撃の火力は互角ってとこか。だけど、EWACウインダムとデーターリンクしてるってのに俺たちの射程外から、認識の外から撃ってくるなんてとんでもないやつだ。

互角にぶつかり合って空に散った閃光が晴れたそのあとに姿を現

したのは、ダブルオークアンタをベースにしたと思しき、灰色と青のツートンカラーに、アクセントとして追加装甲部分に白をあしらった、FAZZ風の機体だった。

『今の攻撃を防がれるとはね……だけど、私とこのダブルオーコマンドクアンタHWSがいる限り、これ以上の勝手をさせるつもりはないよ』

「だとしても押し通る！」

『それをさせないと言っている！』

仄かに赤いオーラを纏っているダブルオーコマンドクアンタHWSが、右手に接続していた、二連装のビームライフルから閃光を放つ。

俺は無意識に大袈裟な回避運動を取っていたけど、結果的にそれは正解だった。

ビームマグナムのように肥大し、スパークを纏ったそれは、掠めただけで耐久値がごっそり持っていかれそうなほどのもので、大袈裟に避けなければやられていただろう。

見たところ、コマンドクアンタHWSが纏っているあのオーラが関係してそうだけど、装甲まで赤熱化してないってことは、トランザムとは別の何からしい。

逆にいえば、あの機体は今ですらとんでもないってのに、まだトランザムという切り札を残している、ということだ。

想像もしたくないけど、進路上でかち合った以上はやり合わなきゃならない。

百二十パーセントのバーニングバーストで足りるのかどうかを思案しながらも、俺は左手のヘビーマシガンから放たれる弾丸の雨霰を掻い潜って、コマンドクアンタHWSへと肉薄する。

「そんなにサラを消したいのかよ、あんたたちは！」

『命を消したいわけじゃない……だけど、世界は一割の確率に賭けられるようなものじゃないの。だから私は貴方たちを討つ！ この世界を守るために！』

「それでも俺は、両方を救える、ビルドダイバーズの可能性に賭ける！ だから……ここから先は一か八かでも、無理にでも押し通ってやる

！ 次元霸王流、弾丸破岩拳！」

コマンドクアンタHWSは砲撃型だと踏んでクロスレンジに飛び込んだのはいい。

だけど、その考えは読めていたとばかりに、相手はシールドから射出したアサルトナイフを握り締めると、弾丸破岩拳をその刃で受け止めていた。

百二十パーセントのバーニングバーストと、威力に特化した弾丸破岩拳。その二つを乗せてもまだ届かないって辺り、やっぱり上を見れば果てがないと言われるだけのことはある。

『この世界でしか笑えない人がいる、この世界でしか歩けない人が、喋れない人が大勢いる！ そんな人たちにとっての幸せな世界を奪うのは、許されないことなのよ！』

「だったらサラに消えてもらうってことかよ!? あんたの話はわかった！ けどな、許されないってんなら、命を消すことだってそうだろうが！」

『……誰か一人の幸せと、多くの人の幸せ！ どちらかしか選べないのなら、私は多くを救う道を選ぶ！』

「その考えが間違ってるんだよ！ 一人じゃ確かにそうかもしれないけど、手を取り合えばどっちも助けられるかもしれないねえんだ！ その可能性が僅かでもあるってんなら！」

拳と刃が交錯する。

例え僅かでもその可能性があるってんなら、どっちも選ぶのが、どっちも助けるのが筋ってもんだろう。

最初から失敗すると決め付けていたら何もできない。例え最悪な結果が待っていたとしても、腹を括って、全力で一筋の希望に全てを賭けて、挑んでいく。

少なくとも俺は、それが貫き通すべきことだと思っている。

未熟かもしれないけど、上を見れば果てしないけど、それが俺たちの挑戦だつていうなら、笑って引き受けてやるさ。

コマンドクアンタHWSに蹴り飛ばされたことで隙を晒してしまったストライクスフィードに降り注ぐ弾幕の雨霞を、展開したビー

ムシールドで防ぎながら、俺は不敵に笑う。

諦めない。その思いがふと、聞こえてきた。

ああ、そうだ。声になって、歌に乗って、確かに聞こえたんだ。

一瞬呆気にとられた俺たちの隙をつくように、空に溶け込んでいた「なにか」が姿を現して、死神の鎌をコマンドクアンタHWSの喉元へと突きつける。

「そういうことだぜ、世界の……次元霸王流の申し子よお！」

「あなたは……！」

「なあに、名乗るほどの名前はねえ。通りすがりの、お節介焼きな死神さ」

『……っ、「死神」……！ その機体、所々変わってるけど、グリムリーパーね……！ だったら貴方は、GPDの！』

「そういうあんたはその機体……なるほどな、ナギツジ・タクマの……っつか。行けよ、『トライダイバース』！ これでも『負けない』戦いは得意でね！」

「……わかりました、『死神』さん！」

大空に姿を現した、エンドレスワルツ版のガンダムデスサイズヘルを改造したのであろう機体が、コマンドクアンタHWSの喉元に突きつけた鎌を振るったけど、赤熱化した——トランザムを発動した相手はその攻撃をすり抜けて、二基のソードビットを射出、デッドウェイトになると判断した背中的大型ビーム砲と、右腕の二連装ビームライフルをパージした。

そして、二振りのアサルトナイフを構えると、ビームサイズから二丁拳銃へと得物を切り替えたグリムリーパーへとコマンドクアンタが突撃する。

高濃度圧縮粒子を封じ込めたその刃がビームライフルショーテーターにサプレッサーを追加したのであろう武装を斬り裂くと、グリムリーパーはお返しだとはかりにナイフを振るった隙にすどい蹴りを差し込んでいく。

助けられてばかりで釈然としないものはあるけど、今の俺たちじゃあの戦いに割って入れる技量はないし、もし割って入ったとした

ら損耗と損傷は避けられない。

「釈然としないのはわかるけど……行くわよ、ユウヤ！」

「うん、ユウヤ君……！」

「……ああー！」

それをぐつと呑み込んで、俺たちは再びスラスターを全開にして戦場の空を舞う。

あくまでも俺たちの目的はビルドダイバーズの援護と、サラの救出だ。

だったら、あまりいい言葉じゃないのかもしれないけど、使えるものは偶然だろうが必然だろうが、感謝をしつつなんでも使っていく。

待っていてくれ、リク。待っていてくれ、サラ。

もしもどちらかを選べと突き付けられたなら、どちらも選ばないという、第三の選択肢を取るという決断をしたのが俺たちなんだ。

だから、今は前に進む。リクたちが言葉通りに全てを賭けた丁半博打を成功させると信じて、「ビルドダイバーズ」に全てを託して。

EX. 05 「譲れない願い」

『敵は三人だぞ！ なぜ撃ち落とせない!?』

『「GHC」が寝返ったこの状況下で無理を言うな！　せめてエミリアさんが戻ってくるまでは……!』

『泣き言言ってる暇があったら弾を撃つんだよ!』

体勢を立て直しつつはあるけど、未だ混乱している、動きが硬い敵の合間を縫う形で俺たちはリクとの合流ポイントへと向かっていた。

敵が固まっている状況もこつちとしては好都合だ。フレンドリーファイアを警戒して迂闊に弾を撃てない相手の隙間を縫うか、進路上に陣取って邪魔をしてくるようなら、排除するか状況を逆手にとつて、盾にして進む。

およそクリーンとはいえない戦術だけど、ここでやられたらなんにもならない。だったら、多少ダーティな手でも使ってやるさ。

「チナツ、状況は!？」

「進路上にいる敵は、発砲すれば互いが潰し合う位置に陣取ってるわ!　このまま全速力で切り抜ければ予定時刻通りにポイントSへ到着できる!」

「……っ、気をつけて、ユウヤ君!」

予定通りに行けばリクとの合流が間に合うって感じだろうけど、そうそう上手くいくようなもんじゃないってな。

マフユの警告通りに、混乱している有志連合機の合間を縫うようなマニニューバで俺たちに接近してくる機影が一つ。

たった一機とはいえ、チャンピオンから直々に、有志連合へと誘われたような猛者が相手だ。さっきのThe Biineさんといい、あのダブルオーコマンドクアンタHWSといい、侮れば即座にバトルアウトになりかねない。

「この……っ……!」

マフユが牽制で放ったビームライフルを装甲表面で弾き返しながら、クロスボーンガンダムを参考にしたのか、ガンダム・アスタロトのブースト・アーマーを腰とバックパックの計四基装備したその機体

は、凄まじい速度で接近すると、牽制としてブースト・アーマーからナイフを射出する。

ナノラミネートアーマーだ。それも、マフユのビームライフルを一発は弾き返している程度には作り込まれているようだった。

ビームが戦術の主体になっていく俺たちの中で、あのガンダム・フレームの相手をできそうなのは、次元霸王流をメインにしてる俺ぐらいだ。チナツも頑張ればやれなくもないだろうけど、データリンク役を担ってくれている以上、あまり前に出過ぎてもよくない。だってら。

「チナツ、マフユ、先に行け！ こいつは俺が相手する！」

「アンタはどうすんの!？」

「こいつを倒してから合流するさー！」

「ユウヤ君……わかった、私は、ユウヤ君を信じる、よ……！」

先にチナツとマフユを離脱させ、俺は複数の有志連合機がフレンドリーファイアを警戒してまごついているところに飛び込んできた、アスタロトをベースにしたと思いきガンダム・フレームが振るった大剣をリユミエール・ザンバーで受け流す。

こいつ、中々できる。剣先を通して、絶対に譲らないという思いがビリビリ伝わってきやがる。

鏢迫り合いでわかったのは、あのガンダム・フレームのパワーはストライクスファイダーに匹敵するレベルだってことだ。

「やるな、あんた……！」

『当然だ！ この世界を守る……俺は、今度こそ守ってみせるんだ！行くぞ、ガンダム・サルガタナス……リミッター解除！』

「そう来るかよ……だったらこっちもバーニングバースト、出力百四十パーセントだ！」

イクシードチャージを起動して、腕部のラジエーターフィンを展開した俺は、リミッターを解除した、サルガタナスとかいうガンダム・フレームが振るう大剣を避けつつ、回し蹴りを叩き込む。

ここで百四十パーセントを切らされたのは痛手といえれば痛手だけど、やられたんじや意味がない以上、必要経費だと割り切る他にない。

リユミエール・ザンバーでの斬り合いは、相手が剣を得物にして以上こつちが不利だ。だったら俺のやることは単純だ。

いつも通りに、磨き上げてきた次元霸王流であの剣先を打ち砕く。ただ、それだけだ。

腰にリユミエール・ザンバーをマウントしつつ、俺は回し蹴りを顔面に喰らってよろけたガンダム・サルガタナスに向けて、牽制のバルカンを放ちながら、聖槍蹴りの体勢を取る。

「次元霸王流！ 聖槍蹴り！」

『クソツ……！ こんなところで……負けてられるか！ 俺は守るんだ、このGBNを！ 今度こそ……今度こそ！』

サルガタナスを駆るダイバーは、怒りと悲しみが緋い交ぜになった咆哮を上げると、大剣の腹で聖槍蹴りを受け止める。

リミッターを解除したサルガタナスの膂力に任せた荒技だ。だけど、それを押し通してみせる辺り、相手の実力と、GBNを守りたいって覚悟は、本物なのだろう。

「あんた、名前はなんていう!?!」

『それが今聞くことかよ!』

「ああ、そうだ！ それほどの覚悟があるってんなら俺も覚悟を示す！ 俺はユウヤ……『トライダイバーズ』のユウヤだ！ サラとGBNの両方を救うために……ここであんたを倒して進む！」

『ふざけたことを……！ たった一割の確率が希望になんかなるものかよ！ 九割でこの世界は……俺たちの世界は、壊れるんだぞ！ そんなこともわからないのかよ!?!』

「ふざけてなんかいるもんかよ！」

『ツ……!?!』

俺は振り下ろされた大剣を白刃取りすると、バーニングバーストの出力に任せてそれを強引にへし折った。

ああ、そうだ。ふざけてなんかいるものか。

相手が——通信ウィンドウに表示された名前を見る限り、「アスカ」っていうらしいやつが言ってることは正しいのかもしれない。だけど、その正しさのために小さな命を、たった一つしかない命を奪う

ことの方が間違っていると俺は思う。

「サラの命を犠牲にして、それでこの世界を守ったところで！ 本当はそのあとの世界で笑えるのかよ！ 俺たちがサラを消すってことは、一つの命を消すってことなんだよ！ 次元霸王流！ 聖拳突き！」

『うわあああつ！』

そうしてガラ空きになったサルガタナスの胴体へと、俺は叫びと共に聖拳突きを叩き込む。

サラは生きている。生きていたいと願っている。

そんな願いを、俺たちが当たり前に思っていることを踏みにじってまでこの世界を、GBNを続けていって、本当に満足なのかよ。少なくとも、俺は嫌だ。両方を助けるって道があるんだったら、例えそれがどんなリスクを負うとしても、選ぶべき道じゃないのか。

『わかってるさ……だけど俺は選んだんだ、この道を！ サラを犠牲にしても、GBNを守るって道を！ だったら……あんたの言うことが正しいってんなら、俺を倒して、この戦いを勝ち抜いて、証明してみせろよ！ ユウヤあつ！』

地面に叩きつけられたサルガタナスは、まだ動けるとばかりに立ち上がると、近くに倒れていたマグギリス機のグレイズリッター、その残骸が持っていたナイトブレードを両手に取ると、ブースト・アーマーのスラスターを全開にして、突撃をかけてくる。

道は一つなんかじゃないってことは、アスカもわかってるんだろう。

だけど、進んでしまった。選んでしまったからこそ、今更引き返すわけにはいかないというその気持ちもわかる。

それまでに積み上げてきたものがあるから、選んでしまった責任があるから。

だけど、いくら間違えたって、人は何度だってやり直せる、立ち直れることも確かなんだ。

罪を背負っていく必要はあるかもしれない。それはアスカだけじゃなく俺も同じことだと、わかっている。

リクたちの計画が失敗に終わったら、俺たちは後ろ指をさされるどころじゃない。GBNを消滅させたという、永久に消えない罪を背負って生きていかなきゃいけない。

だから、今のあいつは俺でもあるんだ。名前をあいつの口から直接聞きたかったのは、そういう理由もあった。

俺の選んだ道が正解だという保証なんてどこにもない。だけど、命と世界の両方を守るといふ道を選んだのが正しいと思う心は俺だけのものだ。

「アスカ……お前の覚悟は真正面から受け止める！　そしてこの戦いに勝って、証明してみせる！　奇跡は……起こるってことを！」

『綺麗事なら誰でも、なんでも言える！　だったら俺はあんたを、ビルドダイバースを倒して……サラを、消してでも……！　この世界を守り抜く！　そう簡単に負けてなんかやるもんかよ！』

「だったらあとは拳で語るだけだ！　次元霸王流！　流星螺旋拳！」

パルマ・フィオキーナの光とバーニングバーストの炎を纏った拳が唸り、力任せに振り下ろされたナイトブレードと激突する。

がりがりと甲高い金属音を立てて、拳と剣が削れていく。

多分だけど、アスカは本当にサラを消したいわけじゃないんだろう。

だから躊躇った。だから言い淀んだ。

それでも選んでしまった道を引き返せなくなったから、意地だけで立っているのが今のあいつなんだろう。剣先から、覚悟と同時にその悲壮さがなだれ込んでくる。

アシムレイトの副作用で、指先をリユーターで削られているような痛みを覚えながらも、俺は歯を食いしばってその覚悟を受け止め、押し返す。

「おおおおおっ!!!」

『はあああああっ!!!』

ストライクスファイダの右拳が、腕のフレイムが悲鳴を上げる。その双眸を真紅に染めたサルガタナスも、苦痛にのたうつかのよう関節部がスパークしている。

それでも、負けられない。負けられないから立っている。戦っている。

サラとこの世界、その両方を救うために。たった一つの小さな命を、人柱になんかさせないために。

「負けるかよ……負けられるかよ！　サラの命は……消させちゃ、いけないんだ！　応えてくれスライダー！　バーニングバースト、百八十パーセントだあああッ!!!」

『そんな……奥の手を、まだ隠して……っ！』

「うおおおおッ!!!」

ストライクスライダーの拳は限界を超越して燃え盛る火炎を纏い、一つの赫く輝く彗星となって、ナイトブレードの刃をへし折り、ガンダム・サルガタナスの胴体にその拳を到達させた。

ナノラミネートアーマーの守りを強引に削り取り、溶解させることで引き剥がし、紅蓮を纏った流星螺旋拳は、そのままサルガタナスのコックピットを打ち貫く。

『——ッ!!!』

コックピットが潰れていく中で、アスカがなにを叫んでいたのかはわからない。悔しさなのか、悲しさなのか、怒りなのか。

あるいはその全部なのかもしれない。

それがなんであつたとしても、俺にはその思いを背負って進んでいく義務がある。

アスカとサルガタナスをテクスチャの塵へと還した俺は、呆気に取られた有志連合の機体を振り切つて、先にチナツとマフユが進んでいったポイントまでの合流を急ぐ。

一応まだ「GHC」のウィンダムからのデータリンクは生きているけど、その数はかなり減っていて、戦場の全体を見ることはできなくなっていた。

それでも最低限、チナツからのデータリンクが途絶えてないことにほっと胸を撫で下ろしつつ、俺が消耗したと見てか、立ちほだかつてきたハーデイガンの攻撃を回避する。

そして、聖槍蹴りでその胴体をぶち抜いて俺は、エミリアさんが戦

線に復帰でもしたのか、段々と包囲陣形を敷き始めてきた有志連合を蹴散らすためにブレードドラグーンを展開、牽制しながら進んでいく。

「ユウヤ君……!」

「どうした、マフユ!?」

「こつちの戦線は、もう……リクさんたちと合流したけど……もたない……!」

「わかった! すぐに行くからあと少し耐え抜いてくれ!」

どうやら先にポイントSに到達していたマフユたちは、リクたちと合流しても尚苦戦させられるような相手と戦っているらしい。

背筋に嫌な予感が走るのを覚えながらも、ポイントSへと到達したその時、俺を待ち受けていたのは、禍々しい太陽としか形容できない存在だった。

恐らくはペーネロペーを改造したのであろうその機体が背負う日輪は、紫色を内側に、蝕のように真白の光が外側に現れた二重のもの。プロヴィデンスのドラグーンユニットが背部に接続されていることであつて、その威圧感は半端なものじゃない。

『この「天地神明」がテンコが今一度問おう。お主らに覚悟はあるのか? 此度の戦い……明日明後日に悔恨を残せど、多くの者は今日この日を風化させてしまふじやろう。そうして、残る者は残り、去る者は去る。それだけの話なのじゃ。故に、我々が生んだ思いの丈の結晶があの子ならば……サラならば、いつそ我々の義が通る内に消し去つてやるのが道理というものよ!』

「それは違います、テンコさん!」

ペーネロペーの改造機から放たれるファンネルミサイルを、バルカロンと脚部のパーツから放たれるエネルギー波で撃ち落としながら、リクはテンコさん……いや、テンコ様というらしい狐面を被つた、白い髪の女の人の向けて、臆することなく言い放つ。

「サラが俺たちの生み出した思いの結晶なら……俺たちが生み出した命なら、それを消しちやいけないんだ!」

『希望に縋る気持ちはわかる……じゃがな! 勇気で補えるほど世界

は優しくはない。好きで覆るほど数字は甘くない。ましてや一時の感情で救おうなどと、その場凌ぎの覚悟や情けで加勢しようなどと言うのであれば、妾はそれを認めることはできぬ！ そのようなまじの思いあらば、この場で断ち切らせてもらおう！』

「そんな生つちよろい思いで、チナツもマフユも……リクもここに立ってるんじゃないねえ！ 俺たちの想いを聞きたいってんなら……存分に聞かせてやる！ 次元霸王流！ 疾風突き！」

「ユウヤー！」

俺はそのペーネロペーの改造機に向けて、速度に炎を乗せた拳を打つ。

テンコ様がなにを考えて俺たちの前に立ちはだかっているのか、そしてこの人がどれだけ底知れないほどの強さを持っているのかは、その気迫から、その威容から伝わってくる。

だとしても、その程度で折れる覚悟だつてんなら俺たちは最初からこの場に立っていない。それを示すために、ファンネルミサイルの雨霰を掻い潜りながら、全力を乗せた拳でペーネロペーの改造機をぶん殴った、そのつもりだった。

『なるほど……この「禍津天照」に一撃を加えるほどの覚悟は持っているようじゃな』

「その拳……ダークネスフィンガーか！」

『いかにも……このような形で肩を並べるとは複雑じゃな、次元霸王流の申し子よ。じゃがな……それでもと足掻くのであれば……その意思を、希望を、覚悟を、可能性を！ 示し、押し通してみせよ！ 臆するな、怯むな。一瞬の迷いが命取りになるぞ！』

「……ッ……！ 言われなくてもわかってる！ バーニングバースト、出力二百パーセント！」

「トランザム……インファイニティ！」

禍津天照というらしい、ペーネロペーの改造機はダークネスフィンガーを展開した掌で俺の拳を受け止めると、それを逆側に捻ることでアシムレイトの弱点である痛みのフィードバックを与えてくる。

だけど、ここで立ち止まるわけにはいかない。俺は無理やりバーニ

ングバーストの出力を引き上げて、リクの機体がトランザムインフイニティというらしい、光の翼とトランザムが合わさったシステムを発動させたのに合わせて、禍津天照を挟撃していく。

リクのダブルオースカイが、グステイニーのウイングに似たパーツが装着されているGNドライヴユニットの左側からビームランチャーを展開して閃光を放つ。

けど、禍津天照はその巨軀からは信じられないほどの機動性かつ、最小限の動きでそれを回避すると、両手の複合ユニットからメガ粒子砲を撃ち放ち、逆にダブルオースカイの体勢を崩す。

「リク！ 次元霸王流……弾丸破岩拳……ッ!？」

『甘い……あまりにも甘いぞ！ よもやそのような覚悟でこの妾の前に立ちはだかつたのではあるまいな!? 見せてみよ、お主らの覚悟を！ 本物のそれを！ お主らの我が儘か、世界の我が儘か！ それを決めるのは覚悟が全てじゃ!』

——この妾を打ち倒せずして、世界とサラの命、その両方を救うことなど叶わぬと知れ。

どこまでも冷徹に、仮面の奥に滾る激情を、やり場のない思いを隠しながら、テンコ様はファンネルミサイルを撃ち放ち、ストライクスファイダを爆撃する。

さつき一撃当てたあの時にわかった。この人もまた、世界とサラ、その両方を救う可能性に賭けたいのであれば、無理で道理を引っ込めたいのであれば、自分がその壁としての役を引き受けているのだらう。

それでも、本気であることには違いない。

チナツが放った狙撃をIフィールドで弾き返し、マフユが撃ったバスターライフルの一撃をメガ粒子砲で相殺し、その隙を狙ったリクが猛スピードで斬りかかったにもかかわらず、複合ユニットのビームサーベルで対艦刀の一撃を防いでみせる。

人間離れた芸当だ。でも、この人に勝たなきゃ先に進めないなら、この人の上に更にチャンピオンがいるってんなら、確かに躓いては、止まってはられない。

「ああ、そうだよ……負けらんねえんだ、負けてられねえんだ！ 前に進む！ それが俺たちの覚悟だ！ カミキガン普拉流奥義！ 鳳凰霸王拳！」

『護るのじゃ、「禍津日神」！』

禍津天照の背中に装備されているブレード状のユニットが展開したかと思えば、そこに埋め込まれていたクリアパーツが共鳴して、二百パーセントの出力を乗せて放たれた鳳凰霸王拳を打ち消していく。今の俺に放てる最大にして最強の技をかき消して、禍威を放つ太陽は煌々と輝き続ける。

それでも、諦めない。

はつきり言ってしまうえば絶望している。頂点に近い人が見ている景色つてのはこんなに高いものなのかと、全力を込めて作り上げたストライクスライダーですら届かない悔しさと、色んな感情が緋い交ぜになって、操縦桿を握り締める拳へと無意識に力が籠る。

ただどこで膝をついてしまえば、ここで諦めてしまえば、それはサラを諦めることと同義だ。

だから立ち上がる。歯を食いしばって、悔しさを堪えて、糧にして。

あの太陽を撃ち落とすんだ、必ず。

「次元霸王流！ 波動裂帛拳！」

『効かぬと言っておる！』

「なら——これはいかがでしょう？」

『む……？ お主は……！』

波動裂帛拳をかき消した禍津天照の複合ユニットに、突如として飛来した「なにか」が、掠めただけとはいえ、傷跡を刻む。

そうして、天を仰ぎ見れば、そこにいたのは純白の羽根を散らしながら太陽を背に佇む、前にペリシアで見た、スノーホワイトプレリウドをベースにしたと思しき機体だった。

違いがあるとすれば、各部の装甲が鎧武者を思わせる形に変化していることと、そして、七本の刀をビットのように浮遊させていることか。

「世界と幼子の命……その両方を救うとあれば、私も覚悟を示しま

しよう、テンコ様。行きなさい、少年たち。貴方たちの殿は……私が務めます」

『ふ……ふふふ……よもや、よもやじゃのう……元4位と……『七星天姫』とこんなところで巡り会うとは』

「ええ、あの時の昇格戦以来……ですが私は慢心を捨て去り、心身を鍛え直しました。故にあの日と同じだとは思わないでいただきたいですわね」

『妾の前に立ちほだかるとあらば、何人たりとも同じよ。そして妾の言葉が変わることはない。示すのじゃ——その覚悟が、世界を賭けるに値するのかどうかを！』

「満天を見よ！　そして刮目せよ、煌めくこの七星を！　天の九尾よ、このツバキと『白雪姫頑駄無』が実力、照覧あれ！」

どうやらあのスノーホワイトプレリユードの改造機——白雪姫頑駄無を操っているのは、ツバキって名前の人らしい。

元4位だとか凄まじい単語が聞こえてきたけど、状況的にはまた助けられたつてところか。

限界も限界、二百パーセントのバーニングバーストと真なるアシムレイトの両方を掛け合わせても歯が立たなかつた。テンコ様との戦いの結果だけ見れば、俺たちの敗北なのだろう。でも。

「まだ生きてる……そうだ、まだやられてないつてことは、勝機はあるつてことだ！　そうだろ、リク!?」

「うん！　俺はサラのことを絶対に諦めたりなんかしない！」

「へっ……だったら、貫き通せよ、その思い！　俺たちは、最後の砦と戦わなきゃいけないらしいからな……！」

テンコ様の相手をツバキさんが請け負ってくれた先に待っていたのは、更なる絶望だった。

フィールドを晴天が照らしているはずなのに、どういう理屈か、その機体の周辺にだけは猛吹雪が吹き荒んでいる。

リクがトランザムインフィニティの速度を活かして早めに離脱してくれたのは幸いだ。

長期戦になれば、きつと目の前にいるあの機体は、トランジエント

ガンダムを改造したのであろうガンプラは、厄介なことをしてくると直感が危機を告げている。

同時に、ここが俺たちの正念場なのだとも告げている。もう今までのような援軍は期待できない。

正真正銘、実力だけでのぶつかり合いだ。

『よくぞここまで辿り着きましたね、「トライダイバーズ」……』

「そりやどうも……そっちこそ、リクを見逃してよかったのかよ？」

『最終防衛ラインにはチャンピオンがいます。彼がどう足掻いても勝敗は最初から決している。ならば私が、このルーフエアと「トランジェントガンダム・キャメロット」がすべきことは、貴方たち、ビルドダイバーズ側についてダイバーを一人でも多く撃破、殲滅することです』

猛吹雪の中でGNパルチザンを構えて、ルーフエアと名乗ったダイバーは自分の後ろに従えていた軍勢を展開する。

近くにはよく見れば、凍りついた「GHC」のウインダムと思しき残骸がいくつも転がっていて、伊達に最終防衛ラインを任せてるわけじゃないことを伺わせた。

「きつと俺たちはいくつもの幸運に支えられてここにいる……そしてリクが行った今、俺たちの役目は！ チナツ、マフユ！」

「ええ！……ここでルーフエアさんたちの足止めをすること！」

「リクさんのところに、一人でも多くの有志連合の人たちを、行かせないこと……！」

「わかってるじゃねえか……それじゃあ、始めようぜ、ルーフエアさん！」

『愚かな……ですが、勝てぬとわかり切った戦いを挑んでくるその度胸だけは称賛しましょう』

ルーフエアさんのトランジェントガンダム・キャメロットが構えていたGNパルチザンを振り下ろし、控えていたフォースメンバーが飛び出したのを合図にして、俺たちはエネルギー量的にもダメージ的にも、きつと最後になる戦いへと挑む。

それが未来を開くための戦いだと信じて、サラとGBN、両方を救

う道だと信じて。

EX. 06 「大好きを諦めない」

リクがチャンピオンの待つところに行った今、俺たちが倒すべきなのはルーフエアさんたちだというのはわかっている。

だけど、テンコ様の時と同じようにその白亜の機体から放たれるプレッシャーは相当なもので、猛吹雪を纏っていることも含めて一ミリも油断がならない。

チナツとマフユも戦闘態勢を取って、ルーフエアさんの号令を受けて飛び出してきたフォースメンバーと思しき集団と対峙していた。

「行くわよマフユ、ここがアタシたちのウイニングロードへの分岐点！」

「……はい、出し惜しみはなし、です……！」

「わかっているじゃない……！ 行くわよウイニングロードアストレイ！ エクストリームブラストモード！」

「G—ジェミニアン、お願い……！ 応えて……PXバースト！」

赤と青、二つの光の翼が花開くかのように展開されて、迫りくる軍勢へと対峙する。

マフユのバスターライフルによる一撃がプレートメイルを纏った騎士のようなガンプラへと直撃し、それを交戦の合図として、チナツも上空へと急上昇した、ブレイヴのカスタムモデルへと狙撃を放つ。

だけど、ルーフエアさんは玉座に座す女王のように動く気配を見せず、俺と対峙していながらも脱力した姿勢で直立していた。

「王者の余裕ってか……上等だ！ その余裕、俺とストライクスファイダーが真っ向から打ち破る！ 次元霸王流！ 波動裂帛拳！」
『なるほど。炎を操りますか……ですが』

二百パーセントのバーニングバーストによって、衝撃波というよりは撃発した炎の奔流と化している波動裂帛拳に対して、ルーフエアさんは手にしていたGNパルチザンを展開すると、そこから冬そのもののような色合いを帯びた、蒼く透き通る一撃を放つ。

波動裂帛拳が荒れ狂う炎だというなら、ルーフエアさんが撃った一撃はどこまでも揺らぐことなく静止させる氷の権化だった。

ぶつかり合った火柱をも凍らせて、トランジェントガンダム・キヤメロットが纏う冷気が一層激しさを増す。

『言ったはずでしょう。足掻くだけ無駄だと……この私と「Morgran's Castle」に慢心はない。リコリス、仕掛けなさい』
『はい、お姉様！ 次元霸王流だかなんだか知らねえけどな……お姉様のためにここにくたばれよ、ストライク！』

「嫌だね！ 例え無駄だとしても、どれだけ届かないとしても、やられてない限りは……機体がもつ限り、俺は絶対に膝を突かねえ！」

『往生際が悪りいんだよ！』

リコリスと呼ばれたダイバーが駆る、インフィニットジャスティスガンダムのソールをハイヒール状に換装し、頭をトリスタンのものに置き換えた機体がグリフォンビームブレイドを展開しながら蹴りかかってくる。

でも、諦めが悪かろうが往生際が悪かろうが知ったことか。生きる限りは負けじゃない、だったら生きてる限り足掻いて、足掻いて、足掻き抜く。

それだけの覚悟を決めて、俺はサラと世界の両方を取るという道を選んだんだ。

だったら上位ランカーがなんだ、魔物だろうが化け物だろうが、怯んでなんかやるものか。

例え俺の攻撃がカスダメしか与えられなかったとしても、百万発ぶん殴れば倒れるはずだ！

「次元霸王流！ 桜花紅蓮脚！」

『アタシのインフェルノートと互角に……!?!』

「ああ、そうだ！ 例えガンプラの性能で負けたとしても……今のストライクスファイダは二百パーセント、そして俺も二百パーセントで四百パーセントだからな！」

『意味わかんねえんだよ！』

リコリスさんは怒りを剥き出しにしながら、桜花紅蓮脚でぶつかり合ったストライクスファイダを強引に弾き飛ばすと、凄まじい脚捌きで怒涛の蹴りを加えてくる。

なるほど、あれだけの實力を持つてるのに、ルーフエアさんが動かない理由はこれか。

チナツが追いかけるのに苦心しているブレイヴをトライドドライブにして、翼をガイアガンダムのグリフォンビームブレイドに置き換えたガンプラや、マフユが対峙しているジャステイマとエピオンのミキシングモデル。

他のメンバーも手練れ揃いだけど、俺が相手しているリコリスさんとガンダムインフェルノートも含めた三人が化け物じみた實力だからこそ、ルーフエアさんはわざわざ手を出すことなく、吹雪を巻き起こしながら立っているだけなのだ。

そしてきつと、この吹雪にも秘密がある。

根拠はない。だけど、俺の直感が、このままルーフエアさんたちと長期戦にもつれ込めば、負けるのは俺たちの方だと告げていた。

「次元霸王流、旋風竜巻蹴り！」

『チツ……纏った炎がバリアになってやがんのかよ、鬱陶しい！いい加減……往生しやがれ！』

バーニングバーストのおかげで今、ストライクスファイダーは炎の、焔の護りを得ているといってもいい。

リコリスさんのキックを足の甲で受け止められているのも、バーニングバーストが二百パーセントに達しているからだ。

その代償として、エネルギーは見る見るうちに目減りしていく。でも、これだって必要経費だ。

脚同士での罅迫り合いを振り解いて、今度は膝と爪先を繋ぐビームブレイドじゃなく、踵をこつちに向けて素直なキックを繰り出してきたインフェルノートの一撃には、間違いなく「なにか」が隠されている。

俺は、受け止めるのではなくそれを最小限の動作で回避して、カウンターの膝蹴りを叩き込む。

『コイツ……っ！』

「やっぱりギミックを隠してたか！」

案の定というかなんというか、ハイヒール状に改造されていたイン

フェルノートの踵からは、パイルバンカーの杭が飛び出していて、受け止めれば、やられていたと確信する。

蹴り技に特化した相手ってのも珍しいけど、キックボクシングとかムエタイとかカポエイラだとか、脚を使う格闘技とは、生身で戦ったことがあるから、やれなくはない。

だけど、慢心はそれだけで敗北を引き寄せる。油断せずに持てる力の全てを叩き込んで、ルーフェアさんを、リコリスさんを倒すんだ。

『生意気なんだよ……ムカつくぜ！ 食い下がってくるってんなら食い破ってやるよ！ 「フェアリー・シード」！』

「時限強化か!？」

リコリスさんが叫ぶと、ガンダムインフェルノートの双眸が緑色から真紅になると同時に、その速度はさつきまでとは比べものにならないほど上昇する。

そして、インフェルノートはサマーソルトキックの要領で脚部から「飛ぶ斬撃」を繰り出す。

咄嗟にビームシールドを展開して直撃は回避こそしたけど、その一撃はビームシールドを貫通して、イクシードチャージの肝であるラジエータープレートを損傷させていた。

「ぐっ、排熱が追いつかねえ……!」

『キャハハ！ アタシの一撃を殊勝に防ごうとなんかすっからだよ！』

そのまま過剰出力で潰れてろ!』

「だったら潰れる前にあんたを倒して前に進む！ 次元霸王流！ 聖

槍……蹴りいっ!」

『無駄だって……言ってるだろうが!』

コックピットにイエローコーションが明滅するのを確認しつつ、真正面からリコリスさんとインフェルノートを討ち倒すべく、俺は聖槍蹴りを繰り出す。

炎のヴェールに包まれたストライクスファイダの足が、ビームブレイドを展開したインフェルノートの脚とぶつかり合って、局所的な曇天に覆われた空に火花を散らしていく。

今度は足先をバーナーで焼かれているような痛みを、そして足の骨

が軋むような感覚がアシムレイトの代償として雪崩れ込んでくる。ただ、こんな安いもんだ。

サラの苦しみに比べれば、今も命の火を吹き消されることに怯えている、あの子に比べれば、どうってことはない！

俺は、操縦桿をきつく握り締めて咆哮を上げた。

「おおおおおッ！ ストライクスファイダー、二百五十パーセントだあああッ!!!」

『テメエ、出力が上がって……!? きやあつ!』

「そうだ……見せてやるぜ、俺の覚悟を、挑戦を！ ここでぶつ壊れて倒れたとしても！ 俺たちは……サラも、GBNも……両方を救うことを諦めたりなんかするもんか！」

インフェルノートの右足を砕いた俺は、そのままガラ空きになった胴体に左足での回し蹴りを叩き込んで、リコリスさんを地面に叩きつける。

VPS装甲に守られていても、リンファから学んだ「攻撃の衝撃そのものを相手の内部に浸透させる」一撃は、フレームを歪めて、ルーフェアさんを、氷の女王を守っていた騎士の一人を地に落とす。

これでリコリスさんは戦闘不能とはいかなくても、結構なダメージが入ったはずだ。あとは、立ち上がる前に速攻をかければ。

「次元霸王流！ 疾風突き！」

『下がちなさい、リコリス』

『お姉様……!?!』

『私は貴女を失いたくありません。なればこそ、ここから先は私が相手をいたしましたし、ユウヤ』

そう思っただけで繰り出した一撃を、GNパルチザンの穂先が受け止める。

さつきよりも幾分か声に鋭さを増したルーフェアさんは、力任せにストライクスファイダーを引き離すと、その双眸に光を宿し、今度は戦闘態勢をとって俺の前に立ちはだかった。

エネルギーの残量は余裕がないどころじゃない。それに、放熱だつて追いついていないとか、色々絶望的な状況だ。

それでも、だとしても。

魔法のように、呪いのようにその言葉を心の中で叫び続ける。

ルーフエアさんたちにも、アスカにも……有志連合にも負けられない理由があるなら、俺たちにとって理由はあるんだ。それがぶつかり合うってんなら、最後まで意地を張り通したやつが勝つ、それだけだ！

「次元霸王流！ 流星螺旋拳！」

『荒々しい一撃……ならば、近寄らせずに砕くのみ。往きなさい、GNグラキエスビット！』

トランジエントガンダム・キャメロットの背中に二枚装備されているクアンタのバインダーから、氷の刃を形成したソードビットとでもいうべきものが俺を包囲するように飛んでくる。

「だったらこっちもだ！ ブレードドラグーン、射出！」

『愚かな……自動制御に頼った無線兵器など、恐るるに足らず……！』
「なんだ!? ブレードドラグーンが、凍って……!?!」

GNグラキエスビットとその切っ先をぶつけ合っていたかと思えば、射出したブレードドラグーンは凍りつき、力なく地面へと落下していく。

一体どんな手品を使ったんだ、ルーフエアさんは。

一瞬の驚愕によつて生まれた隙を突くかのように、そして答え合わせをするかのように、突き出されたGNパルチザンがストライクスフィーダの左肩に突き刺さったところから、内部フレームが凍りついていく冷たい感触がアシムレイトを通して伝わってきた。

「まさか、この吹雪と、その機体のクリアパーツ……！」

『我が「絶凍領域」とキャメロットが纏う銀盤の冷氣……よくぞ見抜いたと称賛いたしました。ですが、それ故に貴方に勝ち目はありません』

「へっ……冗談じゃ、ねえぜ！」

凍りついた左腕を、バーニングバーストの余剰出力が生み出す熱で無理やり溶かしながら、俺はマニュアル操作で制御されているのであろう、GNグラキエスビットを出来る限り回避し、前進する。

まだだ、まだ生きている。ならまだ戦える、そうだろ、ストライクスライダー。

全身が凍りつくような冷気は、考えてみれば二百五十パーセントの、排熱限界を超えたバーニングバーストをもたせるのに利用できる。実力はともかく相性という意味で勝っているのは俺の方だ。

「それでもこのまま放っておけば全身が凍り付いて動けなくなる……！ ならその前に、エネルギーが尽きる前にあんたを倒す！ ルーフェアさん！」

『言ったはずです。貴方に勝ち目はありません』
「そいつは……どうかな！」

腰から引き抜いたリュミエール・ザンバーを展開して、俺はそれを躊躇いなくルーフェアさんへと放り投げる。

リュミエール・ザンバーを投げたのは、当たれば痛いし、避ければ隙が生まれると、そう割り切った上での、チャンスメイクとの交換条件だ。

再び距離をとってGNグラキエスビットの操作に集中しているであろうルーフェアさんに向けて、俺はその一瞬に全てを賭けた一撃を撃ち放った。

「カミキガン普拉流奥義！ 鳳凰霸王拳！」

『くっ……GNイヴェルブラスター！』

「押せよおおおッ！！！」

展開されたGNパルチザンの穂先から放たれる絶対零度の冷気と、二百五十パーセント、限界を超えた鳳凰霸王拳が激突し、相克する。

これでダメなら真正銘、本当に打つ手はない。

全身全霊をかけて、俺の全てを乗せて撃ち放った鳳凰霸王拳は、絶対零度の冷気を呑み込むかのように翼を広げ、トランジエントガンダム・キャメロットの装甲をその炎で焼き焦がしていく。

その代償として、凍りついていたところを無理やり溶かして使っていた左腕が弾けて砕ける。

左肩に走った激痛に顔をしかめながらも、俺は歯を食いしばってそれを堪え、残った右の拳に出力を集中させた。

押せよ。押し切ってくれ、スファイダ。お前と俺は、こんなところで倒れてなんかいられないんだ！

その思いに応えてくれたのか、ストライクスファイダの内部から溢れ出す余剰出力が右の拳へと集中し、凍りかけていた鳳凰の炎を蘇らせていく。

そして、その姿を取り戻した炎の鳥は、白亜の女王を、銀盤の貴人を今度こそ完全に呑み込んで、焼き尽くした。

——だけど。

『……貴方の覚悟、しかと受け止めました。ですが……ここまでです』
「まだ……立ってやがるのかよ……！」

『言ったはずです、元より勝ち目はない戦いだ。例えいくらかの兵がビルドダイバーズ側に寝返ったところで、その数は二千……一万八千の精鋭を前に、まともに戦えるはずなどない。少し考えればわかることでしょう』

ああ、そうだな。

ルーフェアさんが言ってることは確かに正しいのかもしれない。戦力差が九倍もあつて、しかも相手が精鋭揃いとくれば、リクたちが、俺たちが挑んだ戦いがどれだけ無謀なものかわかるってものだ。

でもな。

「わかつてるさ……けどな、そんなのは……諦める理由にならねえんだよ……！」

『過酷な現実を前に、強がる意味などありません。ただ受け入れて、その道を進めばいい。そうすれば余計に苦しまなくて済む……貴方も、あの、サラという子も』

「……そうかよ、けどな！ 例えあんたの言うことがどれだけ正しかったとしてもな、困ってるダチを助けるのに、理由だとか理屈だとか、そんなもんはいらねえんだよ！」

『……そのために縋り付くのが一割にも満たない希望だとしても？』

九割の確率でこの世界が崩れ去るとしても？ 貴方がたの勇気は認めましょう。ですが、勇気で数字を補うことはできない……そして、この世界でしか笑えない者がいる。この世界でしか、居場所を見出せ

ない者がいる。故に世界は守られねばならない。なにを犠牲にしたとしても……それが、現実というもののなのです……!』

とうとう限界を超えて膝をついたストライクスファイダーを、バーニングバーストの護りを失って凍りついていく関節を無理やり動かして立ち上がらせていく。

愛と勇気が何かを救うのは夢物語だと言いたいんら言えはいい。笑いたければ笑えはいい。

それでも俺は諦めない。俺たちは諦めない。諦めて、堪るもんかよ。

「行くぜ、スファイダー……ここからが本当の正念場だ!」

チナツもマフユも、通信画面にはレッドアラートが明滅しているのにもかかわらず、諦めずに戦っている。

ルーフェアさんが言う通り、俺たちが選んだ道が砂漠に落ちた一粒のダイヤモンドを拾い上げるようなものだとしても、希望の灯だけは絶やすものかと、足掻いて、足掻き続けているんだ。

そしてそれは、無駄なんかじゃない。最良最善の選択肢があるなら、その可能性を求めて立ち上がることを、誰が笑えるもんか。

ストライクスファイダーの双眸に力強く光が灯る。限界を超えたはずの、その反動を受けたはずの機体が燃え上がるように熱を滲ませ、炎を纏う。

晴らしてやるんだ、この嵐を。

吹雪の闇に閉ざされた、その先にあるものを、俺たちが持っているその気持ちを手放したりなんかしないために、一発でダメだつてんなら、百万発ぶん殴るまでだ。

「限界を超えろ、その先を超えろ、ストライクスファイダー! バーニングバーストシステム……三百パーセントだ!」

『自壊のリスクをこの期に及んで抱え込むとは……!』

「リスクなしで手に入れられる未来があるもんかよ……! あんたの理屈はわかってるさ! けどな、例え俺たちがサラを消して、GBNを取ったって、その先にずっと後悔は残る! それだけじゃねえ、またサラみたいな命が生まれれば、その命を殺し続けて、世界を続け

ていくことになる！ そんな未来……俺はごめんだ！ 次元霸王流！ 蒼天紅蓮拳！」

俺は振り下ろされたGNパルチザンの刃を、炎を纏ったアツパークットで砕くと、よろめいたルーファアさんの機体へと、迷わず回し蹴りを叩き込む。

炎を纏った一撃は、全てを凍らせる冷気の鎧を溶かして、トランジエントガンダム・カメラロットの胴体と内部フレームにダメージを与える。

『これほどの力が、どこに……っ!?』

「ここに……俺の心に、スフィードに受け継がれたストライク焰の魂にある！」

『世迷言を……!』

「次元霸王流！ 疾風突き！」

内部からの熱で装甲が溶け落ちていくのに、フレームが絶えず悲鳴を上げているのに見て見ぬ振りをして、アシムレイトから逆流してくる痛みを堪えて、俺はルーファアさんに追撃の疾風突きをお見舞いした。

三百パーセント、ストライクスフィードに無理を超えた無理をさせていたことで、コックピットには絶え間なくレッドアラートが明滅し、コンソールに示された損傷箇所は全身にまで及んでいる始末だ。

それでもいい。この一秒だけでも、一瞬だけでも、白い闇を払って光を取り戻すために、全てを燃やし尽くしてくれと、そう願う。

コックピットへとオープンチャンネルでの広域通信が飛んできたのは、ちょうどそのタイミングだった。

『まだ立ち上がるのか……!』

『諦めない……!』

『つたりめえだ……!』

チャンピオンとリク、そしてもう一人の言葉が、有志連合とビルドダイバーズに所属しているダイバーに、いや、違う。全てのダイバーに、届けられる。

『なぜそこまでする？ 元より勝ち目のない戦いだっただけだ』

『俺……あなたに憧れて、ガン普拉バトルを始めました。その強さに……決して諦めない心に憧れて。俺、ガン普拉が……ガン普拉バトルが大好きです。あなたに憧れて始めたGBNが大好きです』

リクは、絞り出すように言葉を紡ぐ。

『ガン普拉が……ガン普拉バトルが大好きだという気持ちでたくさんの人と繋がり合える。いろんな人がいろんな目標を持って、自分の歩幅で進んでいけるGBNが大好きで……そこで出会ったのが、サラなんです』

拳と槍の切っ先がぶつかり合う音が鳴っている中でも、スラストアの噴射音が轟く中でも、リクの言葉はどこまでも真っ直ぐに、心へと染み渡っていくように響き渡る。

『サラにいっぱい教えてもらった。一緒に経験した。皆との絆、ガン普拉との繋がり。楽しむこと……諦めないこと、前を向いて進むこと……ガン普拉を、大好きだったこと！』

『あの少年、なにを……！』

『黙って聞けよ、女王陛下！』

『くっ……！』

そうだ、そこに俺たちの無粋な言葉はいらない。

だから続けてくれ、リク。

そして聞かせてくれ、お前の思いを、お前の理由を、諦めないその気持ちを！

『いっぱい感謝している……』

『そうだよ！ 私だって諦めたくない！ サラちゃんと一緒に！ サラちゃんにいっぱい、笑顔にもらったもん！』

『そうだ！ 僕だって応援してもらった！ 自分を信じてって気持ち！ 変わりたいって気持ち！ 全部励ましてもらった！』

『そう、光を失った私に、もう一度道を照らしてくれた！ 仲間といられるぬくもりを、もう一度教えてもらった！』

『立ち止まり、挫けてしまった自分にもう一度前に進む力を！ 勇気をもたらったんだ！』

ビルドダイバーズの言葉が響く。

戦場の空に、大地に、このGBNという世界に遍く、届き渡る。

『だから、諦めたくない！ サラにいっぱい笑顔にしてもらった！大好きって気持ちを教えてもらった！ 俺たちの「好き」が産んだ命なら……俺たちの手でサラを消したりしちやいけない……自分たちの好きを、自分たちで否定したくないから！ だから！』

——俺たちの好きを、諦めない！

その言葉が、この場に存在する誰よりも、なによりも強く心に突き刺さる。

そうだ。俺たちの「好き」って気持ちが産んだのがサラという命なら。

「それを消させてなんか、堪るもんかよ！」

『好きと嫌いの二元論で世界は還元できるものではありません……！ 奇跡など……奇跡など、望んで起きるものではないのです！ なぜそれをわかろうとしない！』

「それがサラを……俺たちの『好き』が産んだ命を諦めるってことなら、わかって堪るか！ 奇跡は起きる、起こしてみせる！ リクたちは必ずやってくれるさ！ だったら、俺たちはその手伝いをする！ あいつを信じて……俺たちの『好き』を信じて！ 次元霸王流！ 聖拳突きいいいッ！！」

残された全ての力を振り絞って、俺はトランジエントガンダム・キヤメロットへと渾身の力を込めた拳を叩きつけた。

絶対零度の領域を開いていた機体の胴体にヒビが入ると同時に、限界を迎えたストライクスファイダーの右腕もまた砕け散る。

「行けよ、リク！ ビルドダイバーズ！」

ありがとう、ストライクスファイダー。ありがとう、ストライク焔。チナツ、マフユ。皆。俺をここまで、届けてくれて。

あとは笑って、見送るだけだ。

チャンピオンとの激闘を制したあいつを、「大好き」って気持ちを最後まで諦めなかったリクたちが起こした、奇跡の行く末を。

Final Mission：「世界中の空が見たくて」

今日開催されるはずだったレイドバトルのボスにバグが混入したことで、セントラル・ロビーが封鎖された。

あのあと、ゲームマスターも直々にリクたちの勝利を認めてくれたおかげで、あとはサラを現実に送り届けるだけってタイミングだったってのに、もう一波乱もいいところだ。

今のところ「AVALON」のフォースネストで補給待ちの列に加わっていた俺たちは、その話を同じように補給待ちしているアトミラルさんから聞かされていた。

「そういうことだ。ダイバーたちが各地に出現したレイドボス……セントラル・エリアに陣取っている本体にエネルギー供給を行っている分体とでも呼ぶべきものの対処に当たっているが、変則フラッグ戦に参加していた我々は数が数だ。高速修復剤を使っても、出撃には結構な時間がかかる」

「セントラル・エリアにはリクたちが向かったんですよね？」

「ああ、ユウヤ君。ある程度は持ち堪えられるとは思いますが我々も急がねばならない。損傷の少ない機体は、すぐに各ゲートへと派遣させたが……」

それでも十分な数が送り込めたとは言えない上に、指揮統制も取れていない状況だ。

アトミラルさんは眉間にシワを寄せながら、次々と高速修復剤を使って飛び立っていくガンプラたちを一瞥する。

なるべく早く修復を済ませてほしい、と「AVALON」の隊員が呼びかけてはいるけど、フル稼働のハンガーをもつてしても一度に修復できるガンプラの数には限りがある都合、優先されるのは損傷度が高い機体だ。

「えっと……次の補給はアトミラルさん、アリカさん、ユウヤさん、チナツさん、マフユさん——急いでこちらのハンガーをお使いください」

い！」

「ありがとうございます！ 行くぜ、チナツ、マフユ！」

「ええ！ さっさと人の恋路を邪魔する無粋なレイドボスとやりに殴り込みよ！」

「リックさんと、サラちゃんのために……頑張る、よ……！」

隊員の誘導に従う形でハンガーにガンプラをセットした俺たちは、躊躇うことなく手元にあるコンソールから高速修復剤の使用を選択する。

全身がボロボロで、上半身はほとんどが砕け、まともに動けるような状態じゃなかったストライクスファイダーの傷が一瞬で元通りになるんだから、便利なものだ。

GPDでスミと戦ってストライク焰が壊れちまった時とは大違いだ。でも、その違いに助けられてるんだから文句は言えない。

「セントラル・エリアに行くか、他のエリアに行くか……問題はそこだな」

レイドボスの本体はセントラル・ロビーがあるタワーを占領しているらしい。

だけど、各地に出現した分体がエネルギーを供給し続けている以上、それを断ち切らない限り本体の攻略は難しい、といった具合だ。

リックたちの他にも、応援として変速フラッグ戦に参加してなかったダイバーたちもレイドバトルに参加してるらしいから、俺たちは分体を倒して支援に向かうという手もある。

「アンタらしくないわよ、ユウヤ」

「チナツ？」

「こういう時はね、本丸を皆でぶっ叩くのが筋ってもんでしょ」

分体にかまけすぎて、本体の攻略が疎かになってしまったら本末転倒でしょ、と、チナツは通信ウィンドウ越しに人差し指を突きつけながら、そう宣言した。

確かにそれは一理ある。

分体という枝葉に構いすぎて、問題の根っこである本体に戦力を集中させずに敗北、なんてパターンは最悪だからな。

「そうだな……マフユはどう思う?」

「私も……本体の方が強化されてるなら、私たちが戦力になるかはわからないけど……少しでも手数は多い方がいいと思う、よ……!」

高速修復が完了したストライクスファイダーに乗り込んで、俺はぐっ、と拳を固める。

二人の意思確認も取れた。確かにこういう場面で悩むなんて、チナツの言う通り、俺らしくない。

レイドボスだかなんだか知らねーけど、とにかくさっさとぶっ叩いて、サラとGBNの両方を救ってやる。それが今、通すべき筋つてもんだらう。

「カミキ・ユウヤ! ストライクガンダムスファイダー!」

「コウサカ・チナツ! ガンダムウイニングロードアストレイ!」

「……ミホシ・マフユ! G―ジエミニアン!」

『トライダイバーズ、ゴー、ファイト!』

俺たちは号令をかけると同時に修復の完了した機体を飛び立たせて、セントラル・エリアに繋がるゲートへと飛び込んでいく。

待ってるよ、リク。今助太刀に行くからな。

そしてレイドボス。世界もサラもどっちも助けるために、首を洗って待ってやがれてんだ。



『こいつを倒せばロビーが元に戻るんだろ?!』

『無限に再生するってことは、無限にボーナスが貰えるってことだ!』

『ダイバーポイント稼ぎヨシ!』

『狩られる前に狩り尽くせ! こんな美味しいイベント、そうないぜ!』
転送ゲートから抜け出して飛び出したセントラル・エリアは、まさに鉄火場といったところだった。

数えきれないほどのガンプラが、セントラル・タワーに巻きついた、アルヴァアロンとデビルガンダムのキメラみたいなレイドボスに攻

撃を加えている。

その中には、ロンメルさんたちやチャンピオン……キョウヤさんのような見知った姿もあって、まさに一大決戦って感じだった。

レイドボスが、デビルガンダムが繰り出すガンダムヘッドのように、アルヴァアロンの胴体から触手が生えている子機を繰り出してきたことで、今は集結したダイバーたちがじりじりと押し返されてるってところだろうか。

弾幕砲火が雨霰のように飛び交う曇天の空を舞いながら、俺は戦況をそう分析する。

試しに近くに現れた子機の頭にビームピストルをぶち込んでみたけど、即座に再生してしまう辺り、どうやらこいつの仕様はブレイクデカールの時と同じらしい。

「気を付けろよ、チナツ、マフユ！ こいつら、生半可な攻撃じゃすぐに再生しちまう！」

「だったら、細切れにしちやええいいんでしょ!? 行くわよマフユ、息合わせて！」

「はい……！」

『行つけええええッ！』

俺からの警告に対してチナツは笑ってそう返すと、マフユのG—ジエミニアンがバスターライフルを撃ち放ったのに合わせる形で、ロングビームライフルと長距離長射程ビーム砲を最大出力で子機へと叩き込んだ。

再生能力がレイドボスにデフォルトで備わってるものなのかバグが起きてるのは知らないけど、チナツの言う通りだ。

粉々にしまえば再生しないなら、ミンチにしてやればいい。

「バーニングバースト、イクシードチャージ始動！ 次元霸王流！ 波動裂帛拳！」

チナツとマフユの最大火力を叩き込まれて半身が削れていた子機をバーニングバーストの炎を纏った波動裂帛拳で焼き焦がしながら、俺は子機の一体がテクスチャの塵と化したのを見届ける。

だけどこいつも、所詮は枝葉だ。

タワーに陣取ってる本体をなんとかしない限り、無限に湧いてくるのだろう。

「予想的中ってか……!」

間髪入れずにコンクリートの地面を突き破って生えてきた更なる子機の攻撃を回避しながら、俺たちは本体が指先から放つ紫色のビームを掻い潜り、接近していく。

「子機には構うなってことね! 上等、だったら今すぐ本体を蜂の巣にしてやるんだから!」

「……バスターライフルはまだ使える、なら……!」

チナツとマフユもそのことを理解して、タワーに巻きついていてる本体に向けて再び持てる最大火力を叩き込む。

周囲のダイバーたちも戦況を理解して、子機を最低限の数で対処しつつ本体に攻撃を加え始めたことで、戦線は押し返しつつあった。

だけど、それを嘲笑うかのように、大勢のダイバーたちからの弾幕砲火を一身に受けていたはずの本体の欠損部分が再生していく。

「無限に再生しやがるってのか……! だったらやることは一つだ!

再生が追いつかなくなるまでぶん殴る! カミキガン普拉流、奥義

! 鳳凰霸王拳!」

イクシードチャージによって展開された腕のラジエータープレートから炎を噴き出しながら、俺は正拳突き構えから繰り出した鳳凰霸王拳をレイドボスの顔面に叩き込んだ。

ツインアイを砕いて頭部に風穴を開けたその一撃も、無駄だとばかりに瞬時に再生していくんだから、正直堪ったもんじゃない。

クソゲーか? とぶん投げたくなる気持ちはあるけど、ここで折れてちやGBNもサラも救えないんだ、だったら撃墜されるまでは全力で戦い抜く。

「ユウヤ君……バスターライフルのエネルギーはまだもつ、よ……!」

「アタシもまだまだ余裕あるわ、アンタもそうでしょ!」

「ああ! 少なくとも全く効いてねえってことはねえんだ! だったら再生するより早く削りきれば、絶対に倒せる!」

クソゲーを突破するなら、モノを言うのは試行回数だ。

殴れ。とにかく殴れ。

周りのダイバーたちもそれを理解しているからこそ、一部のタンク役に子機を受け持たせた上で、本体に対して攻撃を加え続けているのだろう。

俺ももう一発、今度はバーニングバーストの出力を更に引き上げた上での鳳凰霸王拳をぶつ放そうと試みていた、その時だった。

『すまないが、道を開けてくれたまえ!』

「ゲームマスター!?!」

戦場に突如として現れたガンダイバー……の飛行装備型だからガンチョップパーつていうんだったか、とにかくゲームマスターが、GBN内のガード機を引き連れて、レイドボスへとミサイルランチャーを撃ち込んでいく。

わざわざ俺たちに射線上から退いてくれつつ言ってきた辺り、そのミサイルはどうやら普通の代物じゃなさそうだ。

それを証明するかのように、ミサイルがレイドボスへと着弾した次の瞬間には、欠損していた左腕が再生の途中でぼろぼろと、剥離するように消滅していた。

『修正パッチを応用したワクチンプログラムを詰め込んだ弾頭だ。あの程度の時間であれば、レイドボスの再生を食い止められる。現在各エリアにこの弾頭を持たせたガード機を向かわせている……GBN内でのトラブルの解決は、我々ガード機の本分だ!』

ゲームマスターがそう宣言したのに呼応して、無限再生を前に落ちてかけていたダイバーたちの士気が、一気に持ち直していく。

『あのクソギミックが消えたってことは、今がチャンスだ!』

『再生しないとなりや、あんなのただのカカシだぜ!』

『ポーナスタイル突入ヨシ!』

『あたしだって、サラちゃん助けたい!』

『俺にも世界を守らせろ!』

呼応するように、増援として現れたダイバーたちが、生き残っていたダイバーたちが、一斉に再生能力を剥奪されたレイドボスへと、持てる限りの最大火力で攻撃を仕掛ける。

一人が希望を持ったなら、諦めないで戦い続けるなら、その可能性に賭けたいと願う誰かは必ず出てきてくれる。

変速フラッグ戦で有志連合でありながらもあえて裏切り者の汚名を被ってまでビルドドライバーの味方をしたアトミラールさんたちのように、そして今、セントラル・エリアに集まってきたドライバーたちのように。

各エリアに配置されていた分体からエネルギーを受け取ることで絶望的な耐久値を誇っていたはずのレイドボスも、各地にワクチンプログラム弾頭が配備されたことで分体が倒されつつあるのか、攻撃の手も威力も、緩み始めている。

『俺……GBNやっててよかった。こんないい人達がいて、この人達の思いが繋がれて……サラを生み出してくれた。俺、やっぱりGBNが大好きだ！』

『うんー！』

戦線の中央に陣取っていたリクの機体から、広域通信でその言葉が伝わってくる。

ああ、そうだよ。俺だってそうだ。

マフユと出会えた。チナツとまた一緒に遊ぶことができた。

それだけで奇跡みたいな話だったのに、そんな俺たちの「大好き」という想いがサラを、新しい命を生み出してくれたのなら、それはもう、神様からの贈り物なのかもしれない。

『リク君！ 私を使え！』

『うおおおおっ！ これが、皆の思いだあああつっ！』

リクの機体が、チャンピオンのAGEⅡマグナムを必殺技の糧とすることで、EXカリバーによく似た巨大な光の剣が形成される。

「俺たちもリクに続くぜ、チナツ、マフユー！」

「言われなくても！」

「ユウヤ君と一緒になら、どこまでも……！」

この世界を守りたいという思いを乗せて、サラという命を新しい世界へと送り出してやりたいという願いを乗せて、固めた拳へ全ての力を注ぎ込む。

バーニングバーストシステム、稼働率三百パーセント。限界の限界を超えた、機体ごとぶっ壊れかねない過剰出力を全て拳に乗せて、この一瞬でいい、この一回でいい。

俺はこれで、勝負を決するための賭けに出る。

「カミキガンプラ流奥義！ 鳳凰……霸王けえええんツ!!!」

「エクストリームブラストモード、オーバードライブ！ ウイニング……フルバーストおおおおツ!!!」

「PXバースト、エクスプロージョン……！ バスターライフル、最大出力……！」

三つの願いを一つに束ねて、リクが振り下ろした剣の一撃に重ね合わせる形で、俺たちはそれぞれの必殺を、機体の限界を超えた一撃を、レイドボスに向けて撃ち放った。

『行つけええええッ！』

この愛しい世界のために、そして新しく生まれる命のために、生まれ変わる世界のために。

それぞれの愛を抱えてここに集まってくれた、全部の人たちが思いの丈を込めて、セントラル・タワーに陣取っていたレイドボスへと攻撃を放つ。

さながら、アクシズを押し返したリガンダムが、アムロ・レイが起こしてみせた奇跡のように、リクが振りかぶった剣にその攻撃は吸収されて、ライザーソードのように巨大化したその一振りは、暴走したレイドボスを一刀の元に両断していた。

もう、あいつが再生する気配はない。俺たちの勝利だ。

過剰出力に耐えきれず、四肢が砕けていくストライクスファイダをマフユのG-ジェミニアンが優しく受け止める中で、俺は一つの奇跡が生まれようとしているその瞬間に立ち会った事実を噛み締めていた。

もしも、サラの救出が失敗したら、この世界は滅んでしまう。そんなことはわかっている。

でも、どうしてだろうな。それが失敗するなんて、今の俺たちには一ミリだって考えられない。リクたちなら、きっと必ず奇跡を起こし

てくれる。

そう信じられるのは。

「皆の心が一つになった……」

「……ユウヤ君……？」

「それだけでも、きつと奇跡だからだな」

もしも失敗したなら、笑って負けましようなんて言うつもりはないけど。

でも皆、信じている。奇跡の立役者になったリクたちを、あいつが貫き通した「大好き」だつて気持ち。

だったら、俺も信じ通す。マフユと出会えた、このGBNが大好きだから。俺たちが生んだ「大好き」が集まって生まれた、サラの命を祝福してやりたいから。

「マフユ、俺も……GBNが大好きだ。マフユと出会えたこの場所が、マフユのことが、大好きだ」

「……っ、うん……！ 私も、好き……大好きだよ、ユウヤ君……！」
「全く、惚気ちやって……でも、そうね。あたしたちのこういう気持ちが生んだのがサラちゃんつて命なら」

「ああ……送り出してやろうぜ、俺たちの世界に！」

サラにも、そんな俺たちの世界のことを知ってほしい。

きつとこれ以上言葉にするのは野暮だし、無粋つてもんなのだから。なによりそれは、サラ自身が思っていることだろうから。

GBNの空だけじゃない。サラにとってはもう一つの世界、リアルの世界の空が見たいと、リクと同じ世界が見たいと、そう願ってるんだろうから。



あの変則フラッグ戦が「第二次有志連合戦」と呼ばれるようになって数日。

GBNに残ったバグに関しては運営がワクチンプログラムを驚異的な早さで開発したことで終息を見せているらしい。

なんというか、まあ私情で運営を振り回しちまったところはあるし、そこは申し訳ないんだけど、それでもサラもGBNも両方救えたんだから結果オーライだろう。

「いらつしやいませ、ガンダムベース本店へようこそ！」

ショーケースの中で、HGスケールのガンプラと同じぐらいの大きさをしたマテリアルボディが、くるりとスカートを翻しながら一礼する。

この小さなガンプラ……正確にはモビルドールっていうらしいけど——にサラの意識データを移植することこそ、リクたちが立てた、サラとGBNの両方を救う方法だった。

そして今、ガンダムベースでこうして史上初の電子生命体として、そして「会いに行けるELダイバー」としてサラが来客たちを出迎えているって事実が、作戦が成功したんだということをなにより雄弁に物語っている。

「こっちの世界はどうだ、サラ？」

「どう、かな……？」

俺たちの世界は、あんまり、胸を張っていい世界だつて言えないかもしれない。

それでも、悪いところばかりじゃなくて、いいところもまた沢山ある。

天国でもなきや地獄でもないこのリアル、サラにとっては文字通りの異世界。俺は、マフユと腕を組みながら、サラへと問いかけていた。

「うん……空が綺麗。星が綺麗。リクも、皆も、GBNとは違う姿で生きてる。それが見られることが、とつても嬉しい」

「……そっか」

「ユウヤたちは、この世界が好き？」

サラからの思いがけない問いかけに、俺とマフユは目を丸くして互いに向き直る。

そして、なんだか、なにがおかしくてそうなるのかはわからなけれど、こみ上げてくる笑いを堪えて、口元をふっ、と緩めながら口を揃えて、真っ直ぐに答えを返す。

『大好き』

GBNも、この世界も。

いいことばかりじゃないこの世界が、時には悪いこともあるこの世界が、そしてやっぱり天国でもなきや地獄でもないGBNの両方が、堪らなく愛おしい。

それを見つめ直せたのはきつと、リクたちとサラのおかげなのかもしれない。だから、ショーケースの中で人々を見送る小さな、新たな命に俺たちはありがとう、と感謝の言葉を口にして、ゲームブースへと歩いていく。

「ユウヤ君、今日はなにで遊ぶ……?」

「そうだな、たまにはGBNの空でも眺めてのんびりするのもいいかもな」

この世界に広がる空と、電脳空間に貼り付けられたテクスチャの空。どっちが本物で、どっちが偽物だとかじゃない。

俺たちの旅路は、まだまだどこかに続いている。

きつと、二つの世界の空の下で。その可能性が、生きているという旅路の先が見たくて、今日も俺たちは走り出すんだ。